

神谷所遺跡 I



1992

長野県辰野町教育委員会

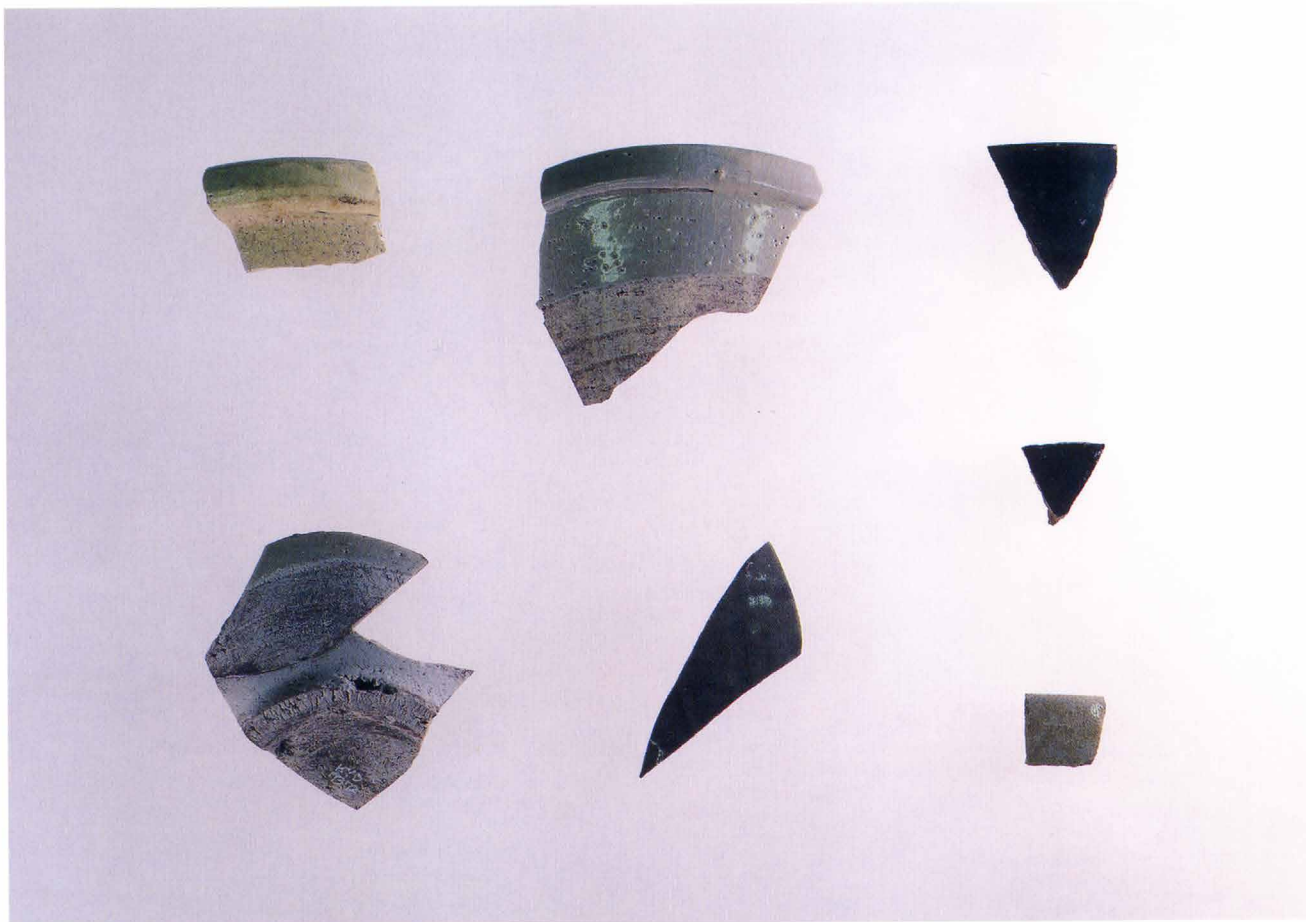
神谷所遺跡 I

1992

長野県辰野町教育委員会



調査区全景



不明遺構出土陶磁器

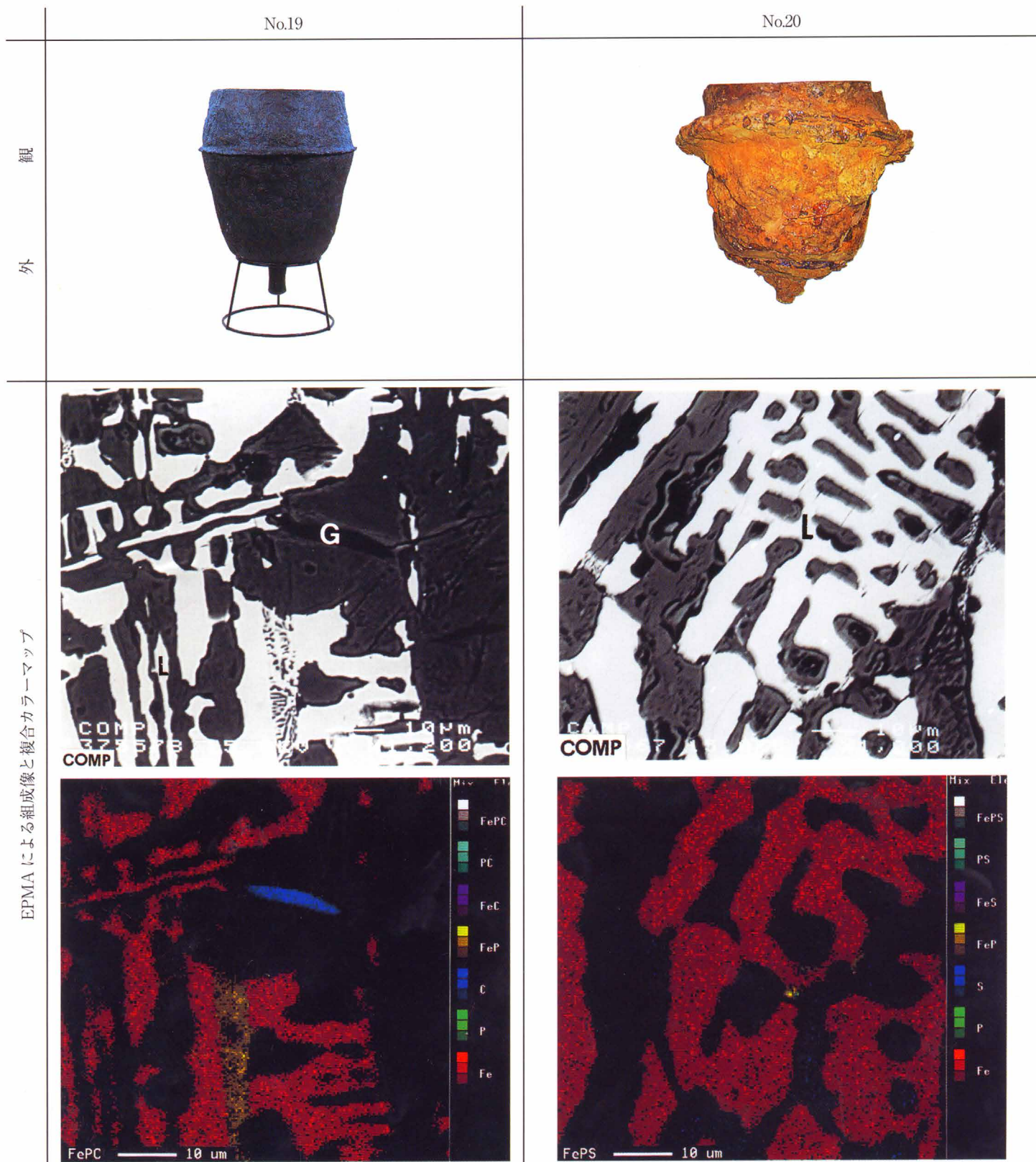


写真1 No.19・20の外観と抽出した試料のEPMAによる組成像（COMP）と含有される元素濃度分布の複合カラーマップ

COMP：EPMAによる組成像、L：レーデブライト、G：片状黒鉛。
 色が青→黄→赤→白の順に濃度が高い。

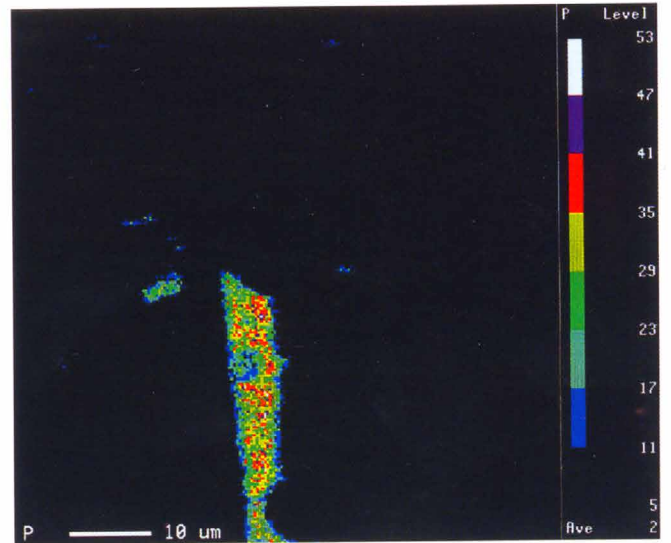
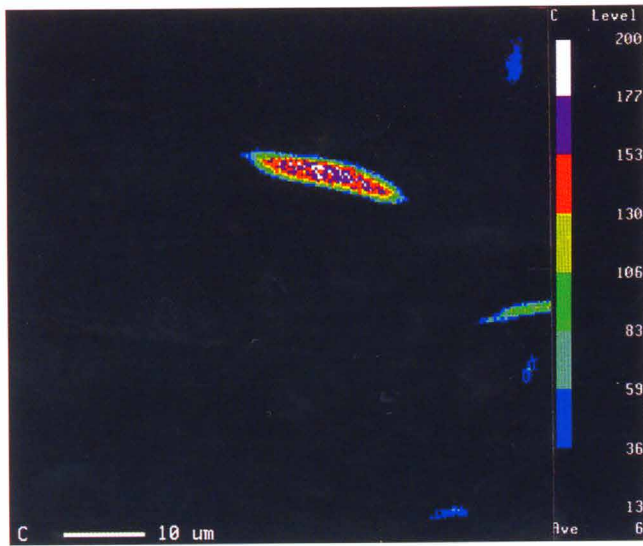
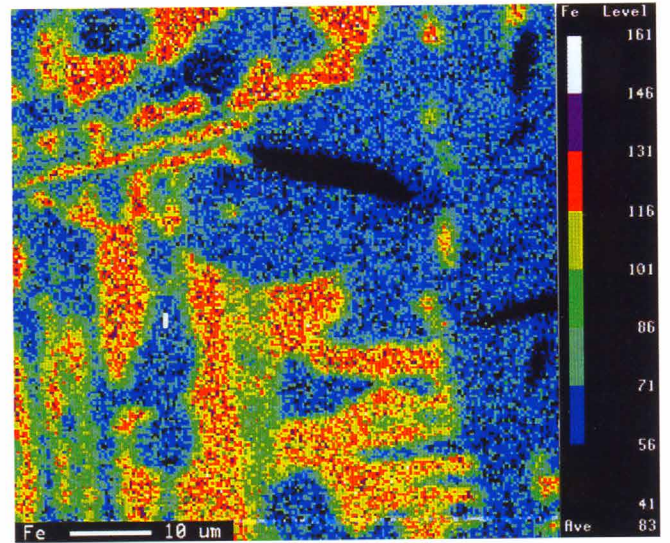


写真2 No.19から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と含有される元素濃度分布の複合カラーマップ
 COMP : EPMA による組成像、L : レーデプライト、G : 片状黒鉛。
 色が青→黄→赤→白の順に濃度が高い。

序

新町地区は、ほ場整備事業や、南原の区画整理事業といった、多くの開発によってその様相を変えてきました。昭和64年からはじまったこの開発ラッシュは、それまで明らかにされなかった地元の歴史を再認識できる機会でもありましたが、同時に遺跡の消滅をも招いていることは言うまでもありません。

歴史資料、とりわけ埋蔵文化財は地元の歴史解明に多大な資料を提供してくれる貴重な文化財ですが、この文化財を現在生きている我々だけが専有してよいとはいえません。今回ここに神谷所遺跡第1次調査分の発掘調査報告書を刊行する運びとなり、あらためて「埋蔵文化財（遺跡）は、一度発掘調査したものは元にもどすことができない。」という言葉の重みがこれほど感じられたことはありません。

発掘調査は、その時々において最善を尽くして実施しているわけですが、今回、岩手県立博物館の赤沼英男先生の鉄製品の分析によって、この地区が平安時代の製鉄関連遺跡であることが判明しました。しかし、発掘調査時にその観点がなかった為にどれだけの情報を失ってしまったか知れません。その意味においても、遺跡は保存し、後世に引き継いでいく必要があると考えます。

今後、第2次、第3次の発掘調査報告書の刊行にむけて遺物整理を実施していくわけですが、これまでに培われた考古学の成果を発掘調査報告書にいかに関与させていくかが、大きな課題となっていくと思われまます。また、今後の発掘調査においても、この遺跡での反省を生かし、より充実した調査を実施していかなければならないことは言うまでもありません。

末筆になりましたが、調査団長さんをはじめ、発掘調査に従事して頂いた皆さんにお礼を申し上げ、ごあいさつとします。

平成15年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林 辰興

例 言

1. この報告書は後山工業団地造成事業に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字伊那富字後山5908番地5他に所在する^{かみやどいせき}神谷所遺跡の第1次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成4年1月16日から平成5年3月10日まで現場の作業を行い、平成6年4月3日より平成15年3月31日までの間、遺物整理及び報告書の作成を断続的に実施した。
4. 発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は大森淑子、上島元彦が行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、大槻直子、大森淑子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、福島永が行なった。なお、土器復原は福沢幸一氏にお願いし、石器の実測については株式会社ジャステックに委託している。
符篇として掲載した鉄製品の自然科学的分析は岩手県立博物館の赤沼英男氏に依頼した。
なお、この章で掲載した更埴市屋代馬口遺跡出土の鉄製羽釜については、サンプルの提供及び写真について、更埴市教育委員会の全面的な協力を得た。また遺物写真については長野県立歴史館所有の写真を借用し、掲載している。
5. 調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会にて保管している。

発掘調査関係者名簿

1. 神谷所遺跡発掘調査団

調査団長 友野 良一（日本考古学協会会員・発掘担当者）

調査員 福島 永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）

発掘調査協力者 板倉たせ子、大森淑子、山崎 誠、山崎良之助、矢島 尚、長田作衛、上島元彦
桑沢とよ子、城倉けさみ、茅野安男、中谷あき子、宮沢英子、山崎 馨、唐沢房夫
松田あつ子、松田春美、宮沢八千代、上島芳子、松田和子、宮沢房子、佐藤直子
矢島郁夫、宮沢恒子、小林久子、白山裕崇、黒岩 勉、中谷 良、大森寛子
花岡健太郎、中谷美代子、福沢幸一

整理作業協力者 赤羽弘江、板倉裕子、宇治ひろゑ、大槻直子、大森淑子、工藤信子、佐藤直子
白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、村上茂子

2. 辰野町教育委員会事務局（発掘調査当時）

教 育 長 小林 晃一

社会教育課長 赤羽八洲男

文化係長 平泉 栄一

文 化 係 三浦 孝美、福島 永

目 次

序

例 言

第I章 遺跡の位置と環境	1
1. 位置と付近の地形・地質	2
2. 歴史的環境	4
第II章 発掘調査の経緯	6
1. 保護協議の経過	6
第III章 発掘調査	7
1. 調査の方法	8
2. 調査結果の概要	8
第IV章 遺構と遺物	13
1. 住居址	14
2. 土坑	93
3. 集石	132
4. 掘立柱建物址	138
5. その他の遺構と遺物	142
6. 遺構外出土遺物	157
第V章 まとめ	162
符 篇	166
写 真 図 版	193
付 図	

挿図目次

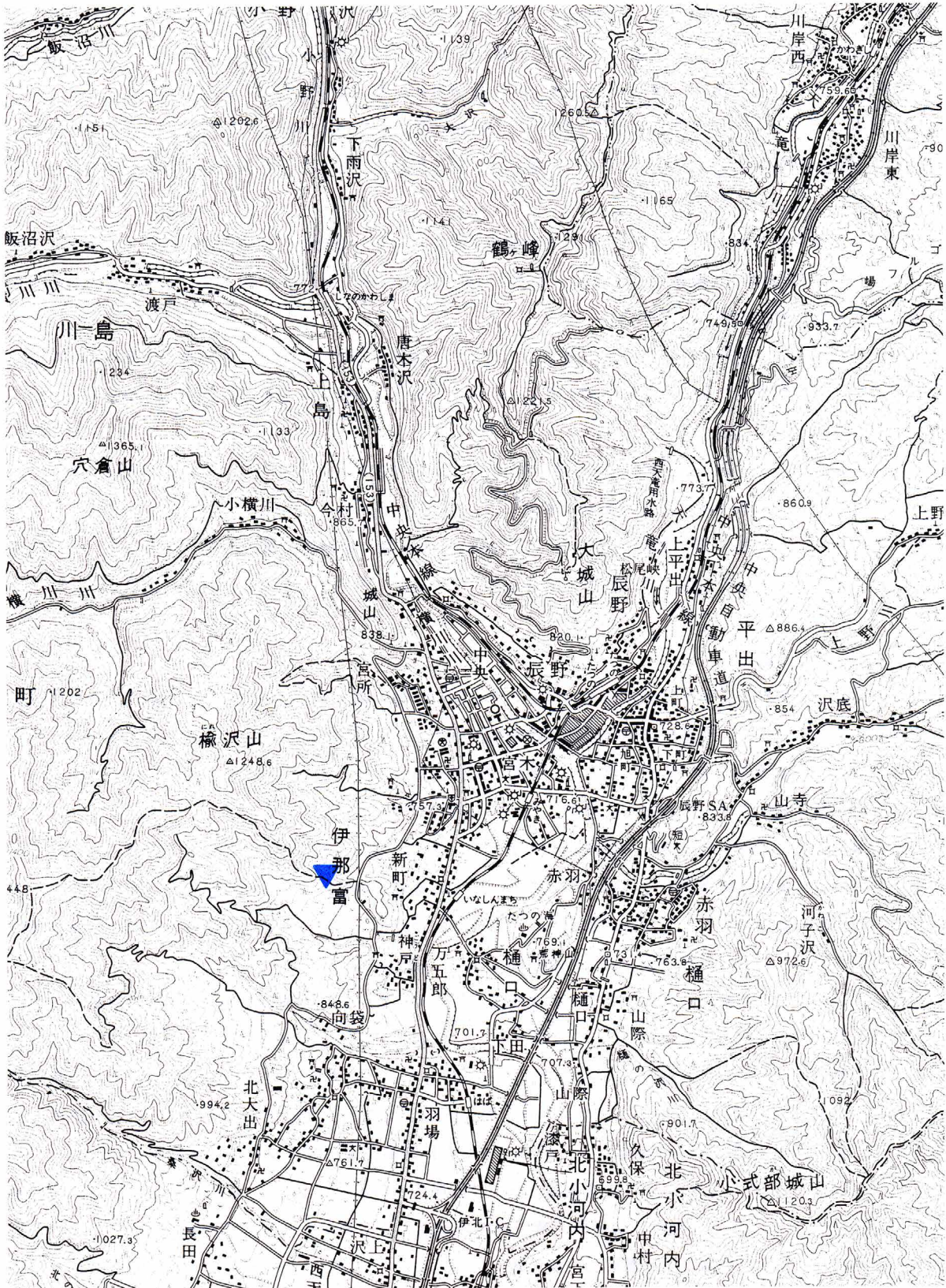
第 1 図	遺跡位置図	1	第 43 図	第 6 号住居址出土遺物 (1)	50
第 2 図	調査区位置図	3	第 44 図	第 6 号住居址出土遺物 (2)	51
第 3 図	周辺遺跡分布図	5	第 45 図	第 6 号住居址出土遺物 (3)	52
第 4 図	調査地区地形図	7	第 46 図	第 6 号住居址出土遺物 (4)	53
第 5 図	調査地区全体測量図	13	第 47 図	第 6 号住居址出土遺物 (5)	54
第 6 図	第 11 号住居址遺構平面図	14	第 48 図	第 6 号住居址出土遺物 (6)	55
第 7 図	第 11 号住居址遺物出土状況図及び出土遺物	15	第 49 図	第 6 号住居址出土遺物 (7)	56
第 8 図	第 13 号住居址出土石器	16	第 50 図	第 6 号住居址出土遺物 (8)	57
第 9 図	第 13 号住居址遺構平面図	16	第 51 図	第 8 号住居址実測図	58
第 10 図	第 16 号住居址遺構平面図	17	第 52 図	第 9 号住居址実測図	59
第 11 図	第 13、16 号住居址出土遺物 (1)	19	第 53 図	第 9 号住居址遺物出土状況図	60
第 12 図	第 16 号住居址出土遺物 (2)	20	第 54 図	第 8 号・第 9 号住居址出土遺物	61
第 13 図	第 18 号住居址遺構平面図	21	第 55 図	第 9 号・第 14 号住居址出土遺物	62
第 14 図	第 18 号住居址出土遺物	22	第 56 図	第 10 号住居址実測図	63
第 15 図	第 23 号住居址遺構平面図	23	第 57 図	第 10 号住居址カマド実測図	64
第 16 図	第 23 号住居址遺物出土状況図	24	第 58 図	第 10 号住居址遺物出土状況図	65
第 17 図	第 23 号住居址出土遺物 (1)	25	第 59 図	第 10 号住居址出土遺物 (1)	66
第 18 図	第 23 号住居址出土遺物 (2)	26	第 60 図	第 10 号住居址出土遺物 (2)	67
第 19 図	第 23 号住居址出土遺物 (3)	27	第 61 図	第 10 号・第 15 号住居址出土遺物	68
第 20 図	第 23 号住居址出土遺物 (4)	28	第 62 図	第 14 号住居址遺物出土状況図及び実測図	70
第 21 図	第 12 号住居址遺構平面図	29	第 63 図	第 15 号住居址実測図	71
第 22 図	第 12 号住居址出土遺物	30	第 64 図	第 15 号住居址カマド実測図	72
第 23 図	第 1 号住居址遺構平面図	31	第 65 図	第 15 号住居址遺物出土状況図	73
第 24 図	第 1 号住居址遺物出土状況図	32	第 66 図	第 15 号住居址出土遺物 (1)	74
第 25 図	第 1 号住居址出土遺物 (1)	33	第 67 図	第 14・15 号住居址出土遺物	75
第 26 図	第 1 号住居址出土遺物 (2)	34	第 68 図	第 15 号住居址出土遺物 (2)	76
第 27 図	第 2・3 号住居址遺構平面図	35	第 69 図	第 15・19 号住居址出土遺物	77
第 28 図	第 2・3 号住居址カマド遺構平面図及び遺物出土状況図	36	第 70 図	第 17 号住居址実測図	79
第 29 図	第 2・3 号住居址出土遺物	37	第 71 図	第 17 号住居址遺物出土状況図	80
第 30 図	第 4 号住居址遺構平面図	38	第 72 図	第 17 号住居址出土遺物	81
第 31 図	第 4 号住居址遺物出土状況図	39	第 73 図	第 19 号住居址実測図	82
第 32 図	第 4 号住居址出土遺物	40	第 74 図	第 19・20・21 号住居址出土遺物	83
第 33 図	第 5 号住居址遺構平面図	41	第 75 図	第 19 号・第 20 号住居址出土遺物	84
第 34 図	第 5 号住居址遺物出土状況図	42	第 76 図	第 20 号住居址	85
第 35 図	第 5 号住居址カマド遺構平面図	43	第 77 図	第 20 号住居址遺物出土状況図	86
第 36 図	第 5 号住居址出土遺物	44	第 78 図	第 20 号住居址出土遺物	87
第 37 図	第 5 号住居址出土遺物	45	第 79 図	第 21 号住居址実測図	88
第 38 図	住居址床下出土土坑番号	46	第 80 図	第 21 号住居址カマド実測図・遺物出土状況図	89
第 39 図	第 6 号住居址実測図	46	第 81 図	第 21 号住居址出土遺物 (1)	90
第 40 図	第 6 号住居址カマド実測図	47	第 82 図	第 21 号住居址出土遺物 (2)	91
第 41 図	第 6 号住居址遺物出土状況図 (1)	48	第 83 図	第 22 号住居址実測図	92
第 42 図	第 6 号住居址遺物出土状況図 (2)	49	第 84 図	土坑実測図 (1)	97

第 85 図	土坑実測図 (2)	98	第111図	土坑出土遺物 (6)	129
第 86 図	土坑実測図 (3)	99	第112図	土坑出土遺物 (7)	130
第 87 図	土坑実測図 (4)	100	第113図	土坑出土遺物 (8)	131
第 88 図	土坑実測図 (5)	101	第114図	集石実測図 (1)	134
第 89 図	土坑実測図 (6)	102	第115図	集石実測図 (2)	135
第 90 図	土坑実測図 (7)	103	第116図	第10号集石実測図および第8号集石 出土遺物	136
第 91 図	土坑実測図 (8)	104	第117図	第6号集石実測図	137
第 92 図	土坑実測図 (9)	105	第118図	掘立柱建物址実測図 (1)	139
第 93 図	土坑実測図 (10)	106	第119図	掘立柱建物址実測図 (2)	140
第 94 図	土坑実測図 (11)	107	第120図	掘立柱建物址実測図 (3)	141
第 95 図	土坑実測図 (12)	108	第121図	不明遺構実測図 (1)	143・144
第 96 図	土坑実測図 (13)	109	第122図	不明遺構実測図 (2)	145・146
第 97 図	土坑実測図 (14)	110	第123図	不明遺構出土遺物 (1)	147
第 98 図	土坑実測図 (15)	111	第124図	不明遺構出土遺物 (2)	148
第 99 図	土坑実測図 (16)	112	第125図	不明遺構出土遺物 (3)	149
第100図	土坑実測図 (17)	113	第126図	不明遺構出土遺物 (4)	150
第101図	土坑実測図 (18)	114	第127図	竪穴建物址・石列遺構平面図	151
第102図	土坑実測図 (19)	115	第128図	溝址実測図 (1)	153・154
第103図	土坑実測図 (20)	116	第129図	溝址実測図 (2)	155・156
第104図	土坑実測図 (21)	117	第130図	遺構外出土遺物 (1)	157
第105図	土坑実測図 (22)	118	第131図	遺構外出土遺物 (2)	158
第106図	土坑出土遺物 (1)	124	第132図	遺構外出土遺物 (3)	159
第107図	土坑出土遺物 (2)	125	第133図	遺構外出土遺物 (4)	160
第108図	土坑出土遺物 (3)	126	第134図	遺構外出土遺物 (5)	161
第109図	土坑出土遺物 (4)	127			
第110図	土坑出土遺物 (5)	128			

写真図版

- | | | | |
|------|--------------------|------|-------------------------|
| 図版1 | 第1調査区全体写真 | 図版44 | 第1号掘立柱建物址 |
| 図版2 | 第2調査区全体写真 | | 第4号掘立柱建物址 |
| 図版3 | 第1号住居址 | 図版45 | 第6号掘立柱建物址／不明遺構 |
| 図版4 | 第2・3号住居址／第22号住居址 | 図版46 | 第1号溝址および第1号竪穴建物址 |
| 図版5 | 第4号住居址 | | 第2号竪穴建物址／第5号溝址 |
| 図版6 | 第5号住居址 | 図版47 | 石 列 |
| 図版7 | 第6号住居址 (1) | 図版48 | 第11、13、16、18号住居址 |
| 図版8 | 第6号住居址 (2) | 図版49 | 第16号住居址／第18号住居址 |
| 図版9 | 第8号住居址 | 図版50 | 第23号住居址 (1) |
| 図版10 | 第9号住居址 (1) | 図版51 | 第23号住居址 (2) |
| 図版11 | 第9号住居址 (2) | 図版52 | 第23号住居址 (3) |
| 図版12 | 第10号住居址 | 図版53 | 第12号住居址 |
| 図版13 | 第11号住居址 | 図版54 | 第1号住居址 (1) |
| 図版14 | 第12号住居址 | 図版55 | 第1号住居址 (2) |
| 図版15 | 第13号住居址 | 図版56 | 第2・3号住居址／第4号住居址 (1) |
| 図版16 | 第14号住居址 | 図版57 | 第4号住居址 (2)／第5号住居址 |
| 図版17 | 第15号住居址 | 図版58 | 第5号住居址 (2)／第6号住居址 (1) |
| 図版18 | 第16号住居址 | 図版59 | 第6号住居址 (2) |
| 図版19 | 第17号住居址 (1) | 図版60 | 第6号住居址 (3) |
| 図版20 | 第17号住居址 (2) | 図版61 | 第6号住居址 (4) |
| 図版21 | 第17号住居址 (3) | 図版62 | 第8、9号住居址 |
| 図版22 | 第18号住居址 | 図版63 | 第9号住居址／第10号住居址 (1) |
| 図版23 | 第19号住居址 | 図版64 | 第10号住居址 (2) |
| 図版24 | 第20号住居址 | 図版65 | 第14号住居址／第15号住居址 (1) |
| 図版25 | 第21号住居址 | 図版66 | 第15号住居址 (2) |
| 図版26 | 第23号住居址 | 図版67 | 第15号住居址 (3)／第17号住居址 |
| 図版27 | 土 坑 (1) | | 第19号住居址 (1) |
| 図版28 | 土 坑 (2) | 図版68 | 第19号住居址 (2)／第20号住居址 |
| 図版29 | 土 坑 (3) | 図版69 | 第20号住居址 (3)／第21号住居址 (1) |
| 図版30 | 土 坑 (4) | 図版70 | 第21号住居址 (2) |
| 図版31 | 土 坑 (5) | 図版71 | 土 坑 (1) |
| 図版32 | 土 坑 (6) | 図版72 | 土 坑 (2) |
| 図版33 | 土 坑 (7) | 図版73 | 土 坑 (3)／土 坑 (4) |
| 図版34 | 土 坑 (8) | 図版74 | 土 坑 (5)／土坑出土石器 |
| 図版35 | 土 坑 (9) | 図版75 | 土 坑 (6) |
| 図版36 | 土 坑 (10) | 図版76 | 土 坑 (7) |
| 図版37 | 土 坑 (11) | 図版77 | 土 坑 (8) |
| 図版38 | 土 坑 (12) | 図版78 | 不明遺構 (1) |
| 図版39 | 土 坑 (13) | 図版79 | 不明遺構 (2) |
| 図版40 | 土 坑 (14) | 図版80 | 不明遺構 (3) |
| 図版41 | 土 坑 (15) | 図版81 | 不明遺構 (4)／第8号集石 |
| 図版42 | 第1号集石／第2号集石／第3号集石 | 図版82 | 試堀調査時出土鉄鍋片 |
| | 第5号集石／第8号集石 | | 新町丸山遺跡出土鉄製羽釜 |
| 図版43 | 第6号集石／第7号集石／第11号集石 | | |

第I章 遺跡の位置と環境



第1図 遺跡位置図

1. 位置と付近の地形・地質

(1) 地 形

辰野町は、長野県のほぼ中央部、北は松本平、東は諏訪盆地に接し、西は木曾山脈を経て木曾谷へと通じる南北約70kmの伊那谷の最北部に位置する。町内を取り囲む山は、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町でも最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖を源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれてその最低部を町を南北に縦断するように南流している。この断層崖の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に^{にれさわやま}檜沢山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

天竜川の西部では、横川川や、町内の天竜川の支流としては横川川に続く流路距離を誇る小横川川の上流部では、横川溪谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでおり、下流では川幅がひろがって小規模な谷底平野・段丘・崖錐が発達している。

また、権兵衛峠－経ヶ岳－牛首峠－^{うとうとうげ}善知鳥峠の連なりは南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

神谷所遺跡は、檜沢山の南西麓標高約780m～約800mに広がる、扇端部に豊かな湧き水をたたえた扇状地上に位置し、断層によって形成された前山をはさんで、その東部に町内が一望できる地点に位置する。

(2) 地 質

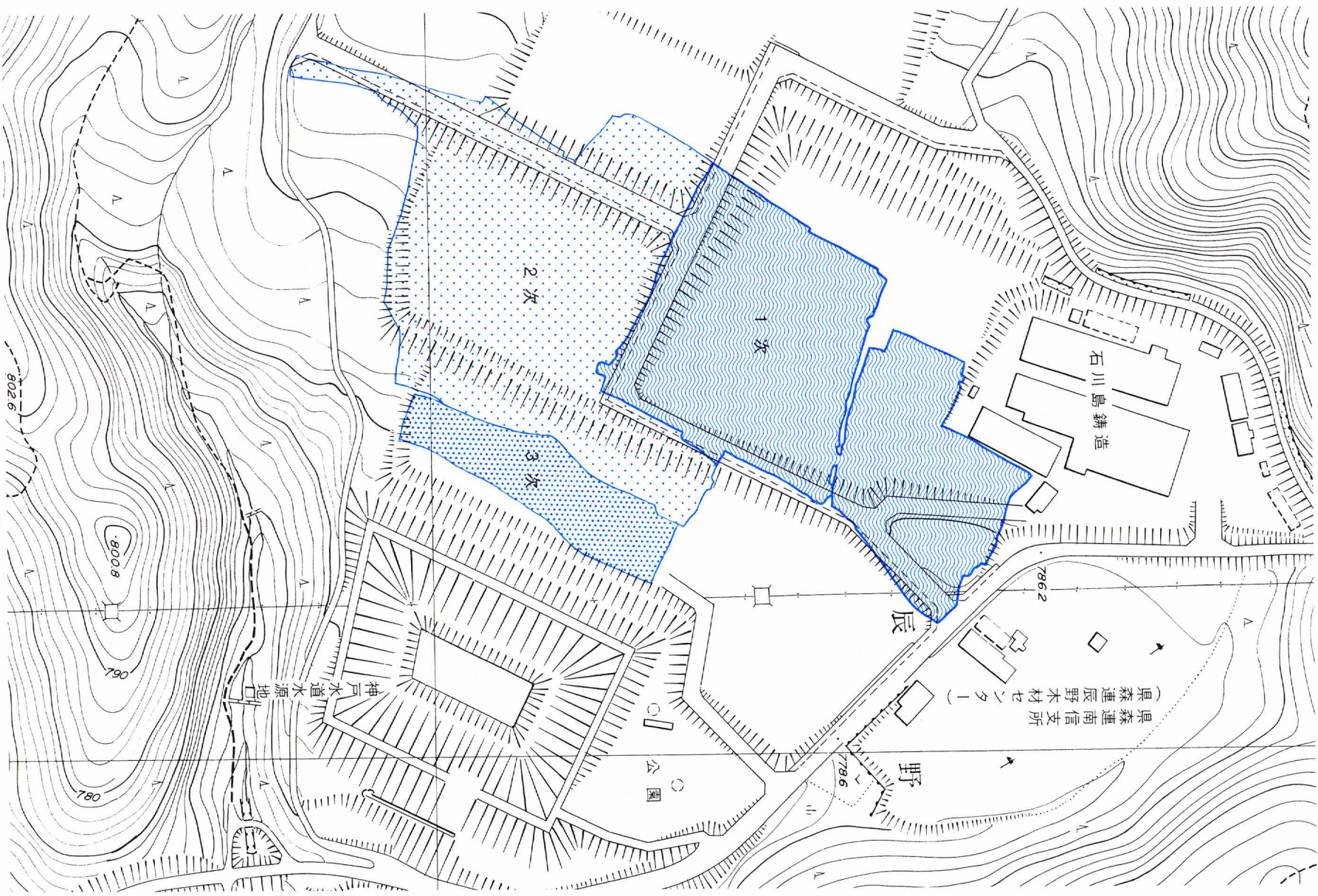
長野県はその中央部に日本を代表する大断層である糸魚川－静岡構造線がはしり、その東部にフォッサマグナが存在している。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山地は辰野町北部で途切れ、木曾山脈の花崗岩についても辰野町付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、その上部に領家花崗岩がのり、その後、霧ヶ峰方面の溶岩や火砕流、辰野地域南部からの礫の流入によってこの地域の地質的な構造ができあがった。また、木曾山脈や赤石山脈の衝突境界としての構造盆地として形成された伊那谷には、木曾山脈を中心とした砂礫が堆積して平地を形成している。辰野地域ではこの堆積層は浅く、100m未満といわれている。

また、伊那谷は西部や東部の山麓に大きな断層が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、神谷所遺跡の所在する後山地籍においては断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西側の明神山は古い扇状地が活断層によって持ち上がったものである。なお、横川川や小横川川は奈良井川と同様に北に流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになった様子が伺える。

さらに、新町の上水道水源地の掘割では、昭和4年に春日琢美によってテフラを切る断層が観察され、スケッチに残されているが、このスケッチをみるとテフラの降灰が停止してから15,000年の間に西方の山地が約2.3m上昇したことがわかる。また、新町の天竜川河畔の赤渋より、天狗坂を通過して宮所、上島を結ぶ線は赤渋断層と呼ばれ、宮木の太新田より新町の前田地籍へ上がる坂で、断層によって原田の地盤がはね上がった様子が観察されている。

1. 位置と付近の地形・地質



第2図 調査区位置図

2. 歴史的環境

新町地区は、縄文時代中期中葉の集落跡が発見された新町大原遺跡^{しんまちおおばらいせき}（60）をはじめ、県宝に指定されている縄文時代後期の仮面付土偶が出土している泉水遺跡（52）が所在する地区である。

この新町区は経ヶ岳山塊の楡沢山と天竜川に挟まれた地域で、遺跡の立地も、扇状地上に位置する泉水遺跡、神谷所遺跡^{かみやどこいせき}（66）等と段丘に位置する新町大原遺跡（60）、新町原田南遺跡（62）、新町原田北遺跡（61）、新町北原遺跡（49）等に大きく2分される。前述の泉水遺跡は扇状地上に位置しており、土偶のほかは遺物も採集されていないために遺跡の状況は不明である。また、神谷所遺跡に隣接する新町丸山遺跡（65）の西麓の畑からは、昭和32年に平安時代後期の鉄製羽釜が耕作中に出土している。新町丸山遺跡は通称稗塚と呼ばれており、当初古墳ではないかとの疑いが持たれたが、この小山は活断層によって断ち切られた、いわゆるケルン・バットであることが確認されている。神谷所遺跡では鉄製の鍋の破片と思われる遺物も試掘調査によって出土しており、鉄製羽釜と神谷所遺跡との関係については今後更に検討していかなければならない課題であろう。

一方、段丘上に立地する新町原田南遺跡は、新町原田北遺跡、新町大原遺跡と共に圃場整備事業に先立って昭和63年度に調査が実施された遺跡で、縄文時代中期末葉の住居址をはじめ、中世の居館址等が出土している。中世の居館址は、堀によって区画された地点では掘立柱の建物址が出土し、その区画外の郭かと思われる部分には多数の竪穴建物址が検出され、館の空間的な使い分けについての良好な資料を提供することができた。また、玉縁状口縁をもった白磁碗や白磁製の四耳壺破片、東海系の鉢、鎬連弁をもつ青磁碗など鎌倉期を中心とした陶磁器が出土しており、辰野町で調査された中でも古い時期に位置付けられる居館址となった。

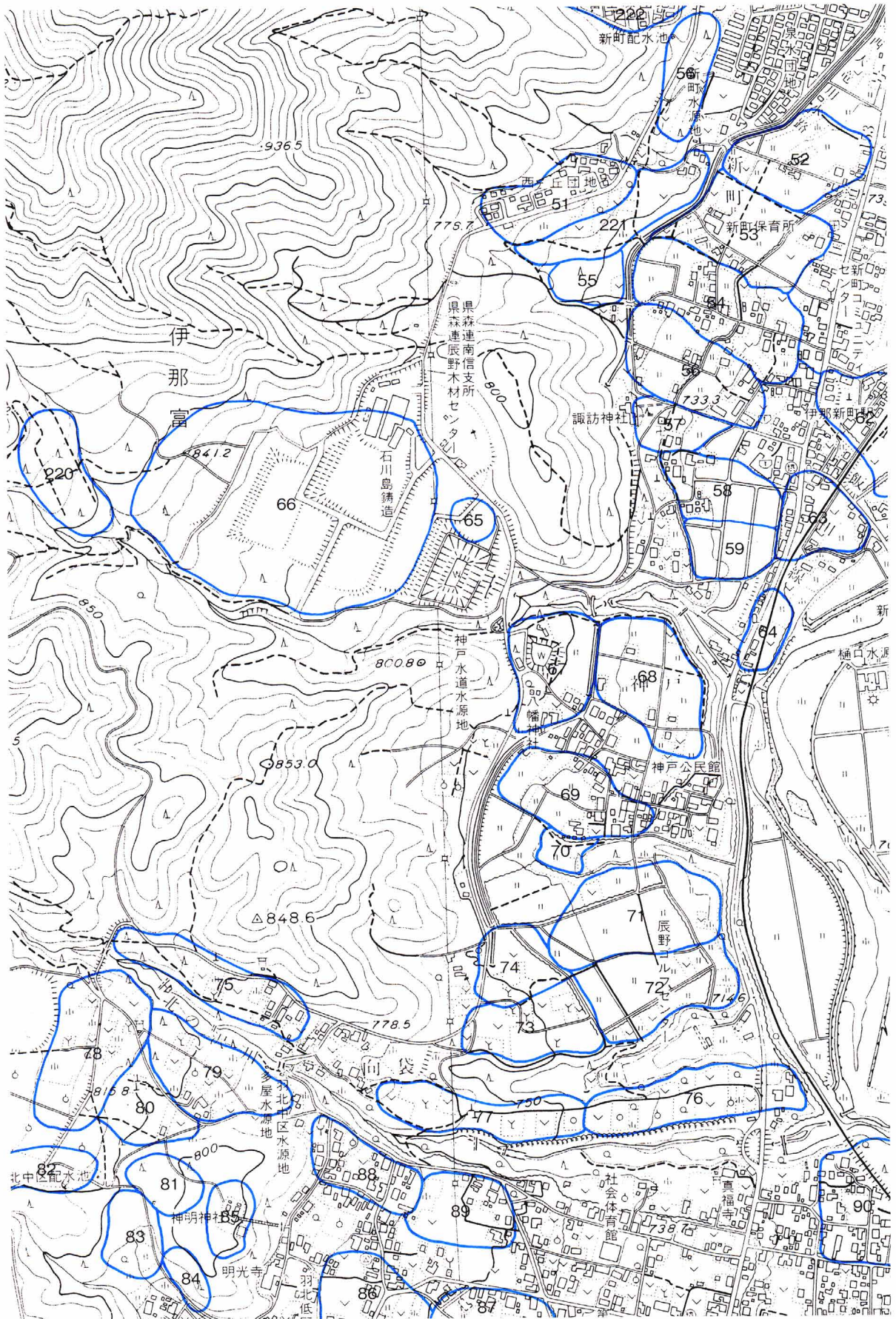
新町原田北遺跡は、試掘のみではあったが、平安時代前半期の住居址が確認されている。

新町大原遺跡では、縄文時代中期中葉の集落が発見されており、単独に埋設された有孔罅付土器をはじめ、石壇を持つ住居址、東海系の土器を伴って一括廃棄された土器群が出土した住居址等が出土している。そのほか、集石炉が20基、中世の掘立柱建物址の出土等、非常に貴重な成果をあげている。

うずらい北・うずらい南遺跡（58・59）は、平成5年度に区画整理事業に先立って調査が実施され、縄文時代前期の焼土を伴う土坑が1基出土している。この遺跡を試掘した結果では、礫が散在した地点や、テフラが確認される地点が観察され、地形的には不安定な地域といった様相を示している。

また、山麓に立地している遺跡としては楡林遺跡^{くぬぎばやしせき}（51）があげられる。この遺跡は楡沢山麓のわずかな平坦部に位置し、昭和61年度と平成元年度に調査が行われ、縄文時代早期から後期にわたる遺構が出土している。なかでも押型文土器を出土した住居址1基や深さ2mに近い円形の大型竪穴や、集石炉10基の出土はこの地区が縄文時代早期にベースキャンプ地として利用されていたことを伺わせる。また、縄文時代前期から中期初頭の小竪穴群と、後期の土坑が発見されているのをはじめ、縄文時代中期中葉と思われる壺形土器が出土し、この中から黒曜石の大型のかたまりが発見されるなど、比較的小規模な遺跡にもかかわらず縄文時代の遺跡として非常に貴重な成果をあげている。

その他、発掘調査を実施していないが、道下遺跡（63）、神戸遺跡（67）、神戸北原遺跡（68）、羽場上遺跡（69）、どん沢遺跡（70）、神戸南原第一遺跡（71）、神戸南原第二遺跡（72）、山崎遺跡（73）、向袋遺跡（74）、北之沢遺跡（75）、古城遺跡（76）等が分布している。



第3図 周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

第Ⅱ章 発掘調査の経緯

1. 保護協議の経過

平成元年10月11日に「平成2年度開発事業に係わる埋蔵文化財について」の依頼文書に対する報告が辰野町土地開発公社より提出された。これによると新町区後山地籍において、工場用地の造成のため、約120,000㎡を平成2年度から造成する予定であった。このため、同年12月4日に教育委員会と、土地開発公社の二者で保護協議を実施した結果、隣接している丸山遺跡は緑地帯として保存し、神谷所遺跡のみ造成の対象になることが判明した。このため、事前に試掘調査を実施して遺跡の分布状況及び、性格等を把握した後に本調査を行う。また、試掘調査後に再度保護協議を実施することを申し合わせた。

平成2年11月5日には、「新町後山地区開発対策会議」が開かれ、この席上で、発掘調査については、地元には土地の買収が終了していなくても調査を行うことをお願いしており、地権者の了解が得られれば届けを提出した後に調査を開始することが報告されている。

平成2年11月26日に保護協議の経過をふまえる形で、発掘届けが辰野町土地開発公社より提出された。これに対して長野県教育委員会教育長から、辰野町長あてに、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の文書が送付され、発掘調査を実施するように指示を行っている。

発掘届けが提出されたのをうける形で、町教育委員会では平成3年2月21日に長野県教育委員会文化課の指導主事を迎えて三者による保護協議を実施した。

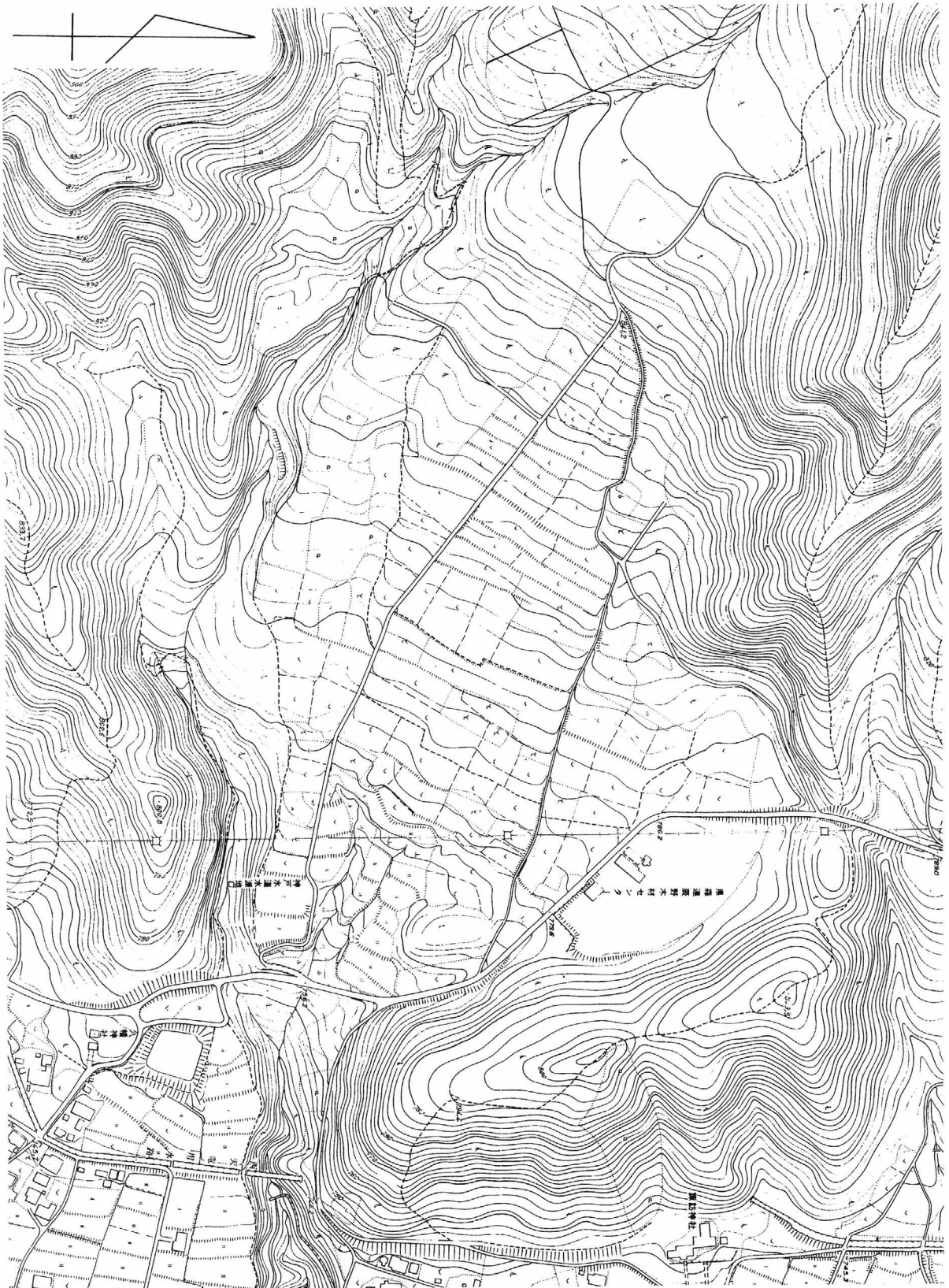
このなかで、この事業の対象面積は135,750㎡であり、実施時期は平成4年8月から平成6年8月までの予定で、これを年度区分にしたがって第1期から第4期までにわけて造成したいという計画が示された。また、地権者の一部に代替地を求める声があるために一部を畑地とすることも説明があった。これに対して畑地として残す部分については一部盛土が実施されるということもあるので本調査は実施しないが、遺跡の性格を把握するために試掘調査は実施したいと説明し、理解を得た。また、全体を調査するとおよそ7地区に調査範囲を分割して実施しなければならず、単年度に調査が実施できる面積も限られ、更に、このように広大な面積を調査することは今まで経験がなく、調査期間も把握できないため、少しでも早く試掘調査を実施し、遺跡の規模、性格を把握したいという説明も行った。これに対して土地開発公社は、地権者には説明をしてあるので、平成2年の作物の収穫後には試掘調査に入れるようにしたいという回答を得た。これを受けて、試掘調査を実施することとし、調査によって遺跡の様子がはっきりした時点で、再度保護協議を行い、期間等の調整をはかることとした。

平成4年1月16日この保護協議の結果をうけて試掘調査を開始し、3月10日に終了した。

なお、この試掘期間中の、平成4年1月22日には「新町後山地区開発計画について」という文書が土地開発公社から提出され、このなかでも、長野県教育委員会文化課の指導を受けるなかで、試掘調査を実施している旨の説明がなされている。

試掘調査によって遺跡全体の様子が把握できた平成4年3月4日に、長野県教育委員会をまじえた三者による保護協議を再度行い、開発範囲全体に遺跡が分布していることを説明し、単年度の工事区間ごとに発掘調査を実施していくことで合意した。

第三章 発掘調査



第4図 調査地区地形図 (S=1/5,000)

1. 調査の方法

神谷所遺跡は、楡沢山山系から流れ出る鳥居沢の押し出しによって形成された扇状地上に立地しており、東にむかってなだらかに傾斜している地形であった。工事の実施設計では、この傾斜を大きく掘削して数段の平坦部を造成する計画であった。このため、代替用地として盛土する地点を残して遺跡全面を調査する事となり単年度では調査が終了することが困難であった。このため、まず、初年度の造成事業地点について本調査を実施することとし、事前の試掘調査によって把握されていた遺構検出面まで重機によって掘り下げた。なお、調査範囲が広範囲におよんでいるため、一度に表土を剥ぎ取ることが不可能であったため、南北に二分割し、そのうちの北部について最初に調査を実施し、終了後に南部について調査を行っている。

調査はまず重機を使用して表土を除去し、遺構検出面があらわれたところで、ジョレン等を使用して手作業で遺構の検出をおこなった。遺構が確認された段階で移植ゴテ等を使用して遺構内を掘り下げた。遺構は多くがテフラ層上面で検出されたので比較的確認作業は容易であったが、東部においては黒色系の遺構検出面から遺構を検出せねばならず、遺構の存在が予想される地点にサブトレンチをいれて確認した地点もある。

遺構内の調査に際しては、土層の観察を行うために住居址については十字に土層観察畦を残し、土坑等については半割にして土層を確認しながら掘り進め、掘り上がった時点で実測図を作成し、記録につとめている。

出土遺物の取り上げ、遺構平面図の作成に際しては調査中に業者に委託して設定した国土座標に沿った10m×10mのグリッドを基準とした2m間隔の方眼を使用した。なお、遺構平面図については1/20の縮尺を基本として図化を行い、遺物の出土している遺構については1/10の縮尺を基準として平板測量または遣り方測量によって記録している。その他、必要に応じて写真撮影等も実施している。

また、グリッドは南北方向を数字で、東西方向をアルファベットを用いて表記している。なお、現場でのレベルについては、基準杭の設定時にあらかじめ設定しておいたベンチマークを使用している。

遺物を整理する段階では遺物台帳を作成し、各遺物には遺跡の略称（KYD）および遺物番号を、また、必要に応じて遺構名等も注記した。現場での写真撮影については35mm一眼レフカメラを使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムを用いた。遺物写真については中版カメラを使用して6×7モノクロームネガフィルムで撮影した。

今回の発掘調査によって出土した遺構・遺物の概要は巻末の報告書抄録に記載している。

2. 調査結果の概要

(1) はじめに

神谷所遺跡はこの遺跡の南側には鳥居沢川が流れ、遺跡の一段下の段丘上はうずらいと呼ばれる集落が広がっている。この集落は中世の上諏訪造営帳（1578年）ですでに宇津羅井として記録に残されている非常に古い村落である。また、遺跡上段の山麓部は「葦が口（足かくし）」と呼ばれる地区があり、隠れ里として伝承が残されているのをはじめとして、遺跡の名称の根拠となった遺跡西部の地名である「神谷所（かみや所）」、遺跡の存在する地点の地名である「後山（うしろ山）」等が『高遠領新町村元禄検地帳』に見られる。

神谷所遺跡は試掘調査の結果では縄文時代と、平安時代の住居址が出土することが判明していた。また、耕作地の代替用地として試掘調査のみ実施し、盛土によって保存された地区には、確定できないものの、堀と考えられる帯状の黒色土の溝が東西方向に検出されている。この溝状の遺構については、試掘調査時に遺構とい

う認識がなかったために、平面の検出にとどまり、詳細を記録することなく埋め戻してしまった。このため、性格を明確に確認できなかったことは、反省せねばならないであろう。

また、やはり、埋め土保存された遺跡西部の断層崖付近では、方形のプラン内に、焼土が集中して検出され、検出作業中に鉄鍋の破片が出土している。これは、昭和32年に採集された鑄鉄製の羽釜の出土地点にごく近い位置にあたる。この羽釜と鉄鍋の成分分析については赤沼英男氏のレポートを符篇として別掲している。

本報告書では発掘調査対象面積約50,000㎡を3次に分けて行った発掘調査の内、第1次調査分の約17,000㎡を対象に編集している。残りの調査成果についても、順次報告書を作成していく予定である。

本調査を始めるにあたって、試掘調査の成果を生かして実施するのが本来であるが、試掘調査時の情報が調査員の経験不足から十分得られたなかったために、平安時代末期～鎌倉時代の遺構を念頭において調査を進めることができなかった。このため、重機による表土除去時に、遺構検出面より上面に焼土が数カ所から確認されたものの、そのまま掘削してしまい、記録することを怠ってしまったうえに、赤沼氏の指摘によってようやく事の重大さに気づいた事は、調査員の知識の欠如にほかならず、弁解の余地もない。

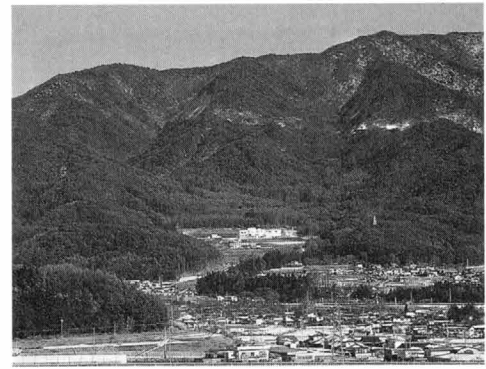
このような多くの過ちをおかしながらも、縄文時代早期の土坑や、縄文時代前期の住居址、弥生時代後期の住居址、平安時代後半期の集落址が出土したことは非常に大きな成果であった。また、前述している平安時代末期～鎌倉時代の製鉄遺構の出土は、この地域の製鉄史に不十分な成果ながらも、非常に貴重な資料を提供できたといえよう。

(2) 発掘調査の成果

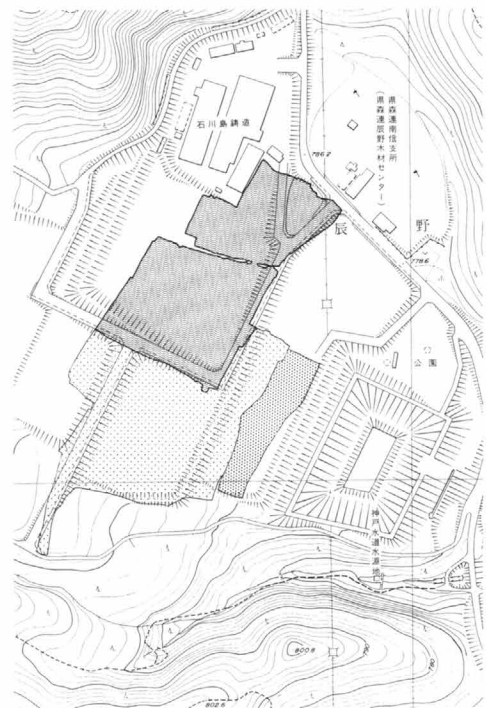
今回の調査では前節で記述したとおり、多くの住居址が出土し、多くの成果をあげることができた。

まず、縄文時代であるが、前期末葉の住居址が2基出土している。このうち、第11号住居址からは、いわゆる諸磯c式系に属すると考えられる土器が出土している。また、第16号住居址は前期末葉のいわゆる晴ヶ峰式系の土器片と、中期初頭の梨久保式の古い段階の土器片が混在している。

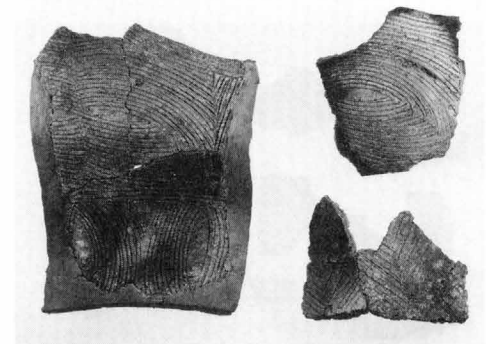
次に土坑であるが前期末葉の土器3個体分を一括出土した



遺跡遠望



調査区区分図



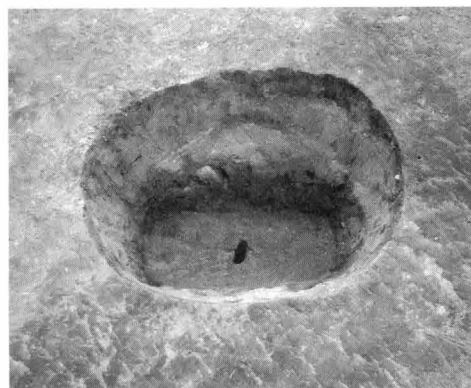
第11号住居址出土遺物



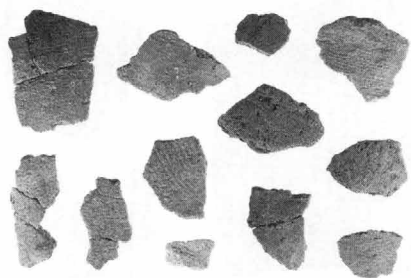
第67号土坑出土遺物



第70号土坑



第78号土坑



第8号土坑出土遺物

土坑（第67号土坑）が出土している。この土器型式の遺物は、町内の遺跡ではあまり出土例の知られていない土器であり、しかも、ほぼ器形の判明する土器が一括出土していることから注目される。また、第90号土坑からは諸磯c式と考えられる破片が1点出土しているのに対して、第111号土坑からは破片であるが、いわゆる晴ヶ峰・十三菩提系と呼ばれる、在地系の前期末葉の土器が一括出土している。この第111号土坑の他にも、第121号土坑からも同様の形体の土器片が出土している。このように、土坑によって型式の異なる土器が出土することは非常に興味深い。

今回の発掘調査で出土した土坑のほとんどが落とし穴状の土坑であり、総数は40基にのぼる。この内訳をみると、平面形が円形のもものが27基と、楕円形のもものが10基、その他が3基であった。平面形が円形、楕円形の落とし穴状土坑は、共に底部ではそれぞれ正方形と長方形をしており、掘り込んだ当時には上面も底部のような形体をしていたとも考えられる。これらの土坑の底部には直径20cm程度で、深さ25cm程度のピットと呼ばれる小さな穴が出土するものが大半であった。また、出土した落とし穴状土坑の配列をみると、等高線を斜めに切るような配列で、平面円形のもものと、楕円形のもものがそれぞれ列をなして出土しており、さらに楕円形の落とし穴状の土坑は、円形のものよりも広い間隔をおいて出土している。これは遺構の種類によって時期か、用途が異なっている可能性を示唆するものと考えられるが、遺構の性格上遺物の出土をみないので、今後その類例を加えた上で検討していかなくてはならない課題であろう。

土坑は、落とし穴状の土坑の他にも小竪穴状の形体を示すものも5基出土している。これらの土坑からは遺物の出土が見られないため、時期は明確にできないが、このうち2基に底部の中心部から一カ所ピットが出土しており、第13号住居址と重複して出土している小竪穴状遺構は壁面近くから数カ所にピットが出土している。

最後に第8号土坑・第137号土坑である。これらの土坑からは縄文時代早期の条痕文土器が出土している。このことは、縄文時代早期にはこの地点でも生活が営まれていたことを示す資料と考えられる。

次に、弥生時代の遺構であるが、今回の調査では、後期の住居址が1基出土した。この住居址の出土は予想外であり、

辰野町内でも、このような山麓部に集落が存在していたことを初めて明らかにした点でまず大きな成果といえよう。また、この扇状地の扇端部からは、豊かな水が湧きだし、小規模ながらもかつては湿地帯が存在していたということであるので、このような狭小な湿地にも水稲耕作の手が及んでいたことを推察させることができる資料でもある。しかし、残念なことに、遺構自体は耕作によると考えられるカクランによって多くを破壊され、詳細を把握することはできなかった。

最後に平安時代であるが、この時代は今回の調査の中で、最も多くの住居址が出土している。

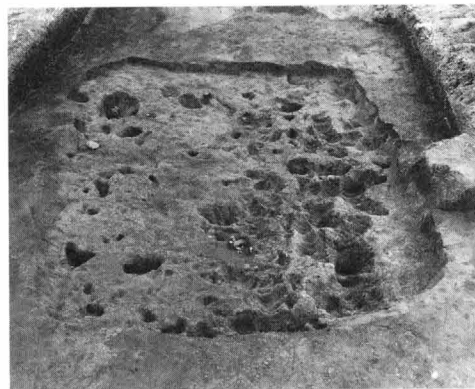
これらの住居址は長野県埋蔵文化財センターで調査を実施した松本平での平安時代の遺物の編年表で対応させると、おおよそ8期～15期に該当する住居址であり、平安時代全般にわたって出土している。

第5号住居址は、5m×4.2mの長方形を呈する住居址であるが、カマドの存在する壁面側の床面に周溝が確認され、建て替えが行われた事が判明した。また、カマドは拡張以前の位置に存在し、拡張した長さだけ煙道を延ばしている可能性がある。また、その煙道の天井には石を使用している。また、この住居址床面からは、鎌、鉄鎌、鐙が重なるようにして出土している。

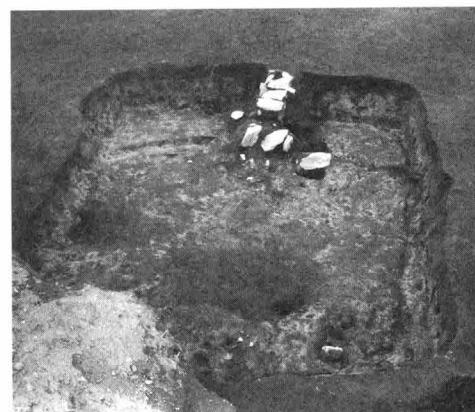
第6号住居址は西半部が破壊され、さらにカマドの出土状態も良好とはいえなかったが、今回調査された住居址中、最も多くの遺物が出土しており、注記に耐えうる資料で1,275片を数えた。これらの遺物は、床面およびその直上から出土しているが、その他にも床の硬化面を掘り抜いた下層の、浅い掘り込み内からも出土している。時期的にはほぼ同時期と考えられる遺物であるので、この住居址の築造段階での遺物と遺構の関係について今後検討していかなくてはならないであろう。なお、この住居址からは底部をヘラ切りし、墨書が確認できる須恵器の坏も出土しており、おそらく奈良時代の遺物と考えられることから、この遺物についても今後の検討課題であろう。

第9号住居址は、遺構の保存状態が良好で、カマドもほぼ当時の姿を留めていると考えられた。また、西部の壁際には柱穴が存在し、この壁中央部に出入り口が存在していたと推定される。

今回の調査では平安時代の火災住居が2基検出されている



第12号住居址



第5号住居址



第5号住居址出土鉄製品



第8号住居址



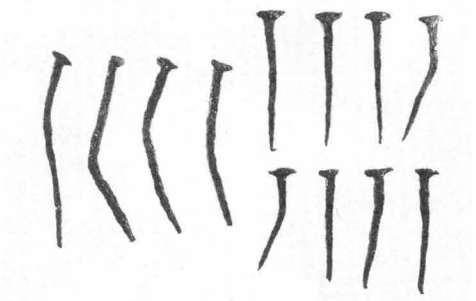
第17号住居址



菰手石



不明遺構



釘状鉄製品

(第15号住居址・第17号住居址)。どちらの住居址についても当時の生活に使用していたと考えられる土器が一括で出土した。中でも第17号住居址は炭化した建築部材が比較的保存状態よく出土し、加工痕を留める板材や、柱の一部と考えられる丸太材等が出土したほか、ムシロ状の敷物や、縄状の炭化物も出土している。また、土器についても出土点数は少ないながらも平安時代末期の食膳具の一括資料が出土している。

最後に第10号住居址であるが、この住居址は一辺6mの方形を呈し、床面付近からは菰手石19個、土錘3個、槍鉋と考えられる鉄製品等、そのほかの住居址とは異なる遺物が出土しており、住居址自体も規模が大きいことを考え合わせると、一種の工房とも考えられる。

また、調査区西部には、掘立柱建物址が6基出土し、この区域が倉庫地区であったことが判明した。これらの建物址は、長軸を東西に向けたものが2基、南北に向けたものが4基で、重複している地点もあることから、時間幅があることがわかる。また、第3号建物址の北東部から検出された小規模なピットと呼ばれる土坑(第9号土坑)からは、鉄滓が大量に出土している。

その他、単独埋設と考えられる須恵器甕の上半部を伴った土坑も出土しているが、表土除去時に遺構を破壊してしまい、詳細は不明である。

これらの遺構の他に、調査区中央部付近からは東西14m、南北26mの平面長方形の遺構が出土した。この遺構は調査当時、その性格が明確にできなかったために不明遺構としている。この遺構内からは、白磁碗の口縁部や体部、青磁碗等が出土しており、これらの遺物から平安時代末期～鎌倉時代(12世紀)の遺構と推定される。その他にも最長で約30cm、最短でも15cmほどの鉄釘状の鉄製品が床面にまとまって出土しているのははじめ同様の形体の鉄製品が床面付近から出土している。また、製鉄を推定させる鉄滓や、鞆の羽口の破片も出土しており、後述されている赤沼氏のレポートのとおり、鉄生産関連の遺構と考えられる。

この遺構を中心にして、南部には東西にはしる溝が出土し、前述の鉄滓の出土しているピットも含めて考えると、この遺跡は平安時代末期～鎌倉時代の鉄生産関連工人の集落と考えることができる。

第IV章 遺構と遺物



第5図 調査地区全体測量図 (S = 1/1,000)

1. 住居址

1) 縄文時代

第11号住居址

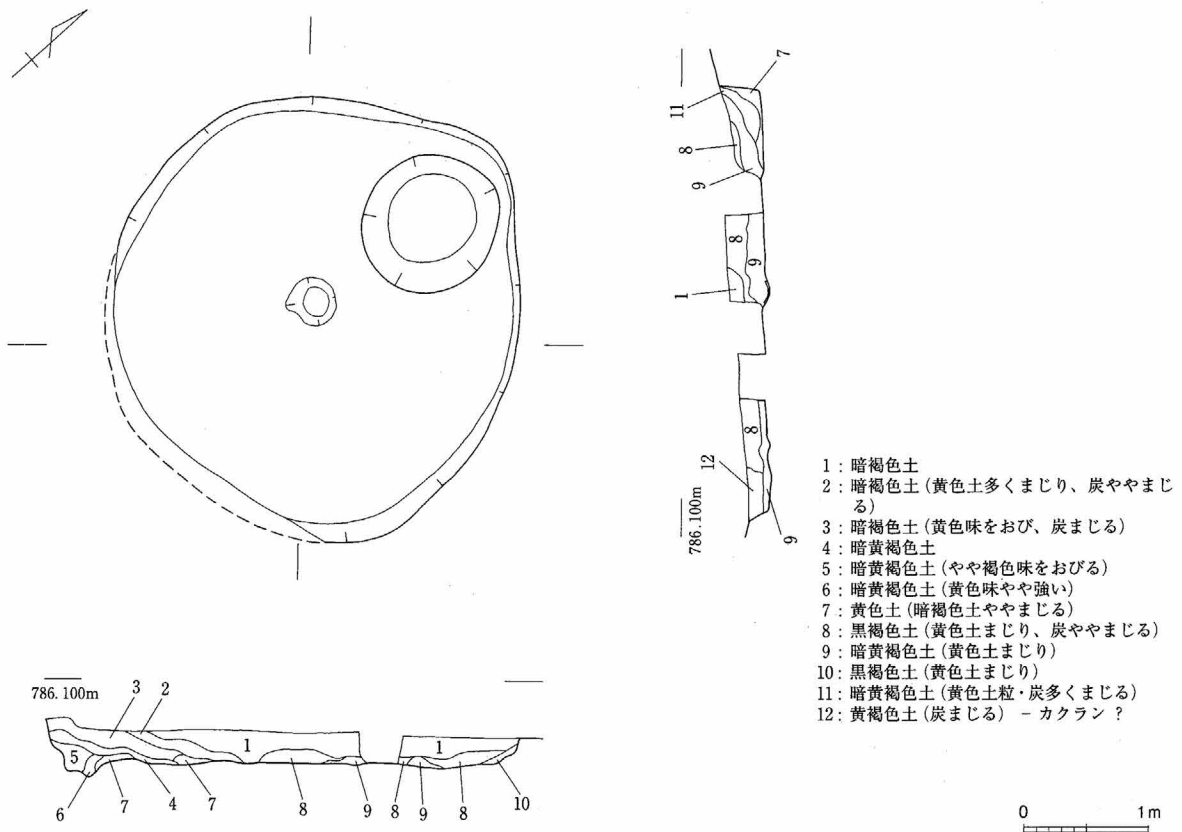
この住居址はBL-95グリッドを中心に出土している。住居址北部に第5号土坑が重複して出土している。重複状況からして、第5号土坑の埋没後にこの住居址が掘られた可能性が考えられる。また、南部壁についてはプランを明確に把握できなかつたために大きく掘り込み過ぎてしまっている。

この住居址は直径3.3mの円形で、住居址中央部に浅い落ち込みがあり、土器片（第7図3）が出土していることから、炉の存在を伺わせるが焼土等が出土していないため確定的ではない。また、住居址南東部には焼土が出土しており、この地点では、火が使われていた様子が伺えた。柱穴は床面を精査したものの検出することはできなかった。

遺物（第7図）

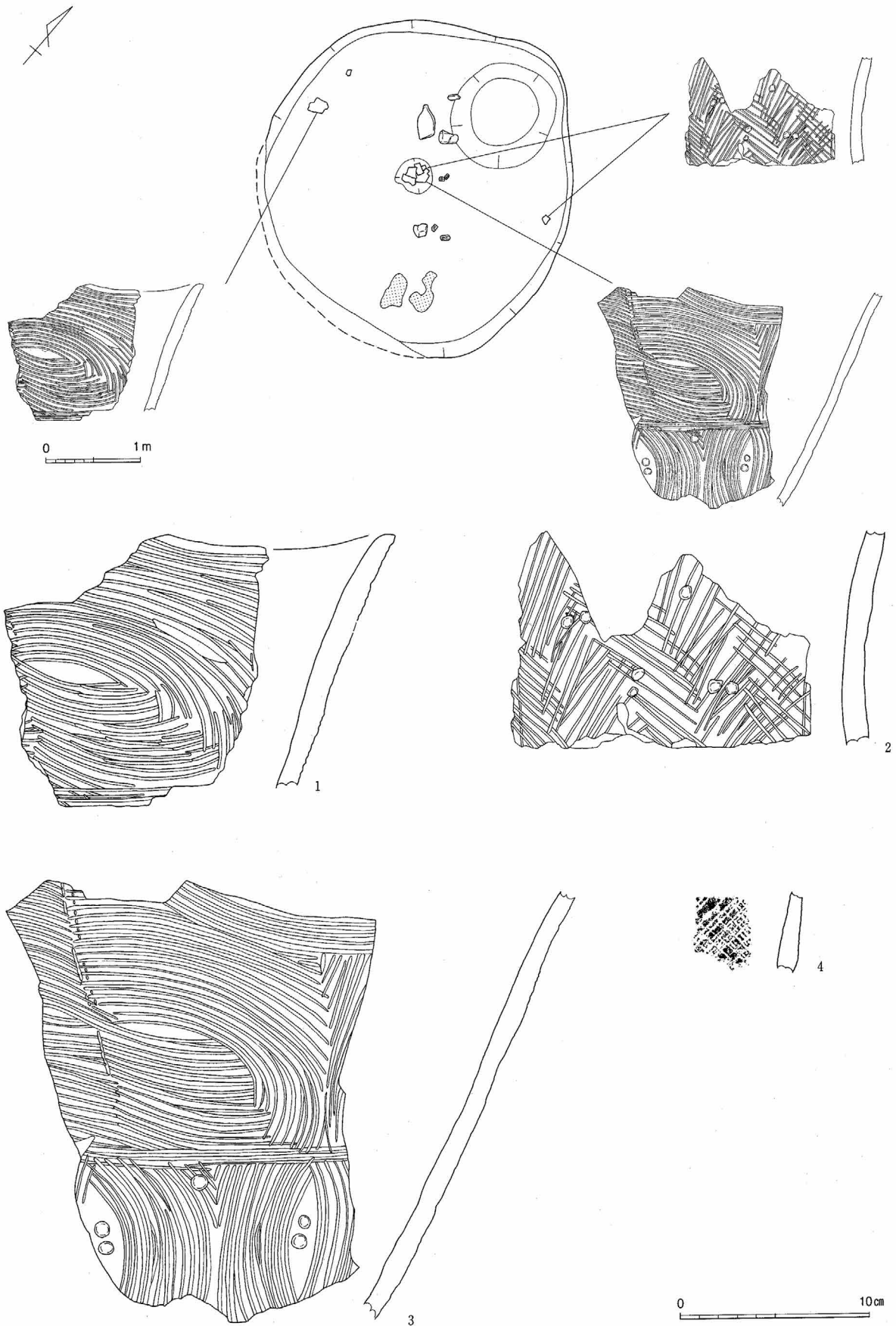
第7図がこの住居址から出土している土器である。すべて床面より出土している。

1～3はすべて前期末葉の土器で、半截竹管状工具による並行沈線を主体とする施文を行なっている。1・3は比較的堅緻な土器であったが、2はやや焼成があまいのか内外面に若干剥離がみられた。1は内面は丁寧にミガキ調整が施され、破片の外周と内面に煤が付着している。2には内面にミガキ調整の痕跡は確認できなかった。3は1よりも焼成があまいのか、内面に剥離がみられ、ミガキ調整についても粗い。胎土中には細かい砂粒が多く混入していた。4は2と同一個体である。これらの土器はいずれも淡褐色系の色調であった。



第6図 第11号住居址遺構平面図

1. 住居址



第7図 第11号住居址遺物出土状況図及び出土遺物

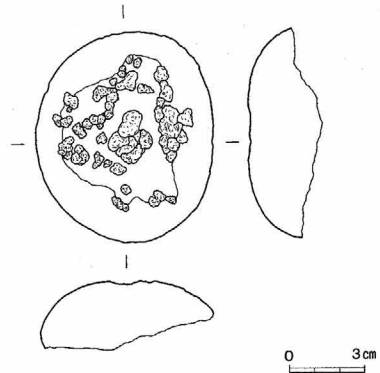
第IV章 遺構と遺物

第13号住居址

この住居址はDN-64グリッドを中心として検出された。住居址南部は土坑及びかくらんによって破壊され、東部は削平によって壁が失われて、プランを明確にすることができなかった。また、北部には小竪穴が存在しており、当初その存在に気づかず掘り上げてしまったために住居址のみを調査することができなかった。しかし、土層断面の観察や、床の硬化面によって、小竪穴を住居址が切っていることは確認している。規模は推定で直径約4mの円形と考えられる。

住居址のほぼ中央部からは焼土が出土しており、この地点に地床炉があったと考えられる。なお壁付近に柱穴も出土している。

また、この遺構からは中期初頭と考えられる遺物が出土しているが図示できる遺物は第11図5の土製円盤と、第8図の磨石のみであった。

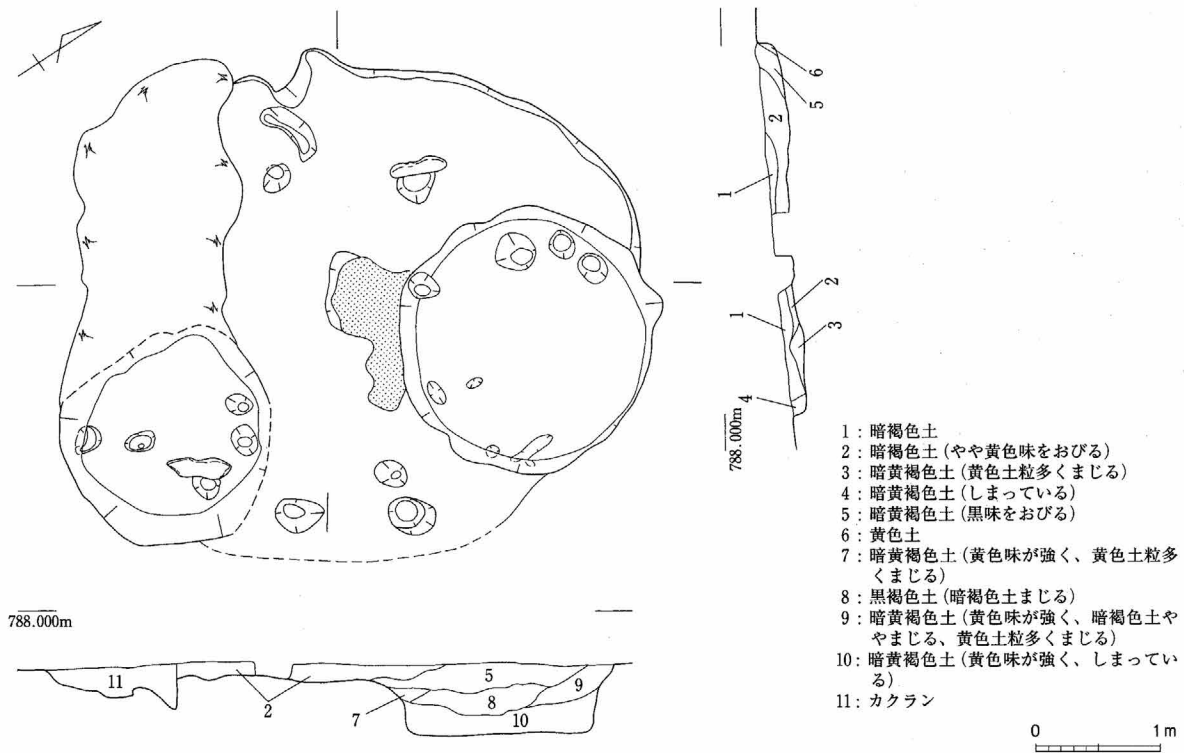


第8図 第13号住居址出土石器

第16号住居址

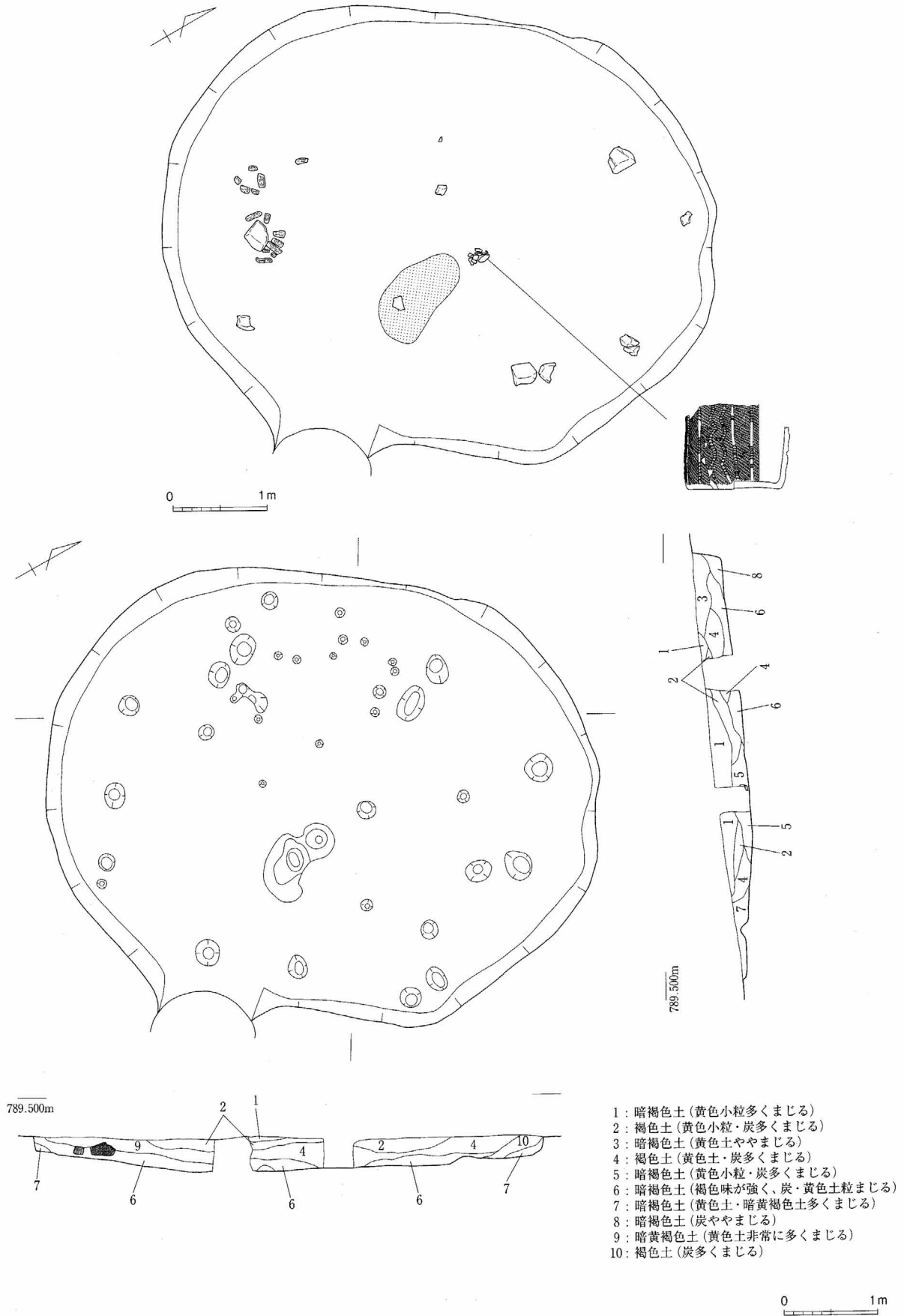
この住居址はCN-65グリッドを中心として出土している。住居址南西部には第89号土坑が一部重複して出土しており、当初、その存在が明確にできなかったために、住居址の壁を一部破壊してしまった。

この住居址は長軸6m、短軸4.7mを測る楕円形のプランで、中央やや南西寄りに地床炉が存在する。覆土は全体的に黄色土粒を混入した暗褐色系の土が中心であり、層位によっては炭が多く含まれていた。また、床付近では、炭化材と考えられる木炭や、礫が出土し、炉付近からは、深鉢の下部（第11図4）も出土している。床は若干しまっており、柱穴は壁面に近い所に散在しているが主柱穴は特定できなかった。



- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土(やや黄色味をおびる)
- 3: 暗黄褐色土(黄色土粒多くまじる)
- 4: 暗黄褐色土(しまっている)
- 5: 暗黄褐色土(黒味をおびる)
- 6: 黄色土
- 7: 暗黄褐色土(黄色味が強く、黄色土粒多くまじる)
- 8: 黒褐色土(暗褐色土まじる)
- 9: 暗黄褐色土(黄色味が強く、暗褐色土ややまじる、黄色土粒多くまじる)
- 10: 暗黄褐色土(黄色味が強く、しまっている)
- 11: カクラン

第9図 第13号住居址遺構平面図



第10図 第16号住居址遺構平面図

第IV章 遺構と遺物

遺物(第11図、第12図)

第11図1は色調が黄褐色の土器で、胎土中に雲母と、砂粒が混入している。焼成は良好で、胎土も緻密な土器である。外面の文様は横位の押圧隆帯によって口縁部と頸部を分け、口縁部に左上から右下にむかって斜位の沈線を引き、その上から交差するように粘土紐を貼り付け格子目文とし、その後太い粘土紐を横位に貼り付け、その周囲を更に細めの粘土紐で取り囲むようにして貼り付けた、横長の瘤状の施文が見られる。内面は丁寧な横方向のナデ調整が施されている。この土器と同じ個体と考えられる破片が第66号土坑より出土している。3は破片であるが同一個体であるため、図上で器形が読み取れる程度にレイアウトしている。外面明褐色、内面暗褐色を呈した、焼成良好で堅緻な土器である。4は住居址床面中央部付近より出土している。縄文を地文とし、押し引きを伴う隆帯を直線あるいは波状に貼り付けている。焼成は良好で胎土も緻密であるが、表面がやや粗れているため、ややもろい印象を抱かせる土器である。なお、この土器は接合部から剥離している。

第11図6～20は覆土中より出土した破片である。7～10は結節浮線文を施文している土器である。7は結節文でも粘土紐上にヘラ状工具によるキザミによって施文されている。焼成は良好で、緻密な胎土である。また外面の上部と内面には炭化物が付着している。11～13は半截竹管状工具により平行沈線を施文している。これらの破片は焼成も良好で、胎土も緻密である。なお11には内面に煤状の炭化物が付着している。また、12・13・16・18・20は同一個体である。5片とも内面は丁寧なナデ調整によって仕上げられている。なお、12・16には煤状の炭化物が付着している。雲母が多く混入した、緻密な胎土である。17は単節の縄文が施文されている。薄手の土器で、焼成は良好であった。19は無節の縄文が斜位に施文されている焼成良好な底部である。

第12図は黒曜石製の石器である。1は小型の無茎の石鏃である。先端部の加工や、全体的な形体がやや不整形であることから、未成品の可能性もある。2・3は石匙、4は剥器、5～7は剥片を利用した剥器、8は楔形石器と考えられる。

第18号住居址

この遺構はCH-62グリッドを中心に出土している。遺構自体の残りが悪く、最深で4cmの覆土で覆われている程度であった。このため、遺構の規模等は把握できなかった。なお、床には硬化面が確認されている。

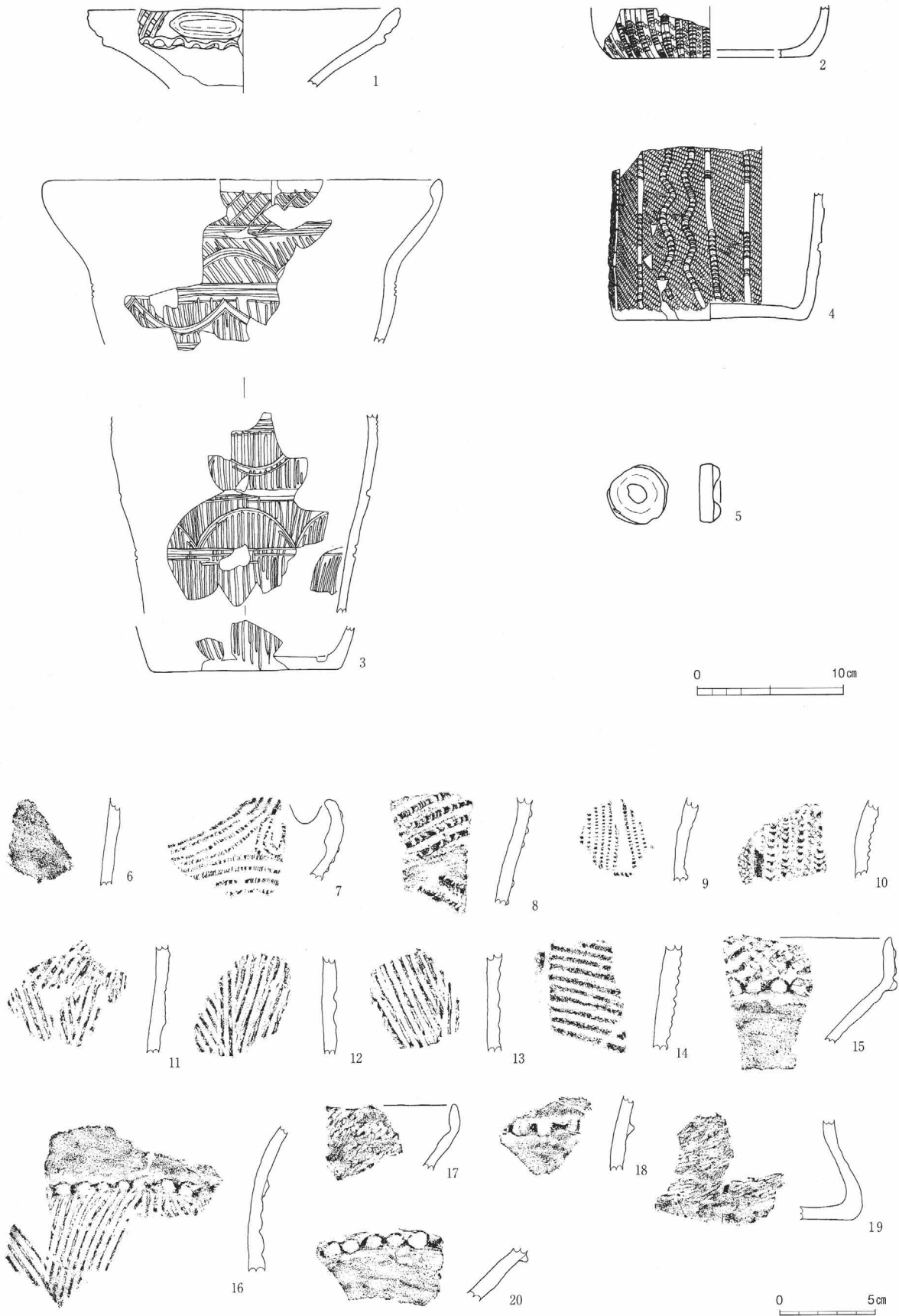
柱穴は壁際付近に検出されたP1～P6と考えられる。床の西部には石で囲われた遺構があり、石囲炉と考えられる。しかし、焼土はこの炉よりやや東にずれて検出されており、住居址の造られた当初は、この焼土の存在する住居址中央部やや西側であったと考えられるが、後に何らかの理由で炉を築き直している可能性もある。また、炉の移築後にこの炉で火を使った痕跡をとらえることはできなかった。なお、炉石には石皿の欠損品(第14図5)も含まれていた。

遺物(第14図)

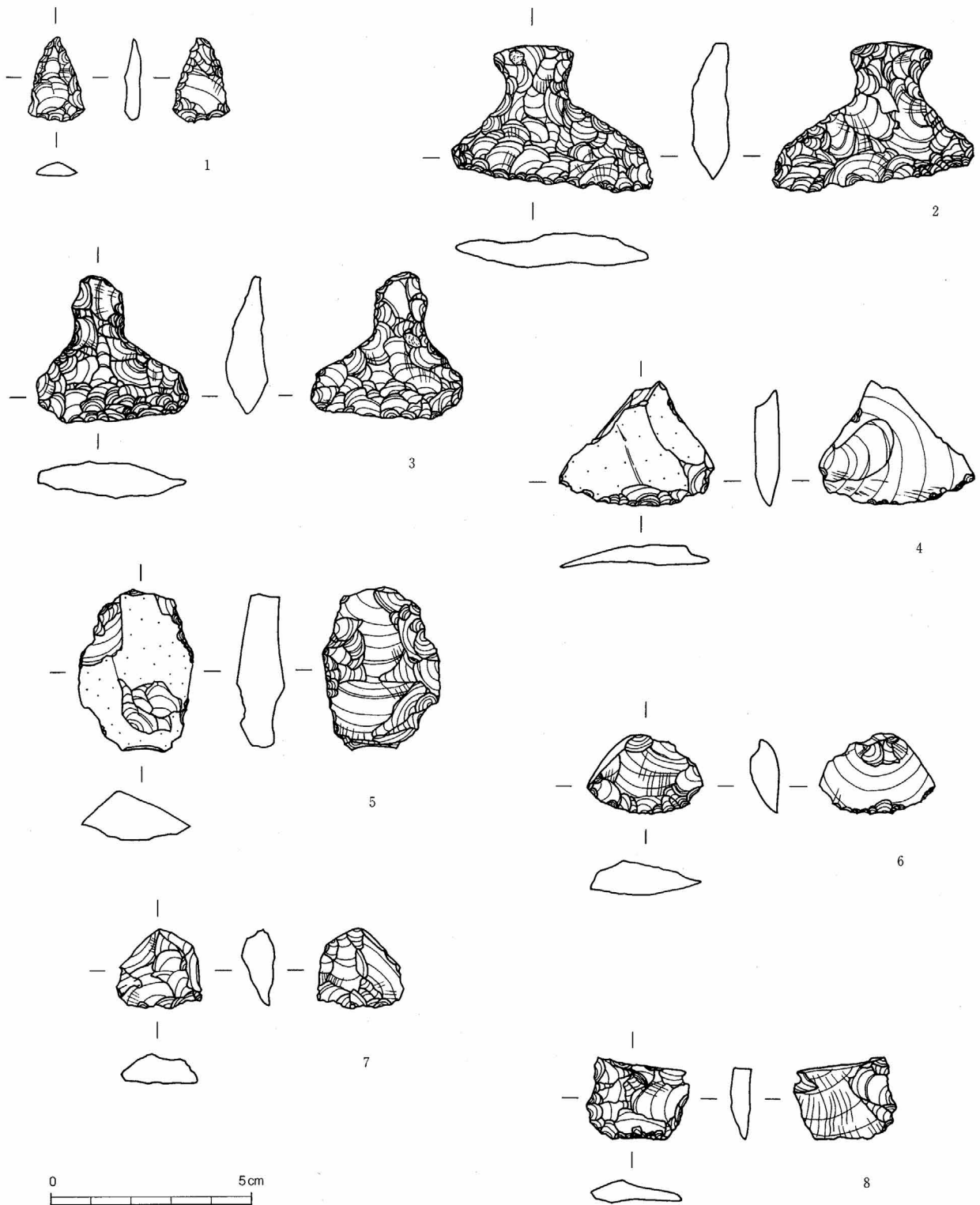
この住居址の床面からは遺物の出土は少なく、覆土中からもほとんど遺物の出土はなかった。そのため、図示できる遺物は第14図の5点にとどまった。

第14図1は体部の破片である。焼成はやや甘く、砂粒の混入は少ないものの雲母は多く混入している。第14図2～4は床面より出土した土器である。3片とも同一個体と考えられ、焼成はやや甘く、胎土中に雲母を多く混入した土器片である。5は炉石に転用されていた石皿である。花崗岩製で、1/4程欠損している。皿部は非常になめらかである。裏面には台石として使用したと見られる窪みが確認されている。また、炉石として使用されていたため、被熱の痕跡が確認でき、煤の付着も見られる。

1. 住居址

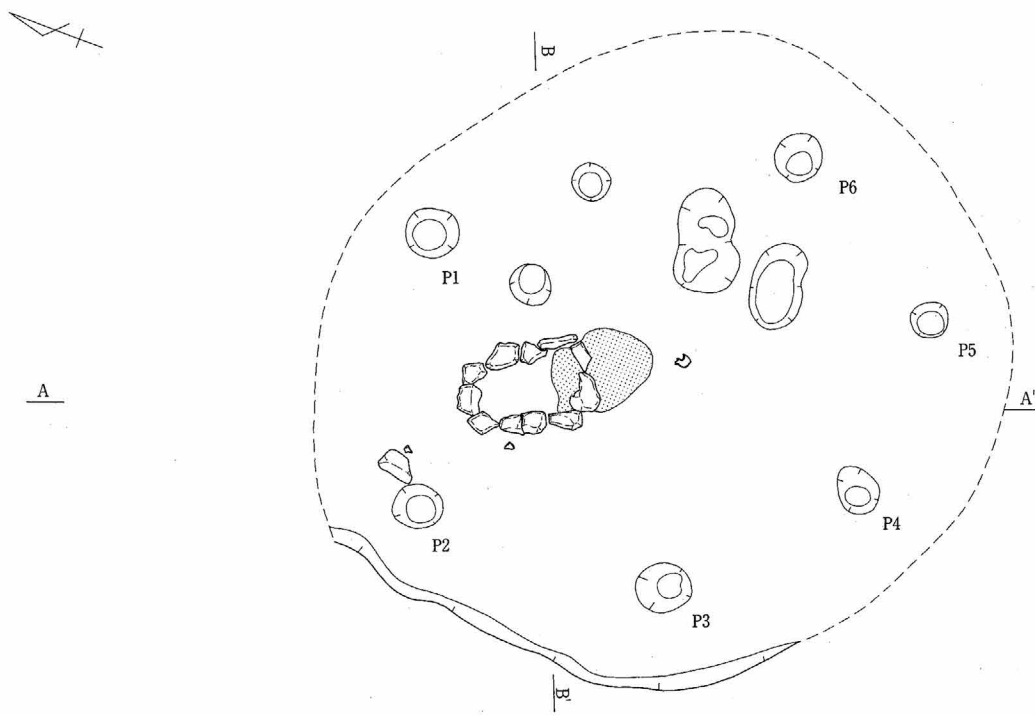


第11图 第13、16号住居址出土遺物 (1) (5:S=1/3)

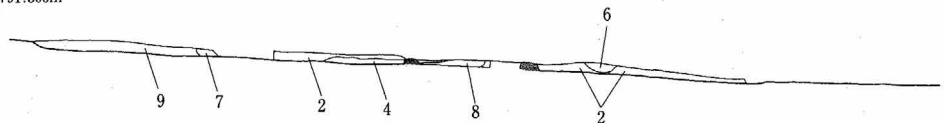


第12図 第16号住居址出土遺物 (2)

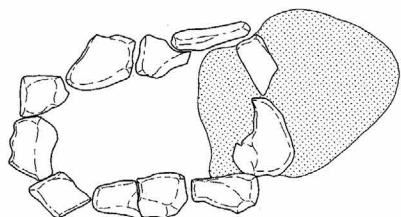
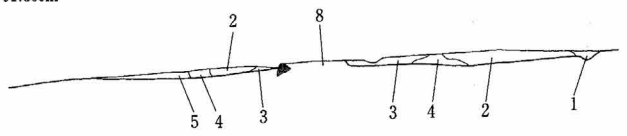
1. 住居址



A
791.300m



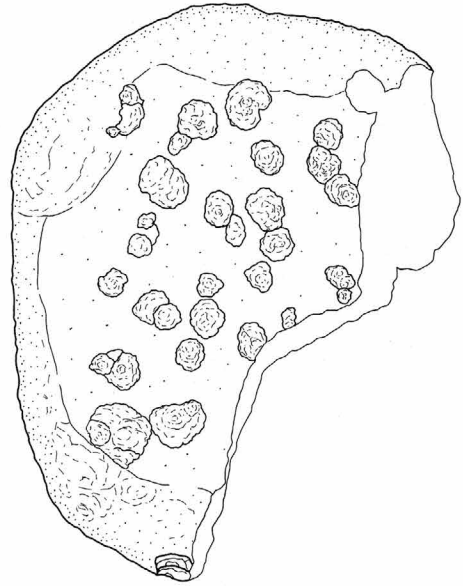
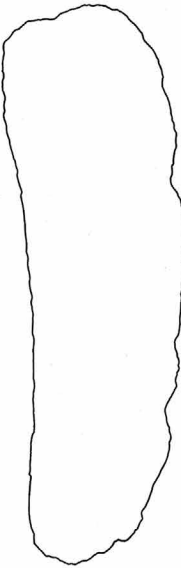
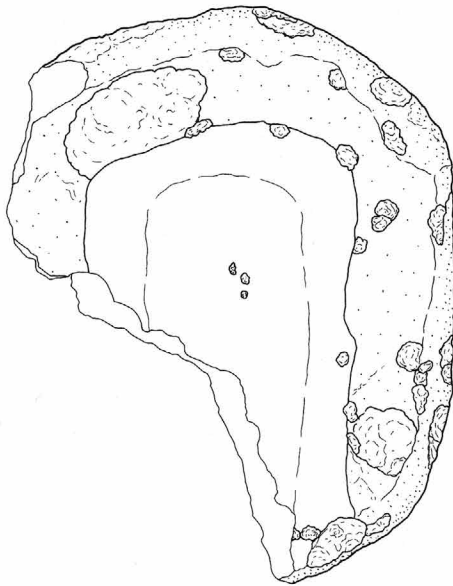
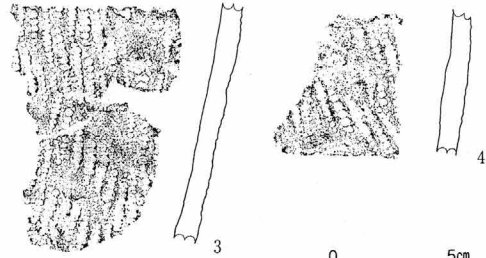
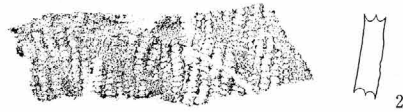
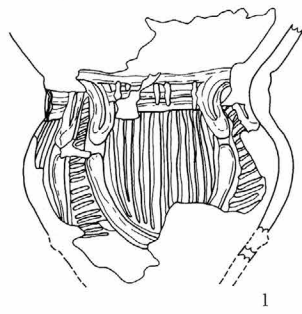
B
791.300m



- 1: 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色土粒・黄色小粒ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (黄色味をおびる)
- 4: 暗黄褐色土 (黄色土ややまじる)
- 5: 暗褐色土
- 6: 暗褐色土 (やわらかい、カクラン)
- 7: 黄色土
- 8: 炉
- 9: カクラン



第13図 第18号住居址遺構平面図 (炉: S=1/30)



5



第14図 第18号住居址出土遺物

第23号住居址

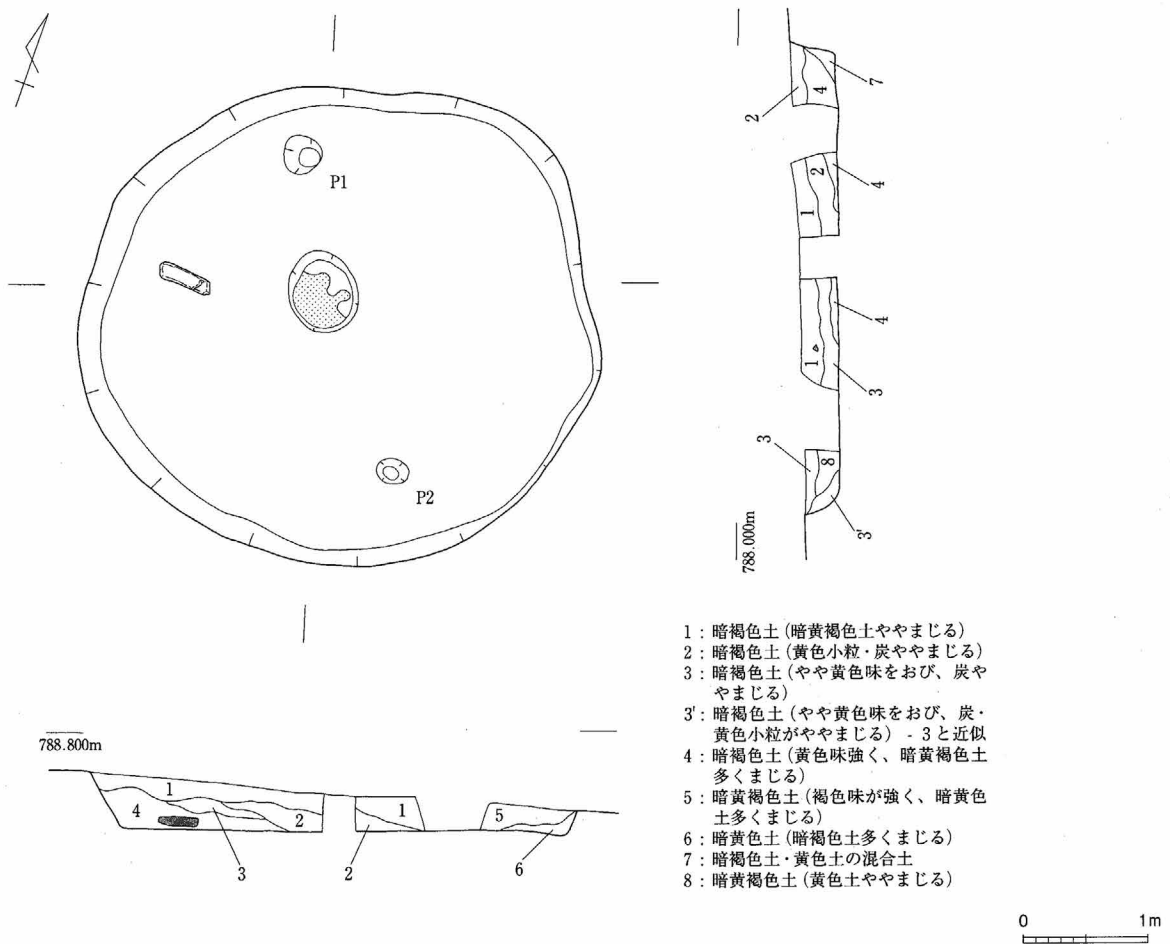
この遺構はCA-82グリッドを中心にして出土している。直径4mの円形の住居址で、床面中央部には焼土が検出されており、地床炉がこの地点に存在したと考えられる。柱穴はP1・P2が考えられるがその他に検出することができなかった。

また、この住居址の床面付近からは多数の土器片が出土しているのに加え、西部には石柱と考えられる細長い石が出土している。

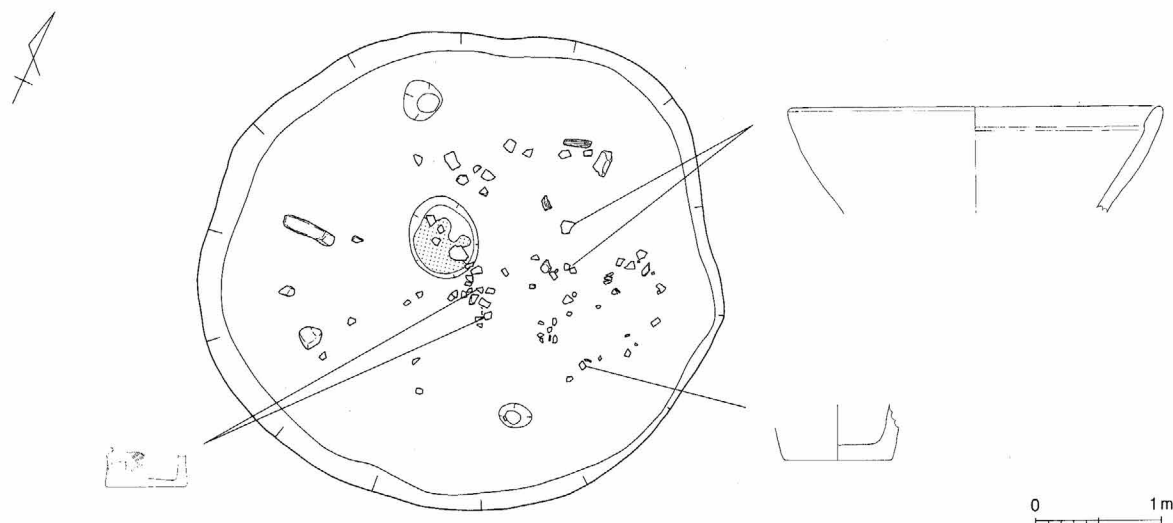
遺物 (第17図~第20図)

第17図~第20図がこの住居址から出土している遺物である。第17図1・2は底部の破片である。1は粗い単節の縄文が施文されており、焼成は良好であった。なお、底部には網代痕がある。2は焼成は良好で、胎土も緻密である。なお、破片上部の外面には剥離痕が観察されることから、接合痕を文様化しているタイプの土器の可能性が考えられる。この土器も1と同様に網代底である。3は4と同一個体である。隆帯で区画された内部に縄文を施文し、浅い沈線を引いた土器で、口唇部の一部に煤状の炭化物が付着している。内面に一部剥落があり、やや粗めの横方向のナデ調整が観察される。

5・6は浅鉢の破片である。外面には縦位のナデ調整、内面には横位のナデ調整が観察できる。緻密な胎土で、砂粒、雲母が多く混入している。6は胎土中に砂粒を多く混入しているものの、焼成は良好である。



第15図 第23号住居址遺構平面図



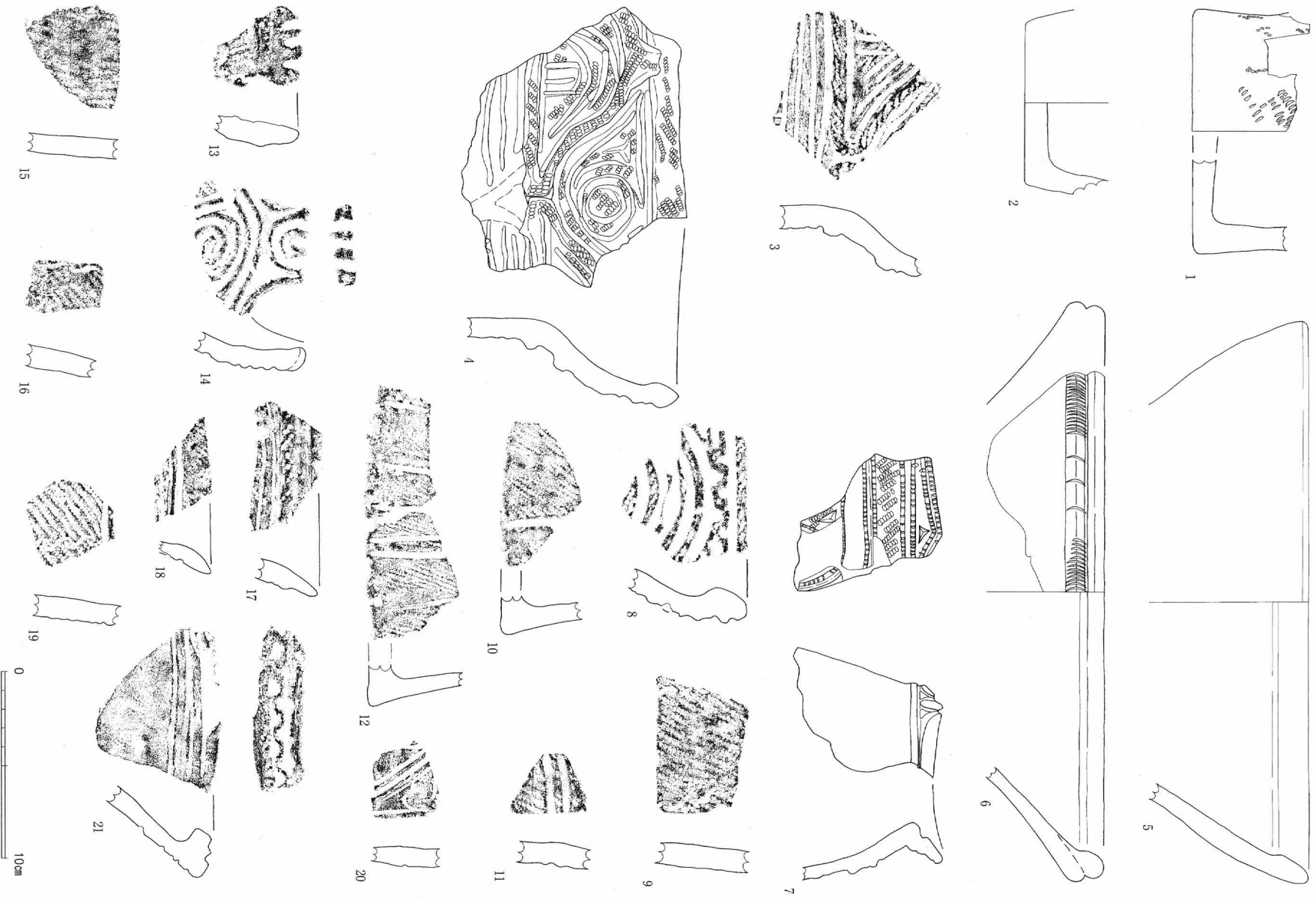
第16図 第23号住居址遺物出土状況図

7は細い竹管状工具を使用して丁寧な押し引き文を施文している土器である。口唇部には押し引き文と同一工具を使用してキザミが入れられている。内面の口縁部には印刻状の三角形の沈線が施文されている。体部には炭化物が付着しており、煮沸に使用されていたことが伺える。また内面には全面にわたって横方向に丁寧なミガキが施されている。胎土も緻密で、黒雲母が混入されている。焼成も良好な土器である。

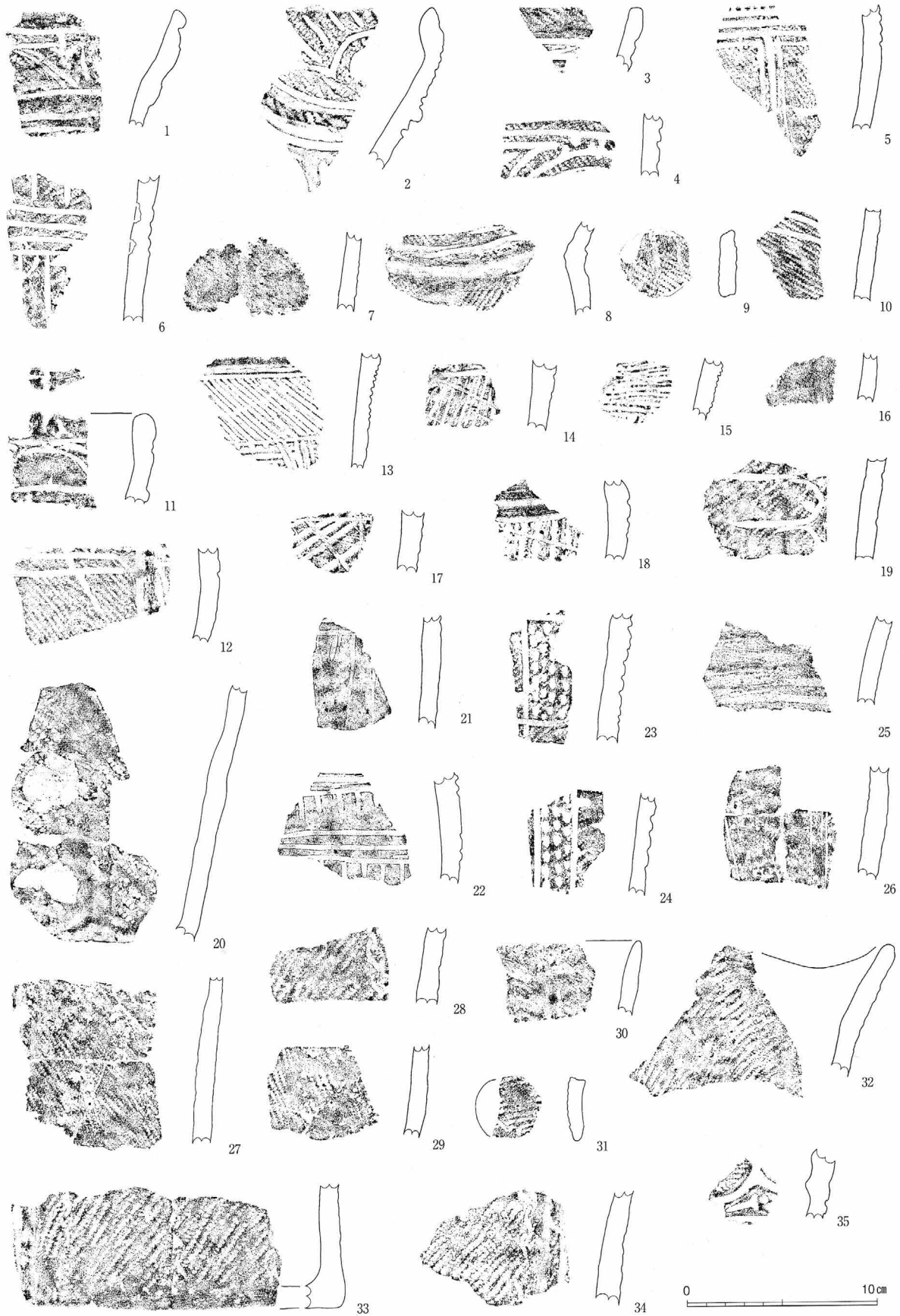
第17図8～19は、第18図1～12・19と共に、縄文を地文とする土器である。第17図8は縄文を施文した後に竹管状工具による沈線で施文している。焼成はややあまく、胎土内には砂粒が少量混入されている。色調は淡褐色を呈している。また、第17図15・16は暗褐色を呈している。

第17図9は13・15・16・第18図29・33・34と同一個体である。焼成はあまく胎土中に砂粒が混入されており、このためもあってか磨滅が目立つ。第17図9・11・第18図28・33は淡褐色を呈する。また、器面に結節縄文が確認される破片（第17図16・第18図28）もみられる。第17図10・12は同一個体で、内傾気味に立ち上がっている器形である。焼成は比較的良好であるが、砂粒や雲母の混入がみられる。内面には煤が付着しており、外面は褐色を呈している。第17図13・14は突起のつく口縁部の破片である。13は、口唇部に粘土を盛り上げ、竹管状工具によって押圧を加え、キザミ状に施文している。また、口縁部直下に薄い粘土紐を横位に貼り付けた後に器面全体に縄文を施文している。14は縄文を施文した後に、粘土紐で曲線を描き、その間を竹管状工具によって縁取りをしている。また口唇部には同一の工具によってキザミをつけている。13は焼成があまく、砂粒を多く混入しているため、内面は剥離している。それに対して14は砂粒や、雲母が混入されているにもかかわらず、焼成も良好である。内面は粗いナデ調整を行っている。第17図17は口縁部の破片である。外面の一部と、内面に剥離がみられるが、口縁端部を尖り気味に成形し、口縁部直下の横位隆帯上に縄文を施文している。細かい砂粒を多く混入させた褐色を呈する土器である。第17図18は、内面は褐色を呈し、外面には煤が付着している。砂粒の混入も少なく焼成の堅緻な土器である。口縁上端部には縄文が施文されている。なお、第18図5は同一個体であり、第18図12もその可能性がある。この土器は、縄文を地文として半截竹管状工具による半肉隆線と爪形文によって文様が構成されている。外面には煤が若干付着している。第18図19は砂粒の混入が多く、内面の剥離が著しい。焼成は比較的良好で淡褐色の色調を呈する。外面に縄文が施文され、煤が付着した土器である。第17図20は平行沈線を施文している。内面は剥離しているが焼成は良好である。なお、上

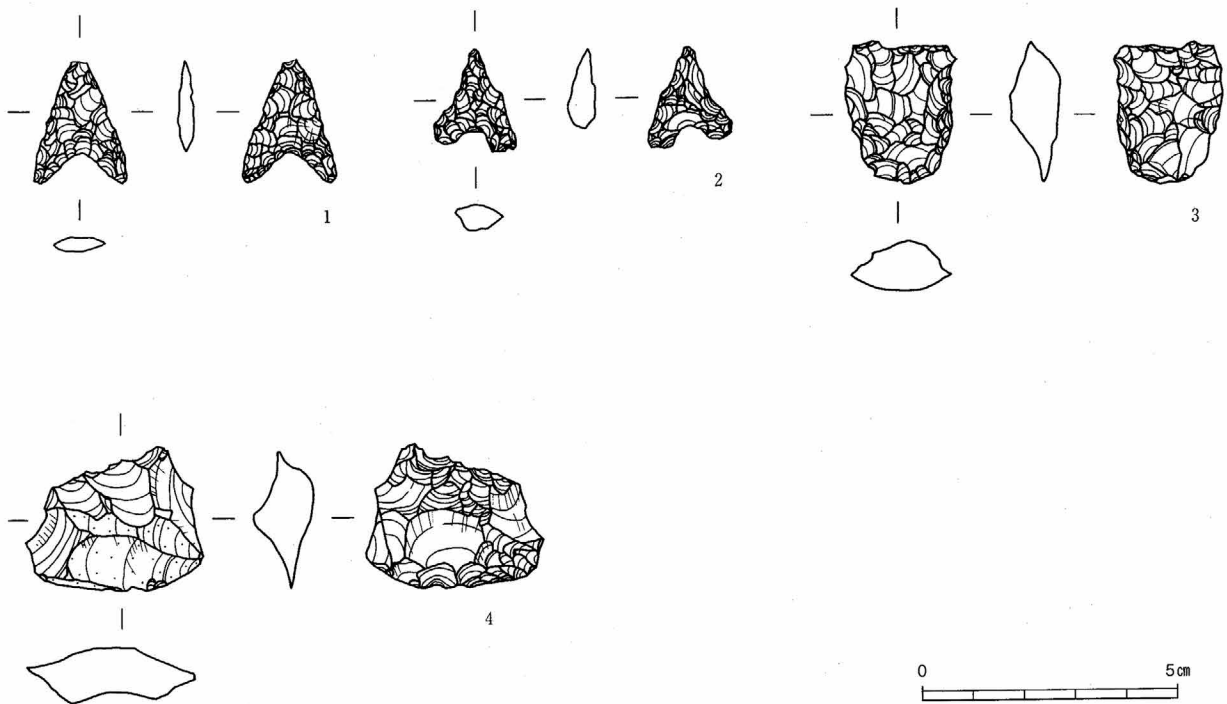
1. 住居址



第17图 第23号住居址出土遗物 (1)



第18図 第23号住居址出土遺物 (2)



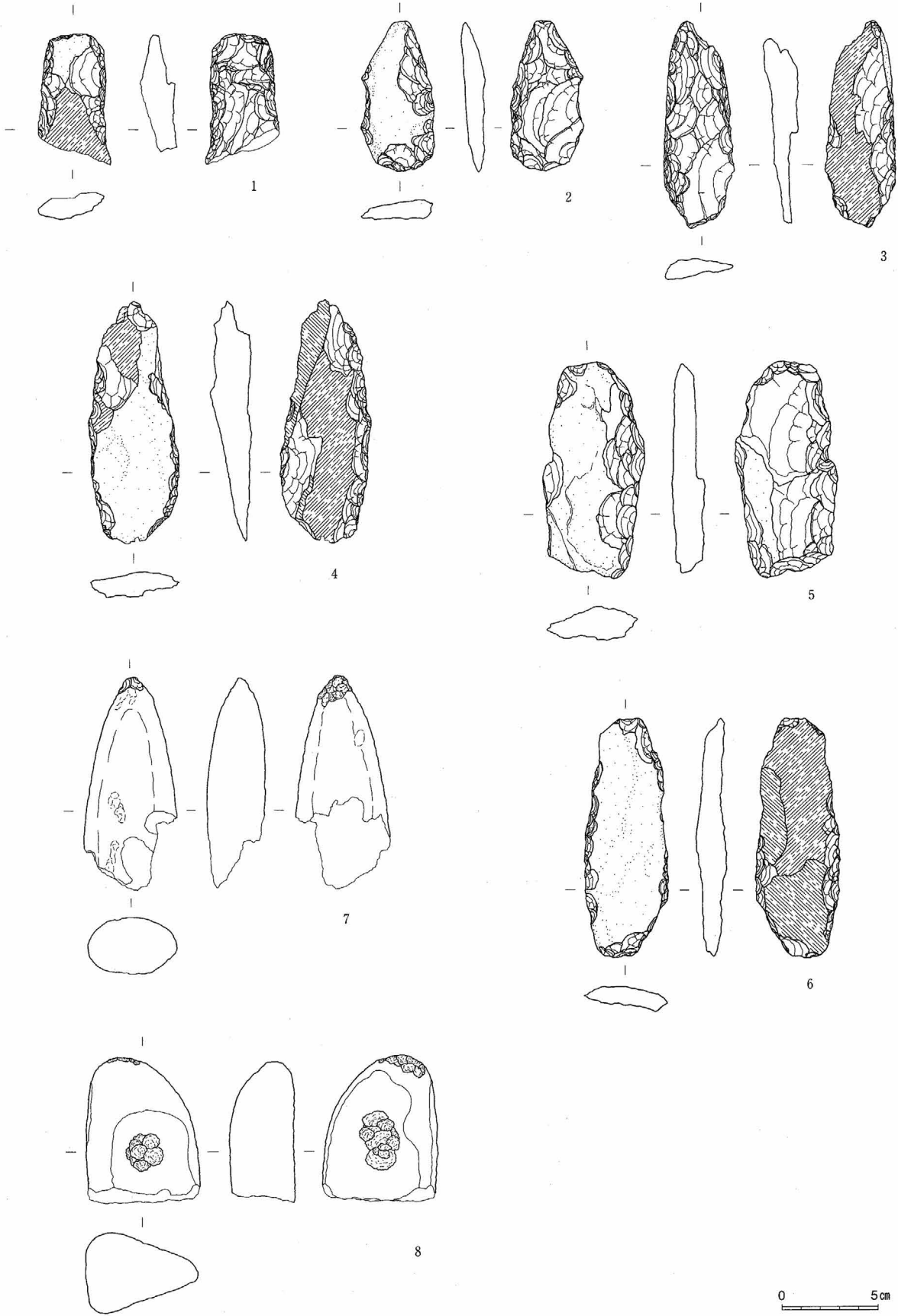
第19図 第23号住居址出土遺物 (3)

部には接合痕が確認できる。第17図21は浅鉢の破片である。口唇部は剥離が著しいが、半截竹管状工具による交互刺突文が施されている。

第18図1はやや焼成のあまい土器であり、口縁部直下の文様帯に施文されている曲線の沈線は、工具を二本同時に持って弱い押し引き沈線文を施文している。2は隆帯にも縄文が施文されている。外面には煤が付着しており、内面は淡褐色を呈している。砂粒や雲母が混入しており、焼成は良好であった。4・8・9・10は同一個体である。砂粒が混入した胎土の粗い土器であるが、焼成は比較的良好である。9は土製円盤に再加工されている。7は外面に結節縄文が施文されている。全体の形体からみて土製円盤の可能性もある。いずれも淡褐色を呈し、砂粒が若干混入している焼成良好な土器である。11は焼成良好で、堅緻な土器である。

第18図13・14・17・18・20~26は沈線文系の土器である。13は斜位の平行沈線を施文している。焼成は良好で、砂粒が多く混入している淡褐色の土器である。14・17・18は格子目を平行沈線で施文している土器で、14と18は同一個体である。これらの土器は焼成も良好で、褐色系の色調であった。胎土中には砂粒が混入している。15は結節浮線文を密に施文している、焼成良好で胎土も堅緻な土器である。20~24・26は堅緻な胎土で、焼成も良好な胎土である。器壁もなめらかであり、他の土器とは異質の土器である。25は無文の土器で、ナデ調整の痕跡が残っている焼成良好な土器である。27の内面には煤が付着している。焼成はややあまい。30は器台の可能性も考えられる。外面には煤が一部付着している。31は土製円盤である。32は口縁部の破片である。明褐色を呈した焼成良好な土器である。35は口縁部の破片で口唇部上部に縄文が施文されている。焼成良好な土器である。

第19・20図は石器である。第20図1~6は打製石斧、7は乳棒状石器、8は凹石である。7は全面に埴打痕がある。8は窪みの存在する平坦部分はスリ、その他の部分には埴打痕が確認できる。第19図は黒曜石製の石器で、1・2は挟入の石鏃、3・4は薄片石器で3は削器、4は搔器として使用したと考えられる。



第20図 第23号住居址出土遺物 (4)

2) 弥生時代

第12号住居址

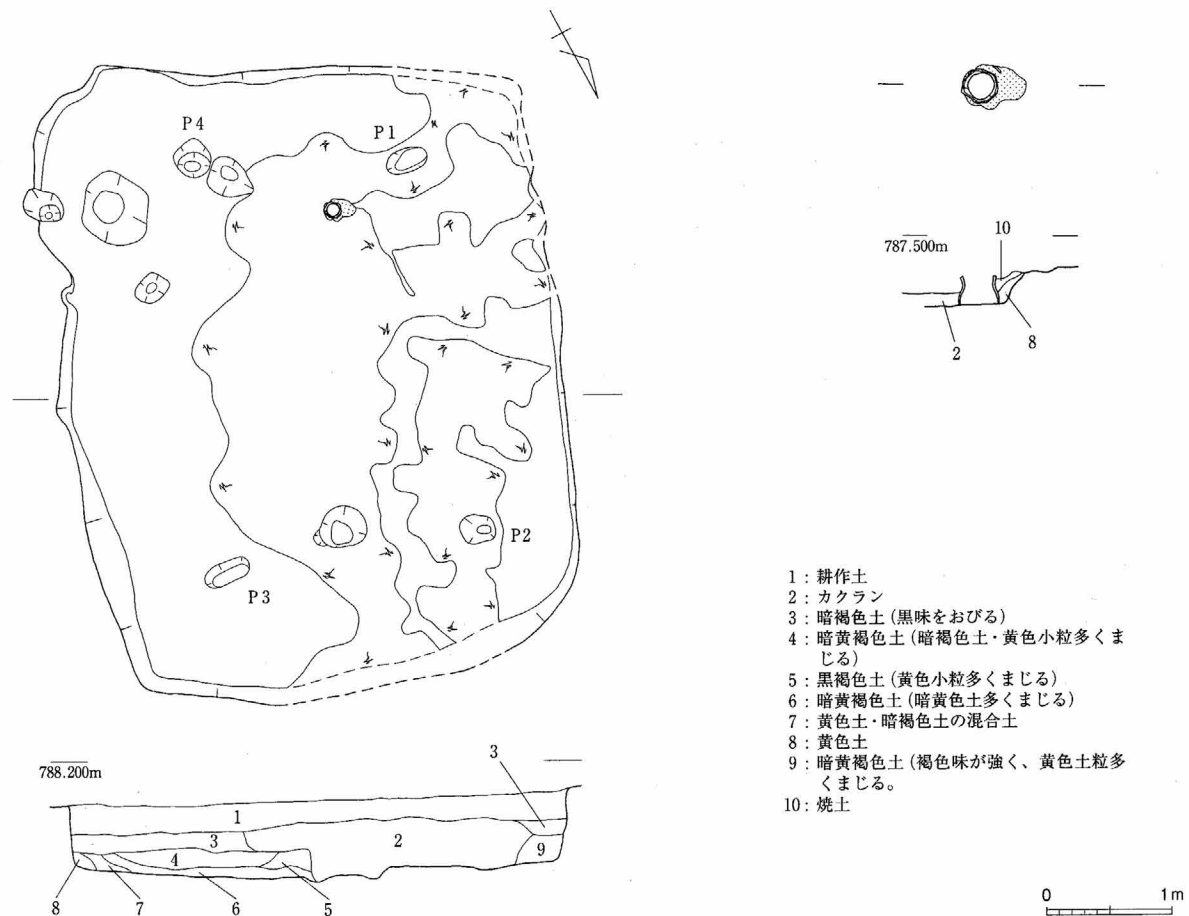
この住居址はAU-58付近より出土している。当初遺構検出作業中、調査区の南東隅に一部プランが確認されたため、調査区を拡張して発掘調査を行った。

この付近は遺構検出面までの客土厚が約25cmと厚かったにもかかわらず、畑の耕作が深くまで及んでおり、全体に粗れた土目であった。このため、住居址のプラン全体を明確に把握することができず、サブトレンチ等を開坑しながら遺構を掘り下げた。しかし、床面を検出した段階でも広範囲にわたってかくらんが残り、住居址内の東部にややまとまって床面が検出されたにすぎず、遺存状況はあまりよくなかった。

遺構の規模は、長径5.1m、短径3.8mで南東部がやや不整形な長方形のプランであった。また、北壁と、西隅壁は耕作によって破壊されていた。壁高は検出時点では33cmであった。柱穴はP1～P4と考えられ、中でもP1・P3は長楕円形であった。

埋甕炉は南壁寄りのP1とP4の柱穴の軸線よりやや住居址の中心部に入った地点より出土している。また、反対側の柱穴間にも土坑が検出されており、破片も出土していることから何らかの施設が存在していた可能性も考えられる。

覆土中からは紡錘車の破片（第22図7・8）や、高坏の脚部も出土している。



第21図 第12号住居址遺構平面図 (炉: S=1/30)

遺物 (第22図)

第22図がこの住居址より出土している遺物である。

1～3は甕の破片と考えられる。1は斜位のハケ調整の後に、間隔のあいた振幅の少ない5条1単位のクシ描波状文を4単位施文している。施文方向は左から右である。頸部の屈曲が強く、口縁部はやや短めに立ち上がる器形と考えられる。2・3は甕の頸部と考えられる。2は振幅の少ない5条1単位の波状文が2段確認できる。2は1と同一個体である。3は扇状文が施文されている、頸部の破片である。4は埋甕炉に使用されていた甕の体部である。全体的に器壁は厚く、あまり精緻な印象はない。外面全体に斜位のハケ調整が施された後、やや長大した頸部に4条1単位の波状文が4単位確認されている。波状文は各段共に4回の断絶をはさみながら左から右方向に施文している。内面はヘラ状工具による縦位のナデ調整が施されている。5・6は床付近より出土した甕の上部の破片である。両者共に胴部の最大径が口縁部の最大径を上回る器形である。調整は、はじめにミガキ調整を胴部の左上から右下にむかって行い、その後に口縁部を横位に行っている。内面はすべて横位にミガキが行われている。

7・8は土製紡錘車の破片である。円盤状に形を整えた後で中心部分に一方から穿孔している。9は高杯の脚部で、外面は赤色塗彩が施され、縦位によくミガキが行われている。また、坏部の内外面にも赤色塗彩が施されている。脚部の内面上部には指頭圧痕が残されている。



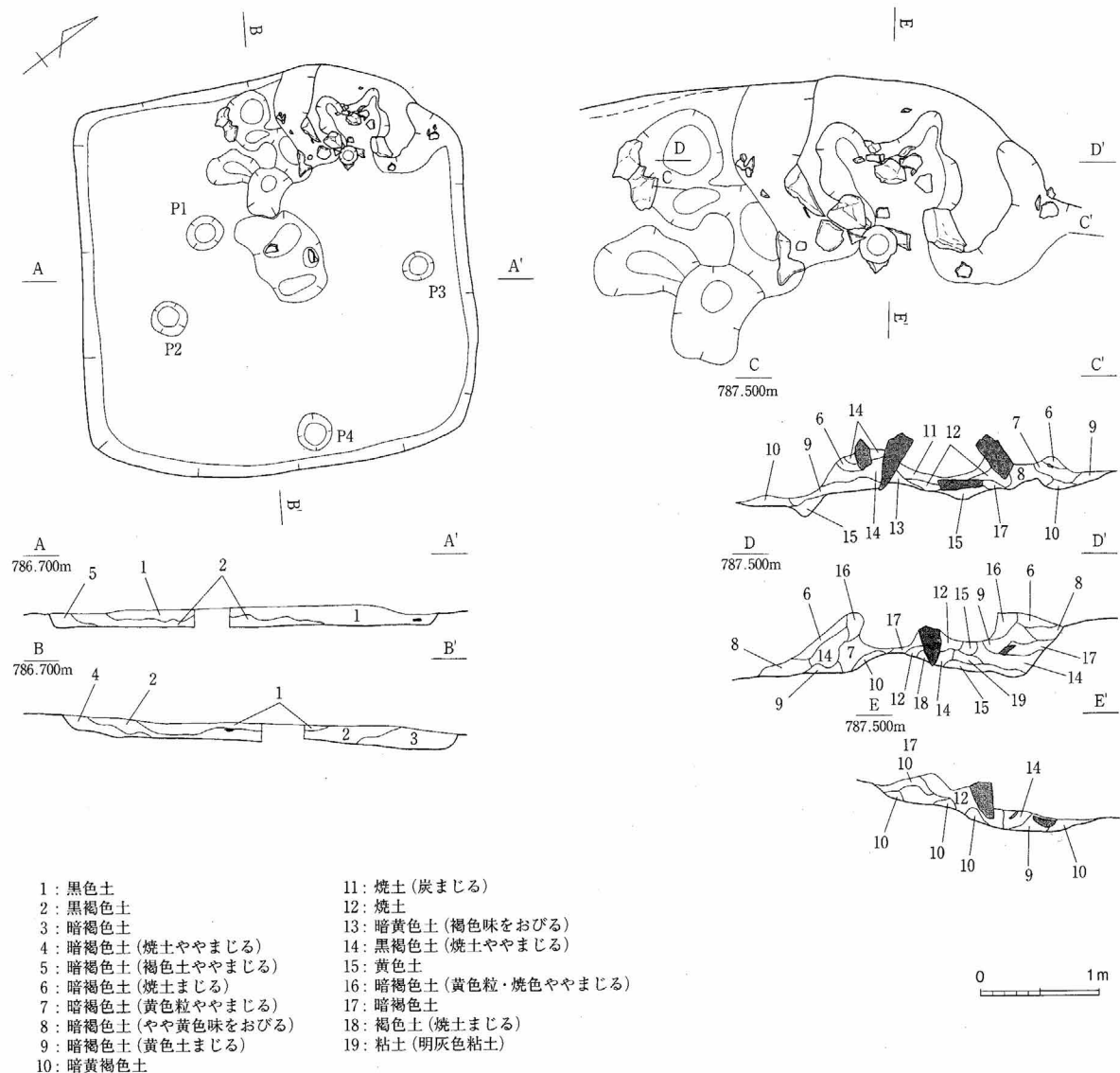
第22図 第12号住居址出土遺物

3) 平安時代

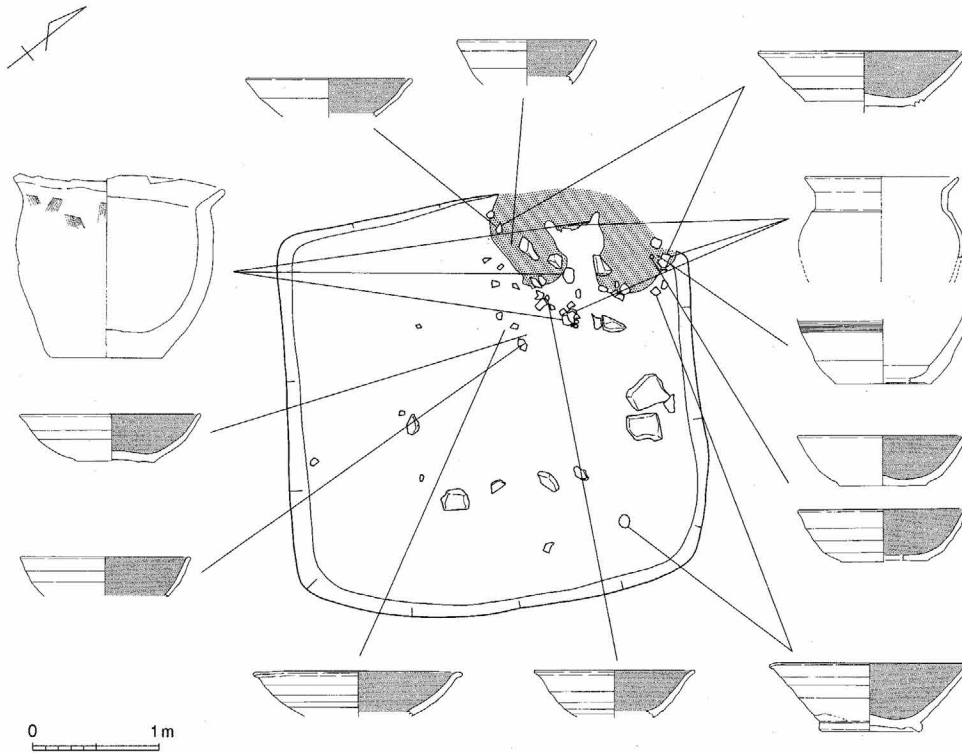
第1号住居址

AT-104を中心にして出土している。この付近一帯は全体に耕作が深くまでおよんでおり、遺構の残存状況は良好とはいえなかった。住居址は一辺3.3mの方形で、深さが約15cmのプランが検出できた。住居址の北部隅にはカマドが築かれており、袖部の焚口付近には石が立てられていて、これと、カマド中心部の支柱石によって煮炊具を支えていたと考えられる。なお、カマド自身は粘土によって構成されており、カマドの構成材となりうる石はカマド内からは出土していないことが、断面観察によって判明している。

床はほぼ全域に硬化面が確認されているが、柱穴は明瞭に出土していない。また、住居址中央部からカマド左横にかけて土坑等が出土しているが、この住居址が使用されていたときに存在したかは確認できなかった。また、ピットもP1~P4が検出されているが、柱穴になるか疑問が残る。なお、この住居址のカマド付近から黒色土器を中心とした遺物が出土している（第25図・第26図）。



第23図 第1号住居址遺構平面図 (炉:S=1/30)



第24図 第1号住居址遺物出土状況図

遺物 (第25図、第26図)

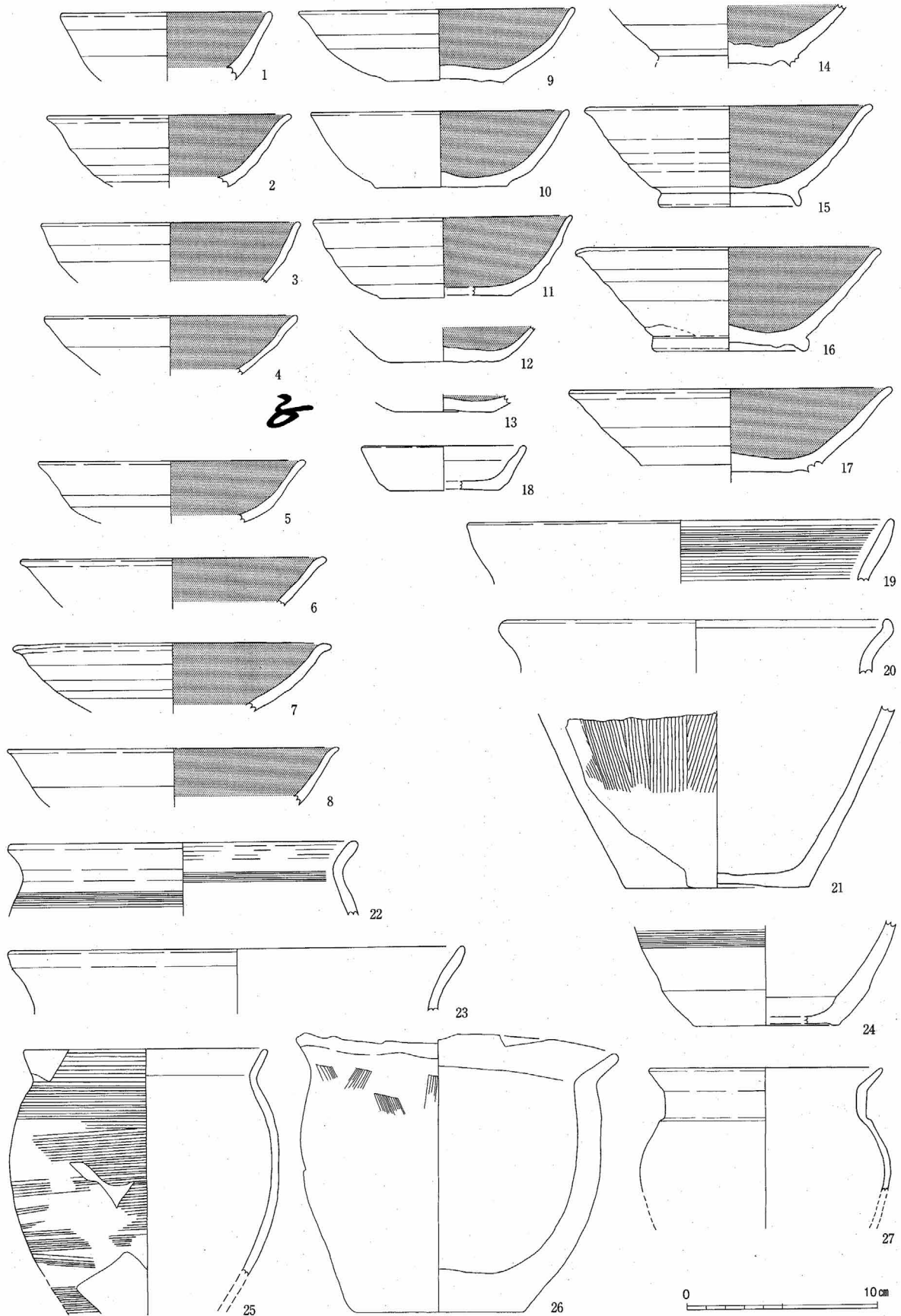
第25図1～13は内黒土器の坏である。口径13.4cm～14.5cmと、16.2cm～17.6cm・器高3.8～4.3cmの2種類が中心となっている。なお、口径の小さい坏は底部が残存していないため、器高を測定することはできなかった。口径の小さい器種は口縁部が直線的に立ち上がるが、大きい器種は口縁部が外反する傾向があるため、壙の可能性もある。1は黒色処理が抜け、土師器のような色調を持つ。また、4には外面に墨書が確認できた。

第25図14～17は内黒土器の壙である。口径16cm～17cmを測り、器高は測定できる壙で測定すると、5.4～5.5cmである。底部には糸切り痕が残されている。

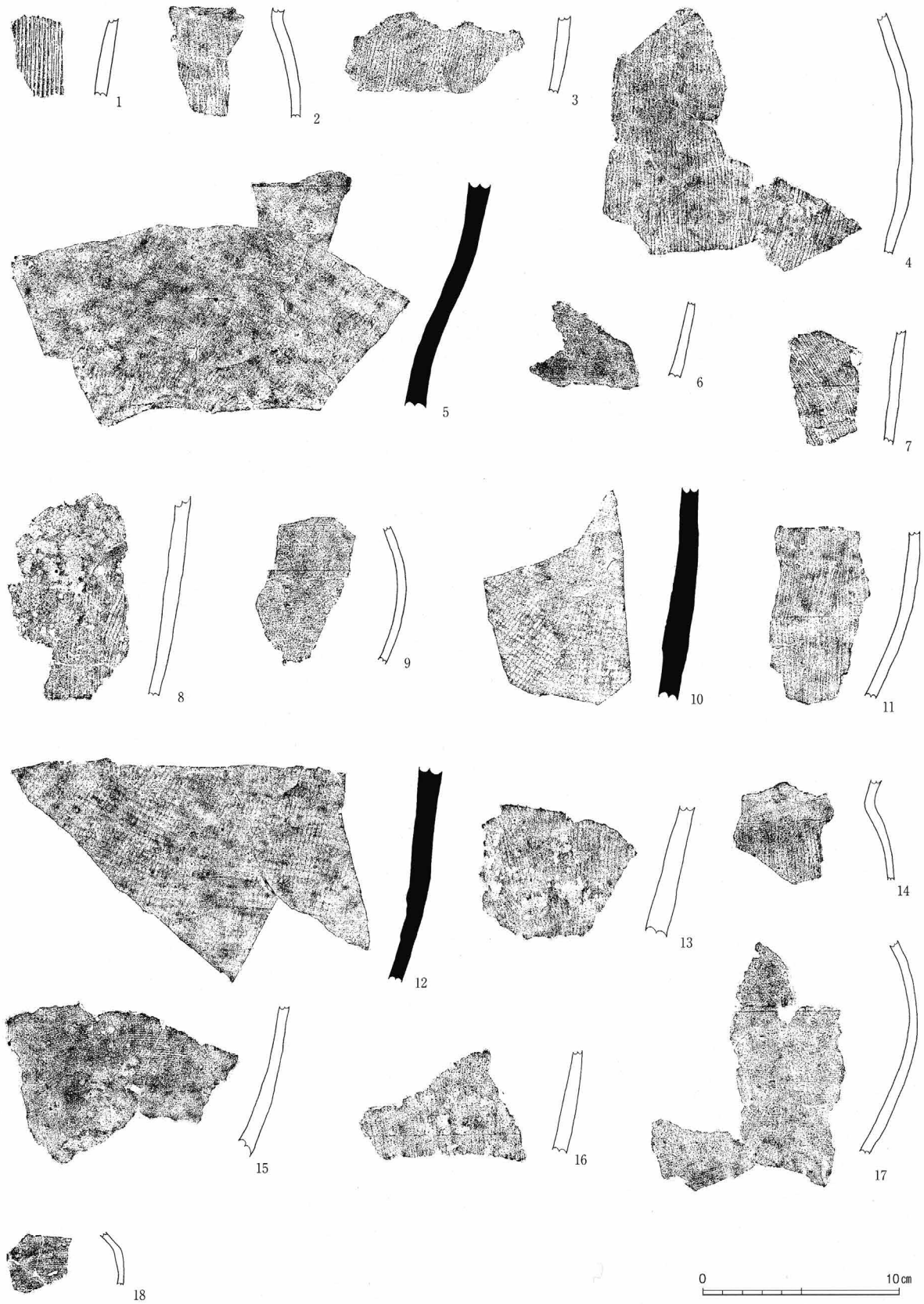
第25図19～27は甕である。20は口縁上端部が内湾し、受口状に整形されている。23もその傾向が伺える。18は土師器の皿である。小型化が進んだ段階のものである。21は長胴甕の底部である。24～27は小型甕である。24は、底部が極端に薄く仕上げられている。26は、この遺跡で大勢を占める小型甕と比べて器壁が厚い。内面には調整痕が確認されず、外面については、縦位の板状工具による整形痕が頸部付近に確認されるのみで非常に作りが粗雑な印象をうける。27は、外面にケズリが施され、口縁部と体部の境に段差を持つ甕で、武蔵型の甕である。

第26図は床付近およびカマド中から出土した甕の破片である。1～4・7・8・11・13・14・16は長胴甕の破片である。いずれの破片にも、外面には、縦位のハケ目調整がみられる。5・10・12は須恵器甕の破片であり、外面には格子目のタタキがみられる。内面には受具の痕跡は確認できなかった。6・9・15・17・18は小型甕の破片である。いずれも外面に横位のカキ目が施されている。

この住居址からは総じて8期と考えられる遺物が中心に出土しており、この住居址は当該期に属すると考えられる。



第25図 第1号住居址出土遺物 (1)

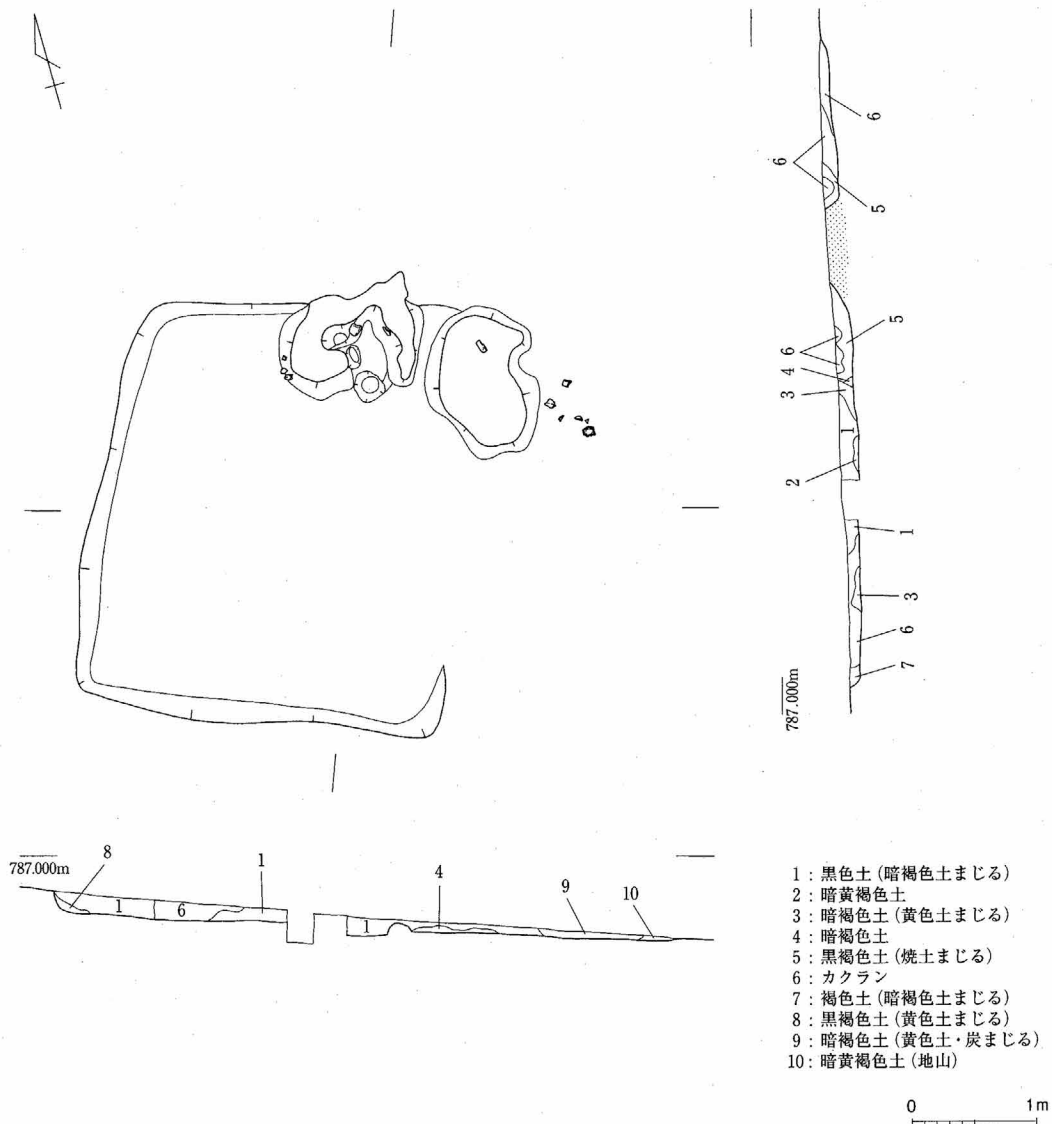


第26図 第1号住居址出土遺物 (2)

第2・3号住居址

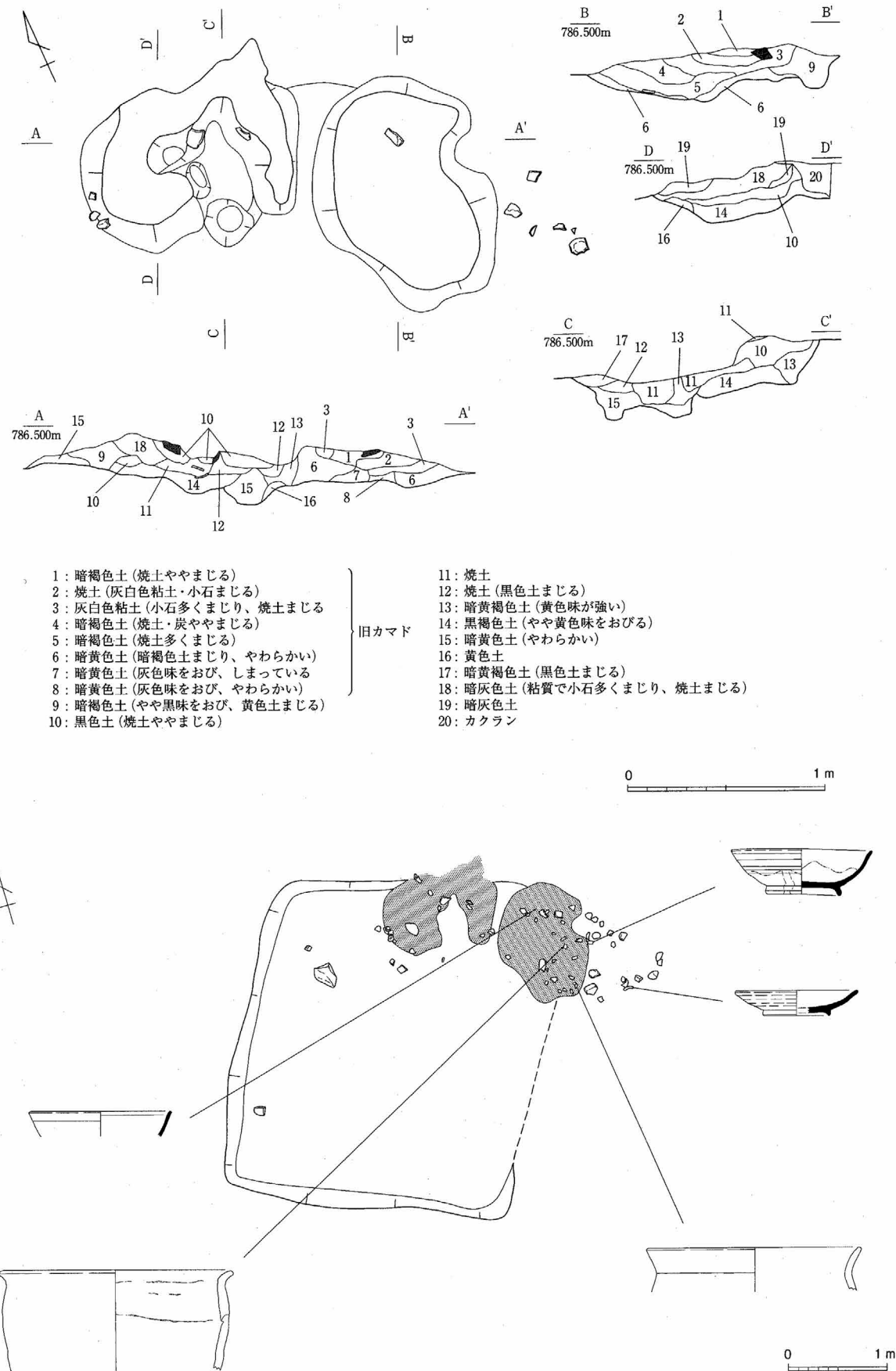
この住居址はAT-101を中心にして出土している。遺構検出している時点でカマドが検出されたため、住居址の存在が確認された。プランを検出した段階では、1基の住居址かと考えていたが、調査が進んでいく段階でカマドが2基出土したため、重複していると判断した。そのため、出土遺物は一括して取り上げてしまい、遺構、遺物ともに十分な調査成果を得ることができなかった。

2基の住居址の内、西側に検出された住居址は東壁を除いてほぼ規模を確認できたが、東側の住居址については、削平が著しく、プランを検出することができなかった。この住居址の前後関係は、カマドの残存状況からして、西側のカマドが新しいと考えられることから、西側の住居址が新しい可能性が高い。カマドは旧カマドは灰白色粘土を主要材として構築され内部から石は出土していない。また、新カマドは暗灰色土を主要材として使用しており、やはり芯材として石を用いてはいない。なお、新カマドの上部からは焼土が出土しているものの、両カマドとも床面付近には焼土が確認できなかった。また、これらの住居址は残存状況が悪く、2号住居址でも深さが15cm程度しかなかった。



第27図 第2・3号住居址遺構平面図

第IV章 遺構と遺物



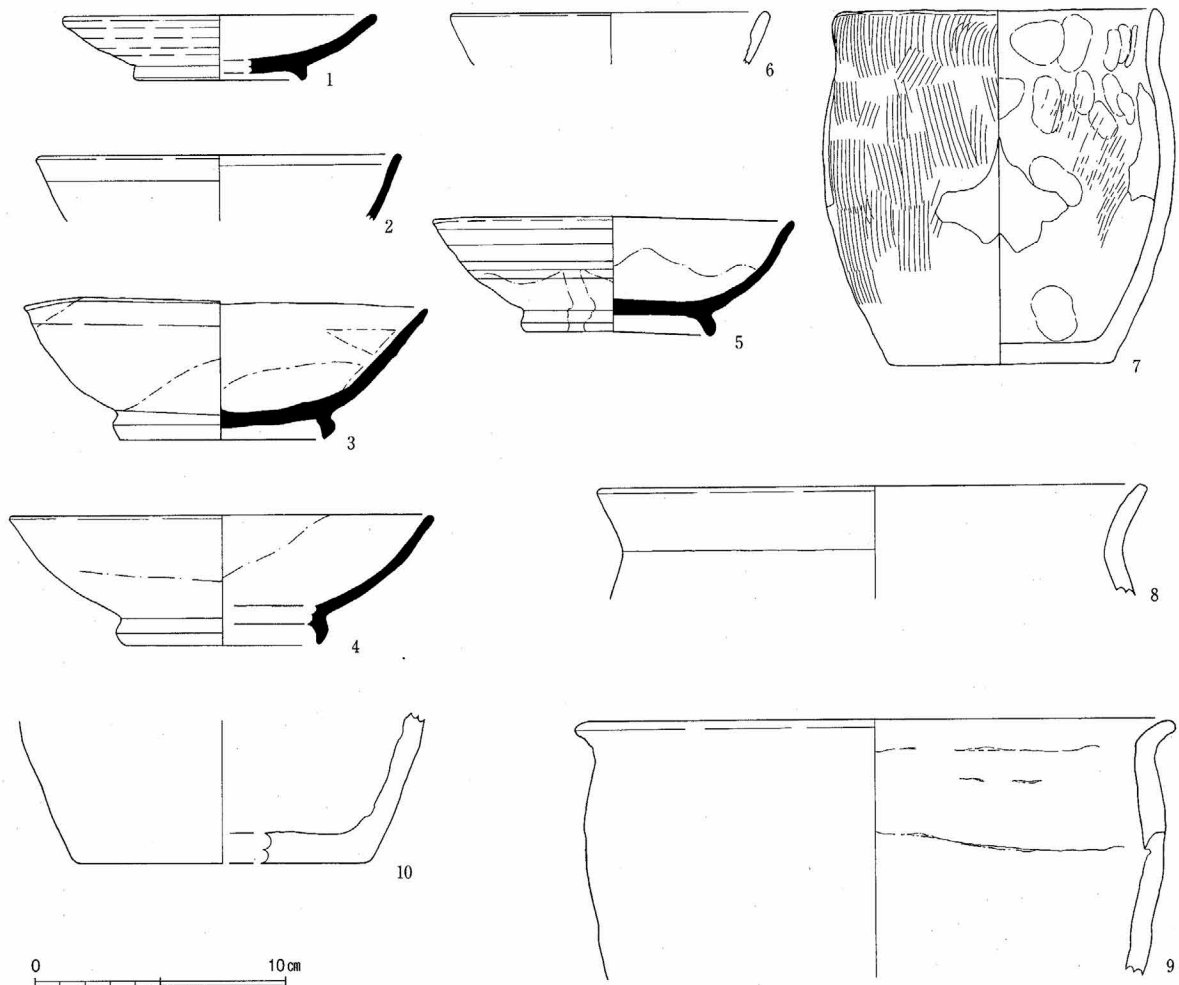
第28図 第2・3号住居址カマド遺構平面図及び遺物出土状況図

遺物 (第29図)

第29図がこの住居址から出土している遺物で、ほとんど遺存状態の悪いカマドから出土している (第28図)。

1は灰釉陶器の皿である。口径12.4cm、器高2.6cmを測る。ハケ塗り施釉であり、内・外面共に釉薬に光沢がある。2～5は灰釉陶器碗である。2は薄く釉が掛けられていたためか、光沢がない。3・4は三日月高台を有している。口径・器高はそれぞれ16.3cm・5.6cmと12.8cm・5.3cmであり、施釉方法は3がハケ塗りで底部の糸切り痕は回転ヘラケズリによって消されている。4は漬掛け施釉と考えられる。3は光沢のある釉であるが、4には光沢がない。5は口径14.6cm、器高4.7cmを測り、内面の釉には光沢がなく焼成もあまい。漬掛け施釉である。底部は回転ヘラケズリによって糸切り痕を消している。新しいカマドからの出土である。6は土師器碗と思われる。口縁部の一部が残存しているにすぎない。7～10は甕である。7は内・外面共に縦位のハケ目調整を施している。外面のハケ目調整は上部から下部にむかって4回に分けて行っており、内面には成形時の指頭圧痕が残っている。口縁部が直立気味であり、小型甕でも特異な形態、特徴を持つ。8・10は長胴甕と考えられ、内外面にナデ調整によって整形している。10の底部は多くの長胴甕と比較してやや器壁が厚い印象をうける。

9は小型甕の上半部と考えられる。器壁が厚く、外面から粘土の積み上げた場所が確認できるほど粗い整形で、内面には接合痕も確認できる。時期としては灰釉陶器の碗から推定して、8期～9期と考えられる。

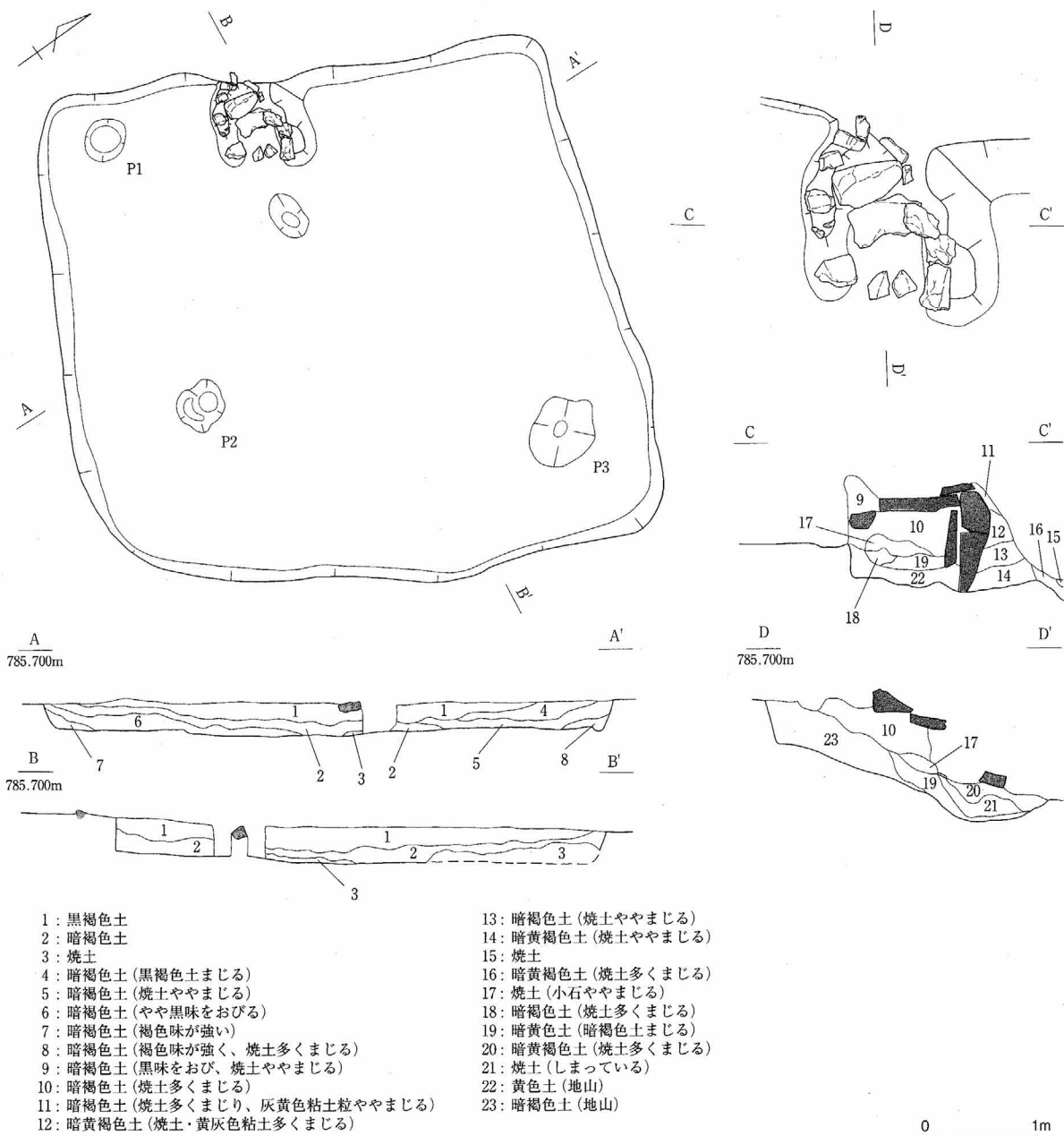


第29図 第2・3号住居址出土遺物

第4号住居址

この住居址はBE-103を中心にして出土している。4.7m×4.9mのやや歪んだ方形のプランを持つ住居址で、床面には硬化面が確認されている。この住居址は火災にあったのか、覆土中に焼土が混入し、床面にも東隅部を中心にして、焼土が確認されている。柱穴は明確に検出することができなかったが、P1～P3が考えられる。

カマドは住居址西壁中央に築かれている。断面の設定がうまくいっておらず、また、一部破壊されていたのか、左袖の状況をうまく捉えていないが、袖部には大型の偏平な割石を立てて、その外側に版築状に土を重ねている。また、袖石は大きな石の内側にひと回り小さい割石をたて、天井石の支えとしている。カマド床直上には焼土が出土しているが、その下層からも暗褐色系の土が出土しており、カマド築造時に一度掘り込んでから整地していることが伺える。また床面からは甕の破片を中心に小片が出土している（第32図）。



第30図 第4号住居址遺構平面図（カマド：S=1/30）

遺物

第32図がこの住居址から出土している遺物である。1・2は土師器坏である。1は口径12.5cm、器高3.6cmを測り、糸切り痕を残す。2は口径12cmであるが形体的には壺の可能性もある。

3は内黒土器の坏で、口径11.7cm、器高3.4cmである。内面のミガキは丁寧であるが、黒色処理は抜けている。

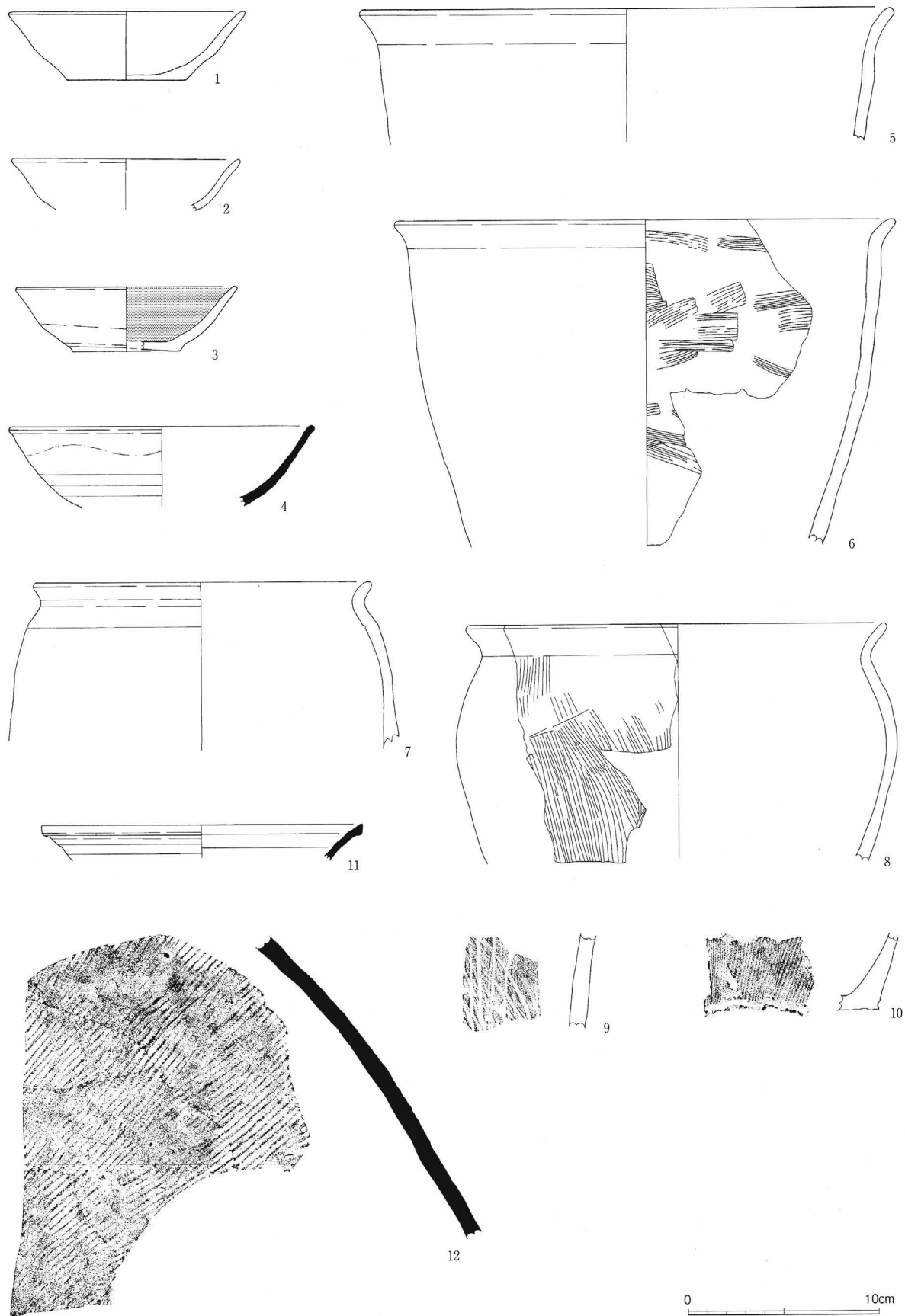
4は灰釉陶器碗である。口縁部の一部に漬掛け施釉が施されており、内面には自然降灰によると考えられる釉が薄く付着している。

5～10は甕の破片で、5・6は、比較的器壁が厚く、外面の整形技法はナデ調整が主体となっている。また、6は内面に横位のハケ調整がみられる。口縁部が短くつまみ上げるような形で折り返され、急に絞り込むように細く、しかも直線的に底部に至る器形である。7・8は長胴甕の上部である。7はナデ調整による整形を行っており、口縁部は短く折り曲げられるように立ち上がっている。8は肩が大きく張り出し、口縁部が短く折り曲げられるようにして作られている甕で、外面に縦位のハケ目調整が体部上部から行なわれており、頸部ではやや粗くなっている。9はやや粗いハケ目で縦位と斜位に施文し、内面にはナデ調整が施されている。10は長胴甕の底部で、下から上にむかってハケ目調整を施文している。11・12は須恵器甕の破片である。11は口縁部の破片である。12の外面には平行タタキ目が確認できる。

これらの遺物から、この住居址は8期と考えられる。



第31図 第4号住居址遺物出土状況図



第32図 第4号住居址出土遺物 (11: S=1/6)

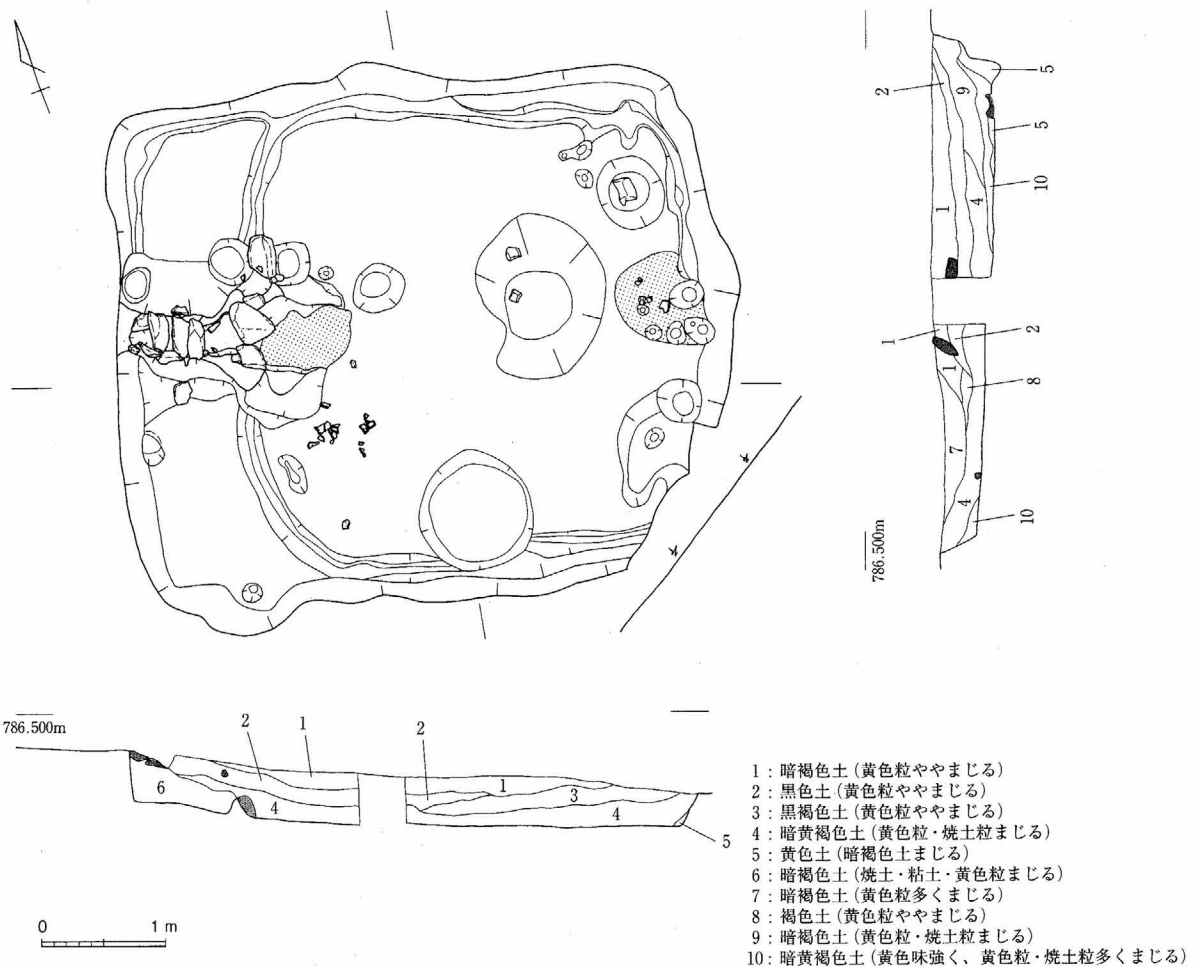
第5号住居址

この住居址はBN-94を中心に出土している。調査区の東境に出土したため、南西隅の一部が調査対象地区外となってしまった。遺構検出当初は5m×4.2mの長方形の住居址かと考えていたが、床面を精査している時点で内側に周溝が巡っていることが判明し、3.8m×4.2mの規模であった住居址を拡張していることが判明した。床面は拡張部を除いてほぼ全面にわたって硬化面が確認されている。

東の壁際に焼土が出土したことで、当初はこの地点にカマドが築かれていたことが確認できた。その後、カマドは西壁に築かれているが、カマドの総延長が1.9mと、他の住居址よりも規模が大きく、住居址の拡張部分は天井石がおかれた煙道とも考えられる構造を呈していることから、当初、この位置にカマドが存在し、拡張時に煙道をつくった可能性も考えられる。なお、カマドの粘土内から石等が出土していないことから、袖部は粘土のみによって築かれ、その上に天井石をのせたと考えられる。なお、焚口に焼土が厚く堆積していた。

柱穴は明確に検出できず、住居址南壁付近と、東部の焼土付近から土坑が出土している。これらの土坑がこの住居址に伴うものかは明確にできなかった。

遺物は拡張された部分の床付近からはほとんど出土しておらず、拡張以前の住居址の範囲内にとどまっている。これらの土器はほとんどが破片であり、図上でも器形を完全に復原できるものはほとんど出土していない。また、東部隅付近からは、鉄製品が3点重なるようにして床面から出土した(第37図3~5)。



第33図 第5号住居址遺構平面図

第IV章 遺構と遺物

遺物 (第36図、第37図)

第36図1～3・13は内黒土器である。口径はそれぞれ11.9cm・13cm・15cmである。なお、器形を完全に復原できる遺物がないため、器高は不明である。なお、3は黒色処理が抜け落ちている。

4・6～8・10は灰釉陶器碗、5は灰釉陶器皿である。器形からして7は皿の可能性もある。4は体部上半部に釉薬が掛けられ、内面には自然降灰と考えられる釉が付着している。6は漬掛け施釉と考えられ、底部に回転ヘラケズリが行なわれ、糸切り痕を消している。8は内・外面共に全面に釉薬が確認できる。なお、内面の上半部の釉は鹿子状を呈している。10はハケ塗り施釉と考えられ、底部は回転ヘラケズリが行なわれ糸切り痕を消している。ややゆがみの多い粗雑な碗である。また、残存している高台は図示しているもののみであるが、いずれも三日月高台である。5は内面は全面に施釉されており、外面にも上半部に施釉されている。この皿は漬掛け施釉と考えられる。

9は須恵器の坏である。胎土に異物が多く混入しており、粗い。この遺物は混入品の可能性が高い。

11・12・14は土師器坏である。11は口径14.6cm、器高4.5cm、12は口径11.6cm、器高4cmである。なお、11は器形的には内黒土器の可能性もあるが、内面にミガキが行われた痕跡がないため、土師器に分類している。いずれも底部に糸切り痕を残している。

第36図15～20・24、第37図1は甕である。第36図15・16は底部の破片で、15はナデ調整が行われている。

16は下部から上部に向かって縦位のハケ目調整を実施した後に最下部に横位のハケ目調整を行っている。



第34図 第5号住居址遺物出土状況図

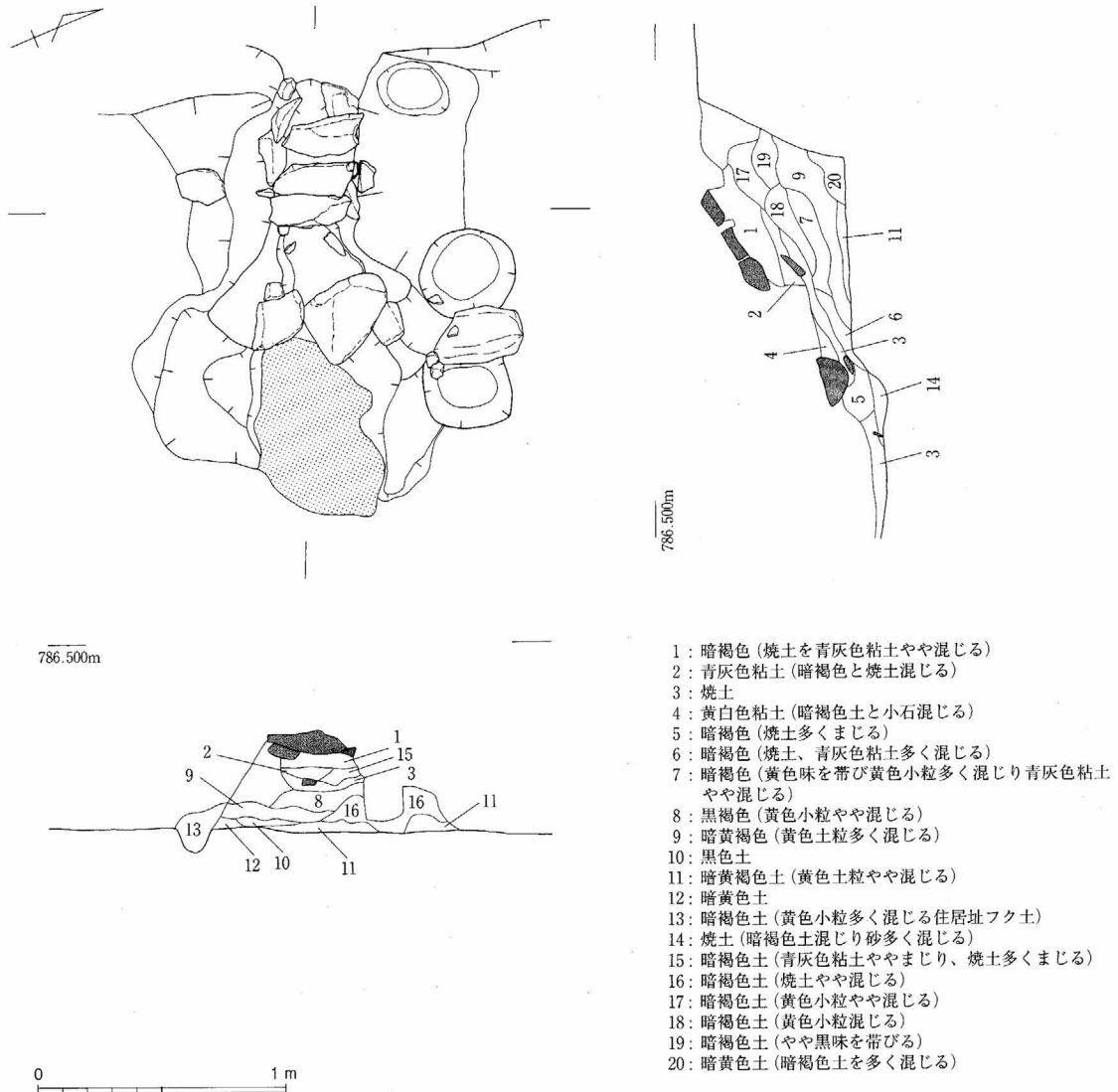
1. 住居址

第36図17は体部から「く」字状に口縁部が屈曲して直線上にひろがっており、口縁端部は玉縁状に作られている。第36図18は口縁部が体部から短くそして強く屈曲している器形である。体部は長胴になるのか、器形は明確でない。また、口縁部の一部に煤が付着している。第36図19は長胴甕の口縁部である。外面は体部を中心に縦位のハケ目調整を行っており、口縁部にも一部その痕跡をみることができる。内面の口縁部は横位のカキ目が施文されている。口縁部は短く立ち上がっている。第36図20・24もこの19と同タイプの甕と考えられる。第37図1は長胴甕の上半部である。体部の内・外面には縦位のナデ調整が施され、口縁部は指によって折り曲げられて作り出されており、指頭圧痕が確認できる。底部にむかって絞り込まれていくような器形の甕である。第36図21～23は須恵器甕の破片である。21・22は甕の口縁部である。両者とも口径約42cmを測る。23は体部破片で平行タタキ目がみられる。

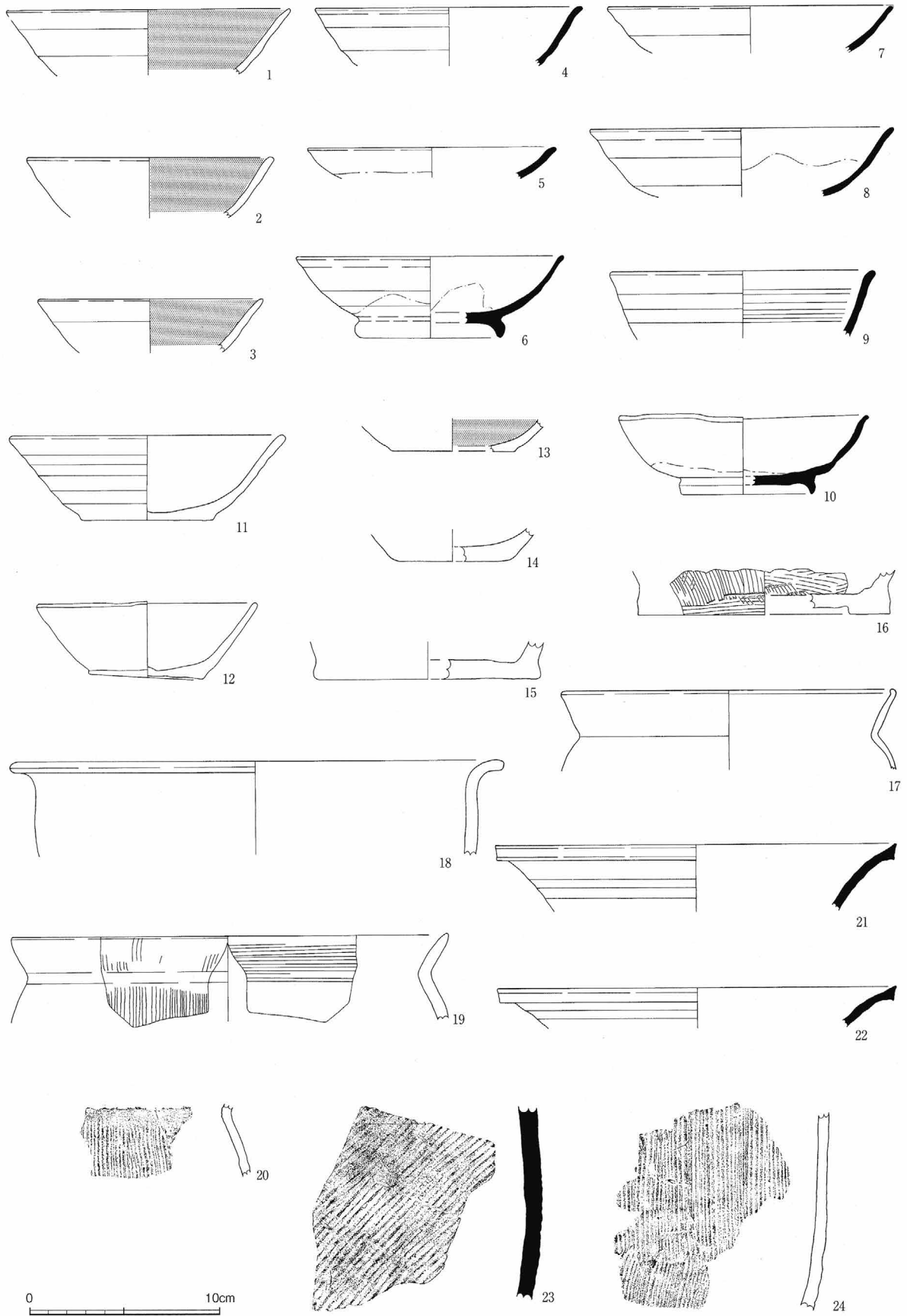
第37図2は、菰手石である。覆土中から1個出土している。

第37図3～6は鉄製品である。これらは住居址の床面から一括して出土したものである。3・4は鎌である。いずれも刃先が欠損している。また、着柄用の折り返しが通常とは反対に折り曲げられている。5は鐙と考えられ、踏込みを固定する部分が一部欠損している。6は鉄鎌である。刃部の一部が欠損している。

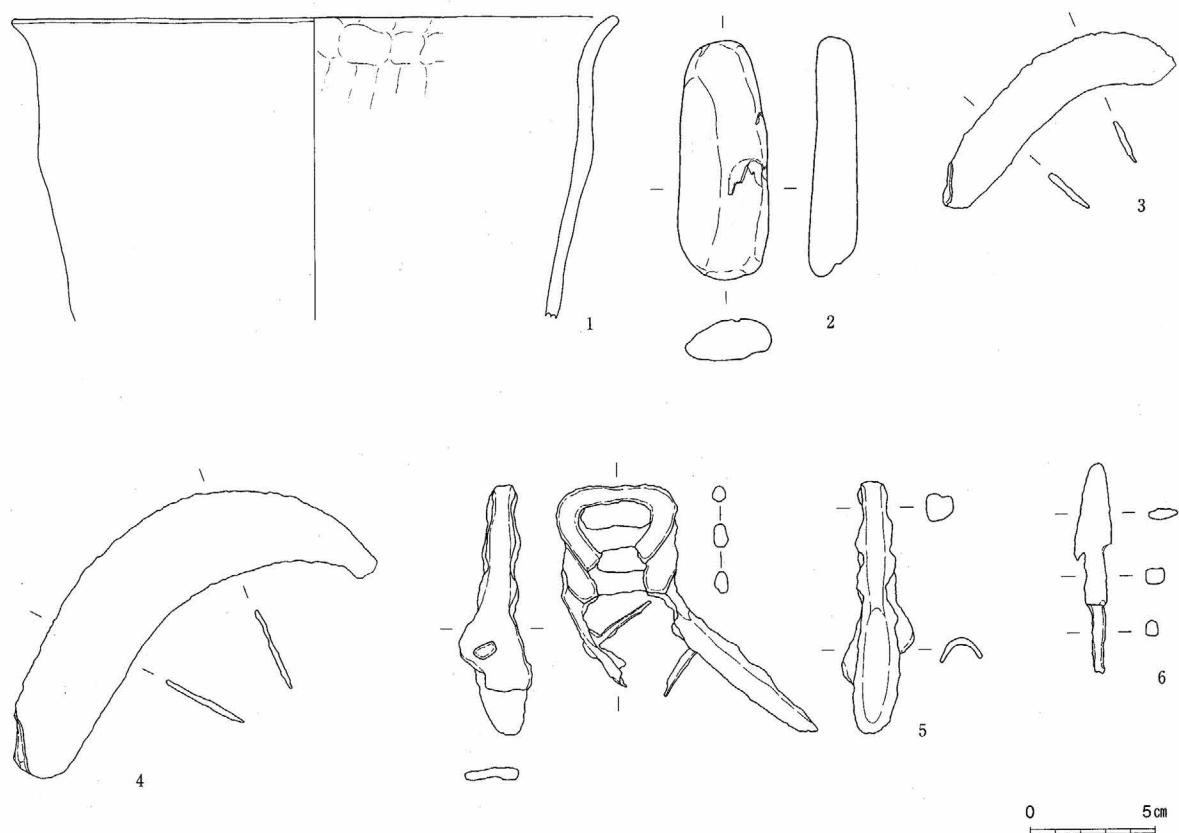
これらの遺物から、この住居址は8期と考えられる。



第35図 第5号住居址カマド遺構平面図



第36図 第5号住居址出土遺物 (21・22 : S = 1/6)



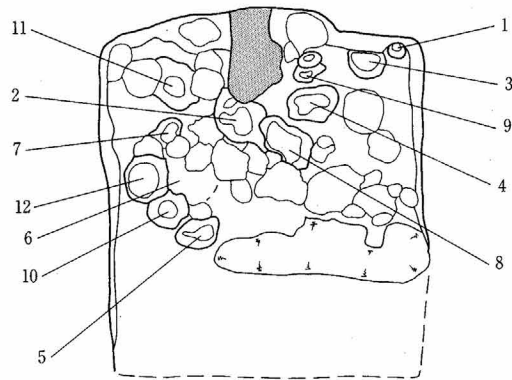
第37図 第5号住居址出土遺物

第6号住居址

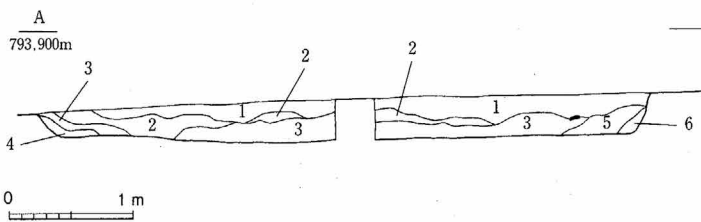
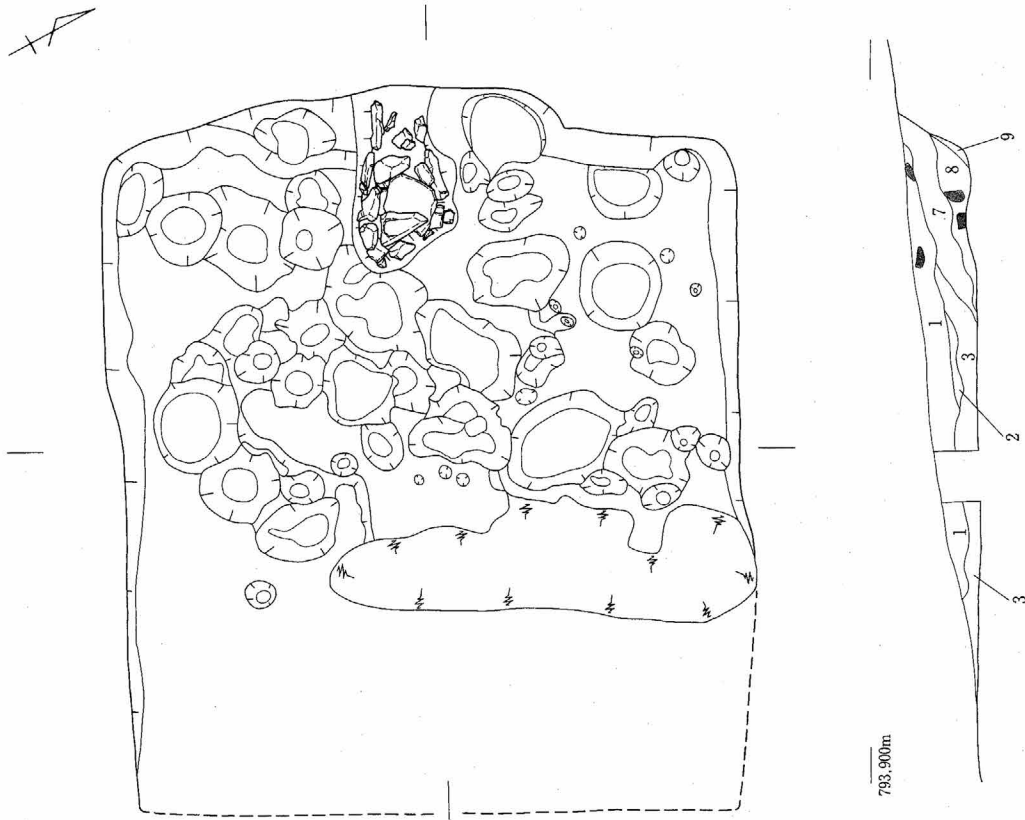
この住居址は、AU-58を中心として出土し、今回の調査区域内で最も標高の高い地点からの出土となっている。規模は一辺5.2m程の方形と考えられるが、傾斜がきついため、斜面下側の壁（東壁）は確認されず、さらに耕作によるカクランが一部で見られる。覆土は他の住居址よりも黒色系の土が多く堆積していた。また、調査中には覆土中からも多量の遺物が出土し、この住居址から出土した遺物は注記できた破片数で1,275片を数えた。床は北壁付近を中心に硬化面が確認されているが、カクランより東部では一部に硬化面が確認できる程度である。

カマドは、西壁から出土しており、石組みのカマドであった。袖に使用した石はカマド築造時の形体をとどめていたが、平石で組まれていたと考えられる天井石は崩れてきているようで、石の下層から焼土（焚口）が検出されている（第40図）。また、カマドの両脇の壁を掘り込むようにしてテラス状の遺構も出土し、遺物も出土している。なお、カマド左側の土坑11では焼土が多量に出土しており、灰捨て土坑と考えられる。柱穴は特定することができなかった。

この住居址は床面からも遺物が多量に出土し、床面を掘り下げると、小規模な土坑が遺物を伴って多数出土している。これらの土坑の内、カマド前付近の土坑2からは29片、土坑4からは25片、土坑8からは2片が出土している。また、焼土が出土した土坑11では12片出土している。しかし、発掘調査中に覆土出土として多量に取り上げているので、この土坑付近ではこの数字以上に遺物が出土している。なお、これらの土坑から出土した遺物は小片が多く、実測に耐えうる資料はなかった。このため、本報告書には掲載していない。



第38図 住居址床下出土土坑番号



- 1: 黒色土 (黄色粒ややまじる)
- 2: 黒色土 (黄色粒多くまじる)
- 3: 黒褐色土 (黄色粒・焼土多くまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色土粒・焼土多くまじる)
- 6: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 7: 黒褐色土 (黄色粒・焼土ややまじる)
- 8: 黒褐色土 (黄色土まじる)
- 9: 黄色土

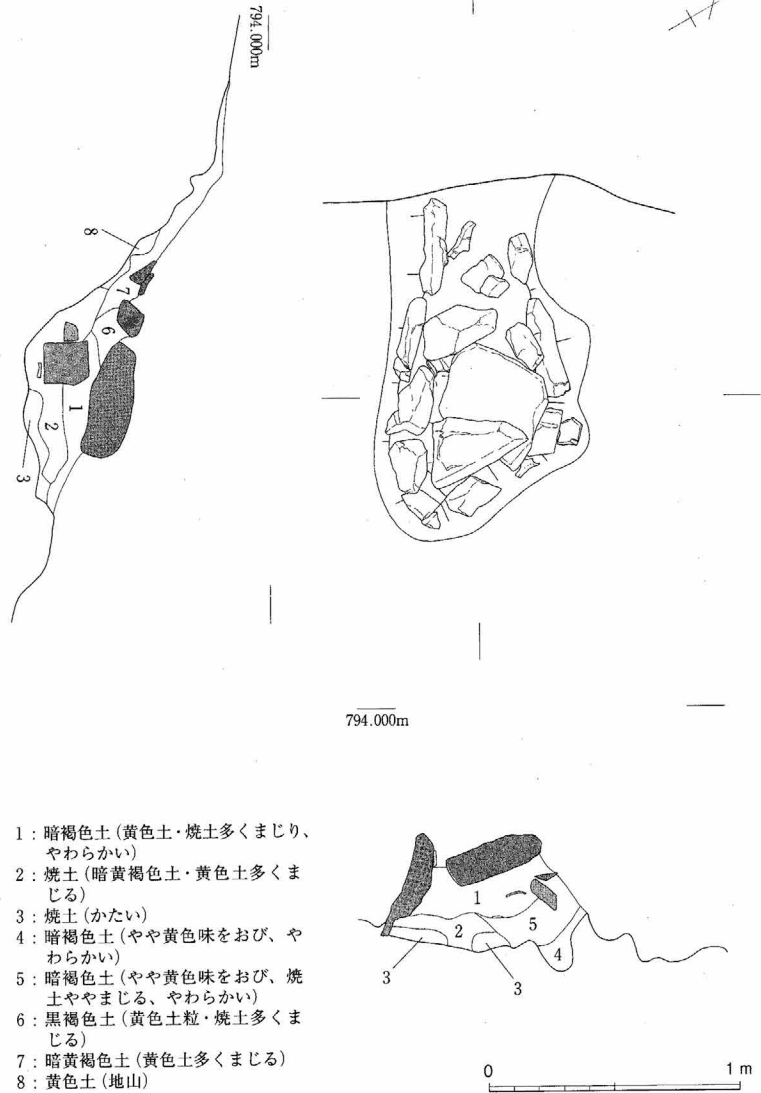
第39図 第6号住居址実測図

遺物 (第43図～第50図)

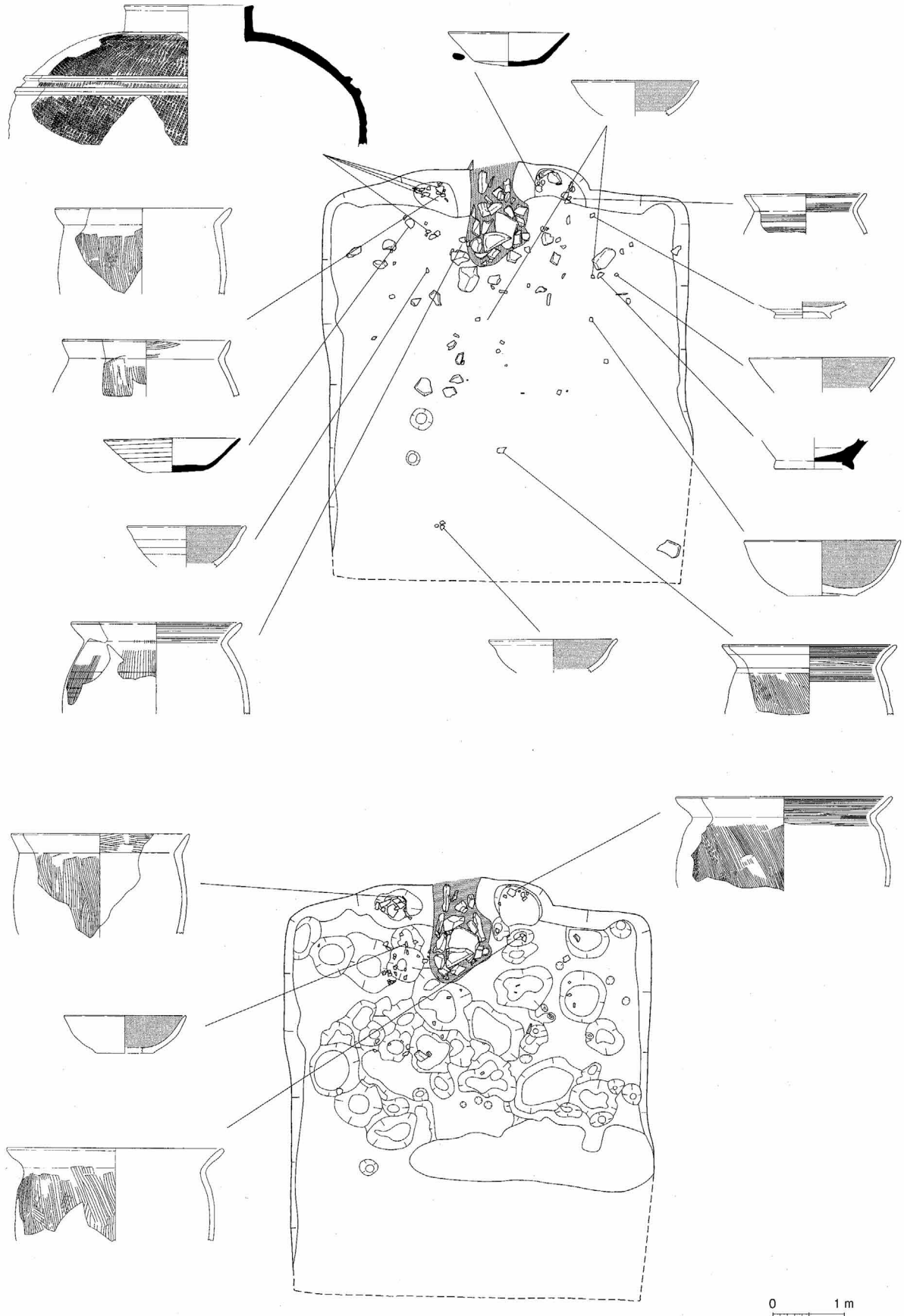
第43図は内黒土器である。ほとんどが小片からの復原のため、底部を欠損しており、器形を判別できるものは少ない。3・8・10・12・14・16～22・24・26が床面付近および住居址覆土からの出土である。口径11.7cm～14.2cm、器高3.8cm～4.2cmと、口径15cm～16.7cm、器高5.9cm(24)の2法量がある。また、床下層の土坑内出土遺物(1・2・9・12・23・25)では、口径13cm～13.5cm、器高4.1cm前後の土器と、口径16.1cm前後の2法量に分類できる。なお、16・17・23・26は黒色処理が抜けている。第44図～第46図7は長胴甕である。第44図1・3・6・9、第45図9はカマド脇のテラスからの出土である。口縁部が直線的でやや長く立ち上がる器形である。外面には頸部付近までハケ目調整が施され、口縁部の内面には横位のカキ目が施文される。

第44図2・7・第45図4・8・10は床直上付近および、覆土での出土である。口縁部は直線的に長く立ち上がり、口縁部外面のヨコナデが体部の上端部にかかり、ハケ目をナデ消している。内面のカキ目は体部にまで達している個体もある。第45図7・11、第46図2・3・5・7・12は床下土坑からの出土である。床面付近の甕よりも若干口縁部の屈曲が弱い傾向が伺えるが、やはり口縁部外面のヨコナデが体部上部にかかり、ハケ目をナデ消している。また、内面に施されているカキ目も体部上部まで及んでいる個体もある。また、第44図10は他の甕と異なり、口縁部の屈曲も短く、弱い。また、ハケ目調整もハケ目の太い工具で施されており、全体的に粗雑な印象をうける。第46図8～11は小型甕である。いずれも体部に横位のカキ目が施されている。

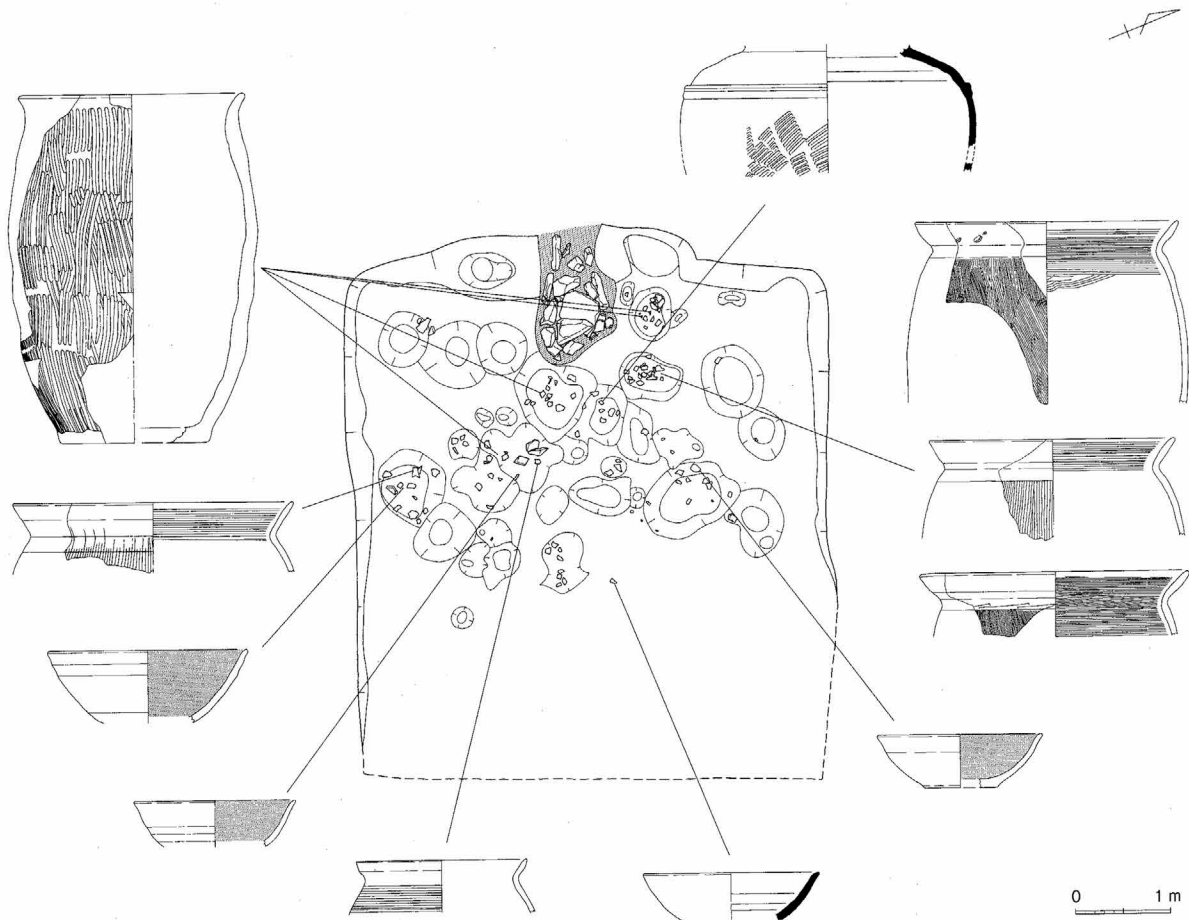
第46図12・13・第47図1は須恵器甕である。第46図12・13は1条の突帯を有し、平行タタキ目が見られる。内面には当て具の痕跡は確認できない。長頸の甕と考えられる。第47図1は短頸の甕である。外面には格子目タタキが施されており、内面には平行沈線状の当て具の痕跡が残されている。外面には2条の突帯を有する。これらの甕は破片のため耳の存在は確認できない。第46図14～16は須恵器坏である。14は胎土に混入物が多く粗雑な印象を受ける。15の底部はヘラ切りであり、ヘラ状工具による記号と墨書が、見込部にはらせん状の墨書が確認できる。16は軟質須恵器である。17は須恵器壺の底部と考えられ、糸切り痕を留めている。



第40図 第6号住居址カマド実測図



第41図 第6号住居址遺物出土状況図 (1)



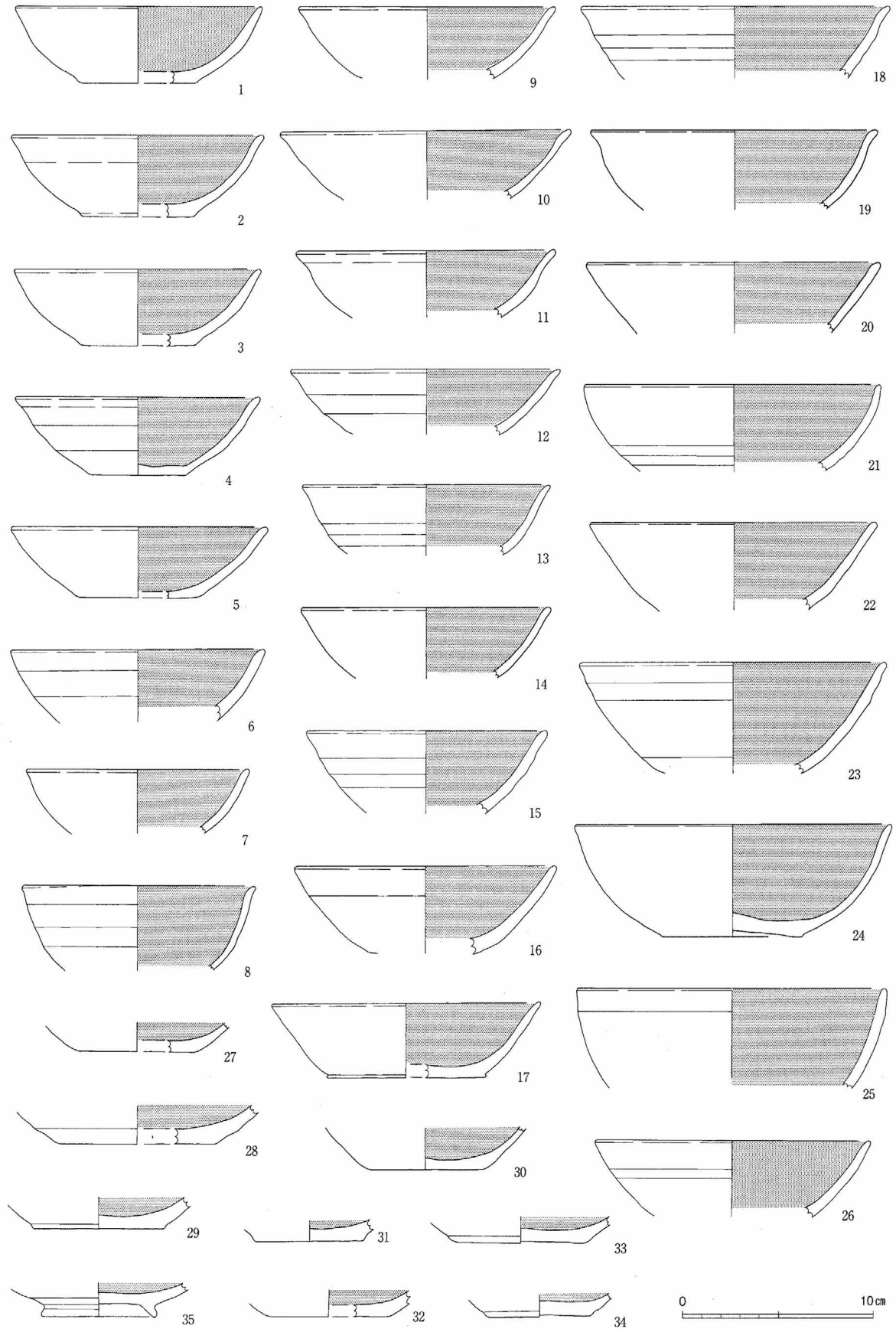
第42図 第6号住居址遺物出土状況図 (2)

第47図2～第48図17は住居址床面から床面直上より出土している甕の破片である。第47図8・11・第48図15・16は須恵器甕、第48図7は小型甕、他は長胴甕である。長胴甕はすべて体部の破片で、縦位のハケ目調整が施されている。小型甕には横位のカキ目が見られる。

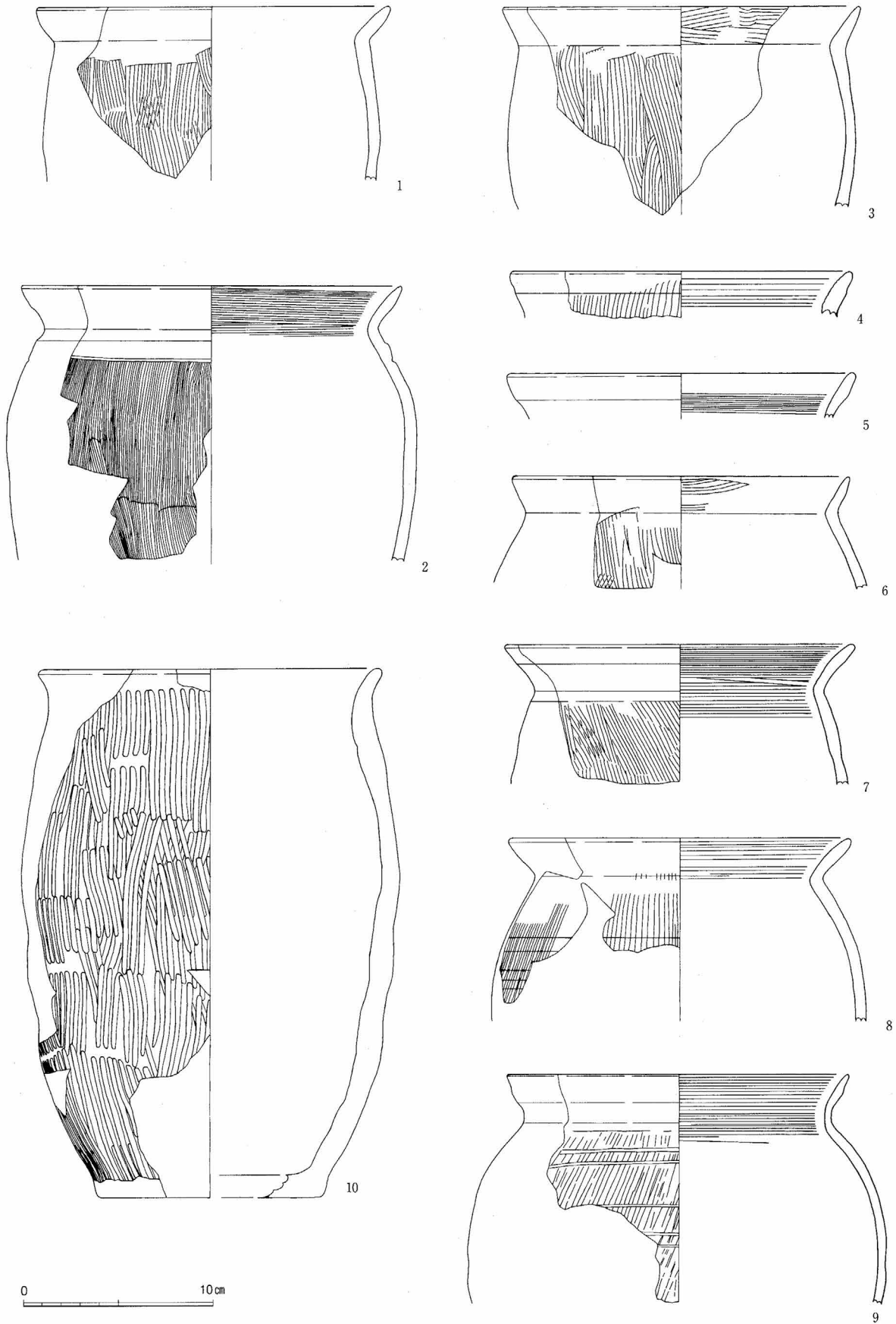
第48図18～第50図26は、床下層の土坑から出土している甕である。第49図2・3・14、第50図15は須恵器甕の体部破片である外面には平行タタキ目が見られる。また、内面には当て具の痕跡は見られない。第48図25・27・28、第49図13、第50図2・25・26は小型甕の破片である。小型甕の外面には横位のカキ目がある。その他の破片は長胴甕の体部である。長胴甕は外面に単位の長いハケ目が縦位に施されているものがほとんどである。これらのハケ目は深く施文されているものが多いが、第48図19のようにより細かいハケ目で浅く施文しているものも見られる。その他第49図11は、縦位のナデが行われている。第49図17は目の粗いハケで縦位に浅く施文しており、ハケ目の太さも、多くの甕のハケ目よりも細い。また、内面にも無秩序な方向にハケ目調整が施されている。

第50図27～31は鉄器である。27・28は薄い板状の製品の一部であり、用途は不明である。29は釘の体部である。頭部と先端部は欠損している。30は刀子である。峰部側の棟区に刃部との境界の段差があり、刃区は明確に確認できない。なお、中心尻が欠損している。31は刀子の基部である。刃部は欠損している。

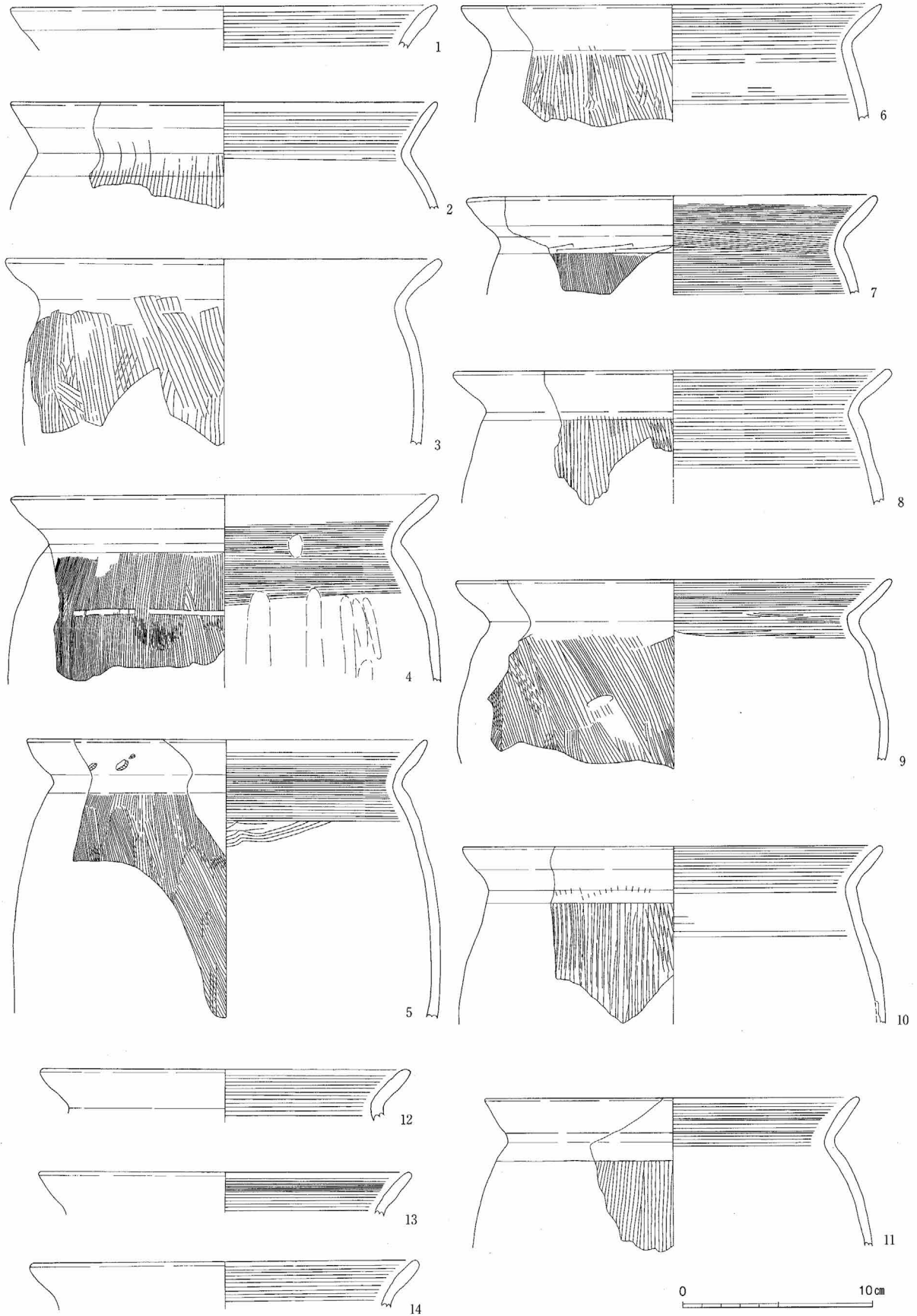
出土した土器から、この住居址は7期と考えられる。



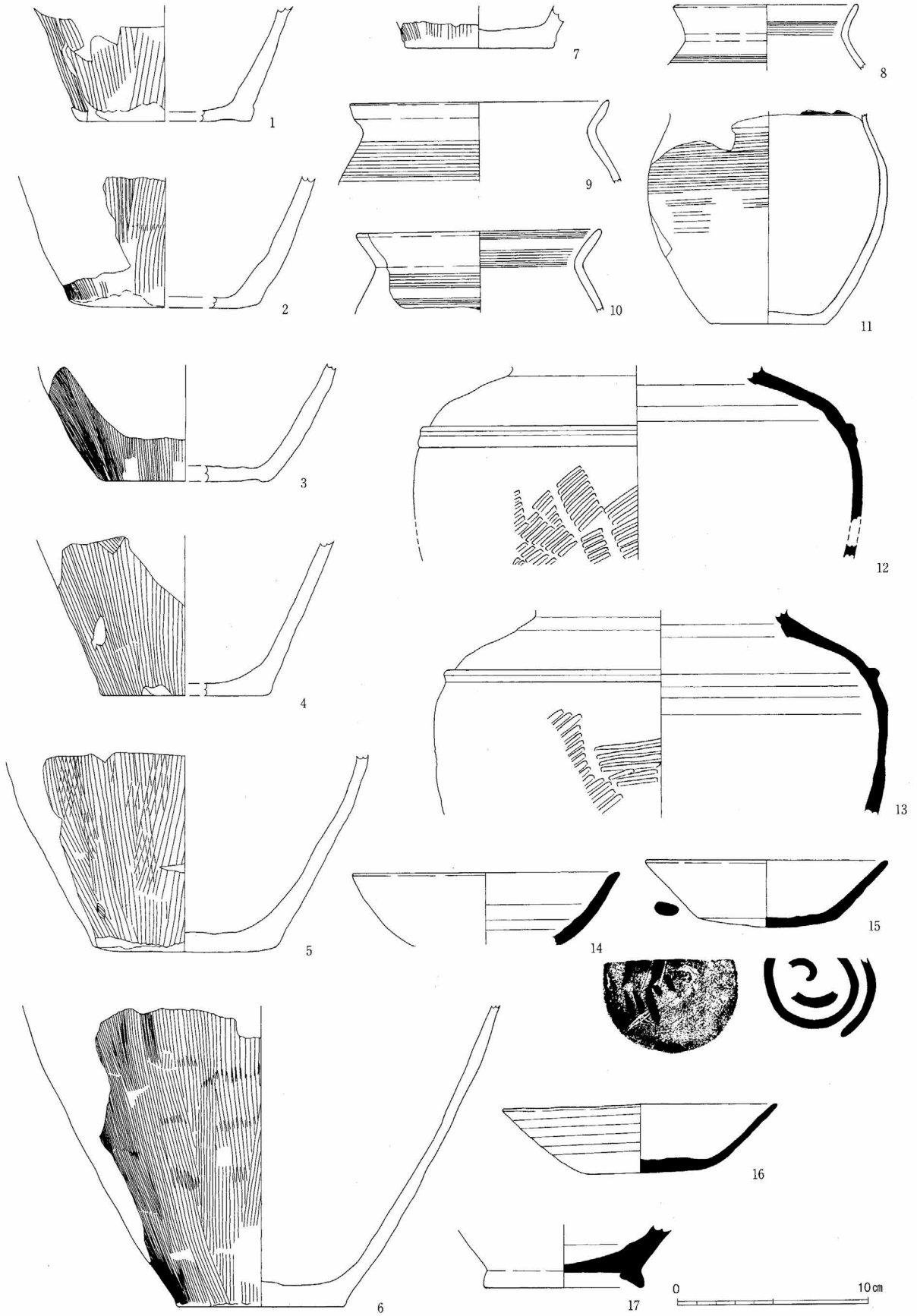
第43図 第6号住居址出土遺物 (1)



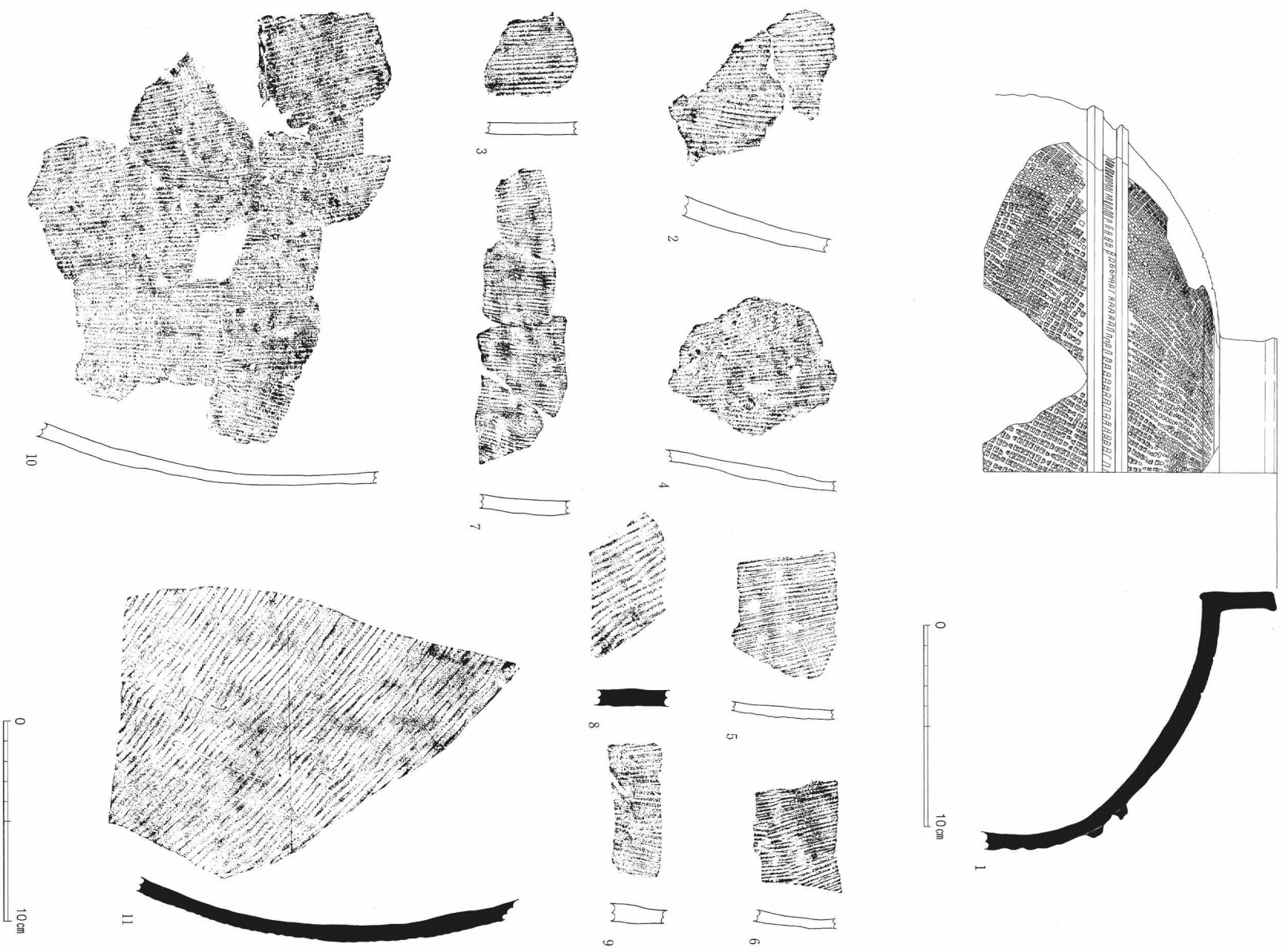
第44图 第6号住居址出土遺物 (2)



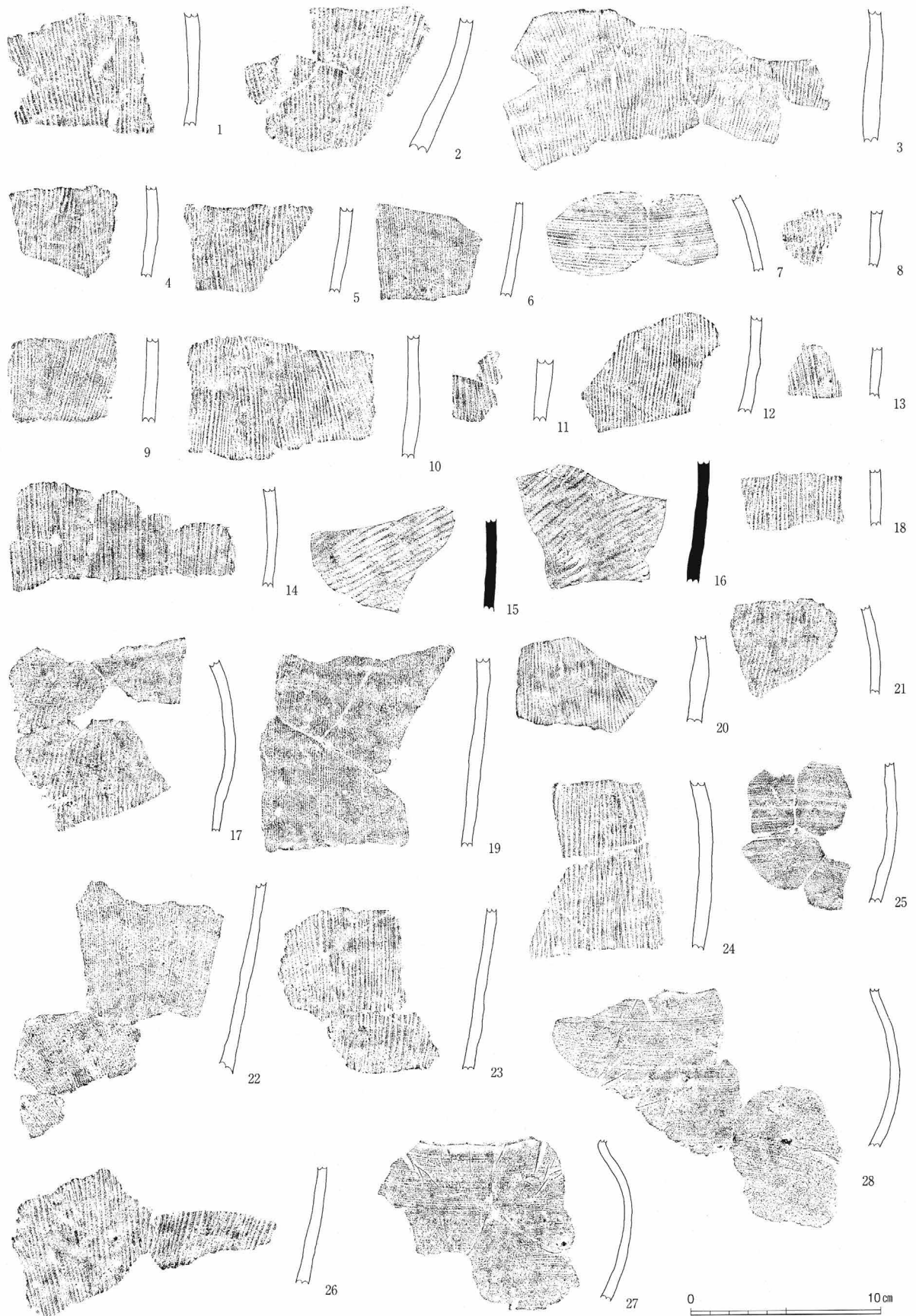
第45図 第6号住居址出土遺物 (3)



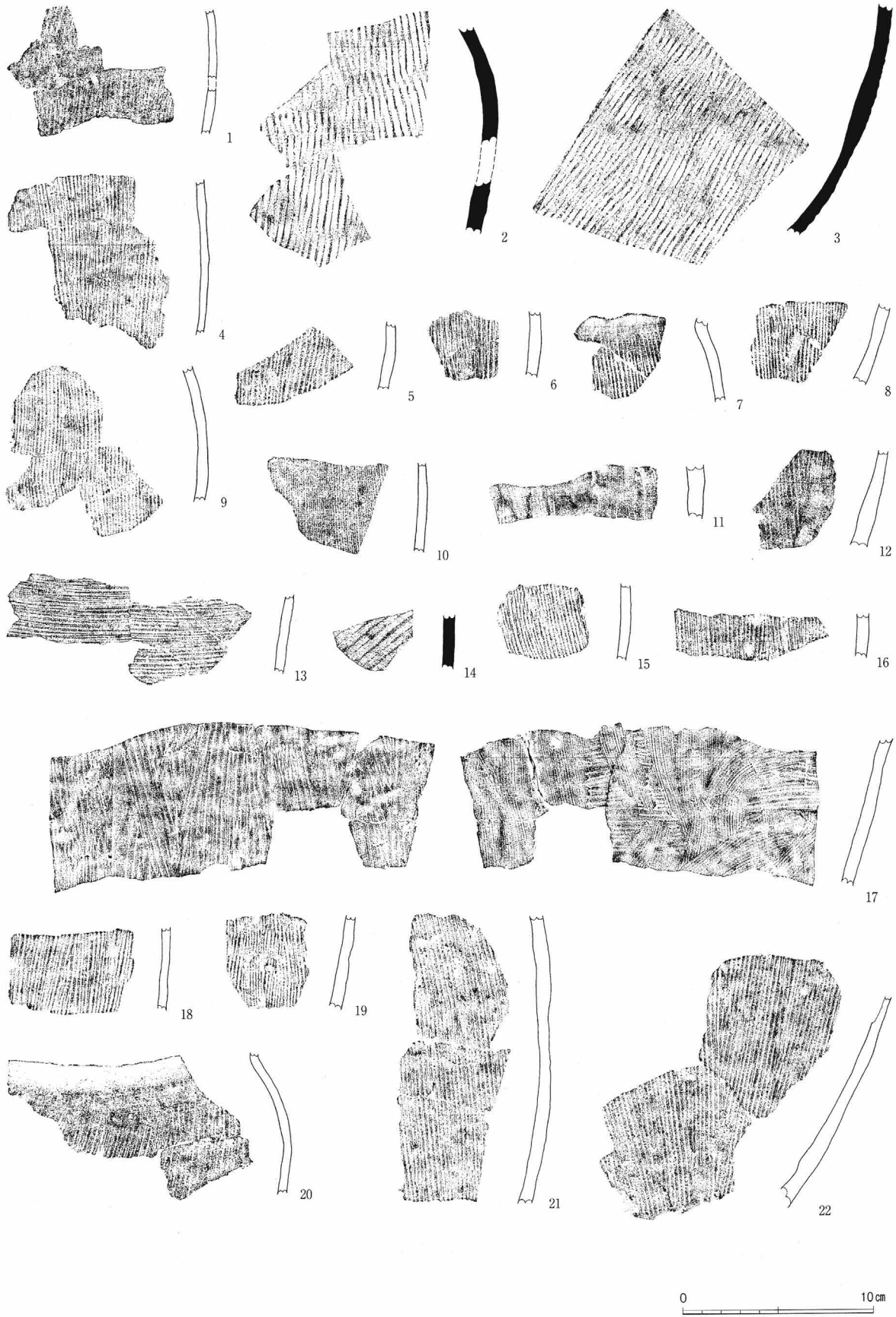
第46图 第6号住居址出土遺物 (4)



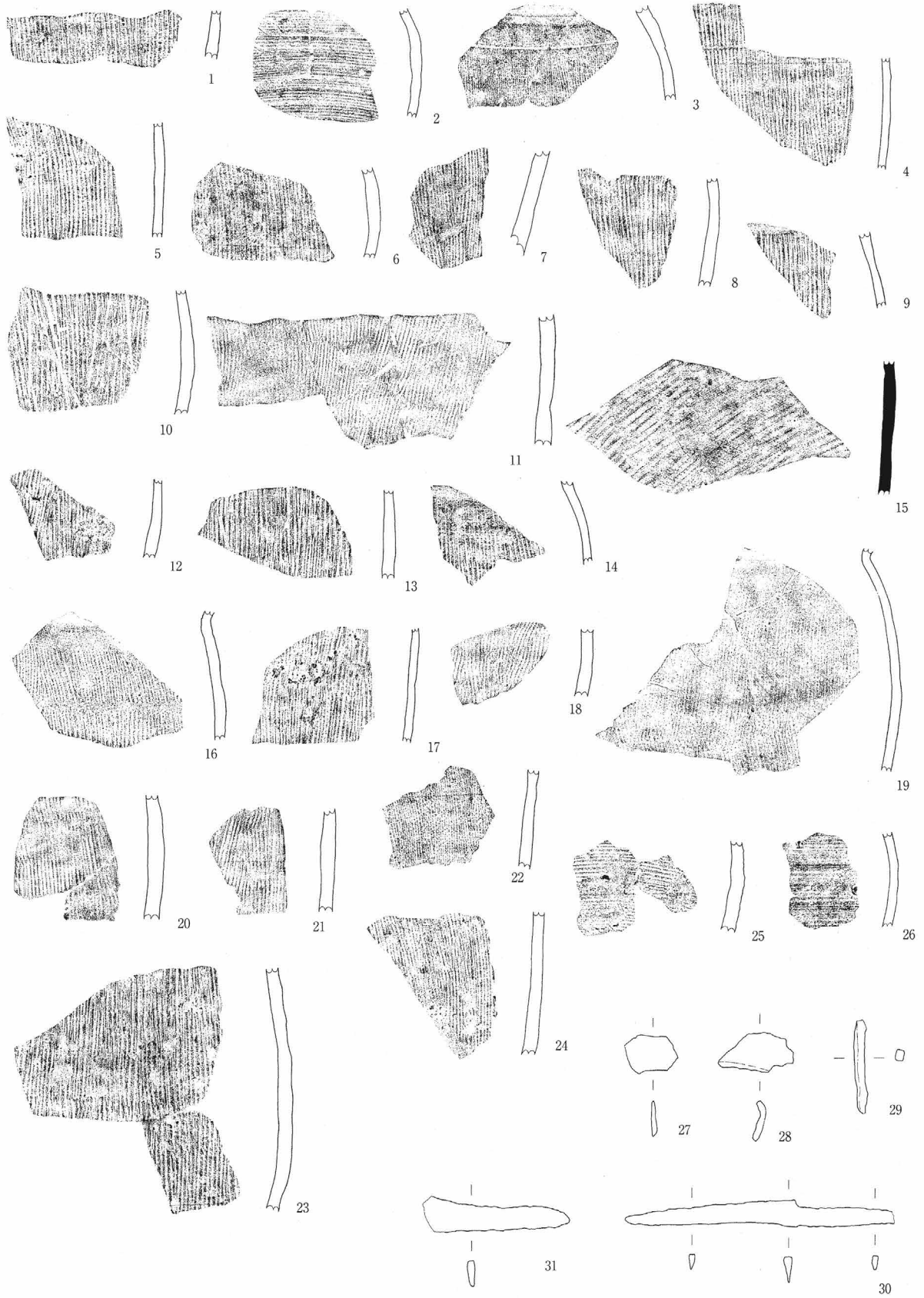
第47図 第6号住居址出土遺物 (5)



第48图 第6号住居址出土遺物 (6)



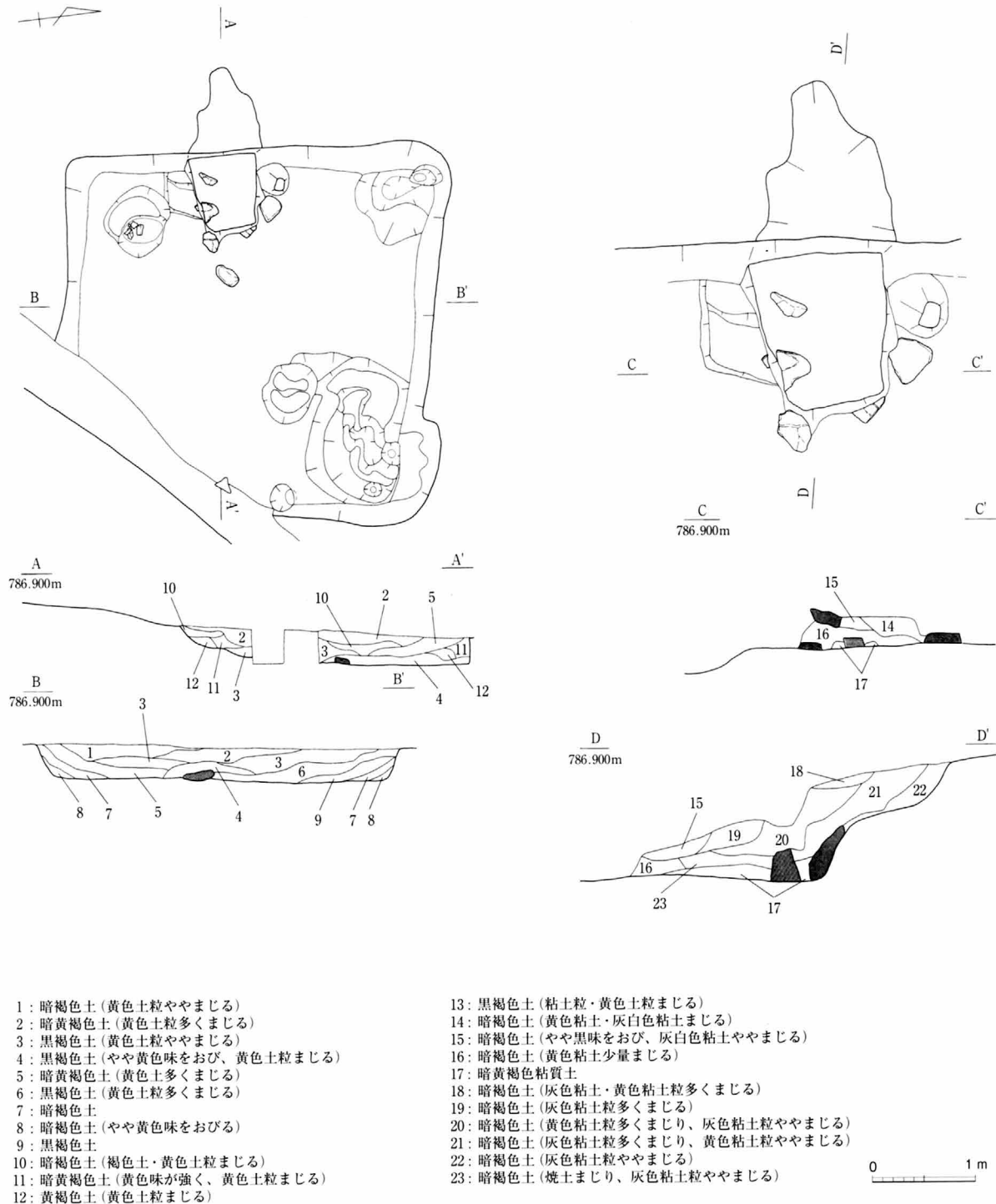
第49図 第6号住居址出土遺物 (7)



第50图 第6号住居址出土遺物 (8)

第8号住居址

この住居址はBQ-89を中心として出土している。3.6m×3.7mの正方形のプランを持ち、深さは約30cmであった。また、南壁は一部調査区域外となっており住居址全体を調査することはできなかった。床面のほぼ全面に硬化面が確認されたが、柱穴は明確に確認できなかった。カマドは灰色粘土を中心に構築されているが、



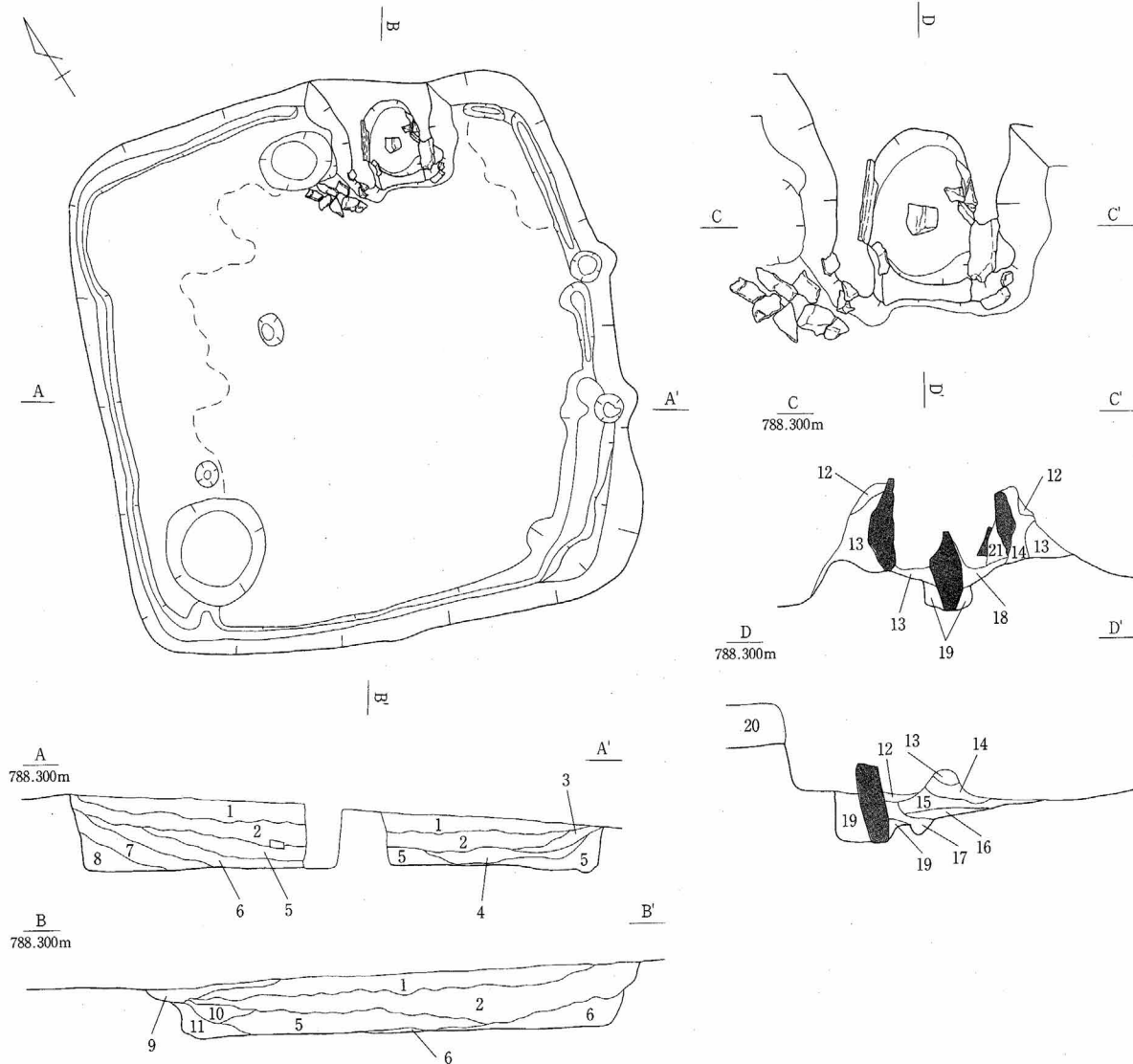
第51図 第8号住居址実測図 (カマド: S=1/30)

1. 住居址

カマドの支柱石と、壁際に平石が設置されてあるのが確認できたのみで、カマド自体の遺存状況は良くなかった。また住居址北西隅と北東隅からは、土坑も出土している。また、住居址床面付近からは礫が出土しており、遺物の出土は少なく、図示できたのは第54図1のみである。

遺物

第54図1が、第8号住居址から出土した小型甕である。口縁部の円周から推定して復原しているため、図面の口径がやや小さい可能性がある。体部の外面と口縁部の内面には横位のカキ目が施されている。



- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1: 黒褐色土 | 12: 暗褐色土(暗黄色土粒多くまじる) |
| 2: 暗褐色土 | 13: 暗黄色土(砂質、やわらかい) |
| 3: 暗黄褐色土(炭・黄色小粒ややまじる) | 14: 暗褐色土 |
| 4: 暗黄褐色土(黄色味が強く、黄色粒・焼土粒まじる) | 15: 焼土(黄色味がかる) |
| 5: 暗褐色土(やや黒味をおび、黄色小粒ややまじる) | 16: 焼土 |
| 6: 暗褐色土(やや黒味をおび、黄色小粒まじる) | 17: 黄色土 |
| 7: 黒色土(黄色小粒ややまじる) | 18: 暗黄褐色土(焼土ややまじり、やわらかい) |
| 8: 暗褐色土(黄色土・黄色小粒多くまじる) | 19: 暗黄色土(褐色味をおび、やわらかい) |
| 9: 暗褐色土(黄色味をおびる) | 20: 暗褐色土(暗黄色土まじり、やややわらかい) |
| 10: 暗黄褐色土(黄色粒多くまじる) | 21: 暗褐色土(黄色土多くまじり、やわらかい) |
| 11: 暗褐色土(黄色味をおび、黄色粒多くまじる) | |

0 1 m

第52図 第9号住居址実測図(カマド:S=1/30)

第9号住居址

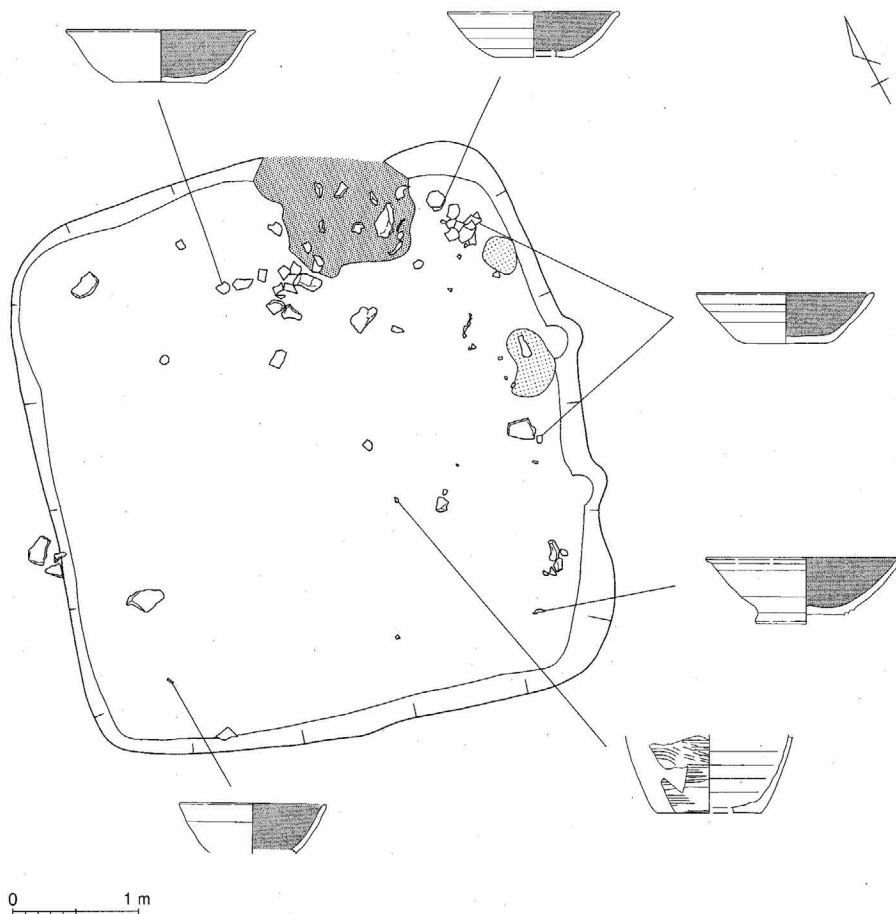
この住居址はBE-82付近から出土している。プランは4.7m×4.2mで、深さ50cmを測る。住居址壁際をのぞいて硬化面が確認できたが、柱穴は明確に検出されなかった。カマド右脇と、西隅壁際には土坑が出土しており、カマド左袖からは用途不明の石が出土している。また、周溝は住居址内の周囲を全周しており、なかでも東壁際には周溝の切れている地点があり、ピットがその途切れた周溝の両端部付近から検出されていることから、出入りするための施設がこの付近に存在している可能性が高い。

カマドは北壁のやや東に寄った地点から検出されている。このカマドは、暗黄褐色系の土が主体となって構成されており、遺存状況も良好である。カマド自身は粘土を中心として築かれているが、煮炊具を乗せる部分には平石を立て、その外側を暗黄色系の土で固定しており、さらにカマド中央部には支柱石を設置して、カマド内に煮炊具が落ちないように構成となっている。また、焚口付近の外部には暗褐色系の土が盛り上げられ、焚口内の灰等が床面に散乱するのを防ごうとする意図が伺える。なお煙道は検出されていない。

この住居址からは、カマド付近を中心とした床面付近や、覆土中から内黒土器が出土している。

遺物 (第54図～第55図)

第54図2～23は内黒土器である。4・14・22・23は碗、その他は坏と考えられる。坏は14cm～15.2cmと、16.1cm～16.2cmの2法量である。器高は口径の小さい坏で3.6cm～4.5cmである。口径の大きい坏は底部が欠損し



第53図 第9号住居址遺物出土状況図

第9号住居址

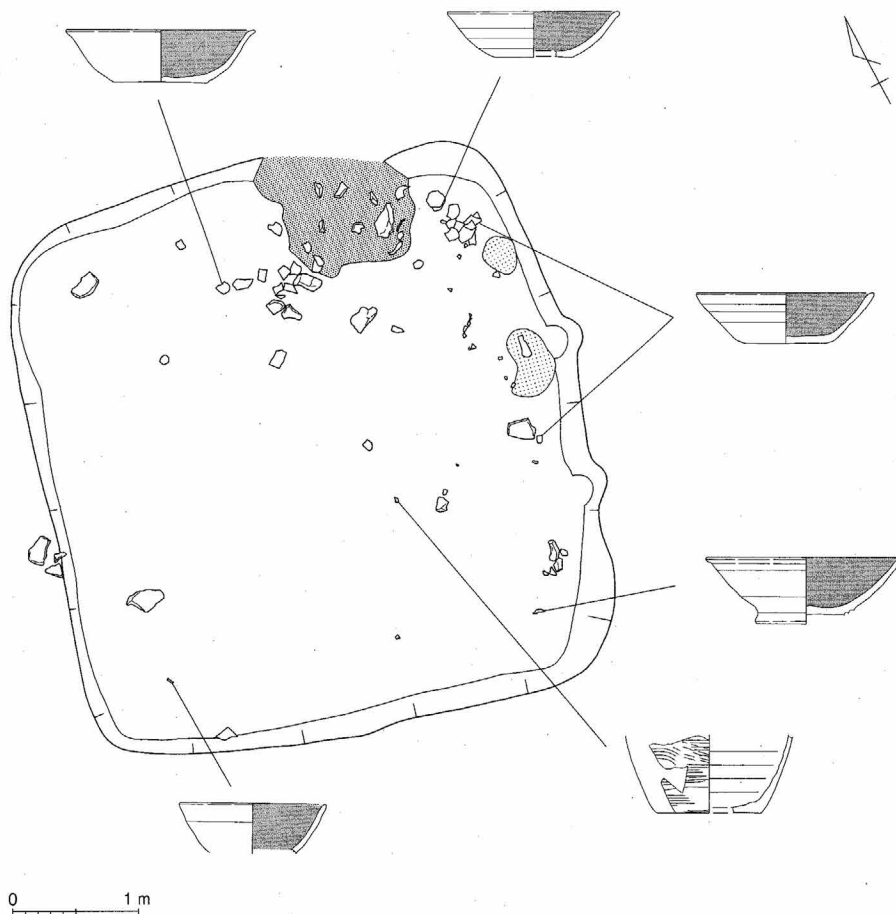
この住居址はBE-82付近から出土している。プランは4.7m×4.2mで、深さ50cmを測る。住居址壁際をのぞいて硬化面が確認できたが、柱穴は明確に検出されなかった。カマド右脇と、西隅壁際には土坑が出土しており、カマド左袖からは用途不明の石が出土している。また、周溝は住居址内の周囲を全周しており、なかでも東壁際には周溝の切れている地点があり、ピットがその途切れた周溝の両端部付近から検出されていることから、出入りするための施設がこの付近に存在している可能性が高い。

カマドは北壁のやや東に寄った地点から検出されている。このカマドは、暗黄褐色系の土が主体となって構成されており、遺存状況も良好である。カマド自身は粘土を中心として築かれているが、煮炊具を乗せる部分には平石を立て、その外側を暗黄色系の土で固定しており、さらにカマド中央部には支柱石を設置して、カマド内に煮炊具が落ちないように構成となっている。また、焚口付近の外部には暗褐色系の土が盛り上げられされており、焚口内の灰等が床面に散乱するのを防ごうとする意図が伺える。なお煙道は検出されていない。

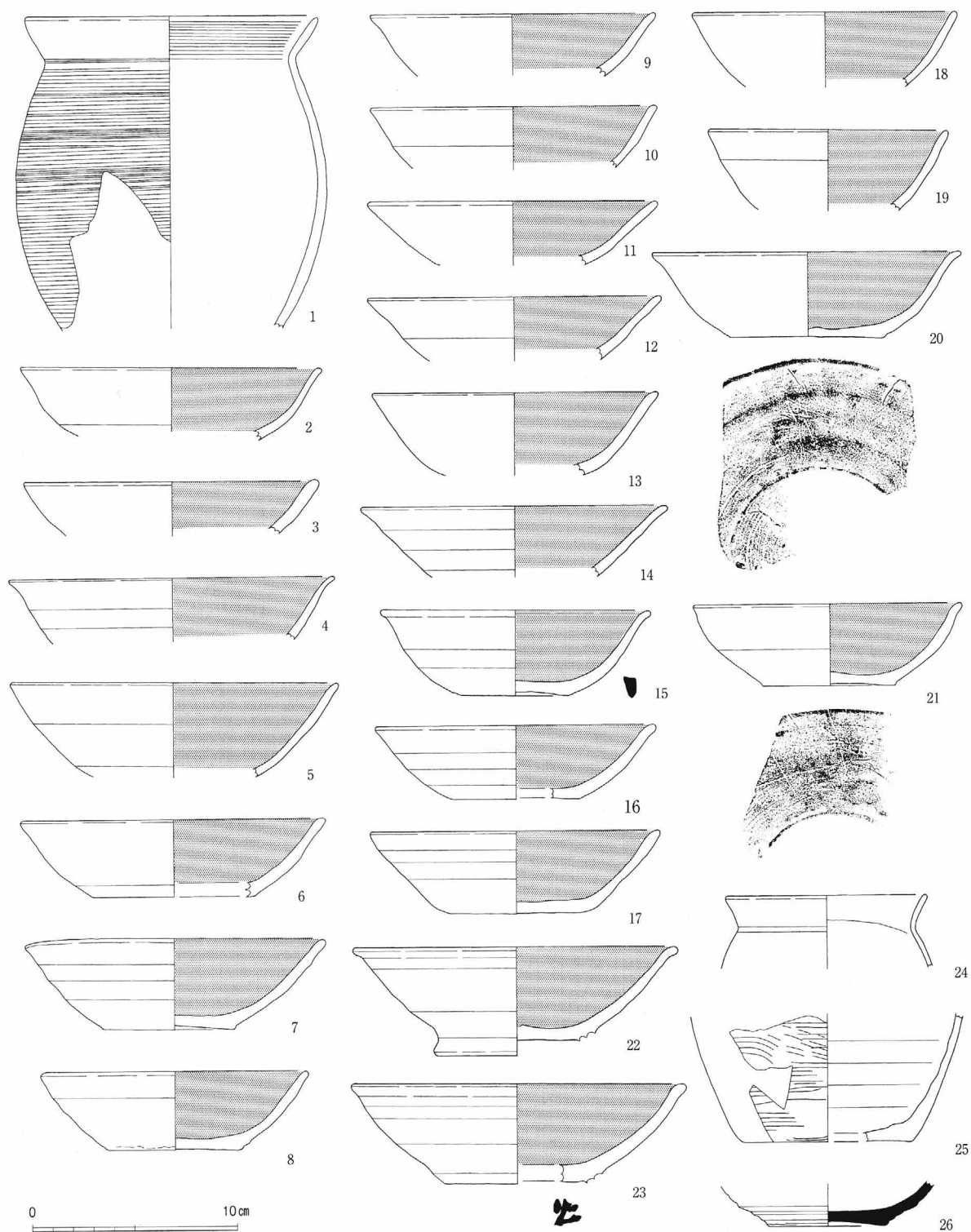
この住居址からは、カマド付近を中心とした床面付近や、覆土中から内黒土器が出土している。

遺物 (第54図～第55図)

第54図2～23は内黒土器である。4・14・22・23は碗、その他は坏と考えられる。坏は14cm～15.2cmと、16.1cm～16.2cmの2法量である。器高は口径の小さい坏で3.6cm～4.5cmである。口径の大きい坏は底部が欠損し



第53図 第9号住居址遺物出土状況図



第54図 第8号・第9号住居址出土遺物 (1:8住、2~26:9住)

第IV章 遺構と遺物

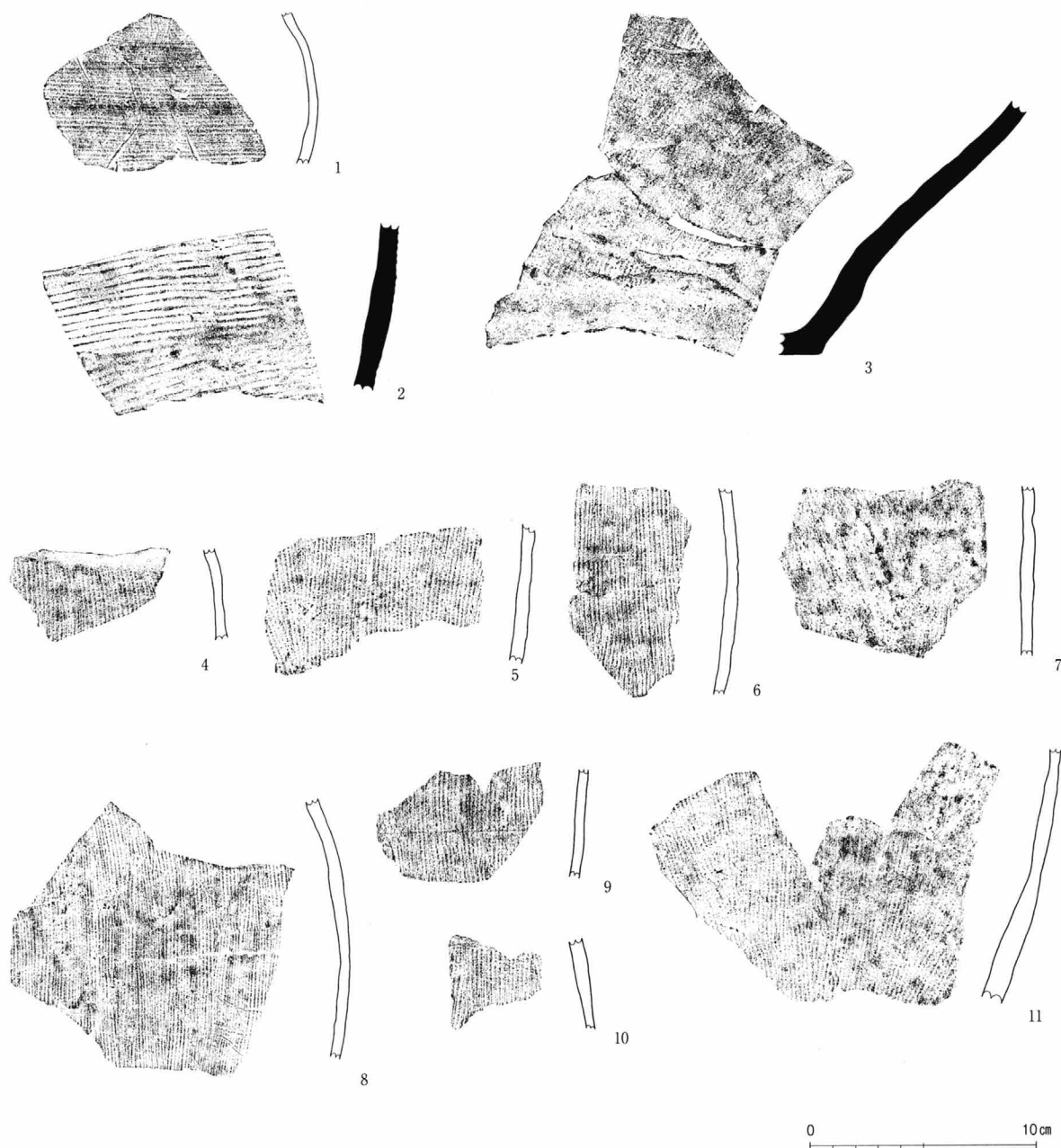
ており器高は不明である。なお、7は外面上半部に、16は外面上部に煤が付着している。また、15には体部の欠損部分に墨書が確認でき、20・21の体部外面にはヘラ状工具によるとみられる刻書が確認できる。壺は22で口径16cm、器高5.4cm（体部は4.6cm）、23は高台が欠損しており、器高は不明であるが、口径16.6cm、体部高は5cmである。なお、体部中部に墨書が確認できる。これらの内黒土器のうち、5・19は黒色処理が抜けている。

第54図24・25及び第55図1～3は甕の破片である。第54図24は口径9.8cmで、全面にナデ調整が施されている。25は外面に横位のハケ目調整が施されている。

第55図1は、土師器小型甕の破片で、外面に横位のカキ目が施されている。

2・3は須恵器の甕である。3は底部の破片である。第54図26は軟質須恵器である。

これらの出土遺物から7期と考えられる。

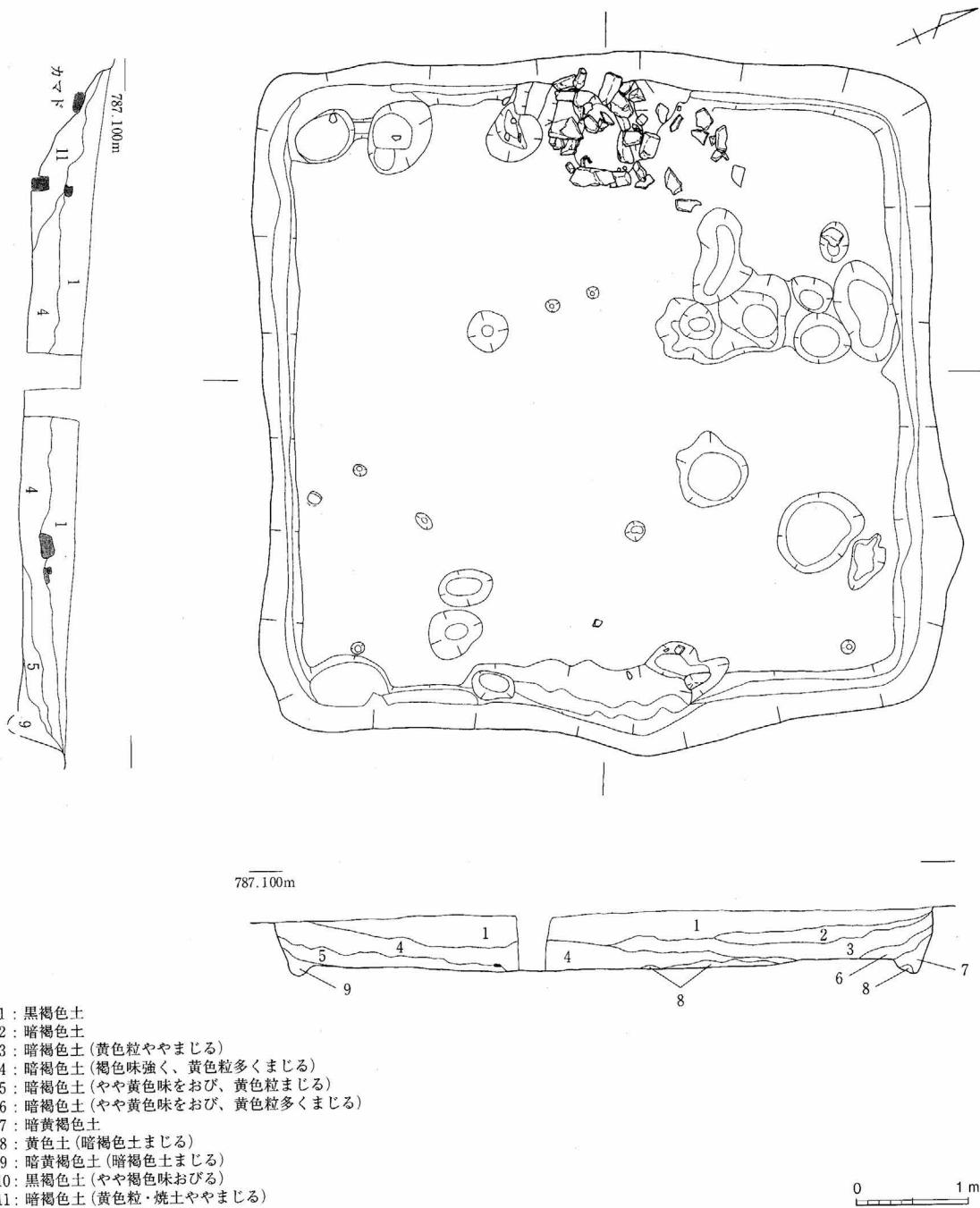


第55図 第9号・第14号住居址出土遺物（1～3：9住、4～11：14住）

第10号住居址

この住居址はAY-95付近から出土している。一辺6mの正方形であり、深さは50cmである。また、東壁際に、両端にピットを伴う溝が検出されており、この地点が出入り口の可能性がある。この住居址は、今回調査した中で最大の規模であり、形体もしっかりしている。また、住居址南部からは掘立柱建物址が出土している。床面は全面に硬化面が確認できる。壁際には周溝が確認され、床面にはピットが出土しているものの柱穴は明確にできなかった。

カマドは西壁中央部に出土しており、石を立てた周囲を粘土で固めた構造をしている。またカマド中心部に

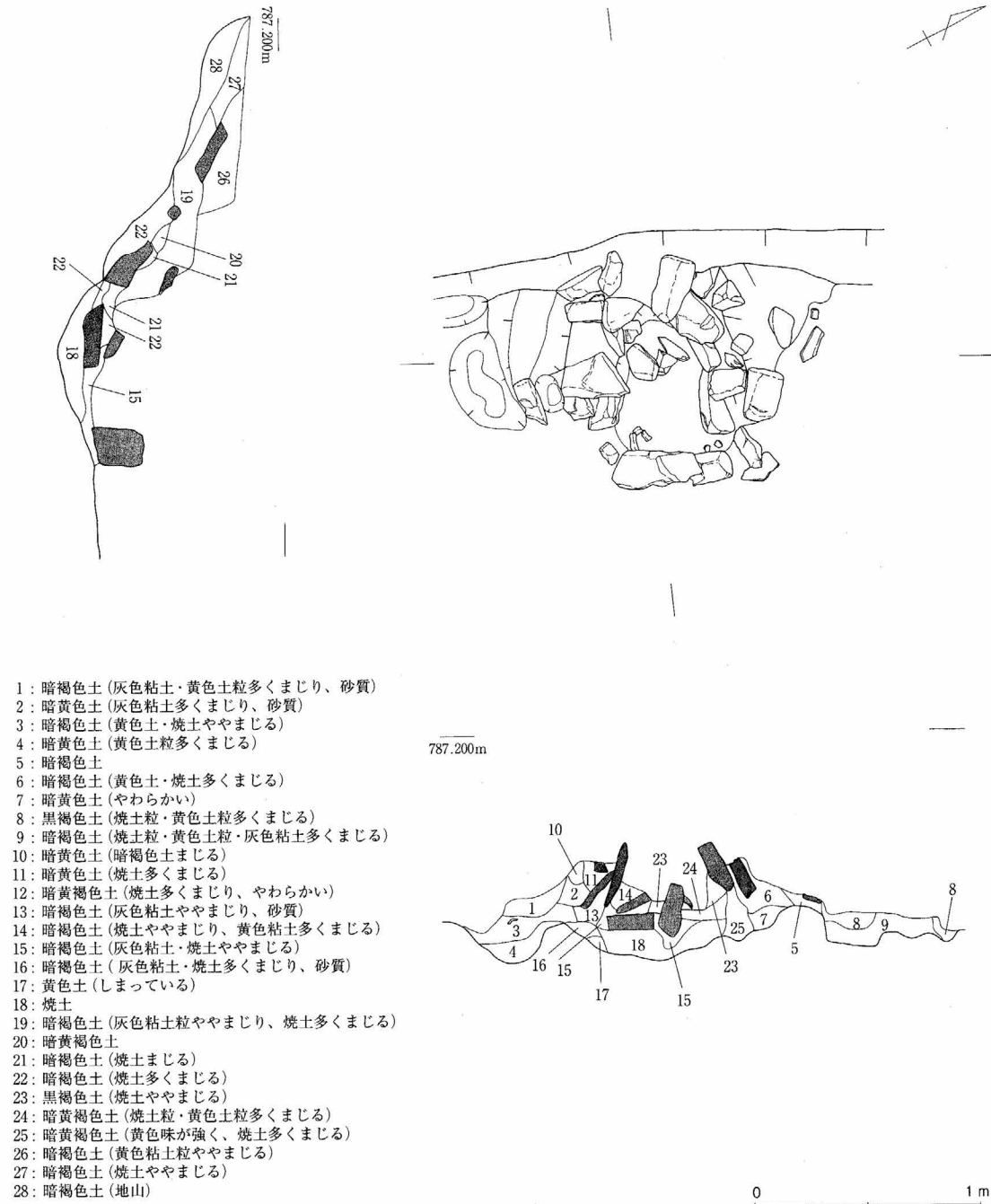


第56図 第10号住居址実測図

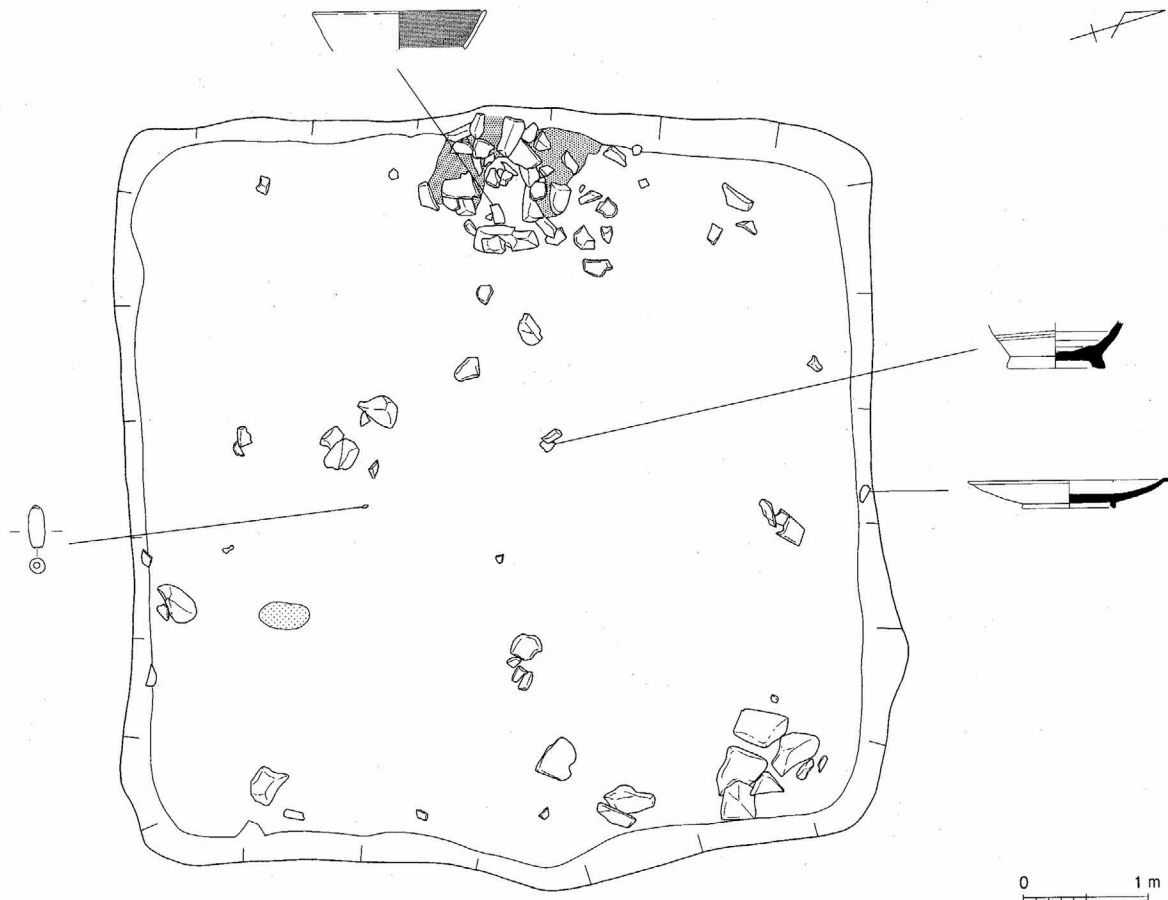
第IV章 遺構と遺物

は支柱石が設置されている。なお、プランとして確認できなかったものの、断面観察によって、掘り型の外側にまで黄色土や灰色粘土が延びており、その下層から焼土を伴う土が出土したことから、煙道が作られていたと考えることができる。

この住居址からは、菰手石が20個北壁際周溝付近から出土しているのをはじめ、土錘、槍鉋や、鑿と考えられる鉄製品等、他の住居址とは出土している遺物が異なっており、工房的な様相が伺える。



第57図 第10号住居址カマド実測図



第58図 第10号住居址遺物出土状況図

遺物(第59図～第61図)

第59図1～4・11・12は内黒土器である。1～3・11は坏と考えられ、口径は13.2cm～15.4cmである。2と11は黒色処理が抜けており、11はミガキも口縁部上端部にしか見られない。また11には墨書が確認できる。4は皿である。口径は12.8cmで、内面は全面に緻密なミガキが施されている。12は壙の底部である。高台内には煤が付着している。

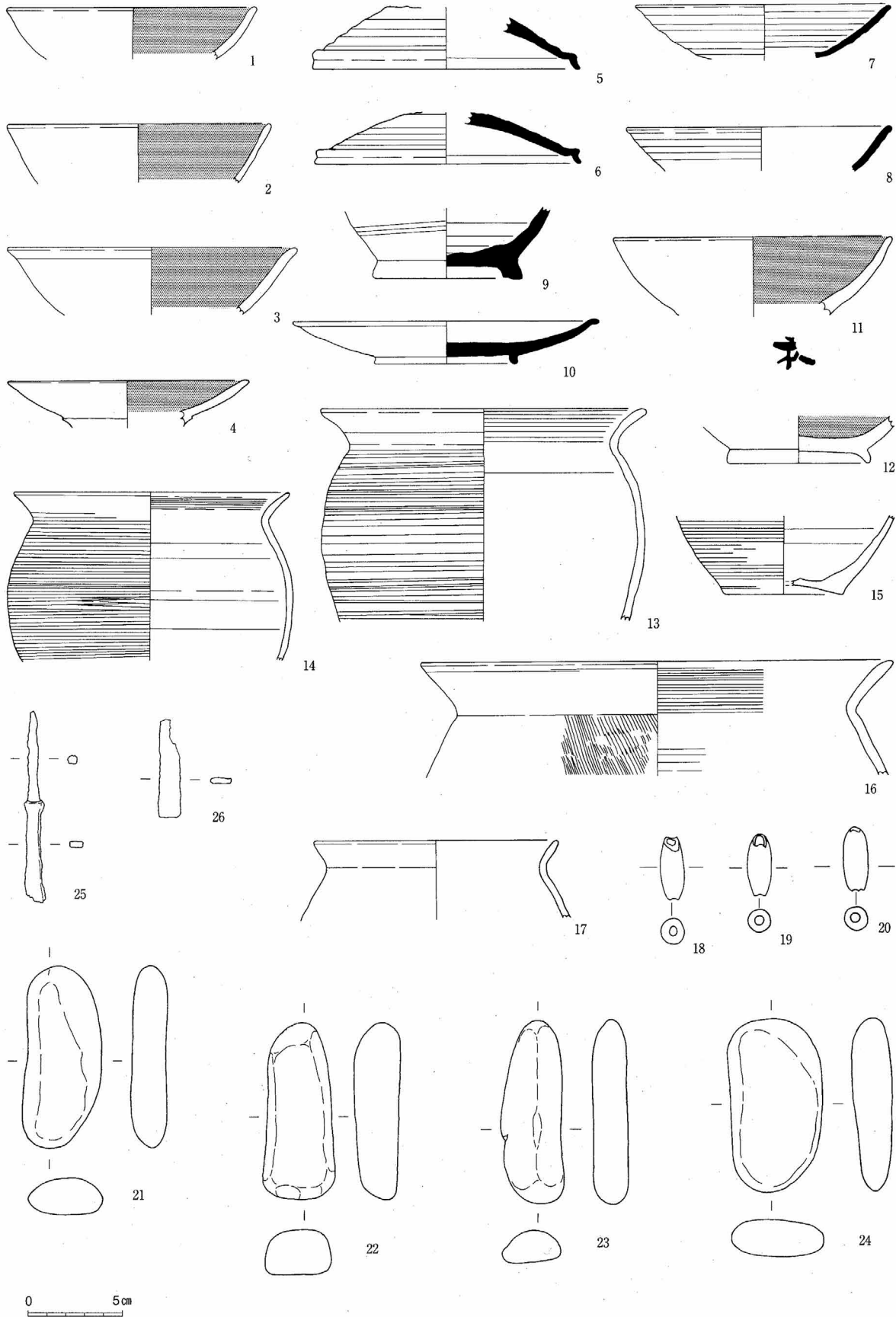
5～8は須恵器である。5・6は蓋で、胎土に砂粒が混入されている。7・8は軟質須恵器の坏である。9・10は灰釉陶器である。9は壺の底部と考えられ、高台の内側には糸切り痕を残している。10は皿である。釉薬は内面に全面ハケ塗り施釉されている。底部の糸切り痕は回転ヘラケズリによって消されている。

13～17は甕である。13～15は小型甕で、体部にはカキ目が施されている。16・17は長胴甕の口縁部である。16は口縁部と体部の境界までハケ目調整が施され、口縁部内面には横位のハケ目調整が行なわれている。また体部内面にも横位のハケ目調整が一部見られる。17はハケによる調整痕は見られず、ナデ調整による整形が行なわれていると考えられる。頸部がやや強くしまった、口縁部が直立気味の器形である。

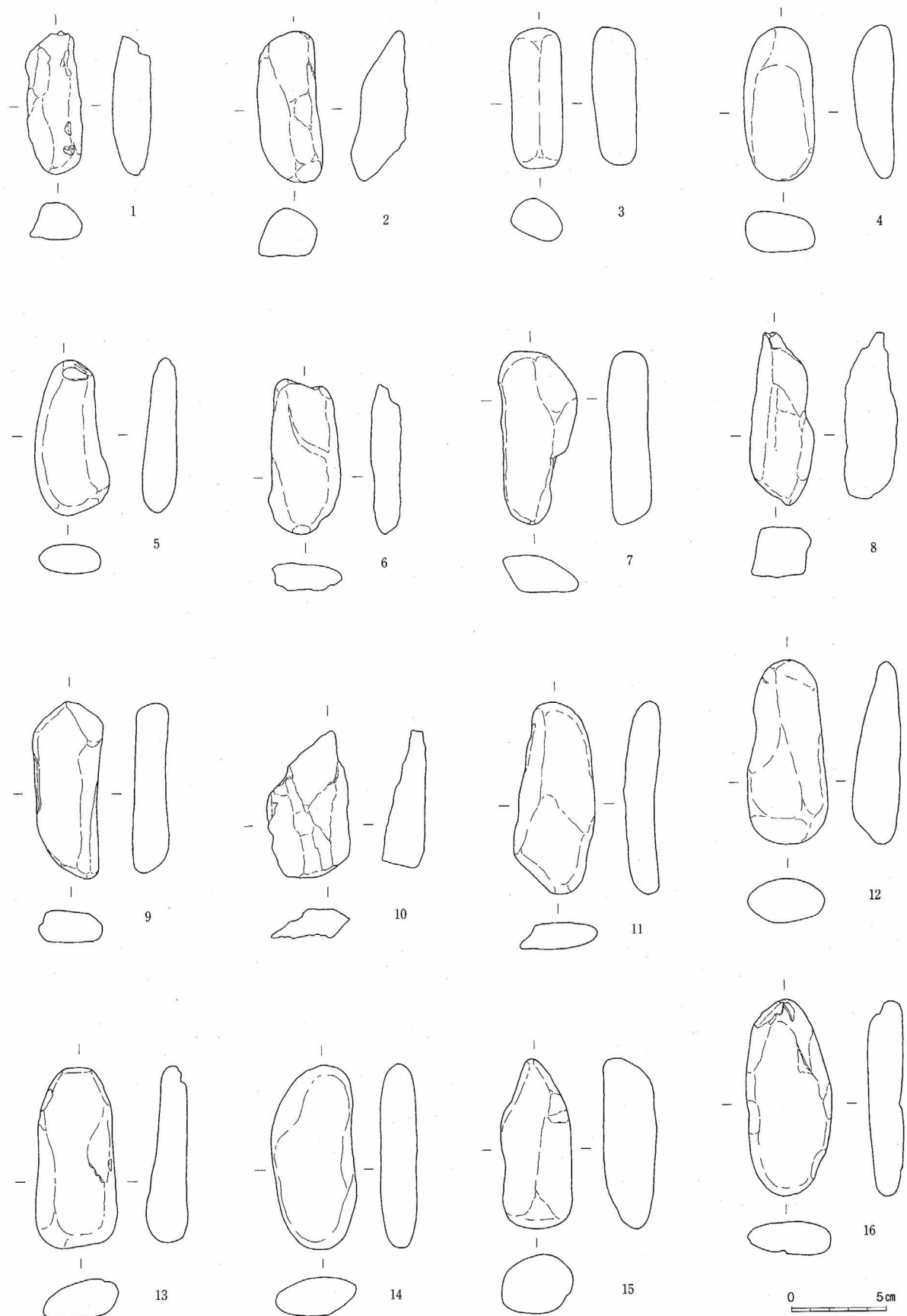
18～20は土錘である。床面から出土している。重さは平均で約2.3gであった。

第59図21～24、第60図は弧手石である。第60図が床面一括で出土しており、第59図21～24は覆土中からの出土である。重さは平均して約100.6gであった。

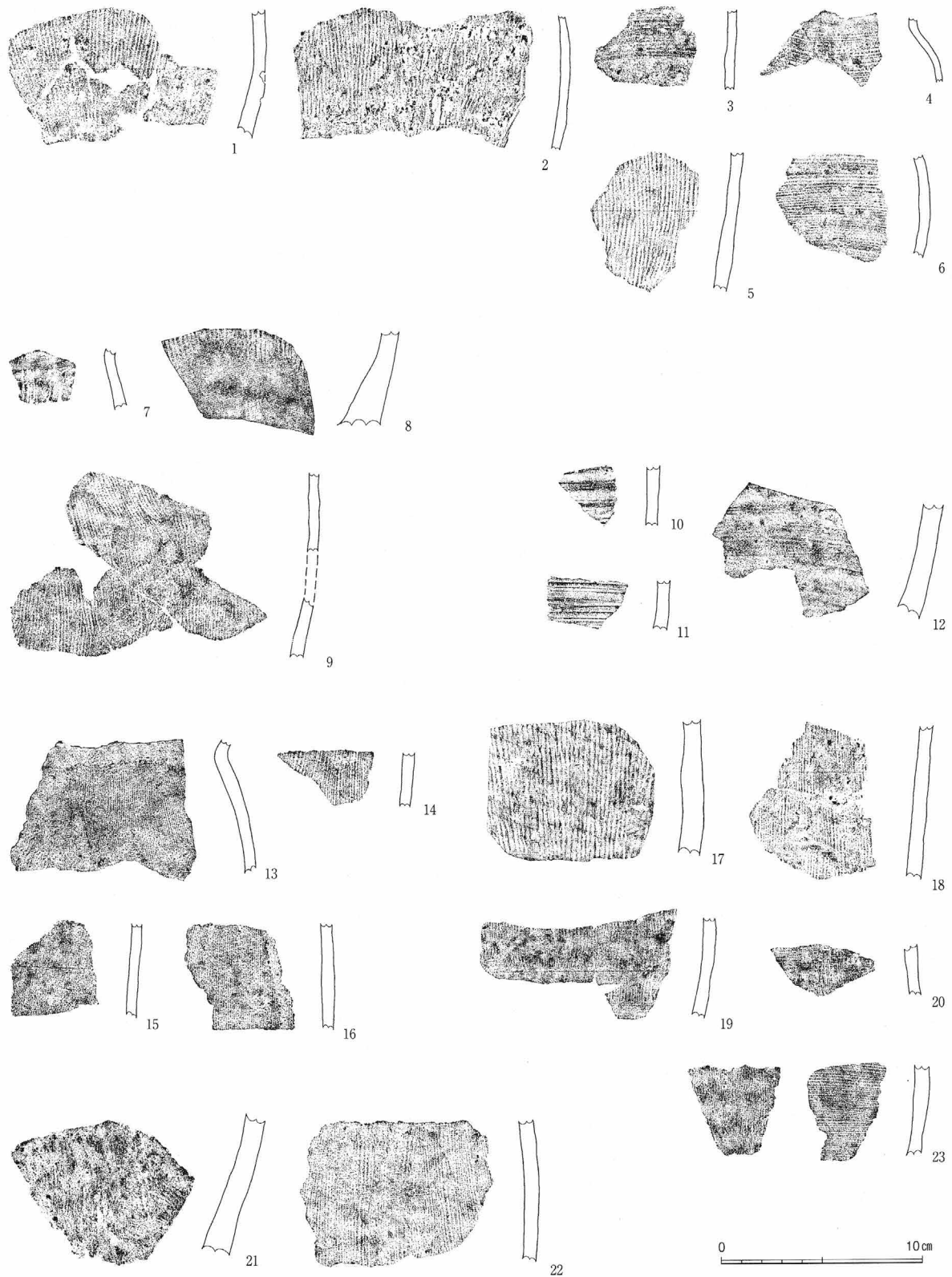
第61図1～6は土師器甕である。1・2・5が長胴甕、3・4・6は小型甕である。7期と考えられる。



第59図 第10号住居址出土遺物 (1)



第60图 第10号住居址出土遺物 (2)



第61図 第10号、第15号住居址出土遺物（1～6：10住、7～23：15住）

第14号住居址

DI-63を中心にして出土している、一辺約4.2mの正方形のプランを持つ住居址である。壁高は、約20cmであった。西壁にカマドが築かれ、左袖脇には土坑が出土しており、貯蔵穴と考えられる。その他にも床面下層から土坑等が出土しているが、遺物を伴わないため、この住居址との関係は不明である。

また、西・北・南壁際には周溝が巡らされているが、東壁からは検出されなかった。柱穴はP1・P2が考えられるが、それ以上は明確に検出することができなかった。床面は全面に硬化面が確認され、精査した結果、周溝と考えられる溝が、北部床面から「L」字状に検出されたことから、拡張された可能性がある。

カマドは、調査時には既に破壊されており、築造時の掘り型が検出されたのみで、焼土の手前に礫が散乱している状況であった。

この住居址からは遺物の出土も少なく、床面付近から出土したのは2点のみであり、内1点は土坑からの出土である。

遺物(第55図、第67図)

第67図3～5は内黒土器である。口径13.2cm～14.5cm、器高5.2cm(5)である。いずれも内面のヘラミガキはやや間隔があきはじめている。1・2は土師器坏である。口径はそれぞれ12.2cm・11.4cm、器高は3.6cmであった。

第67図6・7は灰釉陶器である。6は皿の破片である。内外面共に光沢のない釉薬である。7は碗である。内面には自然降灰と考えられる自然釉が付着している。漬掛け施釉の可能性が考えられる。

第67図8・9、第55図4～11は長胴甕である。第67図8はカマド脇の土坑付近より出土している。ハケ目調整の1回の施文単位が長く、体部中央部から下部にまで及んでいる。またその後底部から上にむかってハケ目調整が行われている。第67図9は体部上端部の縦位ハケ目調整が、口縁部のヨコナデによってナデ消されている。出土遺物から8期と考えられる。

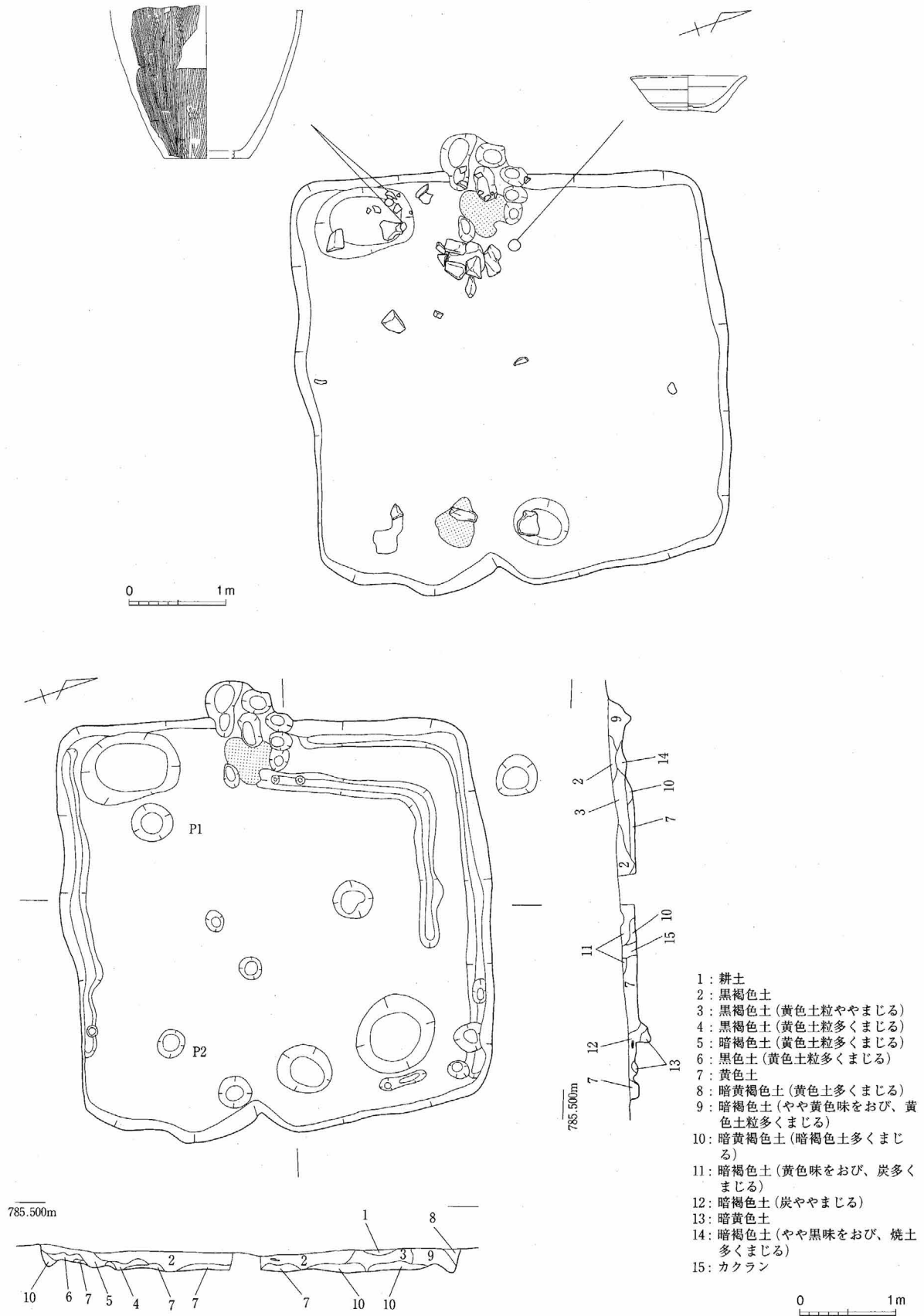
第15号住居址

DA-72を中心にして出土した住居址で、覆土中から大量の炭化材及び焼土が出土していることから火災住居と考えられる(第65図)。

また、当初1基と考えていたが、床面の調査にはいると床面下層からもう1基の住居址が重複して検出され、建て替えが行なわれていたことが判明した。このため、2基の住居址の遺物を混在して取り上げてしまっている。また記述の都合上、建て替え前の住居址を第15号(旧)住居址、建て替え後の住居址を第15号(新)住居址とする。

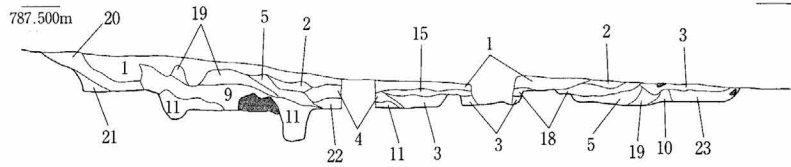
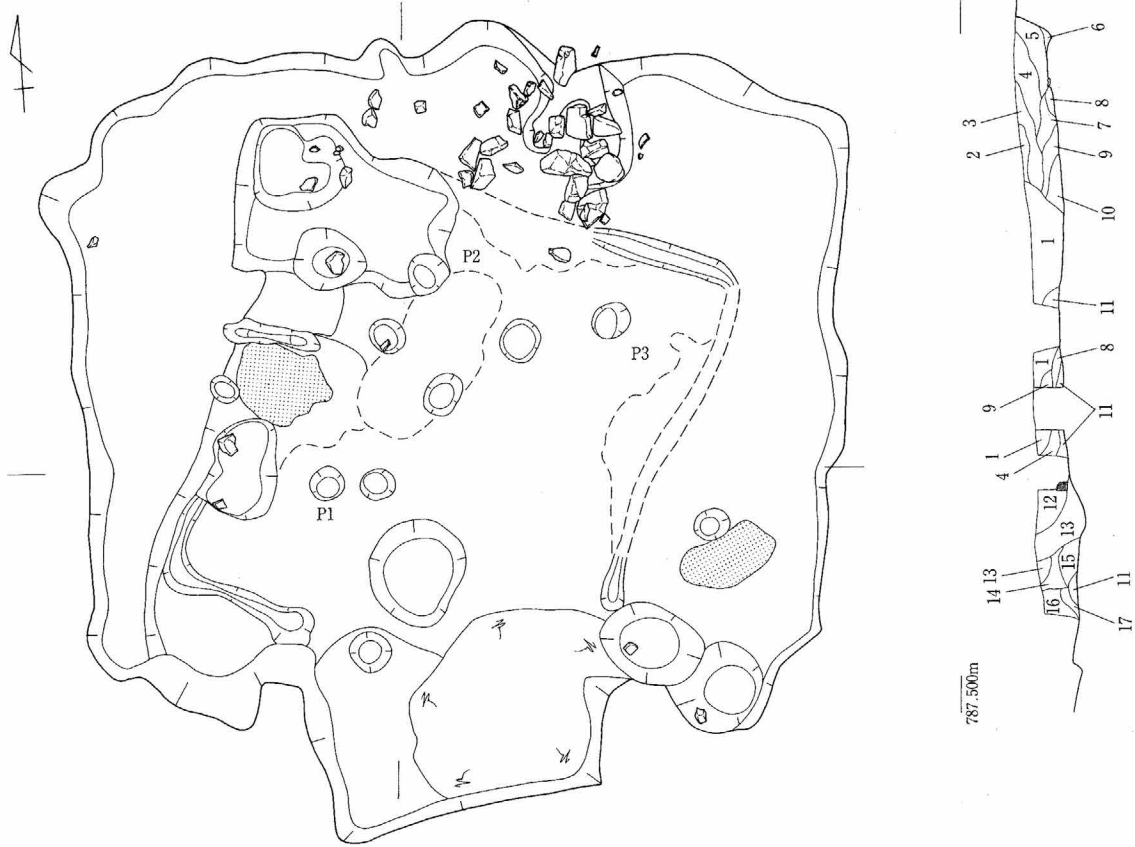
まず第15号(新)住居址であるが、5.5m×6.2mのやや長方形のプランと考えられるが、前述のとおり、南壁の多くが破壊されており、短辺については正確とはいえない。また、住居址中央部付近にも耕作によると考えられるカクランがあり、床面を破壊している。カマドは北壁より出土している。このカマドは石芯の粘土カマドと考えられ、右袖部をみると、カマド内側に偏平な石を立て、その外側を灰白色系の粘土や、暗褐色系の土で作りあげている。なお、左袖部は破壊されてしまっているのか、袖部左側の床面付近から灰白色粘土が出土しており、その下層には焼土が厚く堆積していた。また、礫が多量に出土していることから、この礫がカマドの材料であった可能性が考えられる。

焼土、炭化材は住居址中央部付近から集中して出土しており、炭化材については棒状の形体をしているものが多かったが、いずれも遺存状況は悪く、建築部材として特定できる材は出土していない。ピットは数カ所か



第62図 第14号住居址遺物出土状況図及び実測図

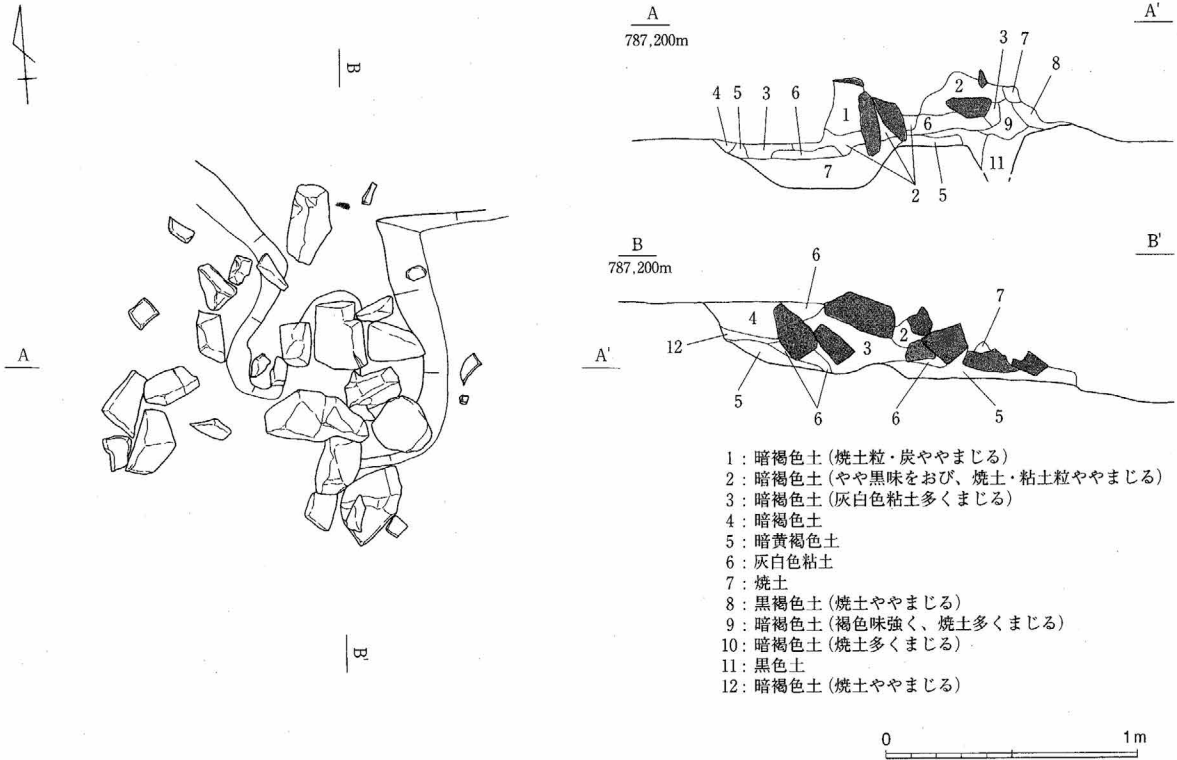
1. 住居址



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1: 暗褐色土 (カクラン) | 12: 暗褐色土 (焼土・黄色土粒やまじる) |
| 2: 暗褐色土 (焼土やまじる) | 13: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる) |
| 3: 暗褐色土 (焼土多くまじり、炭やまじる) | 14: 暗褐色土 |
| 4: 暗褐色土 (焼土多くまじり、炭やまじる) | 15: 暗褐色土 (黄色土粒やまじる) |
| 5: 暗褐色土 (炭やまじる) | 16: 暗褐色土 (褐色味が強く、黄色土粒多くまじる) |
| 6: 暗褐色土 (灰色粘土やまじる) | 17: 暗褐色土 (やや黒味をおびる) |
| 7: 暗褐色土 (焼土多くまじる) | 18: 焼土 (炭多くまじる) |
| 8: 焼土 (灰・暗褐色土やまじる) | 19: 暗褐色土 (やや黒味をおび、焼土やまじる) |
| 9: 暗褐色土 (やや黒味をおび、焼土・炭やまじる) | 20: 黒褐色土 |
| 10: 暗褐色土 (焼土多くまじり、黄色土やまじる) | 21: 暗褐色土 (黒褐色土多くまじる) |
| 11: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる) | 22: 暗褐色土 (黄色土粒・炭やまじる) |
| | 23: 暗褐色土 (黄色土粒やまじる) |
| | 24: 地山 |

0 1m

第63図 第15号住居址実測図



第64図 第15号住居址カマド実測図

ら出土しているが、支柱穴は特定できない。

次に第15号(旧)住居址であるが、プランは3.6m×4mを測るが、第15号(新)住居址と同様に南壁を中心としてカクランがおよんでおり、明確なプランは把握できなかった。床面のほとんどに硬化面が確認でき、P1～P3が柱穴と考えられたが、もう1か所は検出することができなかった。周溝は西壁を除いてほぼ全周していたと考えられるが、カクラン部については明確にできない。また、西壁中央部付近には焼土が検出され、その周囲に小規模なピットや、溝が出土していることからこの地点がカマドであったと考えられる。このカマドは遺構検出時にはすでに焼土のみとなっており、第15号(新)住居址を造る際に礫を抜き取ったものと考えられる。

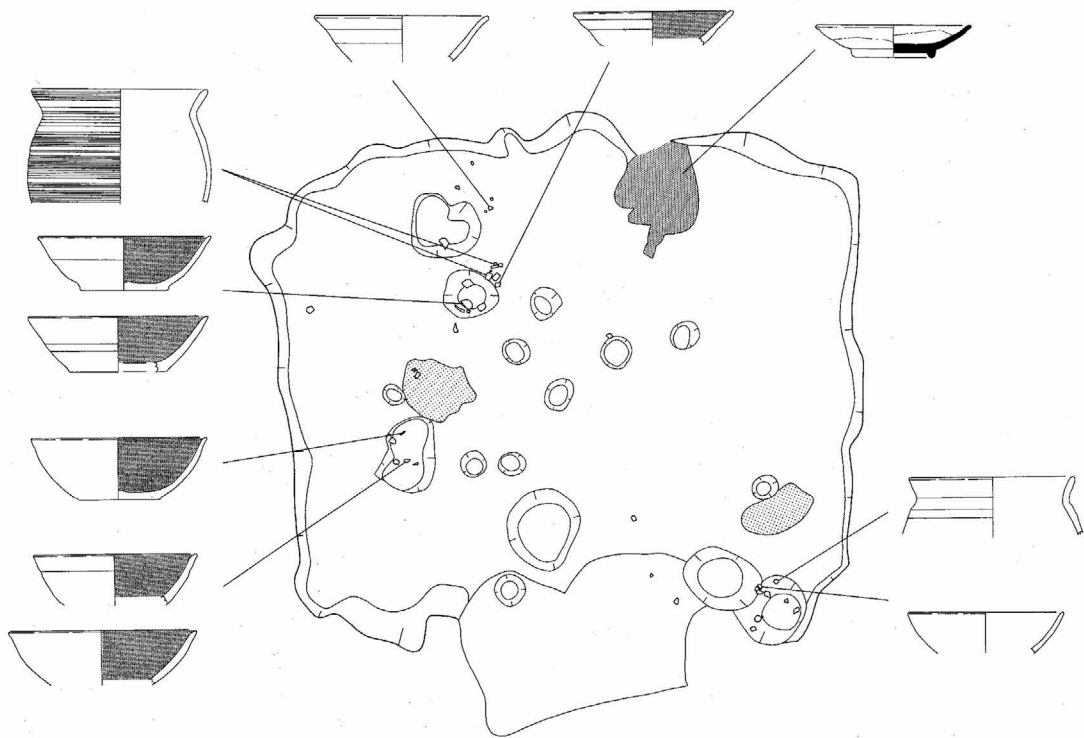
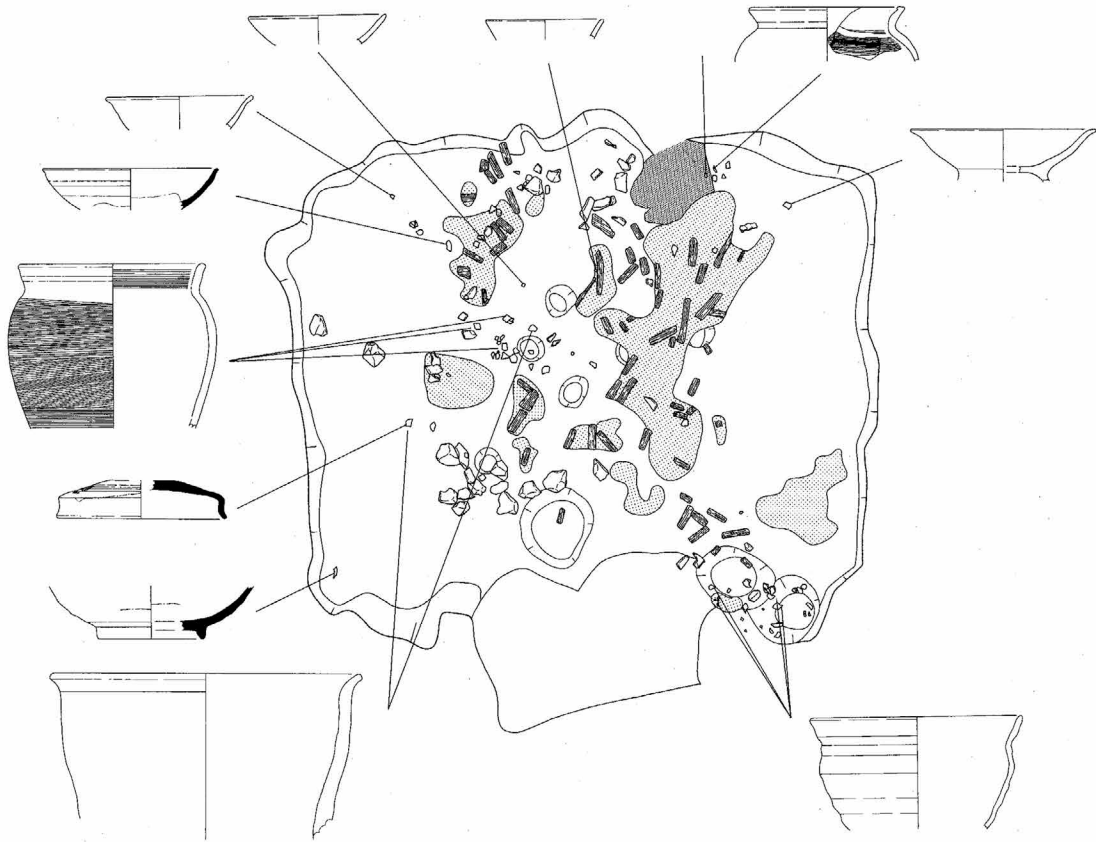
遺物(第66図)

第66図、第67図10～34、第68図、第69図1～11がこの住居址から出土している遺物である。

第66図はこの住居址から出土している鉄製品である。1・2は鎌の破片である。1は刃部であり、両端部が欠損している。2と同一個体の可能性も考えられる。2は鎌の下半部である。着柄のための折り返しが確認できる。3～5は釘である。3は先端部が欠損している。4・5は頭部及び先端部が欠損している小片である。6・7は用途不明品であり、6は板状、7は鉄棒状の製品である。

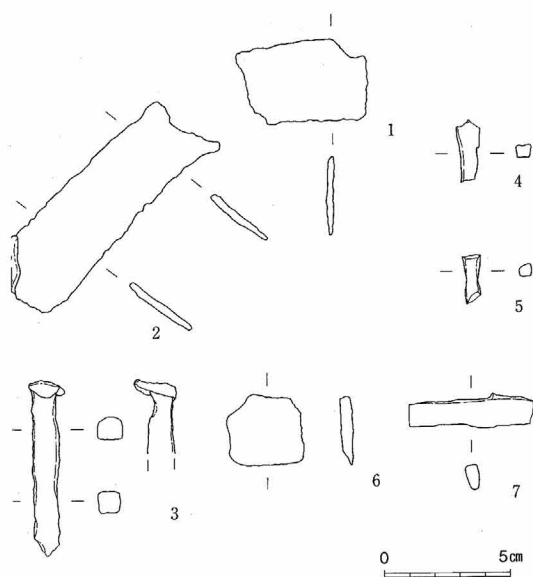
第67図10～17は内黒土器である。口径が12.9cm～14.1cmで、器高4.4cm～5cmを測るものと、口径15.2cmとなるもの(15)の2法量に分類できる。いずれも内面のミガキがやや粗くなっている傾向が伺える。また、11は器形的には内黒土器と判断しているが、内面の黒色化した器面にミガキを明瞭には確認することができない。

第67図18～33は土師器である。ほとんどが破片であり、器形が判明できるのは2点にすぎない。口径でみると9.6cm～11cmと、12.6～15.7cmの2法量に分かれそうである。器高では口径の小さい坯は4cm前後とやや深めの器形と考えられる。また、26の底部には墨書が確認され、見込部分にも墨が確認されている。内面の墨



0 1m

第65図 第15号住居址遺物出土状況図



第66図 第15号住居址出土遺物 (1)

型の碗は口径が13.3cm~14cm、器高が4.2cmである。これらの碗の釉薬は5・6がハケ塗り施釉と考えられる他はすべて漬掛け施釉と考えられる。胎土は白っぽい色調とやや黒っぽい、灰色系の色調を帯びた胎土に分けられ、白っぽい胎土のものは特に胎土が緻密であった。この色調からみていくと、2と10、5と6の胎土が近似している。なお、5と6は内面に高台を直接置いた重ね焼きの痕跡が見られ、底部はきれいにケズリ調整がされている。さらに11にも高台を直接置いた重ね焼きの痕跡が確認できるが、底部には糸切り痕が残されている。17は重ね焼きの痕跡は確認できず、底部もケズリ調整が施されている。12~16は皿である。12・14は釉薬に光沢がなく、15は釉薬がムラに掛かっている。また、12には重ね焼きの痕跡が残されている。底部の糸切り痕は、12・14・15には見られない。13は底部と体部下部に墨書が見られる。

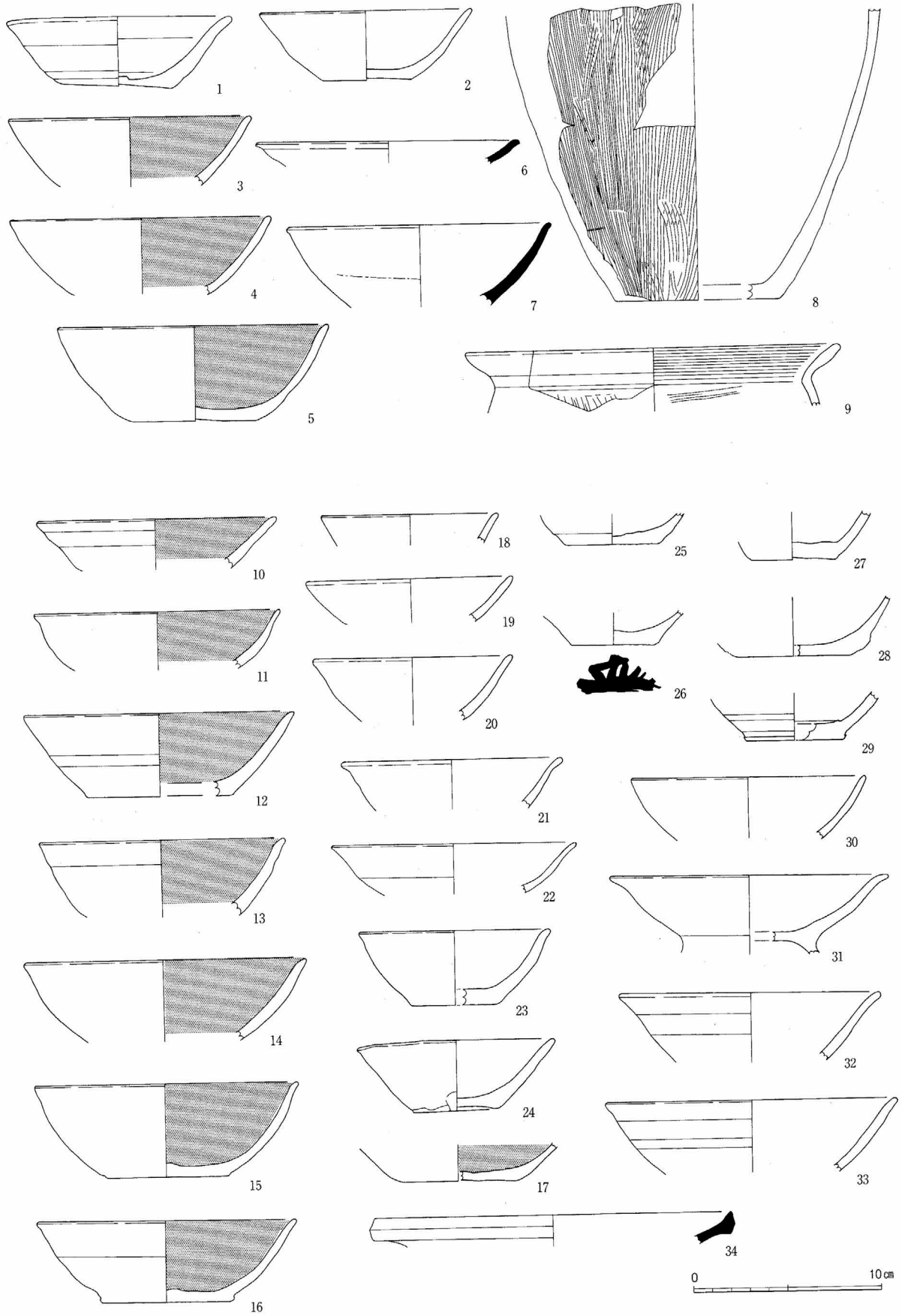
第67図31は盤である。脚部は破損しているが、口径は15cm、体部の器高は3.6cmであった。

については見込部に一面に痕跡が確認され、墨書なのか硯として使用したために墨が付着したのかは明確でない。33は体部内面に縦に細長く煤が付着しており、灯明具として使用した可能性も考えられる。

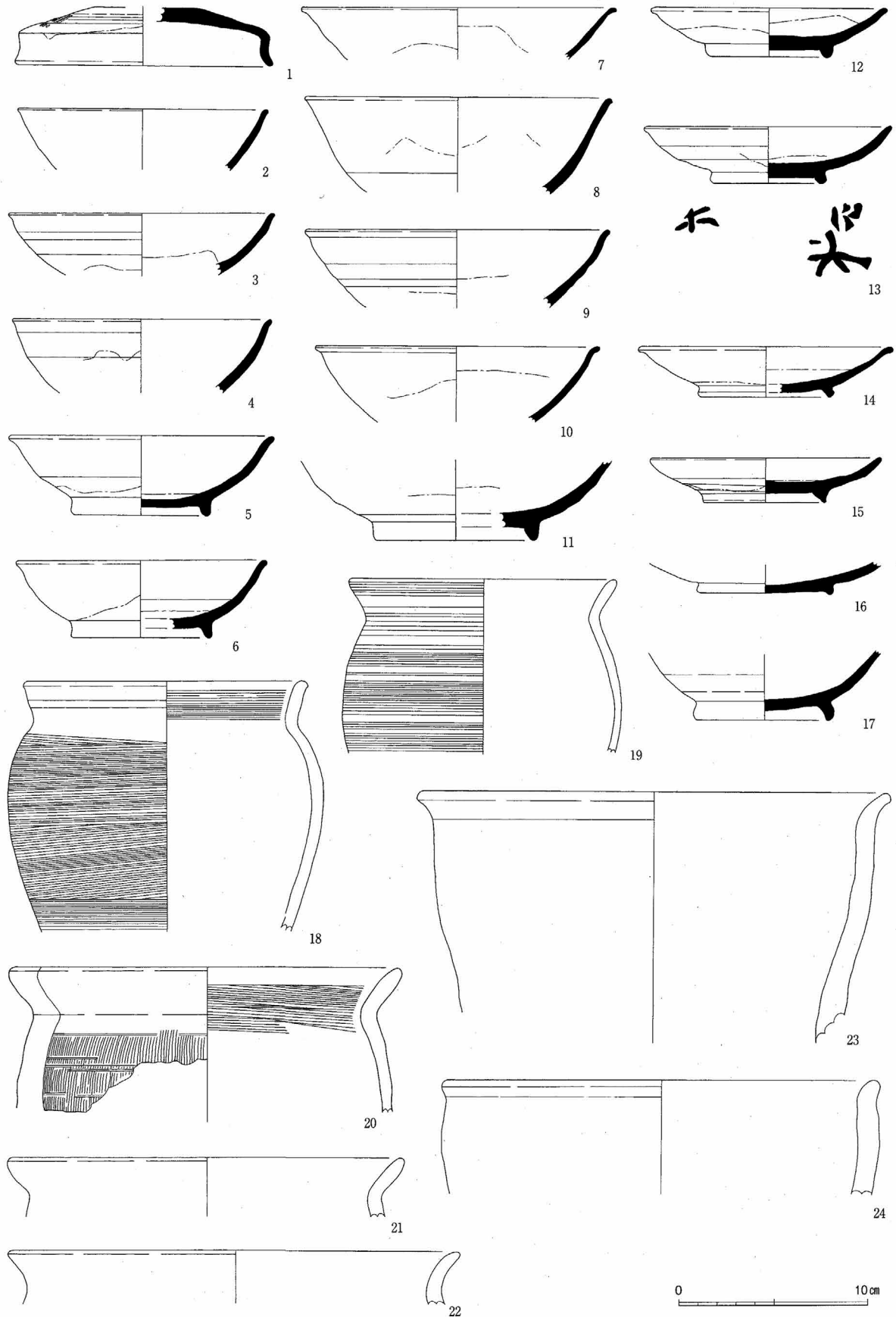
第67図34、第68図1~17は灰釉陶器である。第67図34は広口瓶の口縁部である。口縁部の一部が出土しているのみで、反転復元して図化している。外面は光沢のない釉薬であるが、内面には光沢がある。第68図1は蓋である。天井部には釉薬が掛けられ、口縁部にはほとんど掛けられていない。また、内面には墨痕が確認できる。第68図2~11・17は碗である。このうち7~11・17はいわゆる深碗と考えられ、口径は15cmを超えている。また、小型の碗は口径が13.3cm~14cm、器高が4.2cmである。これらの碗の釉薬は5・6がハケ塗り施釉と考えられる他はすべて漬掛け施釉と考えられる。胎土は白っぽい色調とやや黒っぽい、灰色系の色調を帯びた胎土に分けられ、白っぽい胎土のものは特に胎土が緻密であった。この色調からみていくと、2と10、5と6の胎土が近似している。なお、5と6は内面に高台を直接置いた重ね焼きの痕跡が見られ、底部はきれいにケズリ調整がされている。さらに11にも高台を直接置いた重ね焼きの痕跡が確認できるが、底部には糸切り痕が残されている。17は重ね焼きの痕跡は確認できず、底部もケズリ調整が施されている。12~16は皿である。12・14は釉薬に光沢がなく、15は釉薬がムラに掛かっている。また、12には重ね焼きの痕跡が残されている。底部の糸切り痕は、12・14・15には見られない。13は底部と体部下部に墨書が見られる。

第68図18~24、第69図1~11は甕である。第68図18・19は小型甕である。18は体部の上半部に最大径を持ち口縁部が直立気味に立ち上がる器形である。口縁部外面はヨコナデ調整がされており、横位のカキ目は頸部下から施文されている。口縁部の内面には横位のカキ目が施文されている。19は外面前面に横位のカキ目が施文されている。内面はナデ調整が行われている。18よりやや小振りな甕である。

第68図20は長胴甕である。口縁部外面のヨコナデ調整が体部までおよび、ハケ目調整がナデ消されている。また、ハケ目調整をヘラ状工具による沈線が横切っている。内面は口縁部下部から体部上部にかけて横位のハケ目がみられる。第68図21~24、第69図1~3は無文の甕と考えられる。第68図23はつまみ上げるように短く折り曲げられている口縁部に開き気味になる体部をもつ甕である。第68図24、第69図3は短頸の甕である。口縁部は弱い屈曲程度で、ほとんど無頸に近い形体である。いずれも体部上部のみの残存のため、全体の器形は不明である。なお、第69図3はやや小振りの甕である。また、第69図2は器壁が他の個体に比べて薄く作られており、内面にミガキが施されている。第69図4は広口の甕である。頸部が強く屈曲し、鉢状の体部にいたる器形で、体部全面に強いヨコナデ調整が観察される。また、口縁部付近には煤の付着が観察される。第69図6は素地に混入物のないやや白い色調の胎土で、口縁端部が内面に折り曲げられている。なお、内面には横位のハケ目調整が施されている。第69図7は口縁部が短く、そして強く折り曲げられている。内面には一面に横位のハケ目調整がみられ、煤も付着している。第69図8は淡褐色を呈し、内・外面共にヨコナデ調整が施されている。出土遺物から、8期と11~12期の2時期と考えられる。

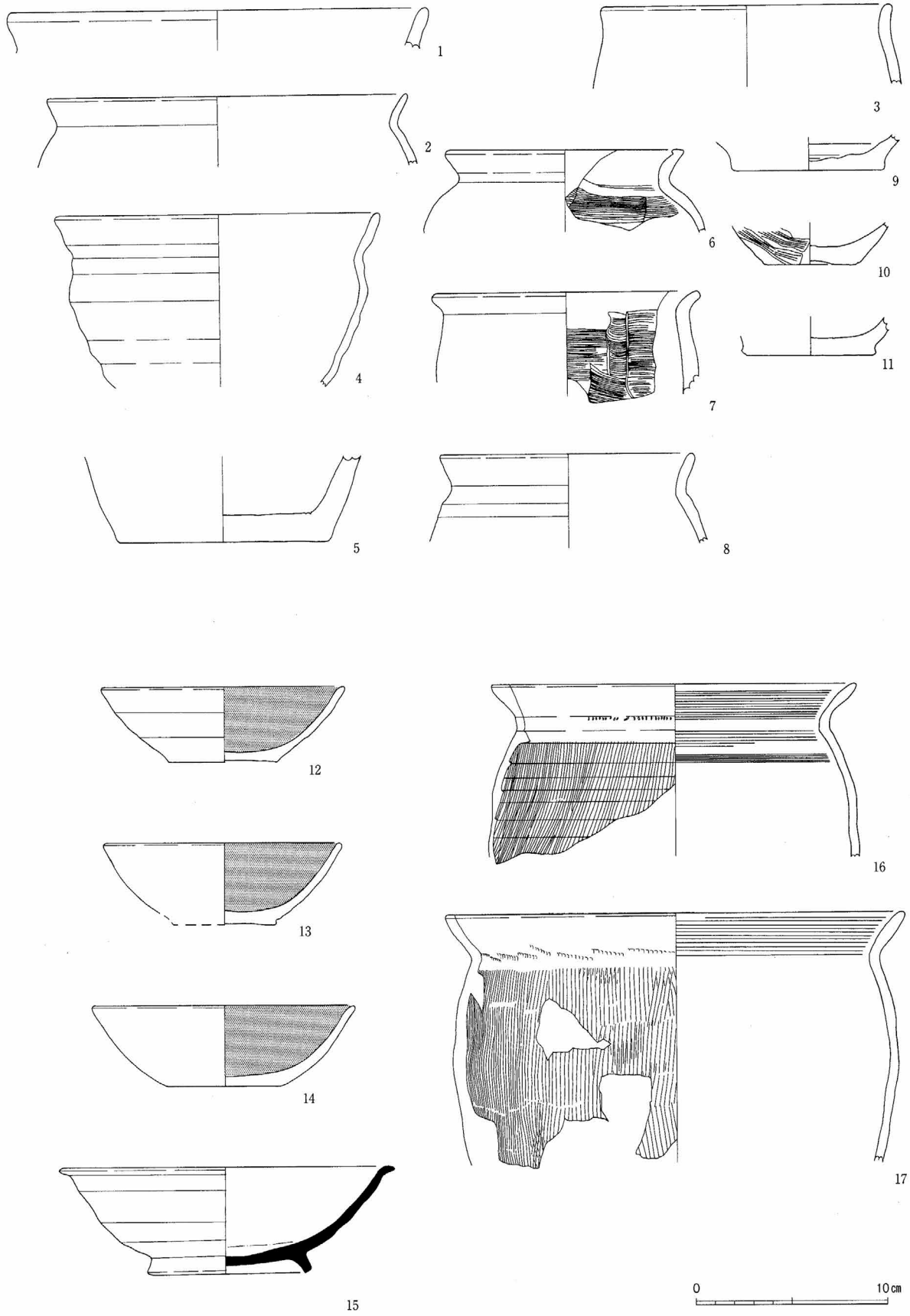


第67图 第14、15号住居址出土遺物 (1~9: 14住、10~34: 15住)



第68図 第15号住居址出土遺物 (2)

1. 住居址



第69図 第15、19号住居址出土遺物 (1~11: 15住、12~17: 19住)

第IV章 遺構と遺物

第17号住居址

この住居址はCX-74付近より出土している。この住居址は覆土中から多くの炭化材が出土しており、炭化材を取り除くと下層から多くの遺物が出土している。プランは長辺の一辺が4.8m、一辺が5.9mで、短辺が4.5mの台形を呈する。柱穴は明確に検出されていない。また床面からは土坑が出土しているが、南隅から出土している土坑は断面播鉢状を呈している。床面の硬化面はカマド付近から、住居址中央部にかけて検出されている。

炭化材は棒状のものが比較的放射状に広がっており、屋根材が炭化して残存していたと考えられる。また一部には柱と考えられる炭化材も出土しているほか、板状を呈するものや、紐を使って萱状植物をムシロ状に編み上げた炭化物や、麻紐と考えられる紐状の炭化物、炭化種子等出土している（図版21）。なお、住居址北部の床直上から出土した、板状の炭化物には、加工痕と考えられる部分が伴っていたことから、調査時において、合成樹脂を使用して補強し、取り上げている。また、柱と考えられる炭化材についても同時に取り上げている。

カマドは西隅に出土しており、偏平な石を立てて、その外側に、暗褐色系の土で固定している。なお、カマドと、西隅壁との間は、当初はテラス状の高まりと考えて調査を実施したが、断面観察ではテラスなのか、住居址床と同じ高さまで掘り下げてあったのかは、明確にすることができなかった。

遺物（第72図）

第72図がこの住居址から出土した遺物である。1・2は灰釉陶器である。1は完形品で、口径9.8cm、器高2.4cmを測り、内・外面共に煤が付着している。また、体部から口縁部にかけて、4ヶ所指で縦位にナデあげて輪花皿としている。住居址北部の加工痕のある板材付近から出土している。2は深碗の底部である。高台は高く作られている。

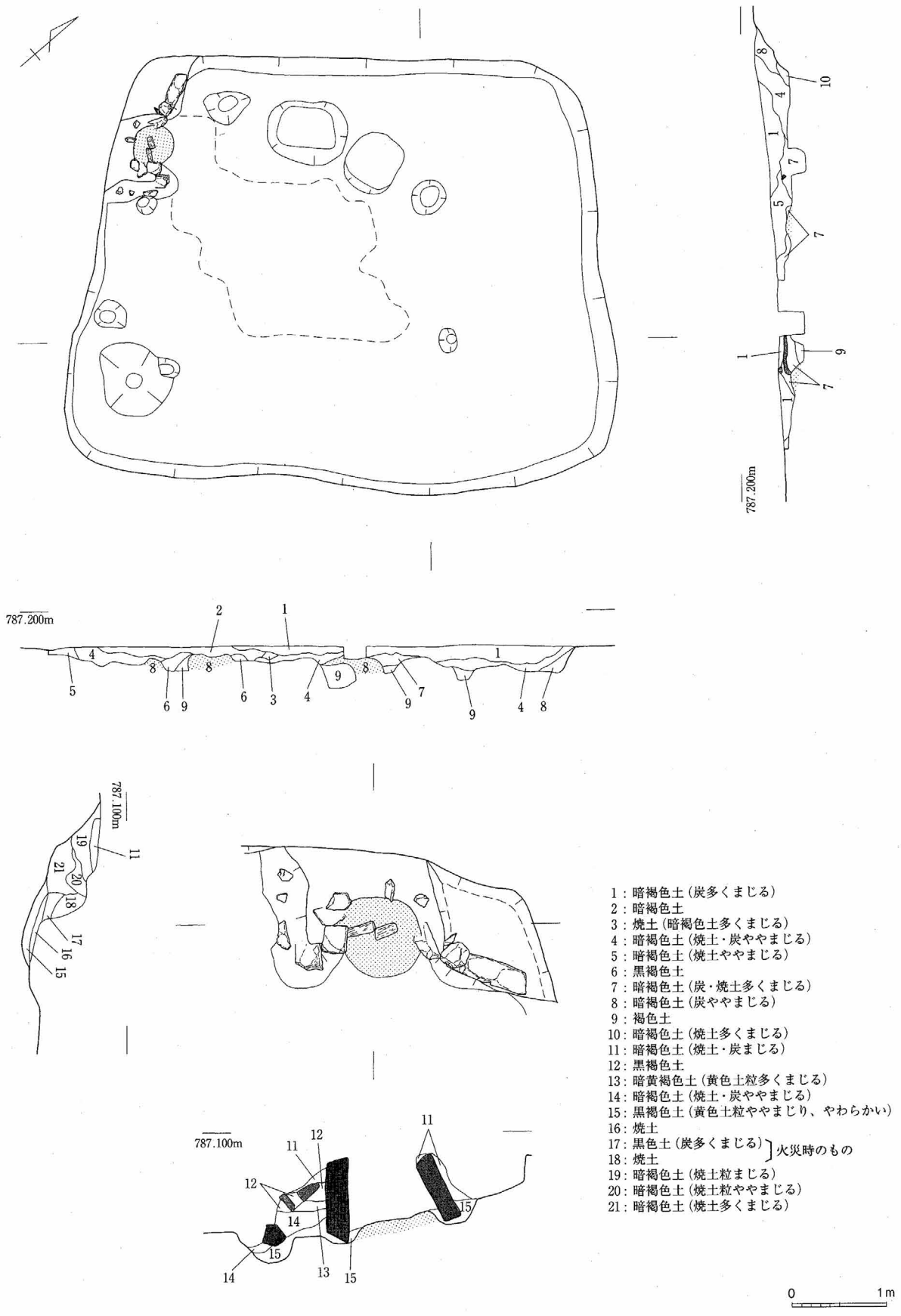
3～14は土師器である。3～9・13・14は坏である。この内3・4は小型の坏で、口径9cm、器高1.6cmと1.4cmで、形体的には非常に退化している印象を受ける。5～9は大型の坏で、口径13.5cm～16.1cm、器高3.5cm～3.8cmでやや浅い器形である。10～12は盤である。口径9.4cm～10.9cm、器高は2.8cm（12）である。

15は小型甕の上半部である。口縁部は短く直立に立ち上がり、短頸甕のような形体をしている。また、体部の外面には全体に横位のカキ目が施され、内面はヨコナデが行われている。

16は、須恵器甕の口縁部である。17・18は石器である。17は偏平な円形の石で、表面には磨った痕跡が確認できる。18は砥石と考えられ、淡褐色の石を使用している。

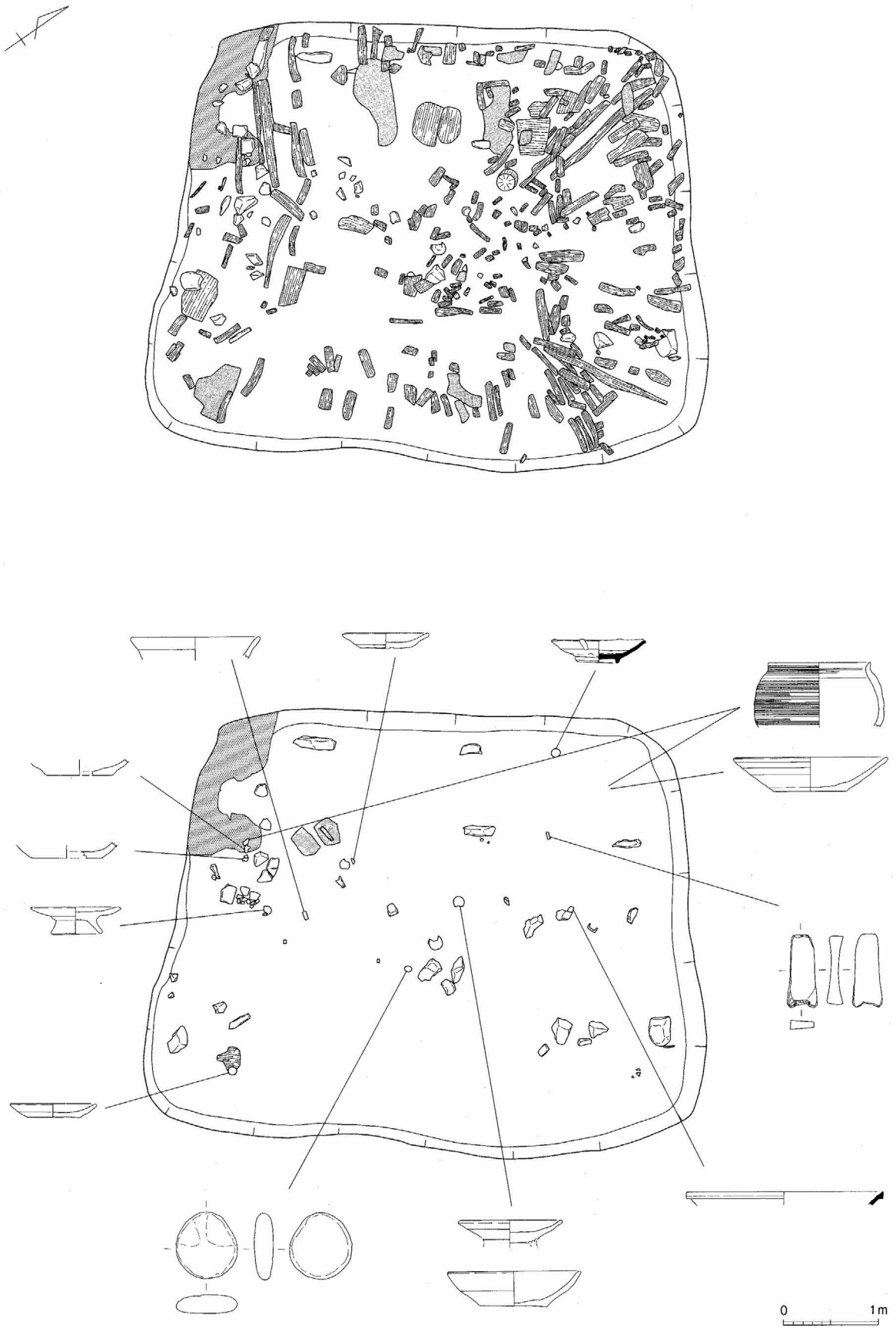
19～21は鉄器である。19は床面から出土している麻引き金具である。把手部付近には木質部が残存している。これらの遺物から15期と考えられる。

1. 住居址



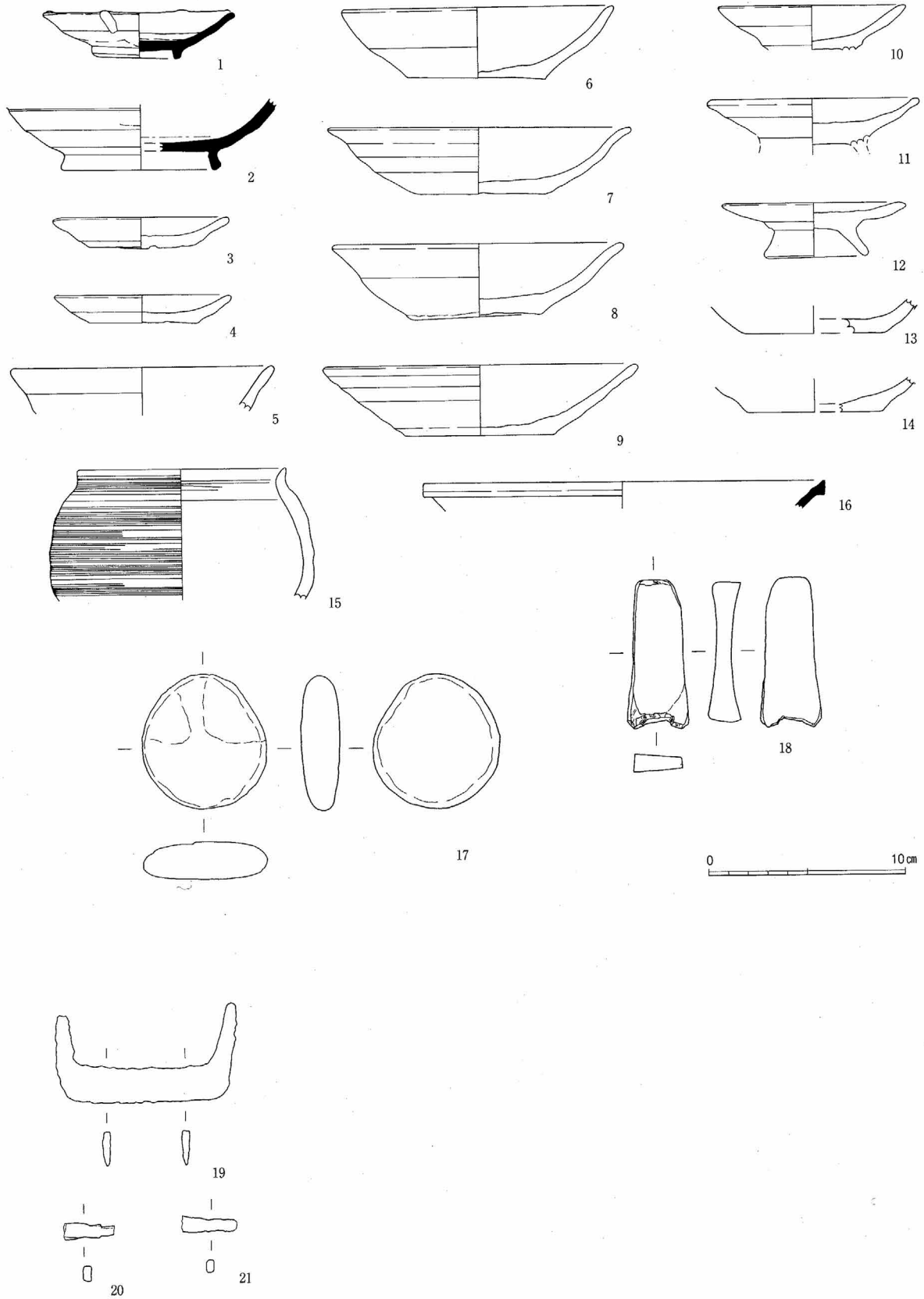
- 1: 暗褐色土 (炭多くまじる)
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 焼土 (暗褐色土多くまじる)
 - 4: 暗褐色土 (焼土・炭やまじる)
 - 5: 暗褐色土 (焼土やまじる)
 - 6: 黒褐色土
 - 7: 暗褐色土 (炭・焼土多くまじる)
 - 8: 暗褐色土 (炭やまじる)
 - 9: 褐色土
 - 10: 暗褐色土 (焼土多くまじる)
 - 11: 暗褐色土 (焼土・炭まじる)
 - 12: 黒褐色土
 - 13: 暗黄褐色土 (黄色土粒多くまじる)
 - 14: 暗褐色土 (焼土・炭やまじる)
 - 15: 黒褐色土 (黄色土粒やまじり、やわらかい)
 - 16: 焼土
 - 17: 黒色土 (炭多くまじる)
 - 18: 焼土
 - 19: 暗褐色土 (焼土粒まじる)
 - 20: 暗褐色土 (焼土粒やまじる)
 - 21: 暗褐色土 (焼土多くまじる)
- 17: 黒色土 (炭多くまじる)
18: 焼土
19: 暗褐色土 (焼土粒まじる)
20: 暗褐色土 (焼土粒やまじる)
21: 暗褐色土 (焼土多くまじる)
- 17: 黒色土 (炭多くまじる)
18: 焼土
19: 暗褐色土 (焼土粒まじる)
20: 暗褐色土 (焼土粒やまじる)
21: 暗褐色土 (焼土多くまじる)

第70図 第17号住居址実測図 (カマド: S=1/30)



第71図 第17号住居址遺物出土状況図

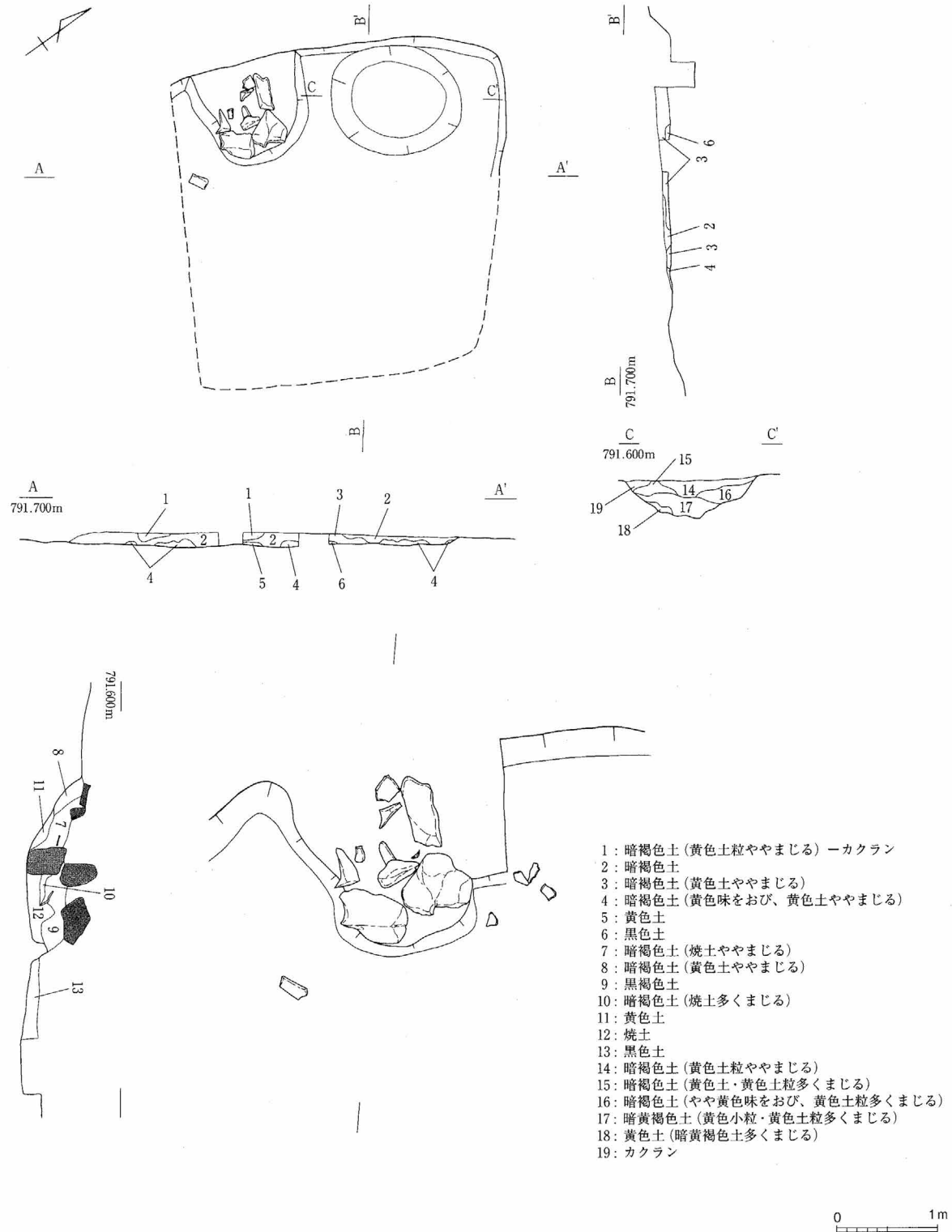
1. 住居址



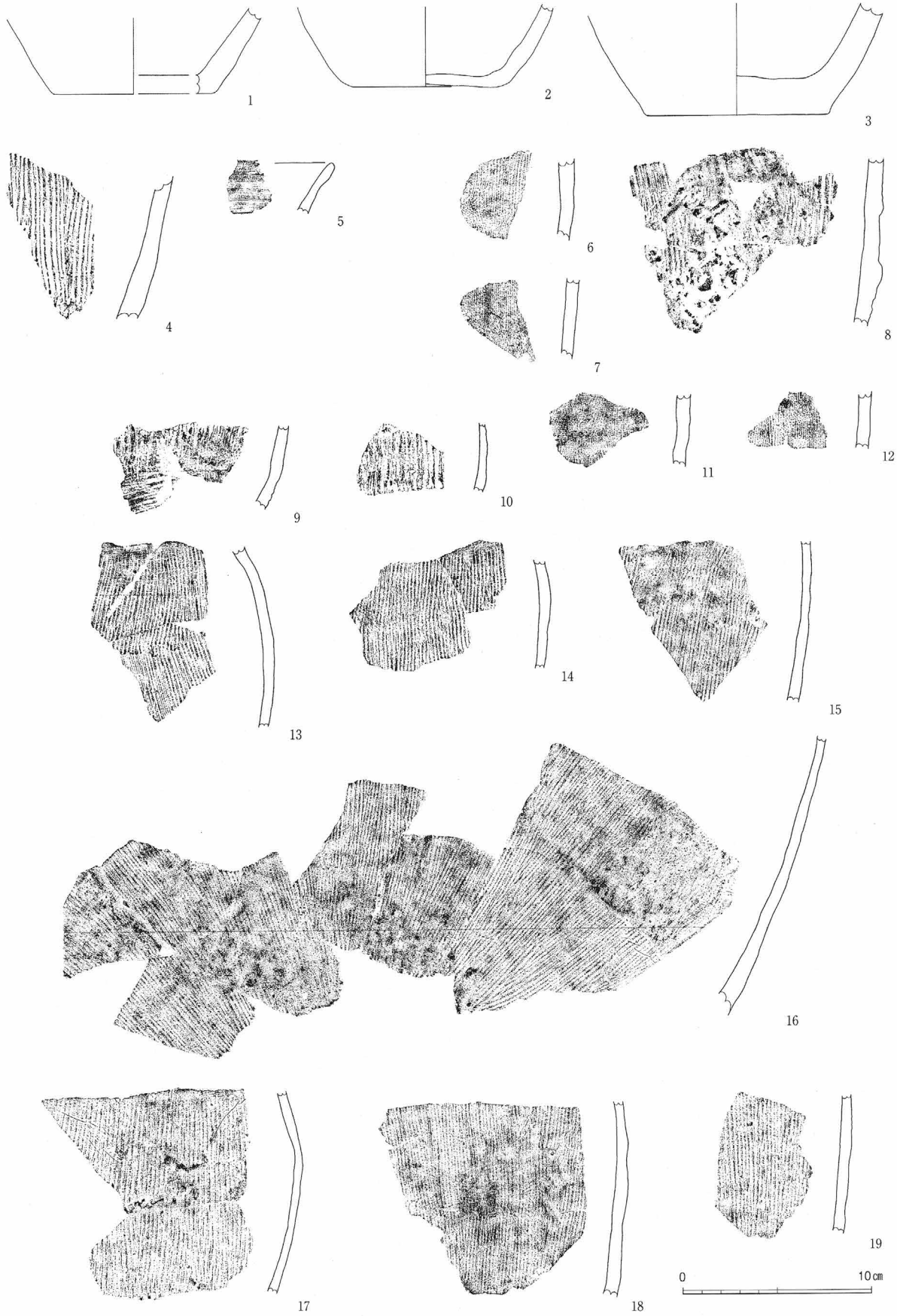
第72图 第17号住居址出土遺物 (16: S=1/6)

第19号住居址

この住居址はBV-60を中心に出土している。この住居址は、遺構検出中にカマドの存在に気がついて発見した遺構である。覆土をみると、上部に畑の耕作によるカクランが入り、断面図では表現されていないが、一部は床面にまで耕作がおよんでいた。このため、サブトレンチを開溝して遺構の確認を行っている。その結果、



第73図 第19号住居址実測図 (カマド: S=1/30)



第74图 第19、20、21号住居址出土遺物 (1~5: 19住、6~12: 20住、13~19: 21住)

カマド付近で壁高約10cm程度しか検出できなかった。この住居址はカマドの存在する壁で一辺約3.5m程度と考えられるが、床に硬化面が確認できないため、あくまでも推定にすぎない。

また、唯一壁の存在するカマド周辺の調査でも、カマドがほとんど破壊されており、支柱石付近が原状を留めているにすぎず、この支柱石より住居址側に焼土が確認されているが、袖等は明確に検出できなかった。

また、カマド脇からは土坑も出土しているが、この住居址の貯蔵穴と考えられる。

遺物 (第69図、第74図、第75図)

第69図12~17、第74図1~5、第75図1~3がこの住居址から出土した遺物である。

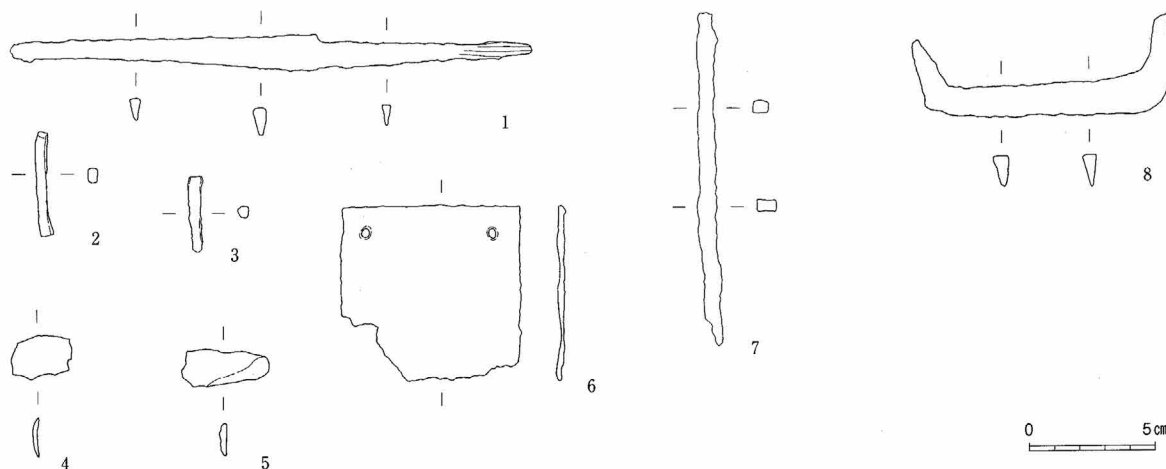
第69図12~14は内黒土器坏である。口径12.4cm~13.6cm、器高3.8~4.2cmの1形体のみである。12は黒色処理が一部抜け落ちてきているものの焼成は良好で、ミガキ調整も緻密に行なわれている。13は黒色処理が完全にぬげ、内面が褐色を呈している。内面のミガキ調整も12と比べるとやや粗い。14は内面のミガキは緻密である。また外面には煤が付着している。

第69図15は口径17.4cm、器高5.5cmの灰釉陶器碗である。高台は断面四角形であり、底部の糸切り痕はナデ消されている。内面は見込部にはハケを押し当てて、体部はハケ塗りによって施釉している。外面は釉薬は掛かっていない。

第69図16・17、第74図1~5は長胴甕の破片である。第69図16は頸部のしまった口縁部中部がやや肥厚した器形で、体部上部にまで口縁部のヨコナデがおよび、体部のハケ目調整がナデ消されている。また体部にはヘラ状工具を使用して横位の沈線が引かれている。内面には体部上部にまで横位のハケ目が施文されている。第69図17は16と比較して頸部のしまりは弱く、口縁部もやや直立気味である。体部のハケ目調整は頸部で口縁部のヨコナデ調整によってナデ消されているが口縁部下部にはハケ目調整による調整の痕跡を留めている。また、体部には横位のナデによってハケ目調整を消している箇所もみられる。内面は口縁部に横位のハケ目が施されている。第74図1~3は底部である。いずれもナデ調整によって仕上げられ、ハケ目調整等はみられない。

第75図1~3は鉄製品である。1は刀子である。切先部が欠損している。なお、茎部には錆着した木質部が残存している。2・3は釘の身部と考えられる。

遺物が少ないため明確にはできないが、ハケ塗り施釉の碗の出土していることから、8期と考えられる。



第75図 第19、第20号住居址出土遺物 (1~3:19住、4~8:20住)

第20号住居址

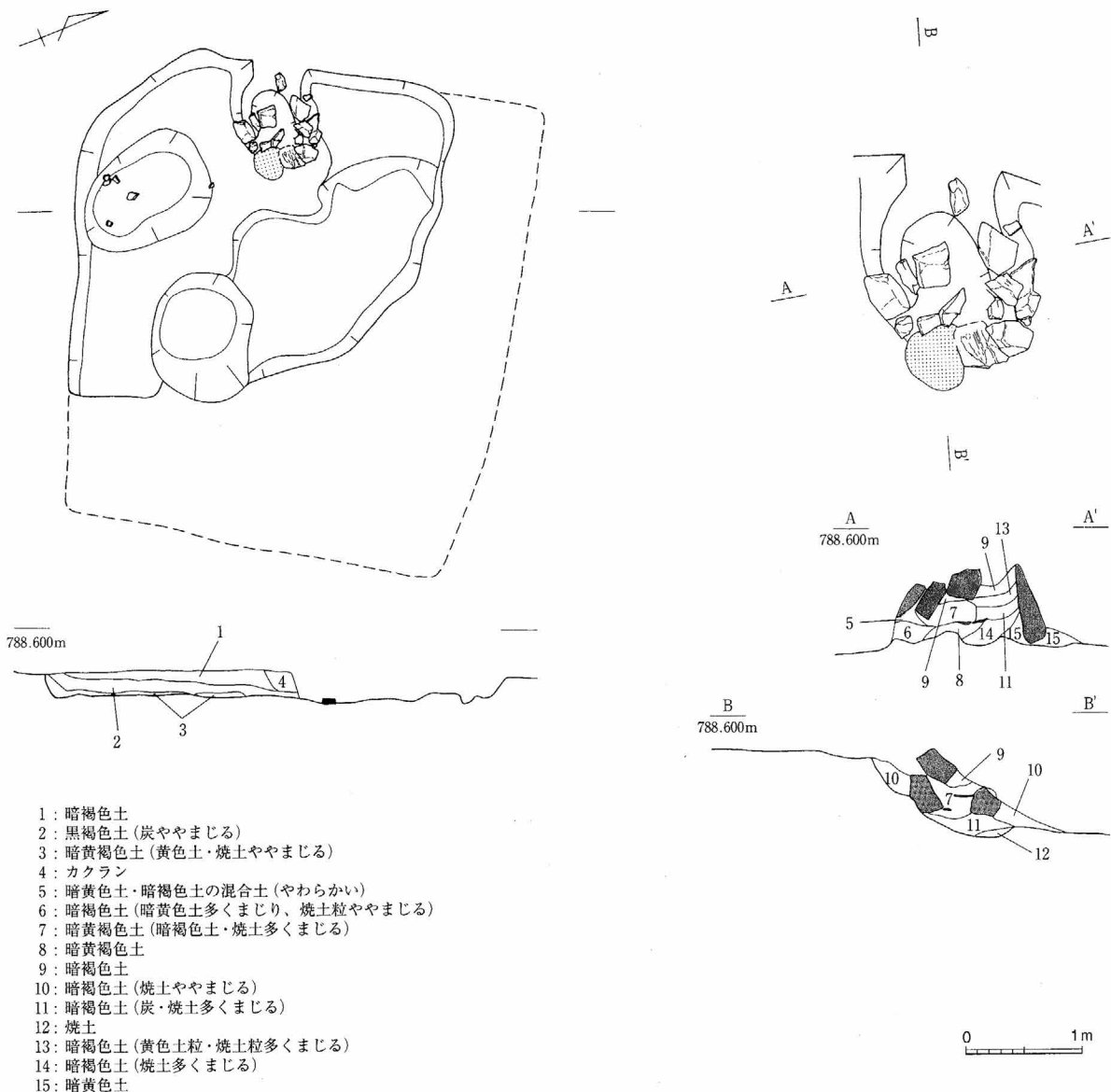
この住居址はBU-77付近より出土している。住居址北東部について、当初プランを捉えることができたと考えて調査を進めたが、床面付近においてなお道路敷の碎石状の砂利が出土し、なおかつこの部分のみが硬化していたことから、道路の基礎部分と判断し、図面には反映させていない。

カマドは比較的良好な状態で遺存しており、暗黄色土を基本とした土で石を固定し、カマドを築いていることがわかる。カマド袖の外側付近に焼土が集中しており、ここが焚口であった可能性が高い。

遺物(第74図、第78図)

第74図9~12、第75図4~8、第78図がこの住居址から出土した遺物である。

第78図1・2は土師器である。いずれも底部を欠損しているが、坏と考えられる。口径は12.0cmと13.8cmである。第78図3~20は内黒土器である。多くは坏と考えられるが、5は埴の可能性も考えられる。口径は13.5cm~14.8cm、器高は3.5cm~4.4cmであり、法量的には1法量と考えられる。全体的に比較的丁寧なミガキが



第76図 第20号住居址実測図 (カマド: S=1/30)

第IV章 遺構と遺物

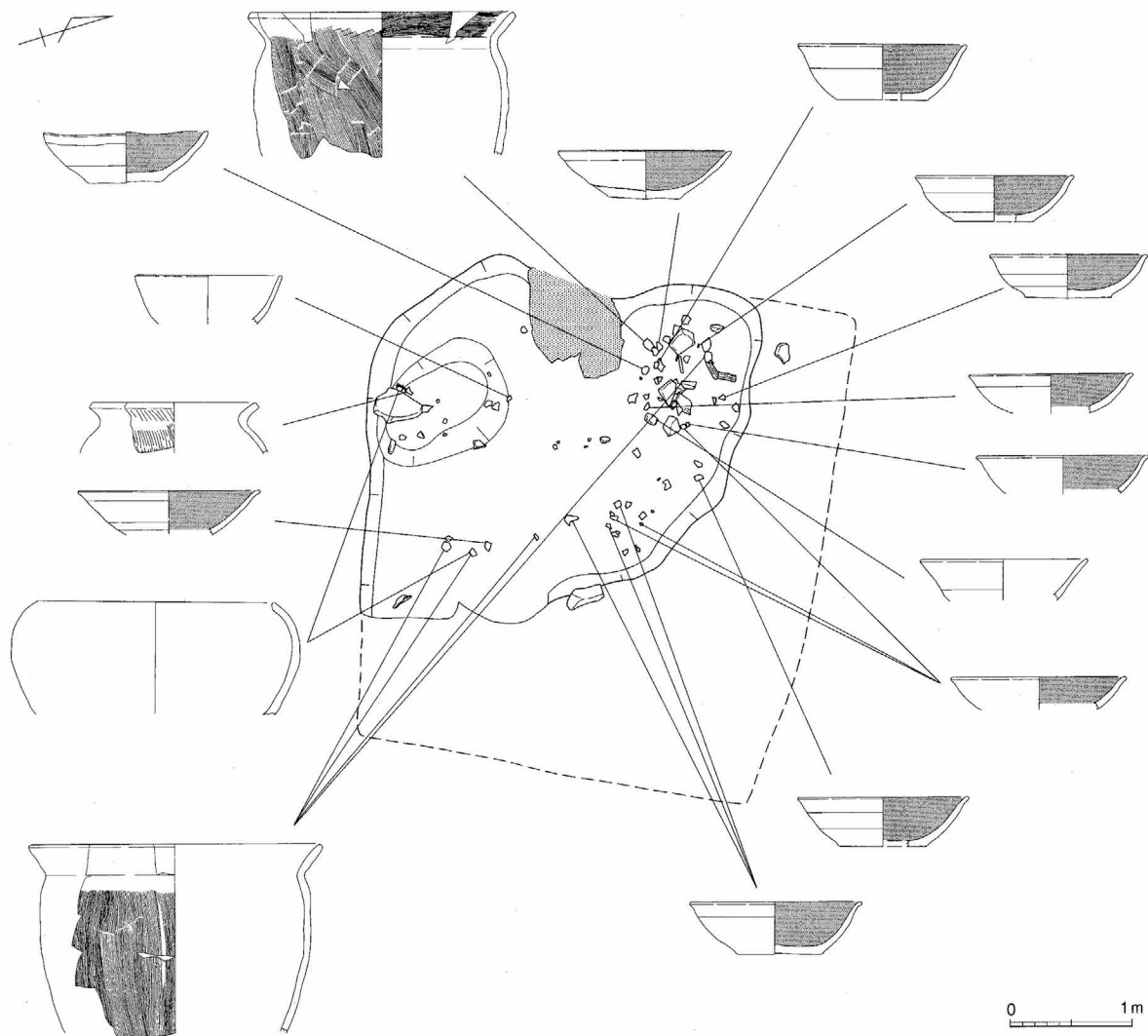
行われているが、14・15は見込部分のミガキが欠落している。なお、6・11は黒色処理が抜けている。また、12・13は体部外面一面に煤が付着しているのをはじめ、6は外面の口縁部付近に一部煤が付着している。

第78図21は緑釉陶器の皿である。高台は小さくまとめられ、やや薄い緑色を呈し、光沢がある釉薬を器面全面に施釉している。また、体部外面には重ね焼きの痕跡が残されている。口径は15cmを測り、器高は2.4cmである。22は灰釉陶器碗である。やや黒味のある胎土で、釉薬は少し緑色味を帯びている。施釉方法は漬け掛けである。

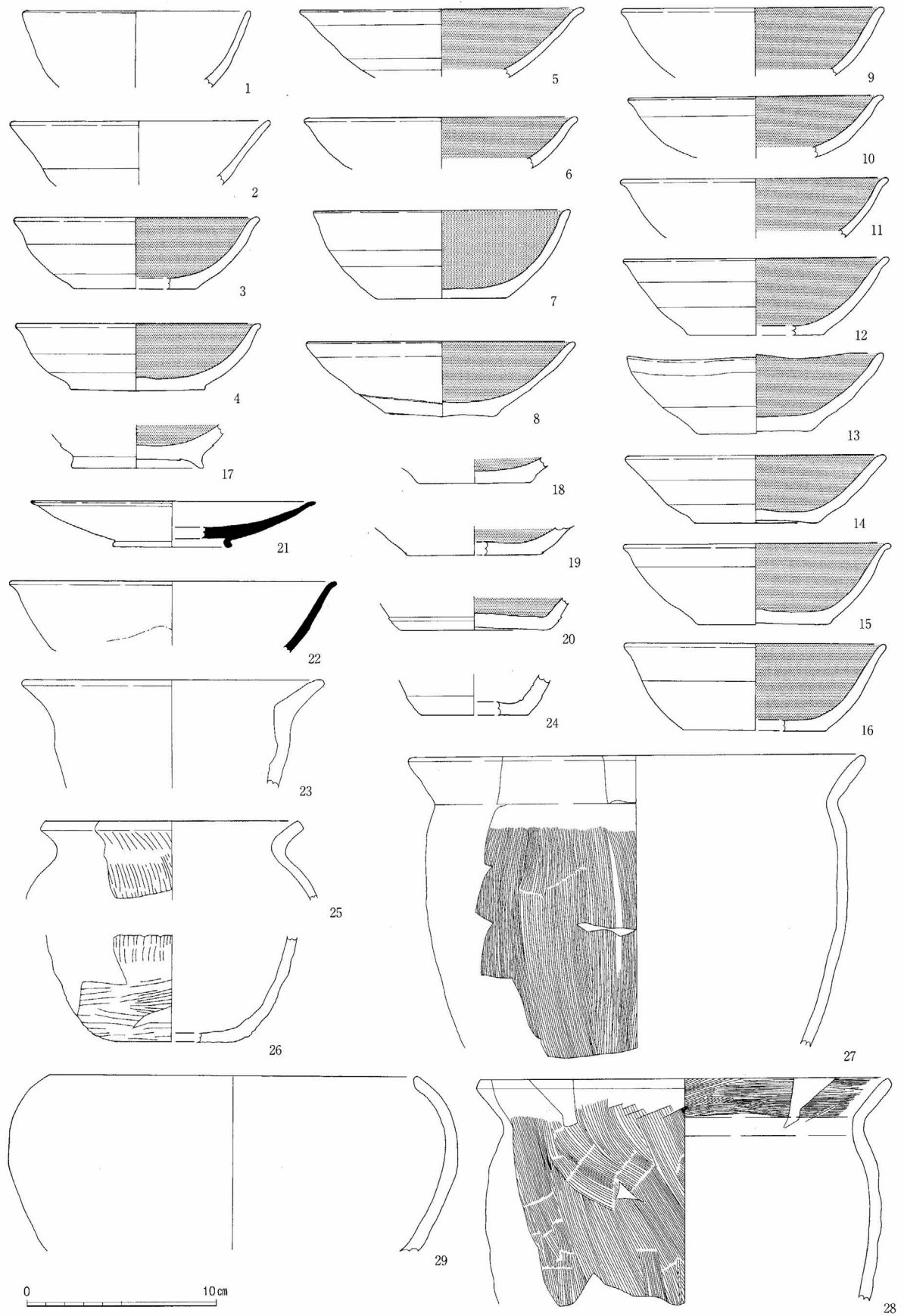
第78図23～28は甕である。23は粗雑な作りで、口縁部も大きく波うっていることから、ロクロを使用せずに成形していると考えられる。25・26は淡褐色系の明るい色調で、ハケ目調整は器面全面に施してあるものの、やや粗雑な印象が残る。27・28は長胴甕である。28は口縁部まで縦位のハケ目調整が行われている。

29は内・外面共に黒色を呈した鉢状の器形を持つもので、内・外面にやや粗雑なミガキが施されている。

第75図は鉄製品である。4～7は用途不明品である。4・5は鉄の小片、6は長方形の形体をしており、非常に薄い。四隅には穴が開けられていると考えられる。7は棒状の鉄製品である。断面が長方形をしており、工具の柄の可能性も考えられる。8は麻引き金具である。出土遺物から8期と考えられる。



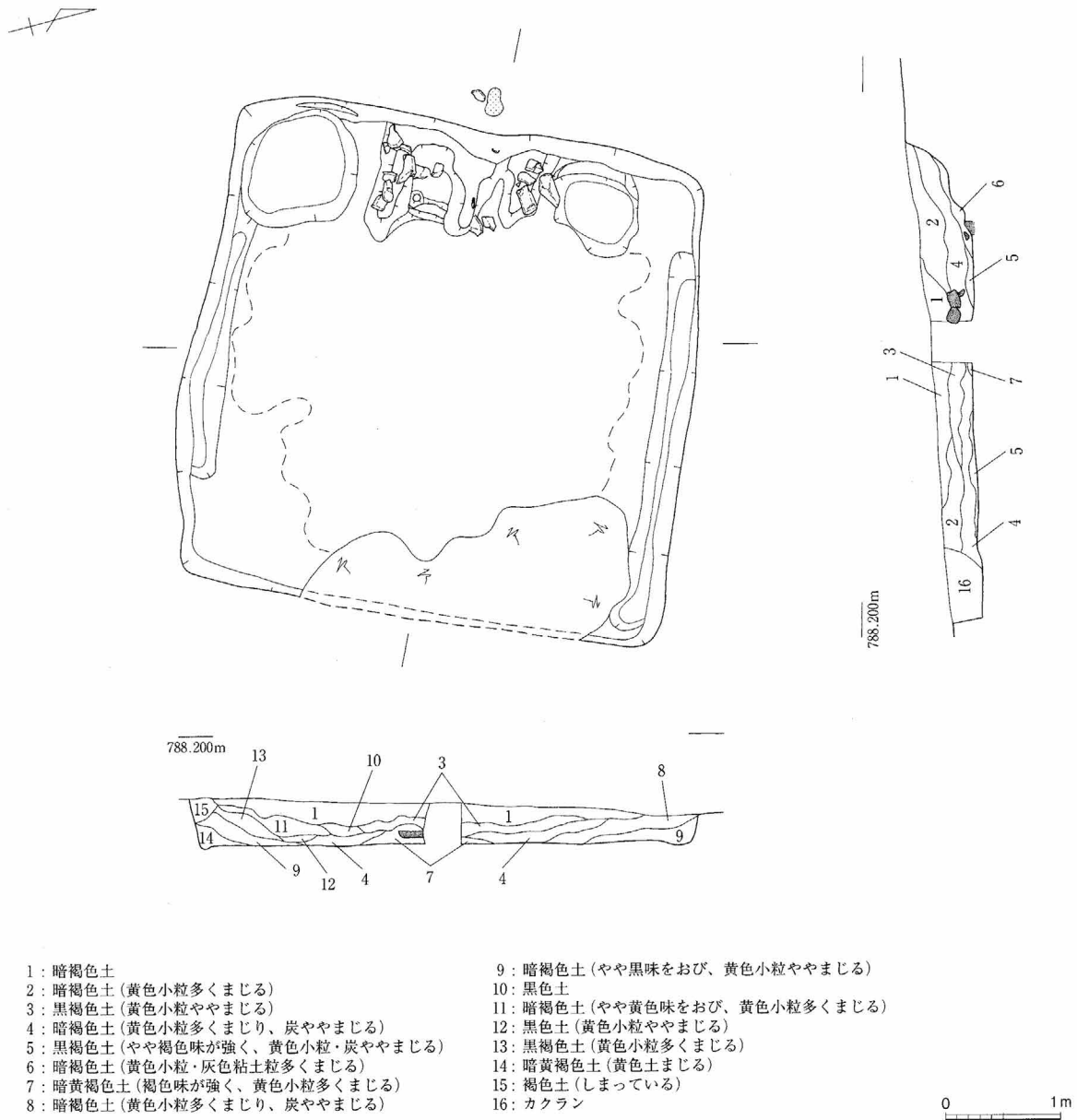
第77図 第20号住居址遺物出土状況図



第78图 第20号住居址出土遺物

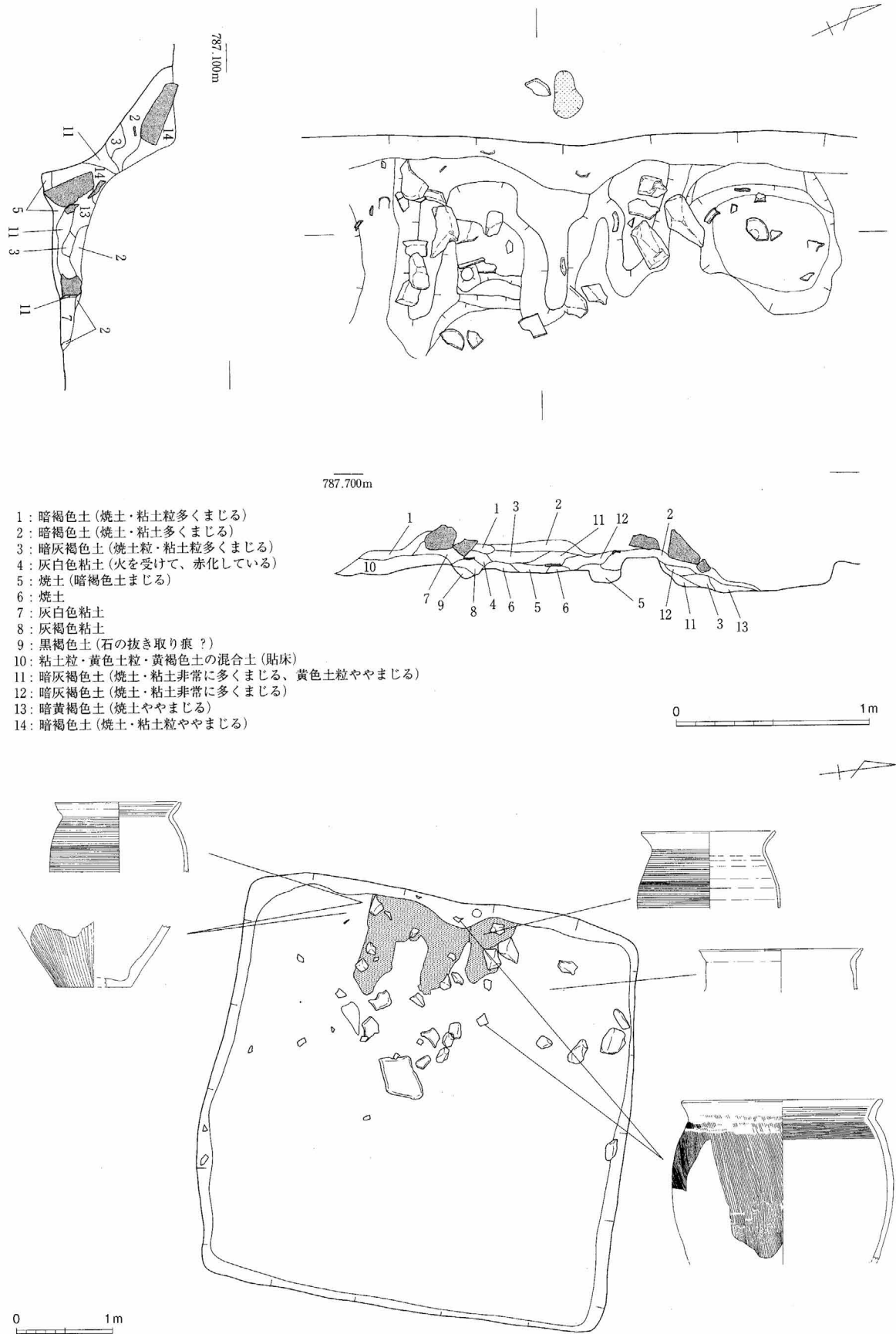
第21号住居址

この住居址はBX-80から出土している。東壁はカクランによって一部失われているが、遺存状況は良好であった。プランは4.3m四方の方形で、北・南壁際に周溝が出土している。硬化面は床中央部に確認された。また、カマドは西壁中央部に出土し、両脇から土坑が検出されている。カマドは、左袖は遺存状況が比較的よかったが、右袖はカマドを掘り上げた段階で石を抜きとった痕跡が確認でき、さらに土坑内に石、粘土が流れ込んでいる様子が断面観察で明らかになっている。カマド自身は石組に灰色粘土を貼った、石芯粘土カマドであった。また、住居址外に焼土を伴うピットが検出されていることからここに煙道があったと考えられる。さらに断面観察によると焼土の混入されている土の上に石がのっていることから、天井石が置かれていたと推定される。住居址内にはカマドに使ったと思われる石が散乱していた。

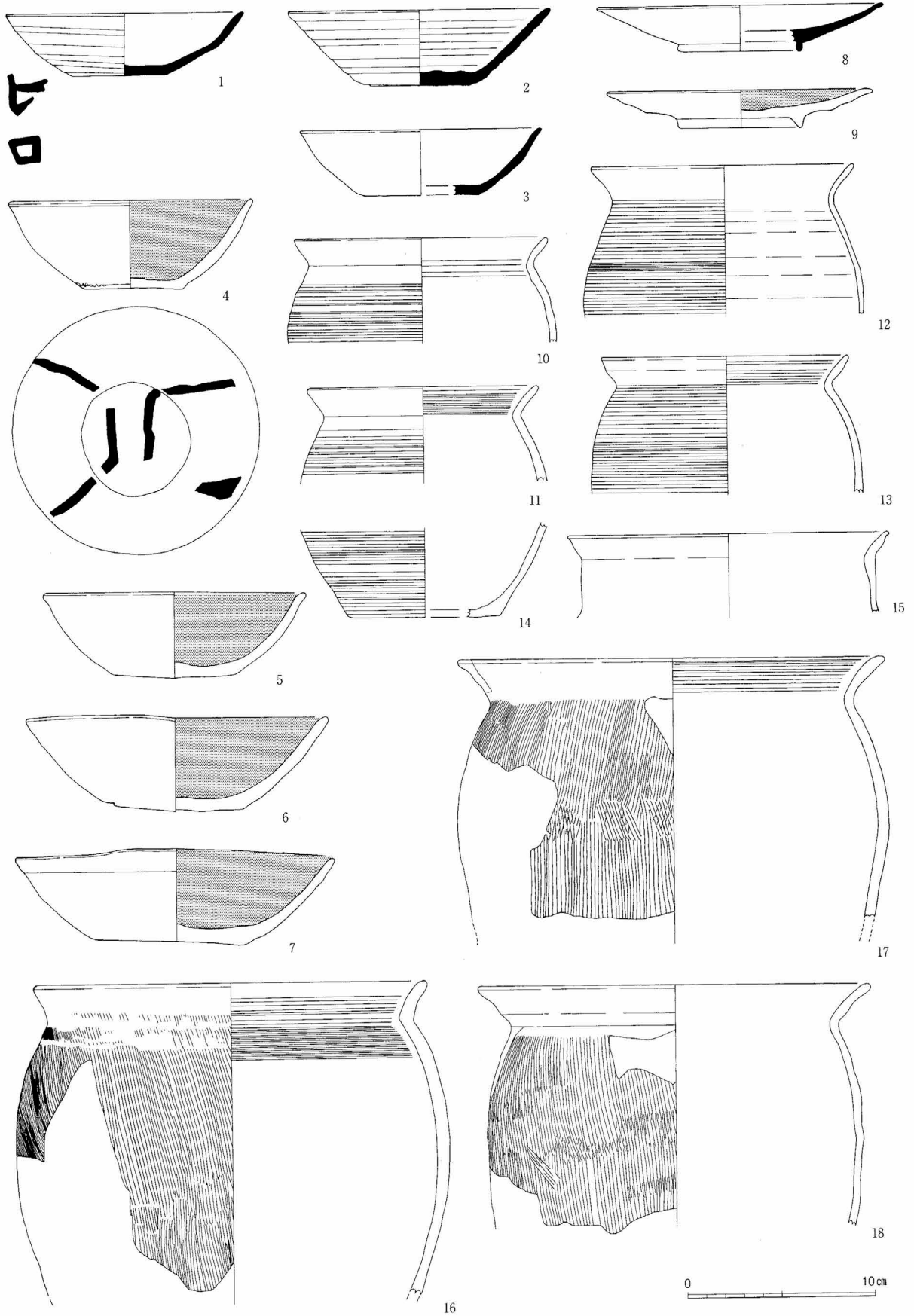


第79図 第21号住居址実測図

1. 住居址



第80図 第21号住居址カマド実測図・遺物出土状況図



第81図 第21号住居址出土遺物 (1)

遺物 (第74図、第81図、第82図)

第74図 13~19、第81図、第82図がこの住居址から出土している。

第81図 1~3は須恵器坏である。いずれも軟質須恵器で、口径12.7cm~14.1cm、器高3.4cm~4.1cmである。このうち、2は赤褐色を呈し、酸化焰によって焼成されていると考えられる。また、1には体部外面に墨書が確認された。

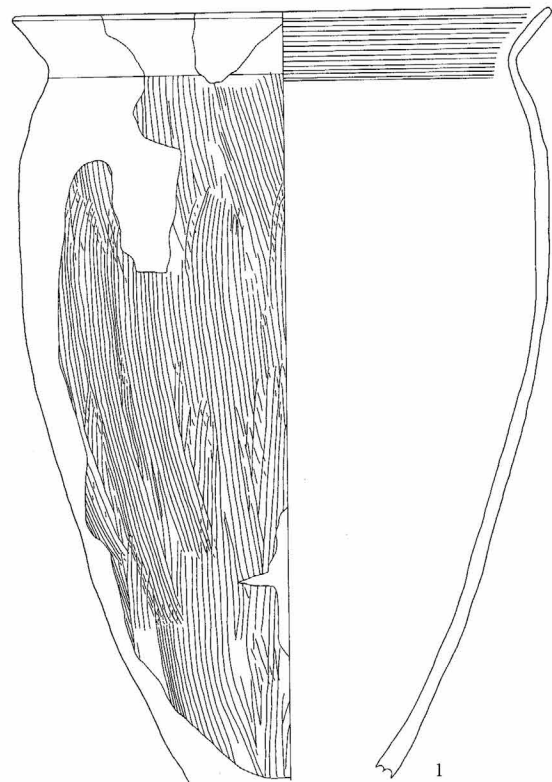
第81図 4~7は内黒土器の坏である。口径13.1~14.1cm、口径4.2~4.6cmと器高16.1~17cm、器高5cmの2法量が存在する。いずれも内面のミガキは丁寧に行なわれている。なお、4は体部から底部にかけて墨書があり、5は外面一面に煤が付着し、6については黒色処理が抜け落ちている。

第81図 9は皿である。口径15.4cm、器高2cmで、ほぼ完形であったが、内面にはミガキは施されていない。また、底部に糸切り痕を残している。

第81図 8は緑釉陶器の皿である。口径15.4cm、器高2.4cmで、薄緑色を呈し、光沢のある釉薬を全面に施釉している。

第81図 10~15は小型の甕である。10~14は外面に横位のカキ目が施された甕で、10・11は体部上部まで、12・13は頸部まで施文されており、10・12は口縁部内面の横位のカキ目がみられない。さらに12は体部内面に整形時のヨコナデ調整の痕跡をよく留めている。また、10・11は口縁部が「く」字状に屈曲しているが、12・13は若干直立気味に立ち上がっており、12では口縁の伸長がみられる。15は上述の甕と異なり、体部をナデ調整とし、口縁部を短く折り曲げるようにして成形している。全体の器形は明確にできないが、直線的な体部と推定できる。

第74図 13~19、第81図 16~18、第82図 1・2は長胴甕である。いずれも体部のハケ目調整は頸部付近までみられる。第81図 16は他の甕に比べて口縁部が短く、直立気味に立ち上がっている。また、頸部から口縁部にかけては、ハケ目調整の痕跡を十分にナデ消しておらず、痕跡をとどめている。内面のハケ目も体部上部まで施文されている。第81図 17は体部上部と中部のハケ目調整の重複部分に、短いハケ目調整を重ねて行なっている。第81図 18はやや長めの口縁部をもつ甕である。口縁部にはハケ目はみられない。第82図 1は器形がほぼ推定できる破片である。ハケ目調整は、口縁部上

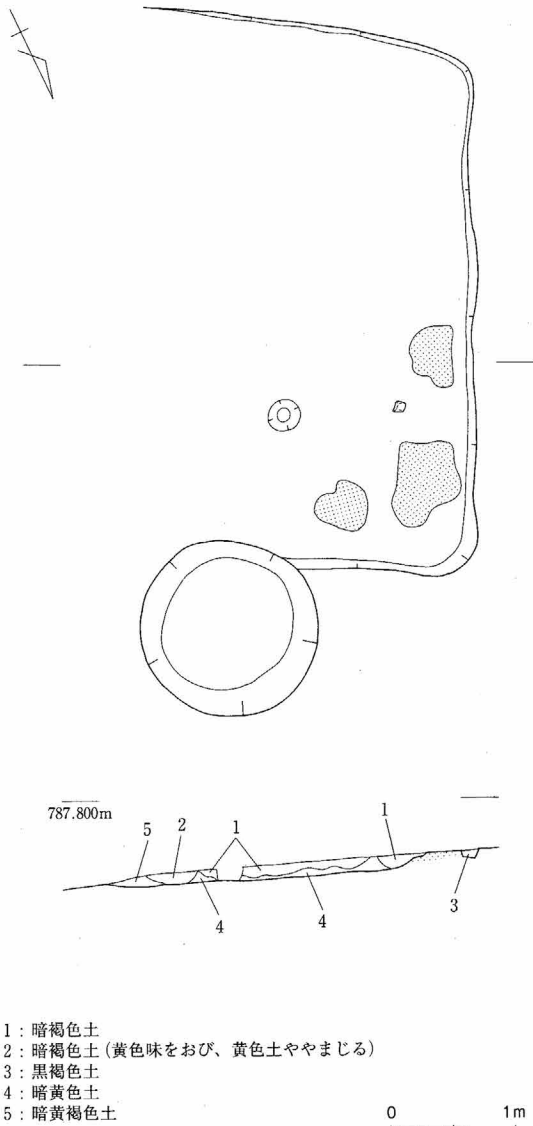


第82図 第21号住居址出土遺物 (2)

第IV章 遺構と遺物

半部、下半部、中部の3回にわけて施されている。

第82図3～5は鉄製品である。3は刀子の茎部かとも考えられる。また5は釘の頭部である。



第22号住居址

この住居址はCD-82から検出されている。遺存状況が悪く、遺構全体の約1/2程度しか調査できなかった。また、北隅部からは、焼土が出土しており、北東部には第106号土坑が重複して出土している。この遺構は全体的に黄色味を帯びた褐色土が覆土の中心であり、他の住居址と様相が異なることから、平安時代の住居址ではない可能性もある。また、焼土が検出されていることを考え合わせると、不明遺構に関連した、特殊な性格の遺構とも考えられる。

この遺構からは遺物は出土していない。

第83図 第22号住居址実測図

2. 土 坑

(1) 土坑と遺物

今回の調査では、番号をつけて記録した土坑だけでも143基を数える。そのため、ここではそのすべてについて記述することは紙面の関係上不可能なので、代表的な土坑のみ記述し、残りの土坑については一覧表にまとめた。

土坑は大きく小竪穴状の形体を示すものと、断面皿状のもの、箱状のもの、そして落とし穴状の形体を示すものに大別できる。落とし穴状の土坑は、遺構検出面の形体が、楕円形を呈するものと、円形を呈するものがあり、底面での形状はそれぞれ方形、長方形を呈していることから、掘り込んだ当初は方形や、長方形を呈していた可能性が考えられる。また、底部にピットが掘り込まれているものもある。

なお、第140号土坑と第141号土坑は集石としての遺構番号もついており、重複しているため、土坑番号を欠番としている。

第4号土坑 (第84図)

この土坑は第5号住居址内から検出されている。この土坑は、住居址によって削平されてしまい、検出時の深さが15cm程度となってしまった。ちなみに、住居址検出面からの深さでは約50cmを測る。プランは直径約1m弱の円形で、底部には小規模なピットが数ヶ所出土している。なお、この土坑の底部付近からは、小片ではあるが土器片が出土している(第106図4～9)。

遺 物 (第106図)

第106図4～9がこの土坑から出土している遺物である。いずれも小片のため、全体像をとらえることは困難であるが、文様をみると、4は縄文を地文としてヘラ状工具によって沈線を施文している。5も4と同様に縄文を地文として沈線を施文している。両者とも焼成は良好であるが、5は砂粒の混入が少なく、堅緻な印象をうける。6・7は縄文を施文した土器である。

第5号土坑 (第84図)

BK-95付近から出土している。直径1m程の円形で、深さは39cmの断面逆台形を呈する土坑である。この土坑も第11号住居址に切られて出土しているが、検出面まで掘り込みがあったとすると、約70cmの深さがあったと推測できる。遺物の出土はないが、礫がまとまって出土している。また、覆土は全体的に黒色系の土でおおわれており、中央部で炭が出土しているほか、その下層からは焼土粒が混入している。なお、底部では焼土が一面に検出されている。

第8号土坑 (第87図)

この遺構はAV-93から出土している。平面プランは直径2.5mほどの不正円形を呈し、断面すり鉢状の土坑である。また、土坑の周囲にはピットが数ヶ所検出されているが、この遺構に伴うものかは明確にできなかった。

遺 物 (第107図、第108図、第113図)

第107図・第108図1～11、第113図9・11がこの遺構内から出土している遺物である。第107図、第108図1は条痕文を施した土器である。総じて外面は褐色系の色調を呈しているが、内面は黒褐色系の色調をしている。

第IV章 遺構と遺物

また、焼成も良好なものが多い中で、第107図6・8・11・13はややあまい。施文も、内面に条痕文が確認できないものは第107図6・11・13であり、不明瞭な破片は第107図2・8・12であった。このほか、第107図7には破片上部に浅い沈線で2単位の山形を施文している。また、10の破片下部には軽く絡条体を押し当てた痕跡が5単位程度確認できる。さらに、13は貝殻による条痕の可能性が高い。

また第107図4は破断面下部に煤が確認でき、6には内面に煤が付着している。

第108図2は、ヘラ状の工具を使用して矢羽根状に文様を施文している。淡褐色を呈した焼成良好な土器である。

第108図3～6は文様構成に刺突文を伴う破片である。刺突文に用いた原体は植物の茎状の繊維痕をとどめるもので、5の下部には平行沈線状の横位の沈線がみられる。また、4は条痕文を施文した後に刺突を加えている。6は横位の刺突文の間にやや浅めの沈線が2条引かれている。なお、5は外面に煤が付着している。

第108図7～11は沈線が施文されている土器である。7は縄文を地文として、太めの浅い沈線を縦に波状に施文している。9は浅く細い沈線を施文している。10は条痕文を地文として、その上から沈線を縦位に引いている。11の外面には煤が付着している。

第9号土坑

この土坑は第3号建物址の柱穴に隣接した柱穴の一つである。しかし、鉄滓の一括出土があったため、本節に掲載している。また、柱穴と判断して調査していたため、土層断面図は作成していない。覆土中層から下層にかけて大量に鉄滓が出土した。(図版77)

遺物

図版77が出土した鉄滓である。重量にして約1,400gであった。

第45号土坑(第92図)

DQ-61から出土している。直径約1.1mの円形で、深さは最深部で25cmを測る。斜面からの出土のため、北東部はほとんど壁が失われていた。この土坑からは押型文が一点出土している。

遺物(第108図)

第108図12がこの土坑から出土している押型文土器である。山形文を横位に施文している。原体の幅は明確にできないが、山形を2単位施文していることが確認できる。焼成は良好で、胎土も緻密である。

第65号土坑(第85図、第94図)

CR-60付近から出土している。平面楕円形をしており、長径1.32m、短径0.96mで、深さは35cmを測る。この土坑からは、覆土下層で、土器片が出土している(第109図1・6～9)。

遺物(第109図)

第109図1は土坑底部付近より出土した破片を復元したものである。文様は半截竹管状工具による並行沈線を主体として構成されている。焼成はあまく柔らかい。6～9は覆土中から出土した土器である。6・8は同一個体である。外面に縄文を施文している。また、6・7の破片下部には粘土紐が一部残されていることから隆帯が貼付されている可能性が高い。さらに口唇部は粘土紐を貼り付けて、波状とし、内面には三角形の凹部を残し、文様化している。この土器は焼成が良好な褐色を呈する土器である。9は半截竹管状工具を使用して並行沈線を施文している土器である。暗褐色を呈した焼成良好な土器である。

第 66 号 土 坑 (第85図、第94図)

CJ-72付近より出土している。平面プランは不整形を呈しており、直径は約1.5mを測る。深さは遺構検出面から約1.1mを測る。断面形体は箱状をしており、覆土中央部は暗褐色系、周辺部は暗黄褐色系の土で覆われていた。なお、底部直上には黒褐色の土が堆積しており、一般的な土坑では黄褐色系の土が堆積しているのとは対照的であった。また、この土坑の覆土中層からは土器片が出土している(第109図2・第110図1~31)。

遺 物 (第109図、第110図、第113図)

第109図2は土坑中より出土した破片を接合した資料である。この土器は第16号住居址および第67号土坑から出土している土器と同一個体の可能性がある。第110図1~31は覆土中から出土した破片である。1・2・4は押圧隆帯を貼り付けている。1は押圧隆帯の下部に縦位にやや薄めの隆帯を貼り付けた脇に押引沈線文を施文している。2は横位のナデの痕跡を留め、その上に押圧隆帯を貼付している。10がこの破片と同一個体と考えられる。10は内面に煤が付着している。4は縄文が地文として施文されている。3は印刻文が刻まれており、上端部に接合痕が確認されたが、擬口縁を呈している。5~7は平行沈線文を施文している。7はレンズ状のモチーフを描いている。8~31は縄文を施文した破片である。9は内面の口縁部上部にも縄文を施文している。なお、口唇部にはキザミが施されている。16・19・21・24・30・31は外面に煤が付着している。

これらの破片は概して焼成も良好であるが、3はややあまい。

第113図5~7は打製石斧である。5は刃部と、基部が欠損している。6は基部が欠損している短冊型と考えられる。7は完形の石斧であり、撥型である。

第 67 号 土 坑 (第85図、第94図)

この土坑は第66号土坑、第54号土坑とならんで出土している。直径約1.2mの平面円形であり、深さはおよそ60cmを測る。断面の形体は、第66号土坑と同様に箱型を呈している。この土坑の覆土上層から中層にかけて、形体の判明する土器が3個体(第109図3~5)と、その下部に礫が一個出土している。

遺 物 (第106図、第109図)

第109図3~5が一括して出土した遺物である。3は、縄文を地文とした比較的薄手の土器であり、焼成も良好で、胎土も堅緻である。縄文は口縁部にまで施文され、屈曲部まで結節浮線文を貼付し、その下部から「く」字状に屈曲する頸部までは押圧隆帯を施文している。なお、体部は一度大きく屈曲してから底部に続く器形である。また、内面の口縁部には1条の隆帯が巡らされている。この土器の頸部の外面と、内面頸部には煤が付着している。底部は欠損している。5は頸部が強く屈曲している土器である。口縁部には結節浮線文が貼り付けられている。焼成は良好で、胎土も緻密であった。3・5は共に口縁部が波状を呈し、3単位に波長を変化させている。4は、底部が「く」字状に屈曲し、口縁部も大きく開く器形と考えられる。頸部には横位に押圧隆帯が貼り付けられていたと考えられるが、剥離し、ほとんど残存していない。焼成は良好である。

第106図30~33も覆土中から出土している。31は幅広の粘土を器面に貼り付けた後に、半截竹管状工具によって平行沈線文を施文している。やや砂粒が多いものの焼成は良好である。30は縄文を地文として結節浮線文を貼付している。口縁部は押圧によって波状を呈している。焼成は良好である。33は内、外面共に横方向のナデ調整の痕跡をとどめた土器である。32はやや焼成のあまい土器で、外面に微妙に隆線文が施文されているように考えられる。

第IV章 遺構と遺物

第93号土坑（第98図）

この土坑はCM-77から出土している。直径約0.9m、深さ約20cmを測る断面皿状の形体の土坑である。覆土は中心部を暗褐色が土で占め、周辺部は黄色系の土が堆積している。この土坑は覆土中層から礫が出土しているが、遺物はほとんど出土していない。

遺物（第100図、第111図）

第110図37、第111図2がこの土坑から出土している。第111図2は口縁部である。断面測量のため、口縁部の傾きはもう少し内傾する可能性もある。文様は、器面全体に半截竹管状工具によって平行沈線文が施文されている。外面には若干煤が付着している。また、焼成は良好である。なお、胎土には砂粒が多く混入されている。第110図37は縄文を施文した破片である。

第111号土坑（第100図）

CF-82付近から出土している。長辺1.2m、短辺0.9mの長方形を呈する。深さは約30cmで、断面皿状を呈している。この覆土中からは、多数の遺物が出土している。土層を観察すると、覆土の堆積状況は、土坑西部から一方的に土砂が流入してきている様子を伺わせ、ほかの土坑とは堆積状況に違いがみられる。

遺物（第111図、第112図）

第111図4～19、第112図が土坑から出土した遺物である。第112図1～22は覆土下層～底部付近で出土し、図面に記録して取り上げた遺物である。縄文のみ施文されているもの（1・5・6・10・12・15・17・19）、縄文を地文として上部に結節浮線文を施文しているもの（4・8・9・18・21）や浮線のみを貼り付けるもの（3）、また、地文を持たずに結節浮線文を施文しているもの（14）がみられる。4と16、5と37・38はそれぞれ同一個体である。そのほか、20・22は平行沈線で施文されているもので、特に20は平行沈線で描いた菱形文の中心部の粘土を印刻文状に抉りとっている。なお、8は浅鉢の破片と考えられ、体部外面には接合痕を留めた上に縄文を薄く施文している。総じて焼成は良好であるが、18・19は砂粒の混入が多く、ややもろい。また、1・7・8・14・17の外面と、11・19の内面には煤が付着している。

第111図4～19と第112図23～46は覆土中から出土した破片である。これらの遺物は文様によって大きく5種類に分類することができる。まず、平行沈線文によって施文された土器（第111図4～6）であるが、5は三角文の中の器壁を抉りとり、印刻状の文様としている。6は外面に煤が付着している。5は明褐色を呈し、そのほかの破片は褐色を呈している。焼成は良好である。つぎに押圧隆帯を貼り付けた土器（第111図7・8）があげられる。8はヘラ状工具によってキザミを施文している。7は焼成はあまい。両者共に褐色を呈している。また、第111図9、第112図24～30・32・46は縄文を地文として上部に結節浮線文を貼り付けている、多くの破片が焼成良好な土器であるが、第112図32は砂粒の混入が多く、ややもろい。そして無文部に結節浮線文を施文する破片も出土している（第112図31・33）。そのほか、平行沈線文を施文した後に、この文様に直行するようにキザミをいれている土器（第112図34～36）や、縄文を地文としてその上に浮線文を貼付する土器がみられる（第112図39～43）。また、縄文のみを施文する破片も出土している（第111図10～19）。これらの土器は焼成良好であり、12・13・18が淡褐色を呈しているほかは暗褐色系の色調である。

なお、第111図10・11・15・18・第112図28・33・41は外面に煤が付着しており、第112図32・42は内面に、また第112図46は両面にそれぞれ煤が付着している。

第137号土坑 (第102図)

DL-61付近を中心に検出されている。第128号と第129号土坑に切り合って出土している。残存している部分でみると、直径1.4m、深さ35cmを測る。この遺構からは縄文時代早期の遺物が出土している。

遺 物 (第108図)

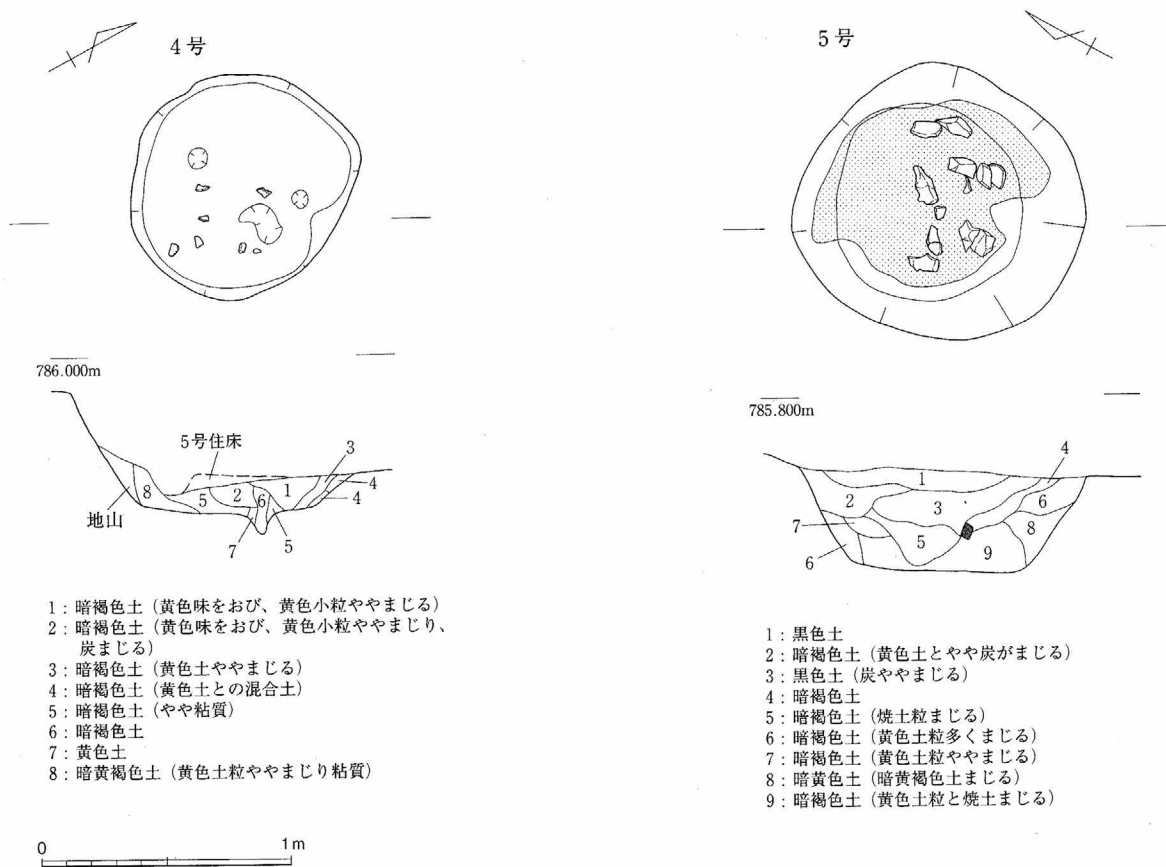
第108図13・14がこの遺構から出土した遺物である。13は縄文を施文した後にヘラ描沈線を施文している。口唇部も同様に縄文を施文した後に沈線を施文している。胎土中に雲母や砂粒が多く混入されており、焼成は良好であるがややもろい。14は竹管状工具による沈線文が施されている。砂粒が多く混入されており、ややもろい。両者共に外面は淡褐色系の色調、内面は暗褐色系の色調である。

第142号土坑 (第85図、第104図)

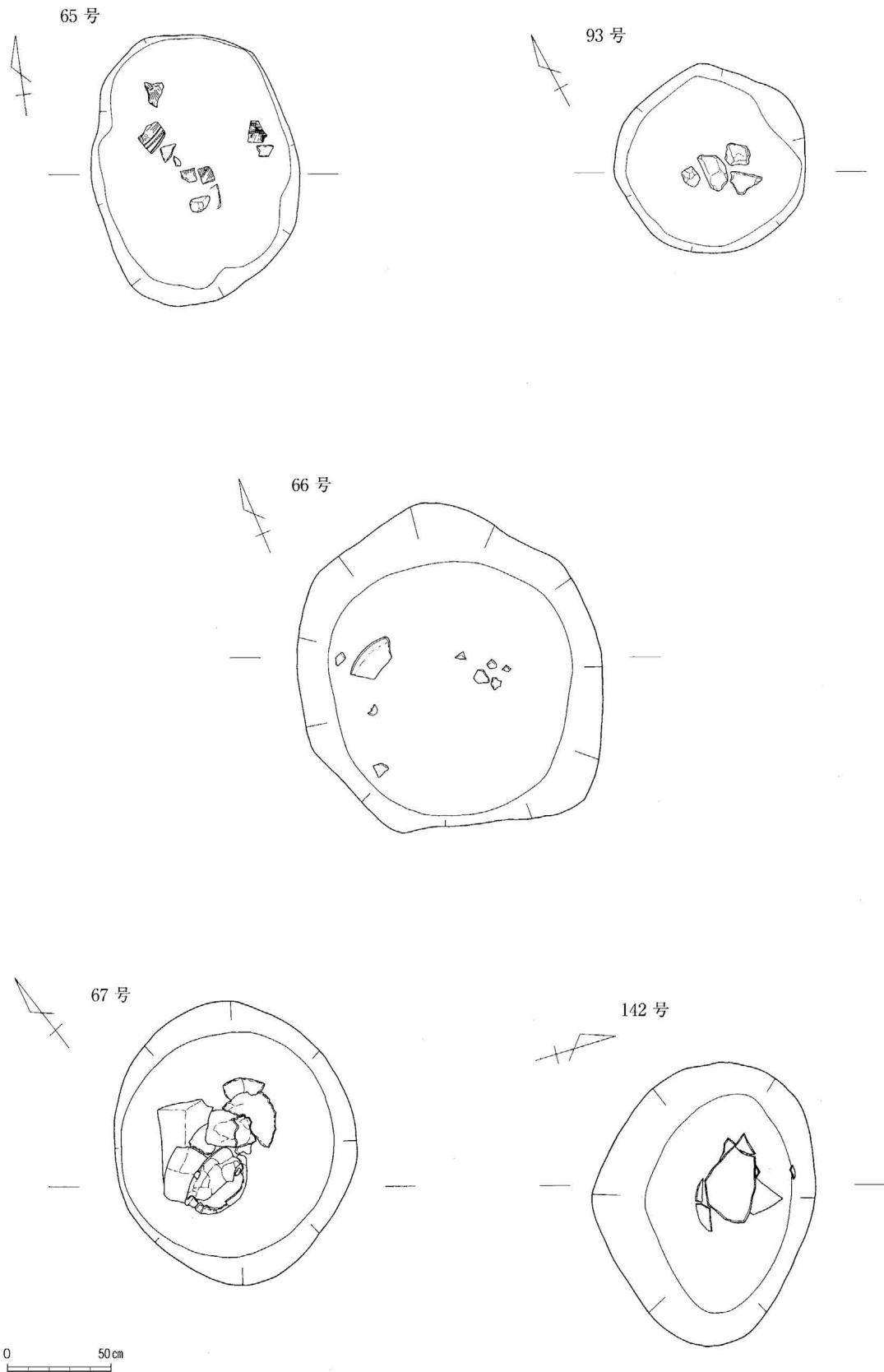
BC-58から出土している。重機による表土除去作業中に、須恵器の破片が出土した時点で、遺構検出面より深く掘削していることに気づいたため、遺構の上部および遺物の一部を破壊してしまった。短径1.1m、長径1.2mの楕円形のプランで、前述のとおり掘削が深くまでおよんでしまい、残存した深さは約15cmであった。

遺 物 (第111図)

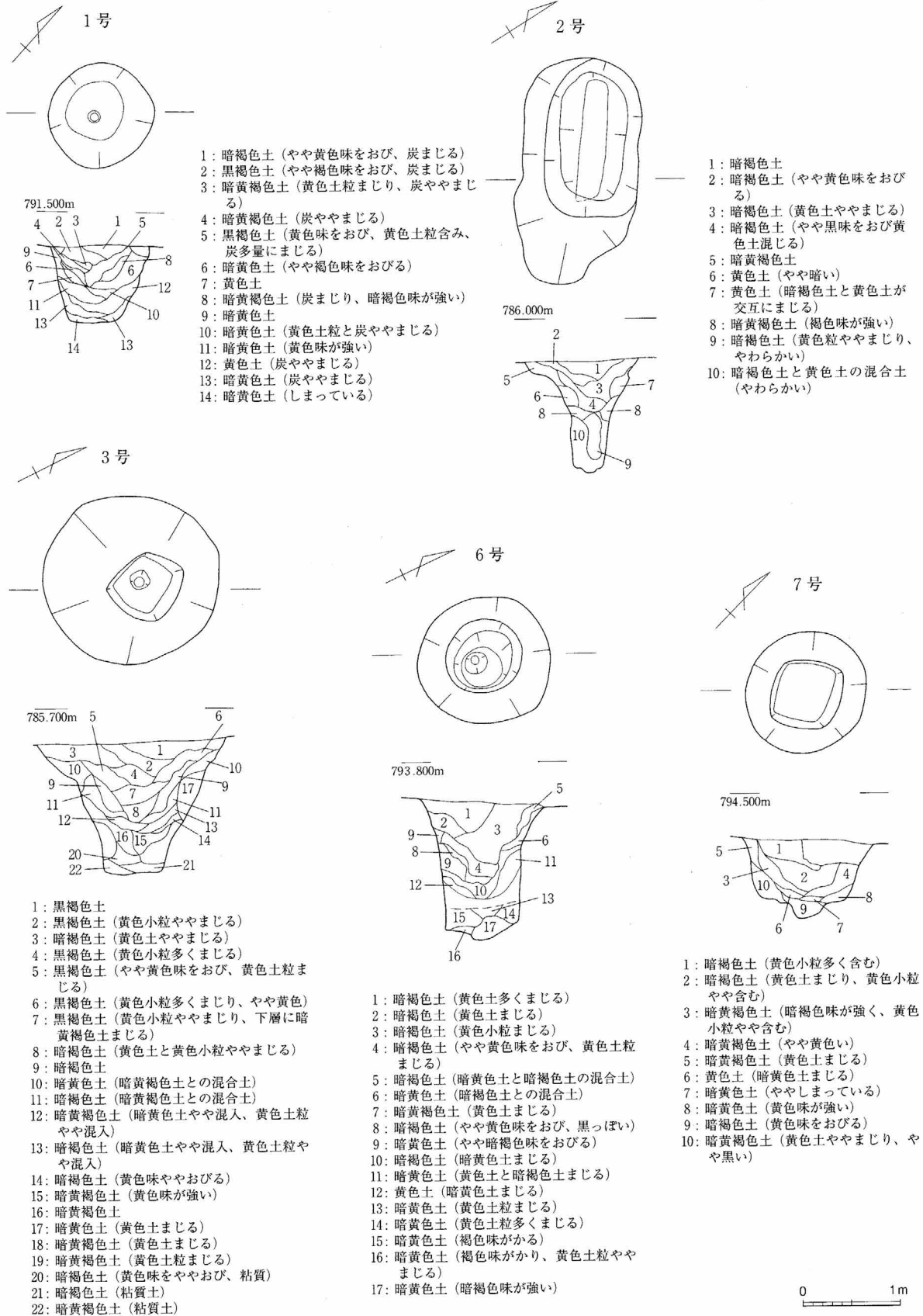
第111図20がこの土坑から出土している。口径約45cm、残存高約35cmを測る。大部には全面に平行タタキ目を確認できるが、内面には工具痕を留めていない。



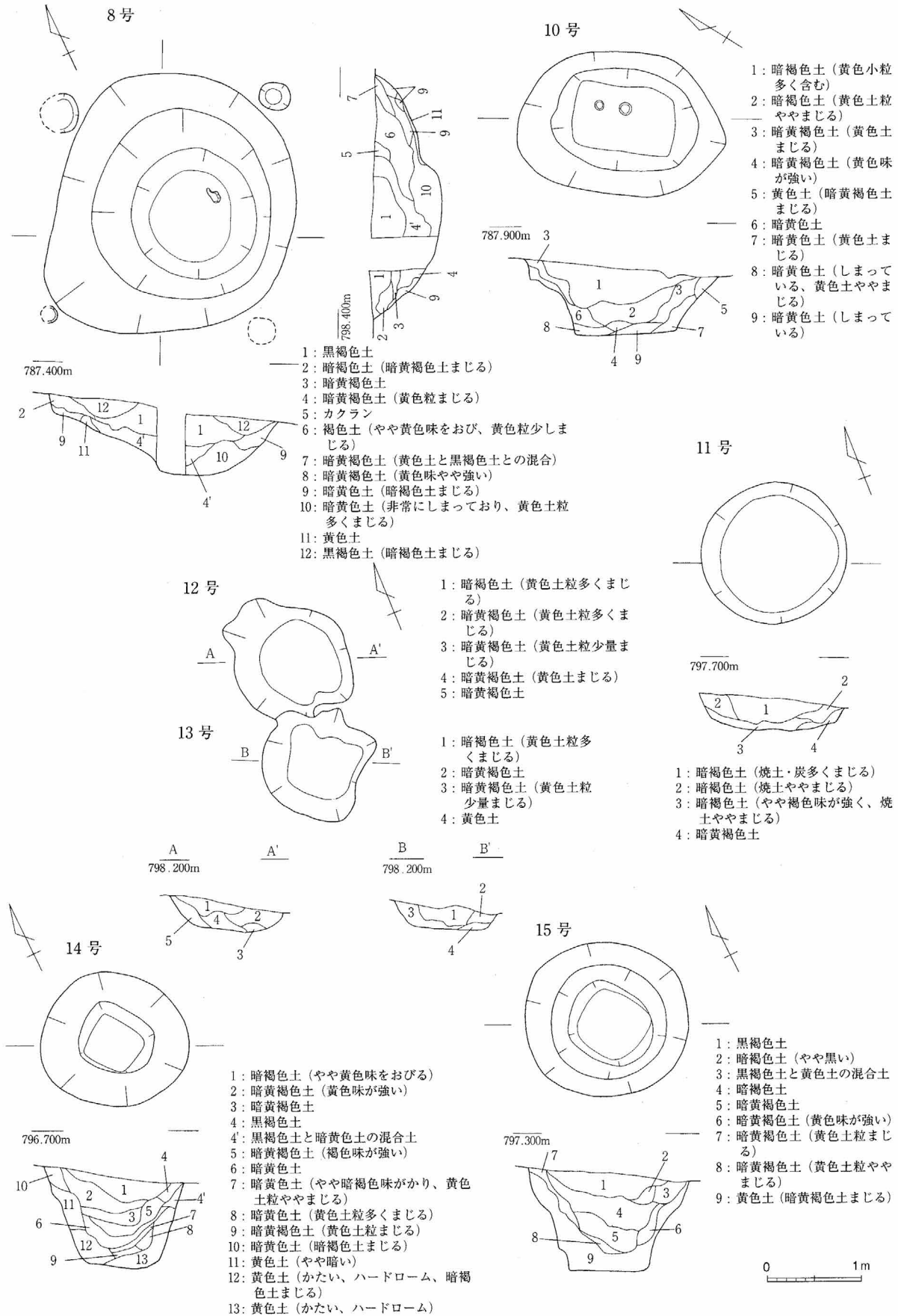
第84図 土坑実測図 (1)



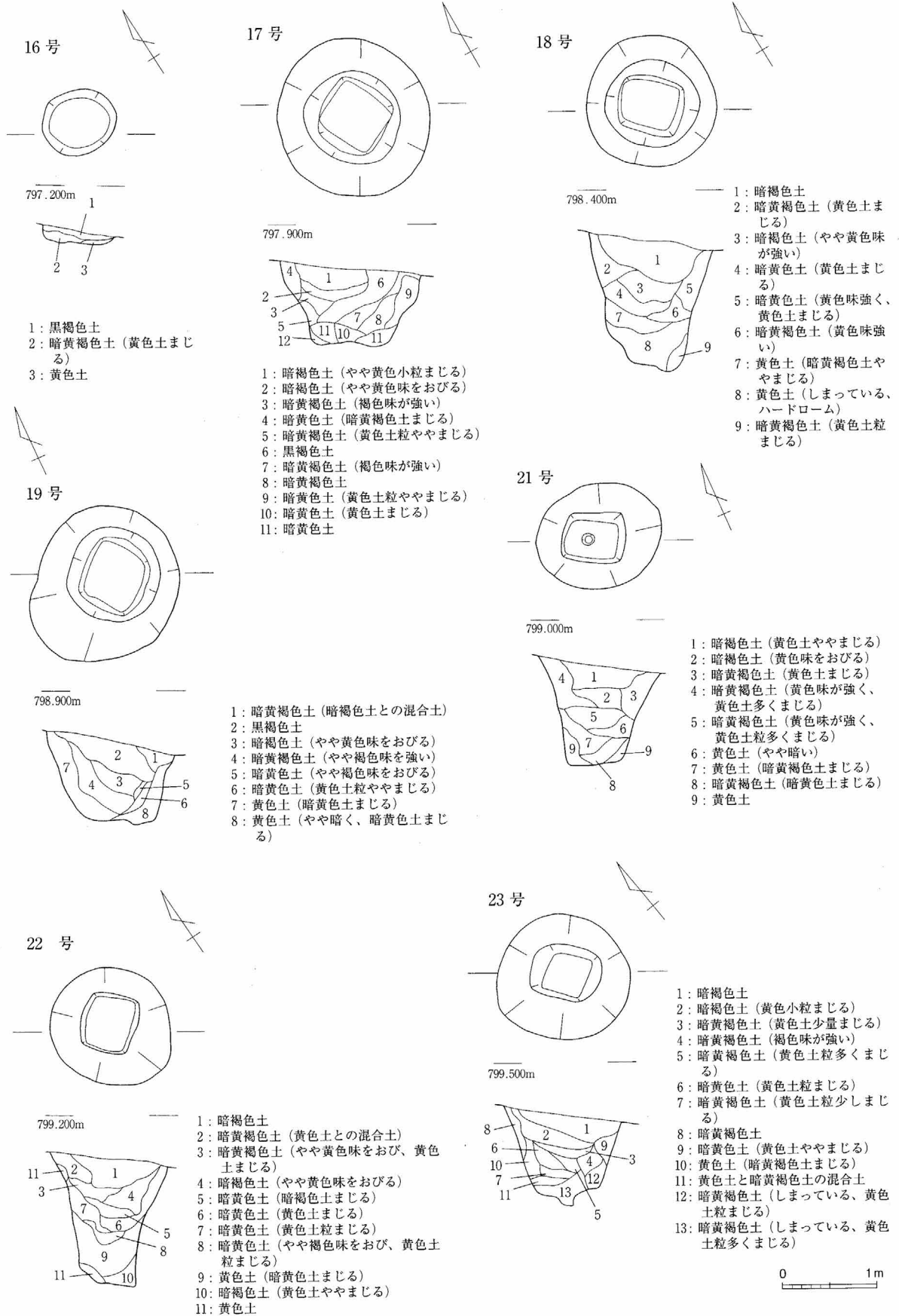
第85図 土坑実測図 (2)



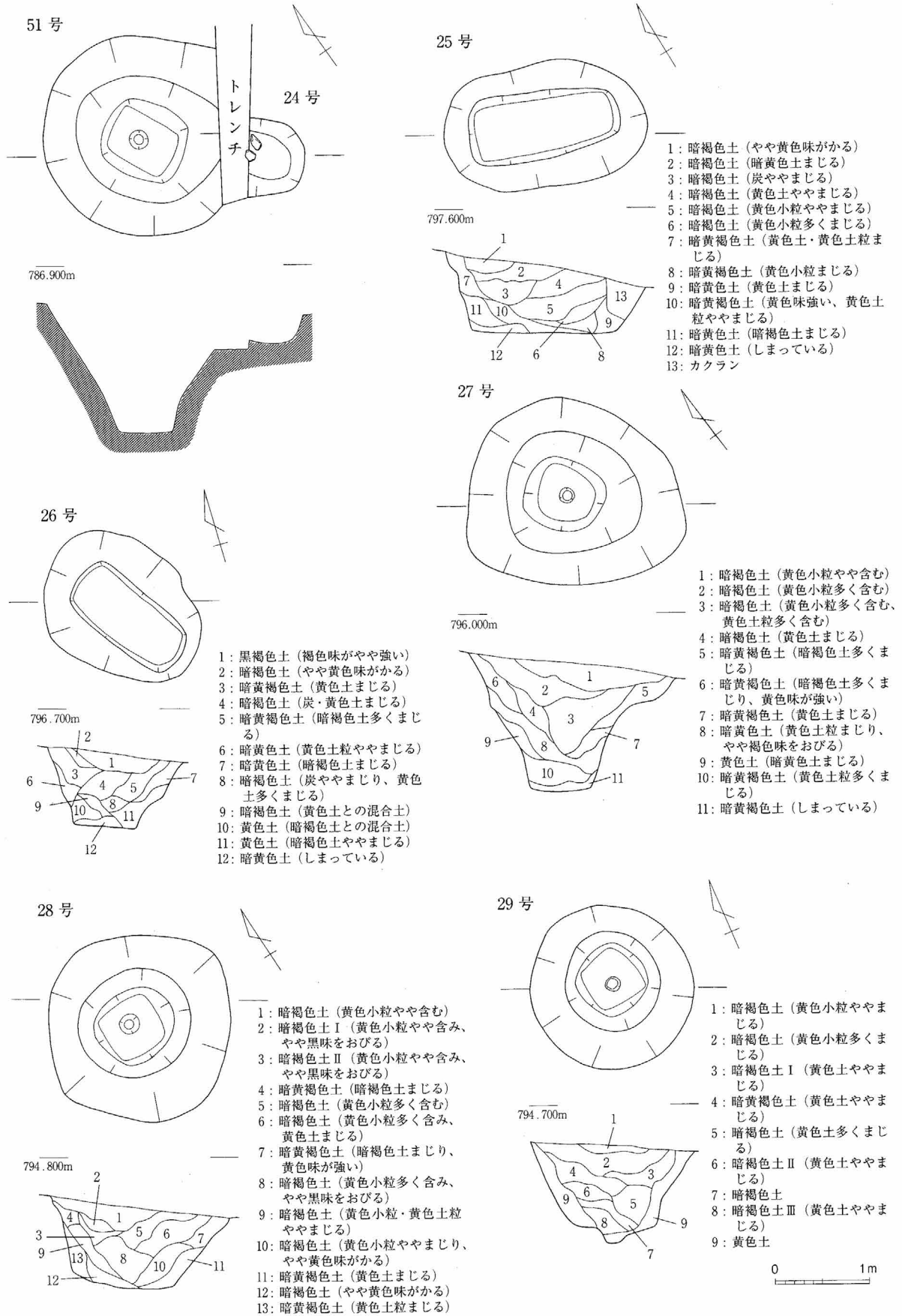
第86図 土坑実測図 (3)



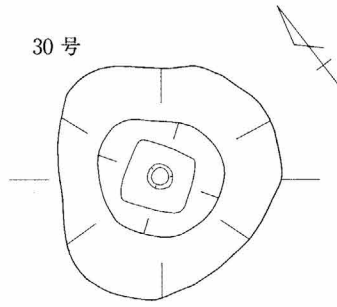
第87図 土坑実測図 (4)



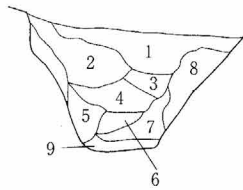
第88図 土坑実測図 (5)



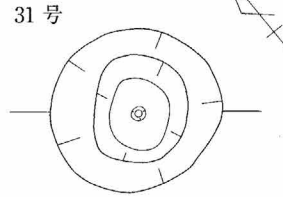
第89図 土坑実測図 (6)



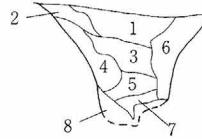
794.300m



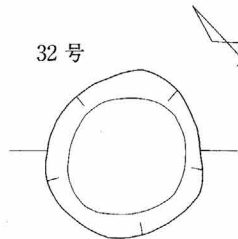
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒多く含む)
- 2: 暗黄褐色土 (暗褐色土含む)
- 3: 暗褐色土 (やや黒味をおびる)
- 4: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 5: 暗褐色土 (黄色土粒多く含む)
- 6: 暗褐色土 (黄色土やや含む)
- 7: 暗黄褐色土 (褐色味が強く、黄色土粒含む)
- 8: 暗黄色土 (暗褐色土まじる)
- 9: 暗黄褐色土 (しまっている)



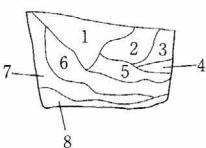
794.000m



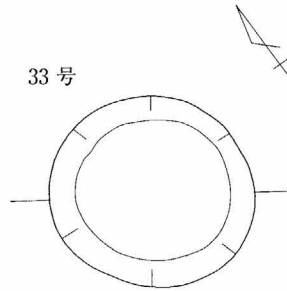
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒多く含む)
- 2: 暗黄褐色土 (黄色土と黒褐色土まじる)
- 3: 黒褐色土 (暗黄褐色土と黄色小粒含む)
- 4: 暗黄褐色土 (黄色土粒と暗褐色土含む)
- 5: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 6: 暗黄褐色土 (暗褐色土と黄色土まじる)
- 7: 暗褐色土 (やや暗く、黄色土ややまじる)
- 8: 黄色土



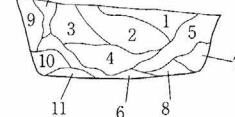
791.800m



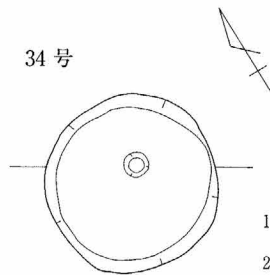
- 1: 黒褐色土 (黄色小粒含む)
- 2: 暗黄褐色土 (黄色小粒多く含む、暗褐色土まじる)
- 3: 暗黄褐色土 (黄色小粒やや含む、褐色味をおびる)
- 4: 暗黄色土 (暗褐色土まじる)
- 5: 暗黄褐色土 (暗褐色土まじり、黄色小粒多く含む)
- 6: 暗黄褐色土 (黄色味が強く、黄色小粒と黄色土粒まじる)
- 7: 暗黄色土 (暗褐色土まじり、黄色小粒含む)
- 8: 暗黄褐色土 (しまっている)



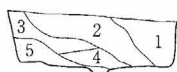
791.800m



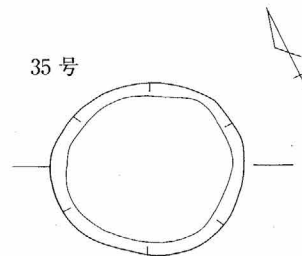
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒含む)
- 2: 暗褐色土 (黄色小粒多く含む)
- 3: 暗褐色土 (黄色土やや含む)
- 4: 暗褐色土 (黄色小粒多く含む、黒褐色土ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (暗黄色土まじり、黄色小粒含む)
- 6: 暗黄褐色土 (暗黄色土まじり、黄色小粒含む)
- 7: 暗黄色土 (黄色土まじる)
- 8: 暗褐色土 (やや黒味をおびる)
- 9: 黄色土
- 10: 暗黄色土
- 11: 暗黄褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 12: カクラン



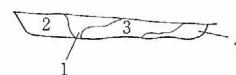
788.900m



- 1: 暗褐色土 (黄色小粒やや含む、黄色土まじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色小粒ややまじる)
- 3: 暗黄褐色土 (黄色小粒多く含む、暗褐色土まじる)
- 4: 暗黄褐色土 (黄色小粒多く含む、しまっている)
- 5: 暗黄色土



787.800m

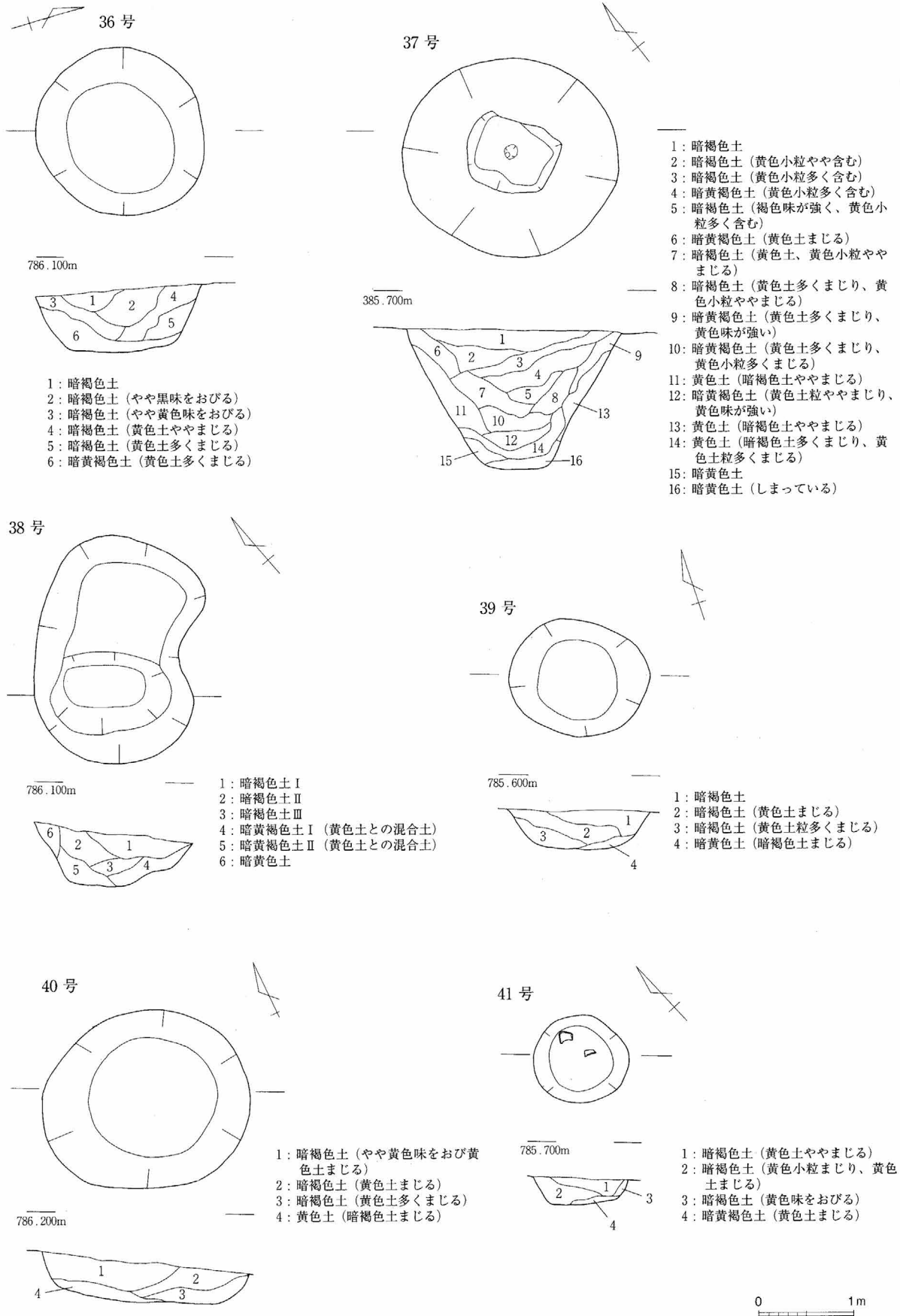


- 1: 暗褐色土
- 2: 暗黄色土 I
- 3: 暗黄褐色土
- 4: 暗黄色土 II



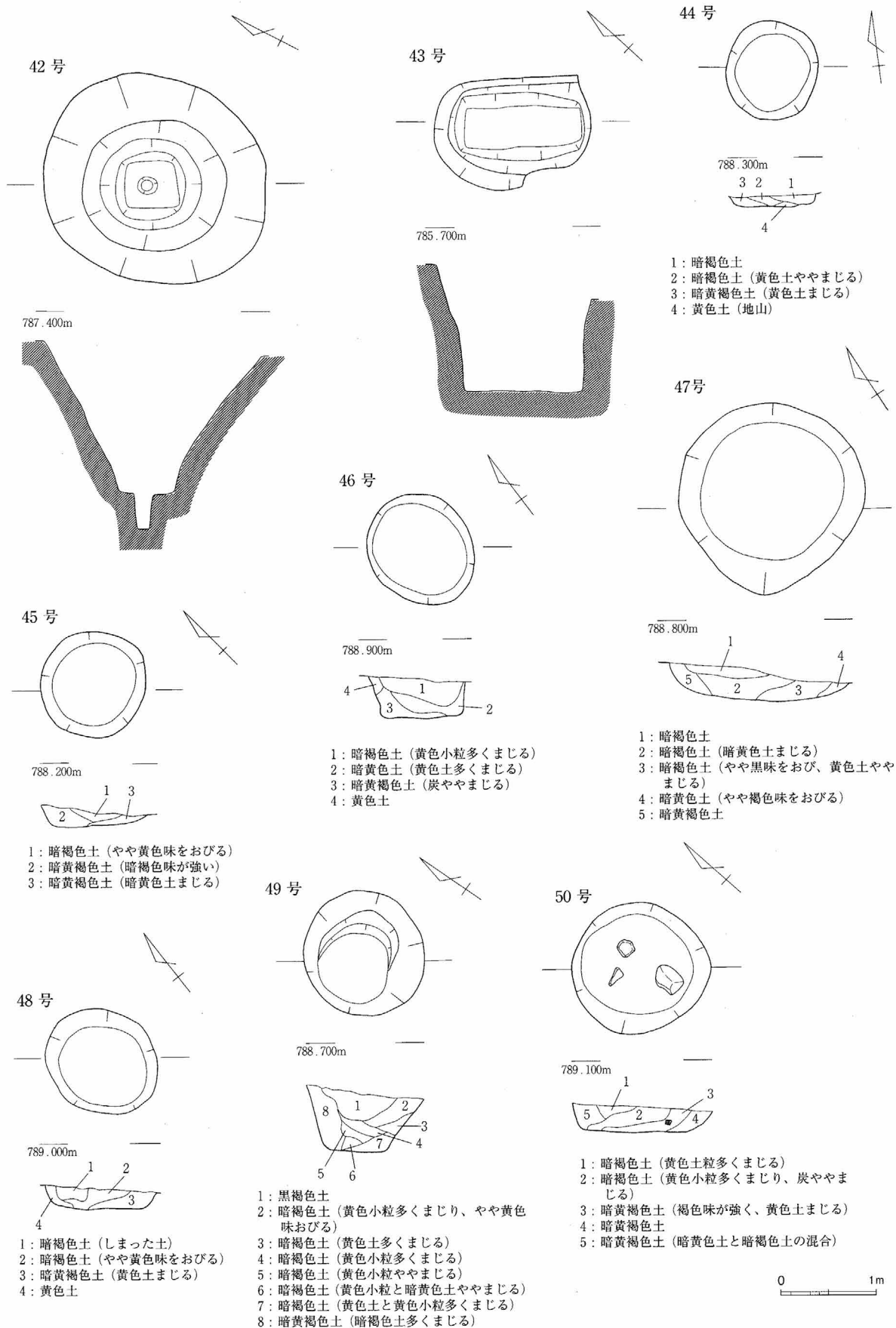
第90図 土坑実測図 (7)

第IV章 遺構と遺物



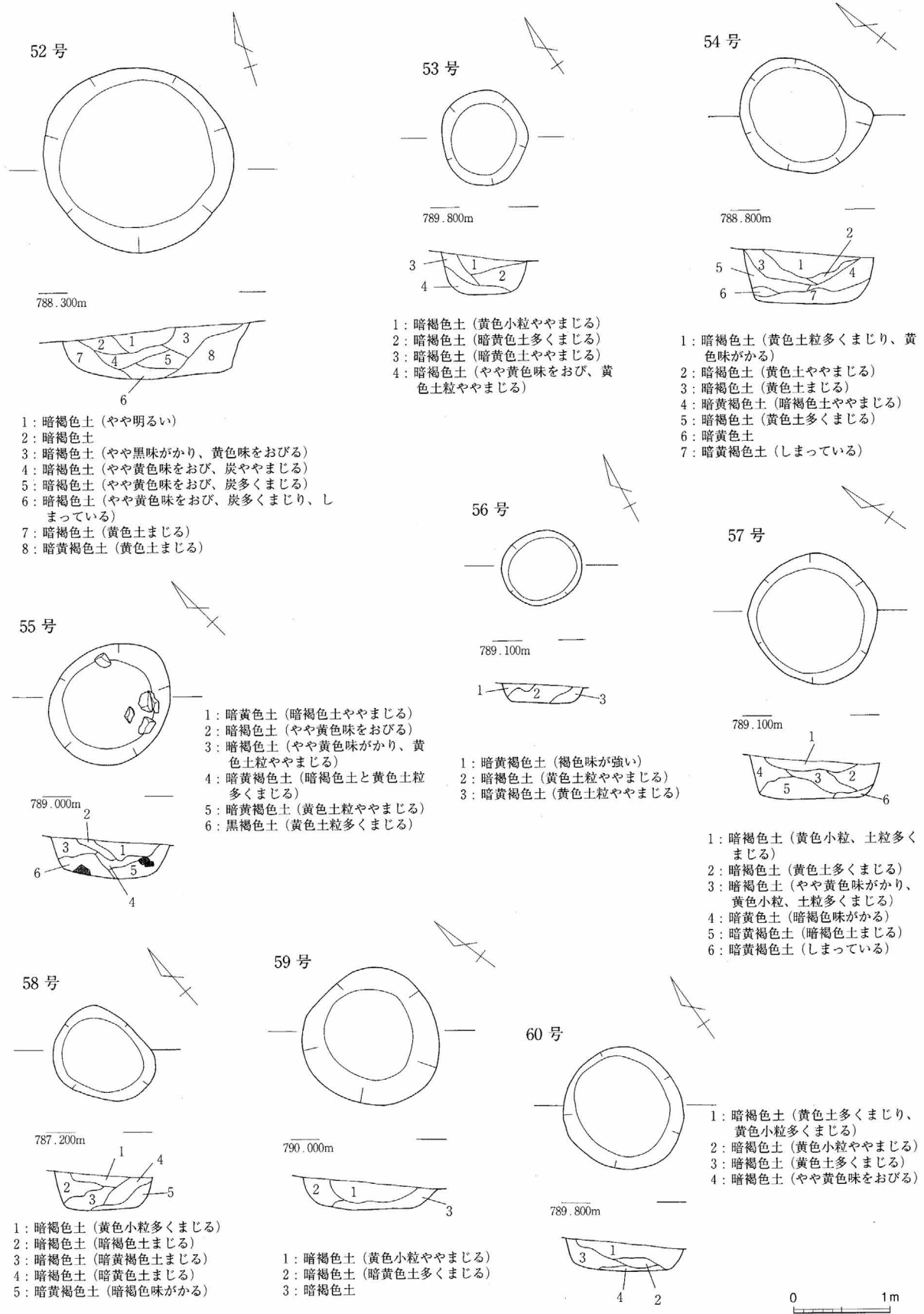
第91図 土坑実測図 (8)

2. 土 坑



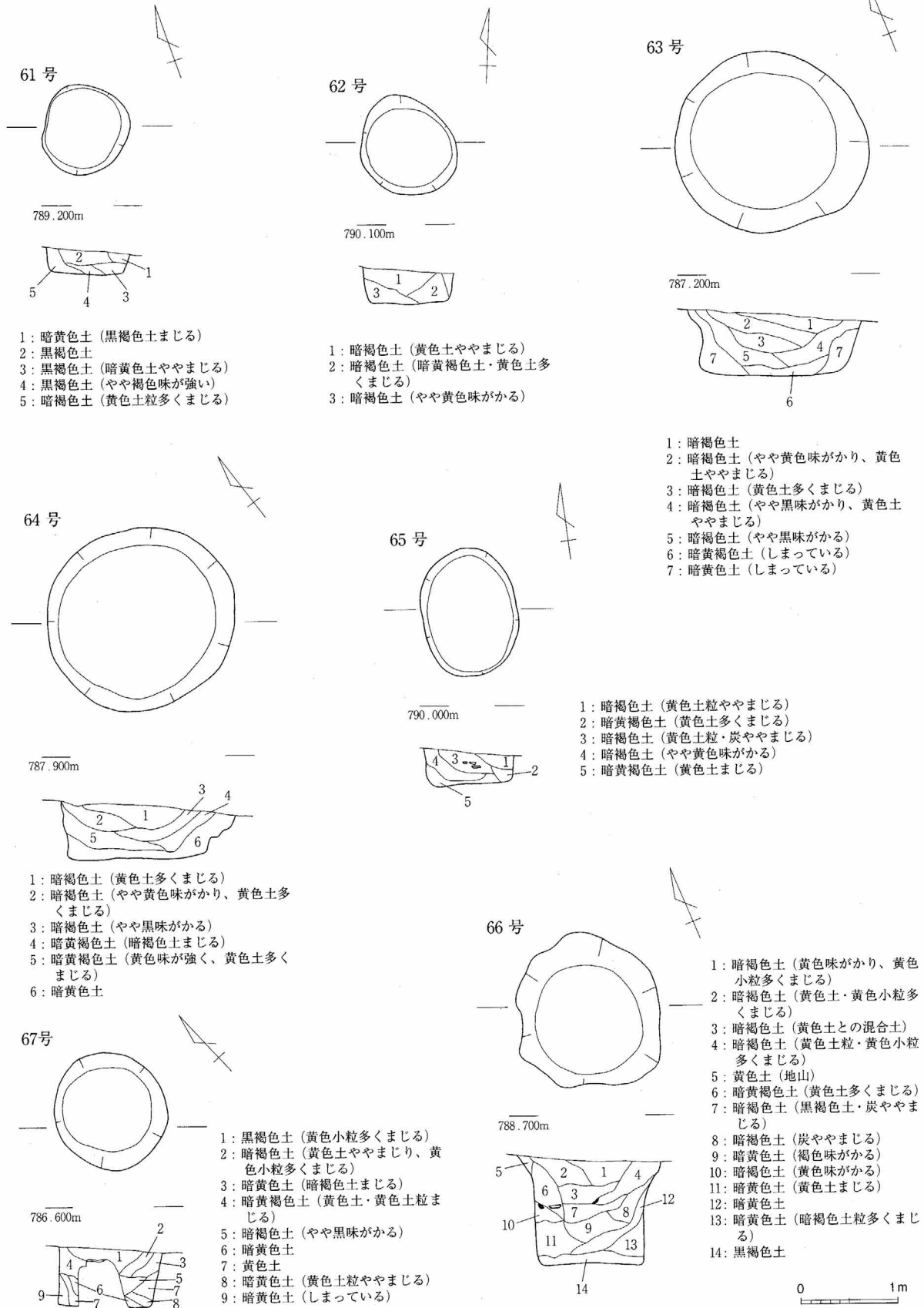
第92図 土坑実測図 (9)

第IV章 遺構と遺物



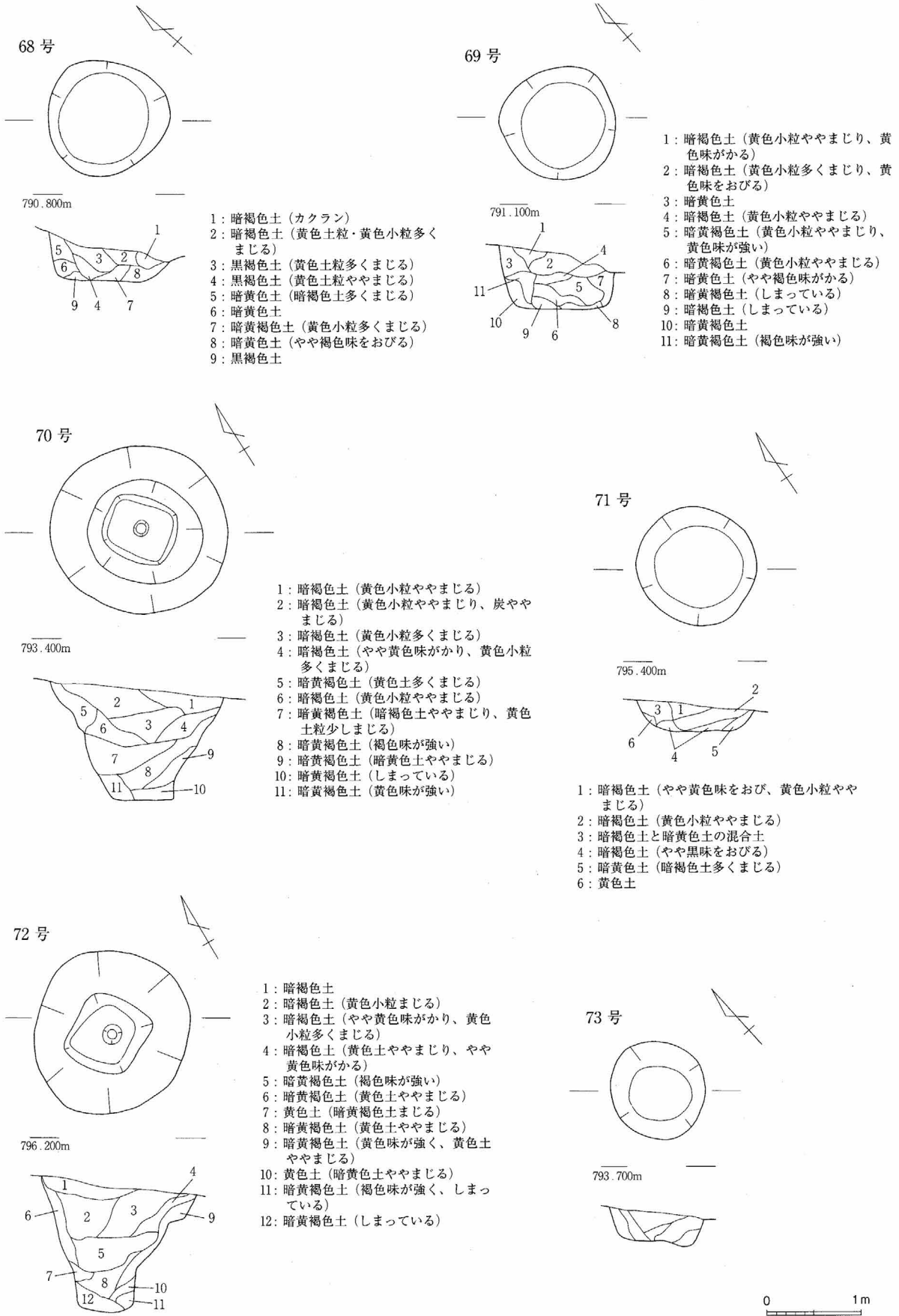
第93図 土坑実測図 (10)

2. 土 坑

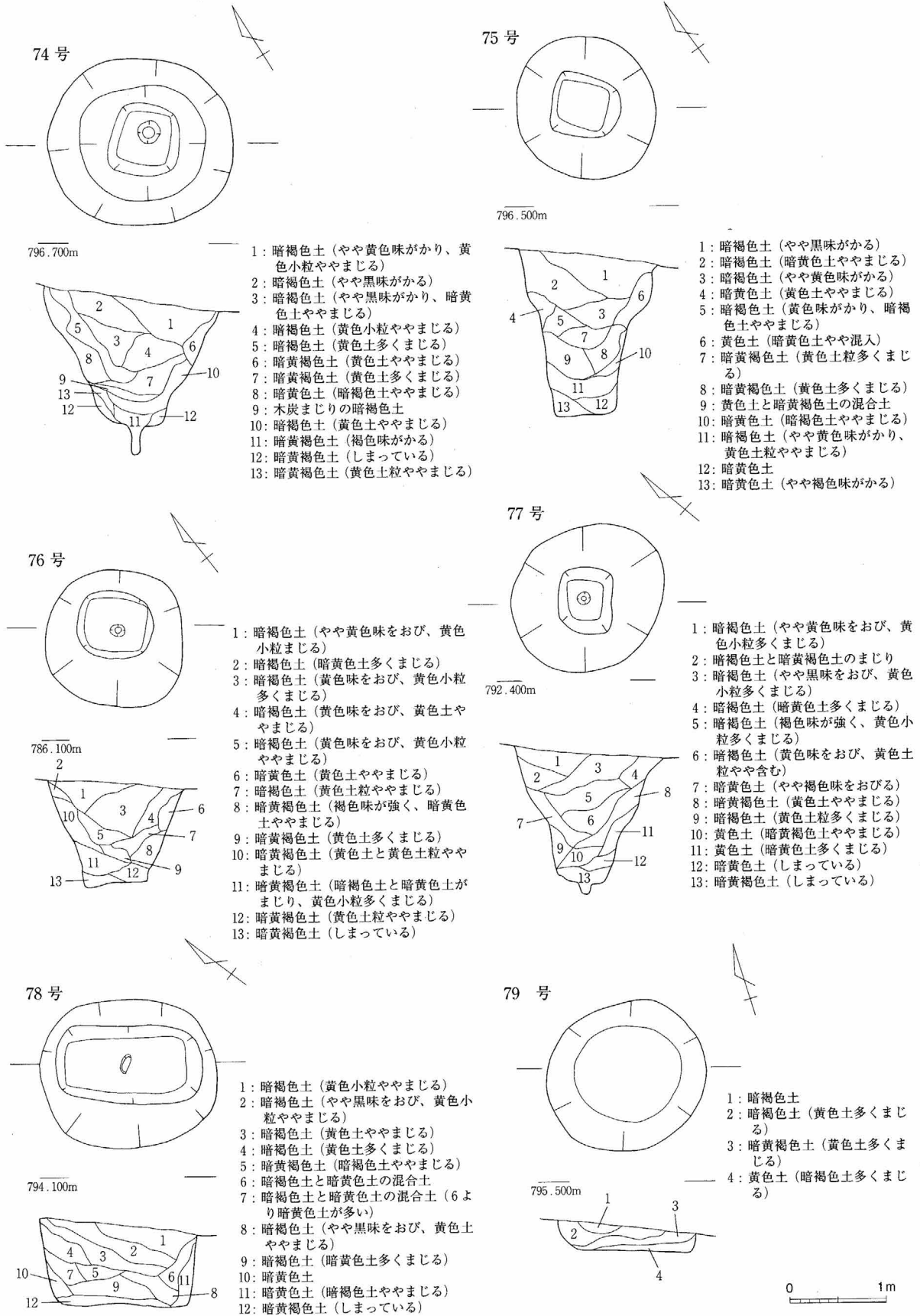


第94図 土坑実測図 (11)

第IV章 遺構と遺物

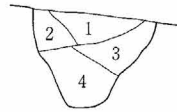
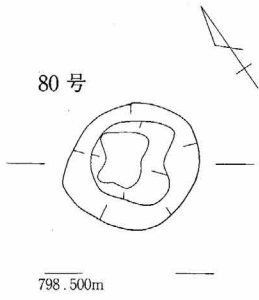


第95図 土坑実測図 (12)

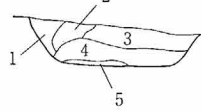
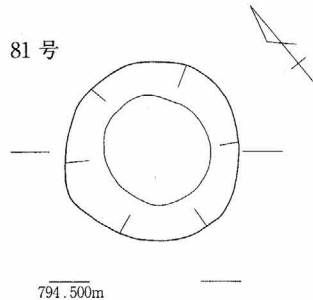


第96図 土坑実測図 (13)

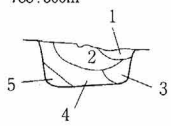
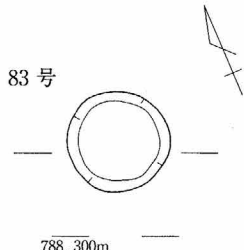
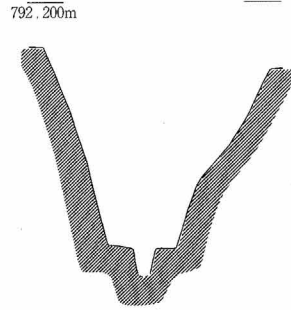
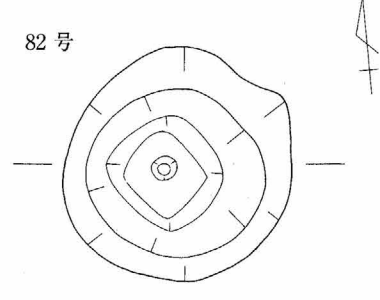
第IV章 遺構と遺物



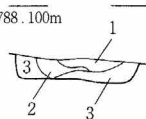
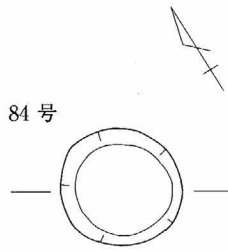
- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土 (暗黄色土多くまじる)
- 3: 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 4: 黒褐色土 (黄色土粒多くまじる)



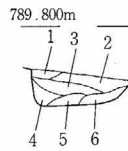
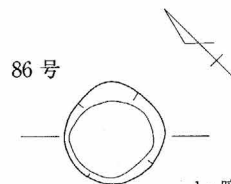
- 1: 黄色土
- 2: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 3: 黒褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4: 黒色土 (黄色土粒ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)



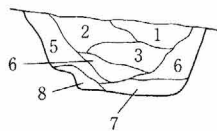
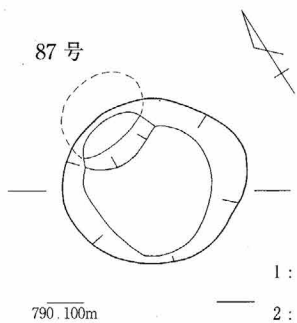
- 1: 暗褐色土 (やわらかい)
- 2: 暗褐色土 (黄色小粒やや含む)
- 3: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土ややまじり、黄色小粒多く含む)
- 5: 暗黄褐色土 (黄色土多くまじる)



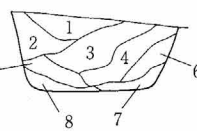
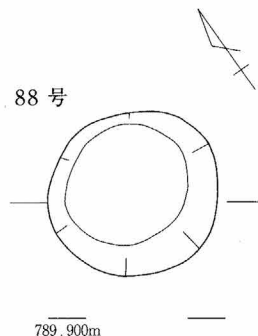
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒やや含む)
- 2: 暗褐色土 (黄色土やや含む)
- 3: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)



- 1: 暗褐色土 (褐色土に近い)
- 2: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (やや黒味をおび、黄色土粒ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 5: 暗褐色土
- 6: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)



- 1: 暗褐色土 (炭ややまじり、黄色小粒多く含む)
- 2: 暗褐色土
- 3: 暗褐色土 (やや黒味をおび、黄色小粒多くまじる)
- 4: 暗褐色土 (炭と黄色小粒ややまじる)
- 5: 暗黄色土 (暗褐色土と黄色土多くまじる)
- 6: 暗褐色土 (黄色土と黄色土粒多くまじる)
- 7: 暗黄色土 (暗黄褐色土と黄色土粒まじる)
- 8: 黄色土 (暗黄色土多くまじる)

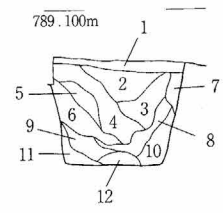
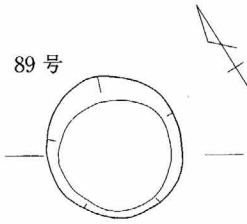


- 1: 暗褐色土 (黄色小粒多く含む)
- 2: 暗黄褐色土 (黄色土多くまじる)
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色小粒ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土多くまじり、炭と黄色小粒ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色味をおびる)
- 6: 暗黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 7: 暗褐色土 (しまっている)
- 8: 暗黄褐色土 (しまっている)

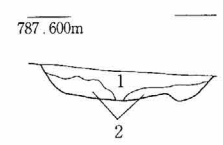
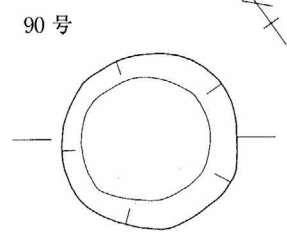


第97図 土坑実測図 (14)

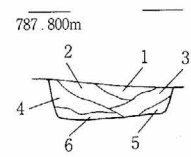
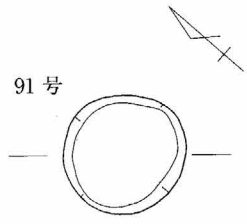
2. 土 坑



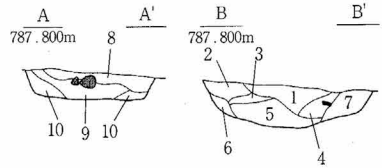
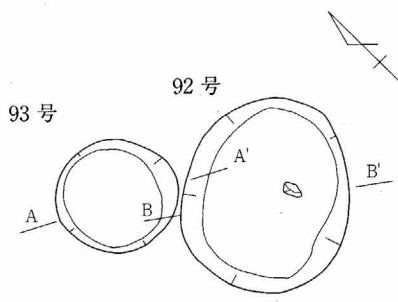
- 1: 試掘のためのカクラン
- 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色小粒ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (黄色味をおび、炭ややまじり、黄色小粒多くまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色上、黄色土粒多くまじり、炭ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (黒褐色土と炭と、黄色小粒ややまじる)
- 6: 暗黄褐色土 (黄色土粒多くまじり、炭多くまじる)
- 7: 黄色土
- 8: 暗黄色土 (暗褐色土まじり、炭ややまじる)
- 9: 暗黄色土と暗褐色土のまじり (炭ややまじる)
- 10: 暗黄色土 (炭ややまじる)
- 11: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 12: 暗褐色土 (黄色土粒と炭多くまじる)



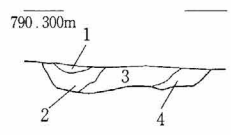
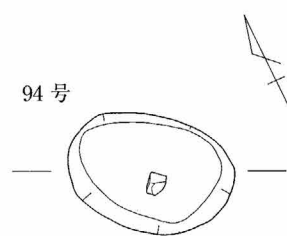
- 1: 暗褐色土 (暗黄色土多くまじる)
- 2: 暗黄色土 (暗褐色土ややまじる)



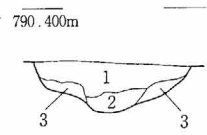
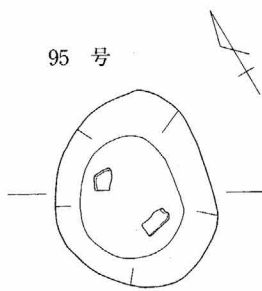
- 1: 暗褐色土 (黄色土粒まじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色小粒ややまじる)
- 3: 暗黄褐色土 (黄色土多くまじる)
- 4: 暗褐色土と暗黄色土の混合土
- 5: 黄色土 (暗褐色土ややまじる)
- 6: 黄色土 (地山)



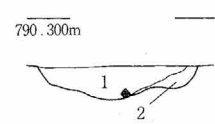
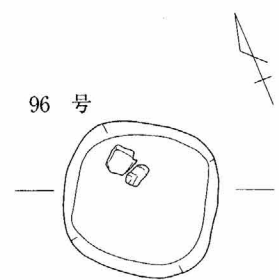
- 1: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色小粒ややまじる)
- 2: 暗黄褐色土 (褐色味が強い)
- 3: 暗褐色土 (黄色土と黄色小粒ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (やや黒味をおび、黄色小粒ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色土粒まじり、炭ややまじる)
- 6: 黄色土 (暗黄色土まじる)
- 7: 暗黄色土 (黄色土ややまじる)
- 8: 暗褐色土
- 9: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 10: 黄色土 (やや暗い)



- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土と黄色土の混合土
- 3: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)



- 1: 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 3: 黄色土

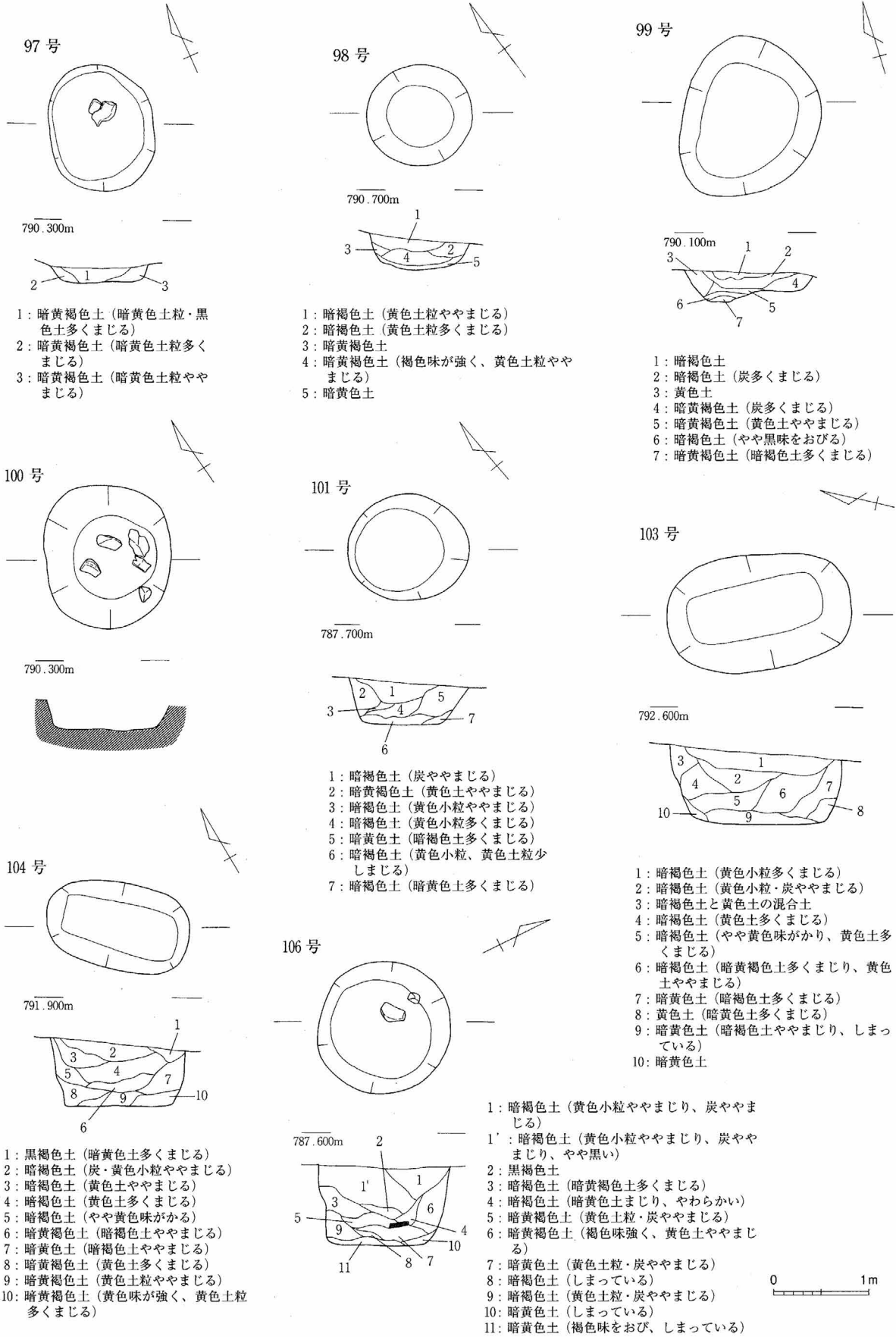


- 1: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)

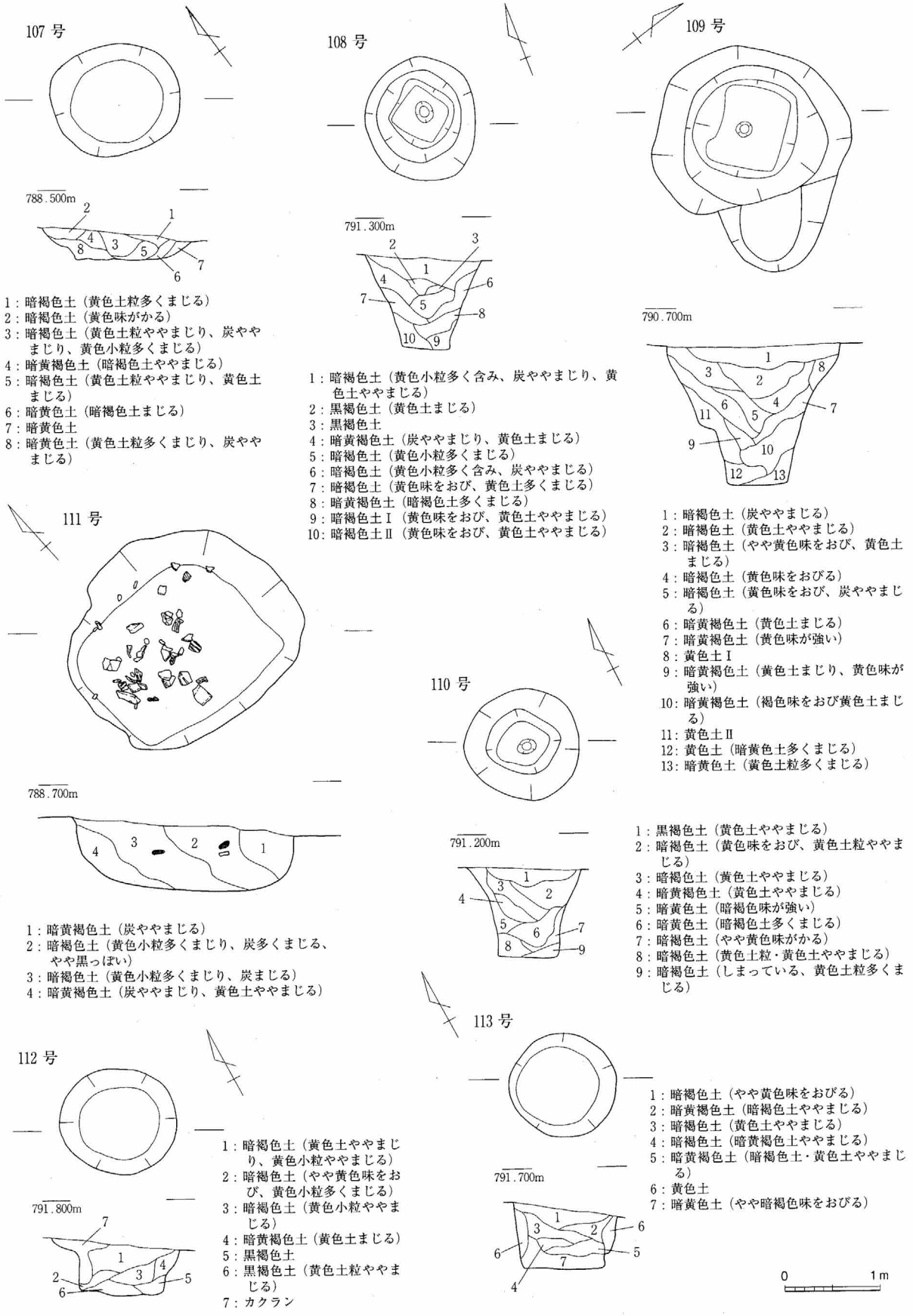


第98図 土坑実測図 (15)

第IV章 遺構と遺物

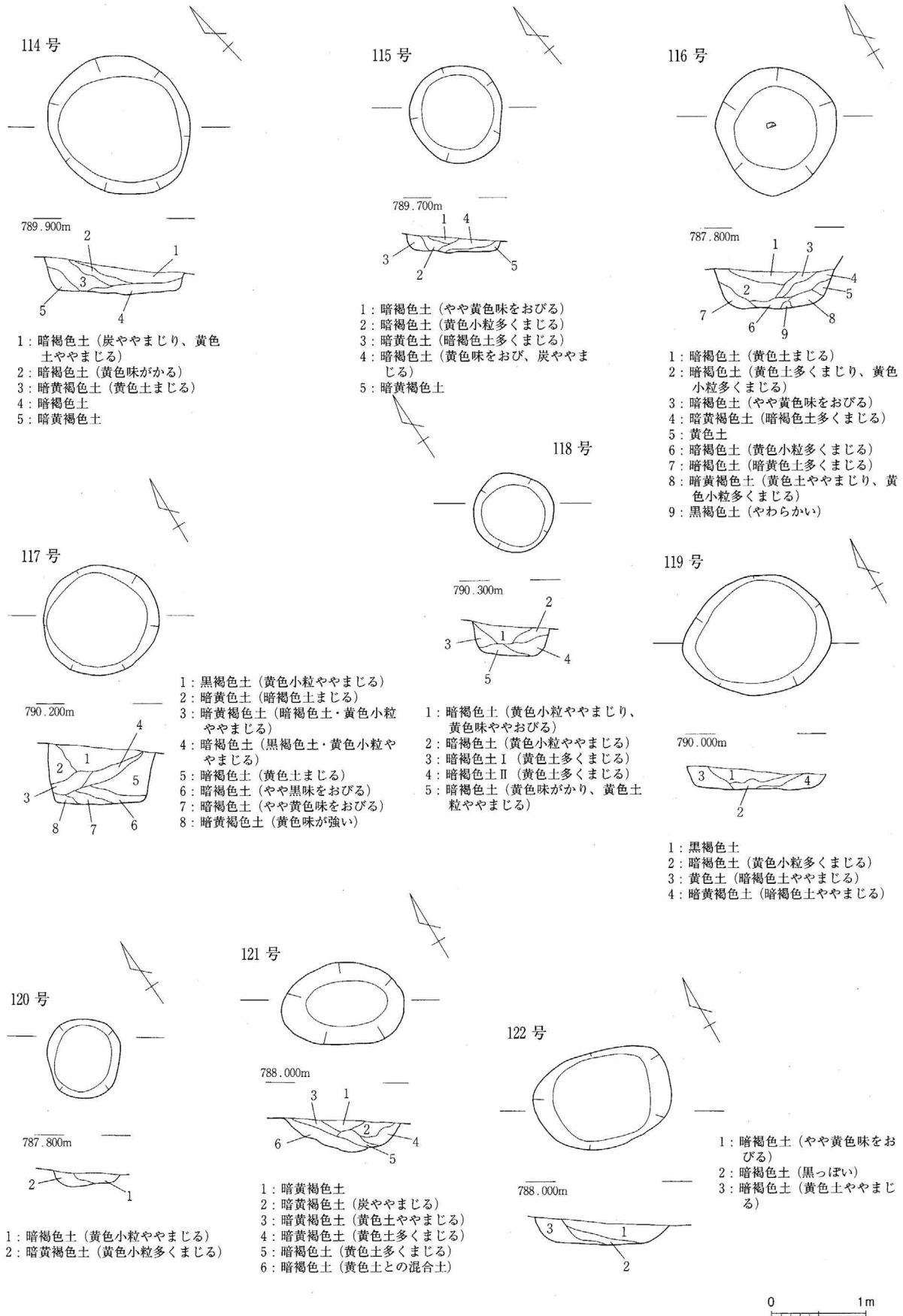


第99図 土坑実測図 (16)



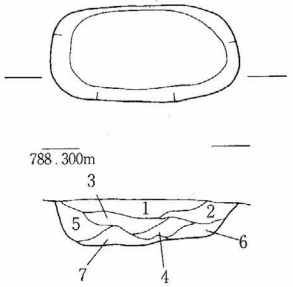
第100図 土坑実測図 (17)

第IV章 遺構と遺物



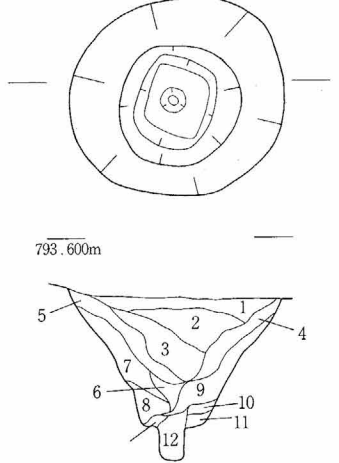
第101図 土坑実測図 (18)

123号



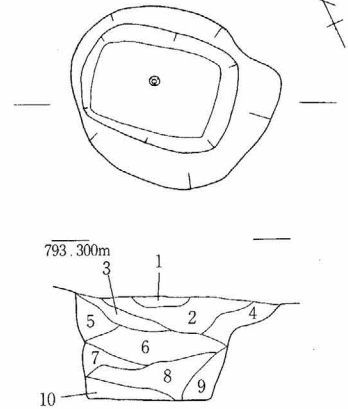
- 1: 黒褐色土 (黄色土ややまじる)
- 2: 暗黄褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 3: 暗黄褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4: 暗黄色土 (暗褐色土まじる)
- 5: 暗黄色土 (暗黄褐色土多くまじる)
- 6: 黄色土 (暗黄褐色土多くまじる)
- 7: 黄色土 (暗褐色土多くまじる)

124号



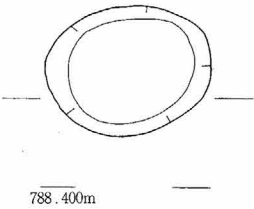
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒ややまじる)
- 2: 暗褐色土 (暗黄色土ややまじり、黄色小粒多くまじる)
- 3: 暗褐色土 (暗黄色土ややまじる)
- 4: 暗黄褐色土
- 5: 暗黄褐色土 (暗褐色土多くまじる)
- 6: 暗黄褐色土 (褐色味が強い)
- 7: 暗黄褐色土 (黄色味が強い)
- 8: 暗黄色土 (暗褐色土ややまじる)
- 9: 暗黄色土 (やや褐色味がかかる)
- 10: 暗黄色土
- 11: 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 12: 暗褐色土

125号



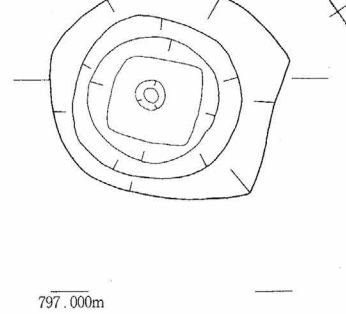
- 1: 焼土 (カクラン)
- 2: 暗褐色土
- 3: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土多くまじり、黄色小粒多くまじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色土との混合土)
- 6: 暗褐色土 (黄色土ややまじり、黄色小粒ややまじる)
- 7: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒まじる)
- 8: 暗黄褐色土 (黄色土多くまじる)
- 9: 黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 10: 黄色土

127号



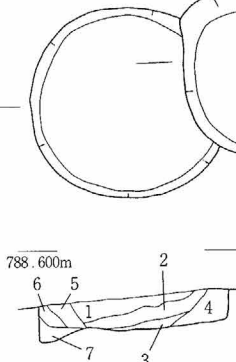
- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土 (暗黄色土多くまじる)
- 3: 黒褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4: 黄色土 (暗黄色土多くまじる)
- 5: 黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 6: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土下層にまじる)

126号



- 1: 黒褐色土 (やや黄色味をおび、やや黄色小粒まじる)
- 2: 黄色土
- 3: 黒褐色土 (黄色土ややまじり、黄色小粒多くまじる)
- 4: 暗褐色土
- 5: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 6: 黒褐色土 (黄色小粒多くまじる)
- 7: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色小粒ややまじる)
- 8: 暗褐色土 (黄色土との混合土)
- 9: 暗黄褐色土 (黄色味が強く、黄色土粒ややまじる)
- 10: 黄色土 (暗黄色土ややまじる)
- 11: 暗黄褐色土 (しまっており、黄色土粒ややまじる)

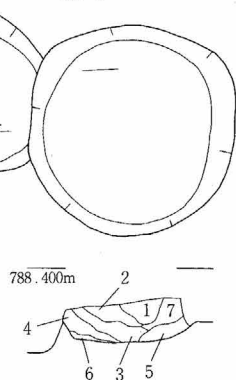
128号



- 1: 暗褐色土 (黄色味ややおびる)
- 2: 暗褐色土 (暗黄褐色土、炭多くまじる)
- 3: 暗黄褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 4: 暗黄褐色土 (黄色土多くまじる)
- 5: 暗褐色土 (やや黄色味おび、黄色小粒ややまじる)
- 6: 暗黄褐色土
- 7: 暗黄褐色土 (やや黄色味が強い)

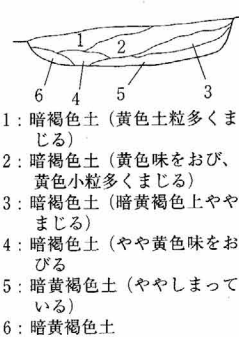
137号

129号

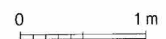


- 1: 黒褐色土 (炭ややまじる)
- 2: 暗黄褐色土
- 3: 暗褐色土 (黄色小粒多くまじる、黄色味をおびる)
- 4: 暗褐色土 (黄色味をおびる)
- 5: 暗褐色土 (暗黄色土まじる)
- 6: 暗黄色土

788.400m

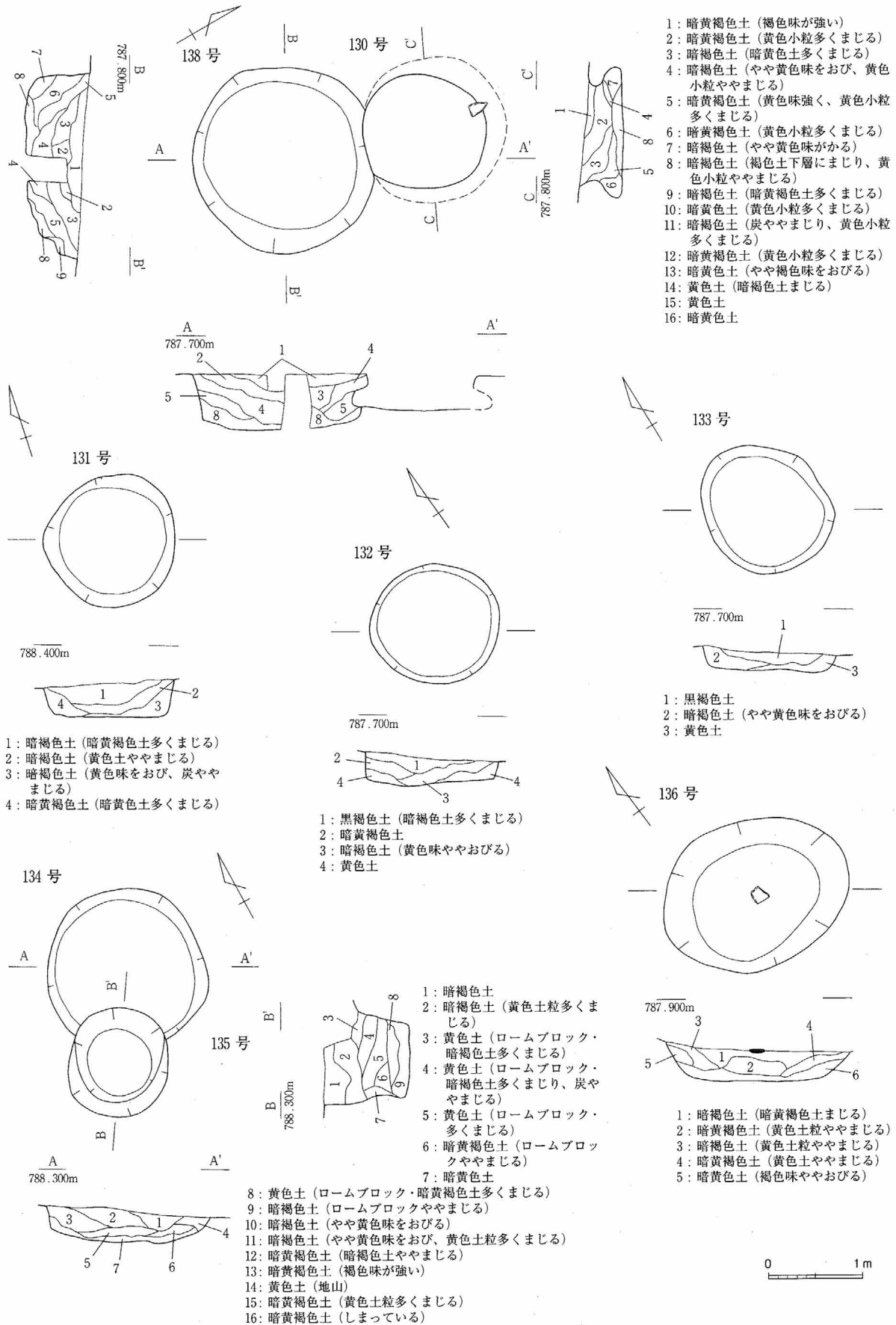


- 1: 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色小粒多くまじる)
- 3: 暗褐色土 (暗黄褐色土ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 5: 暗黄褐色土 (ややしまっている)
- 6: 暗黄褐色土



第102図 土坑実測図 (19)

第IV章 遺構と遺物



第103図 土坑実測図 (20)

第 20 号 土 坑 (第105図)

この土坑は CI-23 から検出されている。直径約 1.8m の平面円形で深さは 45cm 程である。底部中央部には直径 15cm 程のピットが 1ヶ所出土している。

第 85 号 土 坑 (第105図)

DP-57 付近から出土している。直径約 1.5m、深さ約 30cm の平面円形を呈し、第 20 号土坑同様に底部中央部に直径 20cm 程度のピットが 1ヶ所出土している。

第 144 号 土 坑 (第105図)

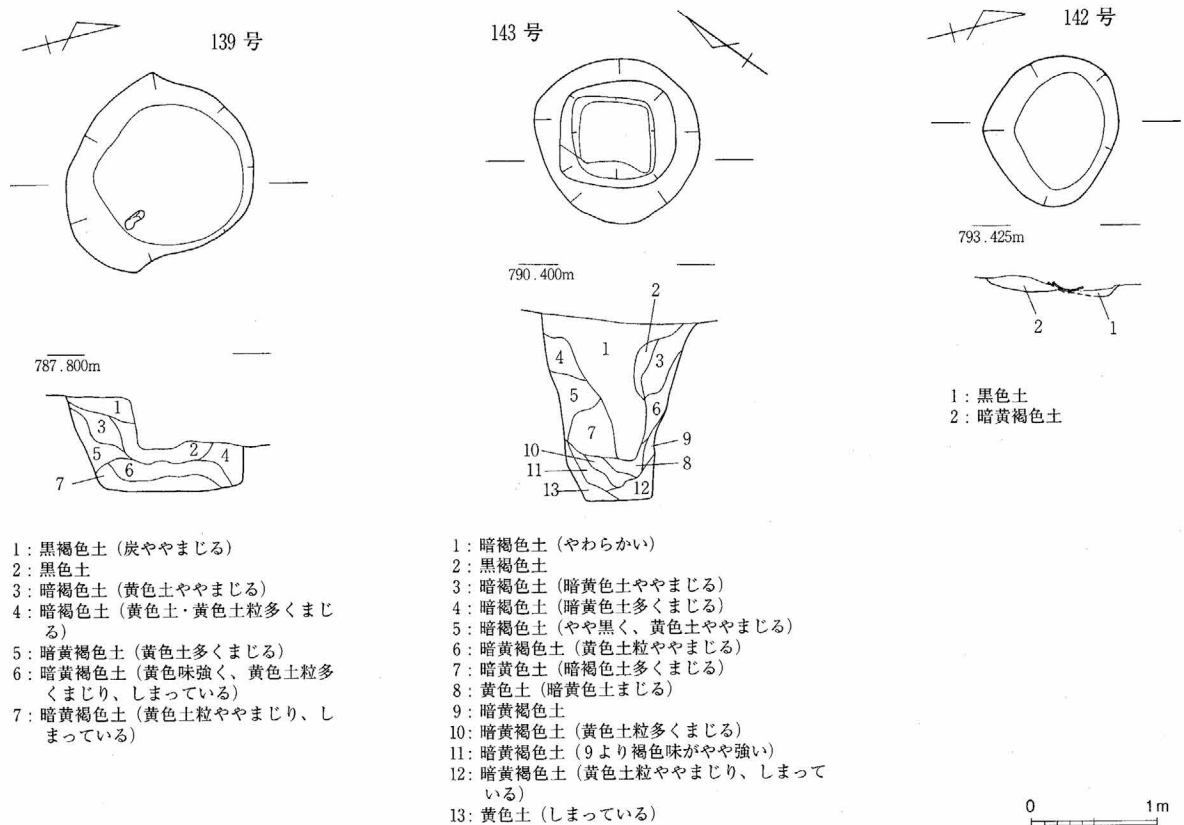
CL-62 から出土している。この土坑は、直径約 1.9m、深さ 45cm を図る平面円形のプランであった。

第 145 号 土 坑 (第105図)

この小竪穴は、第 146 号土坑と共に、第 13 号住居址と重複して出土している。直径約 2m、深さ約 55cm を測る。覆土下層はしまった土であった。なお、床面壁際に小規模のピットが 4ヶ所から出土している。

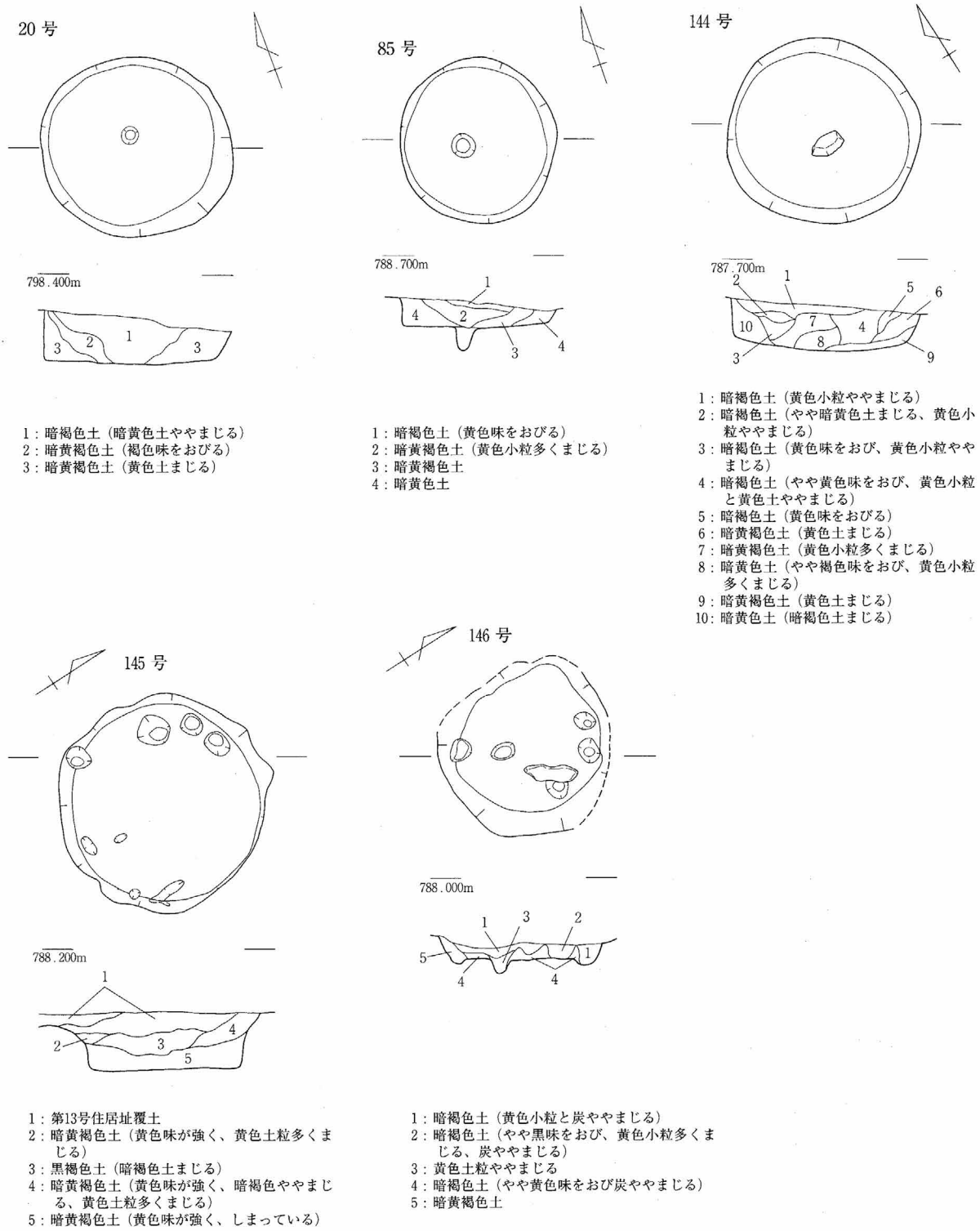
第 146 号 土 坑 (第105図)

第 13 号住居址と重複して出土している。直径約 1.2m、深さ約 25cm を測る。床面付近には小規模なピットが 5ヶ所から出土している。また壁は一部カクランにより破壊されている。



第104図 土坑実測図 (21)

第IV章 遺構と遺物



第105図 土坑実測図 (22)

神谷所遺跡土坑一覽

番号	出土位置	検 出 面				ピット		検 出 形 体		所 見	備 考	
		上 端		下 端		直径	深さ	検出面	底 部			
		長径	短径	長径	短径							
1	AC-82	1.03	1.10	0.60	—	0.80	0.13	0.12	円形	方形	落とし穴	
2	AU-111	2.10	1.20	1.20	0.25	1.13			楕円形	長方形	落とし穴	縄文中期初頭破片
3	AX-106	1.80	1.80	0.53	0.45	1.37	0.19	0.28	円形			縄文土器片
4	BN-93	0.93	0.86	0.83	0.74	0.15			円形			縄文中期初頭破片
5	BK-95	1.12	1.04	0.80	0.75	0.39			円形			
6	BA-56	1.35	1.34	0.42	0.40	0.99	0.22	0.33	円形	円形	落とし穴	
7	BD-53	1.25	1.22	0.57	0.53	0.61			円形	方形	落とし穴	
8	AU-93	2.72	2.50	0.96	0.86	0.66			円形			縄文早期末・前期
9	BE-93	—	—	—	—	—			円形		柱穴	鉄滓
10	BQ-82	2.19	1.53	1.08	0.68	0.72	0.13 0.90	0.24 0.10	楕円形	長方形	落とし穴	ピット2箇所
11	BK-38	1.52	1.48	1.25	1.25	0.34			円形			
12	BN-34	1.46	1.23	0.90	0.79	0.27			不整円形	不整円形		第13号土坑と重複
13	BO-34	1.05	1.02	0.68	0.52	0.23			不整形	不整形		第12号土坑と重複
14	BS-39	1.55	1.39	0.54	0.51	1.62			円形			
15	BX-33	1.71	1.63	0.68	0.65	1.65			円形	方形	落とし穴	
16	BY-33	0.78	0.70	0.63	0.51	0.12			円形			
17	CB-29	1.70	1.59	0.61	0.57	1.77			円形	方形	落とし穴	
18	CD-28	1.38	1.35	0.58	0.47	1.48			円形	方形	落とし穴	
19	CI-23	1.71	1.48	0.60	0.56	1.47			円形	方形	落とし穴	
20	CL-24	1.85	1.74	1.60	1.55	0.42	0.17	0.20	円形		小竪穴	
21	CL-21	1.32	1.11	0.53	0.39	1.46	0.13	0.10	円形			
22	CN-19	1.34	1.23	0.53	0.46	1.46			円形	方形	落とし穴	
23	CQ-16	1.34	1.29	0.43	0.41	0.70			円形	方形	落とし穴	
24	BF-92	0.83	—	0.46	—	0.32			円形		一部トレンチにより削平	第51号土坑と重複
25	CR-24	2.14	1.29	1.44	0.55	0.66			楕円形	長方形	落とし穴	
26	CO-30	1.83	1.26	1.27	0.52	0.77			楕円形	長方形	落とし穴	
27	CY-28	2.34	1.95	0.58	0.55	1.34	0.14	0.17	不整円形	不整円形	落とし穴	
28	CV-32	2.16	1.81	0.60	0.58	1.34	0.21	0.32	円形	方形	落とし穴	
29	CT-36	1.75	1.65	0.56	0.52	1.28	0.15	0.22	円形	方形	落とし穴	
30	CQ-40	1.93	1.82	0.52	0.50	1.11	0.20	0.35	不整円形	方形	落とし穴	
31	CO-42	1.36	1.29	0.55	0.45	1.13	0.11	0.07	円形	楕円形	落とし穴	
32	DE-46	1.34	1.20	1.00	0.92	0.71			円形			
33	DD-46	1.61	1.49	1.21	1.13	0.58			円形			
34	DN-34	1.46	1.36	1.25	1.19	0.39	0.20	0.22	円形		小竪穴	
35	DI-67	1.51	1.38	1.30	1.16	0.18			円形			
36	AV-104	1.82	1.71	1.25	1.06	0.67			円形			
37	AY-107	2.26	2.00	0.74	0.55	1.40	0.14	0.44	円形	方形	落とし穴	縄文中期中葉? 打製石斧
38	BF-98	2.42	1.51	0.85	0.42	0.54			不整形	不整形		遺構が重複か?
39	AY-106	1.48	1.20	0.89	0.83	0.40			円形			
40	AX-101	2.19	1.94	1.35	1.32	0.48			円形			
41	AX-106	0.99	0.92	0.81	0.64	0.31			円形			縄文中期初頭・黒曜石
42	BI-87	2.45	2.17	0.55	0.48	1.51	0.20	0.38	円形	方形	落とし穴	
43	BD-102	1.63	1.04	1.21	0.41	1.29			楕円形	長方形	落とし穴	
44	DR-58	1.06	0.98	0.83	0.73	0.15			円形			
45	DQ-61	1.16	1.10	0.90	0.82	0.20			円形			縄文早期末葉
46	DM-58	1.24	1.06	1.05	0.86	0.34			円形		小竪穴?	
47	DK-61	2.00	1.94	1.53	1.47	0.27			円形			
48	CR-66	1.25	1.10	0.95	0.84	0.20			円形			
49	CP-70	1.34	1.23	0.75	0.73	0.63			円形			縄文前期末葉・打製石斧

第IV章 遺構と遺物

番号	出土位置	検出面				ビット			検出形体		所見	備考
		上端		下端		長さ	直径	深さ	検出面	底部		
		長径	短径	長径	短径							
50	CL-70	1.46	1.41	1.18	1.03	0.25			円形			礫出土・縄文前期前半
51	BE-92	2.25	2.20	0.70	0.51	1.33	0.20	0.34	円形	長方形	落とし穴	第24号土坑と重複
52	DJ-63	2.00	1.88	1.60	1.57	0.42			円形			
53	CL-65	1.00	0.88	0.74	0.65	0.40			円形			
54	CJ-72	1.40	1.12	1.09	0.93	0.53			不整円形	円形		一部張り出しあり
55	CJ-71	1.35	1.16	0.96	0.94	0.39			円形			礫出土
56	CI-71	0.81	0.75	0.69	0.60	1.47			円形			縄文前期末葉
57	CI-70	1.36	1.32	1.10	1.04	0.43			円形			石鏃
58	CM-74	1.06	0.88	0.86	0.70	0.41			楕円形			縄文前期末葉
59	CM-62	1.45	1.39	0.96	0.87	0.31			円形			
60	CM-63	1.30	1.21	1.06	0.90	0.31			円形			
61	CP-61	0.95	0.93	0.81	0.74	0.24			円形			
62	CR-60	1.10	0.93	0.88	0.79	0.34			円形			
63	CS-62	2.00	1.85	1.51	1.40	0.52			円形		小竪穴?	
64	DJ-60	1.99	1.83	1.65	1.54	0.62			円形		小竪穴?	
65	CR-60	1.32	0.96	1.86	1.20	0.35			楕円形			土器片
66	CK-72	1.70	1.51	1.15	1.07	1.09			不整円形	円形		縄文前期末葉
67	CJ-73	1.24	1.14	0.93	0.91	0.59			円形			縄文前期末葉
68	DP-51	1.30	1.21	1.00	0.91	0.41			円形			
69	DD-50	1.22	1.19	0.92	0.85	0.57			円形			
70	DL-47	1.90	1.82	0.64	0.54	1.14	0.18	0.24	円形	方形	落とし穴	
71	CR-38	1.28	1.23	0.94	0.85	0.32			円形			
72	CY-26	1.80	1.61	0.60	0.53	1.39	0.21	0.28	円形	不整方形	落とし穴	
73	DD-36	1.08	1.00	0.65	0.57	0.30			円形			
74	DB-23	1.91	1.71	0.54	0.50	1.30	0.23	0.31	円形	方形	落とし穴	
75	BO-42	1.56	1.42	0.51	0.47	1.70			円形	方形	落とし穴	
76	CK-50	1.52	1.49	0.62	0.54	1.02	0.15	0.28	円形	方形	落とし穴	
77	CI-53	1.65	1.46	0.41	0.35	1.40	0.13	0.27	円形	方形	落とし穴	
78	CG-45	1.84	1.79	1.24	0.56	0.85	^{0.21} ×0.09	0.17	長方形	長方形	落とし穴	
79	DB-32	1.65	1.50	1.11	0.90	0.45			円形			
80	CU-16	1.10	0.91	0.40	0.26	0.77			円形	不整方形	落とし穴	
81	CP-38	1.45	1.43	0.88	0.80	0.30			円形			
82	CH-55	1.80	1.76	0.58	0.52	1.50	0.18	0.22	円形	方形	落とし穴	
83	CX-67	0.83	0.80	0.64	0.64	0.34			円形			
84	CV-69	0.99	0.94	0.74	0.70	0.18			円形			
85	DO-58	1.61	1.51	1.46	1.34	0.27	0.24	0.22	円形		小竪穴	
86	DL-53	0.76	0.76	0.66	0.60	0.29			円形			
87	DL-52	1.49	1.35	1.03	0.98	0.56			円形			
88	DM-52	1.39	1.32	1.00	0.94	0.57			円形			
89	CO-66	1.13	1.07	0.89	0.87	0.78			円形			
90	CQ-76	1.40	1.39	1.02	0.97	0.24			円形			縄文前期末葉
91	CN-77	0.99	0.96	0.89	0.75	0.29			円形			
92	CN-78	1.55	1.31	1.29	0.97	0.33			楕円形			縄文前期
93	CM-77	0.97	0.90	0.88	0.72	0.22			円形			縄文中期
94	AT-76	1.32	0.95	1.12	0.75	0.21			楕円形			礫出土
95	AR-77	1.53	1.24	0.95	0.79	0.38			楕円形			礫出土
96	AP-78	1.22	1.22	1.03	1.02	0.27			隅丸方形			礫出土
97	AO-79	1.34	1.11	1.08	0.94	0.22			楕円形			礫出土
98	AL-81	1.09	1.05	0.68	0.63	0.30			円形			
99	AS-78	1.70	1.42	1.20	0.96	0.25			楕円形			

2. 土 坑

番号	出土位置	検 出 面				ビット			検 出 形 体		所 見	備 考
		上 端		下 端		長さ	直径	深さ	検出面	底 部		
		長径	短径	長径	短径							
100	AS-77	1.49	1.29	0.88	0.87	0.30			隅丸方形	円形		礫出土
101	DF-69	1.25	1.12	0.91	0.87	0.45			円形			
102	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		土坑なし
103	CA-55	1.93	1.20	1.42	0.55	0.72			隅丸長方形	長方形	落とし穴	
104	BY-58	1.52	1.00	1.22	0.48	0.65			隅丸長方形	長方形	落とし穴	
105	CE-59	—	—	—	—	—	—	—	—	—	落とし穴	実測図なし
106	CB-83	1.40	1.35	1.07	0.99	0.80			円形			礫出土
107	CE-76	1.36	1.19	0.92	0.87	0.27			円形			
108	CA-62	1.30	1.13	0.48	0.46	0.99	0.20	0.27	円形	方形	落とし穴	
109	BX-66	2.00	1.99	0.87	0.66	1.46	0.16	0.43	円形	方形	落とし穴	
110	CC-61	1.18	1.14	0.44	0.44	0.98	0.16	0.31	円形	方形	落とし穴	
111	CF-82	2.39	1.80	1.82	1.51	0.37			方形	方形		縄文前期末葉
112	CH-58	1.22	1.10	0.83	0.74	0.56			円形			
113	CM-60	1.10	1.05	0.83	0.82	0.63			円形			
114	CM-64	1.57	1.39	1.32	1.15	0.30			円形			
115	CN-63	1.03	0.97	0.81	0.74	0.16			円形			
116	CK-79	1.37	1.28	0.86	0.86	0.43			円形			礫出土
117	DK-52	1.20	1.17	0.97	0.96	0.62			円形			
118	DK-52	0.83	0.82	0.67	0.63	0.37			円形			
119	DG-54	1.56	1.27	1.30	1.07	0.24			楕円形			
120	CG-80	0.95	0.77	0.70	0.57	0.16			円形			
121	CC-80	1.28	0.87	0.85	0.48	0.33			楕円形			縄文前期末葉
122	BU-81	1.44	1.03	1.00	0.88	0.39			隅丸方形			
123	BU-79	1.50	0.76	1.23	0.62	0.55			隅丸方形			
124	CN-45	1.68	1.65	0.52	0.46	1.07	0.20	0.30	円形	方形	落とし穴	
125	CF-49	1.64	1.37	0.97	0.66	0.84	0.70	0.11	不整円形	長方形	落とし穴	
126	DC-21	1.78	1.69	0.70	0.66	1.21	0.22	0.34	円形	方形	落とし穴	
127	BW-73	1.33	1.03	1.01	0.82	0.62			楕円形			
128	DL-61	1.6	1.07	1.43	1.36	0.24			円形		小竪穴?	第129・137号土坑と重複
129	DL-61	1.69	1.61	1.46	1.31	0.29			円形		小竪穴?	第128・137号土坑と重複
130	DJ-67	1.31	1.24	1.60	1.52	0.43			円形		袋状土坑	第138号土坑と重複
131	DJ-62	1.45	1.40	1.13	1.13	0.36			円形			
132	DM-66	1.35	1.27	1.18	1.11	0.29			円形			
133	DN-66	1.49	1.27	1.48	1.04	0.23			円形			
134	DK-63	1.71	1.66	1.53	1.44	0.23			円形		第135号土坑と重複	
135	DL-63	1.16	1.05	0.72	0.68	0.92			円形		第134号土坑と重複	
136	CY-69	2.07	1.62	1.37	1.12	0.37			楕円形			礫出土
137	DL-61	1.46	1.21	1.16	1.04	0.28			円形		小竪穴	第128・129号土坑と重複
138	DK-67	1.98	1.94	1.66	1.64	0.61			円形		小竪穴?	第130号土坑と重複
139	BY-81	1.47	1.35	1.16	1.10	0.77			不整円形			
140	AU-75	1.08	0.96	0.86	0.70	0.10			円形		第8号集石炉	
141	AT-74	0.72	—	0.60	—	0.10			楕円形		第9号集石炉	
142	BC-58	1.20	1.07	0.94	0.71	0.11			楕円形			平安須恵器甕
143	BU-69	1.31	1.28	0.54	0.47	1.48			円形	方形	落とし穴	
144	DI-68	1.83	1.82	1.69	1.48	0.36			円形		小竪穴	
145	DM-64	2.17	2.00	1.94	1.83	0.39			円形		小竪穴	第13号住居址と重複
146	DN-64	1.94	—	1.47	1.38	0.17			円形		小竪穴	第13号住居址と重複

(2) その他の土坑出土の遺物

第 2 号 土 坑 (第106図)

第106図1・2がこの土坑からの出土である。1は破片上部に隆帯を貼り付け、ヘラ状工具によってキザミをいれている。2はごく浅い沈線を竹管状工具を用いて施文している。両者とも褐色を呈し、焼成は良好である。

第 24 号 土 坑 (第106図、第111図)

第106図10・11、第111図3が出土している。10にはハケ目調整がみられる。これらの破片は平安時代の長胴甕の破片である。第111図3は浅鉢である。外面には文様は施文されず、内面の口縁部上部に押し引き沈線文が施文され、一部に突起が作られている。

第 37 号 土 坑 (第106図)

第106図12の口縁部破片が出土している。口縁部上端部に3本の隆帯が横位に貼り付けられ、その上に爪形文が施文された土器で、胎土に白色の砂粒が多量に混入している。隆帯の部分に剥落が見られるが、比較的焼成の良好な土器である。

第 41 号 土 坑 (第111図)

第111図1がこの土坑から出土している。数種類の半截竹管状工具を使用して文様を描いている。また、頸部と口縁部上部には横位の隆帯を貼り付け、その上に爪形文を施文している。外面には煤が多量に付着している。焼成は良好で、褐色を呈している。

第 49 号 土 坑 (第106図)

第106図13～15が出土している。13・14は結節浮線文が施されている破片である。13は地文に縄文が確認できるが、14には確認できない。また、口縁部上端部の横位に貼付された浮線には押引文は施文されていない。また口唇部を平坦に面取りしているためか、内面上端部が折り返されたようにやや肥厚している。15は縄文を地文とし、その上部に押圧隆帯が区画文として貼付され、その上部に、浮線文が施されている。いずれの土器も焼成は良好で、胎土も比較的緻密である。

第 50 号 土 坑 (第106図)

第106図16・17が出土している。17は破片下部に2条の平行沈線を施文し、その上部に三角形の印刻文、さらに上部に円形の印刻文を刻んでいる。雲母を含んだやや焼成のあまい土器である。16は明褐色を呈した焼成の良好な無文の土器である。

第 56 号 土 坑 (第106図)

第106図18～28がこの土坑から出土した土器である。18～20は口縁部である。すべての口唇部が押圧による波状口縁を呈している。20は口唇部を面取りした後に押圧を加えたのか、内面上端部が折り返されたように肥厚し、口唇部は平坦であった。18は結節浮線文を施文しているが、ほかのものは縄文が主体である。また、19に縄文を施文した後にヘラ状工具による沈線をひいている。18・19は暗褐色を呈し、焼成も良好なのに対し

て、20は淡褐色を呈したやや焼成のあまい破片である。

22は縄文を施文した後、破片上半部をヨコナデによって磨り消している。また外面には煤が付着している。煤はその他26・27の外面にも確認できる。23は縄文を地文として結節浮線文を貼付している。内面にはミガキが施され、破片上部には接合痕が確認できる。27は縄文を地文として浮線文や押圧隆帯を縦位に貼り付けている。25・26・28は縄文を施文している土器で、28は幅約1.5cmの横位の文様帯を作るように、縄文を断続的に施文している。これらの破片は暗褐色系の色調を呈し、焼成は良好である。

第 58 号 土 坑 (第106図)

第106図29がこの遺構から出土した遺物である。29は上部に横位の幅広の結節浮線文を施文している。胎土には砂粒が多く混入しており、焼成もややあまい。

第 90 号 土 坑 (第110図)

第110図32・33が出土している。32は結節浮線文を施文している。地文は確認されていない。内面には横位のミガキが施されている。33は縦位に平行沈線文が施文されている。両者とも焼成は良好であり、32は淡褐色、33は褐色を呈する。

第 91 号 土 坑 (第110図)

第110図34が出土している。縄文を施文した土器である。

第 92 号 土 坑 (第110図)

第110図35・36が出土している。すべて縄文を施文している土器であるが、36は外面の施文は器面の柔らかいうちに無節の縄文を施している。焼成良好な土器である。35は焼成は良好で、両者とも色調は淡褐色を呈している。36は外面に煤が付着している。

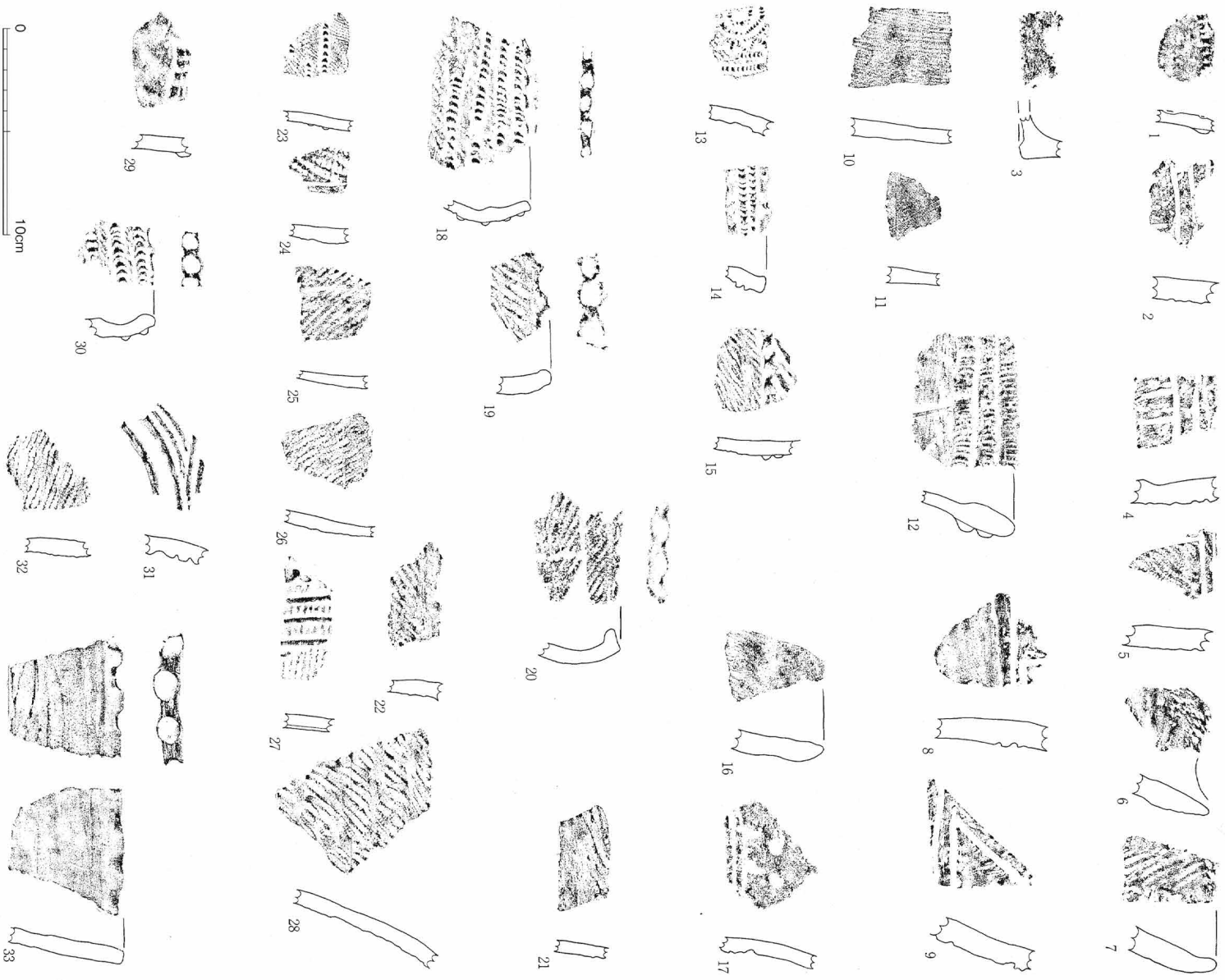
第 114 号 土 坑 (第110図)

第110図38が出土している。竹管状工具による沈線と、隆帯が貼付されている。

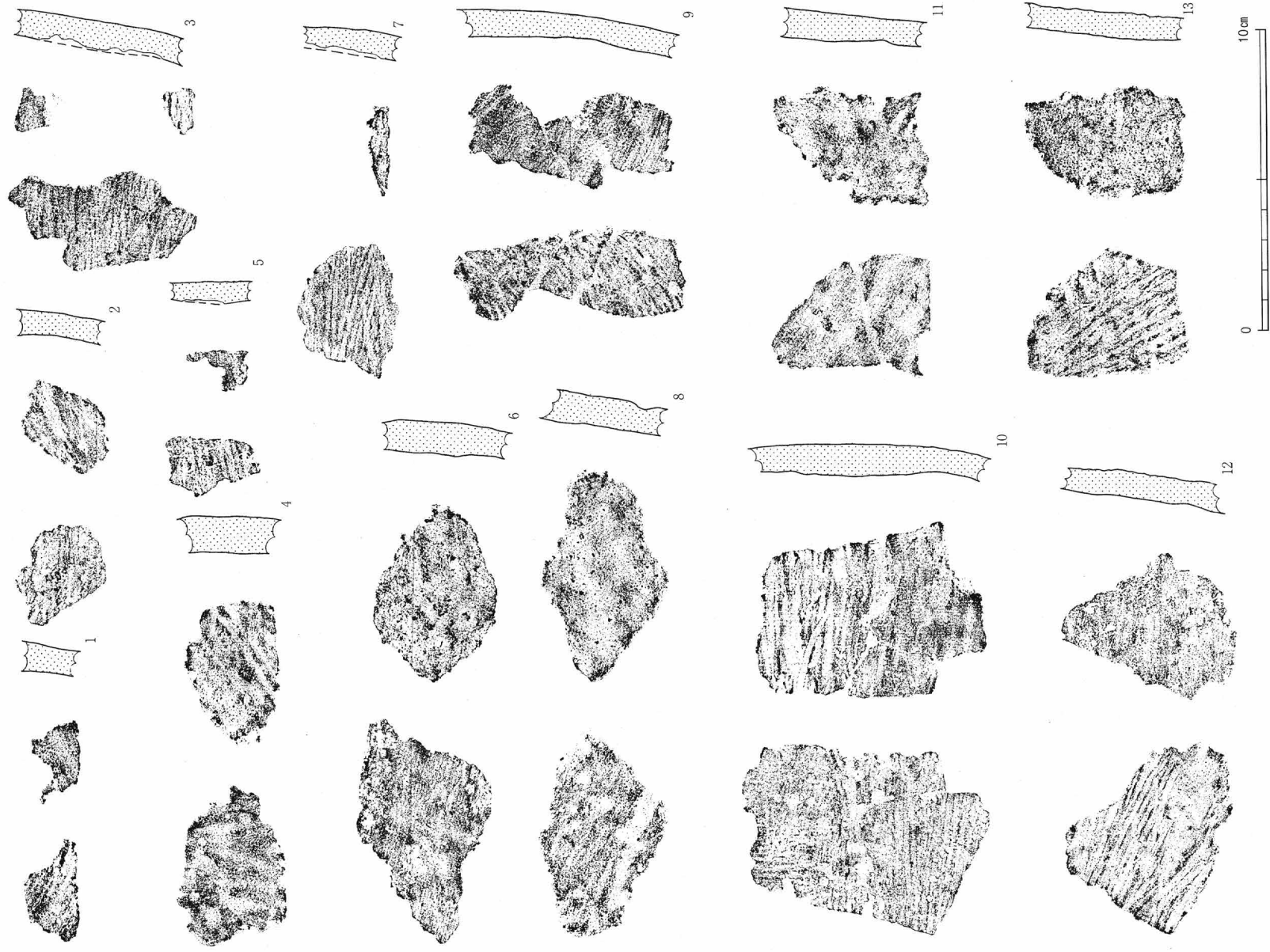
第 121 号 土 坑 (第110図)

第110図39・40が出土している。縄文を地文として、その上部に結節浮線文を施文している。なお、39の上部は接合痕をとどめ、接合痕付近には煤が付着している。40も縄文を地文として、その上部に結節浮線文を施文している。

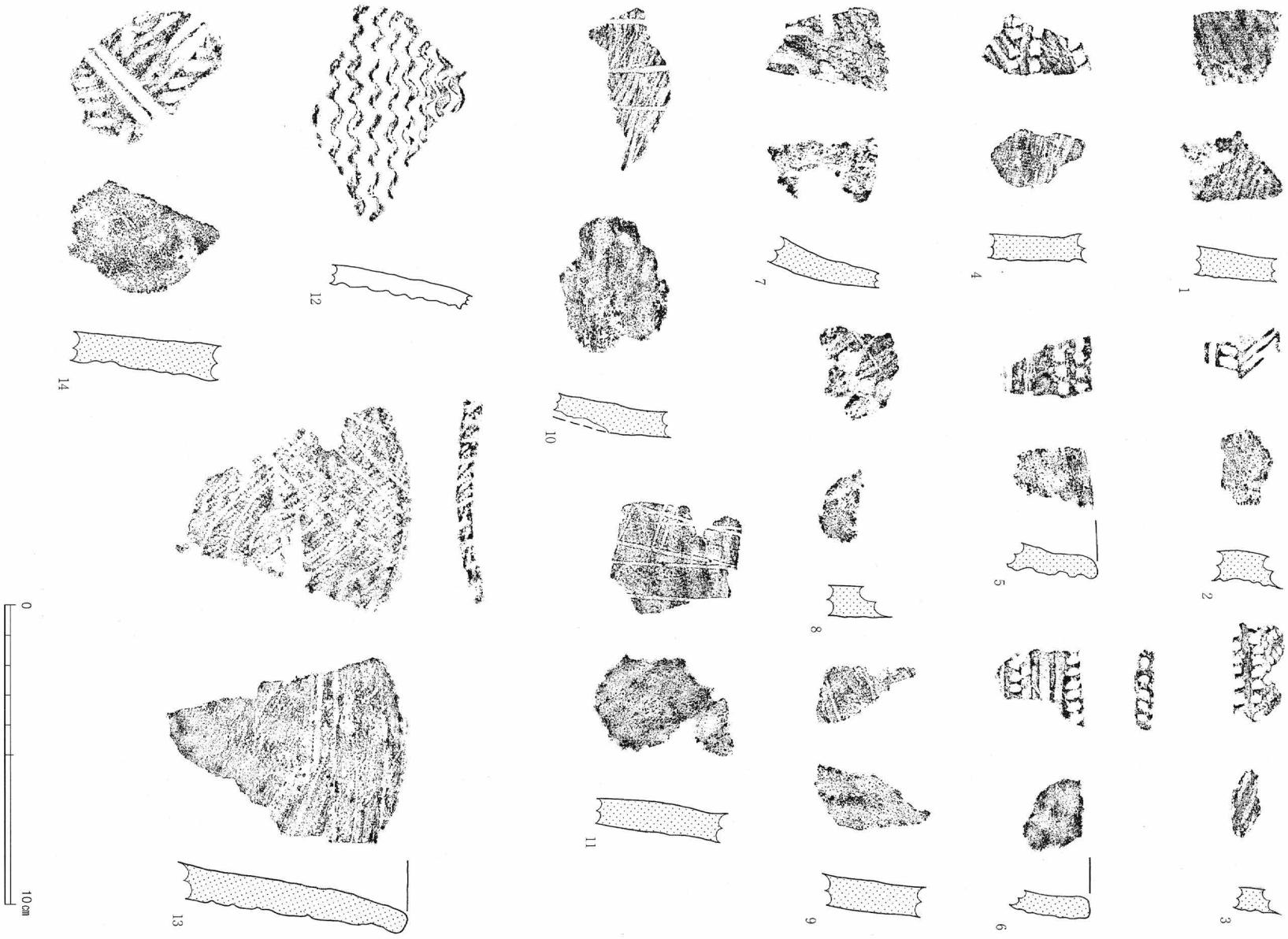
両者とも焼成良好であった。



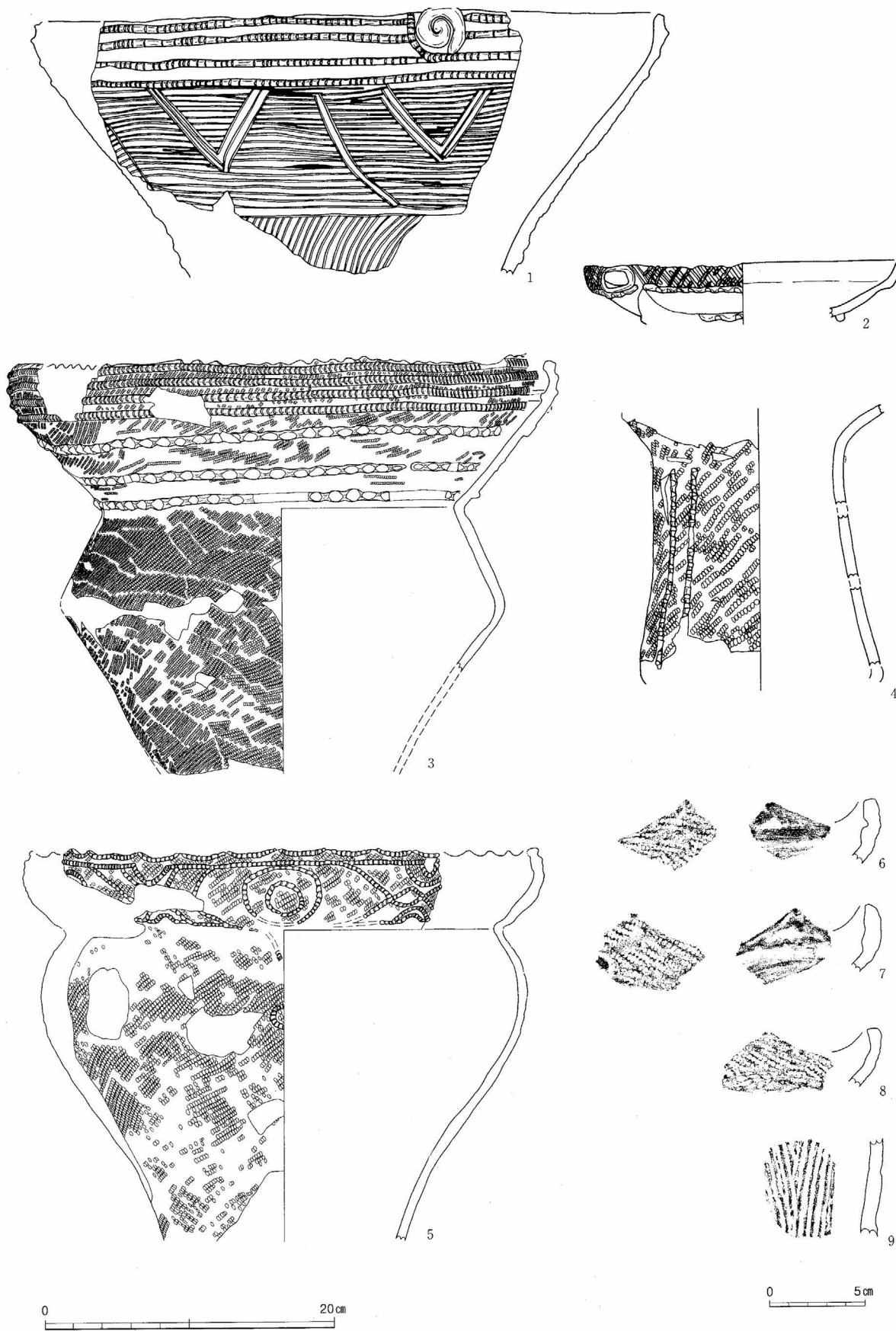
第106図 土坑出土遺物 (1) (1・2:2土、3:3土、4~9:4土、10・11:24土、12:37土、13~15:49土、16・17:50土、18~28:56土、29:58土、30~33:67土)



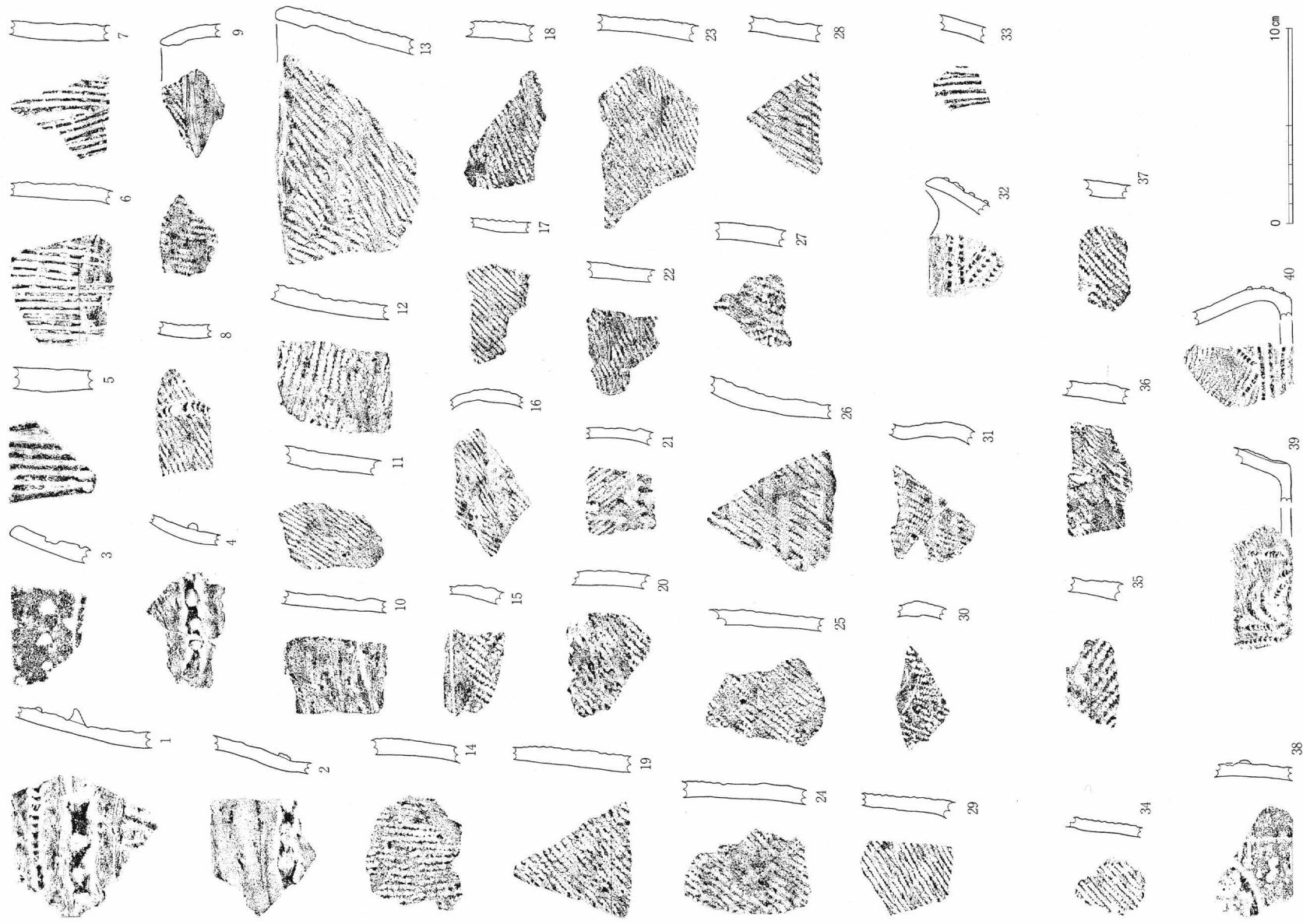
第107图 土坑出土遗物 (2) (第8号土坑)



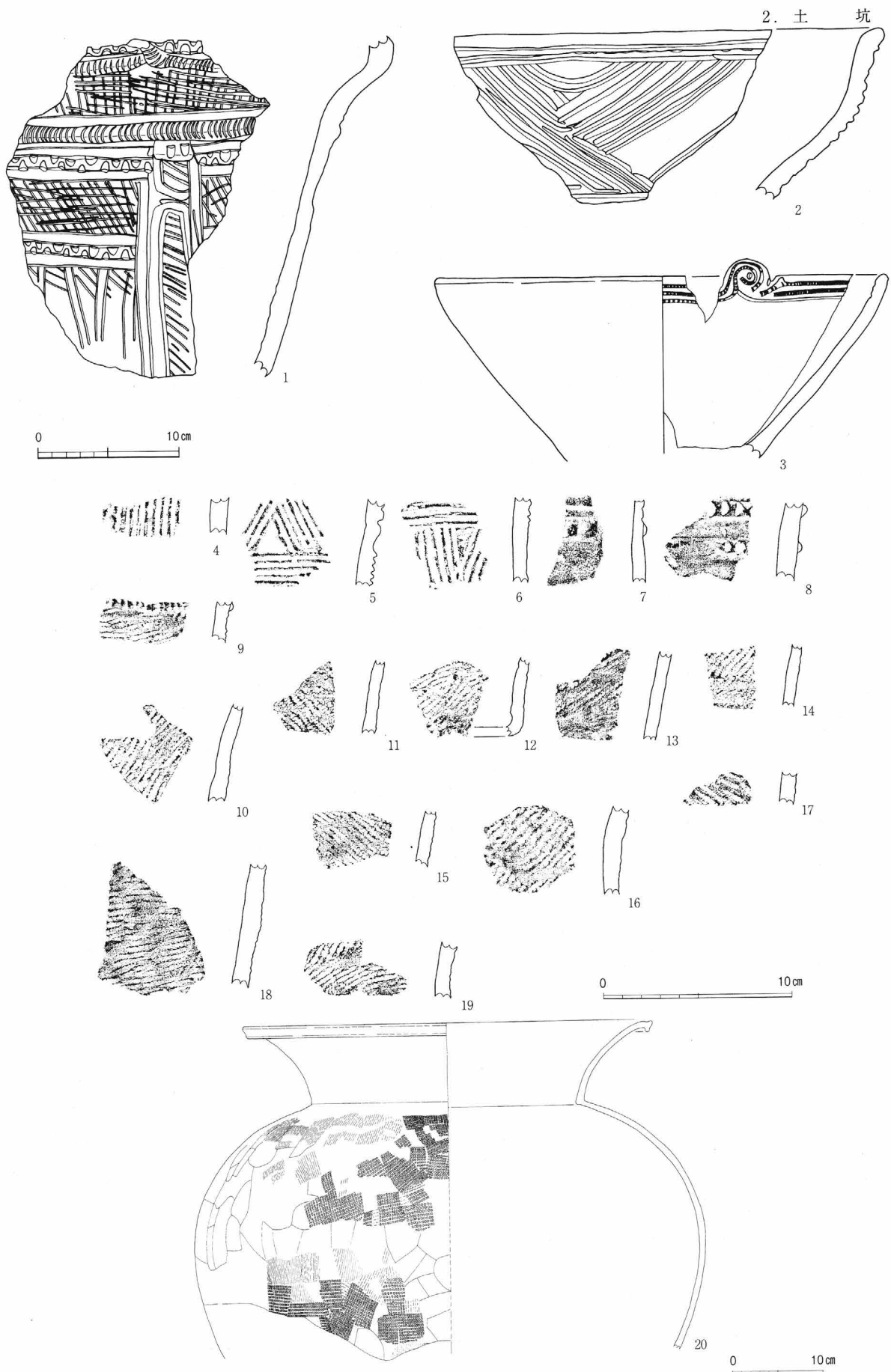
第108図 土坑出土遺物 (3) (1~11: 8土, 12: 45土, 13・14: 137土)



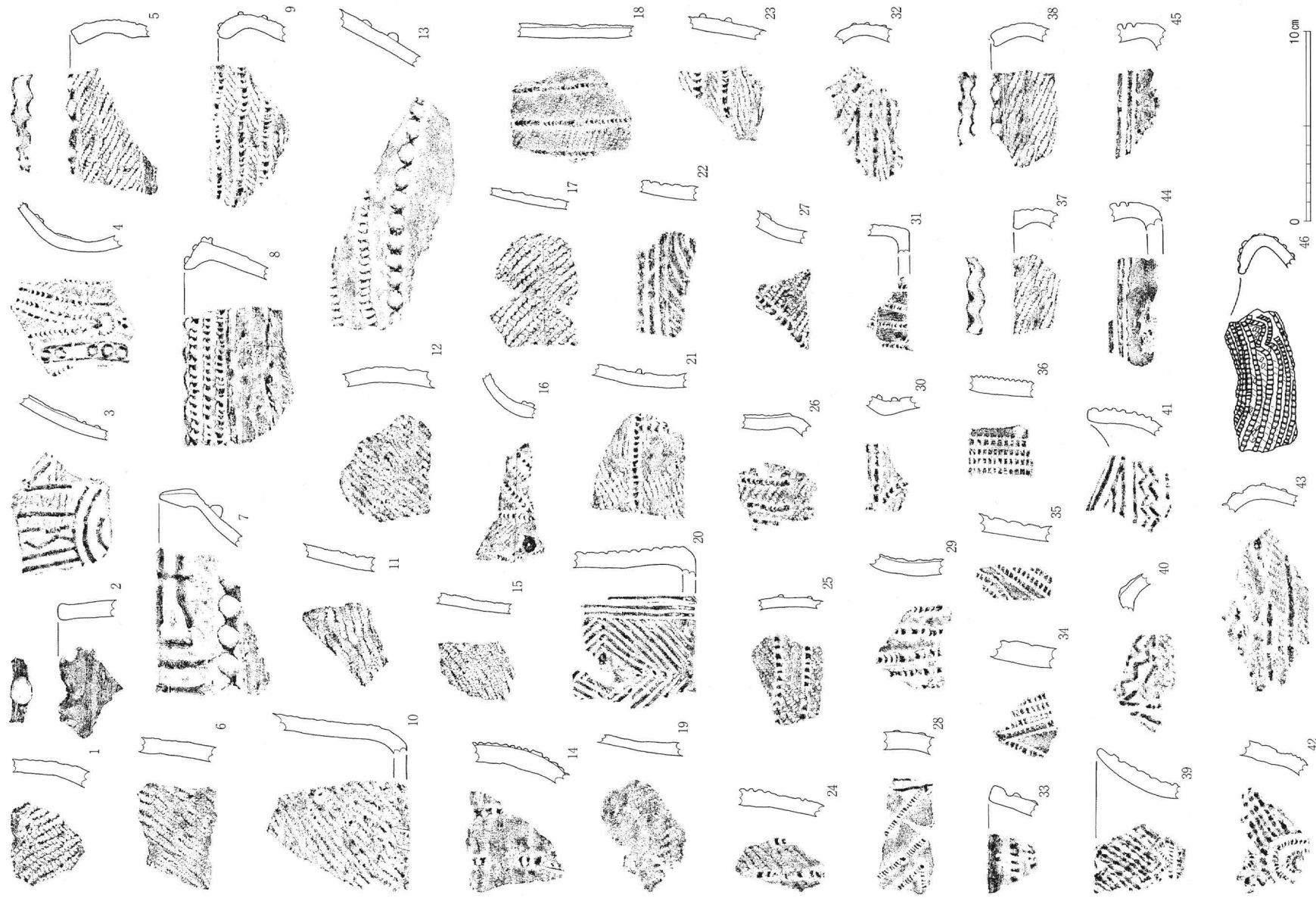
第109圖 土坑出土遺物 (4) (1·6~9: 65±, 2: 66±, 3~5: 67±)



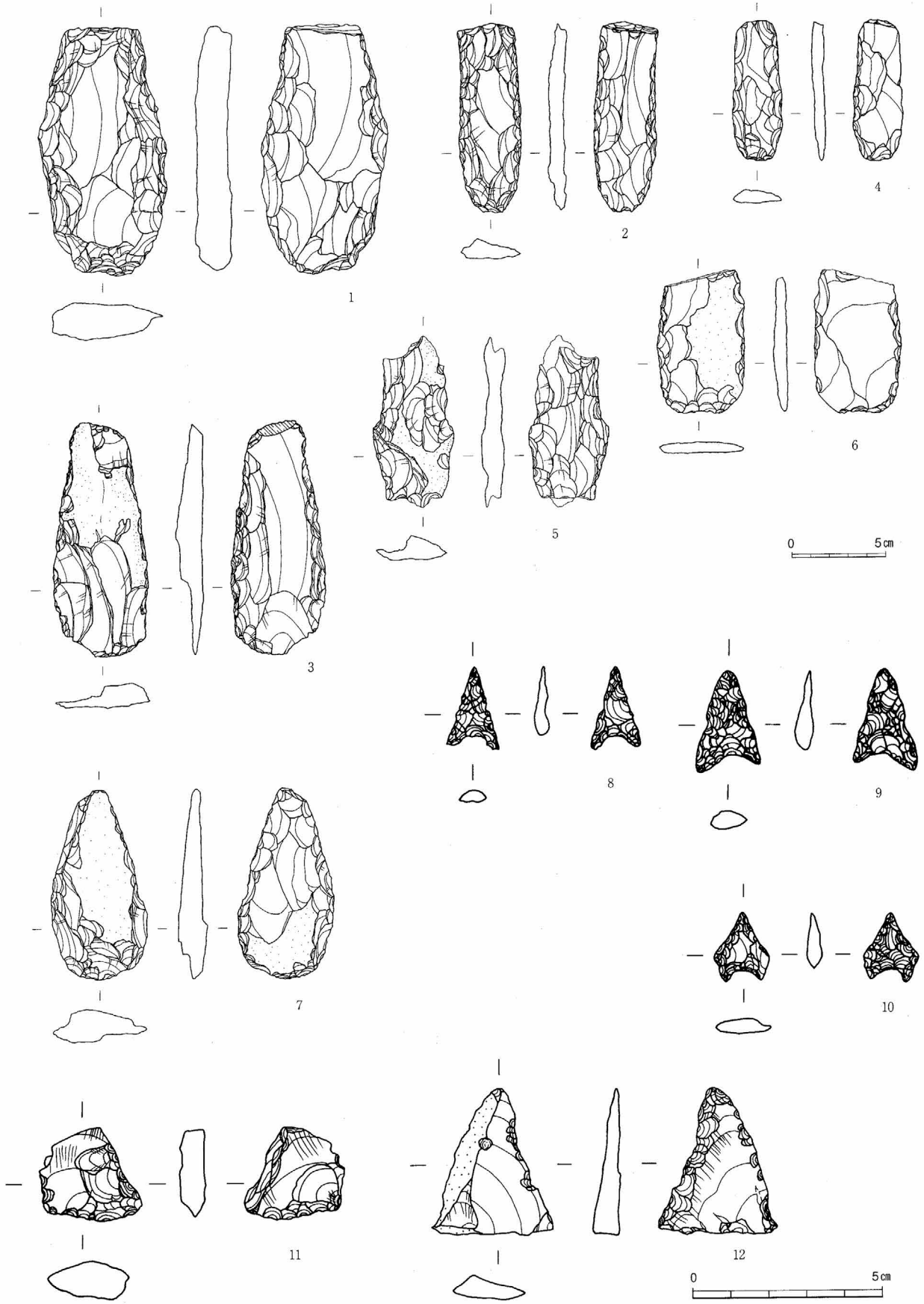
第110圖 土坑出土遺物 (5) (1~31: 66±, 32~33: 90±, 34: 91±, 35~36: 92±, 37: 93±, 38: 114±, 39~40: 121±)



第111图 土坑出土遗物 (6) (1: 41土、2: 93土、3: 24土、4~19: 111土、20: 142土)



第112図 土坑出土遺物 (7) (III土)



第113圖 土坑出土遺物 (8) (1:9土、2:37土、3~7:66土、8:57土、9·11:8土、10:111土、12:41土)

3. 集石

(1) 集石

第1号集石 (第115図)

この集石は直径10cmほどの石が17個ほど集中して出土している。この集石下部には掘り込みは確認されなかった。

第2号集石 (第115図)

BL-96から出土している。直径10cmほどの礫を中心にして22個ほどの礫が出土している。この集石も、下部に掘り込みは確認されていない。

第4号集石 (第115図)

この集石は、集石といっても、礫が一カ所に集中しているというより、やや散漫に広がっているような印象を受ける。また、下部に浅い落ち込みが確認されているが、遺構として取り扱えるか疑問が残る。

第7号集石 (第115図)

CM-79から出土している。直径5cm~10cmほどの礫を中心にしてまとまっている。この集石は下部に遺構等は確認できなかった。

第8号集石 (第115図)

AU-75付近から出土している。長径約1.1m、短径約1mで深さ約10cmの平面楕円形で、断面皿状を呈する浅い土坑内の底部付近に10cm程度の礫が集中して出土している。また、底部付近では釘状の鉄製品も出土している(第116図1)のをはじめ、少ないながら鉄製品も出土していることから、重複して出土している不明遺構に伴う集石と考えられる。

遺物 (第116図)

第116図が出土した鉄製品である。1は鉄釘状の形体をした鉄製品である。不明遺構で一括出土しているものと同様の形体をしており、頭部は「T」字状に加工され、先端部にむかうにしたがって細くなっている。2・3は用途不明品である。2は板状に加工されている。3は断面長方形である。4は釘の体部である。

第9号集石 (第115図)

AT-74付近から検出された。南東部は遺構検出時のサブトレンチのため一部を破壊してしまい、全体を検出することができなかった。直径約0.8m、深さ約10cmを測る平面楕円形で、断面皿状を呈する土坑内に直径10cm程度の礫が出土している。この遺構からは遺物の出土はみられないが、出土状況が第8号集石と近似していることから、この遺構も不明遺構に伴うものと考えられる。

第10号集石 (第116図)

この遺構はBX-67から出土している。この遺構は第109号土坑と重複して出土している。当初はこの重複関係が把握できなかったため、遺構の前後関係を土層断面で観察することができなかった。しかし、礫の残存

状況から、集石が土坑を切っていることがうかがえる。

この集石は、直径1mの周囲に大きく2ヶ所に分かれて礫が集中している。北部の集中地点の礫のほうが南部に集中している礫よりも若干小さい。また、集石下部の掘り込みは、長径1.5m、短径1.1m、深さ30cmを測り、覆土は平面楕円形であり、断面で見ると皿状の形体を呈している。覆土は黒褐色系の土で覆われており、炭等は検出されていない。

なお、礫は上部に集中しているのみで、掘り込みの覆土中からはほとんど出土していないため、集石炉とはやや異なった性格をもつ遺構と考えられる。

第11号集石（第115図）

AT-74から出土している。この集石は番号は一つであるが2基の集石と考えられる。両者とも、直径約5cm～10cmの礫を中心に構成されている。しかし、下部には掘り込み等は検出されていない。

(2) 集石炉

第3号集石（第114図）

BE-99から検出されている。直径約1.5mの円形状に礫が広がっている。この礫の下部には長径2m、短径1.5mの平面楕円形を呈す。礫は掘り込みの底部付近まで入れられており、土坑底部には偏平な石が敷かれていた。また、掘り込みの深さは約40cmで、断面すり鉢状であった。覆土は暗褐色系の土が主体であり、焼土は検出されていない。この遺構からは遺物が出土していないため、時期を特定できない。

第5号集石（第114図）

CM-56から出土している。遺構確認面では直径1mの円周を中心にして礫が確認され、その下部には長径1.6m、短径1.3m、深さ25cmほどの平面楕円形、断面では碗状の掘り込みが出土している。この掘り込みでは覆土中から炭が出土しており、底部には板状の木炭が出土した。このため集石炉と判断している。

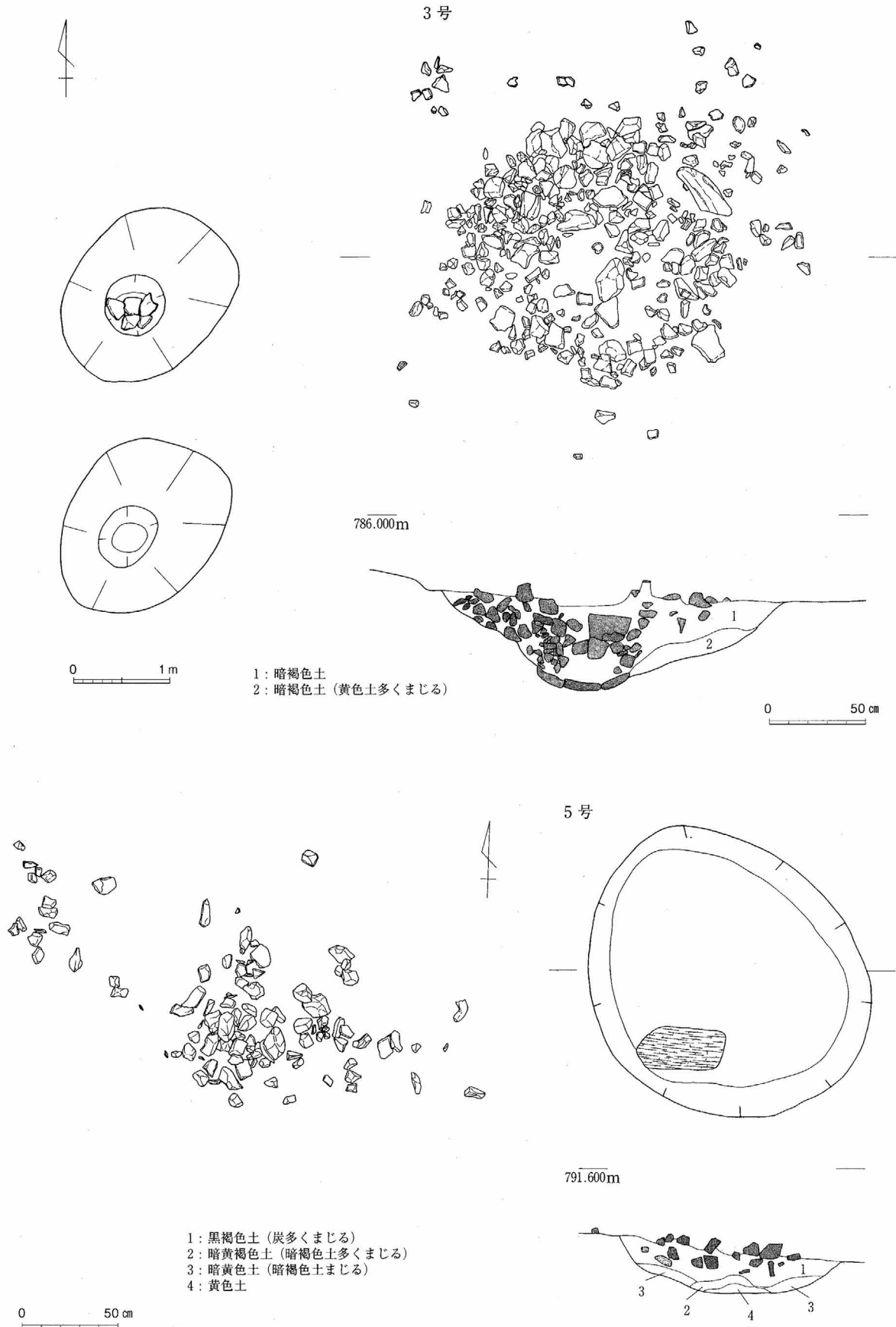
遺物が出土していないために時期は不明である。

(3) その他の集石

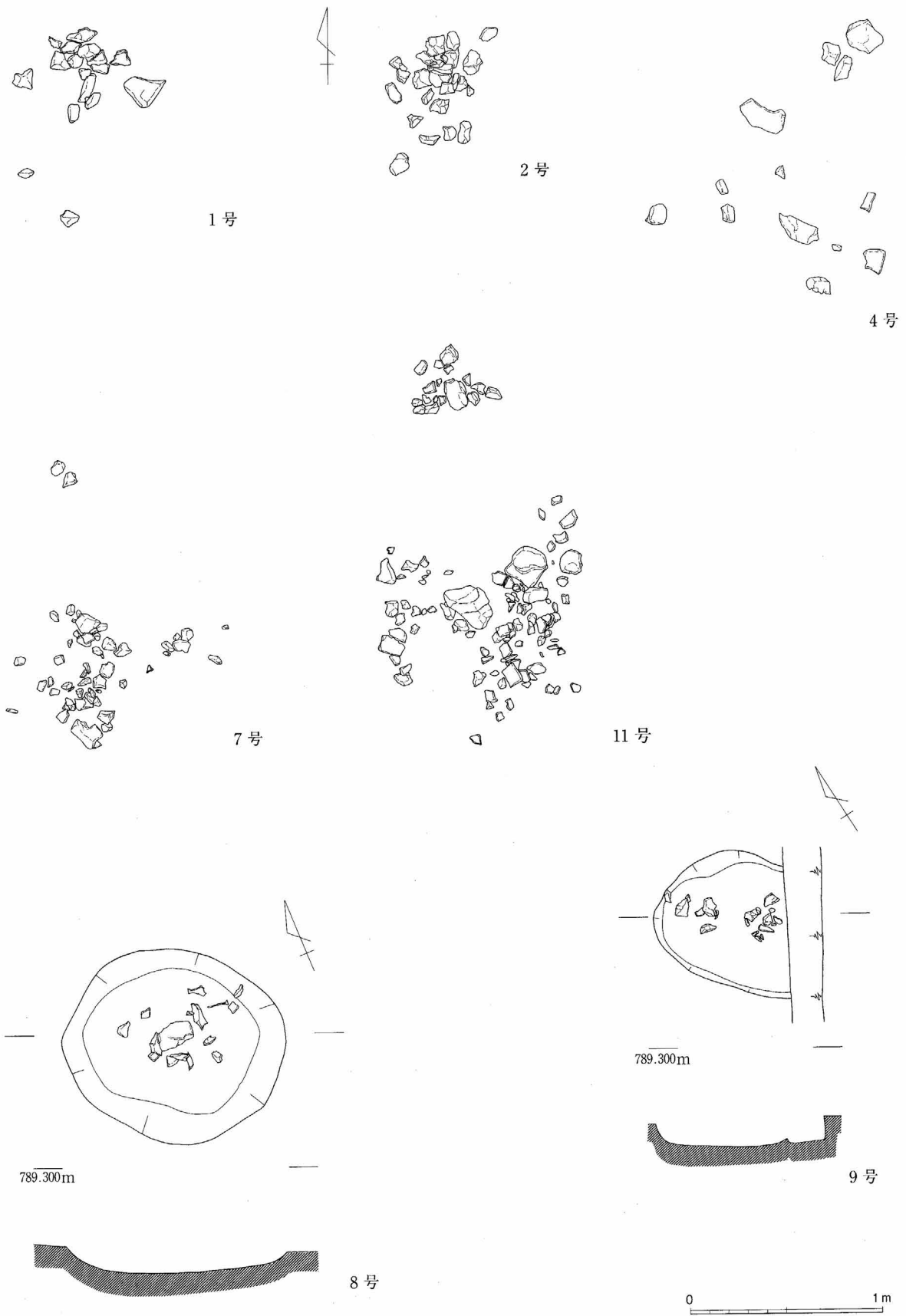
第6号集石（第117図）

この遺構はBK-92から出土している。当初は礫が土坑周囲を取り囲むようにして出土したため、集石炉かと考えたが、サブトレンチを開坑したところ、最深で約15cm程下がった所で礫が集中して出土してきた。このため礫をすべて掘り出したところ、直径約1mの平面円形で、断面で見ると鍋底のような形に検出された。この礫を被覆していた土は暗褐色系で、炭が若干混入していた。また礫下部には浅い掘り込みがあり、黒褐色系の土を中心に、やはり若干の炭が混入していた。

さらに、掘り込みの東部には直径1m程の土坑が重複して出土しているが、土層観察ではこれらの土坑を掘り込む形で集石が作られているように考えられる。しかし遺構自体の性格を把握できないため、別の遺構として明確に分けることができなかった。

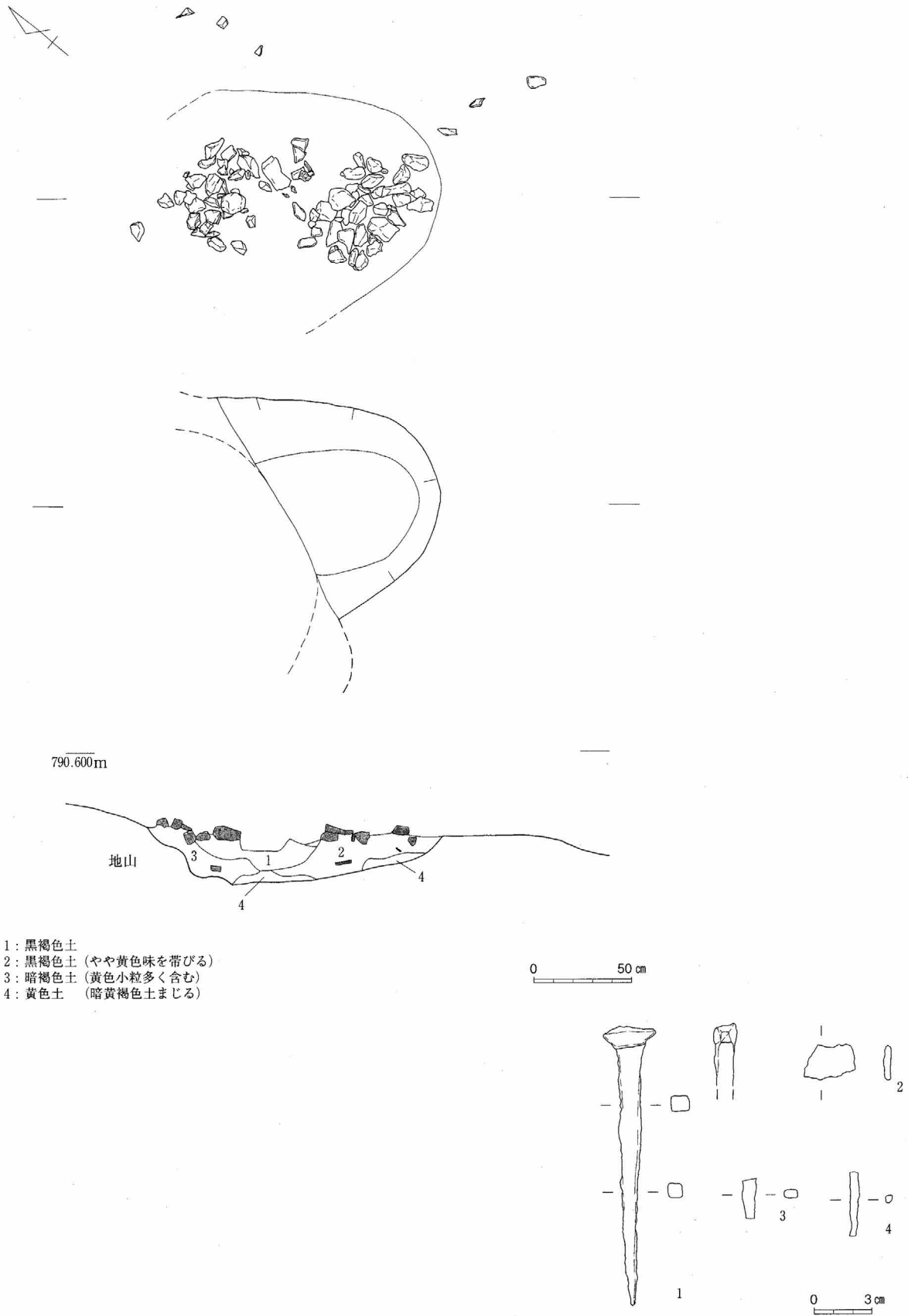


第114図 集石実測図 (1)

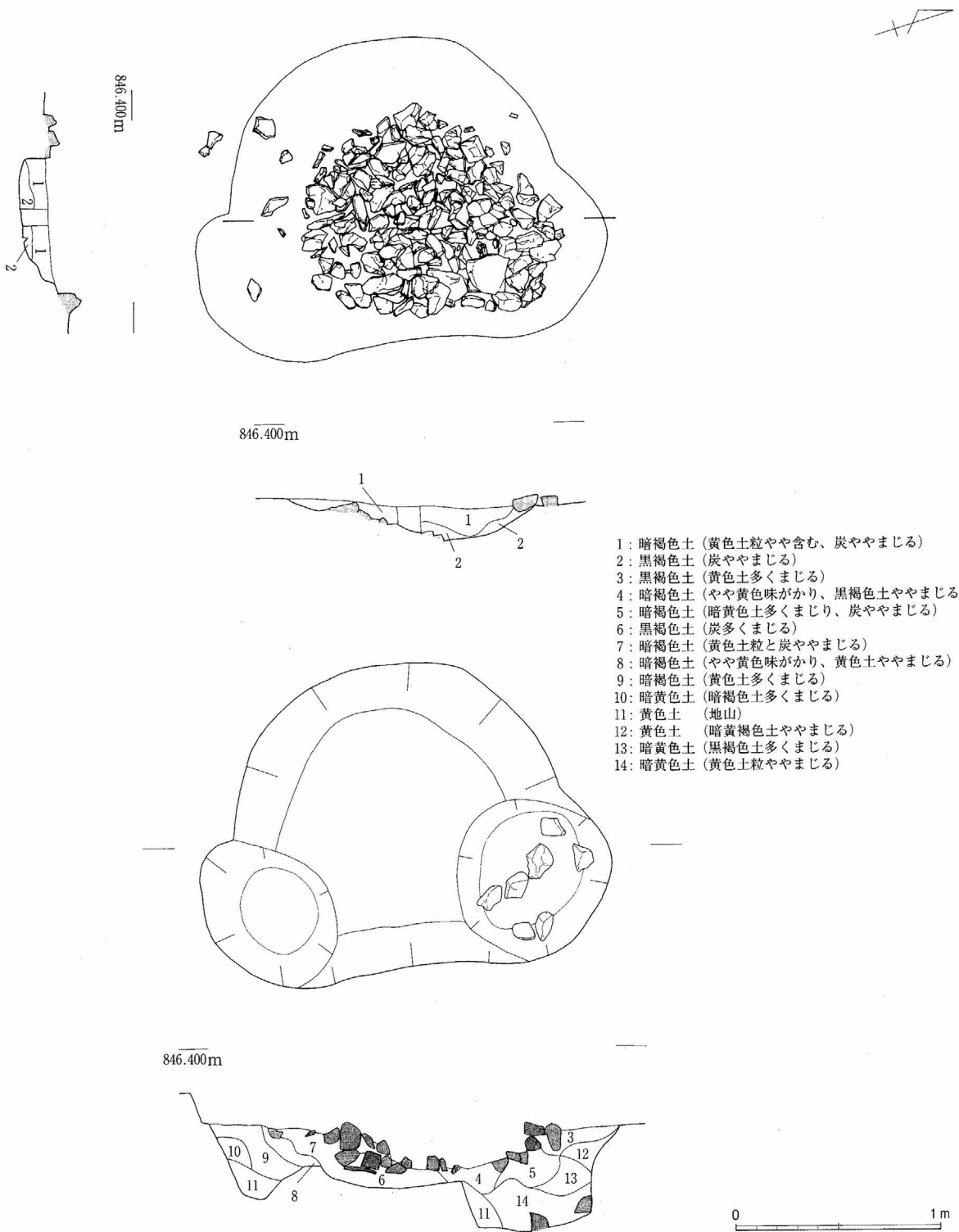


第115図 集石実測図 (2)

第IV章 遺構と遺物



第116図 第10号集石実測図および第8号集石出土遺物



第117図 第6号集石実測図

4. 掘立柱建物址

(1) 平安時代

第1号建物址 (第118図)

この建物址はBI-87付近を中心として出土している。規模は2間×3間で、長軸は東西方向を示す。また、北部長辺の1カ所は、この地点に縄文時代の土坑が重複していたために明確に検出することができなかった。柱穴の間隔は長辺では約1.8m～2.0m、短辺では約2.2mとなっている。掘り込みの深さは遺構検出面からは約15cm～40cmであった。

第2号建物址 (第118図)

この建物址はBG-91付近を中心に検出された。この建物址は第3号建物址と重複して出土しており、さらに、第24号土坑と重複しているために明確なプランを検出できず、北部の柱穴2カ所が出土していないが、東西に長軸を持つ、2間×3間の規模の建物址と考えられる。柱穴の間隔は、東西で約2m、南北で約1.7mを測る。掘り込みの深さは遺構検出面から35cm～20cmである。

第3号建物址 (第119図)

第2号建物址と重複して出土している。規模は3間×2間で、長軸は南北方向を示しており、第2号建物址とは直交する形となっている。柱穴の間隔は約1.6～1.7mを測り、柱穴の直径は約34cm～43cmで、他の柱穴と比べると若干小規模である。また、掘り込みの深さは遺構検出面から約20cm～38cmである。

第4号建物址 (第119図)

BT-84を中心として出土している。規模は2間×3間で、東西に長軸を持つ。柱穴の間隔は約1.6m～2.2mを測る。この柱穴間隔はほかの建物址と比べると若干間隔にばらつきが大きい。柱穴の直径は約50cm～60cmであった。遺構検出面からの柱穴の掘り込みの深さは、約20cm～30cmである。

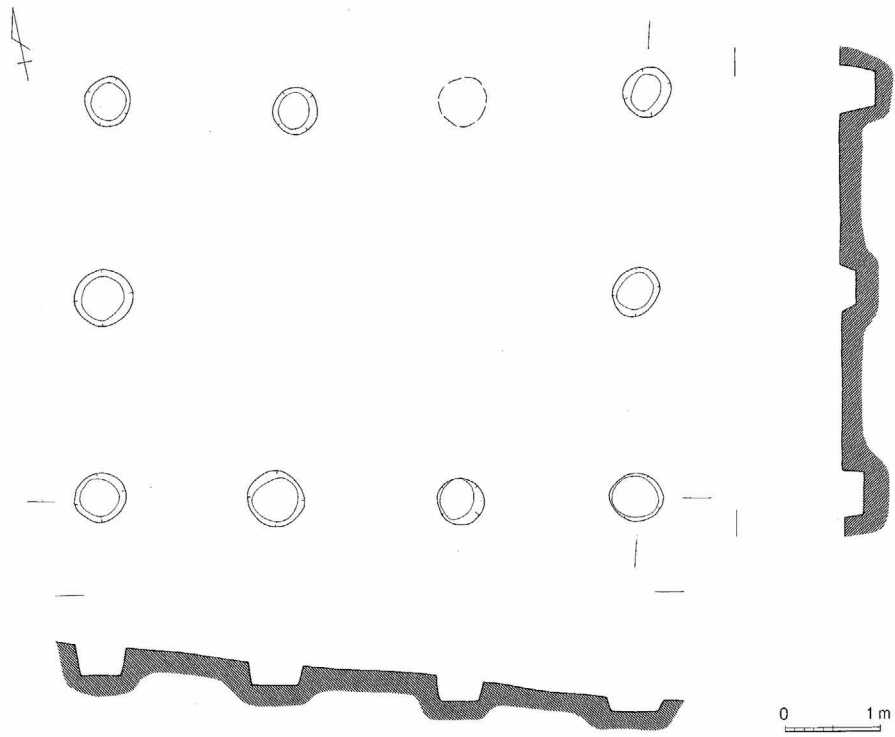
第5号建物址 (第120図)

この建物址は、BQ-85付近から検出されたが、柱穴が明確に検出されていないため、規模は明確にできない。柱穴の規模は、約40cm～55cmを測り、若干小規模である。柱穴の間隔は、約1.5m～1.7mを測る。

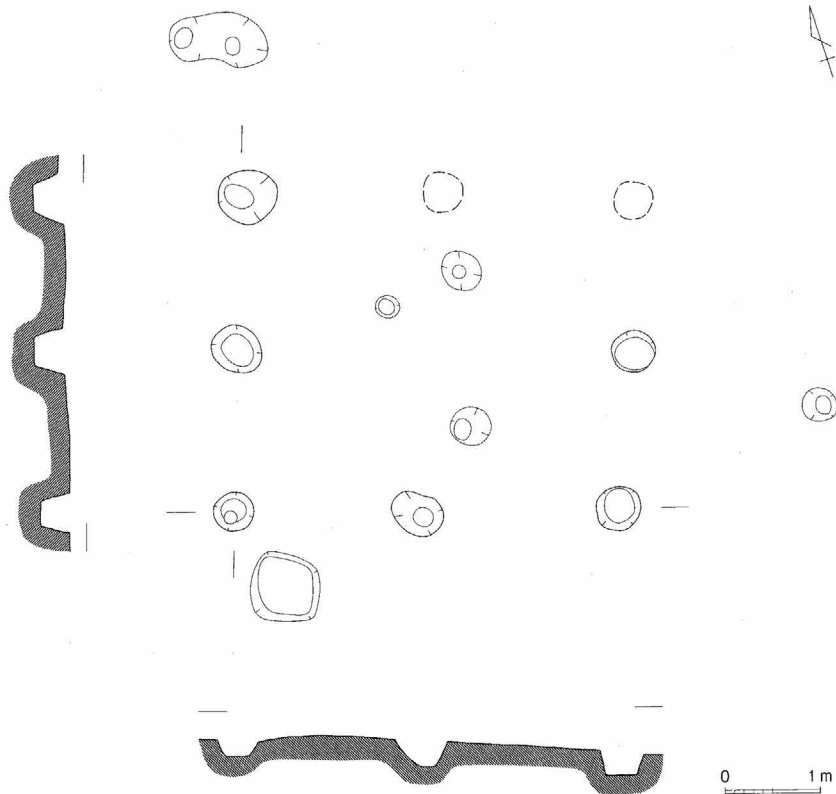
第6号建物址 (第120図)

CC-79を中心として出土している。この建物址は掘り方を完全に調査した段階での記録をとらずに調査を終了してしまったため、掘り上がりの柱穴の規模が不明となってしまった。柱穴の間隔は、長軸方向で約1.5m～2m短軸方向で、約2m～2.2mである。柱穴の直径は約45cm～55cmである。

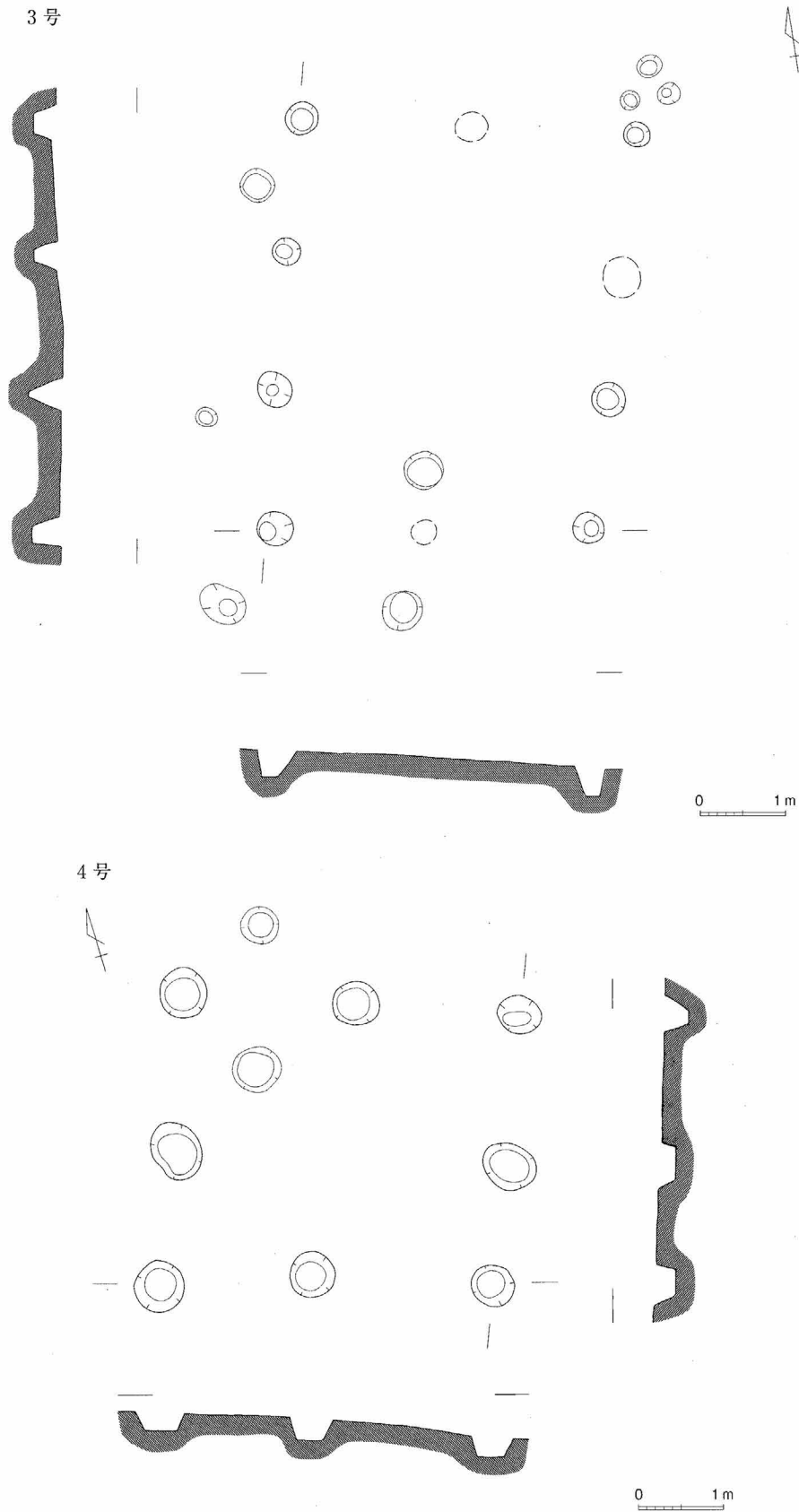
1号



2号

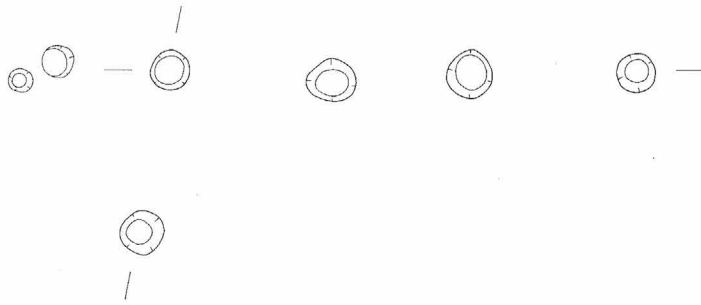


第118图 掘立柱建物址实测图 (1)



第119図 掘立柱建物址実測図 (2)

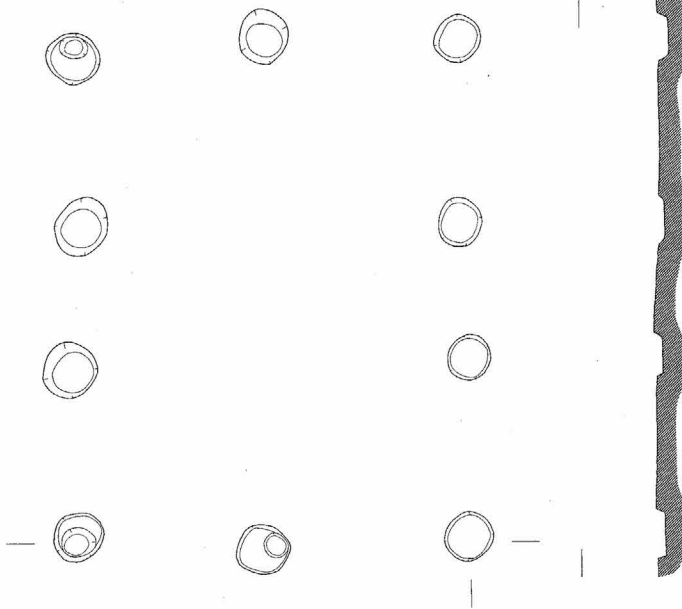
5号



0 1m



6号



0 1m

第120图 掘立柱建物址实测图 (3)

5. その他の遺構と遺物

1) 平安時代

不明遺構

この遺構はAL-77からBA-77を中心として出土している。東西14m、南北26mの平面長方形を呈しており、遺構の深さは検出面から最深で約96cm、遺構西部では検出面と同じ高さであった。この遺構内には直径40cmの大きな礫が5ヶ所から出土しており、そのほかにもこの礫よりは小さいながらも比較的大きな礫が散在している。また、AS-74付近では、最長で約30cm、最短でも15cm程度の長さの釘状の鉄製品が頭部をそろえて置かれたような状態で出土している（第121図）。また、そのほかにも床面付近からは多数の釘状鉄製品や、鎌等が出土している。

また、床面からは集石（第8号・第9号集石）も出土しており、釘状の鉄製品も出土していることから、この集石も不明遺構に関連した遺構と考えられる。

覆土は、黒色系の土を中心として堆積しており、床面は貼床されていたのか、床の土を剥ぎ取ると地山と思われる土が検出され、土坑も出土している。この土坑からは遺物が出土しておらず、不明遺構との関係は明確にはできなかった。

遺物（第123図～第126図）

第126図は、この遺構から出土した陶磁器である。25は白磁の碗の体部である。口縁部は玉縁を呈し、下部付近まで釉薬が施されている。内面は体部と見込み部分の境界付近に、一条の圏線がヘラ状工具によって引かれている。色調はやや緑がかった白色である。26は同じ器形の碗の底部破片と考えられる。破片上面に一部釉薬が確認でき、底部は浅いケズリ高台である。外面の施釉されていない部分はケズリ調整が行われている。内面は全面に施釉されており、体部と見込み部分の境界付近には一条の圏線が、ヘラ状工具によって引かれている。色調は25と同様にやや緑がかった白色である。

27は碗の口縁部破片である。25と同様に口縁部は折り返されて玉縁状としているが、釉薬は薄く、褐色味を帯びた乳白色を呈している。

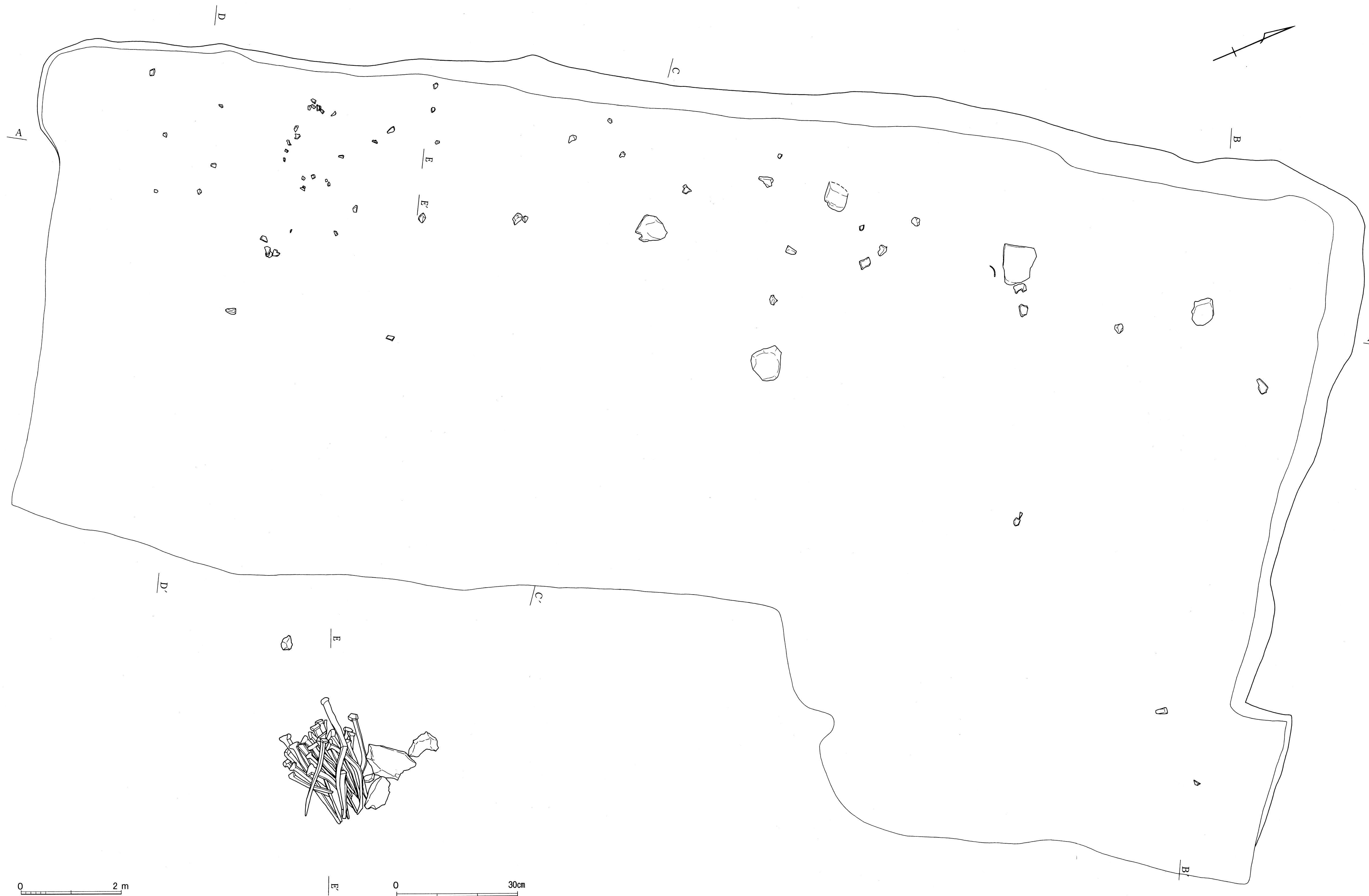
28は天目茶碗である。口縁部上部の折り返しは見られず、丸碗の形態である。

口絵2は青磁碗である。体部の破片と考えられ、内面に劃花文が見られる。

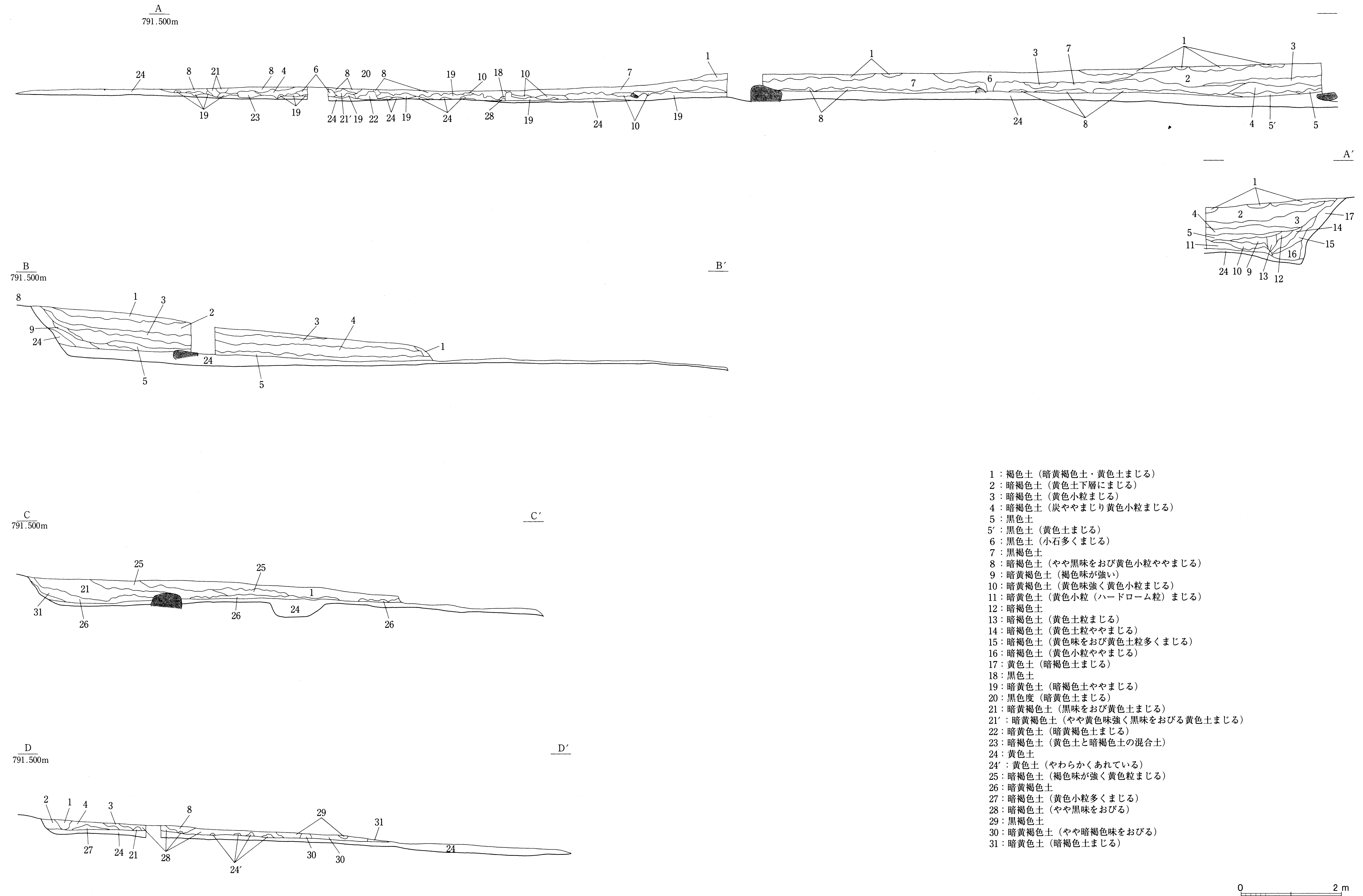
第123図～第124図・第125図1～5が床面より一括して出土した鉄製品である。遺物を取り上げた直後に保存処理を実施できず、錆化が進んだ段階で処理を行ったため、出土時の状態を留めていない個体もある。

これらの遺物、とりわけ一括で出土している鉄製品は、その多くが、本来はまっすぐに整形されていると考えられるのに対して、出土時点では「く」字状に屈曲している。また、先端部は残存している多くが潰れており、一度製品として使用されていたかの様相を呈している。頭部の形態は、一般的な釘状の鉄製品のように折り曲げられているものと、「T」字状を呈しているものの2種類が見られる。なお、出土した釘状鉄製品の断面形状は正方形をしている。

床面直上付近より出土している鉄製品についても前述の様相が当てはまり、この遺構に伴う遺物と考えられる。また、第125図25～29や第126図22～24のように機能が判明しない遺物や、煙管の吸い口（第126図21）等も出土しているほか、図化していないものの製鉄時の残滓物や鉄滓、鞆の羽口も出土している。

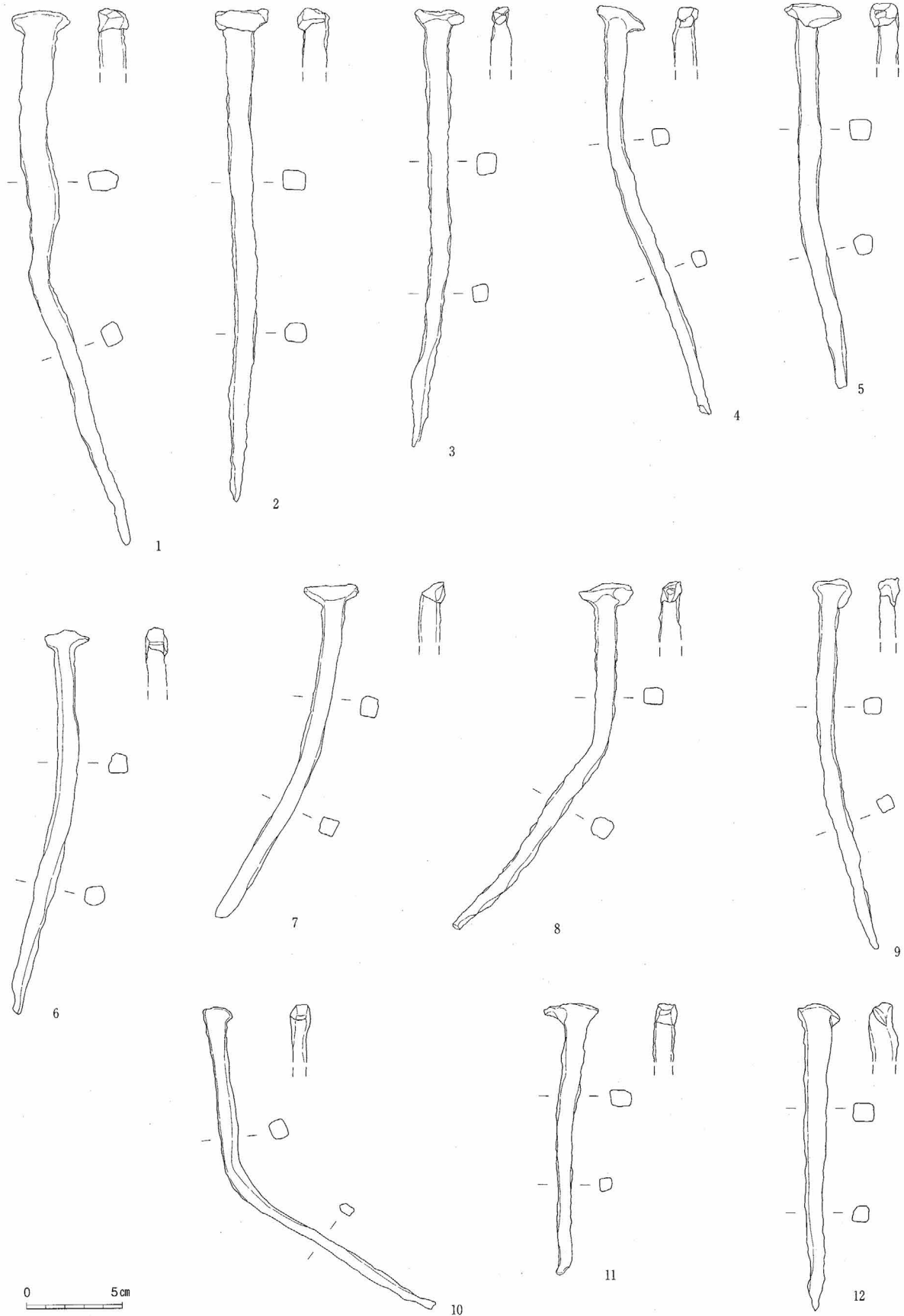


第121図 不明遺構実測図 (1)

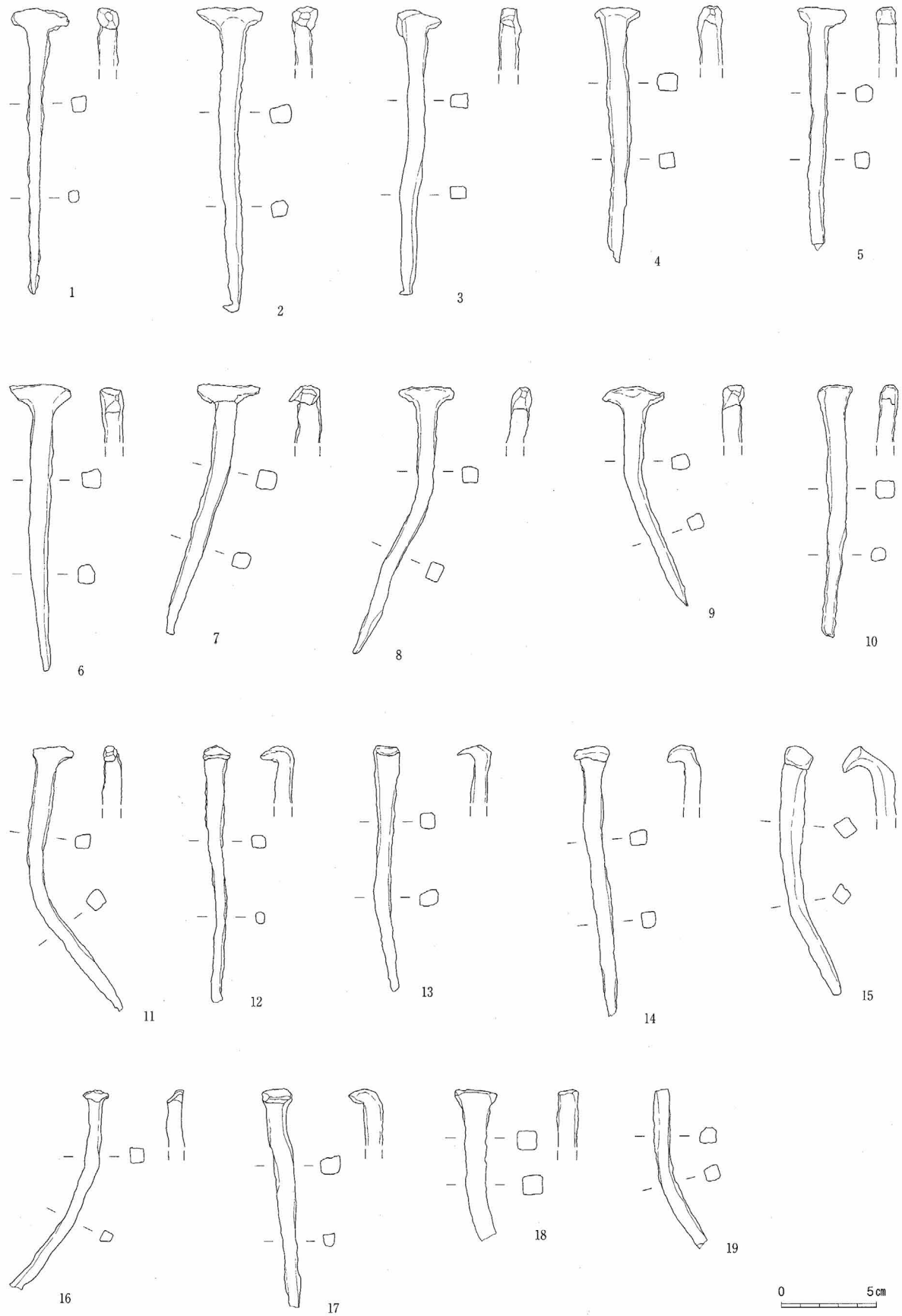


- 1：褐色土（暗黄褐色土・黄色土まじる）
- 2：暗褐色土（黄色土下層にまじる）
- 3：暗褐色土（黄色小粒まじる）
- 4：暗褐色土（炭やまじり黄色小粒まじる）
- 5：黒色土
- 5'：黒色土（黄色土まじる）
- 6：黒色土（小石多くまじる）
- 7：黒褐色土
- 8：暗褐色土（やや黒味をおび黄色小粒ややまじる）
- 9：暗黄褐色土（褐色味が強い）
- 10：暗黄褐色土（黄色味強く黄色小粒まじる）
- 11：暗黄色土（黄色小粒（ハードローム粒）まじる）
- 12：暗褐色土
- 13：暗褐色土（黄色土粒まじる）
- 14：暗褐色土（黄色土粒ややまじる）
- 15：暗褐色土（黄色味をおび黄色土粒多くまじる）
- 16：暗褐色土（黄色小粒ややまじる）
- 17：黄色土（暗褐色土まじる）
- 18：黒色土
- 19：暗黄色土（暗褐色土ややまじる）
- 20：黒色度（暗黄色土まじる）
- 21：暗黄褐色土（黒味をおび黄色土まじる）
- 21'：暗黄褐色土（やや黄色味強く黒味をおびる黄色土まじる）
- 22：暗黄色土（暗黄褐色土まじる）
- 23：暗褐色土（黄色土と暗褐色土の混合土）
- 24：黄色土
- 24'：黄色土（やわらかくあれている）
- 25：暗褐色土（褐色味が強く黄色粒まじる）
- 26：暗黄褐色土
- 27：暗褐色土（黄色小粒多くまじる）
- 28：暗褐色土（やや黒味をおびる）
- 29：黒褐色土
- 30：暗黄褐色土（やや暗褐色味をおびる）
- 31：暗黄色土（暗褐色土まじる）

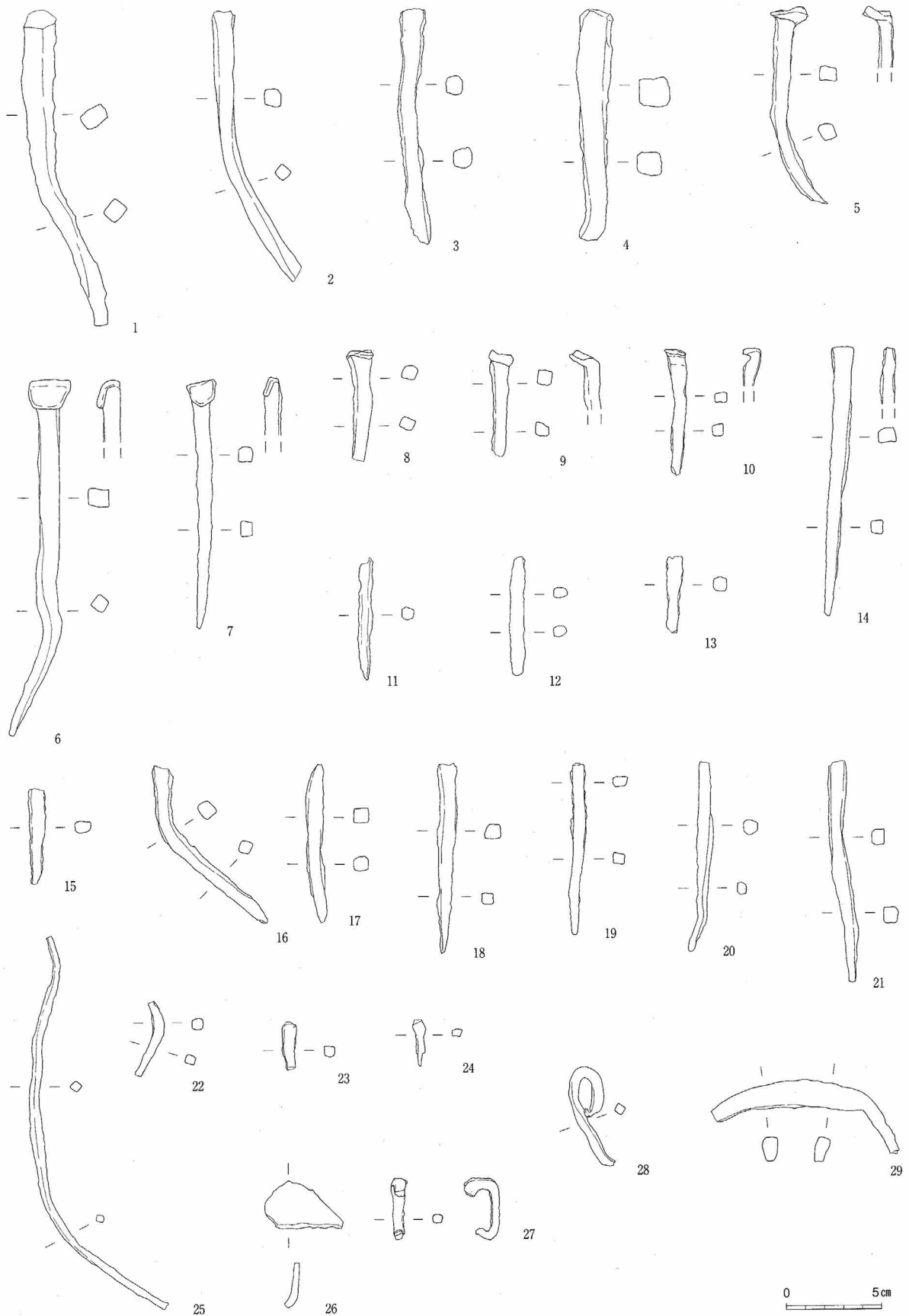
第122図 不明遺構実測図（2）



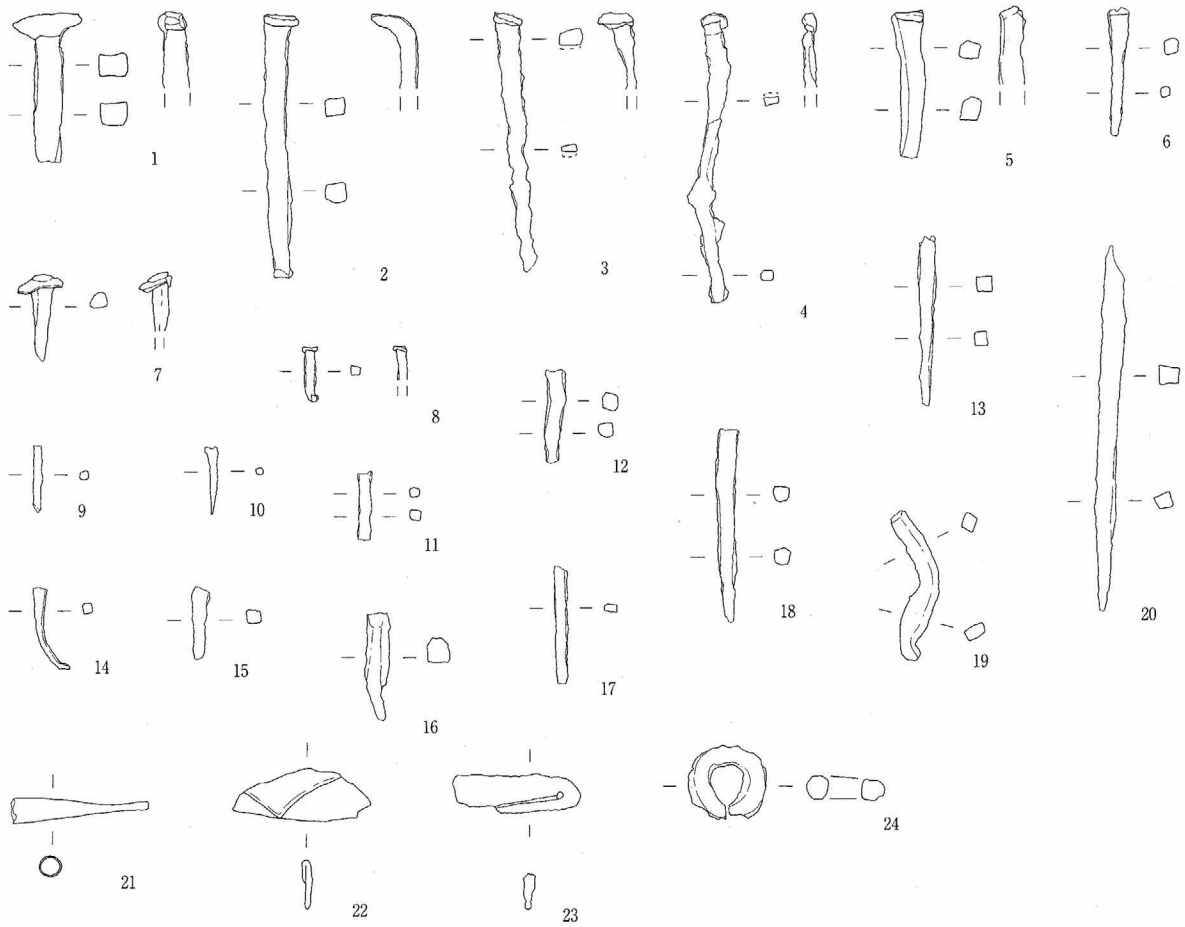
第123図 不明遺構出土遺物 (1)



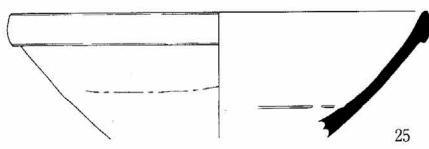
第124図 不明遺構出土遺物 (2)



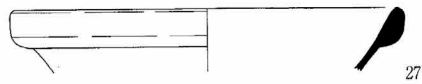
第125図 不明遺構出土遺物 (3)



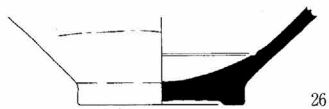
0 5 cm



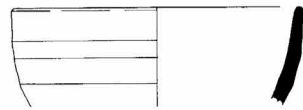
25



27



26



28

0 5 cm

第126図 不明遺構出土遺物 (4)

2) その他

第1号竪穴建物址 (第127図)

この遺構はBF-85から出土している。長径0.9m、短径0.6m、深さ約20cmの長方形で、東西方向に長軸をむけている。また、南東部は第1号溝址と重複しており、断面観察では、溝址を切って掘り込んでいることが確認されている。

遺物

この遺構からは遺物が出土していない。

第2号竪穴建物址 (第127図)

BB-98から出土している。長径1.3m、短径1m、深さ約24cmを測る。平面形体は長方形で、南北方向に長軸がむいている。

遺物

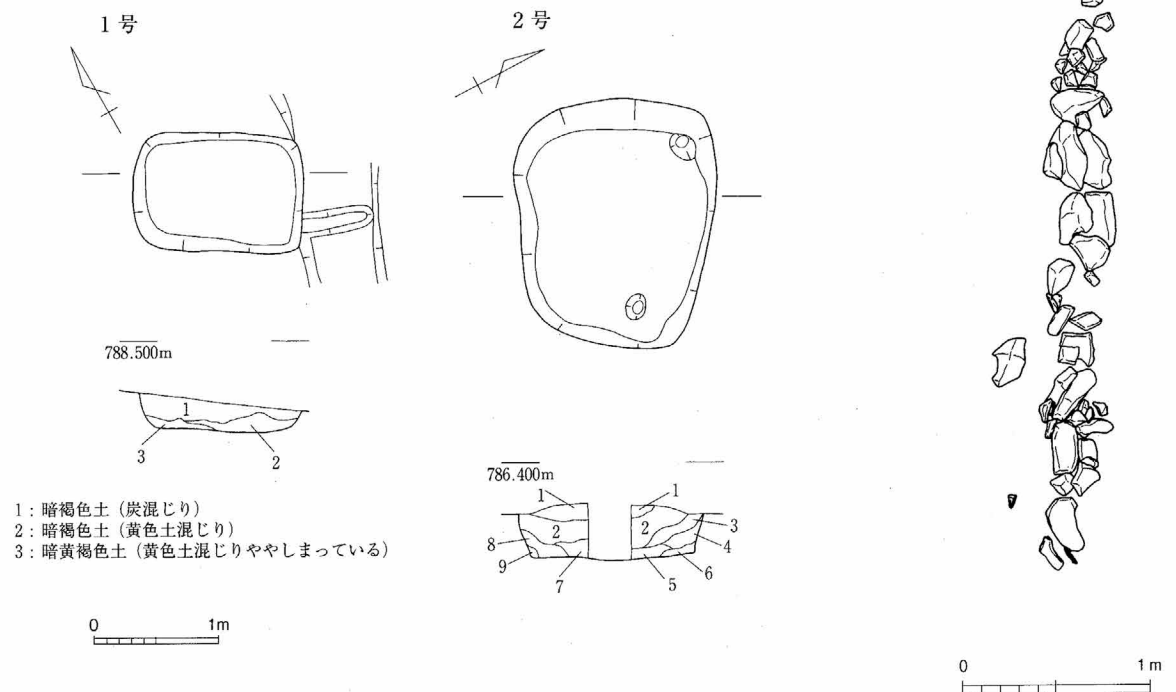
この遺構からも遺物の出土はみられなかった。

石列 (第127図)

CI-77からCJ-80にかけて東西方向に出土している。直径20cm程度の石が幅40cm、長さ8.4mにわたり検出された。この遺構については遺物の出土もなく時期等は不明であるが、軸は掘立柱建物址と同じであることから平安時代とも考えられる。

遺物

この遺構からは遺物は出土していない。



第127図 竪穴建物址・石列遺構平面図

第IV章 遺構と遺物

溝 址

この遺構は一応平安時代の範疇と考えたいが、時代を明確にできる遺物が出土していないため、時代不詳としておく。

第 1 号 溝 址 (第128図)

この遺構は、不明遺構の西部に南北に出土している。発掘調査時の調査区の設定上南部を一部調査できておらず、さらに北部の先端部については明確に検出できなかったため、遺構全体の規模を把握することができなかった。

この溝の底部の形体は、北部では船底形を呈し、底面は比較的平面的であるのに対して、南部では溝中央部に尾根状の高まりがあり、2本の小規模な溝が平行して掘り込まれているような様相であった。遺構自身の遺存度は北部よりも南部のほうが良好な印象を受ける。

遺 物

この遺構からは遺物の出土はなかった。

第 2 号 溝 址 (第128図)

この溝は、第1号溝址の西部に平行するようにして検出されている。この遺構も、プランが明確に把握できなかったため、規模は明確にできなかった。

遺 物

この遺構からは、土器、石器と考えられる遺物が数点出土している。

第 3 号 溝 址 (第128図)

この溝も、第2号溝址と同様に第1号溝址の西部に平行するようにして検出されており、プランが明確に把握できなかったため、規模は明確にできなかった。

遺 物

遺物は出土していない。

第 4 号 溝 址 (第129図)

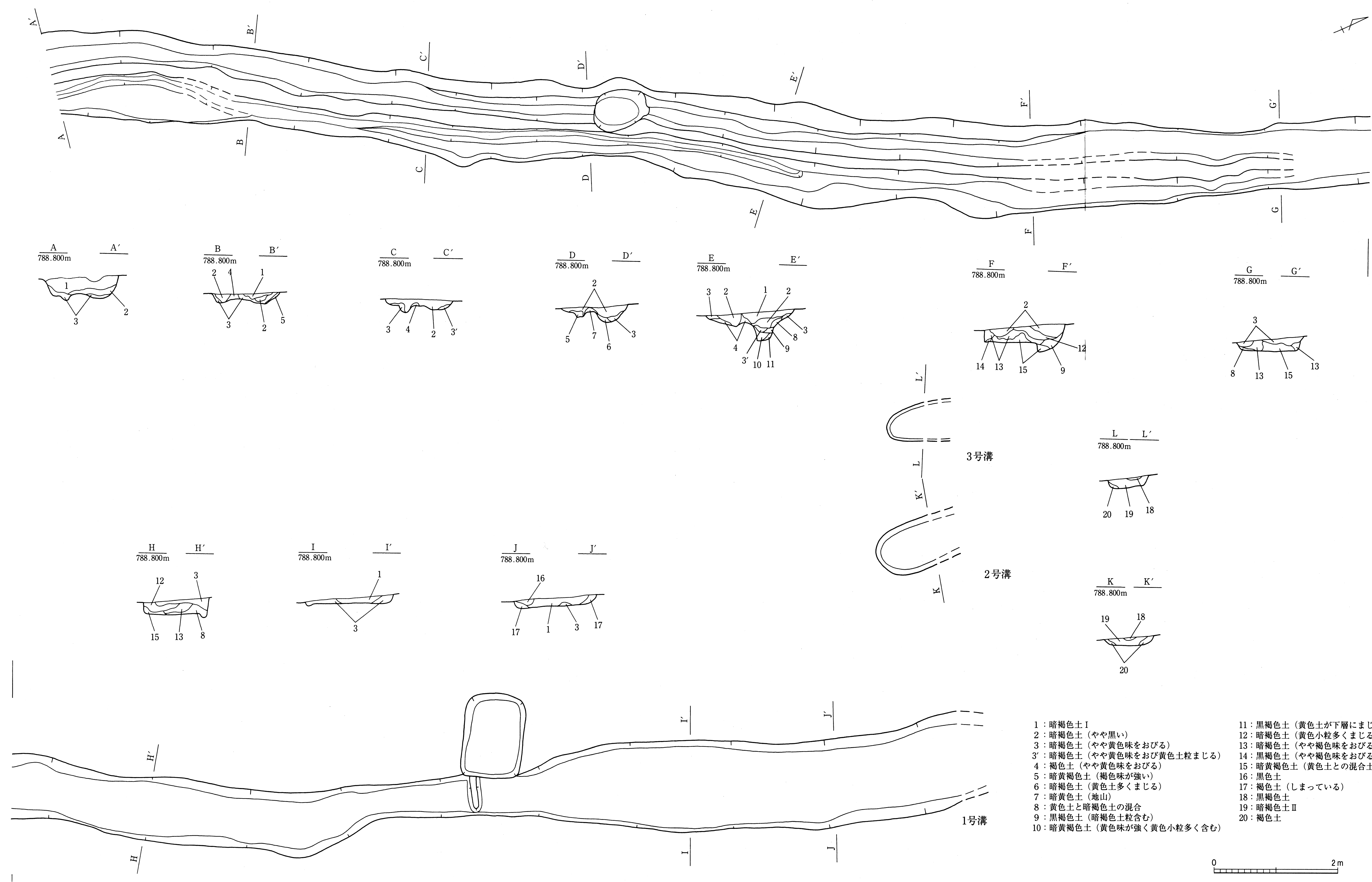
この遺構は不明遺構の東西軸と平行する形で出土している。溝自身はさほど深くなく、深い所でも20cm程度である。また、東部は近年の削平による段差で、遺構の検出がうまくいかず、西部は削平によって破壊されているようで、両端部の構造は把握できなかった。なお、溝中央やや東寄りに、第4号溝址に直行するように溝状の遺構が出土しているが、調査段階では明確なプランが把握できたわけではないので、遺構として捉えられるか疑問である。

遺 物

この遺構からは遺物は出土していない。

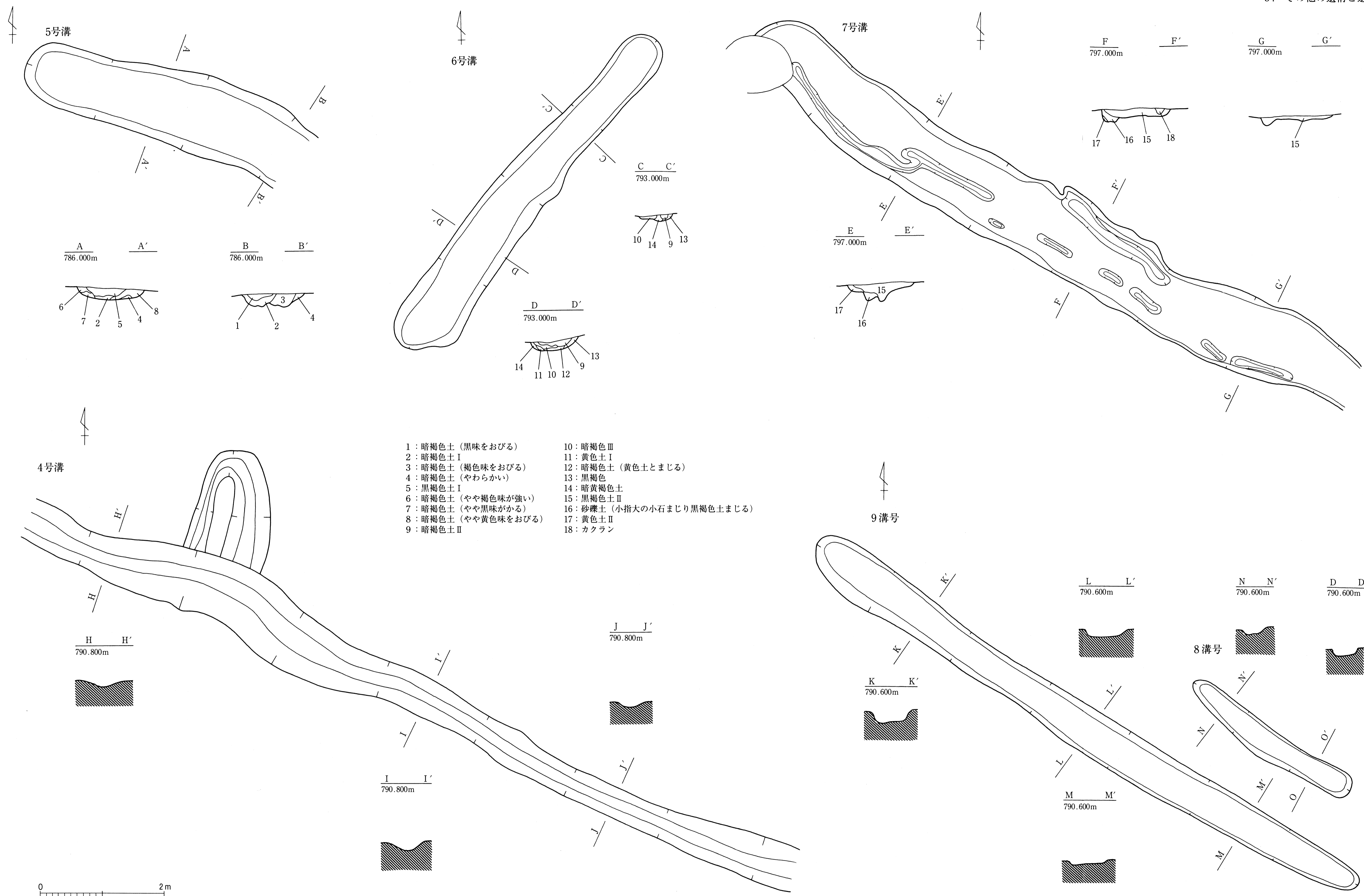
第 5 号 溝 址 (第129図)

この溝は、BC-109から出土している。東部は調査区域外であるため、全体を調査することはできなかった。この溝も深いところで、約30cm程であり、比較的浅い遺構であった。



- 1: 暗褐色土 I
- 2: 暗褐色土 (やや黒い)
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 3': 暗褐色土 (やや黄色味をおび黄色土粒まじる)
- 4: 褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 5: 暗黄褐色土 (褐色味が強い)
- 6: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 7: 暗黄色土 (地山)
- 8: 黄色土と暗褐色土の混合
- 9: 黒褐色土 (暗褐色土粒含む)
- 10: 暗黄褐色土 (黄色味が強く黄色小粒多く含む)
- 11: 黒褐色土 (黄色土が下層にまじる)
- 12: 暗褐色土 (黄色小粒多くまじる)
- 13: 暗褐色土 (やや褐色味をおびる)
- 14: 黒褐色土 (やや褐色味をおびる)
- 15: 暗黄褐色土 (黄色土との混合土)
- 16: 黒色土
- 17: 褐色土 (しまっている)
- 18: 黒褐色土
- 19: 暗褐色土 II
- 20: 褐色土

第128図 溝址実測図 (1)



第129図 溝址実測図 (2)

6. 遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外からも遺物約1,920点が出土しているが、遺構内から出土した遺物を中心に編集しているため、ここでは石器と鉄製品についてのみ図示し、報告したい。

第131図～第134図は石器である。第131図・第132図1～3は打製石斧である。これらの石斧は大きさの差はあるが、短冊型（第131図3～8・10・第132図1）、撥型（第131図1・2・9・第132図2・3）に分類できる。短冊型は10cm・13cm・17cmの3種類に分類できる。また、撥型は13cm・16cm・18cmを測る。

第132図4～6は磨石である。4は表裏共に深く窪んでいる。6は表裏共に細かい窪みがみられる。

第133図1は台石として使用されたのか、裏面に使用痕が確認できる。

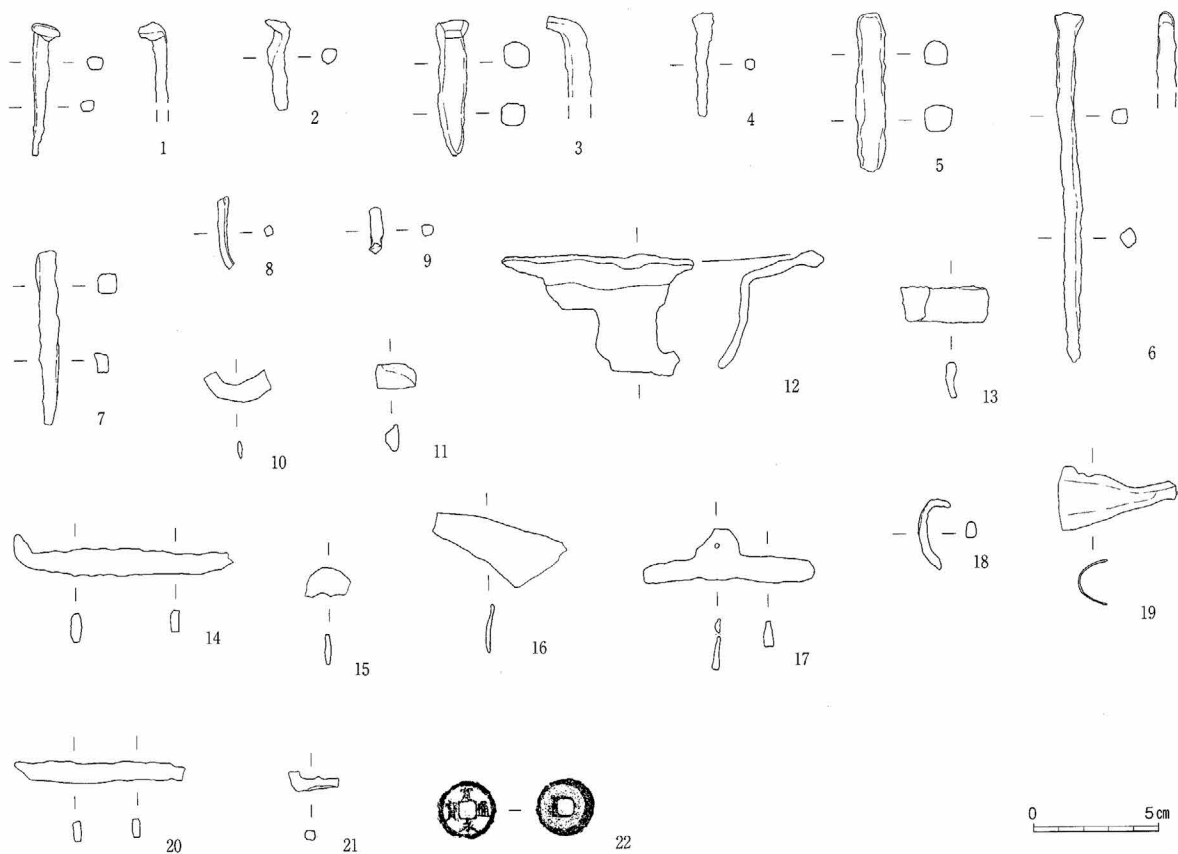
第133図2は特殊磨石である。裏面にスリの痕跡が見られる。

第133図4は環状石斧である。制作途上での廃棄なのか、中心部は窪んでいるのみで、貫通孔はない。

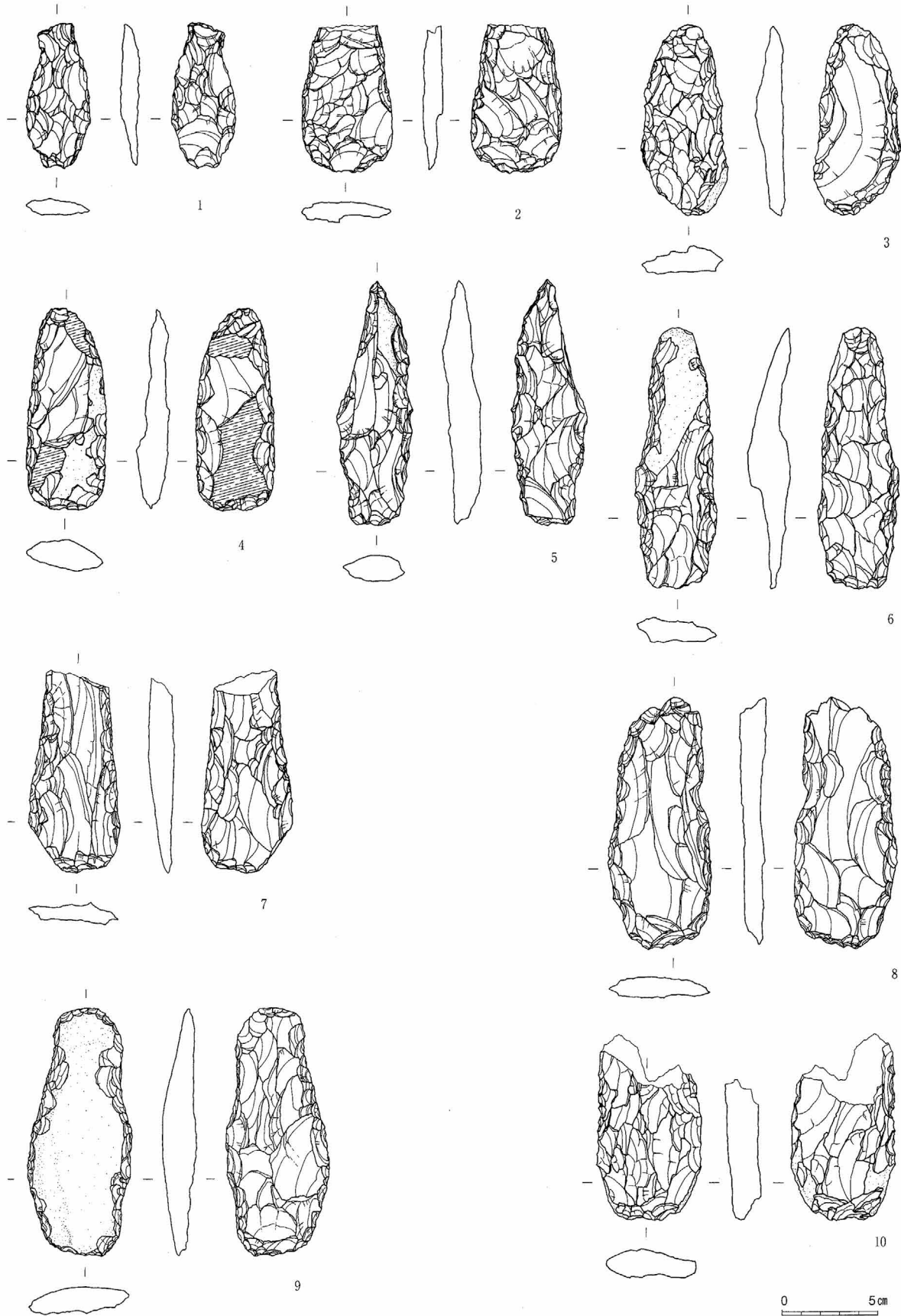
第134図は黒曜石製の石器である。1～11は石鏃で、3は凹基有茎鏃、7は平基無茎鏃、他は凹基無茎鏃である。なお、11は未製品、9は石匙の可能性もある。12・13は石錐である。12はつまみ部がなく、13は刃部が欠損している。

14は石匙である。つまみ部が欠損している。

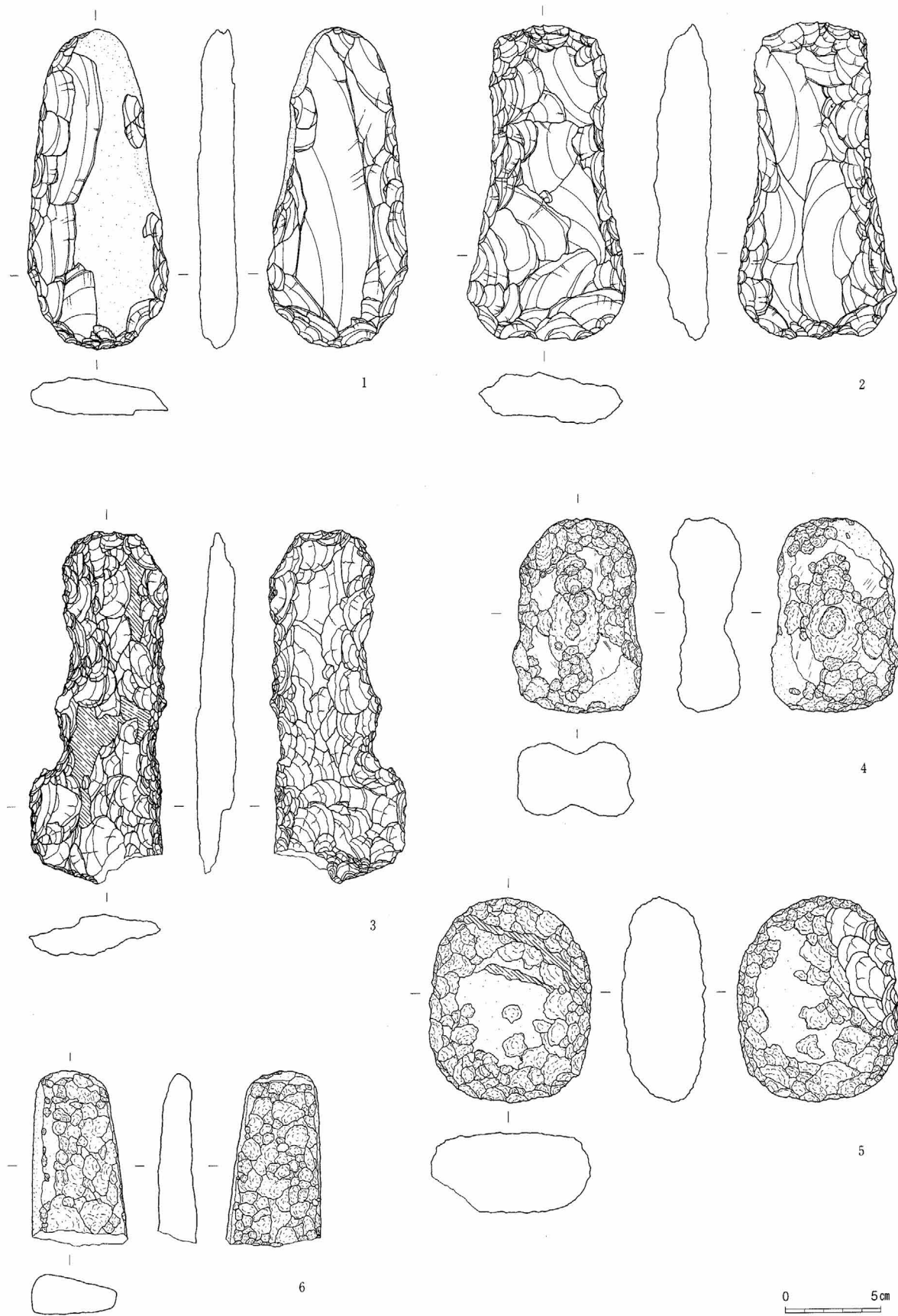
第130図は鉄製品である。1～9は鉄釘である。また、12は鉄鍋の破片の可能性もある。その他19は煙管の吸い口であるが、ほかは用途が不明である。22は寛永通宝である。



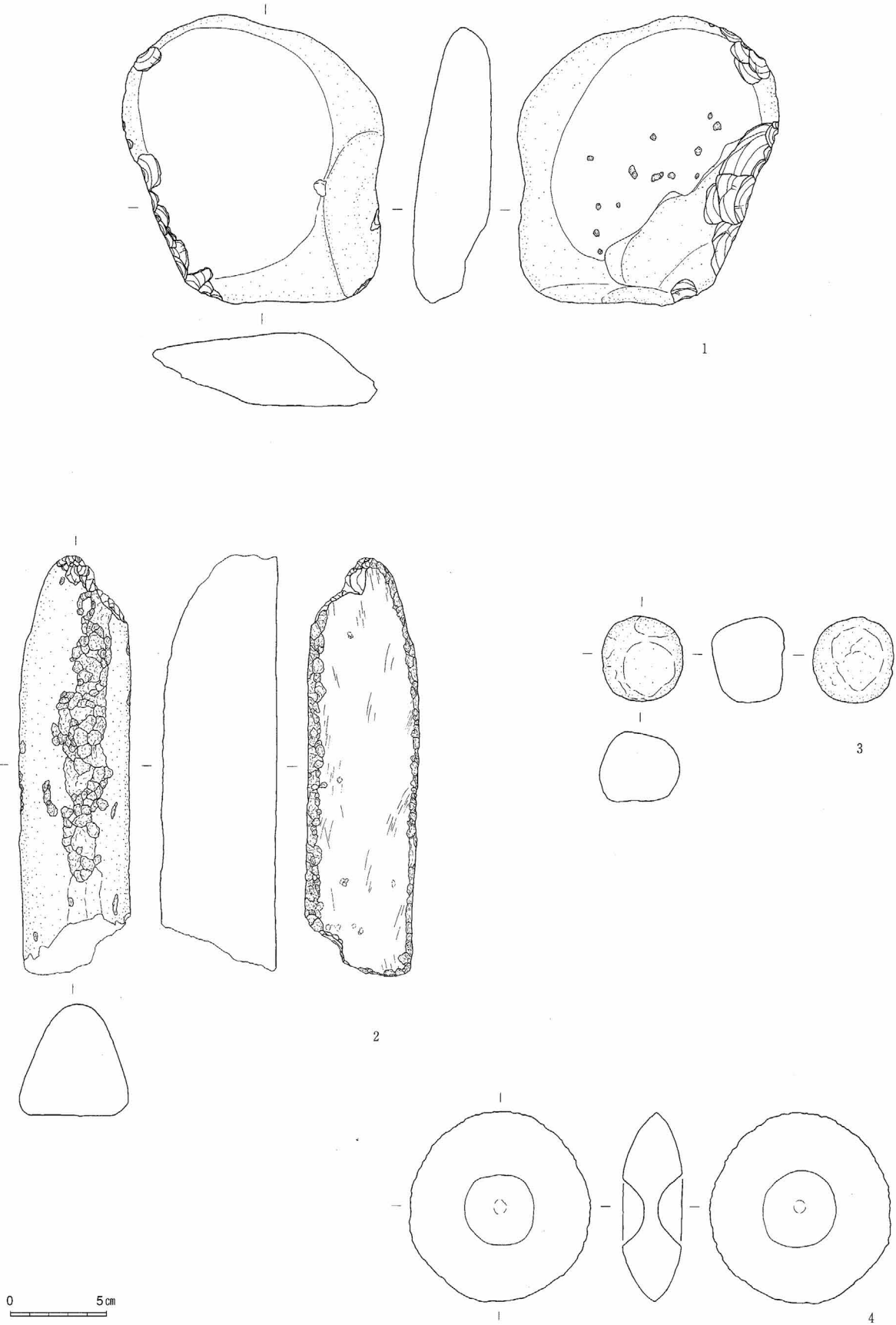
第130図 遺構外出土遺物 (1)



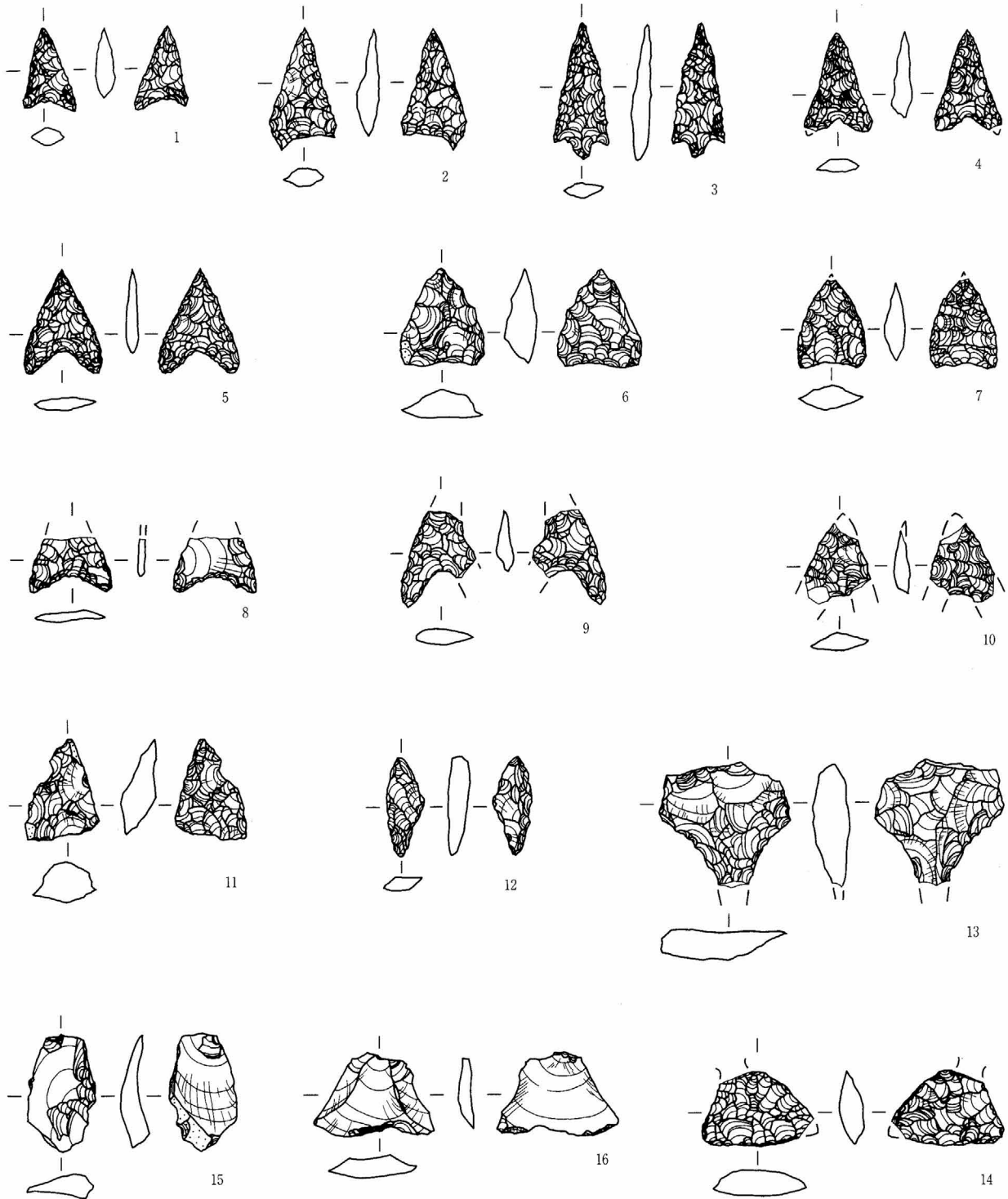
第131図 遺構外出土遺物 (2)



第132図 遺構外出土遺物 (3)



第133図 遺構外出土遺物 (4)



第134圖 遺構外出土遺物 (5)

第V章 ま と め

今回の調査で出土した各時代の遺構は、3回の調査によってこの遺跡全面に、とりわけ遺跡東半部に集中していることが判明した。しかし本書が第1次調査の報告書であるため、今回はこの調査地点についてのまとめとし、遺跡全体の位置づけについてはすべての整理が終了した時点で検討していきたいと考える。

まず、縄文時代であるが、第8号土坑を中心にして早期の条痕文土器が出土している。この土坑は、断面椀形を呈し、底部に平坦面がない。出土した破片は条痕文の他に、竹管状工具を使用して施文した一群がある。早期の遺構として明確に位置づけられるのは今回の調査ではこの第8号土坑のみであり、その他同時期と考えられる遺構は確認できない。しかし、調査区南部を中心として小竪穴が出土しており、これらの遺構との関連について検討が必要であろう。

次に、前期であるが、土坑11基に、前期の土器が出土している。これらのうちでも、第67号土坑から出土した土器は今回の調査で唯一器形が判明する土器が出土している。前章ですでに述べたとおり、直径1.2mの円形を呈する土坑に長さ約40cmの礫が覆土中層にあり、その上部に、押しつぶされる形で3個体出土している。これらの土器はいずれも底部が欠損し、1個体は口縁部も失われていた。中でも、第109図3・5は器形と地文は北陸地方に共通するものがあるが、横位の押圧隆帯等は在地的な様相を示している。また4のようなタイプの土器は岡谷市扇平遺跡等より出土しており、在地的な土器である。このように、各地域の要素をみてとる事ができ、この時期を考える上で良好な資料を提供できた。なお、第109図2及び第111図1は同一個体の可能性が高い。また、第56号土坑からも破片であるが、同じタイプの土器が出土している。総じて十三菩提（日向Ⅱ式）期と考えられる。⁽¹⁾

この他、第11号住居址からは、住居址中央部で出土している炉として使用したかと思われる土器片をはじめ、床面付近から出土しているものはすべていわゆる日向Ⅱ式の土器である。次に第16号住居址であるが、いわゆる籠畑Ⅰ式と考えられる。しかし、第111図3は破片での出土ではあるが、九兵衛式の新しい時期と考えられるため、今後の検討課題である。第18号住居址は耕作による削平が著しく、壁をほとんど残していないため遺物の出土も少ないがいわゆる唐草文系Ⅰ式の土器が出土している。

このほか縄文時代と推定できる落とし穴状の土坑も40基出土していることを考え合わせると、この遺跡では縄文時代早期末葉から中期後葉に至る頃まで1時期に数基程度の住居が存在する小規模な集落が形成され、断続的に生活域として利用されていたことがわかる。また、第2次調査では前期末葉の一括土器を出土した住居址が発掘されているので、その遺物整理後にさらに検討していく必要がある。

次に弥生時代であるが後期の住居址が1基出土している。第2次・第3次調査でもこの時期の住居址が出土しており、断層崖下の湿地を利用しての水稻耕作が行われていたことが想像できるが、第2次調査時に住居址がまとまって検出されているので、詳細は次回に考えてみたい。

平安時代には、今回の調査だけでも14基の住居址と、6基の掘立柱建物址が出土している。住居址は7期・8期を中心として出土しており、11期と15期がそれぞれ1基出土している。

住居址では、第17号住居址は火災住居であり、多くの炭化材と、床面には12世紀前半の土師器を中心とした遺物が出土している。また、第7期（9世紀後半）の第9号住居址と、第10号住居址からはそれぞれ439gと1,211gの鉄滓が出土しており、なかでも第10号住居址からは20個の菰手石、3個の土錘、鑿と考えられる鉄製品が1本出土している。また、この住居址の南部には掘立柱建物址が列をなして検出されており、住居址の

規模的にも他の住居址よりも大きいことから、工房的な施設と考えられる。また、第9号住居址では墨書、刻書土器の出土が多く、他の住居址とは異なった遺物の構成を示している。

掘立柱建物址は2間×3間と2間×2間の規模があり、長軸は東西方向と南北方向がある。これらはほぼ90度のずれであることから軸方向は統一されているものと考えられる。また、第3号建物址の北東部のピット群から約1,400gにのぼる鉄滓が一括廃棄されたかのように出土している。しかし出土位置を明確に記録しなかったために、ピットの特性が困難となってしまっている。

また、今回の調査では、性格不明な遺構（不明遺構で掲載）が出土しているが、この遺構は赤沼氏の指摘によって鉄生産関連施設であることが判明している。第IV章ですでに述べているように、整地された遺構内からは大きな礫（直径約40cm～80cm）がならんで出土し、この遺構に伴うと考えられる鉄製品を出土する土坑も2基検出されている。これらの遺構は、鉄生産時に使用された何らかの施設の可能性が高い。さらに、遺構床面付近より出土している鉄製品や小鉄塊、鉄滓、韃の羽口、および緑青が析出したるつぼの出土を考えると、鉄に加え、銅に関する生産活動も実施されていたものと推定された。

なお、出土している鉄製品は主として釘状鉄製品であるが、いずれの鉄製品も完形品ではなく、欠損または屈曲しており、一度使用されたものと考えられることができる。このことは、使用に耐えられなくなった製品の再利用も同時に行っていた可能性があることを示している。

この遺構からはその他にも白磁碗や、土師器坏の小片も出土している。土師器については小片のために年代を明確にしえない。しかし、白磁碗については長野自動車道の発掘調査成果として15期（12世紀初頭）に位置づけられていることから、鉄に関する生産活動が行われていたのは当該時期であったと考えられる。

また、第4号溝址をはさんで南側には、遺構として明確に検出できず、遺物についても採取できなかったものの、不明遺構と同様なプランが存在した可能性もあり、表土除去作業中に失われた遺構も存在する可能性が高い。さらに、西部には焼土が検出され、周辺からは柱穴も出土しており、明確に検出できなかったものの、何らかの施設を伴う鉄生産関連遺構の可能性も考えられる。

次に調査区全体をみると、掘立柱建物址や竪穴住居址および溝址の軸方向はほぼ揃っており、規格性をみてとることができる。また、試掘調査時には堀とも考えられる黒色土の帯が、調査対象外の地区から検出されており、明確にはできないものの、ほぼ同じ軸方向と考えられる。

この遺跡の住居址が松本平の編年でいう7期から15期まで断続的に営まれていたことを考えると、この集落がいつから鉄生産関連活動に関わりはじめたのか、また集落全体の構造がどのような配置になっていたのか等の問題が残る。また、第3次調査では、龍泉窯の鎬連弁を持つ青磁碗の破片や、中世と考えられる竪穴建物址も出土していることから、中世の初めまではこの遺跡が存続していたことがうかがえる。

また、金属考古学的調査によって神谷所遺跡では銑鉄を脱炭して製造された鋼を使用して農具を製作していることが想定された。第9・10号住居址からは多くの鉄滓も出土しているため、ある程度の規模をもった精錬遺構が存在していた可能性もある。製品がこの遺跡内のみの流通にとどまるとは考えられないことから、周辺の遺跡にもここで製作された製品が流通していたことも想定していかなくてはならない。

今後、第2次・第3次の調査報告書をまとめるにあたり、これらのことを加味しながら遺跡の性格を明確にしていきたい。

最後に、今回の調査での出土ではないが、隣接遺跡である新町丸山遺跡出土と伝えられる、鑄鉄製の羽釜について触れたい。この羽釜は、昭和33年に神谷所遺跡の東部に存在する通称稗塚と呼ばれる小丘の西側麓の畑地で耕作中に発見されたもので、当時の表土下約30cmから出土している。中世に一般的に見られる鉄釜と

は形状が異なり、肩部から口縁部にかけて若干内径しながらも直線的に立ち上がり、鋳部以下の胴部が長く、底部に棒状の突起（湯口～湯道部分）が約6 cm程残されている。

稗塚は、新町丸山遺跡として遺跡に登録されているが、実際には断層によって形成されたいわゆるケルン・バットと考えらる。また、出土した地点についても試掘調査の際、遺構が確認されなかったため、遺跡の可能性は低い。そのため、出土した羽釜は、西部の断層崖上に立地する神谷所遺跡から、崖の崩落によって流れ込んだ可能性が高い。

この羽釜と同様な形態を示すものに、更埴市屋代の馬口遺跡、群馬県利根郡昭和村糸井太夫遺跡出土の資料がある。これらの羽釜は発掘調査によって出土しており、馬口遺跡の羽釜は10世紀後半（折戸53号窯）、糸井太夫遺跡出土の羽釜は10世紀中葉から後半に位置づけられている。また、群馬県利根郡月夜野町に所在する月夜野古窯跡群の須磨野A支群を中心として、これらの羽釜を模倣して作られたと考えられる軟質須恵器や、還元焰焼成された10世紀前半代の羽釜が出土している。（これらの土製羽釜は、10世紀代では還元焰焼成であったものが、11世紀に入ると酸化焰焼成に移行していくようである。なお、この月夜野型の羽釜は、利根郡、吾妻郡、北群馬郡子持村の北毛地域にほぼ限定できるという。）これらの資料から、辰野町で出土している鋳鉄製羽釜も、形式的にみて10世紀前半代の遺物と考えることができる。

古代の鋳鉄製の釜については出土資料が少なく、不明な点が多いようであるが、8世紀前葉～9世紀の羽釜の鑄型から推定すると、その形態は肩部が大きく内傾し、口縁部が短く直立している。また、畿内においては、中国の茶釜を模倣したと見られる緑釉陶器が出土している。この茶釜は、茶道具として中国から流入した茶法に関係する遺物であると言われている。新町丸山遺跡等より出土した羽釜とこれらの羽釜とは形態が異なっており、長野県、群馬県に特有の器形である。そのため、この地域の地方的な遺物と捉え、地方の鑄物師の手によるものとの考え方も示されている。

また更埴市付近では、馬口遺跡出土のような形状をした釜が過去に数多く出土しているという地元の証言や、月夜野型の羽釜については、鋳鉄羽釜を補完する目的で焼成されていると考えられること、また、月夜野型羽釜に限らず、底部に突起を伴わないものの同様な器形を呈する土製の羽釜が長野県内でも一般的に出土していることから、この器形の鋳鉄製の羽釜が一般的に流通していたことが考えられる。

長野県内では、土製羽釜は10世紀後半期には出現しており、12世紀前半に消滅している。その後、内耳鍋が出現する14世紀前半期まで、明確な煮沸具は確認されていない。鋳鉄製の羽釜は、この土製羽釜の出現期のものであり、以後の存在は確認できない。畿内においては鋳鉄製羽釜の出土は確認されていないようなので、新町丸山遺跡等出土の鋳鉄製羽釜タイプが分布する範囲については明確にすることができないともいえる。羽釜は畿内において12世紀から伝世品が存在し、中世までその存在が確認されている。しかし、これらは寺院という空間において使用されたものであり、羽釜の使用に関しては当時の日常生活からすると、かなり異質だったのではないかという指摘もあり、発掘調査によって出土した15世紀中葉ころの羽釜の形態が伝世品に近似していることを考慮に入れても、これらの羽釜が、一般的に使用されていた羽釜の形体なのか疑問をはさむ余地もあるように感じる。

今回馬口遺跡・丸山遺跡の羽釜について金属考古学的調査（自然科学分析）によって、その成分が西日本的であることが判明した。これは赤沼氏の指摘にあるように、西日本の鑄物師がこの地域に進出してきている可能性を示すものではないだろうか。中世後半に入ると羽釜は畿内を中心に出土する遺物で、東日本ではいわゆる鍋が主流となっていく。湯口の形状が丸形の製品は西日本に多い傾向も指摘されており、これらの状況からしても、この羽釜が、西日本の系譜を引く製品であることを物語っていると考えられる。

また、梵鐘を鑄造した集団について見ると、信濃では大和下田の鑄物師の手によるものが多く、さらに、下田の鑄物師は同時に寺や農民に向けての羽釜を製作していたということも注目に値する。

さらに、15世紀までの内耳鉄鍋の成分分析の結果においても、現在のところ新町丸山遺跡出土の羽釜と似た成分のものはみつかっておらず、中世末頃になってようやく同じ組成の鍋の出現が東北～北海道地域で確かめられている。このことは、共伴遺物の変化もともなっていることから、地元とは異なる系譜の鑄物師集団（関西系か？）の流入も考えられるという。

また、「在地の製鉄・精錬技術あるいは遺跡の集中するところに意識的に畿内の鑄物師の進出、あるいは畿内の鑄物師の系譜を引く鑄物師の進出がみられた」という見解や、工房の場と、材料を与えられて、各地を「遍歴」していたとの考え、梵鐘の名文に他国の有力鑄物師と地方の鑄物師と連名にした名文を持つものもあるという事も示唆に富んでいる。これらのことをふまえても、製品に使用した原料鉄の分析からは、畿内系鑄物師の影響も考えなくてはならないだろう。

ではなぜ畿内で出土していない器形の羽釜がこの地方で生産されていたのであろうか。また、試掘調査時に出土している鉄鍋片の組成が、羽釜のそれとは異なっていることを考えると、この鉄鍋を鑄造した鑄物師は羽釜の製造者とは異なる可能性もある。鉄鍋については東北地方の鍋が流通している可能性も考えられる。なお、原料鉄鉄に関しては、使用不能になった鑄造鉄器の破片も鑄造の原料になり得るとのことであり、在地の鑄物師の原料についても多方面からのアプローチが必要であろう。また、貸鍋・貸釜制度の観点もまじえながら検討していかなくてはならない。

末筆になりましたが、赤沼英男、伊藤修、小平和夫、長崎元廣の各氏には多くのご教示を賜りました。ここに深く感謝するとともに、力不足によってそれを十分に生かしきれなかった事をお詫びします。

註

- (1) 縄文土器の時期等については長崎元廣氏のご教示による。
- (2) 平安時代の遺物の時期については小平和夫氏のご教示による。
- (3) 赤沼英男氏のご教示による。

参 考 文 献

- 岡田 正彦 1971 「更埴市屋代馬口遺跡と鉄製釜」『長野県考古学会誌』第10号
笹本 正治 1980 「甲斐の鑄物師」『信濃』第32巻6号
坪井 良平 1984 「鎌倉時代の梵鐘鑄物師」『歴史考古学の研究』
月夜野町教育委員会 1985 『月夜野古窯址群』
沼田市教育委員会 1985 『石墨遺跡』
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書5 松本市内その1 総論編』
市村 高男 1991 「中世鑄物師研究の視点と方法」『考古学の中世史研究』
伊藤 修 1992 「中世信濃にみられる大和下田鑄物師の研究」『長野県考古学会誌』64号
五十川伸也 1992 「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告 第46集』
腰田賢一郎 1996 「北日本における鉄鍋」『季刊 考古学』第57号
昭和村教育委員会 1996 『糸井太夫遺跡』
飯村 均 1997 「中世の製鉄・鑄造」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『群馬県遺跡大事典』

出土遺物の形状と組成からみた神谷所遺跡における鉄および銅製品の製作活動について

岩手県立博物館 赤 沼 英 男

1. はじめに

長野県上伊那郡辰野町新町に立地する神谷所遺跡は、工業団地造成に伴い平成2年から6年の5ヶ年にわたり発掘調査された遺跡である。平成6年度の発掘調査では、11世紀前半および12世紀後半に比定される住居址、平安時代後期と推定される性格不明の遺構、時代不明の土坑や焼失住居址が確認された。これらの住居址等からは、農具や工具はもとより、鉄塊や鉄滓、緑青が付着したるつぼが見出されている。遺跡内で鉄や銅に関する生産活動が実施されていたことは確実に、日常生活に必要な鉄器や銅製品が作り出されていたものと推定されたが、出土した資料の外観形状と検出遺構の状況だけで、生産活動内容について言及することは困難とされた¹⁾。

遺跡内での生産活動と金属器の使用状況を推定する有効な手段に、出土遺物の金属考古学的調査がある。上記住居址、性格不明遺構、および土坑跡から出土した遺物の金属考古学的調査を行った結果、遺跡内では銑鉄を脱炭して鋼を製造する操作（精錬）が行われ、製造された鋼を使って農具をはじめとする鋼製鉄器が製作されていたものと推定された。精錬の出発物質となった原料銑鉄の獲得方法については、遺跡外からの供給、使用不能となった鑄造鉄器の再利用の二つを考えることができた。鉄に加え、銅の溶融あるいは銅合金の溶製が行われていたことも判明した。原料銑鉄や銅地金を獲得して、あるいは使用不能となった鉄器や銅製品を再利用して、日常生活に必要な金属器が製作されたと推定される。以下に、神谷所遺跡出土遺物の金属考古学的調査結果について報告する。

2. 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は、神谷所遺跡出土鉄器7点、鉄塊2点、鉄滓8点、るつぼ1点、辰野町新町丸山遺跡出土羽釜、および長野県更埴市馬口遺跡出土羽釜の合計20資料である。新町丸山遺跡は神谷所遺跡に近接して立地する。調査した羽釜の共伴遺物による年代比定は困難とされたが、10世紀後半代の資料といわれている長野県更埴市馬口遺跡出土羽釜との比較によって、それよりも前代に製作された資料と推定されている²⁾³⁾。調査資料の概要は表1に示すとおりである。

表1 分析資料の概要

No.	遺物番号	資料名	出土状況		推定時期	台帳番号
			遺構名	出土層位		
1	29	鉄滓	第5号住居址	床面	11世紀前半	1310
2	30	鉄滓				1311
3	34	鉄滓				第74号住居址
4	36-①	鎌	第15号堅穴建物址	覆土	12世紀後半	4478
5	36-③	棒状鉄器				4478
6	36-②	鉄塊				4478
7	21-①	釘	不明遺構	床面	平安時代後期 (実年代不明)	7670
8	21-②	釘				7670
9	39	釘				-
10	40	釘				-
11	5	鉄塊				7517
12	9	鉄滓				7547
13	21-③	鉄滓				7670
14	6	鉄滓				7521
15	10	鉄滓				7522
16	23	鉄滓				第9号土坑
17	395	鉄鋼片	19-I地点火災住居址	覆土	不明	395
18	7527	るつぼ	不明遺構	覆土	平安時代後期 (実年代不明)	7527
19	25	羽釜	新町丸山遺跡	-	10世紀前半	-
20	-	羽釜	馬口遺跡	-	10世紀後半	-

注1) 遺物番号、資料名、出土状況、推定時期、台帳番号は辰野町教育委員会 福島 永氏による。

3. 調査試料の摘出

鉄器、鉄塊、およびるつぼについては、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使って、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、0.05～0.1 gの試料を摘出した。鉄滓についてはハンドドリルで深さ約2 cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1 gの試料を切り取った。各資料から摘出した試料をさらに2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。調査資料の中で、No. 9・No.10、No.17、およびNo.19については、図3～6に示す2ヶ所から、他については図1・2、図7～12に示す箇所から試料を摘出した。

4. 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鋼製鉄器・鋼塊中の非金属介在物、銑鉄中の元素濃度分布、および鉄滓中の鉱物相をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。研磨面の5割を超える領域がメタルで構成されているNo.4～6、No.7、No.9Sa1、No.10Sa1、No.11から摘出した試料については、ナイトール（硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5ml溶液）で腐食した後、組織観察した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、鏽をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾燥し、ほぼメタルからなる試料、またはメタルと鏽が混在した試料については直接、鏽、鉄滓についてはメノー乳鉢で粉碎した後テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、マンガン（Mn）、リン（P）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、チタン（Ti）、けい素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）の12元素を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-OES法）で分析した。No.6、No.11には鏽とメタルが混在していたため、それぞれを分別し、化学成分分析に供した。No.4、No.11金属部、No.17Sa1・2、No.19Sa1の5試料については、燃焼-赤外線吸収法によって鉄中の炭素（C）、硫黄（S）を、No.1、No.2、No.3、No.11鏽部、No.12、No.13、No.14、No.15、No.16、およびNo.18の9試料については、鉄鉱石-酸可溶性鉄（II）法によってFeOを分析した。

5. 調査結果

5-1 鉄器・鉄塊の化学組成

表2～4に鉄器および鉄塊から摘出した試料の化学成分分析結果を示す。No.4、No.5、No.7、No.9Sa1、No.10Sa1、No.11金属部、No.17Sa1・2、No.19Sa1から摘出した試料のT.Feは80.58～86.71%で、メタルと鏽が混在した試料である。他の8試料は55.83～79.47%で、鏽化が進んでいる⁴⁾。

No.4からは0.18%、No.11Sa1金属部からは0.87%、No.17Sa1・2、No.19Sa1からは4.34～4.81%のCが分析されている。これらの値は5-2の組織観察結果とよく整合する。

No.4をはじめとする17試料すべてから0.01%を上回るNi、Coが、No.11鏽部、No.17Sa1・2、およびNo.20を除く13試料からは、0.01%を上回るCuが検出されている。特に、No.6からは0.106%のCoが、No.19Sa1・2からは

表2 鋼製鉄器・鉄塊の分析結果

No.	化学成分 (mass%)															マイクロ組織	非金属介在物組成	Cu・Ni・Co三成分比			
	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	FeO			Co*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni*(Ni/Co)	Cu*(Cu/Co)
4	80.58	0.18	0.017	0.014	0.002	0.029	0.023	0.040	0.032	0.141	0.015	0.016	0.007	0.007	-	Pa(0.2~0.3)	XT, Fa, M	1.74	0.61	0.58	0.35
5	86.71	-	-	0.011	0.009	0.029	0.033	0.048	0.068	0.559	0.040	0.180	0.039	0.006	-	Pa(0.1~0.2)	XT, Fa, M	1.45	0.33	0.69	0.23
6 金属部	79.47	-	-	0.043	0.003	0.010	0.070	0.106	0.010	0.519	0.037	0.118	0.022	<0.001	-	Pa(約0.8)	Fa, M	1.51	0.61	0.66	0.41
鍍部	55.83	-	-	0.016	0.031	0.040	0.031	0.035	0.063	2.62	0.177	0.880	0.152	0.003	-	-	-	1.13	0.52	0.89	0.46
7	86.62	-	-	0.017	0.001	0.027	0.041	0.051	0.001	0.026	0.074	0.017	0.003	<0.001	-	Pa(0.1~0.2) Cm(0.2~0.3)	Wü, M	1.24	0.41	0.80	0.33
8	61.94	-	-	0.024	0.001	0.039	0.039	0.039	0.020	0.437	0.003	0.164	0.010	<0.001	-	no	no	1.00	0.62	1.00	0.62
9 Sa ₁	84.91	-	-	0.014	0.001	0.031	0.040	0.048	0.021	0.086	0.015	0.014	0.009	0.001	-	Pa(<0.1)	Wü, XT, Fa, M	1.20	0.35	0.83	0.29
Sa ₂	58.14	-	-	0.016	0.002	0.021	0.023	0.020	0.012	0.299	0.016	0.095	0.009	0.002	-	no	no	0.87	0.70	1.15	0.80
10 Sa ₁	84.32	-	-	0.015	0.001	0.071	0.035	0.055	<0.001	0.092	0.005	0.024	0.005	<0.001	-	Pa(<0.1)	Wü, Ha, Fa, M	1.57	0.43	0.64	0.27
Sa ₂	55.89	-	-	0.023	0.004	0.059	0.029	0.041	0.009	0.787	0.043	0.293	0.018	0.050	-	Cm(0.2~0.3)	no	1.41	0.79	0.71	0.56
11 金属部	85.73	0.87	0.051	0.012	<0.001	0.007	0.033	0.064	<0.001	0.190	0.030	0.011	0.002	<0.001	-	Pa(0.8<)	Wü, Fa, M	1.94	0.36	0.52	0.19
鍍部	58.05	-	-	0.007	0.015	0.041	0.019	0.024	0.089	1.80	0.138	0.742	0.093	0.002	26.3	-	-	1.26	0.37	0.79	0.29

注1) No. は表1に対応。

注2) C, Sは燃焼-赤外線吸収法、FeOは鉄鉱石-酸化溶性鉄(II)法、他はICP-OES法による。

注3) Paはパーライト、Cmはセメントタイトまたはその欠落孔、括弧内の数字はマイクロ組織から推定される炭素量。

注4) Wüはウスタイト、XTは主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、FaはFe-Mg-Si-O系化合物またはFe-Si-O系化合物、Mはマトリックス、noは見いだされず。

それぞれ0.171%、0.145%のCuが、No.17Sa₁₋₂、No.19Sa₁₋₂、No.20からは0.14%を上回るPが分析されている。

鍍化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化を考慮する必要があるが⁵⁾、遺物を取り囲む土砂に100ppm(0.01%)以上のCo、Ni、Cuが含有されることはまずない⁶⁾。金属考古学的調査を行った鉄器に、銅またはその合金をはじめとする異種金属の付着がみられなかったこと¹⁾を考慮すると、0.01%以上のCo、Ni、Cuが検出された試料については、検出された三成分のほとんどが鍍化前の地金に含まれていたと推定される。

一方、Pについては埋蔵環境下から富化されることがある⁷⁾。鍍化した試料におけるPの分析値を評価するにあたっては、遺物を取り囲んでいた土壌中のP含有量、およびほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる他の鉄器のP含有量を調べ、富化の可能性を検討する必要がある。No.17Sa₁₋₂、No.19Sa₁₋₂はメタルと鍍が混在した試料のため、分析されたPのほとんどは製作に使用された地金に含まれていたと推定される。No.19Sa₂から検出されたPについてはT.Fe値のみに着目すると埋蔵環境下からの富化の可能性はある。しかし、No.19Sa₁のP含有量をふまえると、検出されたPの相当量は製作に使用された地金に含有されていた可能性が高いと判断される。一方、No.20については比較試料がないため、製作時の地金に0.2%程度のPが含有されていたとみなすことはできない。ここでは相当量のPが含有されていた可能性があることを指摘するととどめる。なお、No.11鍍部からは26.3%のFeOが検出されているが、これはNo.11に酸化鉄に富んだ鉄滓が固着していたことに起因すると考えられる。

5-2 鉄器・鉄塊の組織観察結果

No.4(図1)はほぼメタルによって構成されていたので、酸(ナイタール:2.5mlの硝酸と97.5mlのエチルアルコール溶液)を使って腐食した後、組織観察した。マクロエッチング組織はほぼ一様に腐食されている。マクロエッチング組織内部はフェライト(α Fe)とパーライト[α Feとセメントタイト(Fe_3C)の共析組織]によって構成され、パーライトの占める面積割合から、炭素量0.2~0.3%の鋼とみることができる⁸⁾。

No.4と同様にしてNo.5およびNo.7には、炭素量0.1~0.2%の鋼が配されていることがわかった(図1・2)。No.9 Sa₁およびNo.10 Sa₁はそのほとんどがフェライトからなる(図3b₁・b₂、図4)。炭素量0.1%未満の鋼である。No.6およびNo.11から抽出した試料に残存するメタルは一様に黒く腐食されている。No.6マクロ組織の

枠内部はセメンタイト、No.11マクロ組織の枠内部は初析セメンタイト (PCm) とセメンタイトからなる⁸⁾ (図1・図4)。前者は共析鋼 (炭素量0.8%の鋼) に近い組成の鋼、後者は過共析鋼 (炭素量0.8%を上回る鋼) で、No.4・No.11の組織解析結果は5-1の化学成分分析結果とよく整合する。

No.7およびNo.10Sa₂の錆部分には、金属光沢を呈する線状の結晶 (Cm) が層状に並び島状領域を形成する組織が観察される。(図2c₃・図4) これまでに行われた組織観察結果に基づけば、パーライト中のフェライトが錆化し、セメンタイトが抜け落ちることによって生成した組織と推定される⁹⁾。この組織をパーライトとすると、No.7およびNo.10Sa₂の錆化前の地金はともに0.2~0.3%の鋼とみることができる。No.8およびNo.9 Sa₂には、製作時に使用された地金の組織を推定できる領域が見出されなかった。上記組織観察結果を整理すると、表2右欄のとおりとなる。

No.4から抽出した試料にはやや暗灰色をした化合物 XT、暗灰色の柱状化合物 Fa が観察され、それらは微細な化合物を内包する黒色領域 (M) によって取り囲まれている。EPMA によって、化合物 XT は Fe-Ti-Al-Mg-V-O 系化合物、化合物 Fa は FeO-SiO₂系化合物 (鉄かんらん石: 2FeO・SiO₂と推定される) であることがわかった。No.5も No.4 とほぼ同じ鉱物組成をとる (図1)。

No.9 Sa₁には灰色粒状のウスタイト (Wü: 化学理論組成 FeO)、Fe-Ti-Al-Mg-V-O 系化合物 (XT)、FeO-SiO₂系化合物 [Fa: 鉄かんらん石 (2FeO・SiO₂) と推定される]、および微細な化合物を内包する黒色領域 (M) によって、No.10Sa₁にはウスタイト (Wü)、Fe-Al-O 系化合物 (Ha)、Fe-Mg-Si-O 系化合物 [Fa: マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 {2 (Fe, Mg) O・SiO₂} と推定される]、および微細な化合物を内包する黒色領域 (M) によって構成される非金属介在物が見出された (図3c₁₋₂、図4)。

No.6にはFeO-SiO₂系化合物 (Fa) と微細な化合物を内包する黒色領域 (M)、No.7にはウスタイト (Wü) と微細な化合物を内包する黒色領域 (M)、No.11金属部にはウスタイト (Wü)、Fe-Mg-Si-O 系化合物 [Fa: マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 {2 (Fe, Mg) O・SiO₂} と推定される]、および微細な化合物を内包する黒色領域 (M) によって構成される非金属介在物が観察された (図1、図2d₁₋₃、図4)。なお、No.8、No.9 Sa₂、およびNo.10Sa₂には非金属介在物を見出すことができなかった。上記観察結果は表2の最右欄にまとめられる。

No.17Sa₁、No.19Sa₁領域 R₂内部、およびNo.19Sa₂領域 R₁₋₂内部には片状黒鉛 (G) が析出した組織 (図5・6)、No.19Sa₁領域 R₁内部にはレーデブライต์組織 (図6) およびレーデブライต์に片状黒鉛が析出した組織 (写真1・2) がみられ、No.17Sa₂およびNo.20はレーデブライต์組織からなる (写真1、図5・6)。No.17、No.19、およびNo.20は銑鉄を素材とする鑄造鉄器であることが判明した。

5-3 鉄滓・るつぼの化学組成

No.1~3およびNo.12~16のT.Feは34.99~65.73%、FeOは31.8~69.0%で、他に0.93~13.3%のSi、0.379~4.33%のAlを含有する。酸化鉄に富む鉄滓である。後述する組織観察結果を考え合わせると、操作の過程で局所的にはあるにせよ、溶融もしくは部分溶融した鉄滓と鉄とが接触した状態が存在したものと推定される。No.16からは2.24%のTiが検出されている。その大部分は鉄滓中に残存するFe-Ti-Al-O系化合物 (XT) に起因すると思われる (表5)。

No.18はSi、Alを主成分とする。5-4で述べるようにCu粒の残存が確認されたため、銅を溶融または銅合金を溶製する際に使用されたものと推定される (表6)。

表3 鉄鍋の分析結果

No.	化学成分 (mass%)													ミクロ組織	Cu・Ni・Co 三成分比					
	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg		V	Co*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)	
17	Sa ₁	81.89	4.34	0.017	0.003	0.008	0.143	0.029	0.012	0.001	0.186	0.027	0.002	0.001	0.011	G	0.41	0.10	2.42	0.25
	Sa ₂	83.07	4.60	0.062	0.005	0.009	0.145	0.033	0.013	<0.001	0.158	<0.001	0.002	<0.001	0.013	L	0.39	0.15	2.54	0.38

注1) No. は表1に対応。
 注2) C, Sは燃焼-赤外線吸収法、他は ICP-OES 法による。
 注3) Gは片状黒鉛、Lはレーデブライト。

表4 羽釜の分析結果

No.	化学成分 (mass%)														ミクロ組織	Cu・Ni・Co 三成分比				
	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		Co*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)	
19	Sa ₁	81.26	4.81	0.009	0.171	0.041	0.346	0.050	0.021	0.012	0.246	0.089	2.50	0.096	0.003	(L), (G, L)	0.42	3.45	2.38	8.21
	Sa ₂	60.84	-	-	0.145	0.021	0.518	0.019	0.023	0.003	0.201	0.064	0.058	0.008	0.003	G	1.20	7.64	0.83	6.37
20		73.57	-	-	0.006	0.009	0.200	0.012	0.014	0.010	0.390	0.007	0.017	<0.001	0.014	L	1.17	0.50	0.86	0.43

注1) No. は表1に対応。
 注2) C, Sは燃焼-赤外線吸収法、他は ICP-OES 法による。
 注3) Gは片状黒鉛、Lはレーデブライト。

5-4 鉄滓の組織観察結果

No.1は椀状滓で、凸部表面には青灰色を呈し、部分溶融した粘土状物質が固着している (図7 a₁)。摘出した試料にはいたるところに空隙がみられる (図7 b₁)。b₁領域 R₁内部のEPMAによる組成像 (COMP) には、灰色の粒状をしたウスタイト (Wü)、暗灰色のFe-Al-O系化合物 (Ha)、やや暗灰色のFe-Si-O系化合物 (Fa)、微細な化合物を内包する黒色領域 (M) が (図7 c₁₋₃)、領域 R₂内部にはウスタイト (Wü)、Fe-Si-O系化合物 (Fa)、および微細な化合物を内包する黒色領域 (M) が観察された (図7 c₂₋₄)。

No.2、No.3、No.12、No.13、No.14、No.15、およびNo.16も椀状滓で、No.1とほぼ同じ外観形状をとる。No.2、No.3のマクロ組織枠内部、およびNo.13のマクロ組織領域 R₂内部はウスタイト (Wü)、やや暗灰色のFe-Si-O系化合物 (Fa)、および微細な化合物を内包する黒色領域 (M) によって (図8、図10)、No.12のマクロ組織領域 R₁₋₂内部およびNo.13の領域 R₁内部は、ウスタイト (Wü) と微細な化合物を内包する黒色領域 (M) によって構成される (図9、図10)。No.14、No.15、およびNo.16のマクロ組織内部はウスタイト (Wü)、主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物 (XT)、やや暗灰色のFe-Si-O系化合物 (Fa)、および微細な化合物を内包する黒色領域 (M) からなる (図11)。上記組織観察結果は表5の最右欄にまとめられる。

5-5 るつぽから摘出した試料片の組織観察結果

No.18は直径約5cmのるつぽで、口縁部が一部欠損している (図12 a₁)。摘出した試料にはいたるところに空隙がみられ、ガラス化している (図12 b₁)。マクロ組織領域 R₁内部は銅粒がガラス化した領域によって取り囲まれた組織が観察される。マクロ組織領域 R₂内部は酸化ケイ素 (Q) とガラス化した領域からなる (図12 c₁₋₄)。

6. 考 察

6-1 鉄器・鉄塊の分類

金属考古学的調査を行った鉄器、鉄塊のうち、No.4、No.5、No.7、No.9、およびNo.10には炭素量0.3%以下の亜共析鋼が配されていた。調査対象とした鉄器の極一部が調査用試料として摘出されているため、資料全体の断面構造は不明である。古墳出土刀剣の中に人為的に炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて作刀したと推定さ

表5 鉄滓の分析結果

No.	化学成分 (mass%)													鉱物組成
	T.Fe	FeO	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
1	44.31	53.1	0.003	0.104	0.141	0.008	0.001	0.325	10.4	0.659	3.85	0.580	0.039	Wü, Ha, Fa, M
2	42.51	49.8	0.006	0.108	0.140	0.006	0.002	0.376	11.2	0.553	4.07	0.560	0.037	Wü, Fa, M
3	34.99	31.8	0.014	0.093	0.234	0.021	0.009	0.251	12.5	1.43	3.93	0.586	0.011	Wü, Fa, M
12	63.89	55.5	0.009	0.011	0.032	0.016	0.016	0.041	0.930	0.143	0.379	0.123	0.003	Wü, M
13	65.73	69.0	0.009	0.013	0.045	0.016	0.017	0.055	1.42	0.119	0.605	0.106	0.003	(Wü, Fa, M) (Wü, M)
14	35.51	32.6	0.003	0.116	0.082	0.012	0.012	0.614	13.3	0.846	4.33	1.16	0.026	Wü, XT, Fa, M
15	56.83	40.6	0.007	0.016	0.056	0.010	0.016	0.082	3.77	0.193	1.25	0.161	<0.001	Wü, XT, Fa, M
16	45.18	55.1	<0.001	0.221	0.131	0.014	0.004	2.24	8.44	1.01	3.67	1.12	0.201	Wü, XT, Fa, M

注1) No. は表1に対応。

注2) FeO は鉄鉱石-酸可溶性鉄(Ⅱ)法、他は ICP-OES 法による。

注3) Wü はウスタイト、XT は主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Ha は Fe-Al-O 系化合物、Fa は Fe-Mg-Si-O 系化合物または Fe-Si-O 系化合物、M はマトリックス。

表6 るつばの分析結果

No.	化学成分 (mass%)													鉱物組成
	T.Fe	FeO	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
18	2.46	0.50	0.010	0.048	0.052	0.002	<0.001	0.610	28.2	1.26	4.48	0.572	0.024	Q, Gl, Cu 粒

注1) No. は表1に対応。

注2) FeO は鉄鉱石-酸可溶性鉄(Ⅱ)法、他は ICP-OES 法による。

注3) Q は酸化ケイ素、Gl はガラス化した領域。

れる資料がみられること¹⁰⁾、奈良時代の直刀の中にも炭素量の高い鋼を心金としその両側を炭素量の低い鋼で挟んだ断面構造を有するものが確認されていること¹¹⁾をふまえると、神谷所遺跡出土鉄器の中にも炭素量の異なる鋼が配されていたものがあつた可能性がある。No.4をはじめとする5資料がすべて炭素量0.3%以下の鋼で製作されていたと断定することはできない。ここでは0.3%以下の鋼が使用されていたことを指摘するにとどめる。

No.6、No.11小鉄塊はそれぞれ共析鋼に近い組成の鋼、過共析鋼である。No.11に鉄滓が固着していた可能性が高いことをふまえると、これらの小鉄塊は使用不能と判断され廃棄された資料とみることができると同時に、遺跡内で亜共析鋼に加え、共析鋼またはそれを上回る炭素量の鋼が製造されていた可能性があることをも示している。人為的に炭素量の異なる鋼が造り分けられていたことを考慮に入れ、古代および中世の鋼製造方法の解明を図る必要がある。

No.17、No.19、およびNo.20は銑鉄を素材とする鑄造鉄器である。片状黒鉛が析出するNo.17およびNo.19はNo.20に比べ、鑄型に溶鉄が注ぎ込まれた後ゆっくりと冷えて固まった資料、レーデブライト組織からなるNo.20は、No.17およびNo.19に比べ急冷された資料⁸⁾と推定される。

後述するように、古代・中世には複数の鋼製造法があつた可能性がある。いずれの方法がとられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。同一の製鉄原料が用いられたとしても、製造方法や製造条件に応じ、製造される鋼の組成にはばらつきが生じるため、表2の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。

表2の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタル中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

図13a・bは鋼製鉄器から抽出された12試料、図14a・bは鑄造鉄器から抽出された5試料の (mass% Co) / (mass

表7 古代・中世関東地方出土鋼製鉄器の分析結果

No.	資料名	出土地	推定時期	化学組成 (mass%)							非金属 介在物組成	Cu・Ni・Co 三成分比				
				T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti		Si	Co*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni*(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)
21	刀子	群馬県前橋市荒砥上ノ坊遺跡	9世紀前半	61.40	0.063	0.003	0.105	0.025	0.046	0.034	0.790	no	1.84	2.52	0.54	1.37
22	紡錘車	東京都板橋区志村遺跡 第6地点	9世紀後半	67.00	0.014	0.003	0.077	0.028	0.052	0.016	1.27	Wü,XT	1.86	0.50	0.54	0.27
23	鑿先			74.80	0.032	0.001	0.058	0.035	0.074	0.051	0.602	XT,M	2.11	0.91	0.47	0.43
24	刀子	群馬県新田郡新田町中江田八 ツ繩遺跡	10世紀後半	60.40	0.019	0.006	0.096	0.017	0.045	0.023	0.482	no	2.65	1.12	0.38	0.42
25	刀子			59.50	0.047	0.007	0.184	0.012	0.018	0.142	1.21	XT	1.50	3.92	0.67	2.61
26	刀子			58.70	0.032	0.006	0.183	0.012	0.022	0.104	1.01	XT	1.83	2.67	0.55	1.45
27	刀子			60.60	0.033	0.001	0.075	0.023	0.037	0.019	0.775	XT	1.61	1.43	0.62	0.89
28	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₁	長野県上伊那郡辰野町堀の内 遺跡	15世紀後半	99.06	0.021	tr	0.143	0.015	0.039	0.001	0.004	Wü,Fa,M	2.60	1.40	0.38	0.54
	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₂			99.14	0.015	tr	0.064	0.016	0.044	tr	0.042	Wü,Fa,M	2.75	0.94	0.36	0.34
	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₃			65.04	0.009	0.002	0.132	0.007	0.018	0.020	1.18	no	-	-	0.39	0.50
29	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₁			86.99	0.013	tr	0.147	0.034	0.051	tr	0.053	Wü,Fa,M	1.50	0.38	0.67	0.25
	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₂			83.17	0.019	tr	0.100	0.036	0.039	0.002	0.017	Wü,Fa,M	1.08	0.53	0.92	0.49
	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₃			99.22	0.010	tr	0.057	0.020	0.041	tr	0.030	Wü,Fa,M	2.05	0.50	0.49	0.24
30	有頭鉄錠状鉄製品 Sa ₂			99.64	0.029	tr	0.157	0.011	0.026	tr	tr	Wü,GS	2.36	2.64	0.42	1.12
31	火打金			97.81	0.003	0.001	0.010	0.016	0.023	0.006	0.059	GS	1.44	0.19	0.70	0.13
32	火打金			97.81	0.017	tr	0.006	0.013	0.020	0.007	0.016	Fa,GS	1.54	1.31	0.65	0.85

注1) 化学成分分析はICP-OES法による。trは痕跡。

注2) Wüはウスタイト、XTは主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、FaはFe-Mg-Si-O系またはFe-Si-O系化合物、GSはガラス質ケイ酸塩、Mはマトリックス、noは見いだされず。

% Ni) と (mass% Cu) / (mass% Ni)、(mass% Ni) / (mass% Co) と (mass% Cu) / (mass% Co) を求め、その値を黒丸 (●) でプロットしたものである。鋼製鉄器から抽出した12試料は図13a、図13bともに左下にはぼまとまって分布する。一方、鑄造鉄器から抽出した試料は、図14a・bいずれにおいても3資料それぞれが離れた位置にある。No.17、No.19、およびNo.20の鑄造に使用された鉄鉄の化学組成が異なっていた可能性の高いことを示している。特にNo.19においてはSa₁、Sa₂も離れた位置にある。同一資料の鑄造に化学組成の異なる鉄鉄が使用された、あるいは溶鉄が固化する条件が鑄物の部位によって異なっていたことに起因すると考えられる。この点についてはデータの蓄積を待って検討したい。

図13a・bには、表7に示す関東地方の9世紀および10世紀に比定される遺跡、長野県辰野町堀の内遺跡の15世紀後半に比定される遺構から出土した鋼製鉄器の三成分比を白丸 (○) で、図14a・bには表8に示す9世紀から16世紀に比定される遺構から出土した原料鉄鉄の三成分比を白丸 (○) でプロットした。関東地方から出土したNo.22、No.29Sa₁₋₂、およびNo.31は神谷所遺跡出土鋼製鉄器の三成分比とほぼ合致する。また、No.38柳之御所遺跡出土鉄鉄塊は、神谷所遺跡出土鋼製鉄器の三成分比とほぼ同じ値をとる。そして、これらの解析結果から、以下の点を指摘できる。

- ① 金属考古学的調査を行った神谷所遺跡出土鋼製鉄器を製作する際に使用された鋼は、同一の原料を用いて製造された可能性が高い。
- ② 金属考古学的調査を行った神谷所遺跡出土鋼製鉄器と鉄塊の三成分比はほぼ合致する。調査した鋼製鉄器は遺跡内で製作された可能性がある。
- ③ 金属考古学的調査を行った神谷所遺跡出土鋼製鉄器とほぼ同じ化学組成をとる鋼製鉄器が、関東地方の9世紀後半に比定される遺跡、および長野県辰野町堀の内遺跡の15世紀後半に比定される遺構から出土した鋼製鉄器においても確認されている。古代から中世には鋼製鉄器製作の素材となる原料鉄が市場に供給され、商品として流通していた可能性がある。
- ④ 後述する鉄滓の金属考古学的調査結果に基づけば、神谷所遺跡出土鋼製鉄器の素材となった鋼は鉄鉄を脱炭して製造された可能性がある。柳之御所遺跡出土鉄鉄塊と神谷所遺跡出土鋼製鉄器がほぼ同じ領域にプロットされるという事実をふまえると、神谷所遺跡出土鋼製鉄器の素材として使用された原料

表8 平安期出土鑄造鉄器・銑鉄塊の分析結果

No.	資料名	出土地	推定時期	化学組成 (mass%)								ミクロ組織	Cu・Ni・Co三成分比			
				T.Fe	C	S	Cu	P	Ni	Co	Co*(Co/Ni)		Cu*(Cu/Ni)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)	
33	板状鉄器	青森県青森市野木遺跡	9世紀後半～	69.22	2.80	0.12	0.006	0.255	0.011	0.028	L	2.55	0.55	0.39	0.21	
34	板状鉄器		10世紀前半	49.28	-	-	0.004	0.180	0.012	0.008	L	0.67	0.33	1.5	0.5	
35	板状銑鉄	東京都多摩市別所遺跡	10世紀後半	91.30	4.16	-	0.031	0.195	0.022	0.045	L, G	2.05	1.41	0.49	0.69	
36	塊状銑鉄			89.60	3.76	-	0.082	0.234	-	-	-	-	-	-	-	-
37	不明鉄器片	岩手県西磐井郡平泉町柳之御所遺跡	12世紀第三四半期	37.98	-	-	0.025	0.205	0.058	0.116	L	2	0.43	0.5	0.22	
38	銑鉄塊			90.90	3.51	-	0.008	0.113	0.019	0.034	G	1.79	0.42	0.56	0.24	
39	三日月形銑鉄	福井県福井市	15～16世紀	85.44	-	-	0.030	0.24	0.03	0.01	L	0.33	1	3	3	
40	鉄塊系遺物	北海道松山郡上ノ国町勝山館跡	15～16世紀	84.54	2.55	-	0.203	0.048	0.020	0.016	L	0.8	10.15	1.25	12.69	
41	養種園遺跡	宮城県仙台市養種園遺跡	16世紀末	45.31	-	-	0.005	0.67	0.02	0.013	L	0.65	0.25	1.54	0.38	

注1) C, Sは燃焼-赤外線吸収法、他はICP-OES法による。

注2) Gは片状黒鉛、Lはレーデライト。

銑鉄の供給地域については、柳之御所遺跡出土銑鉄塊の生産地域との関連を加味し検討する必要がある。

- ⑤ 神谷所遺跡出土鉄鍋片、新町丸山遺跡出土羽釜、および馬口遺跡出土羽釜の鑄造に使用された銑鉄の化学組成は3資料ともすべて異なる。特に、新町丸山遺跡出土羽釜には1,000ppmを超えるCuが含有されている。同様の化学組成をとる鑄造鉄器は千葉県大原町鉄仏、青森県浪岡城跡出土茶釜、京都府豊国神社所蔵燈炉をはじめ、列島内の広い地域において確認されている¹²⁾。新町丸山遺跡出土羽釜は10世紀前半、馬口遺跡出土羽釜は10世紀後半に比定され、両羽釜の製作時期が異なること、10世紀後半に比定される東京都多摩ニュータウン別所遺跡から800ppmを超える銑鉄塊が検出されていること(表8)〔別所遺跡出土銑鉄塊には板状、大塊状(拳大)、小塊状(胡桃大)の3種類が確認されている。板状銑鉄は規格化されており、そのままの形で流通していたとみることができるが、塊状のものは溶融操作によって変形した可能性がある〕、および羽釜の分布が畿内およびその周辺に限定されるという考古学の研究結果^{2) 3)}を加味すると、新町丸山遺跡出土羽釜については、畿内系鑄物師によって鑄込まれた可能性を考えることができる。新町丸山遺跡出土羽釜とは化学組成が異なる馬口遺跡出土羽釜については、新町丸山遺跡出土羽釜を製作した鑄物師とは技術系譜が異なる鑄物師によって鑄造された、あるいは技術系譜が同じ場合には、入手経路を異にする銑鉄を素材として製作されたとする見方をとれる。これらの点については、2つの羽釜の形式学的研究と類似資料の金属考古学的データの蓄積を図りつつ、さらに検討を進めることとしたい。

6-2 古代・中世における鋼の製造

古代・中世の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石¹³⁾)を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を抽出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある¹⁵⁾。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鋸押法¹⁶⁾によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄(主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている)〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶¹⁵⁾と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので(溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2%の鋼を溶

融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある⁸⁾、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の普及が示すように^{2) 3)}、遅くとも9世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている¹⁷⁾。製錬して得られた銑鉄を溶解し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法¹⁸⁾に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶¹⁶⁾がよく知られている。たたら吹製鉄には銑押法と鋸押法の2つの方法がある。後者における生産の主目的物は鉄（主として鋼からなる鉄塊）、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鋸鉄もできる。銑押法において鋸鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焰にふれ酸化され、鋼（左下鉄）となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鋸鉄とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積み、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上へのせられ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている¹⁹⁾。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質が異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銑（溶融した銑鉄）を準備し、大鍛冶とほぼ同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている^{12) 20) -23)}。この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかなように、古代・中世には鉄に関する生産設備として少なくとも、①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として銑鉄を生産するための炉と鋼を生産するための炉が、精錬炉については銑鉄を局所的に溶融し脱炭するための炉と溶銑を準備した後それを脱炭して鋼を製造するための炉が、鍛冶炉については精錬鍛冶と鍛錬鍛冶または小鍛冶炉があった可能性があり、検出された炉跡の残存状況と出土資料の形状でただちにその機能を決定することはきわめて危険である。以下では、この点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、神谷所遺跡出土鉄滓の成因について検討する。

6-3 鉄滓の成因

金属考古学的調査を行った鉄滓は第5号住居址、第74号住居址、不明遺構、および第9号土坑から検出されている。これら三遺構において鉄関連炉跡は未検出なため、遺構に基づく成因推定は困難である。ここでは鉄滓の形状と組成を基に、その成因について検討する。

金属考古学的調査を行った8点の鉄滓はすべて椀状滓またはその一部である。特に第74号住居址から出土したNo.3鉄滓上面は、直径約14cmの円形を呈する。第24号住居址周辺からは上面が直径約7cmの円形を呈する椀状滓が見出されている。少なくとも大きさの異なる椀状滓が生成したことは間違いない。

椀状滓はいずれも青灰色を呈し、凸面および凹面のいたるところに溶融または部分溶融した粘土状物質が残存している²⁴⁾。木炭の噛み込みや固着はみられない。表面形状と鉍物組成に基づけば、Si、Alを主成分とする粘土状物質に酸化鉄を主成分とする鉄滓が反応し生成した資料と推定され、その形状から、6-2で述べた精錬鍛冶または精錬操作に伴って生成した資料とみることができる。

精錬鍛冶における出発物質は主として鋼からなり、相当量の鉄滓が混在した組成が不均一な鉄である²⁵⁾。木炭の燃焼熱による炉内到達可能温度を考慮すると、主として鋼からなる鉄を溶解することは困難であり、純化は基本的に加熱・鍛打によったとみなければならない。この操作では鉄塊に付着または鉄塊中に固着する鉄滓が破碎され除去される。その過程で飛散した鉄滓が炉内に入り、炉材粘土と反応しながら溶融もしくは部分溶融した後、炉底にたまり固化する。金属考古学的調査を行った鉄滓は、その形状から炉底部において生成したとみなければならない。鉄滓が炉底部で生成した場合、熱源である木炭が共存しているので、鉄滓中にある程度木炭が噛み込まれるはずである。上記8点の鉄滓には木炭の噛み込みや固着はみられない。熱源である木炭と反応サイトとが分離された状況下において生成した鉄滓の可能性があり、精錬鍛冶ではその形状を説明することが難しい。

椀状を呈すること、木炭と反応サイトとが離れた位置にあった可能性が高いことを考え合わせると、粘土状物質を用いて製作された椀状を呈する容器の中に溶銑を準備し、主として空気酸化によって脱炭して鋼を製造する操作（精錬）が行われていた可能性が高いと筆者は考える。8点の椀状滓に残存する酸化鉄、鉄かんらん石、Fe-Al-O系化合物、および主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物については、溶銑の再酸化物質と粘土状物質との反応生成物とみることによってその説明が可能となる。なお、No.16には他の7点の鉄滓に比べ、5倍強のTiが含有されている。椀形容器の素材となった粘土状物質に、局所的にチタン化合物が混在していたか、あるいは操作の過程で人為的にチタン化合物を含む物質が使用されたことに起因すると推定される。この点については、鉄関連遺構から見出される同形状の遺物の組成を比較する中で明らかにする必要がある。

精錬を想定した場合、銑鉄の入手方法が問題となる。精錬鍛冶の出発物質である組成が不均一な鉄はしばしば「荒鉄」と呼ばれる¹⁵⁾が、最近の文献資料の研究によってそれは「銑鉄」であり、その流通は平安末まで遡る可能性のあることが指摘されている²⁶⁾。既述のとおり、東京都多摩市別所遺跡や岩手県平泉町柳之御所遺跡からは銑鉄塊が見いだされ、金属考古学的調査によって他地域からもたらされた可能性の高いとする見解が提示されている²³⁾。関東地方から出土する鋼製鉄器、古代および中世の遺構から出土した銑鉄の中に化学組成の異なる資料がみられるという状況を考慮すると、鋼製造の素材として使用された原料銑鉄の供給地域が複数あったとする見方をとることによって、一連の調査結果の説明が可能となる。新町丸山遺跡出土羽釜と馬口遺跡出土羽釜の化学組成上の差異も、当時の原料銑鉄の流通状況を示しているものと思われる。

第15号竪穴建物址および不明遺構からは小鉄塊が検出されている。それらはそれぞれ共析鋼に近い組成の鋼、過共析鋼からなり、共伴する鋼製鉄器とはほぼ同じ化学組成をとることが確かめられている。二つの小鉄塊のうちの一つに鉄滓が混在していたため、使用不能と判断され廃棄された失敗作の可能性はあるが、それはともかく不明遺構から椀状滓や釘が共伴して出土していることを加味すると、遺跡内では原料銑鉄を脱炭して製造された鋼を使い、生活に必要な鎌や釘をはじめとする農工具が製作されていたことを想定することができる。既述のとおり、椀状滓には少なくとも大きさの異なる2つのタイプがあることが確認されている。刀剣をはじめとする大型の鉄器を製作する場合にはその鉄器の製作に必要な量の鋼を、釘や釣り針といった小型の鉄器を製作する場合には、それらの製作に見合った量の鋼を準備することによって、以後の加工操作が容易になる。

製作する鉄器に応じ、あらかじめ製造する鋼の量が調整されていた可能性があり、この点についても出土する製品鉄器についての形態学的研究結果と対比しながら、検討する必要がある。

神谷所遺跡の調査区域内において鑄型や溶解炉は確認されていないため、鑄造の実施を主張することは難しい。鉄鍋については他地域から供給されたものと思われる。破片で検出されていることから、鋼製造の素材として再利用された可能性もある。この点についても資料の蓄積を待つて解明したいと考える。

神谷所遺跡およびその周辺地域における鉄・鉄器生産活動状況をより明確にするためには、精錬、羽釜や鉄鍋の素材となった銑鉄の供給地域解明が重要であることはいうまでもない。長野県下には更埴市に立地する清水製鐵遺跡をはじめ、考古学的に製錬炉跡と解釈可能な古代の鉄関連遺構が複数確認されている¹⁾。しかし、いずれの遺跡においても炉形の復元とその結果に基づく主生成物の組成に関する詳細な検討はなされていない。製錬炉跡と解釈された鉄関連遺構については、その多くが銅鉄の生産を目的としたとみなされてきたきらいがあるが、銑鉄生産を考慮に入れ炉構造の復元を図り、主生成物の組成を明らかにすることによって、原料銑鉄供給地域の絞込みが可能になるとと思われる。

6-4 るつぼの用途

No.18るつぼは不明遺構から出土したもので、青灰色を呈する。直径は約4cmで、ところどころに青緑色の物質が析出している。摘出した試料には銅粒の残存が確認された。青緑色の物質は緑青で、検出されたるつぼは銅の溶融、または銅合金の溶製に使用されたものと推定される。神谷所遺跡では鉄に関する生産活動に加え、銅に関する生産活動も行われていたことが、出土遺物の金属考古学的調査をとおして明らかとなった。

7. ま と め

神谷所遺跡およびその周辺遺跡から出土した遺物の金属考古学的調査をとおして、遺跡内では銑鉄を脱炭して鋼を製造する操作と、それを素材として農工具をはじめとする日常生活に必要な鋼製鉄器が製作されていたものと推定された。精錬の出発物質である原料銑鉄の獲得方法については、遺跡外からの供給、または使用不能となった鑄造鉄器の再利用を考えることができた。また、神谷所遺跡では鉄に加え、銅に関する生産活動も行われていたことが明らかとなった。

原料鉄や銅の流通、あるいは使用不能となった鉄器や銅製品の再利用を考慮に入れ、考古学の発掘調査結果および出土遺物の形状と組成に関する調査結果を多面的に検討することによって、神谷所遺跡およびその周辺地域における古代から中世の金属器の生産と普及の実態に迫ることができるにちがいない。

註

- 1) 辰野町教育委員会 福島永氏からのご教授による。
- 2) 五十川伸矢「古代・中世の鑄鉄鑄物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.1-79。
- 3) 五十川伸矢「古代から中世前半における鑄鉄鑄物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。
- 4) No. 6 金属部の T.Fe が 79.47% と低レベルになったのは錆の混在による。
- 5) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 6) 岩手大学教育学部 土谷信高助教授からのご教授による。
- 7) 佐々木稔、伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧、鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』1987、pp.63-73。

- 8) 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社、1968年。
- 9) Knox.R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel", *Archaeometry*, Vol.6, 1963, pp.43-45.
- 10) 俵国一『日本刀の科学的研究』日立印刷、1982年。
- 11) 赤沼英男、木村克則「東北地方北部終末期古墳出土直刀の材質と製法」岩手県立博物館研究報告、7、1989年、pp.63-74。
- 12) 赤沼英男「中世後期における原料鉄の流通とその利用」『鉄と銅の生産の歴史』株式会社雄山閣、2002年、pp.97-115。
1,000ppm 近くもしくはそれを超える Cu を含有する鉄鋼は、15世紀以降の遺跡において数例確認されているが、10世紀代の資料については未確認である。また、鉄鋼の製作地および鋳物師の技術系譜も複数あった可能性があり、現在幾人かの研究者によって鉄鋼の分類と変遷に関する研究が進められている。
- 13) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている¹⁴⁾。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して扱うことには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された、磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 14) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、丸善、1981。
- 15) 大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40
- 16) 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990年、p.11。
- 17) 関清「古代末の北陸—富山湾岸部の遺跡群—」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。
- 18) 空気酸化により銑鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちに α Fe に近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鉄器によく使用される亜共析鋼が銑鉄を精錬してただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼（鉄）法という表現をとった。
- 19) 村上英之助「村上・中澤の往復書簡」たたら研究、36・37、1996、pp.78-88。
- 20) 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術—中世の『和鉄』解明のために—」『製鉄史論文集 たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会編、2000、pp.195-228。
- 21) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999年、pp.15-24。
- 22) 赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふえらむ、Vol.2 No.1、社団法人日本鉄鋼協会、1997年、pp.44-51。
- 23) 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集 たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会編、2000年、pp.553-576。
- 24) 岩手大学教育学部土谷信高助教授による岩石・鉱物学的研究によって、残存する粘土状物質は斜方輝石を含む火山岩あるいは火砕流堆積物を起源とする可能性が高いことが指摘されている。
- 25) 遺跡直轄の製錬所が別途確保されていて、そこで生産された組成不均一な鉄塊が精錬鍛冶場に運び込まれていた、あるいは組成不均一な鉄が広域的に流通していたことを前提として、精錬鍛冶の実施が可能となる。流通品は価値換算を容易に行えるよう、組成や形状が規格化されている必要がある。組成が不均一で形状が不定形な鉄が商品として広域的に流通していたとは考えにくい。精錬鍛冶の実施には、遺跡直轄の製錬所の確保が不可欠であったと筆者は考える。
- 26) 福田豊彦「鉄を中心にみた北方世界—海を渡った鉄」『中世の風景を読む 第一巻 蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社 1995、pp.154-198。

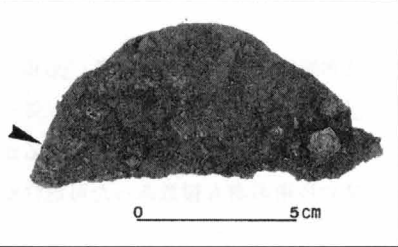
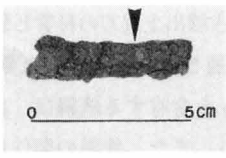
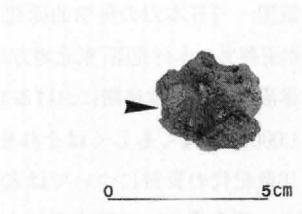
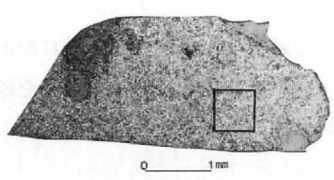
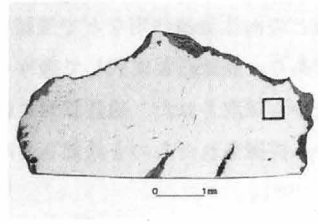
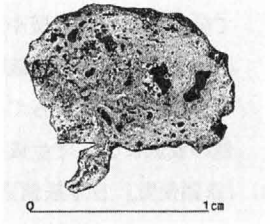
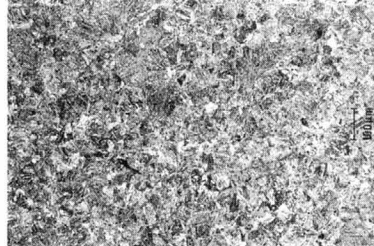
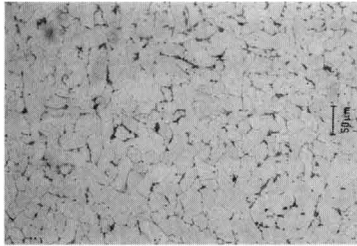

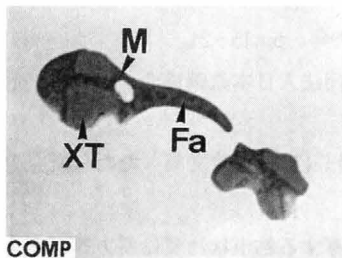
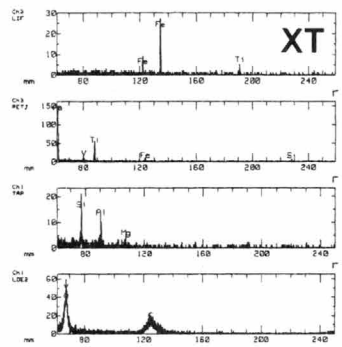
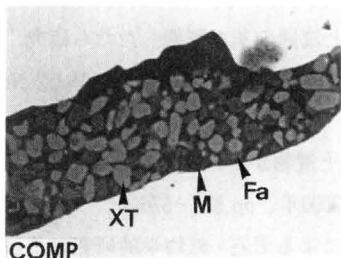
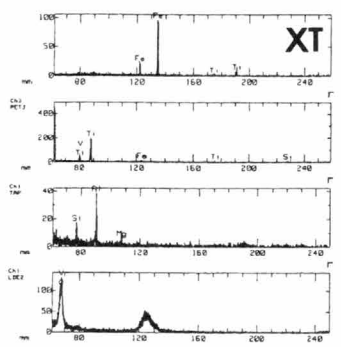
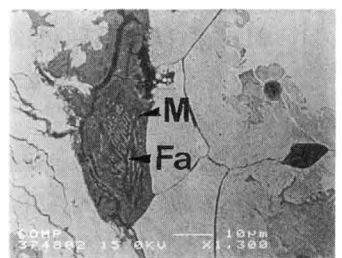
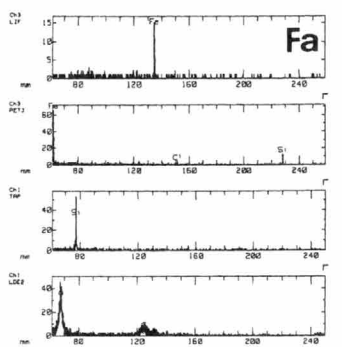
	No.4	No.5	No.6
外 観			
マ ク ロ エ ッ チ ン グ 組 織			
ミ ニ エ ッ チ ン グ 組 織			
成 組 物 在 介 属 金 非	 	 	 

図1 No. 4・5・6の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。マイクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠で囲んだ内部。エッチングはナイタルによる。Wü：ウスタイト（化学理論組成 FeO）、COMP：EPMAによる組成像、XT：主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Fa：FeO-SiO₂系化合物、M：マトリックス。

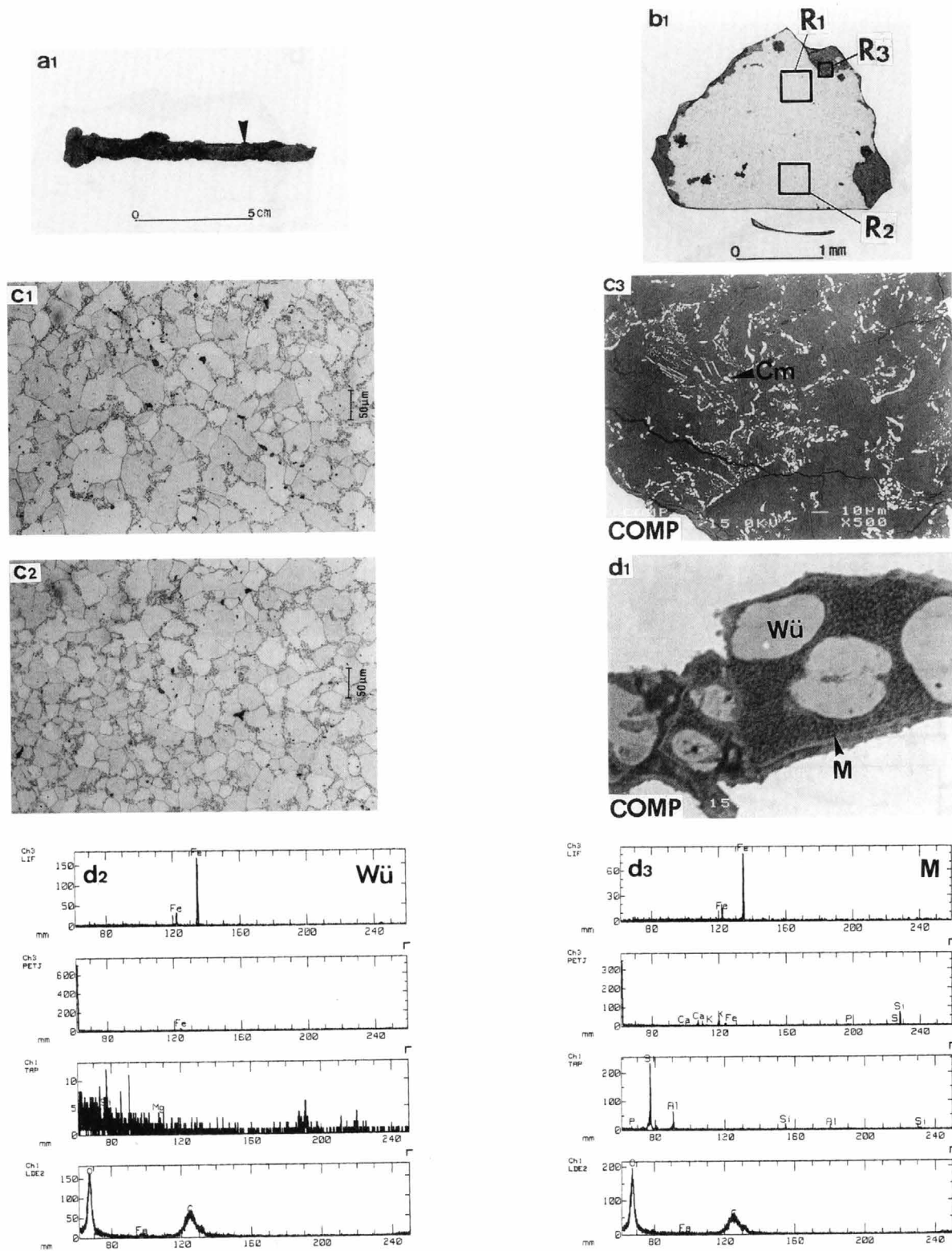


図2 No. 7の外観と抽出した試料の組織観察結果

a1 : 外観。矢印は試料抽出位置。b1 : 抽出した試料のナイタールによるマクロエッチング組織。c1~3 : それぞれ b1 領域 R1~3 のマイクロエッチング組織または EPMA による組成像。Cm : セメント石 (Fe_3C)。d1~3 : 残存する非金属介在物の EPMA による組成像と定性分析結果。Wü : ウスタイト、M : マトリックス。

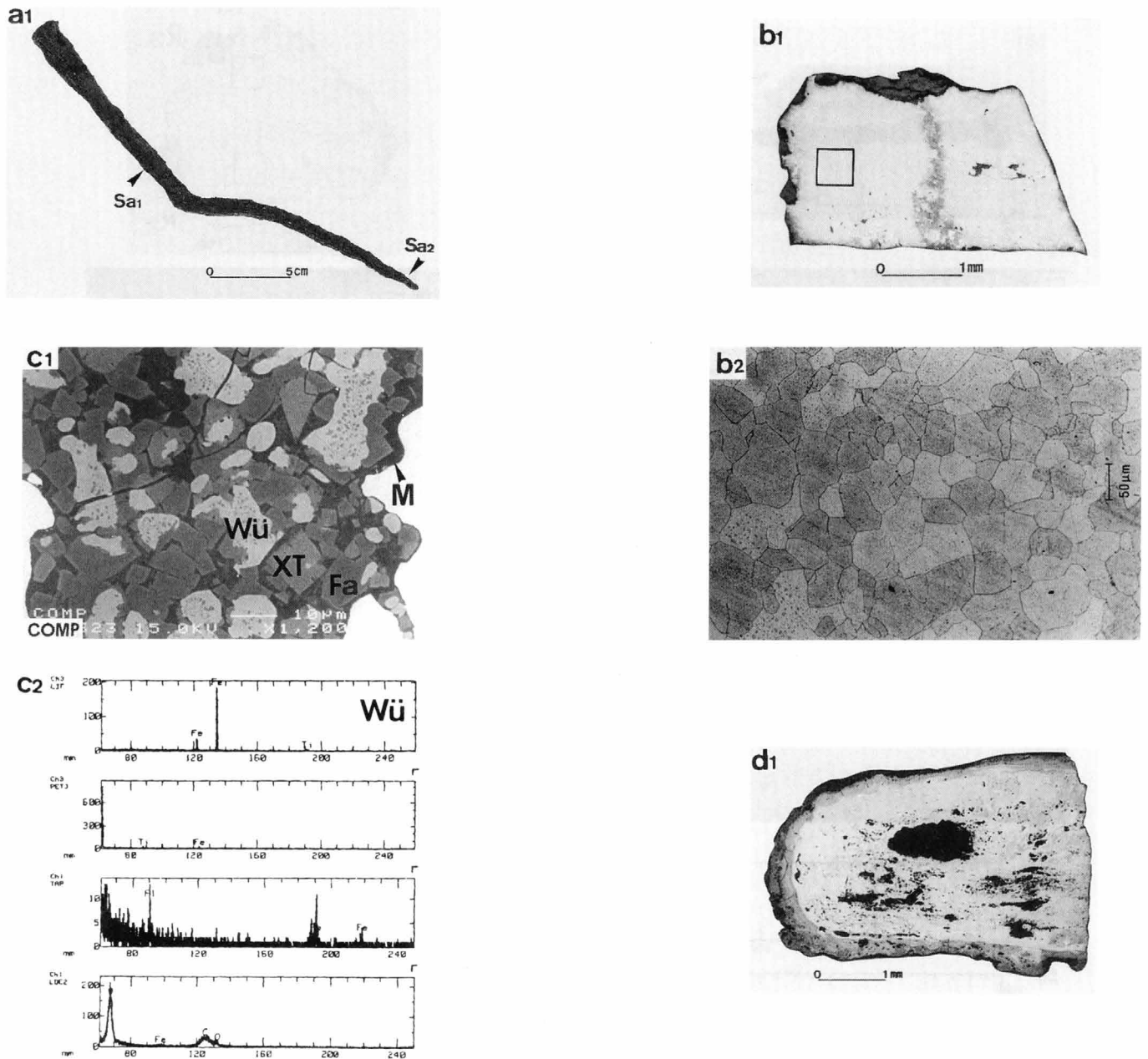


図3 No. 9の外観と抽出した試料の組織観察結果

a₁: 外観。Sa₁、Sa₂は試料抽出位置。b₁₋₂: Sa₁から抽出した試料のナイターによるマクロエッチング組織とマイクロエッチング組織。マイクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠で囲んだ内部。c₁₋₂: 残存する非金属介在物のEPMAによる組成像と定性分析結果。Wü: ウスタイト、XT: Fe-Ti-Al-Mg-V-O系化合物、Fa: Fe-Si-O系化合物、M: マトリックス。d₁: Sa₂から抽出した試料のマクロ組織。

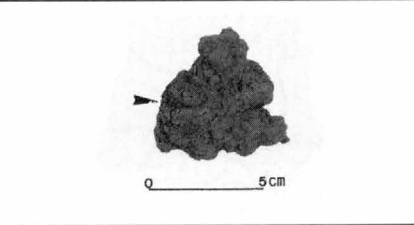
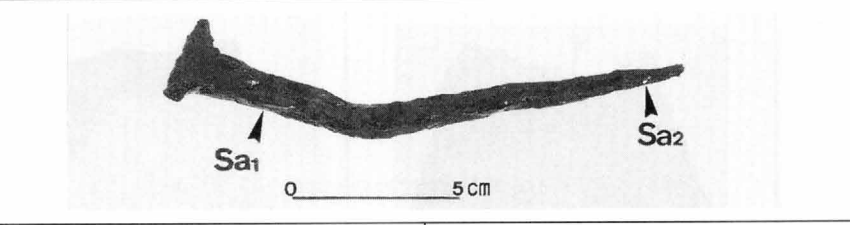
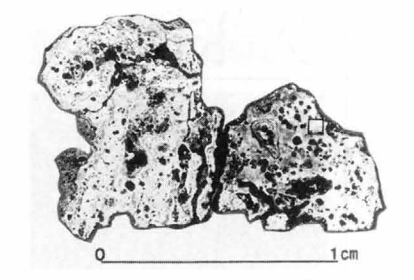
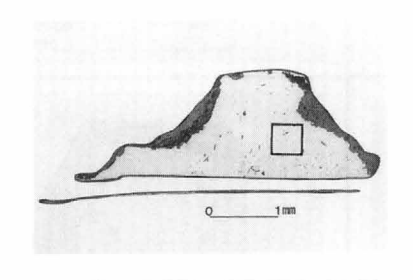
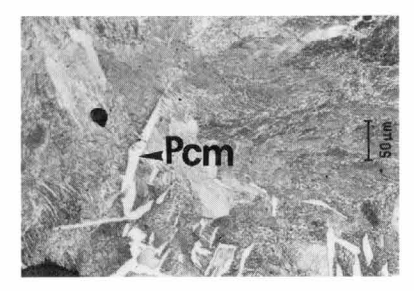
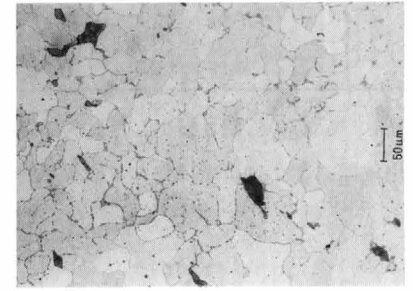
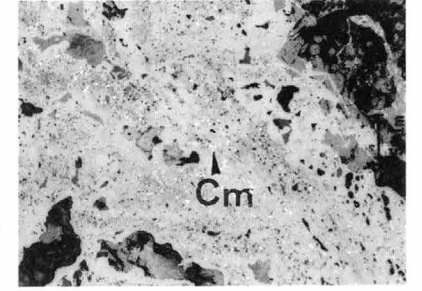
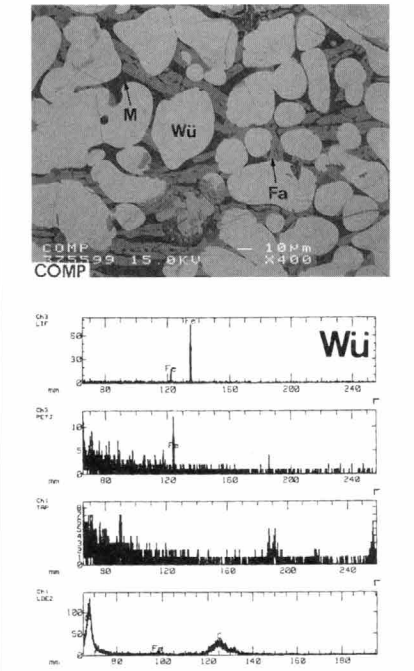
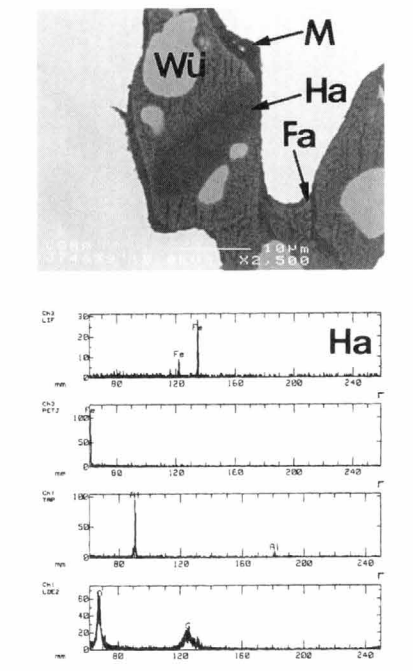
		No.10	
		Sa1	Sa2
外 観	No.11 		
	マクロ組織 または マクロエッチング組織		
ミクロ組織 または ミクロエッチング組織			
	非金属存在物組成		

図4 No. 8・10・11の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。ミクロ組織またはミクロエッチング組織はマクロ組織またはマクロエッチング組織の枠で囲んだ内部。Pcm：初析セメント、Wü：ウスタイト、Ha：Fe-Al-O系化合物、Fa：Fe-Mg-Si-O系化合物、M：マトリックス。

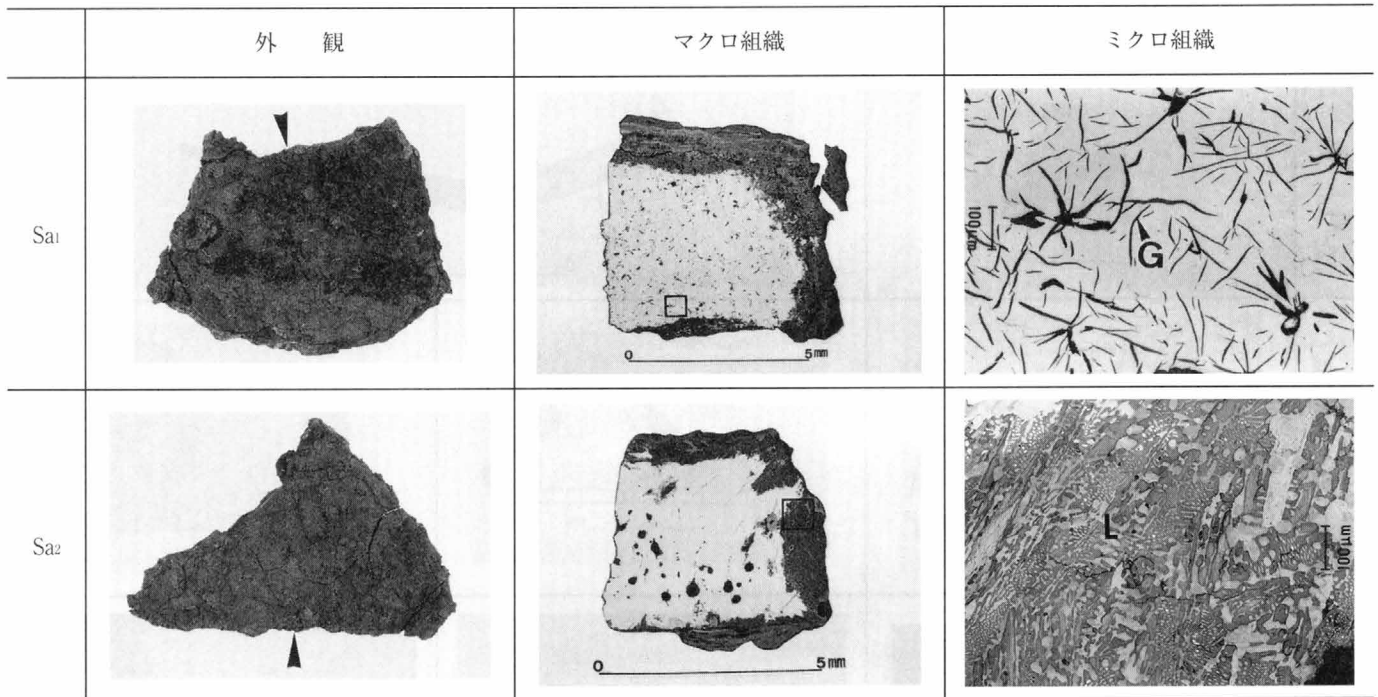
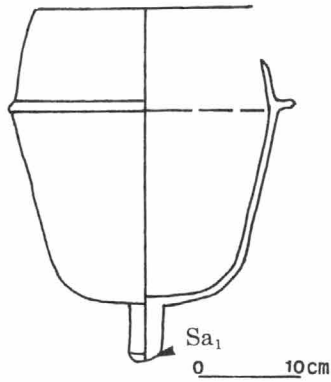
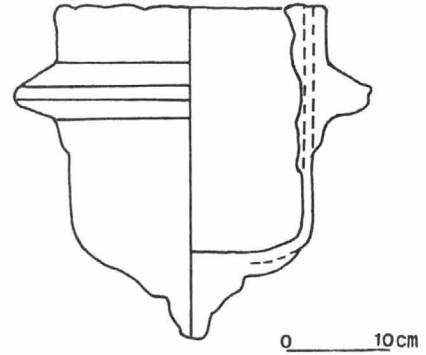


図5 No.17の外観と摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠で囲んだ内部。G：片状黒鉛、L：レーデブライト。

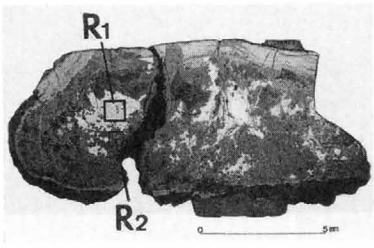
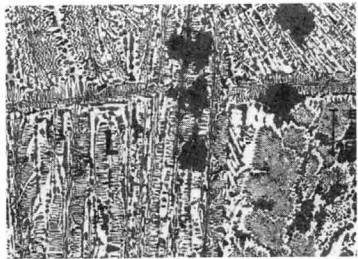
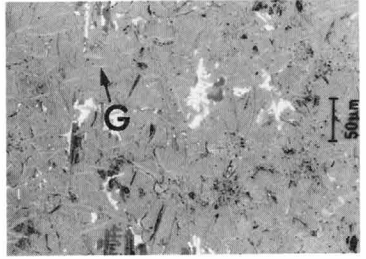
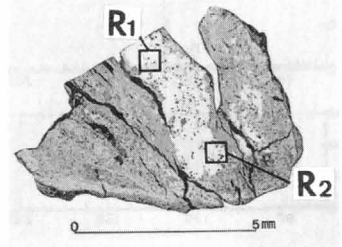
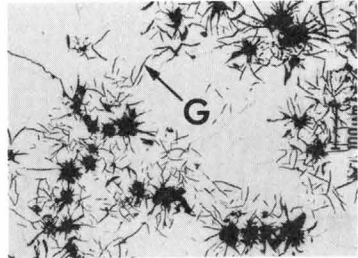
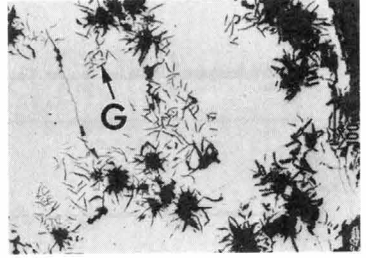


No.19



No.20

(No.19の組織観察結果)

	マクロ組織	ミクロ組織	
		R ₁	R ₂
Sa ₁			
Sa ₂			

(No.20の組織観察結果)

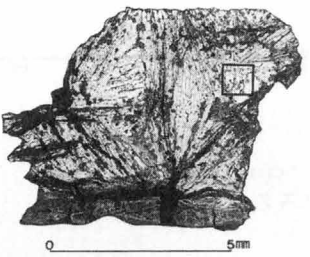
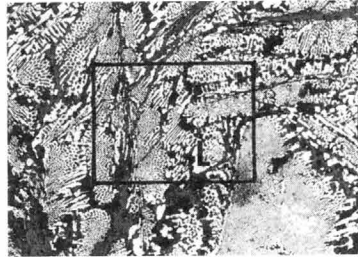
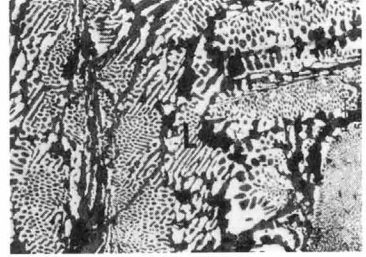
マクロ組織	ミクロ組織	
		

図6 No.19・20の外観と摘出した試料の組織観察結果

No.19ミクロ組織左および右はそれぞれマクロ組織領域 R₁、領域 R₂。No.20ミクロ組織右は左の枠で囲んだ内部。G：片状黒鉛、L：レーデブライト。

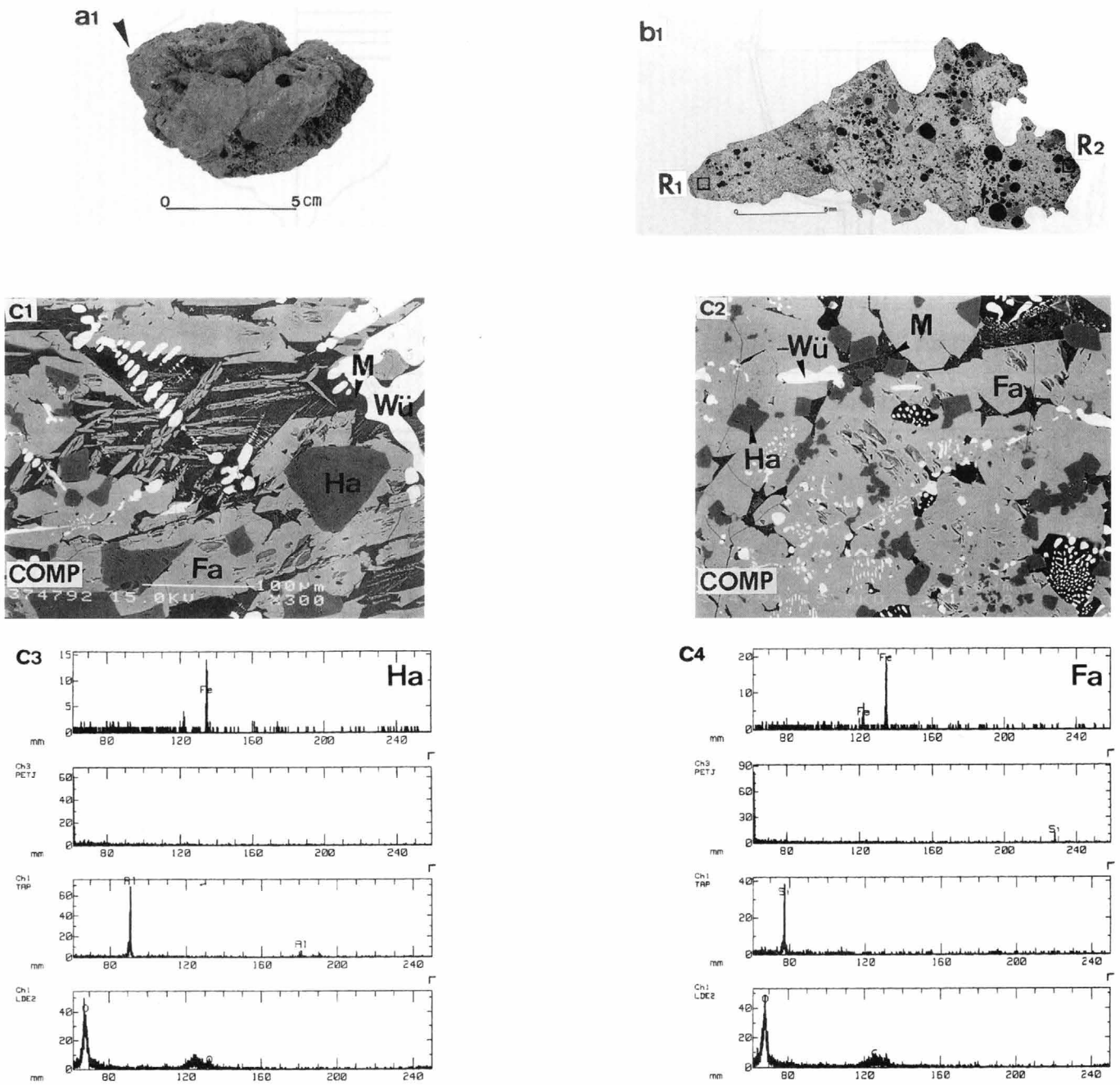


図7 No. 1の外観と摘出した試料の組織観察結果

a₁ : 外観。矢印は試料摘出位置。b₁ : 摘出した試料のマクロ組織。c₁・c₂・c₃・c₄ : それぞれ b₁ 領域 R₁・R₂ の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果。Wü : ウスタイト、Ha : Fe - Al - O 系化合物、Fa : Fe - Si - O 系化合物、M : マトリックス。

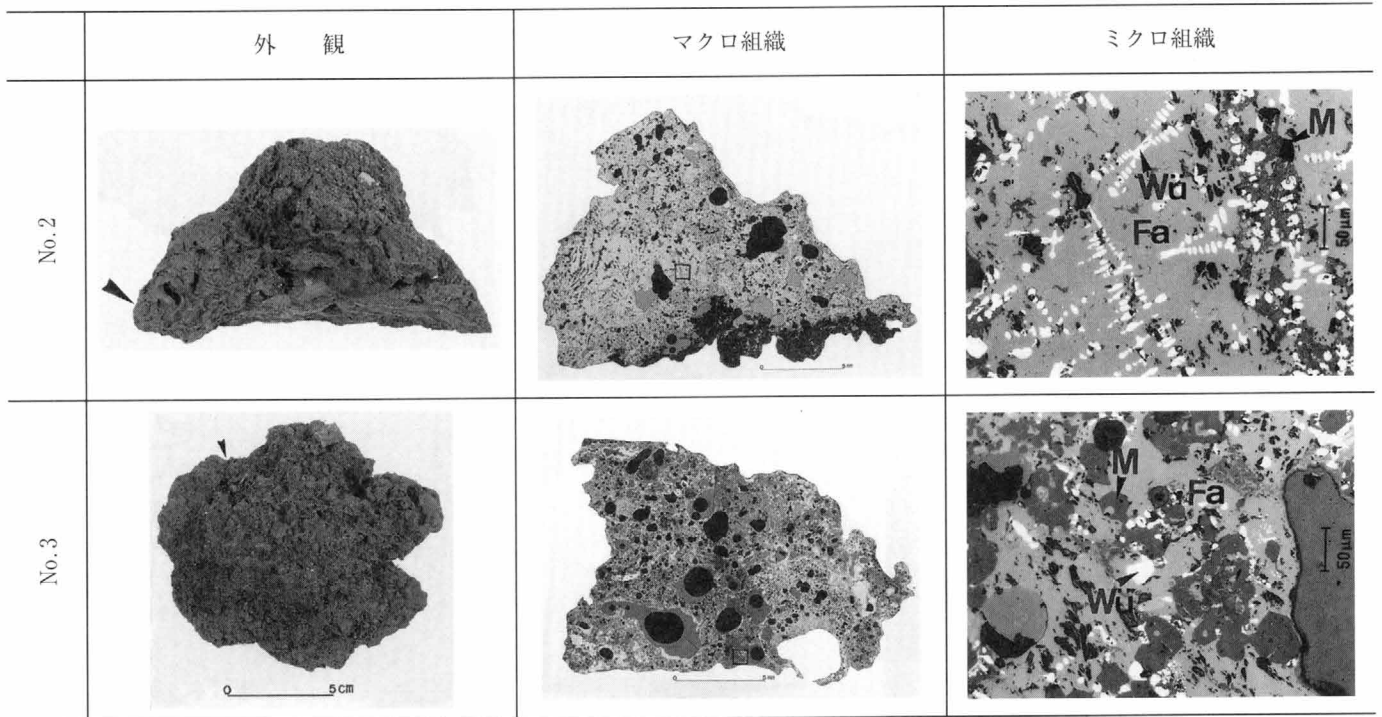


図8 No.2・3の外観と摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠で囲んだ内部。Wü：ウスタイト、Fa：Fe-Si-O系化合物、M：マトリックス。

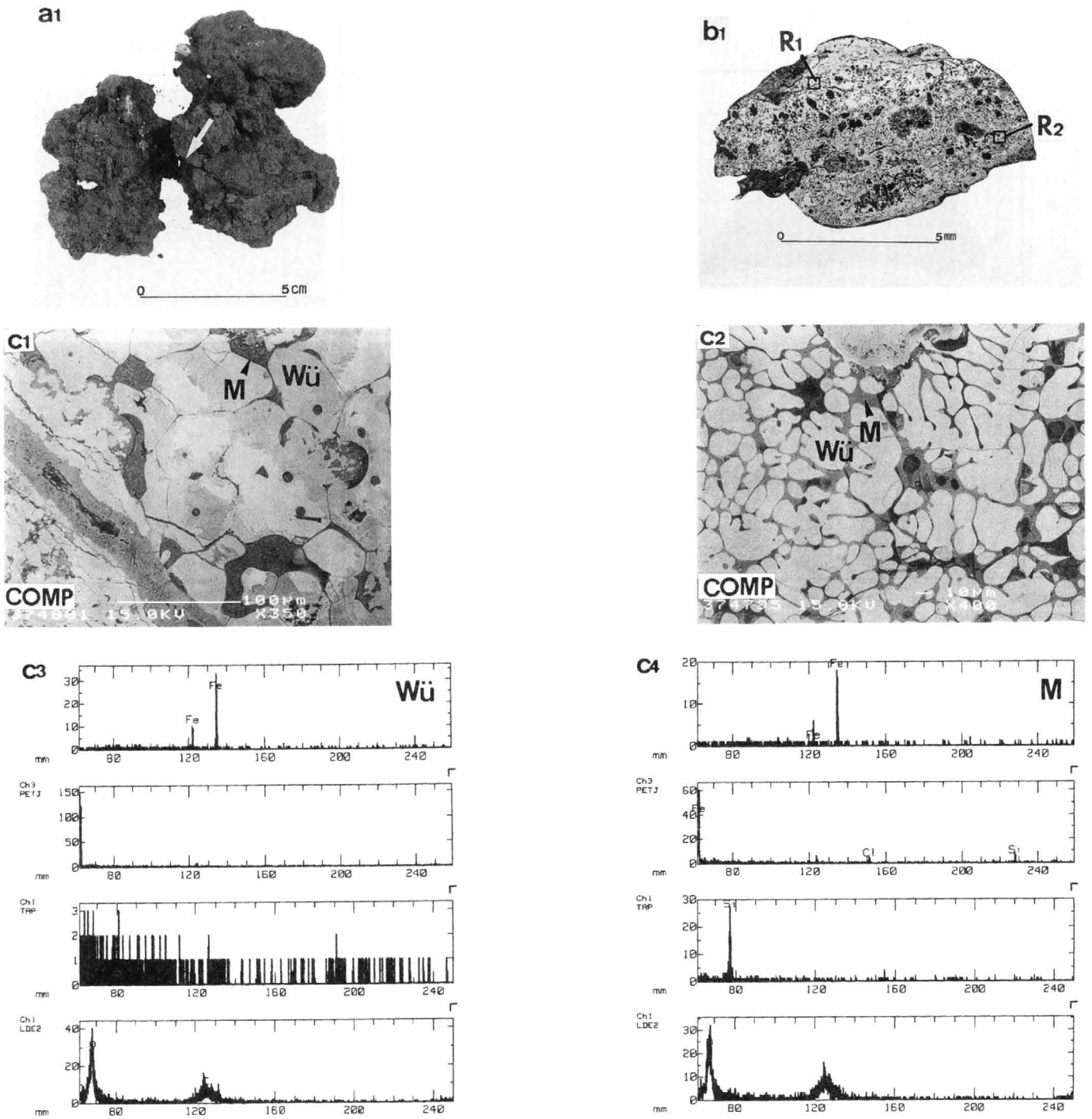


図9 No.12の外観と抽出した試料の組織観察結果

a1: 外観。矢印は試料抽出位置。b1: 抽出した試料のマクロ組織。c1・2・c3・4: それぞれ b1 領域 R1・R2 の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果。Wü: ウスタイト、M: マトリックス。

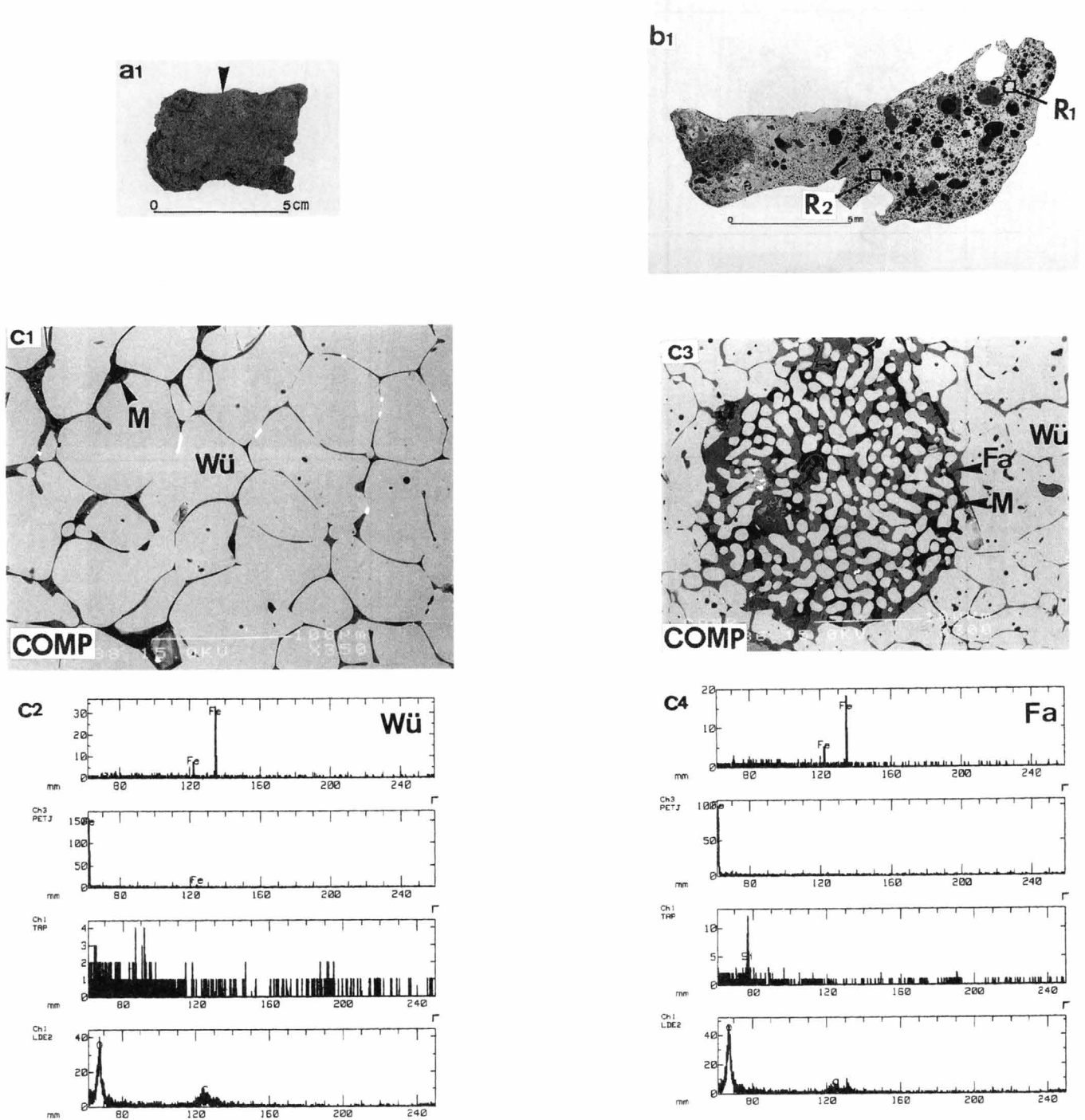


図10 No.13の外観と抽出した試料の組織観察結果

a₁ : 外観。矢印は試料抽出位置。b₁ : 抽出した試料のマクロ組織。c₁・2・c₃・4 : それぞれ b₁ 領域 R₁・R₂ の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果。Wü : ウスタイト、Fa : Fe-Si-O 系化合物、M : マトリックス。

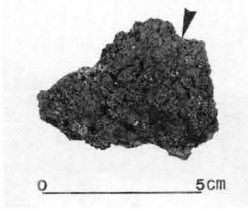
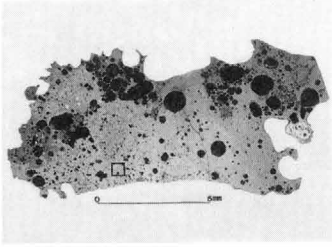
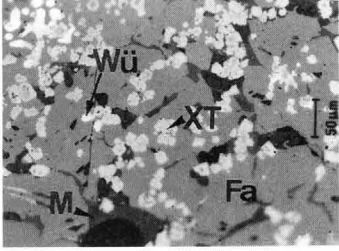
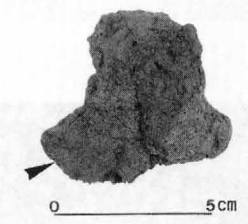
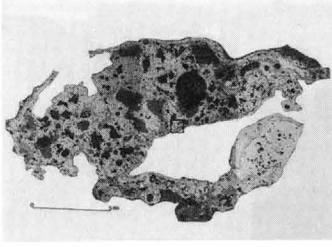
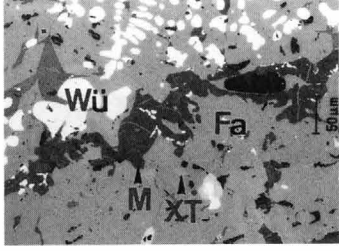
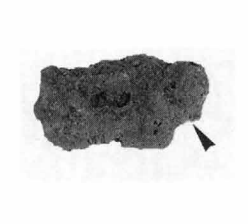
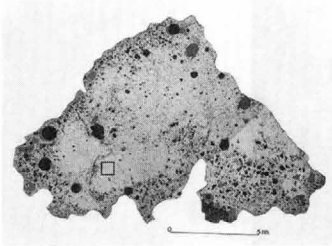
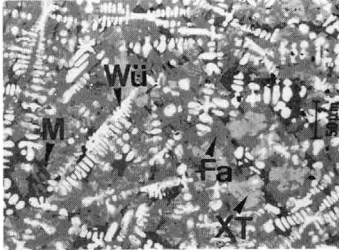
	外 観	マクロ組織	ミクロ組織
No.14			
No.15			
No.16			

図11 No.14・15・16の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠で囲んだ内部。Wü：ウスタイト、XT：主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Fa：Fe-Si-O系化合物、M：マトリックス。

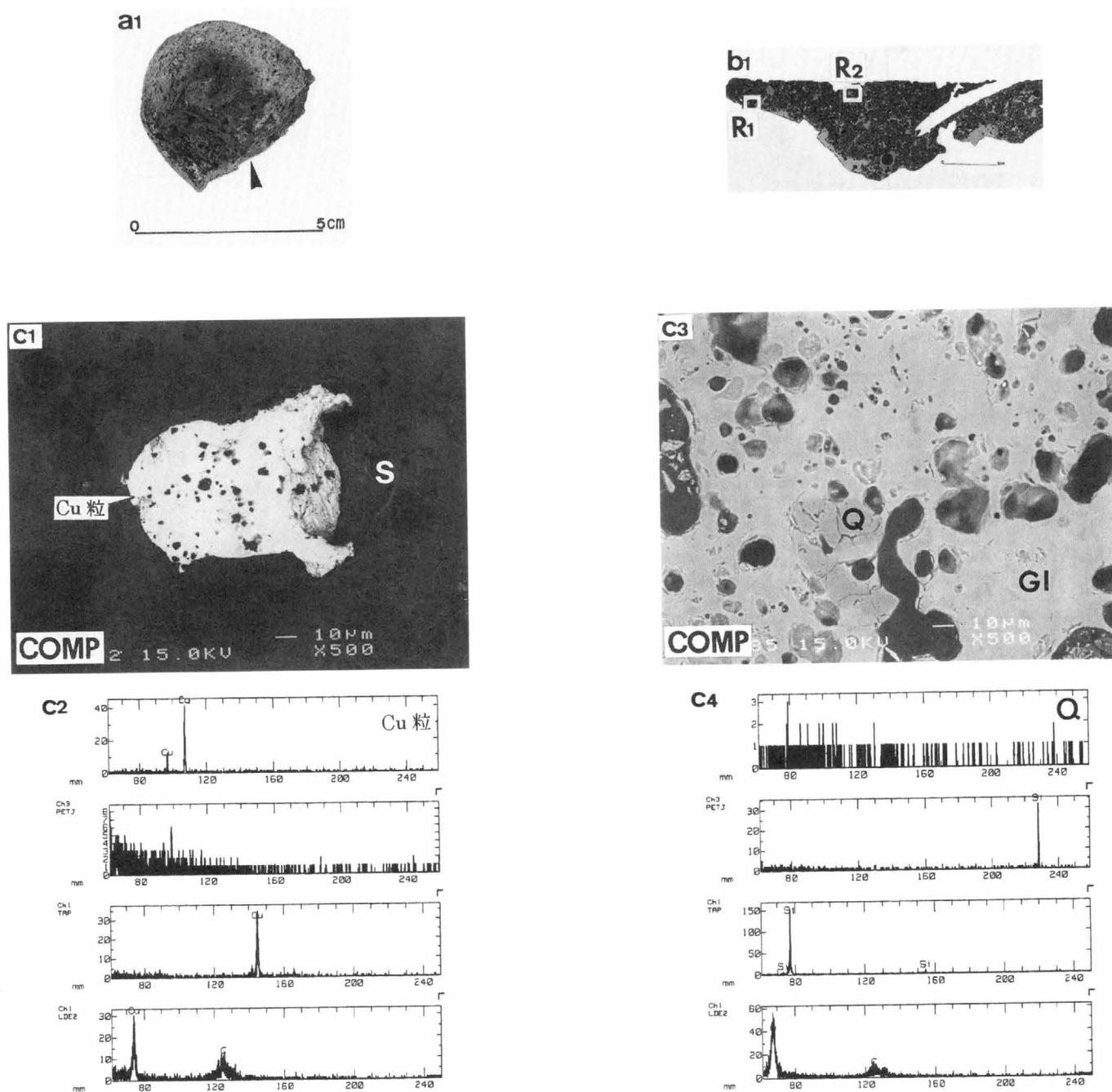


図12 No.18の外観と抽出した試料の組織観察結果

a1: 外観。矢印は試料抽出位置。b1: 抽出した試料のマクロ組織。c1・2・c3・4: それぞれ b1 領域 R1・R2の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果。Q: 酸化ケイ素、S: ガラス質ケイ酸塩。GI: ガラス化した領域。

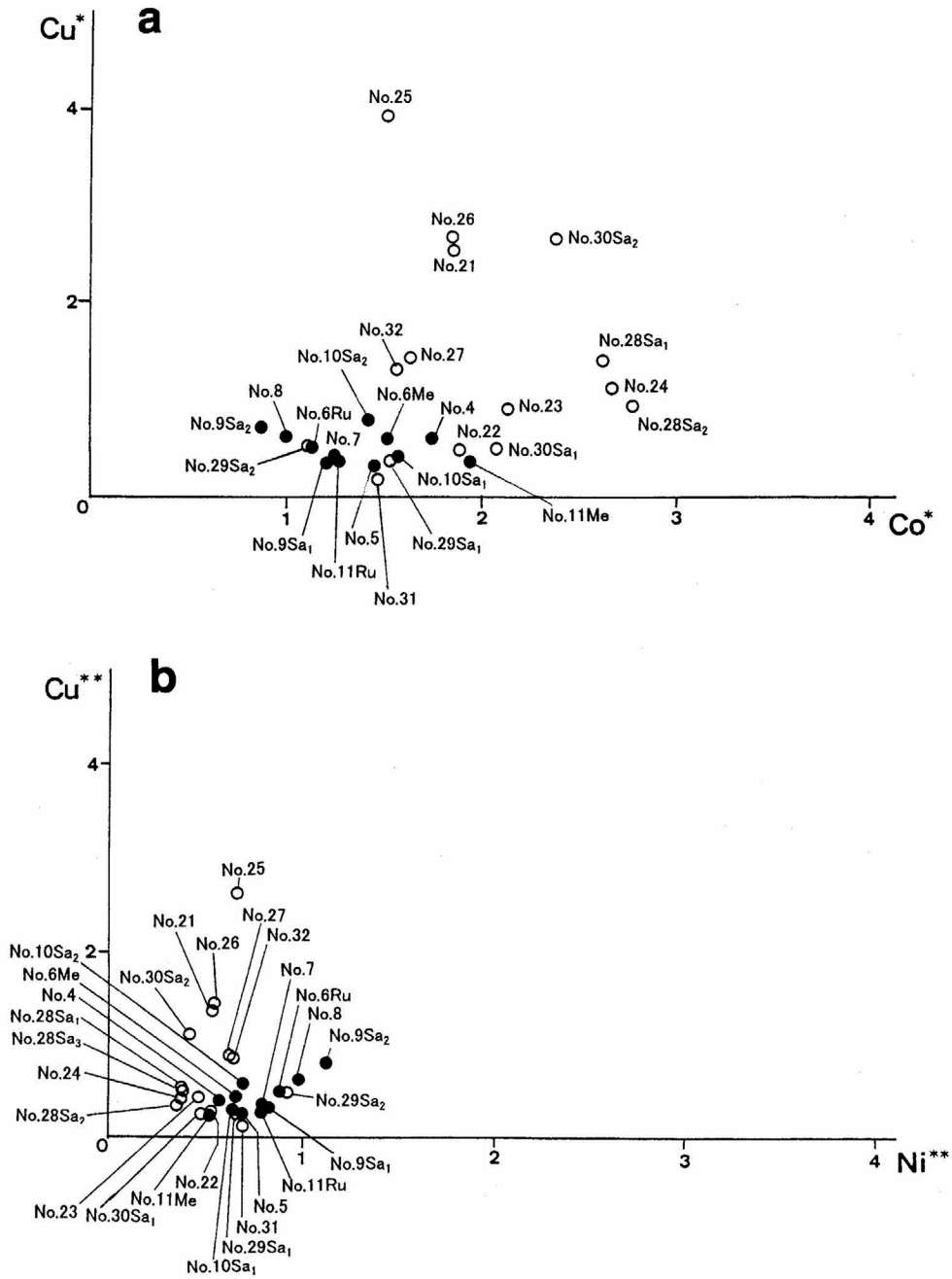


図13 銅製鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

●：神谷所遺跡出土、○：関東地方出土。No. は表1・7に対応。
 Cu* : (mass% Cu)/(mass% Ni)、Co* : (mass% Co)/(mass% Ni)、
 Cu** : (mass% Cu)/(mass% Co)、Co** : (mass% Ni)/(mass% Co)。
 Me : 金属部 Ru : 錆部

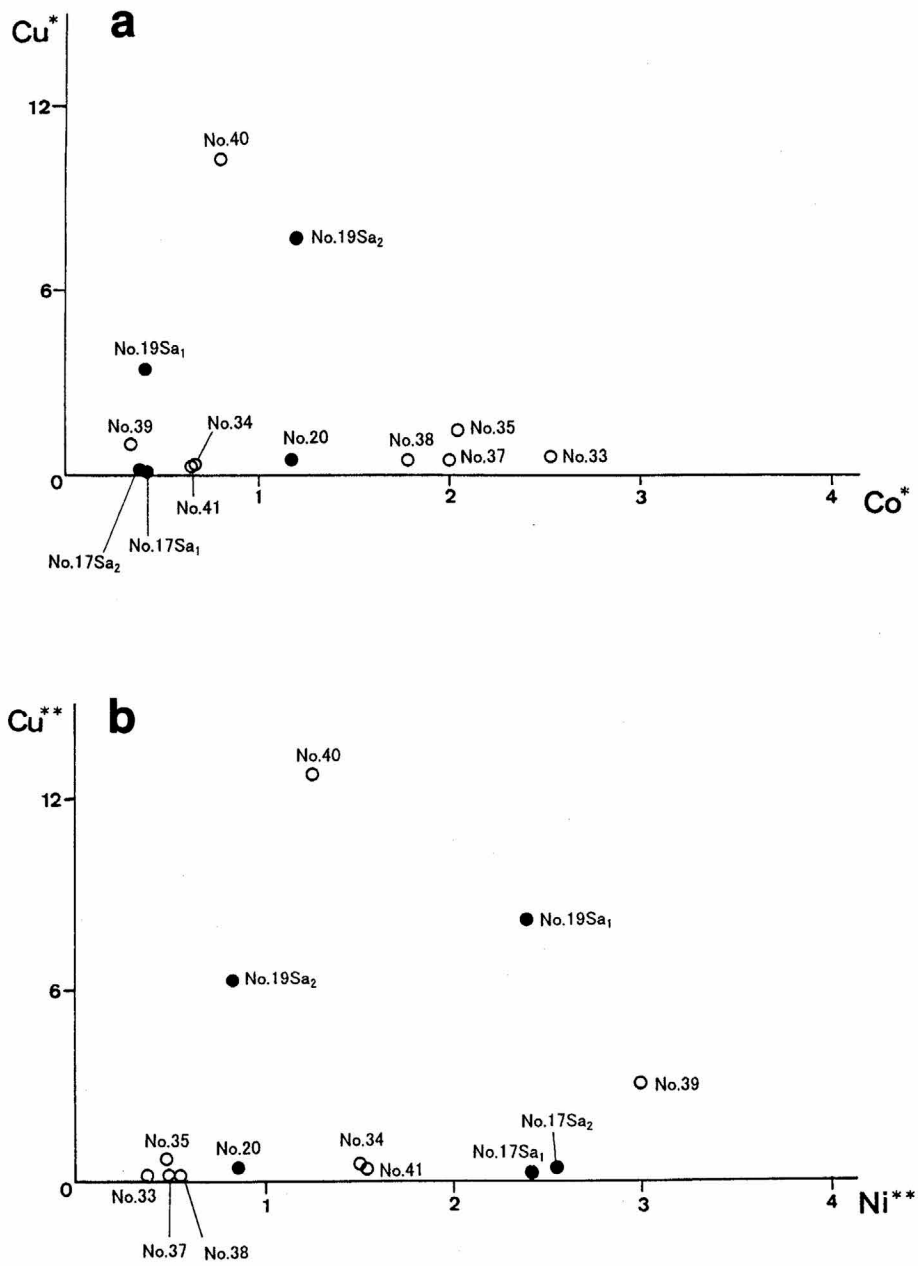


図14 鑄造鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

- ：神谷所・丸山・馬口遺跡出土、○：平安時代出土原料銑鉄。No. は表1・8に対応。
 Cu*：(mass% Cu)/(mass% Ni)、Co*：(mass% Co)/(mass% Ni)、
 Cu**：(mass% Cu)/(mass% Co)、Co**：(mass% Ni)/(mass% Co)。

写真図版一

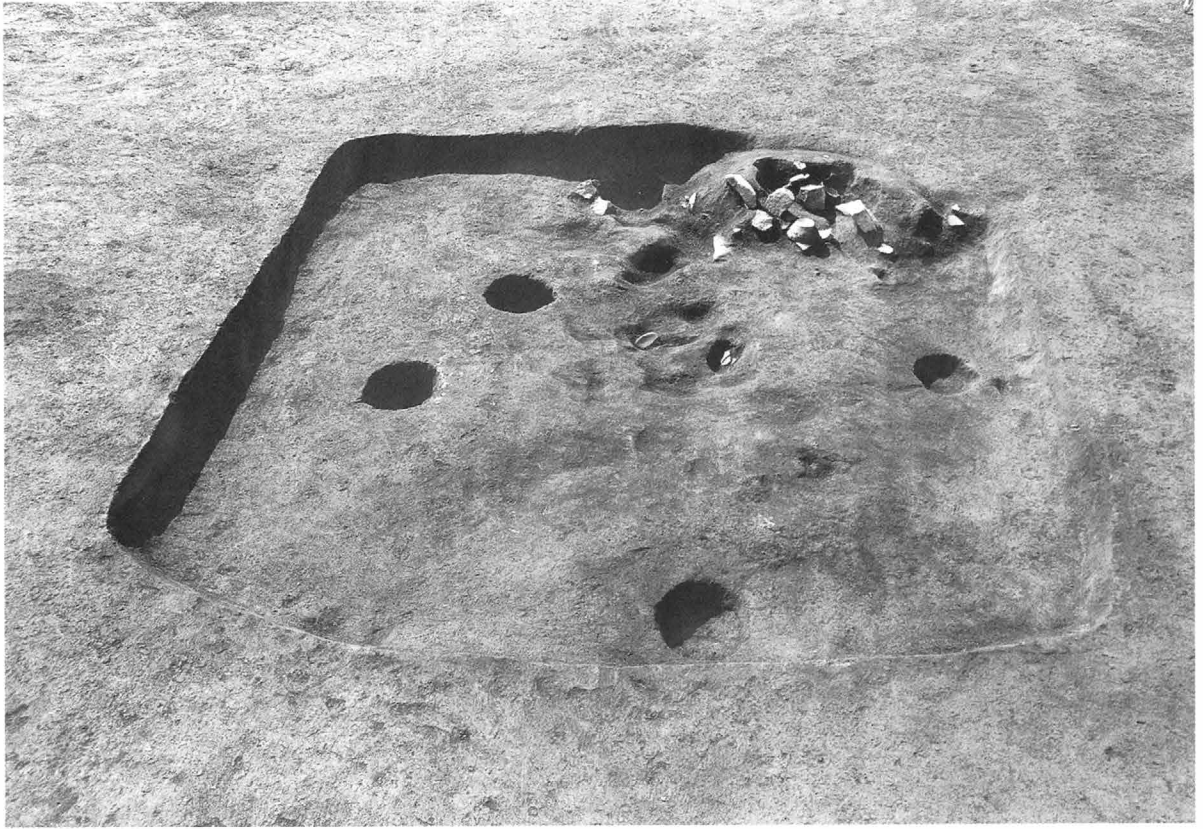




第1調査区全体写真



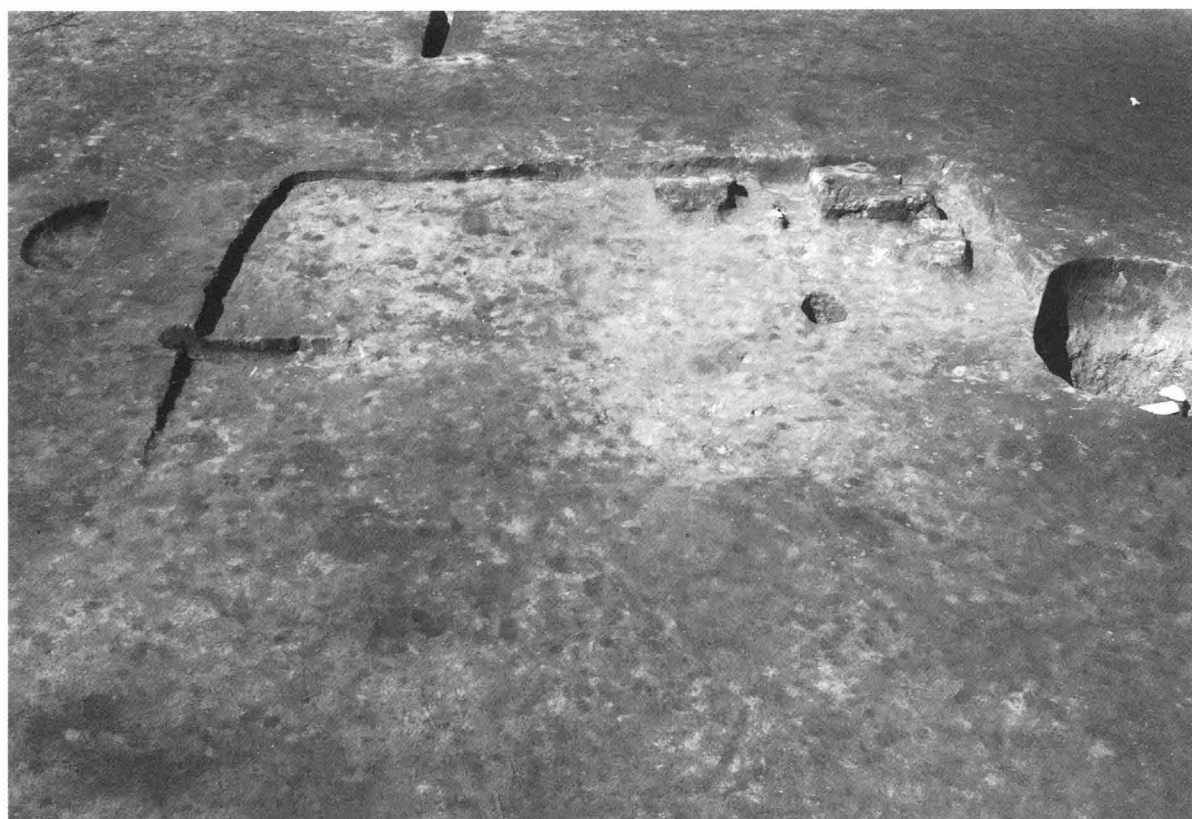
第2 調査区全体写真



第1号住居址



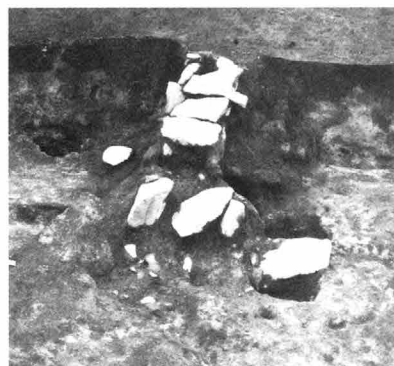
第2・3号住居址



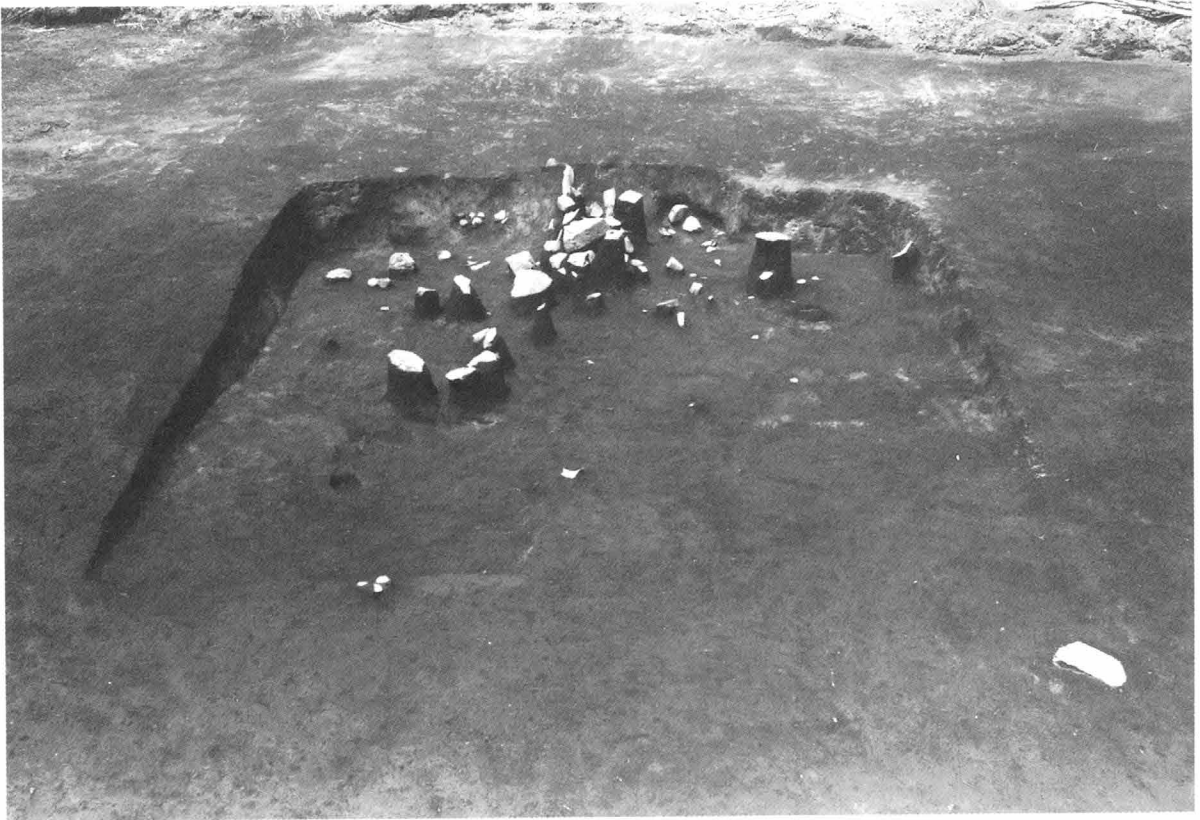
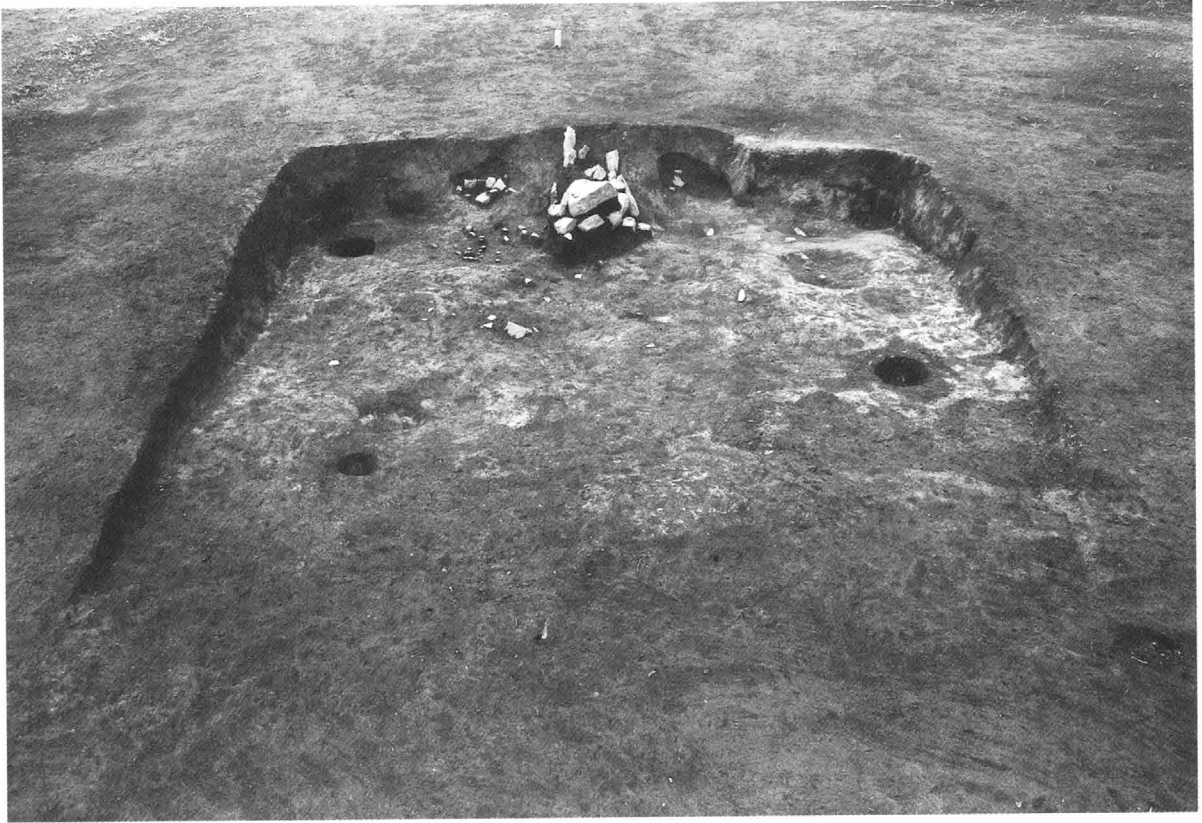
第22号住居址



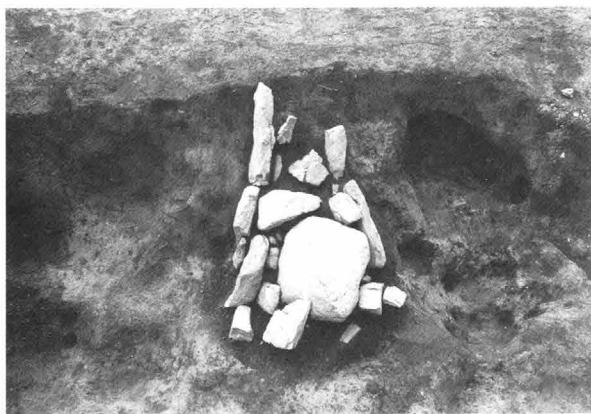
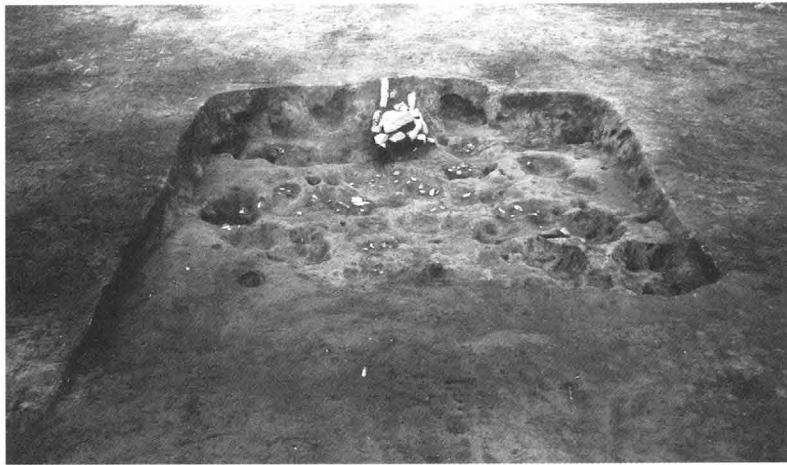
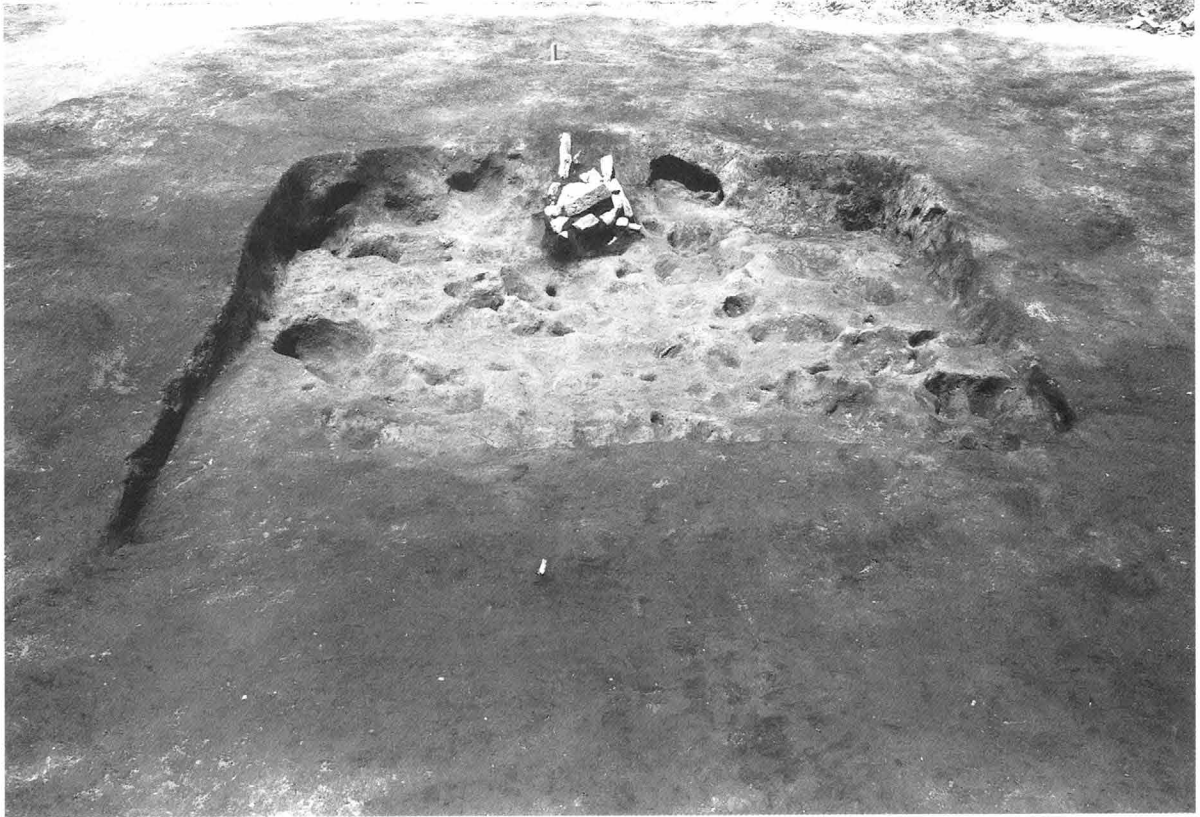
第4号住居址



第5号住居址



第 6 号住居址 (1)



第 6 号住居址 (2)



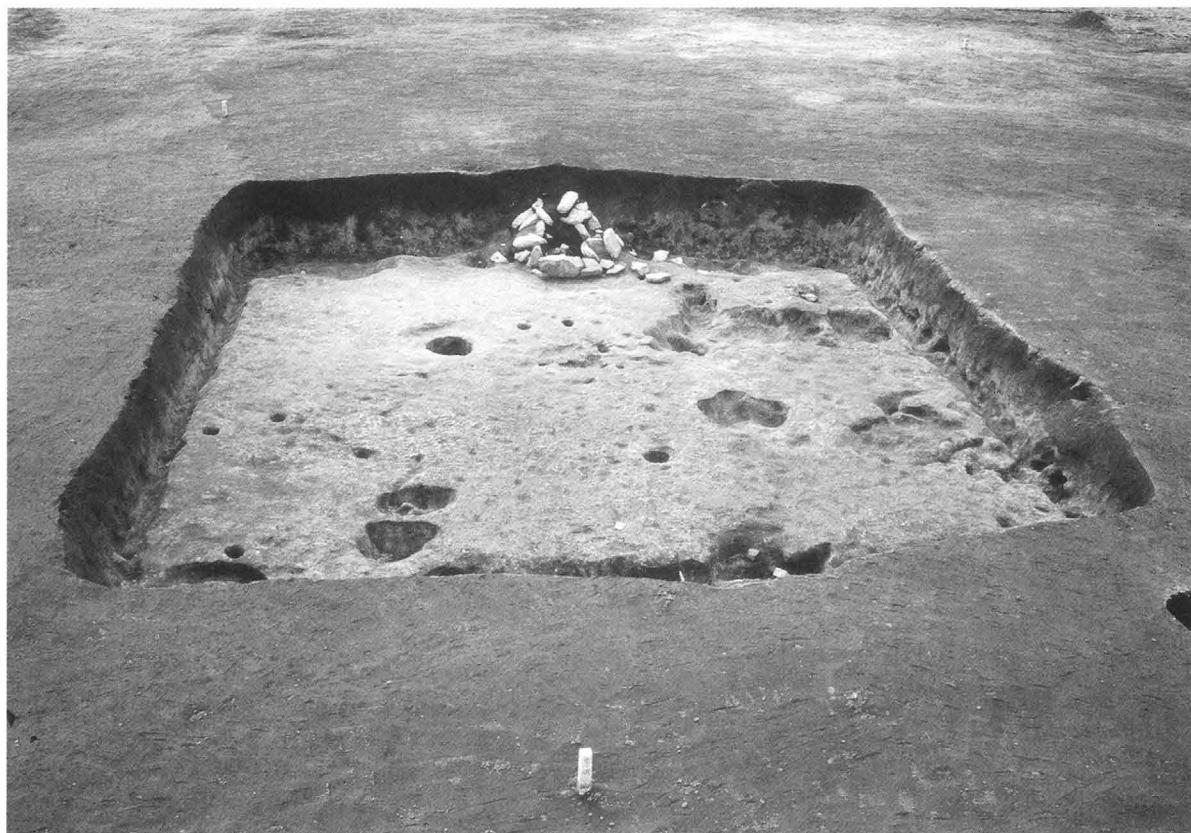
第8号住居址



第 9 号住居址 (1)



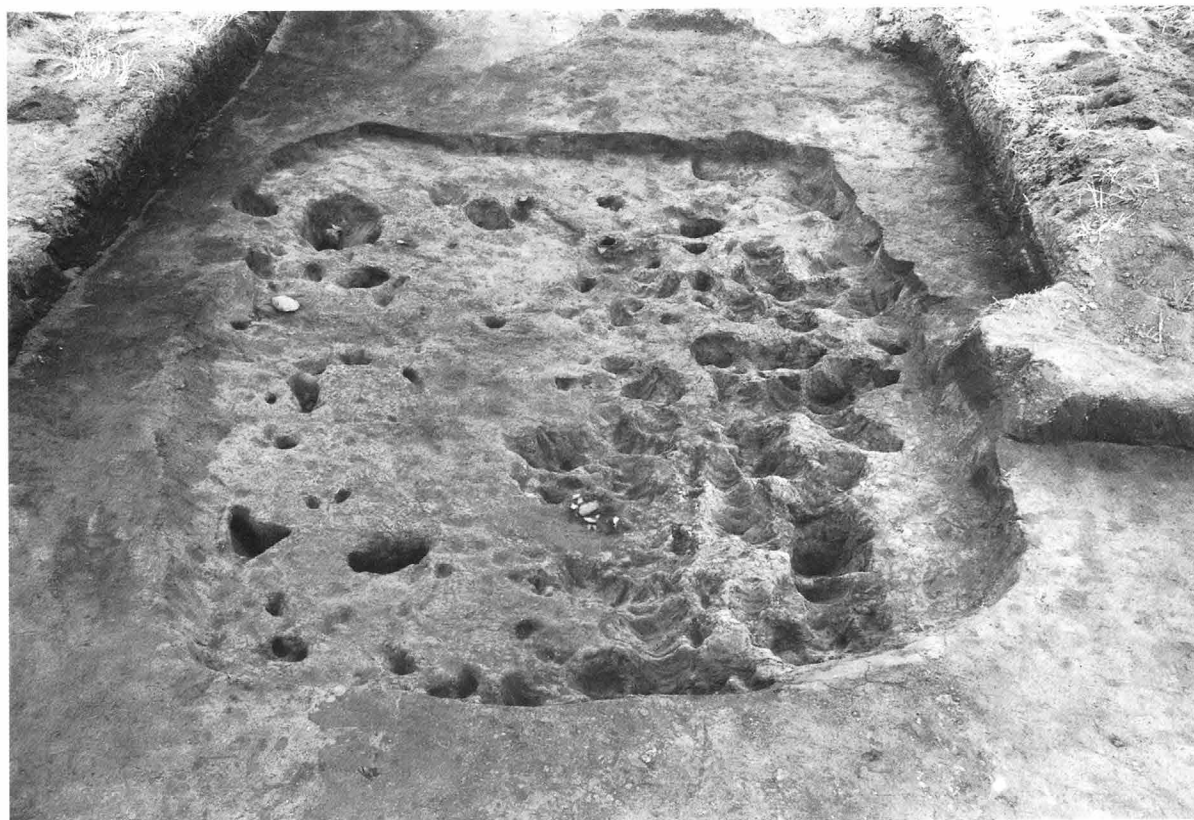
第 9 号住居址 (2)



第10号住居址



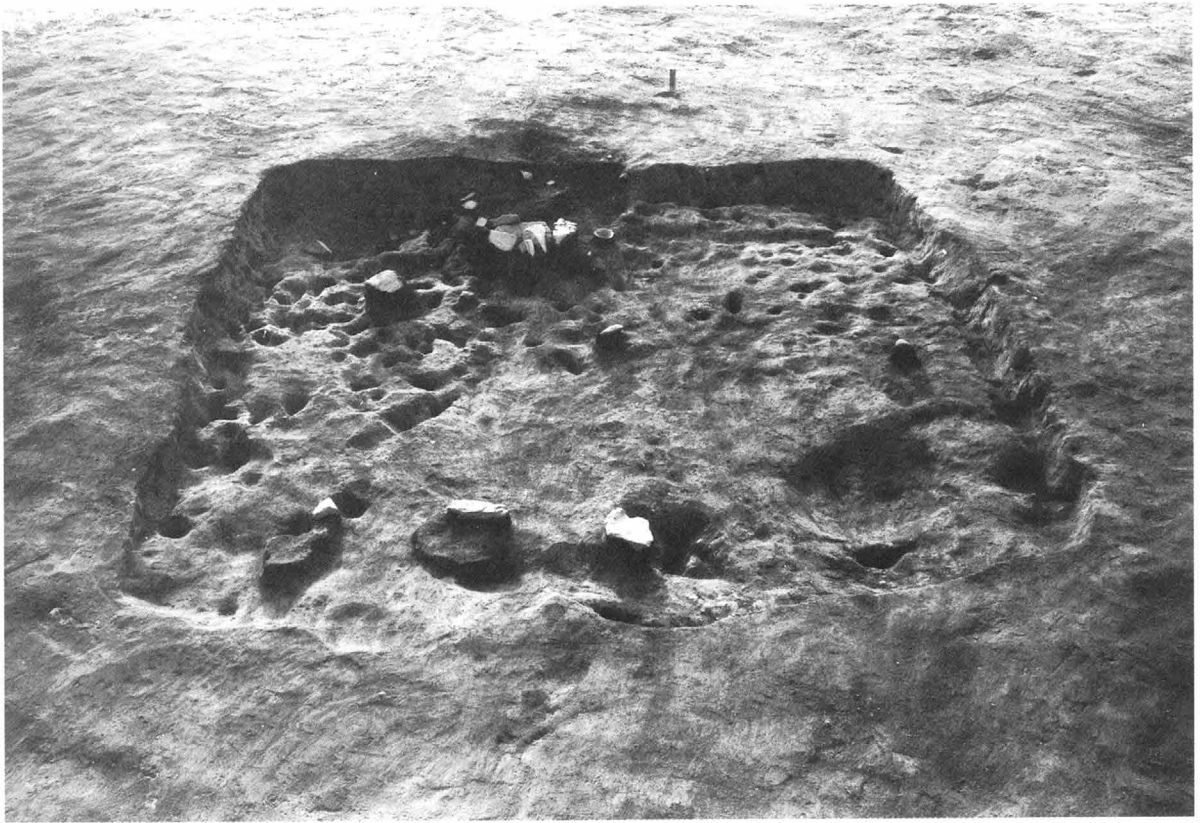
第11号住居址



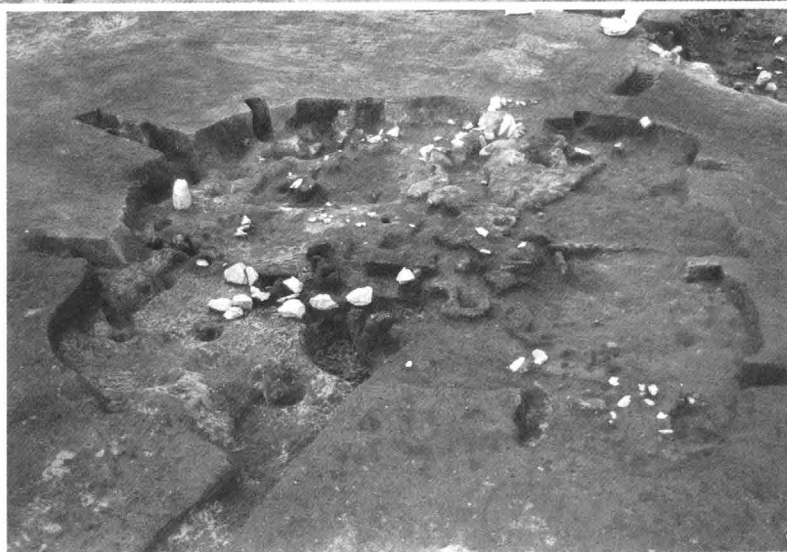
第12号住居址



第13号住居址



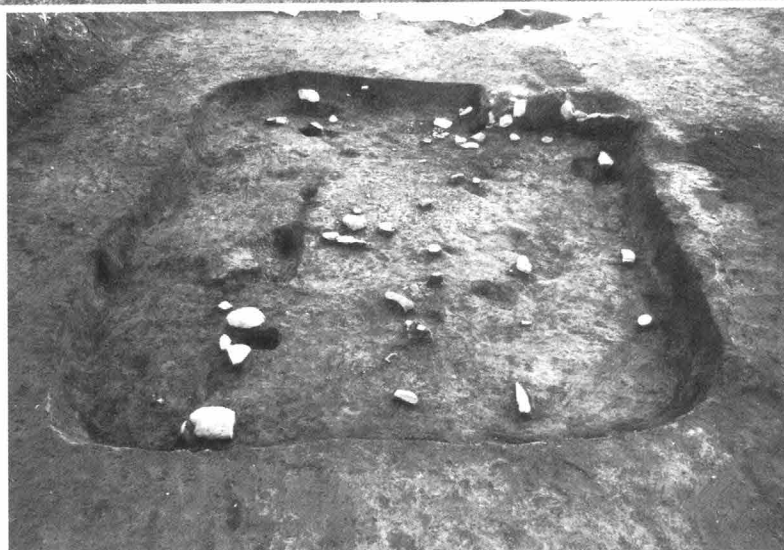
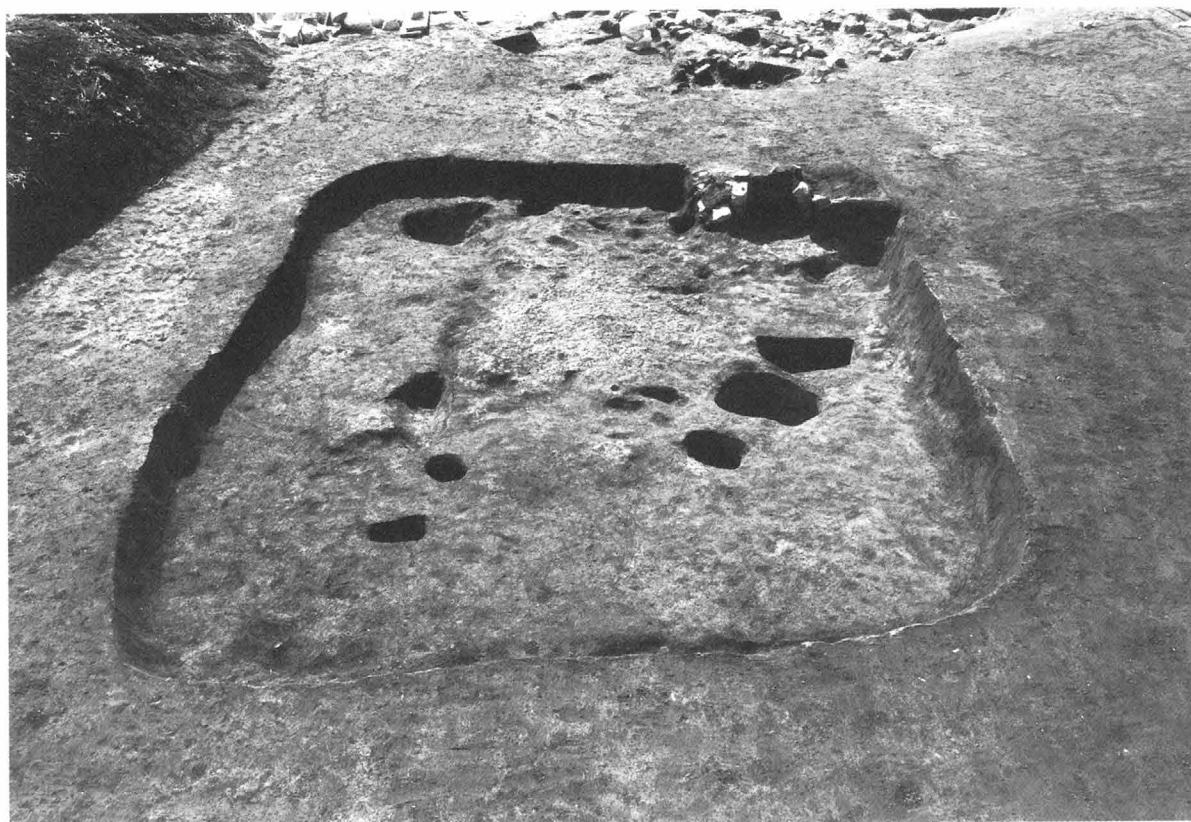
第14号住居址



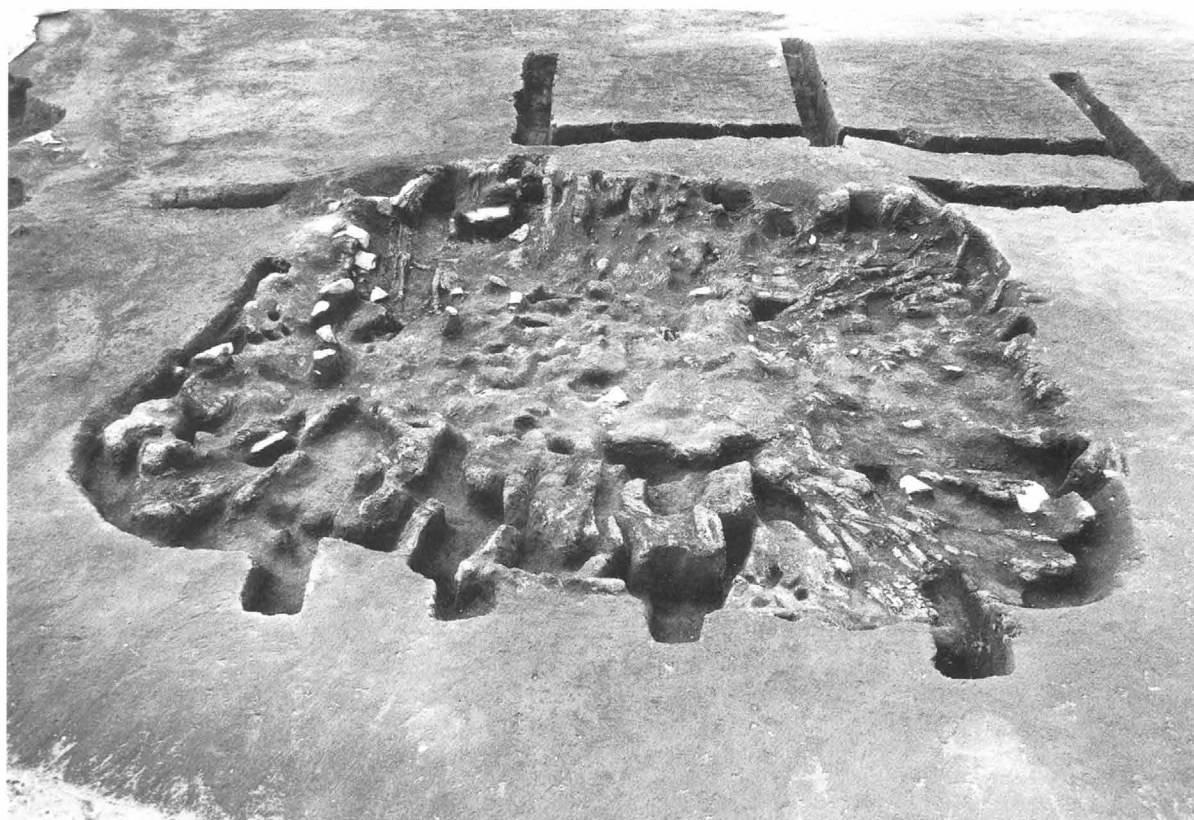
第15号住居址



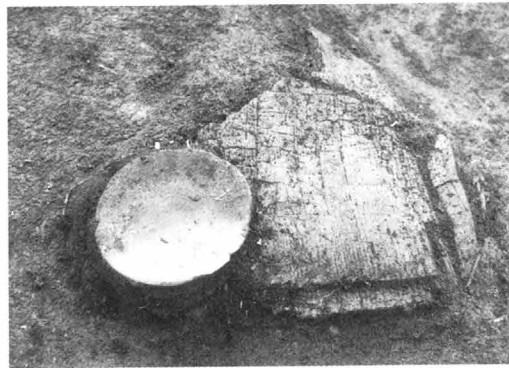
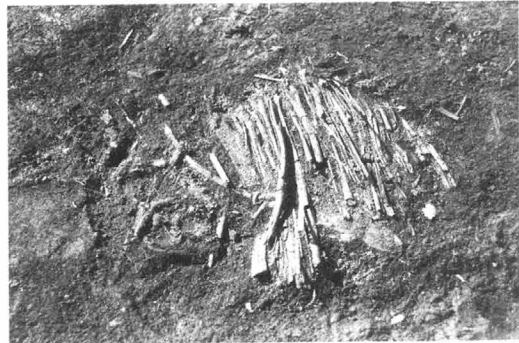
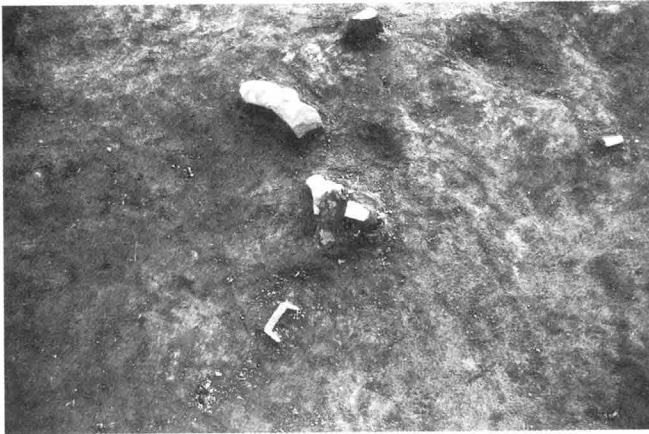
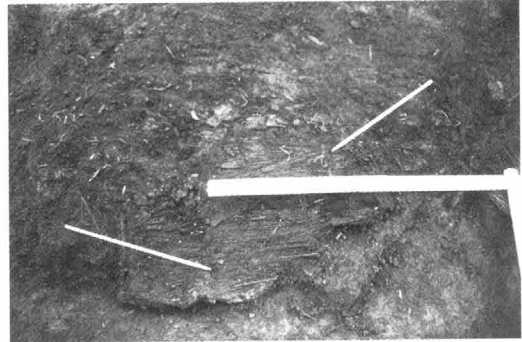
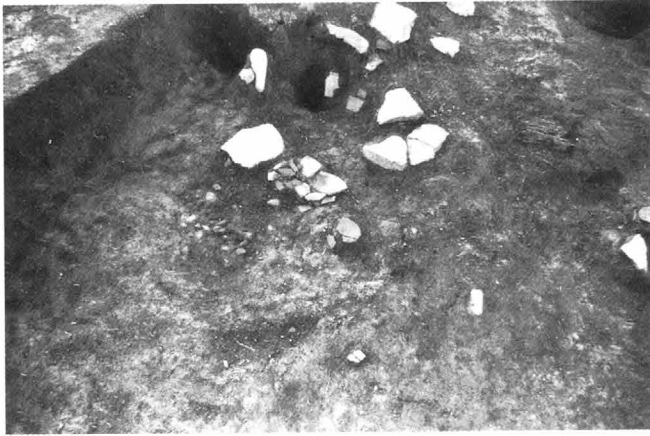
第16号住居址



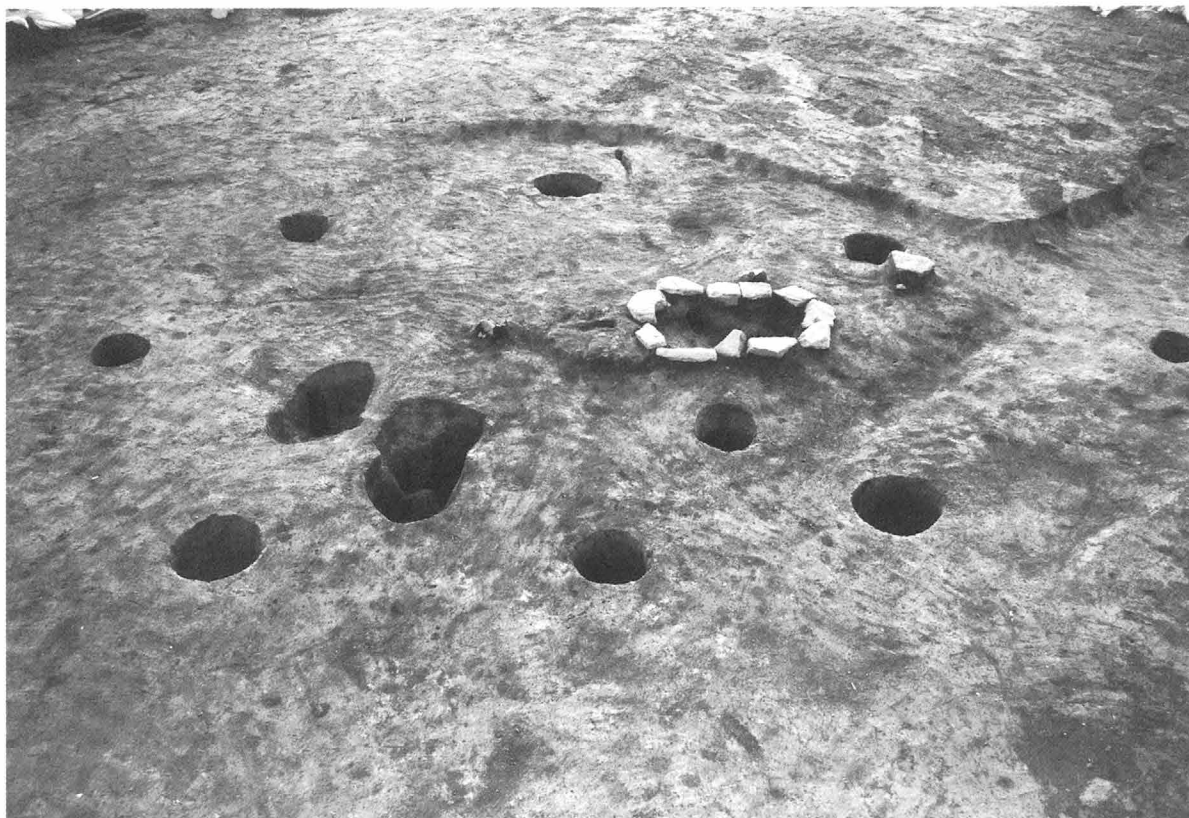
第17号住居址 (1)



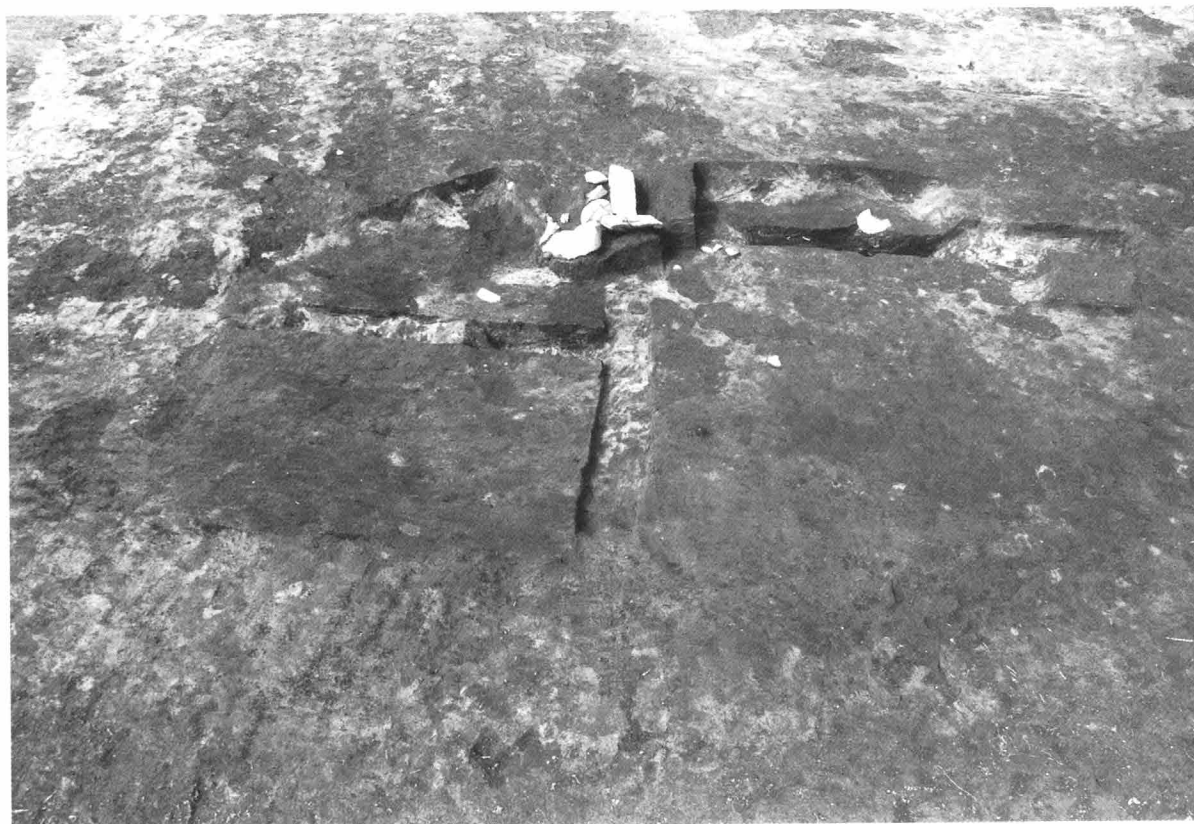
第17号住居址 (2)



第17号住居址 (3)



第18号住居址



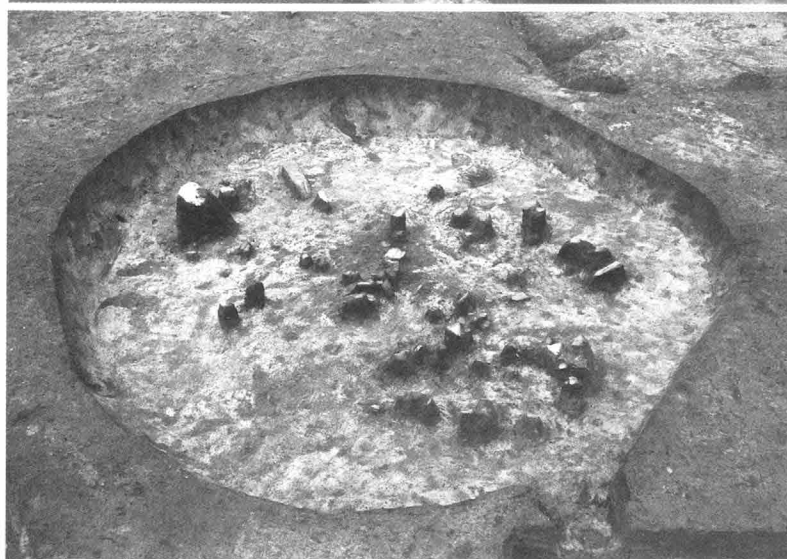
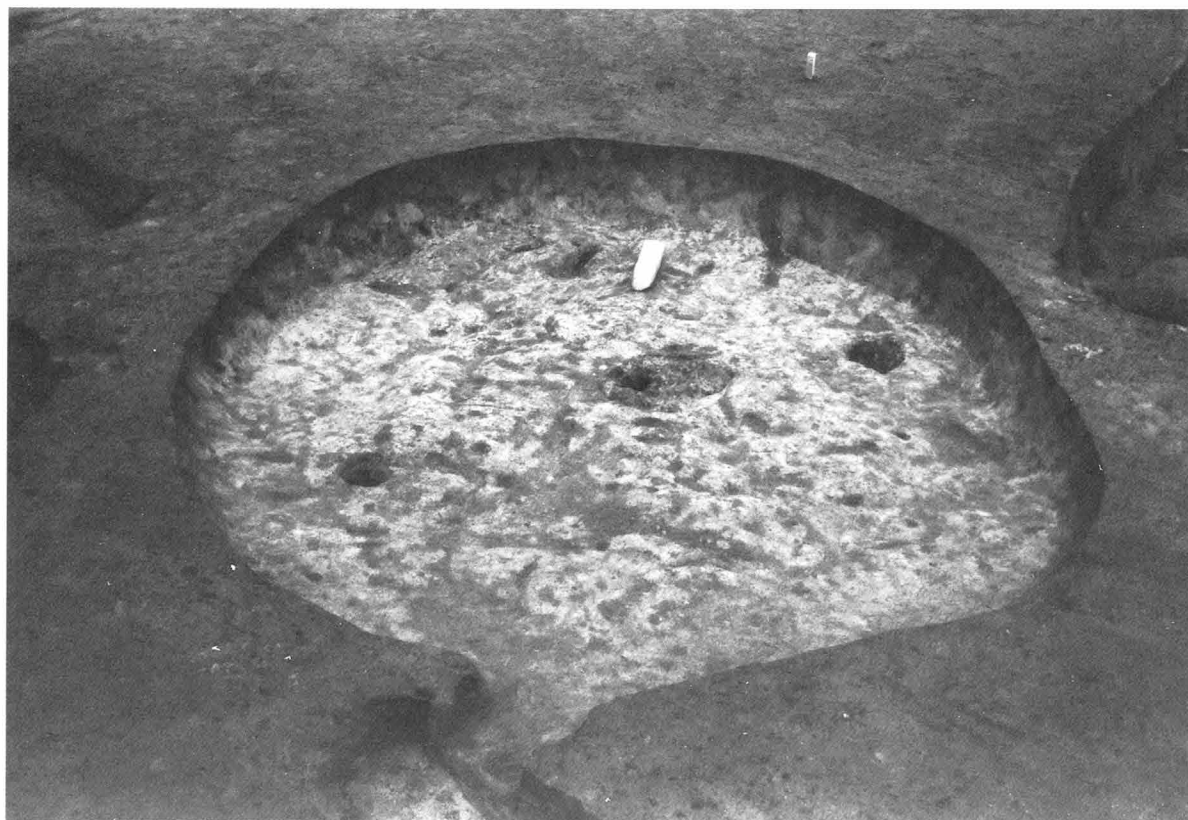
第19号住居址



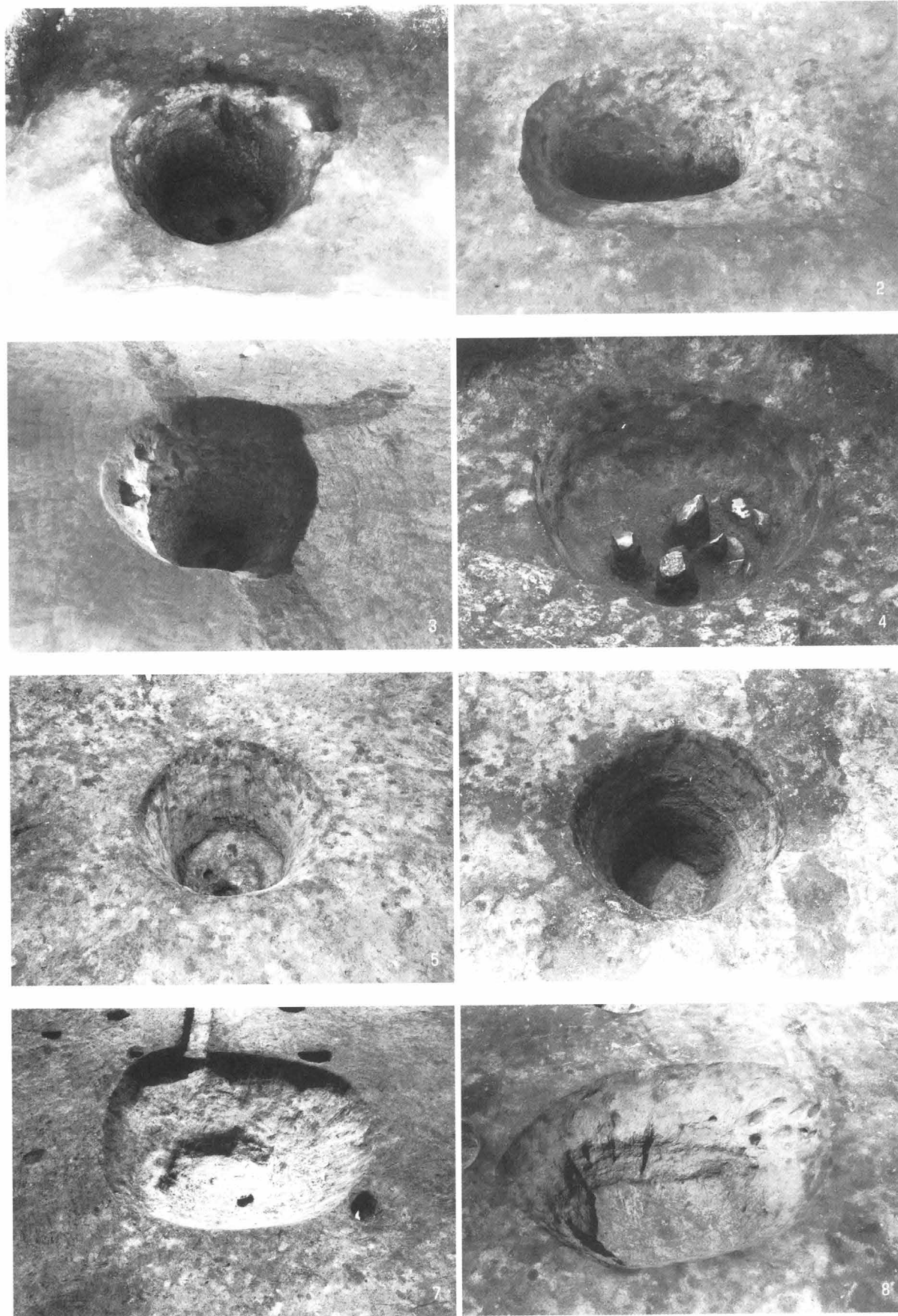
第20号住居址



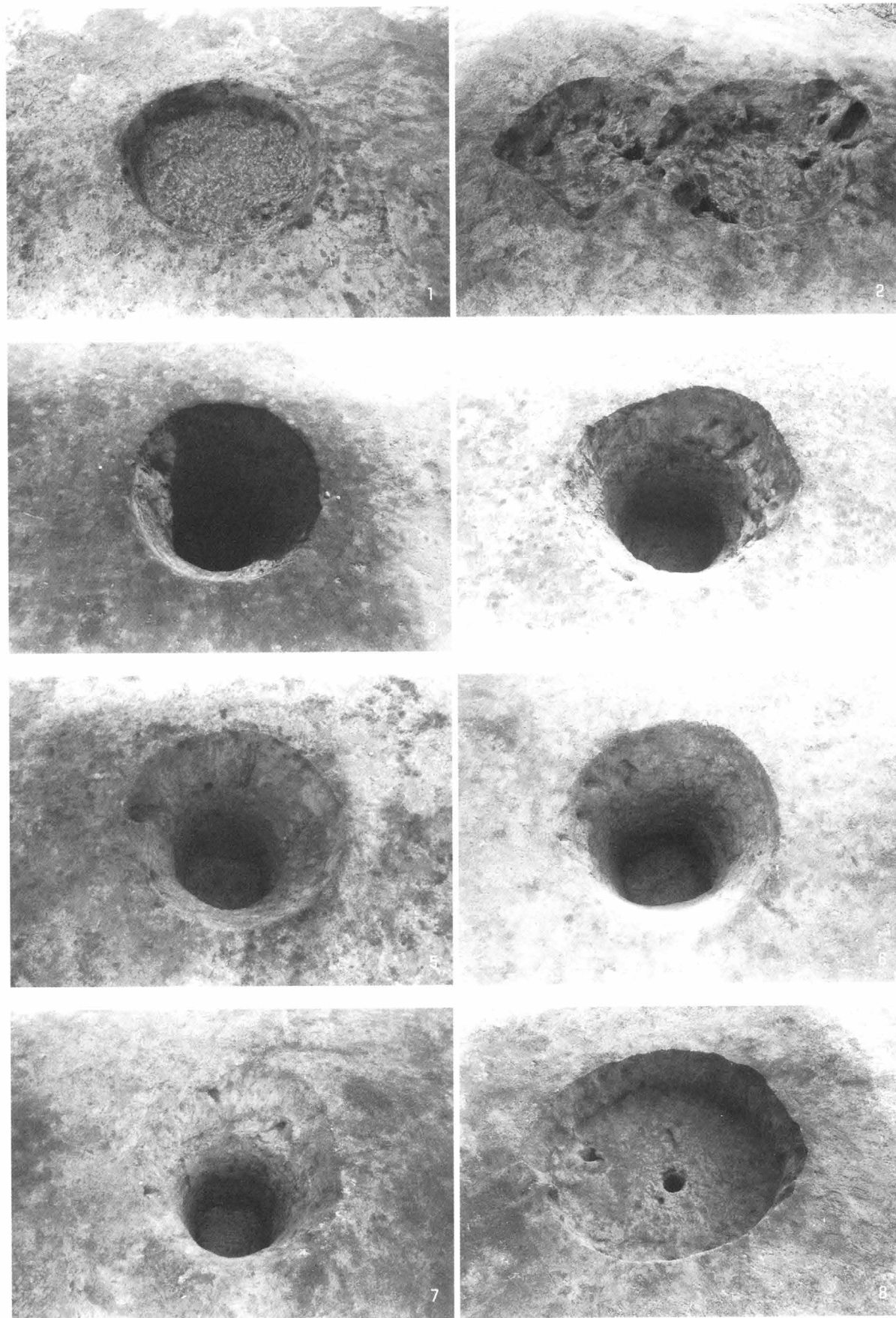
第21号住居址



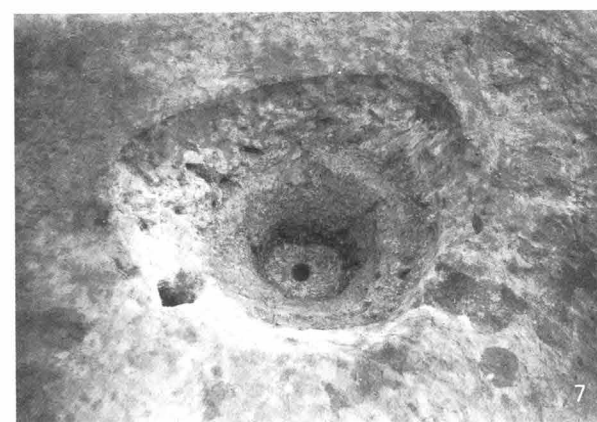
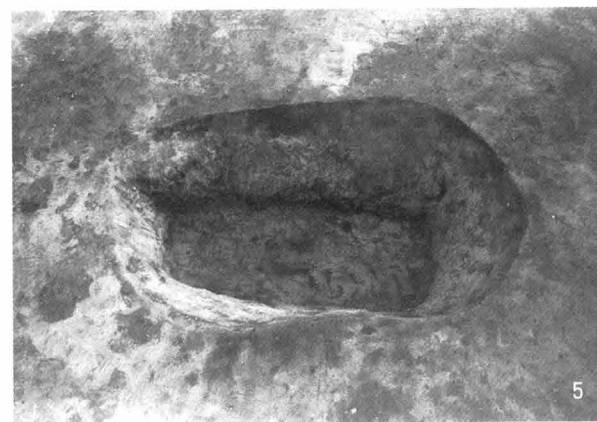
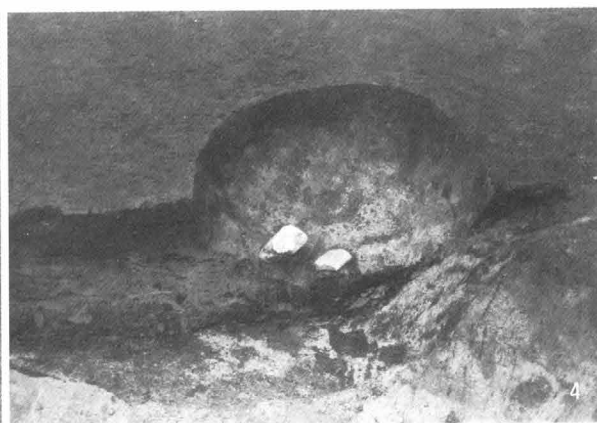
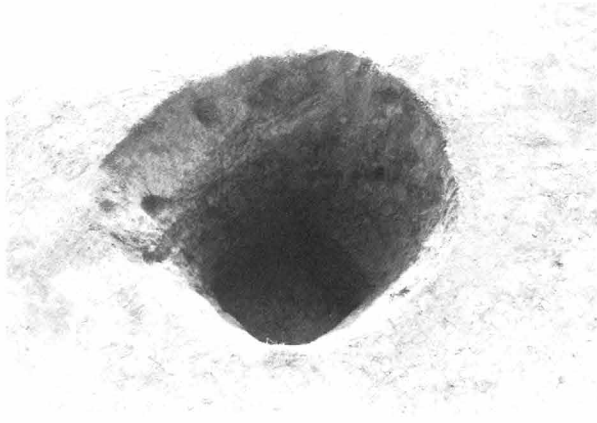
第23号住居址



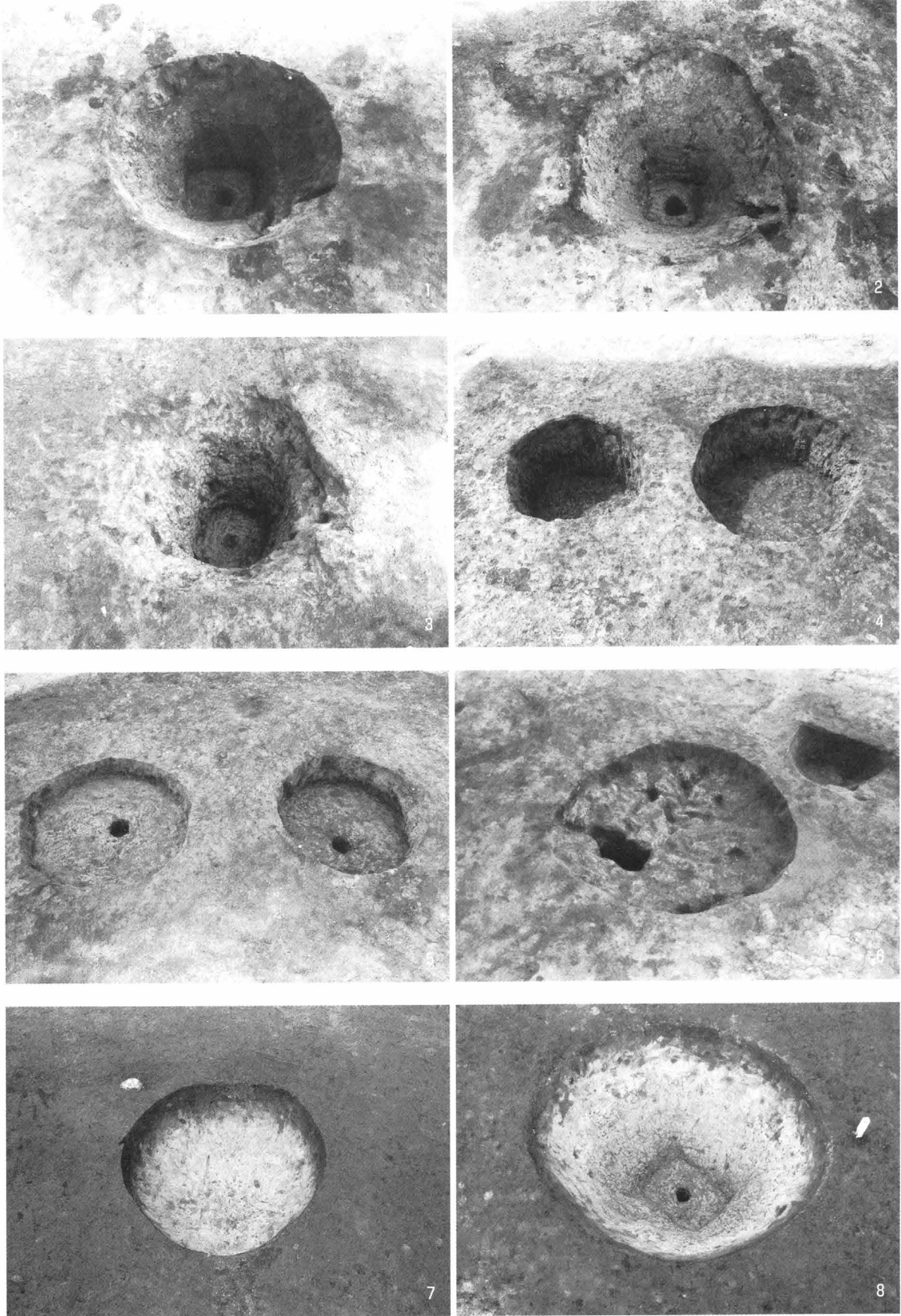
土坑 (1) (1:1土、2:2土、3:3土、4:5土、5:6土、6:7土、7:8土、8:10土)



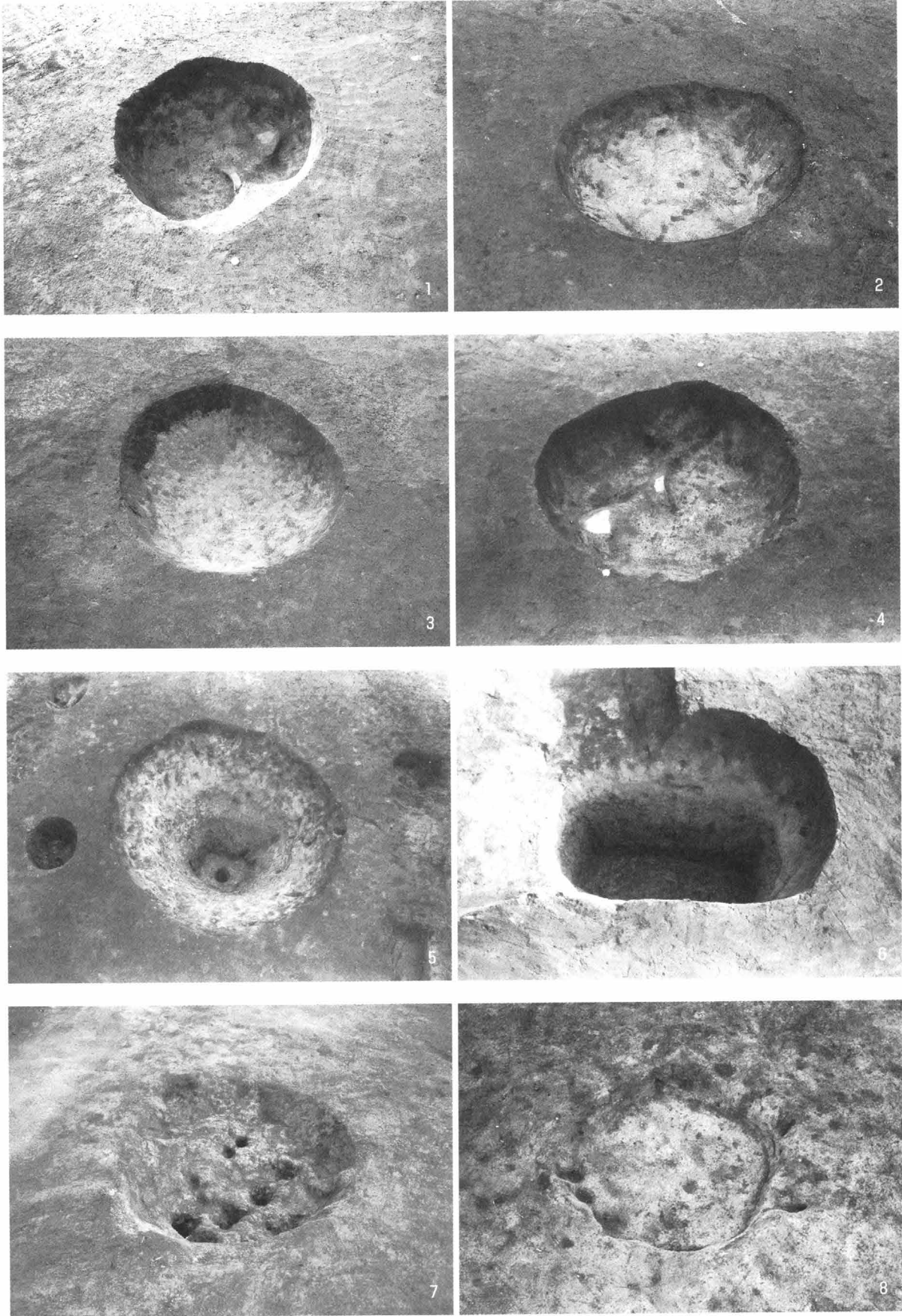
土坑 (2) (1: 11土, 2: 12·13土, 3: 14土, 4: 15土, 5: 17土, 6: 18土, 7: 19土, 8: 20土)



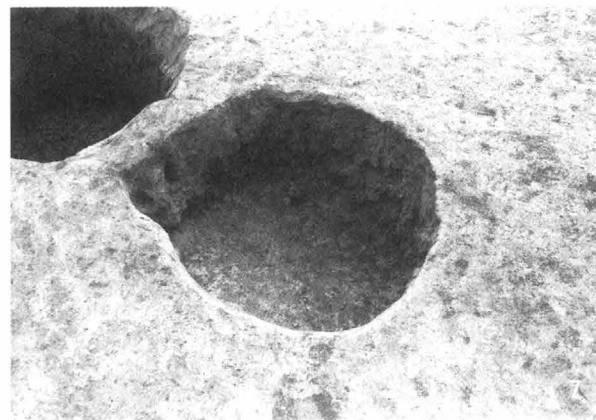
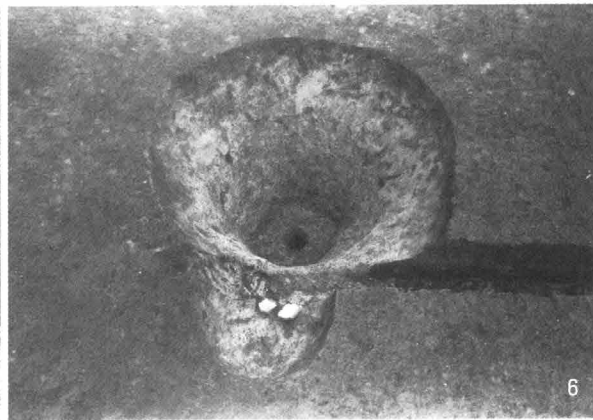
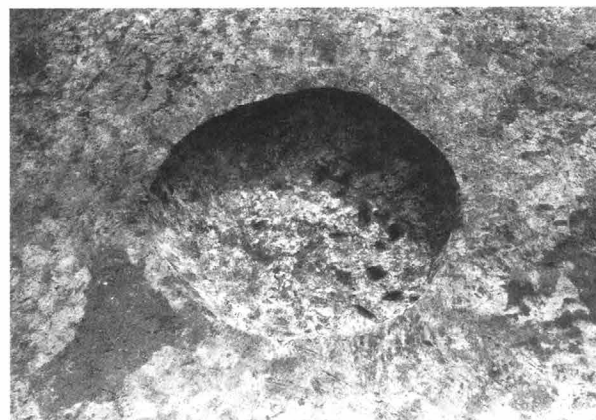
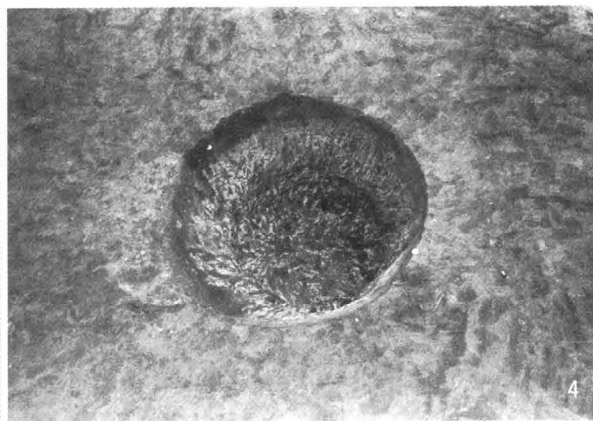
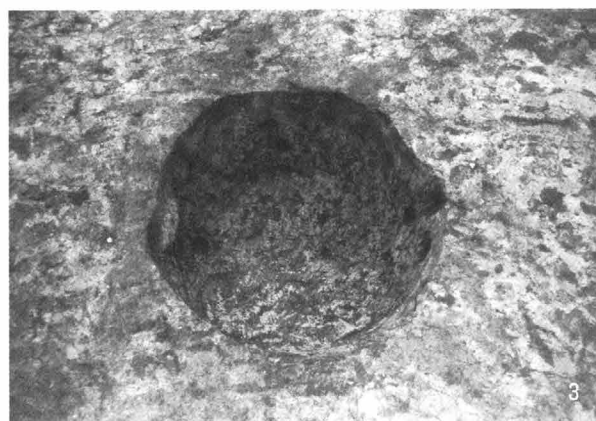
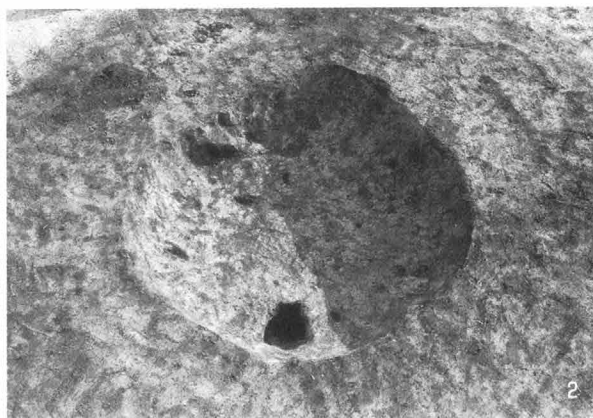
土坑 (3) (1: 21土、2: 22土、3: 23土、4: 24土、5: 25土、6: 26土、7: 27土、8: 28土)



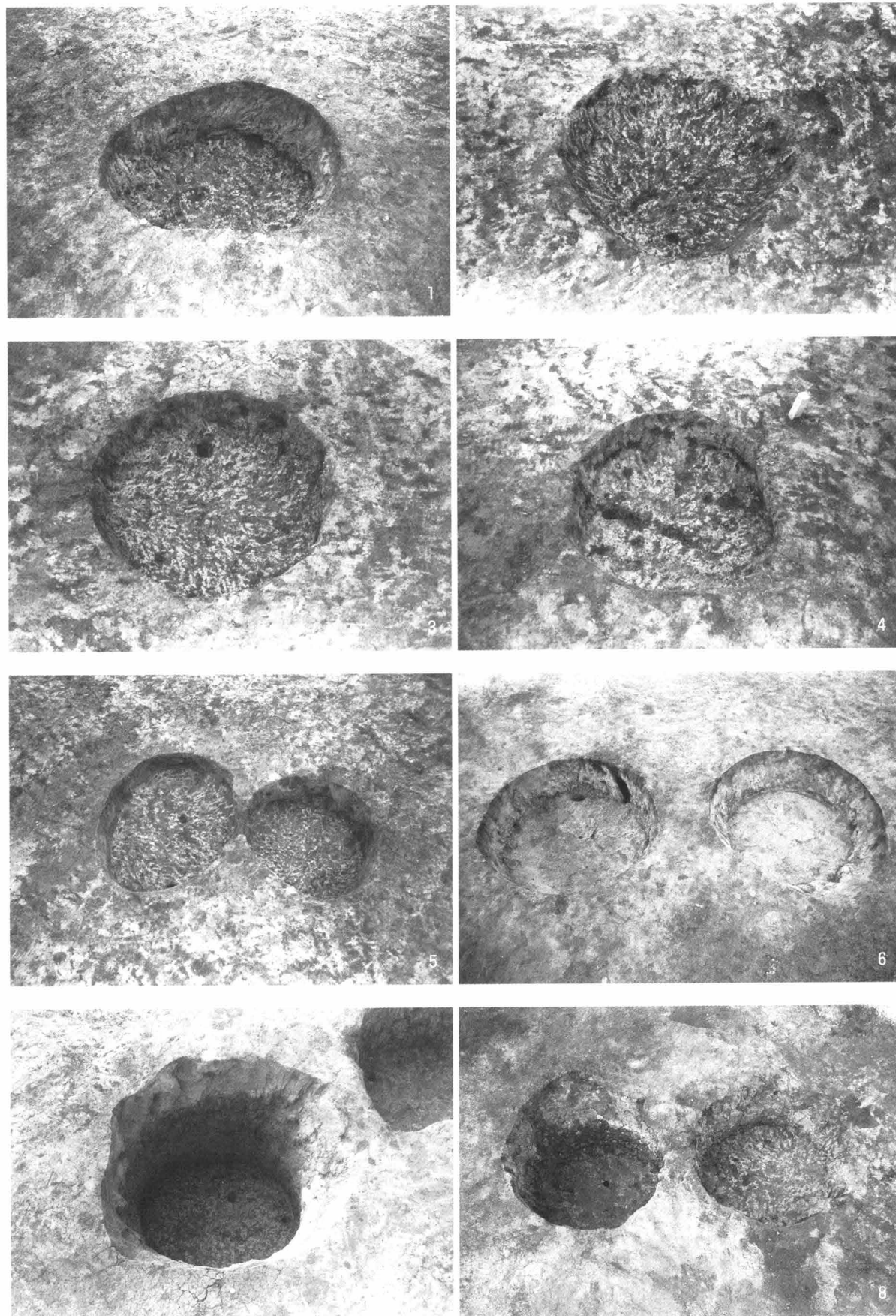
土坑 (4) (1: 29土、2: 30土、3: 31土、4: 32·33土、5: 34·85土、6: 35土、7: 36土、8: 37土)



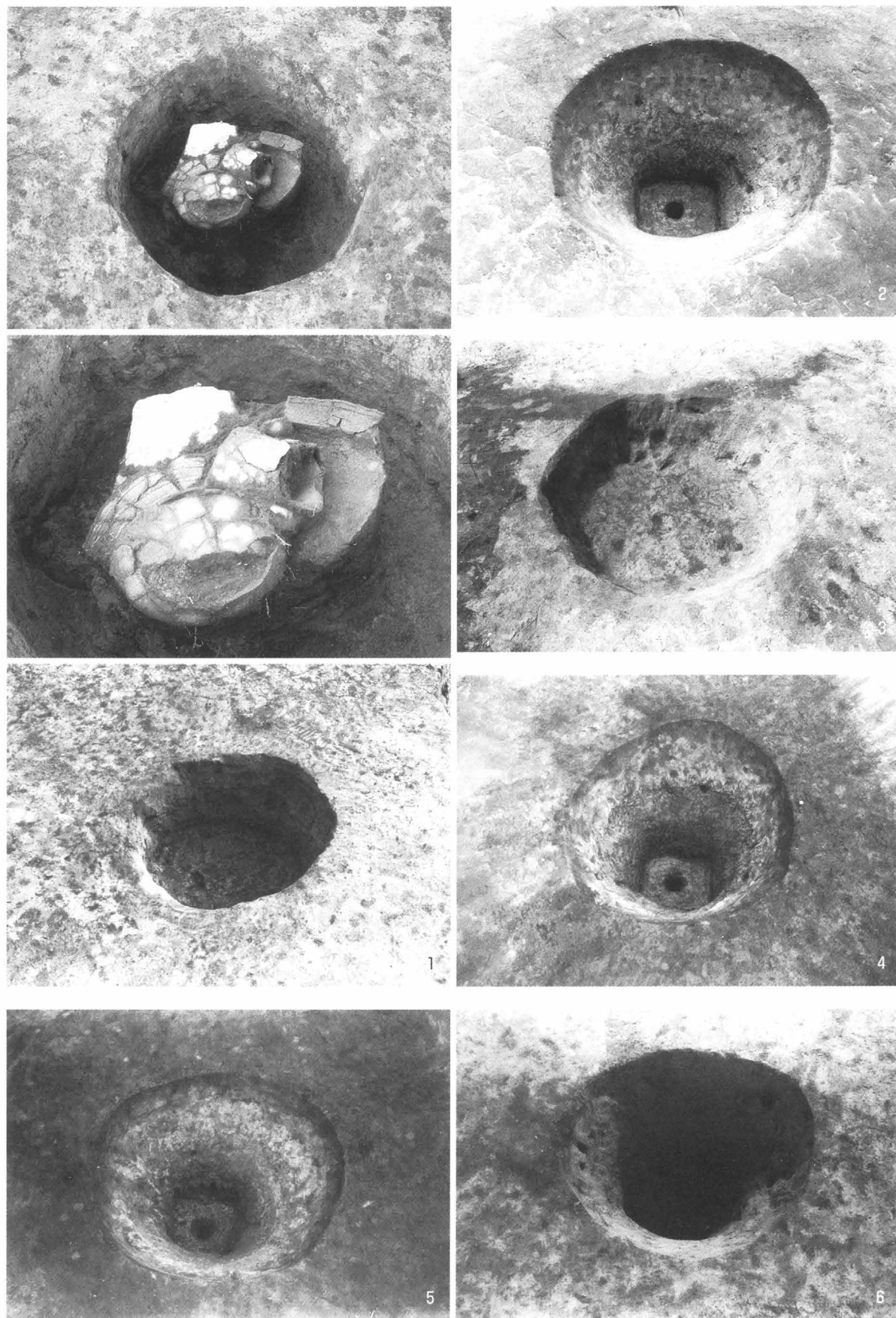
土坑 (5) (1: 38土、2: 39土、3: 40土、4: 41土、5: 42土、6: 43土、7: 44土、8: 45土)



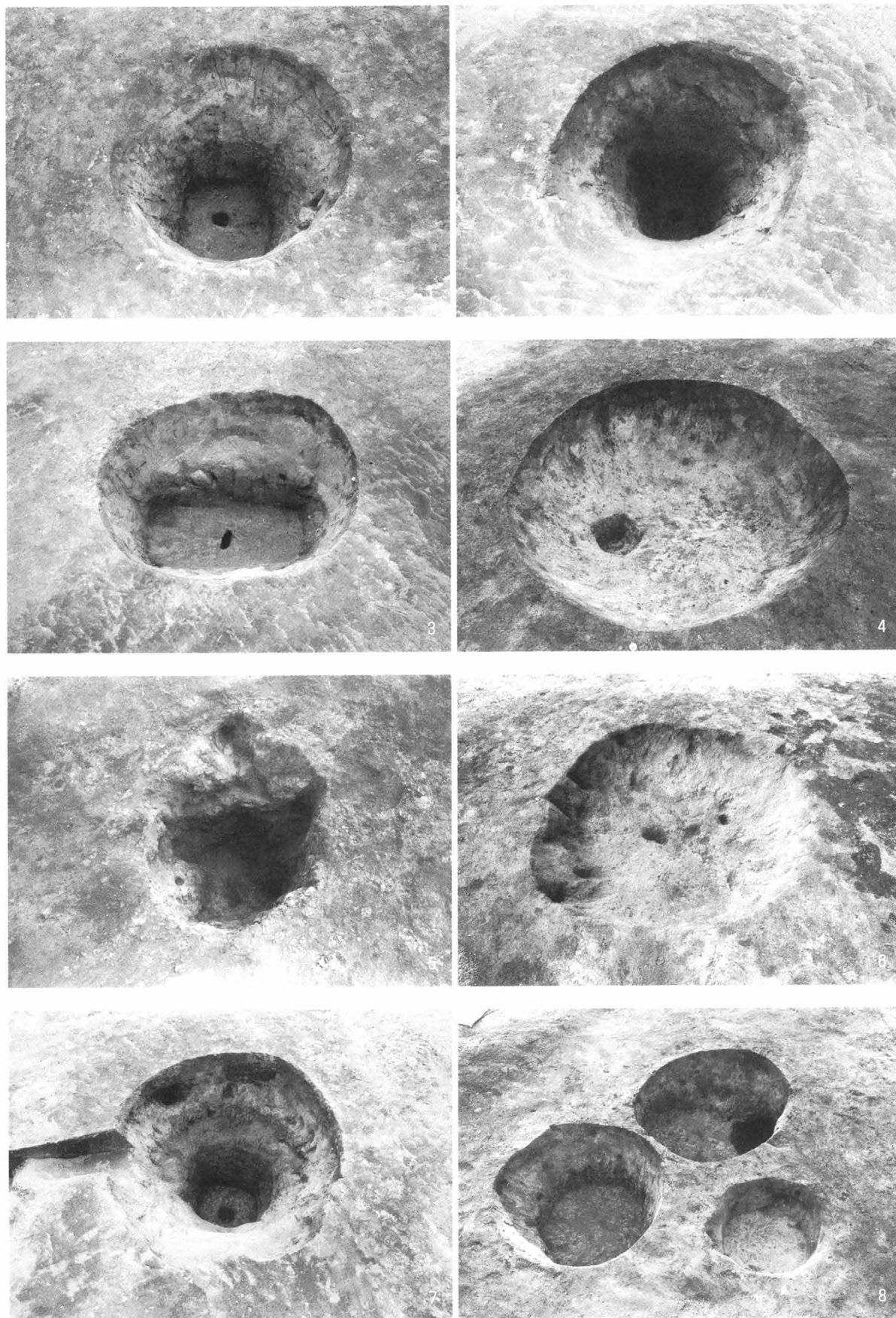
土坑 (6) (1: 46土、2: 47土、3: 48土、4: 49土、5: 50土、6: 51土、7: 54土、8: 55·56·57土)



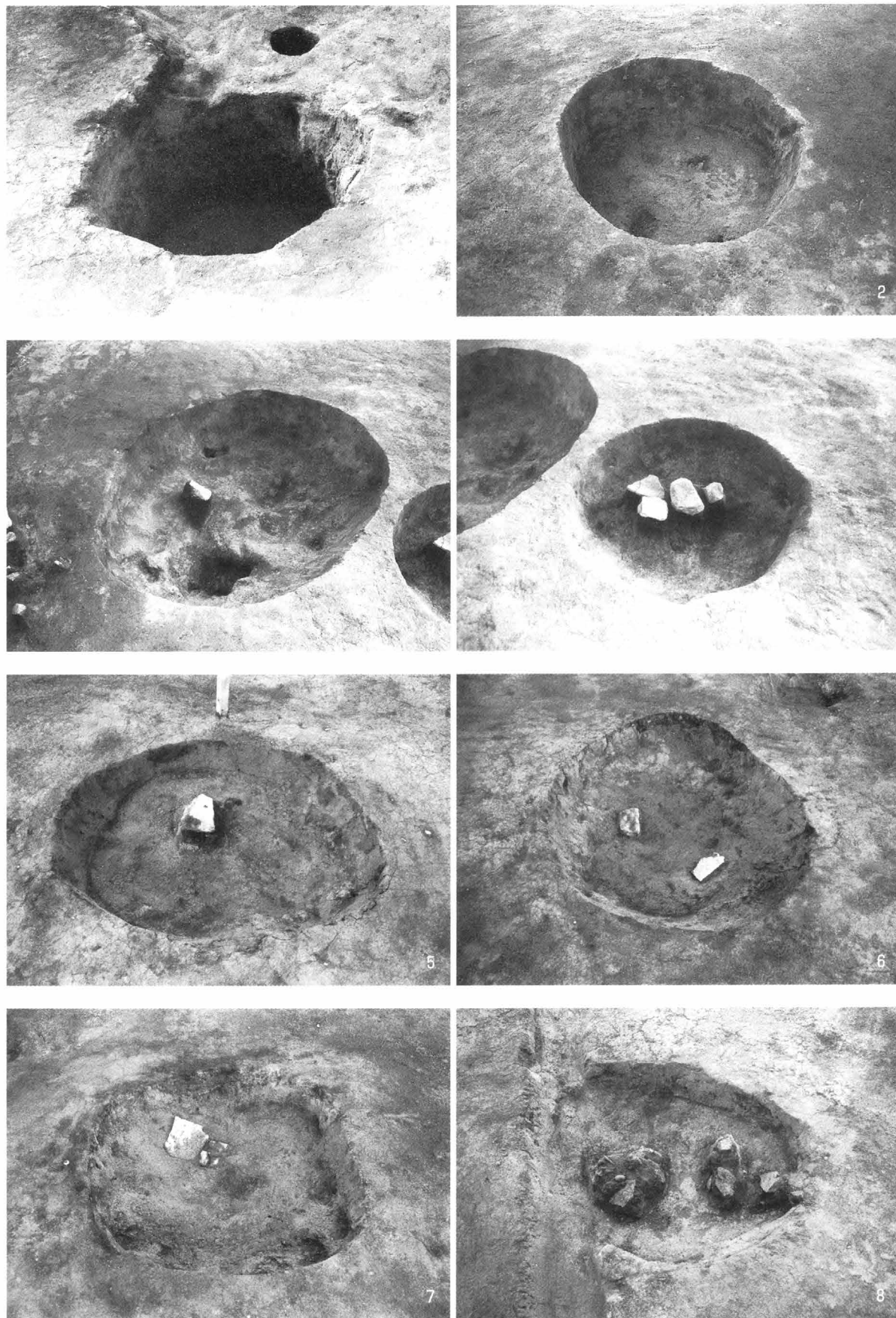
土坑 (7) (1: 58土、2: 59土、3: 60土、4: 61土、5: 62·65土、6: 63·64土、7: 66土、8: 68·69土)



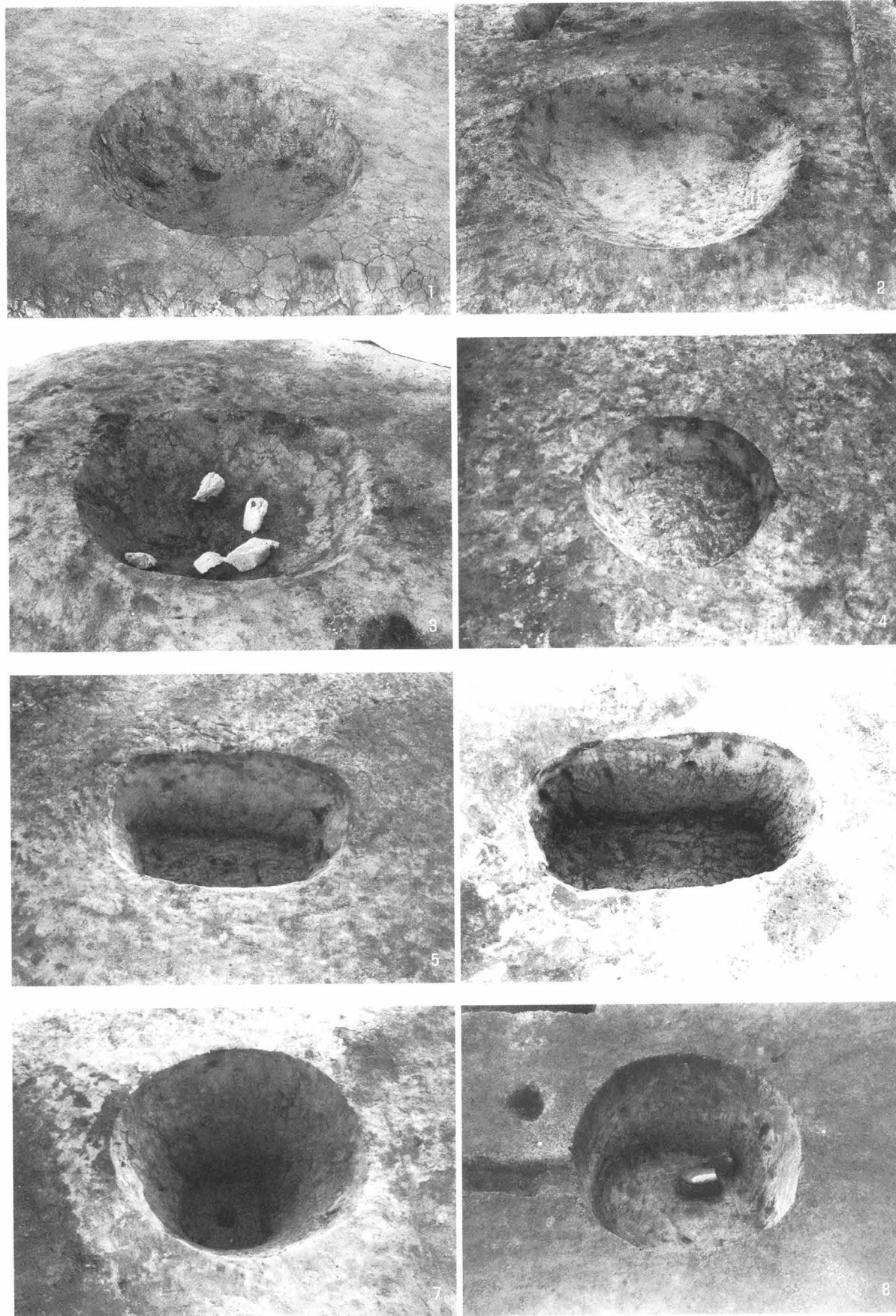
土坑 (8) (1: 67土、2: 70土、3: 71土、4: 72土、5: 74土、6: 75土)



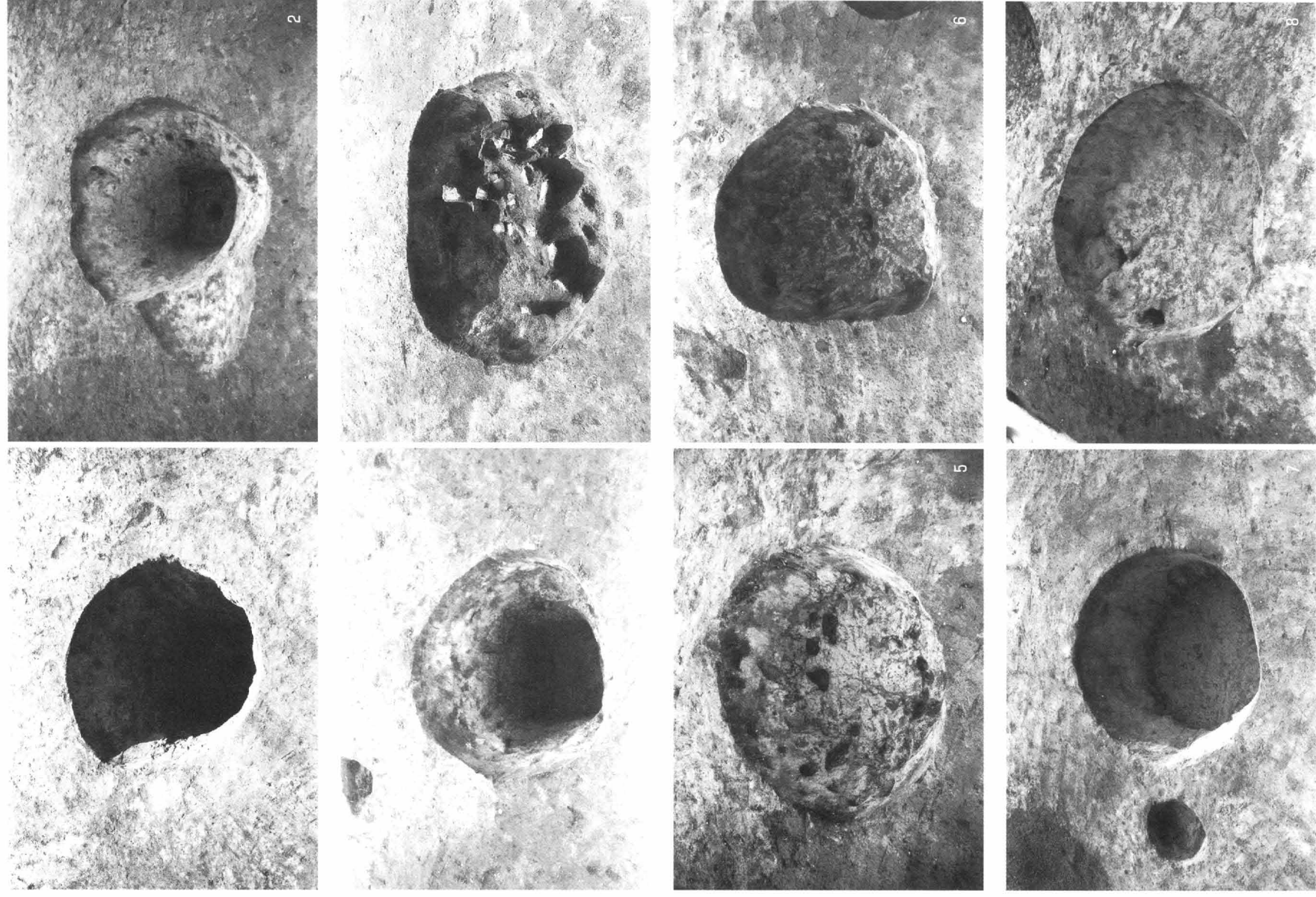
土坑 (9) (1: 76土、2: 77土、3: 78土、4: 79土、5: 80土、6: 81土、7: 82土、8: 86·87·88土)



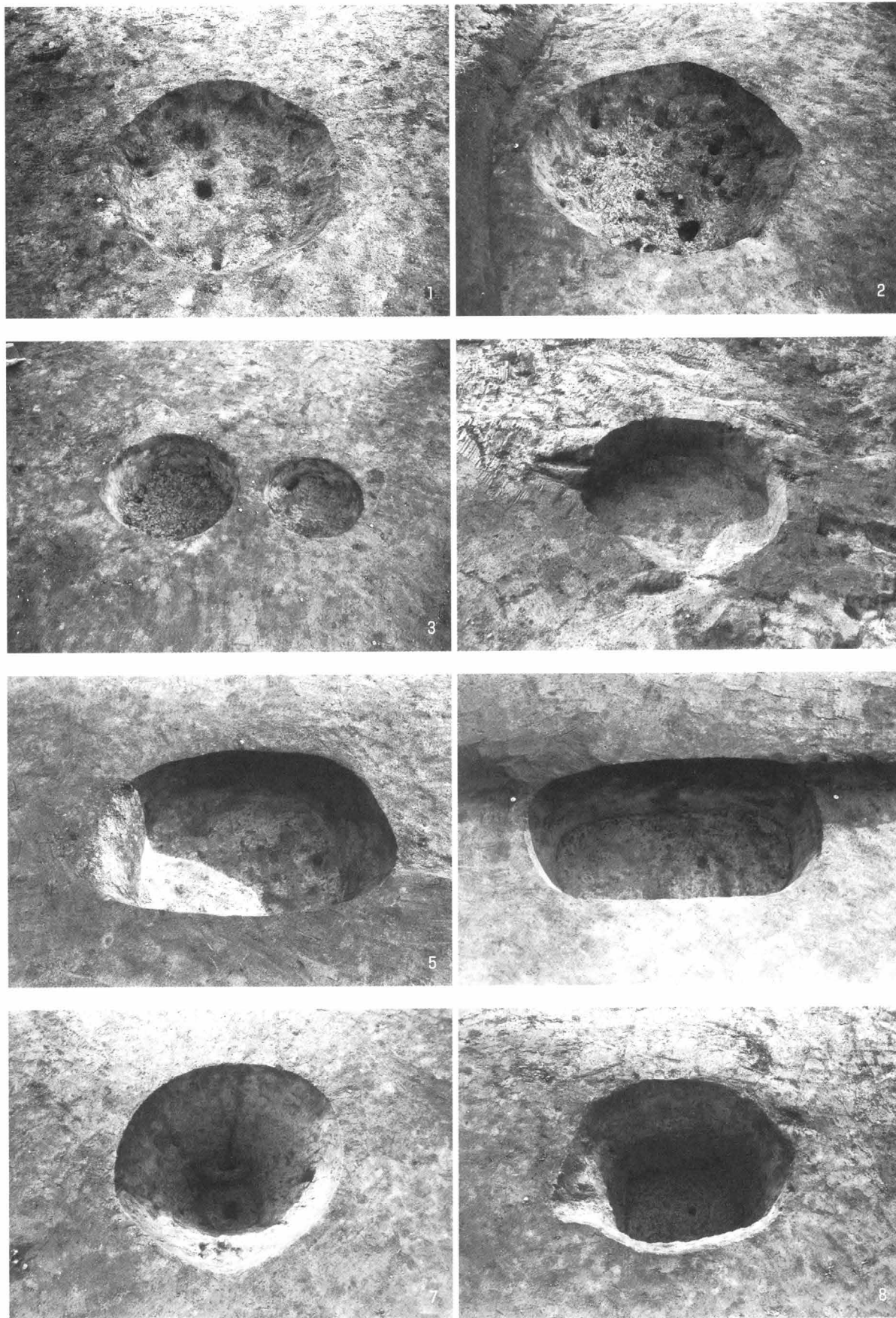
土坑 (10) (1: 89土、2: 91土、3: 92土、4: 93土、5: 94土、6: 95土、7: 96土、8: 97土)



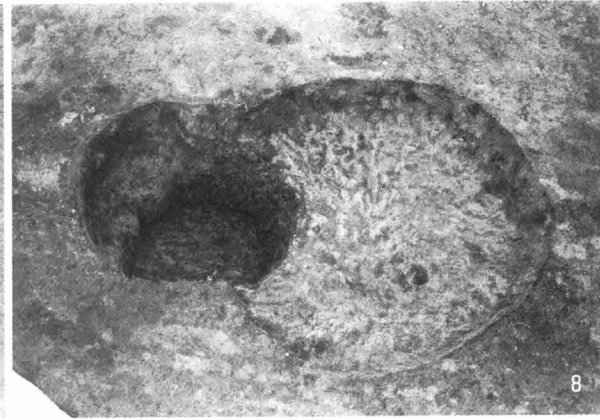
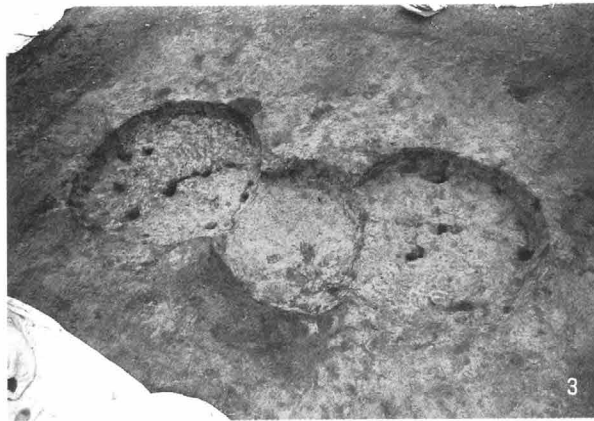
土坑 (11) (1: 98土、2: 99土、3: 100土、4: 101土、5: 103土、6: 104土、7: 105土、8: 106土)



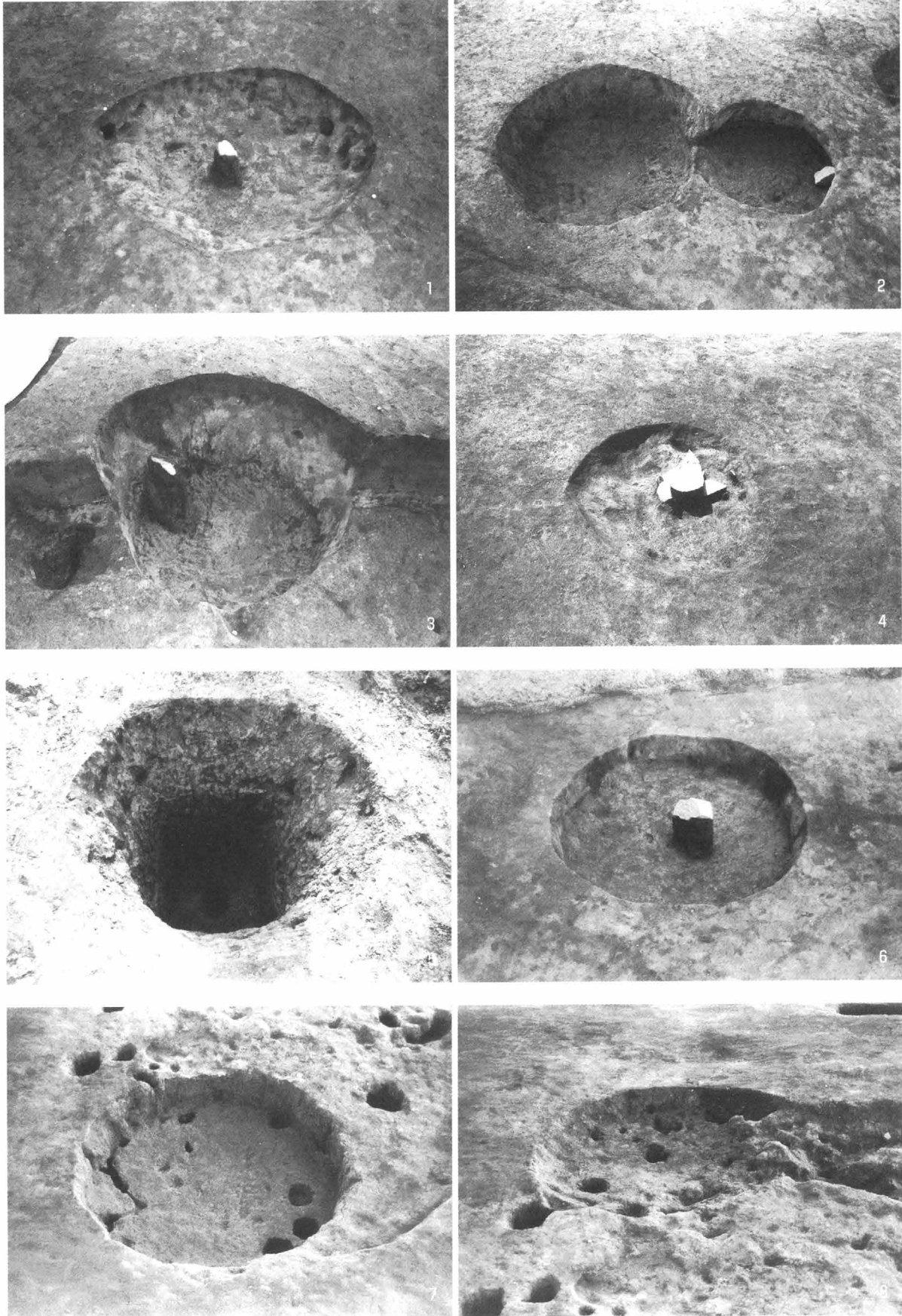
土坑 (12) (1: 108土, 2: 109土, 3: 110土, 4: 112土, 5: 111土, 6: 113土, 7: 114土),



土坑 (13) (1: 115土, 2: 116土, 3: 117·118土, 4: 120土, 5: 122土, 6: 123土, 7: 124土, 8: 125土)



土坑 (14) (1: 126土, 2: 127土, 3: 128·129·137土, 4: 130土, 5: 131土, 6: 132土, 7: 133土, 8: 134·135土)



土坑 (15) (1: 136土, 2: 138·130土, 3: 139土, 4: 142土, 5: 143土, 6: 144土, 7: 145土, 8: 146土)



第 1 号集石



第 2 号集石



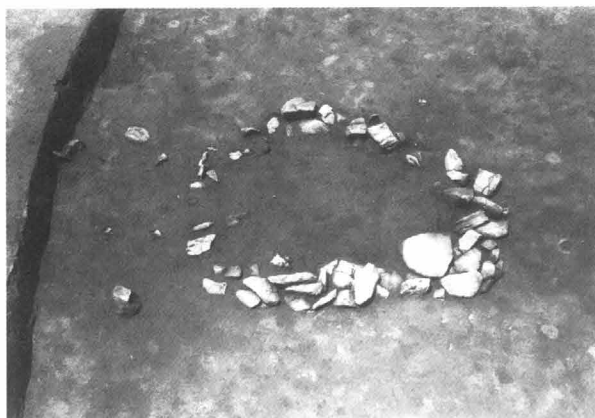
第 5 号集石



第 3 号集石



第 8 号集石



第 6 号 集 石



第 7 号 集 石



第 11 号 集 石



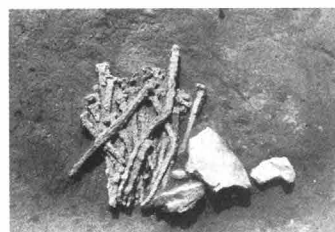
第 1 号掘立柱建物址



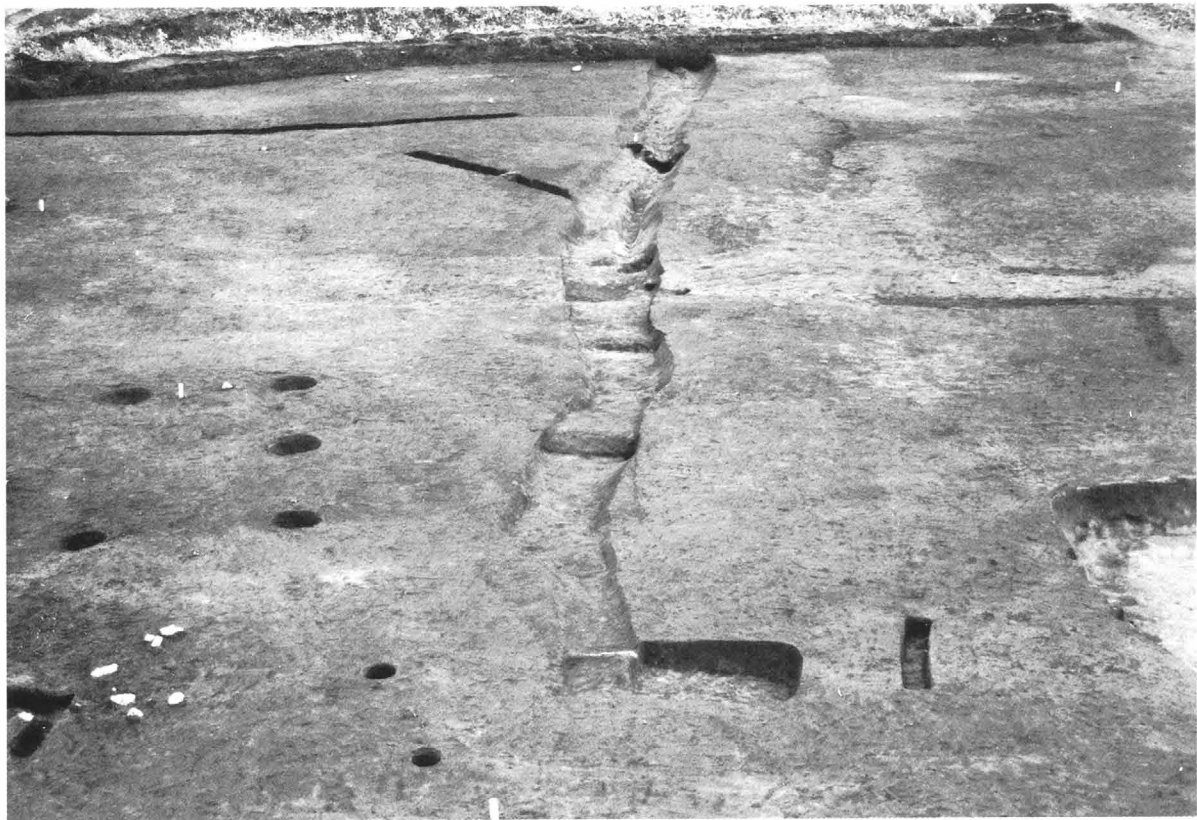
第 4 号掘立柱建物址



第 6 号掘立柱建物址



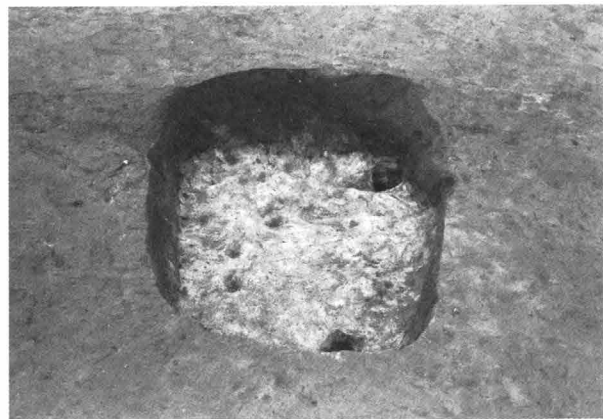
不 明 遺 構



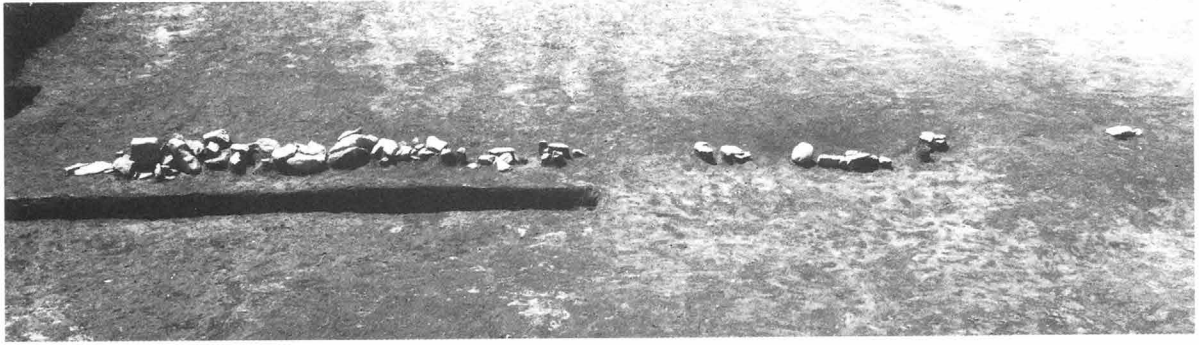
第1号溝址および第1号竪穴建物址



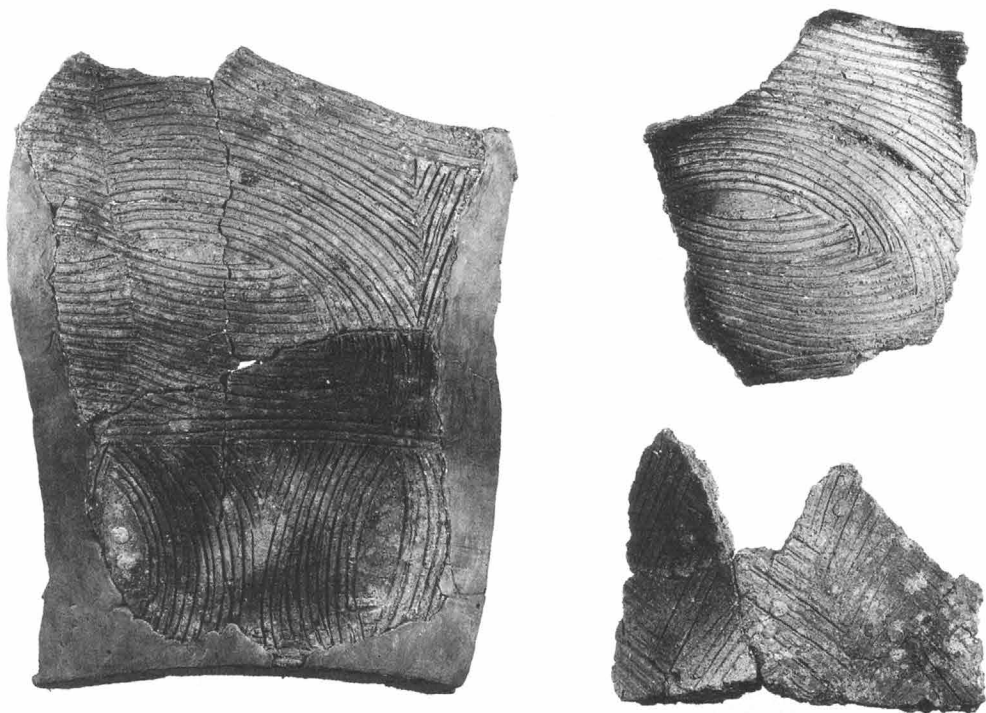
第5号溝址



第2号竪穴建物址



石 列



1



2



3



4

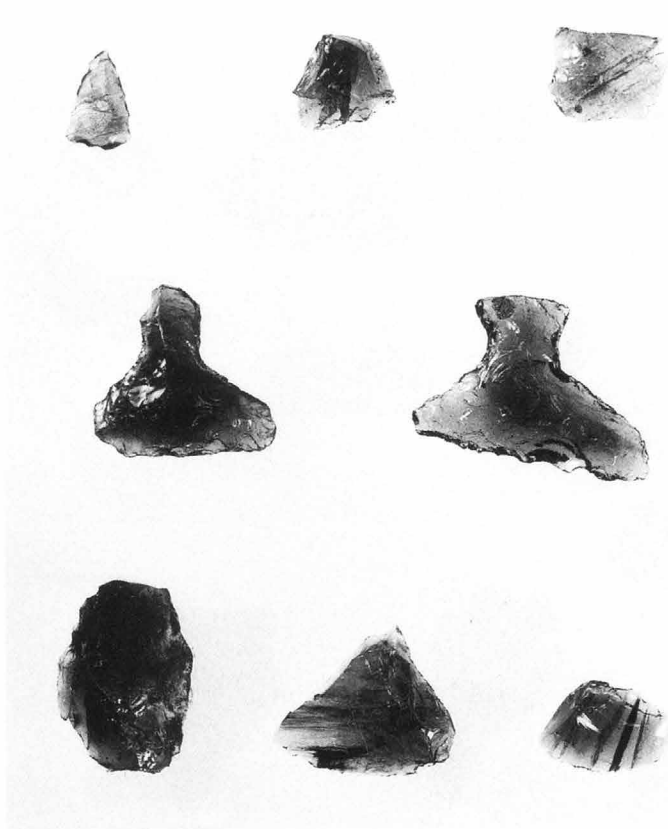
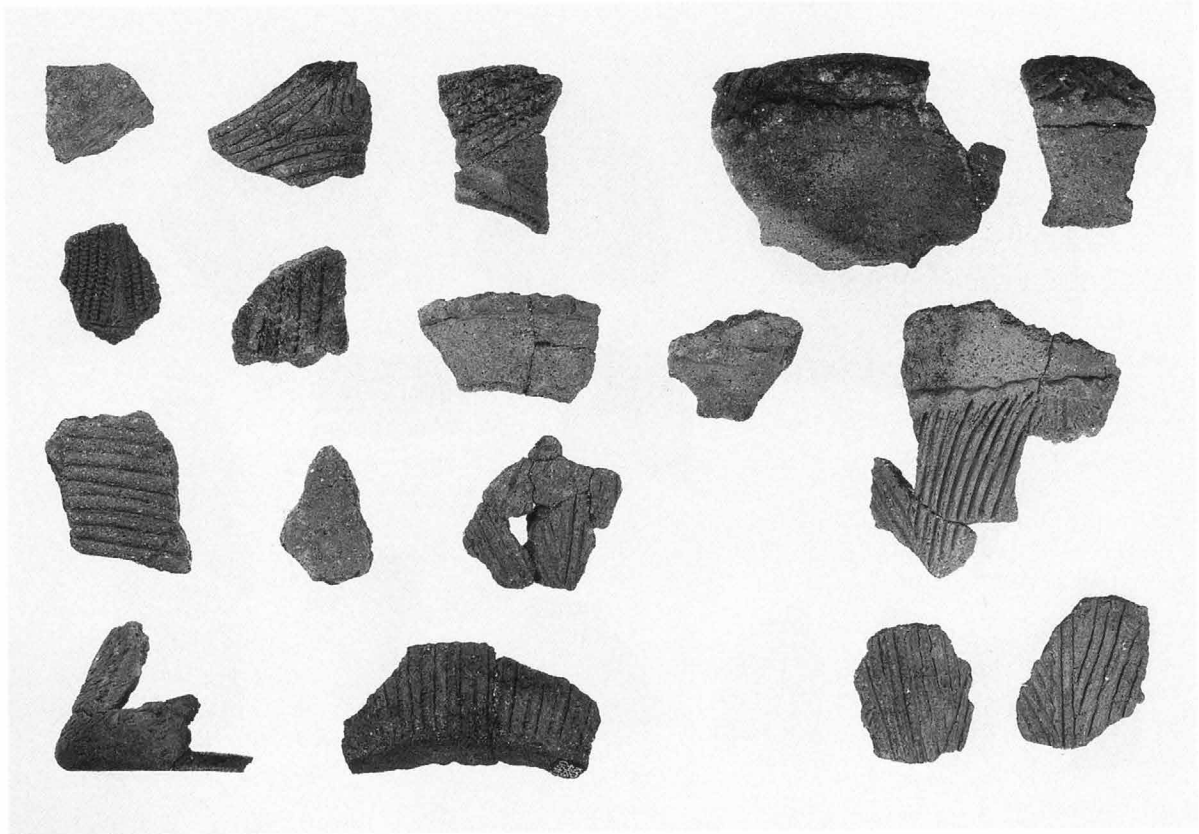


5

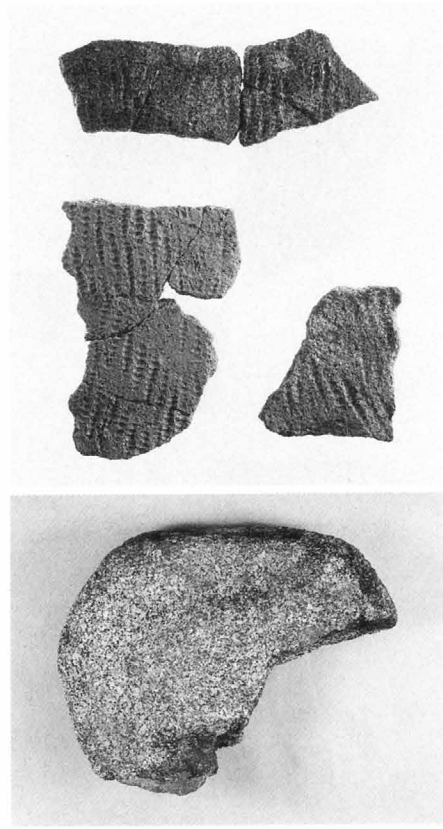


6

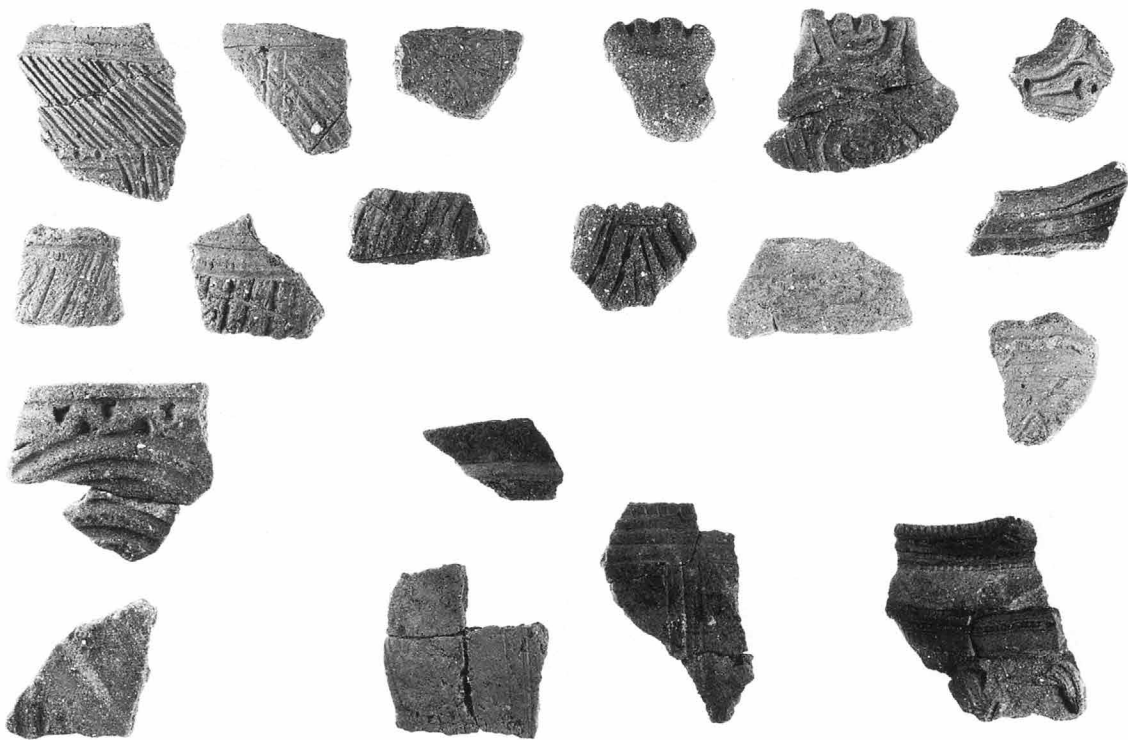
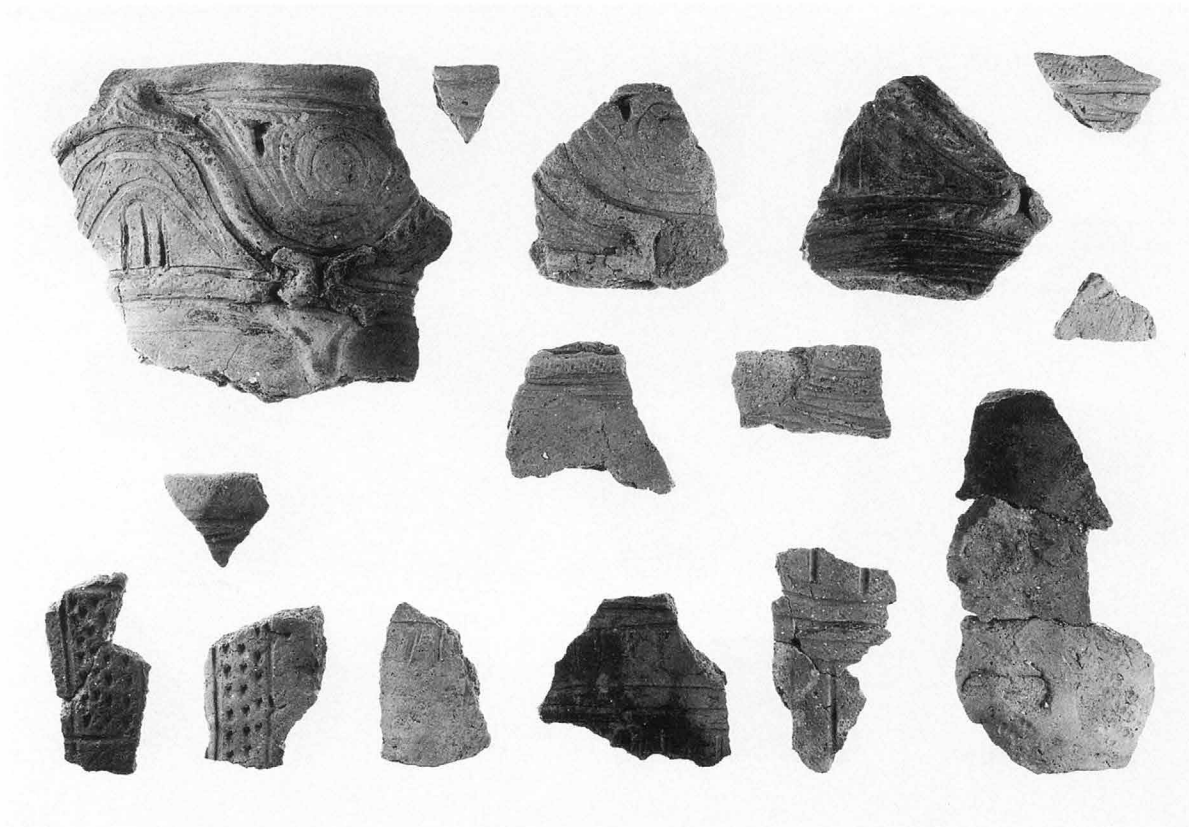
第11、13、16、18号住居址 (1:1住、2~4:16住、5:18住、6:13住)



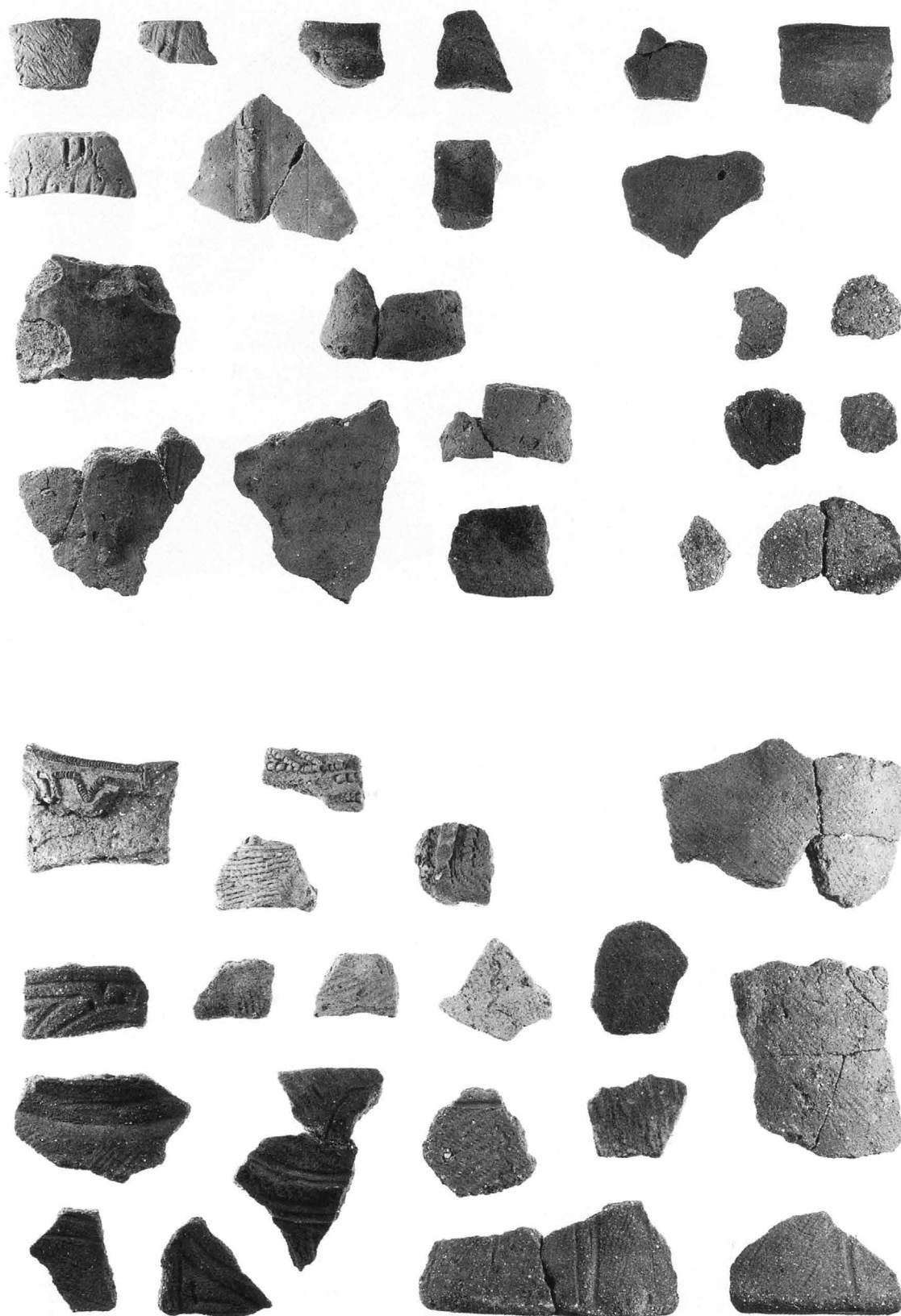
第16号住居址



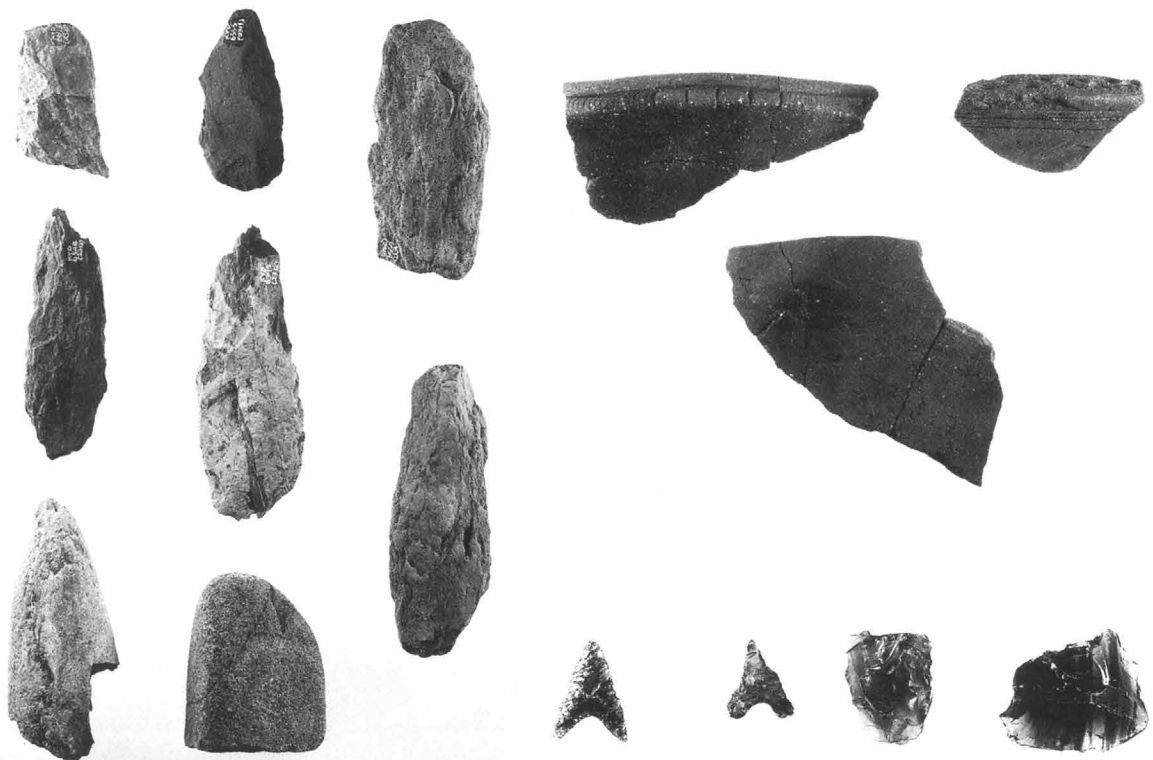
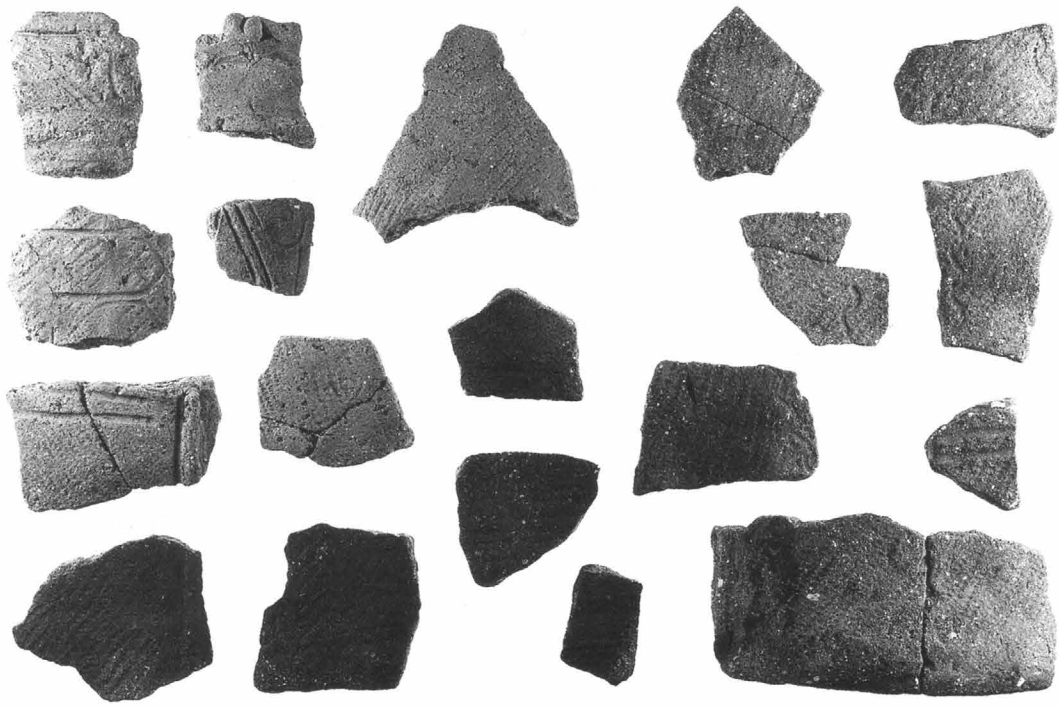
第18号住居址



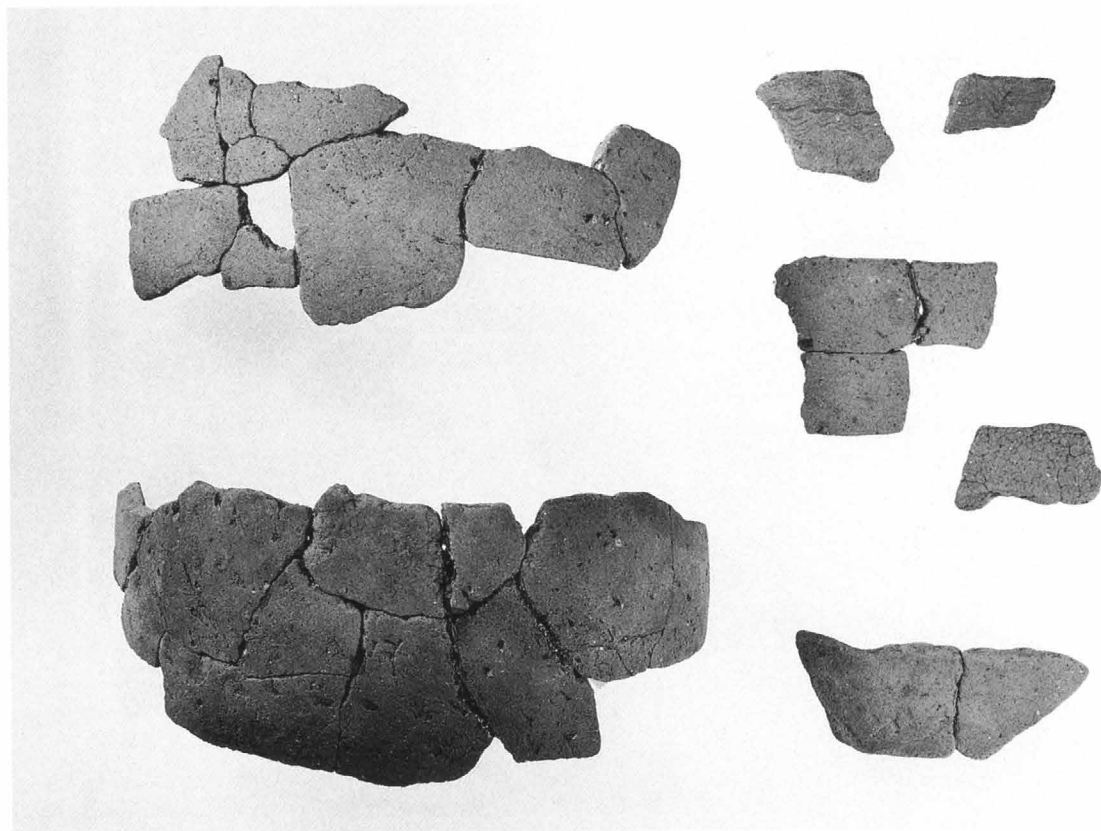
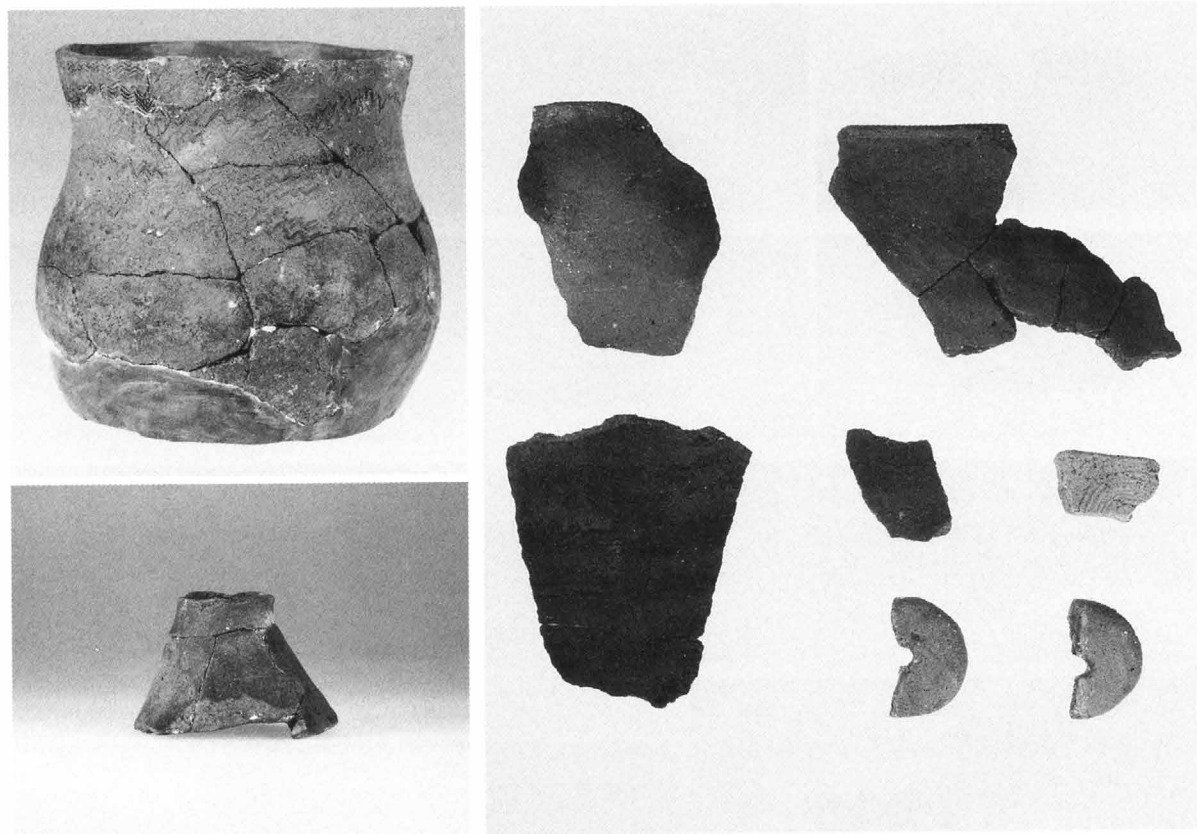
第23号住居址 (1)



第23号住居址 (2)



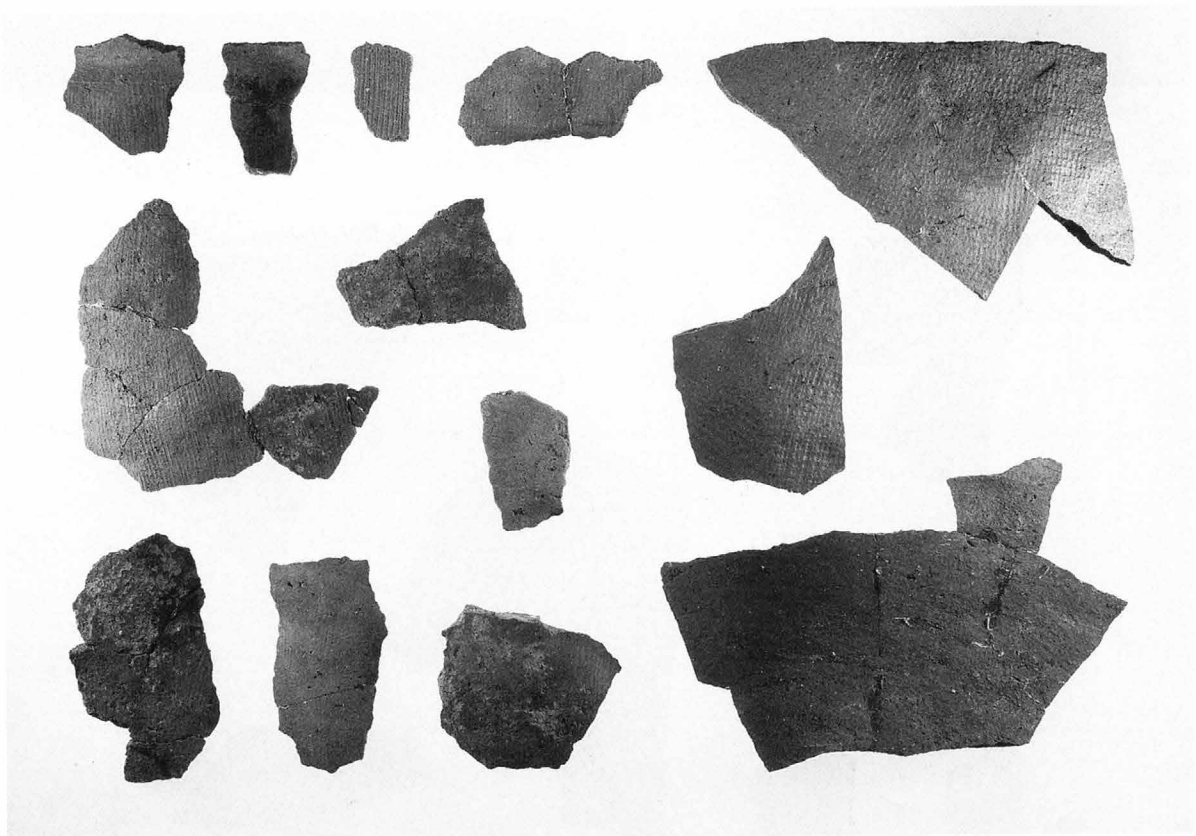
第23号住居址 (3)



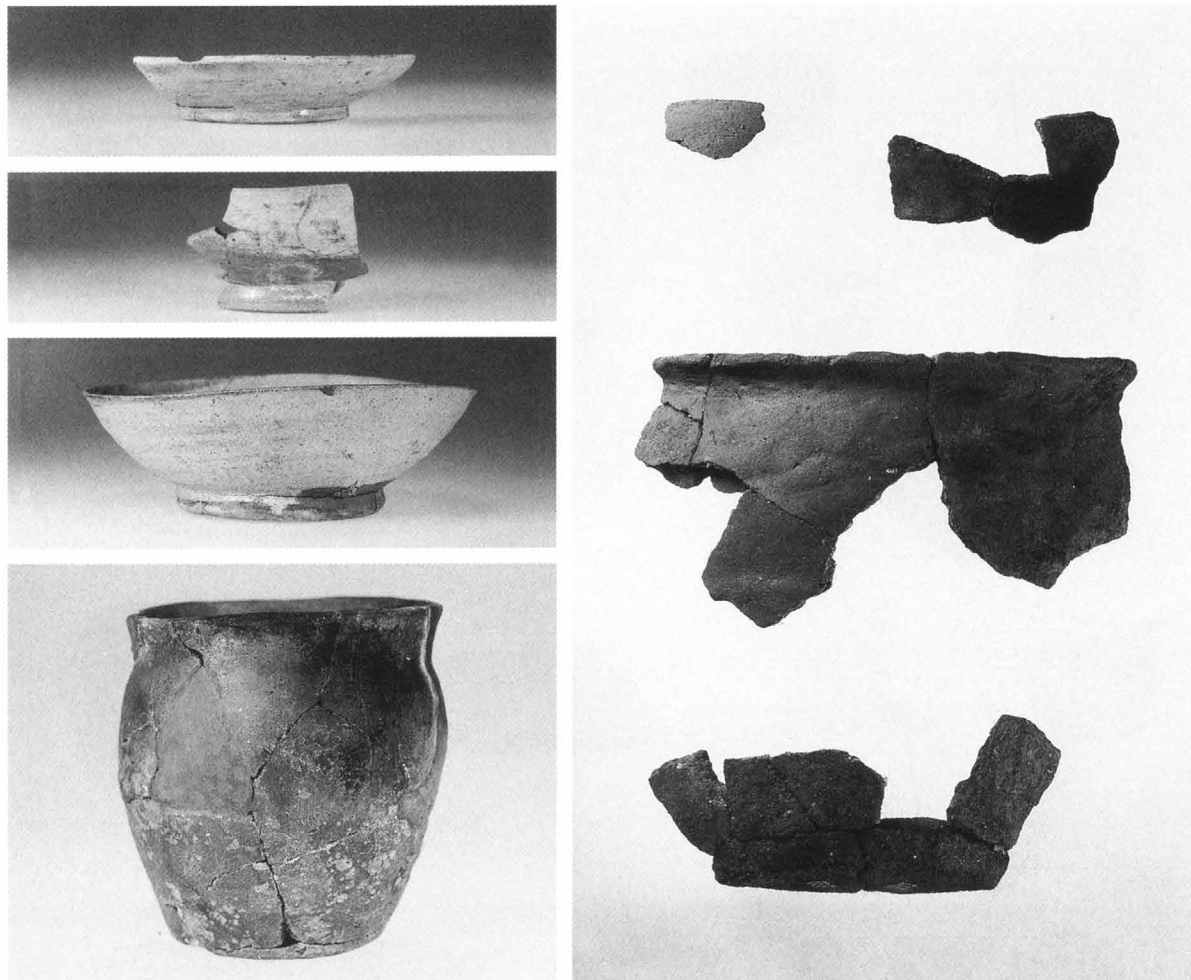
第12号住居址



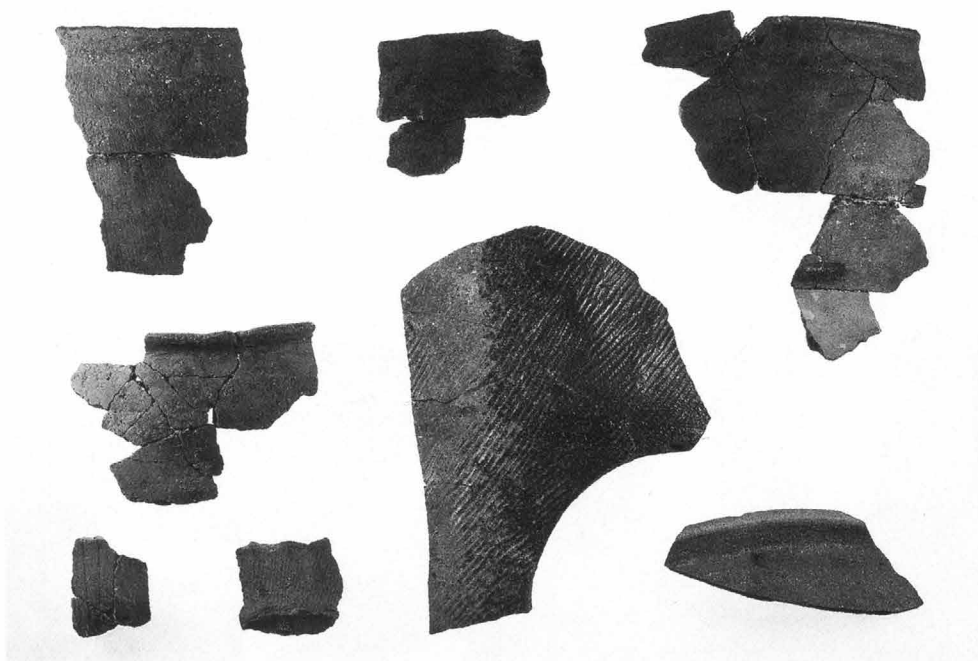
第 1 号住居址 (1)



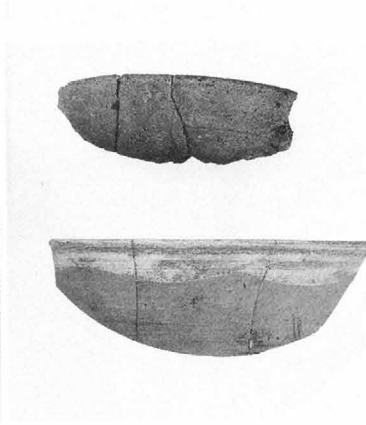
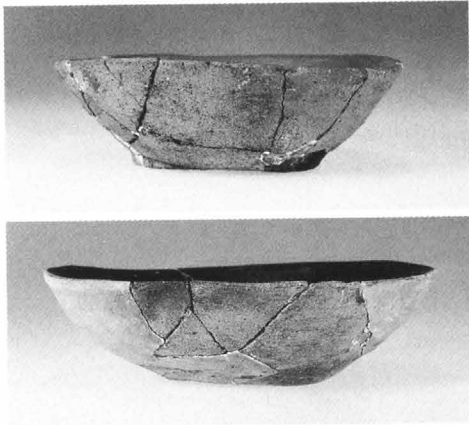
第1号住居址 (2)



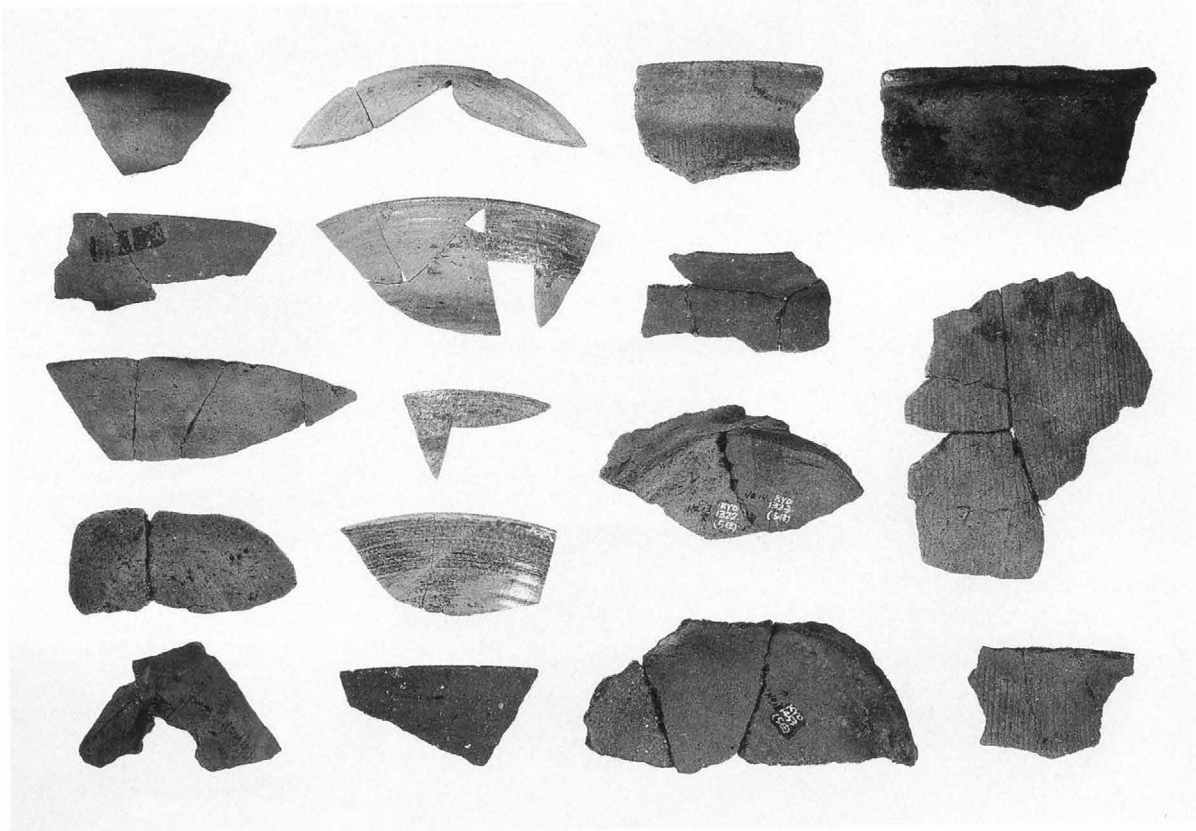
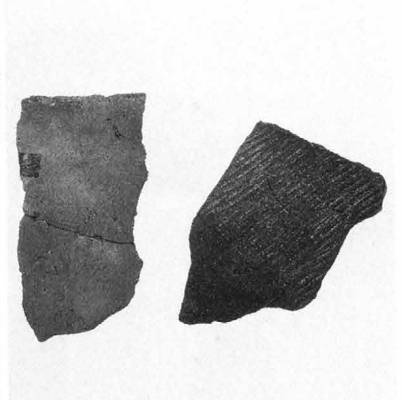
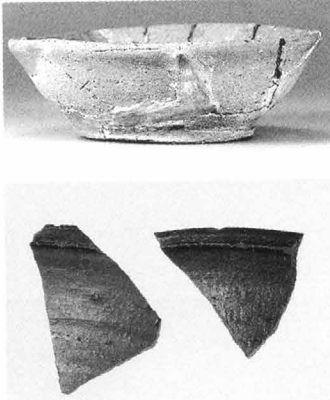
第2·3号住居址



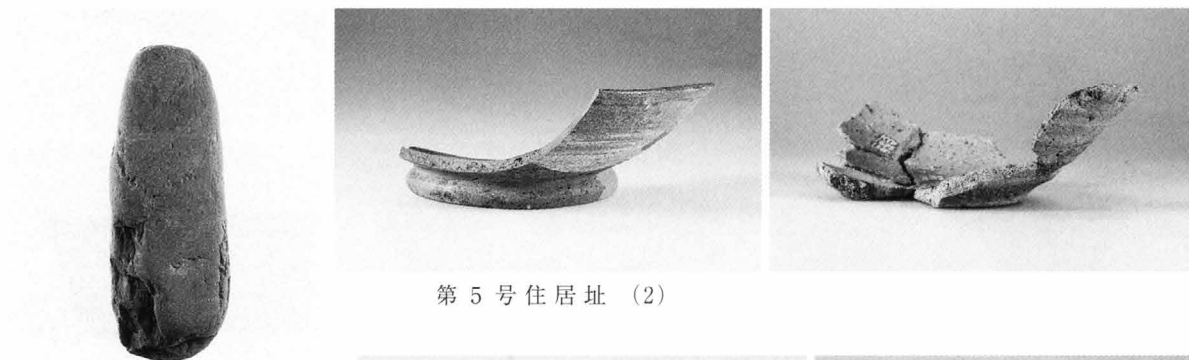
第4号住居址 (1)



第 4 号住居址 (2)



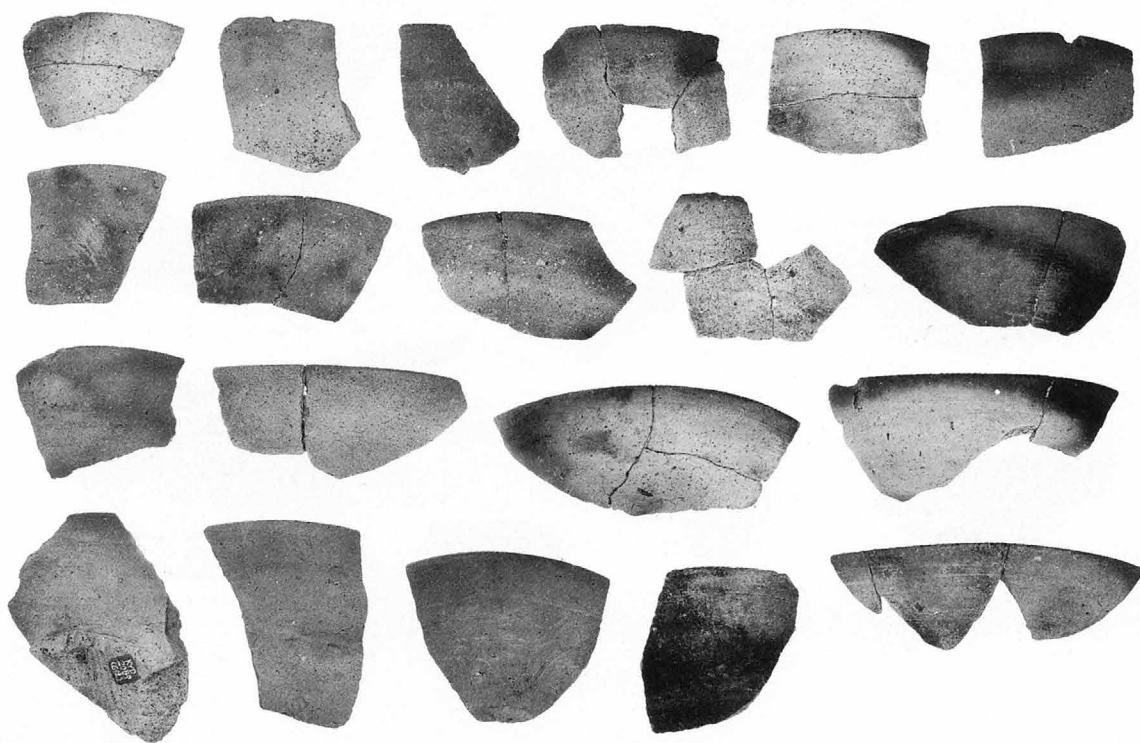
第 5 号住居址 (1)



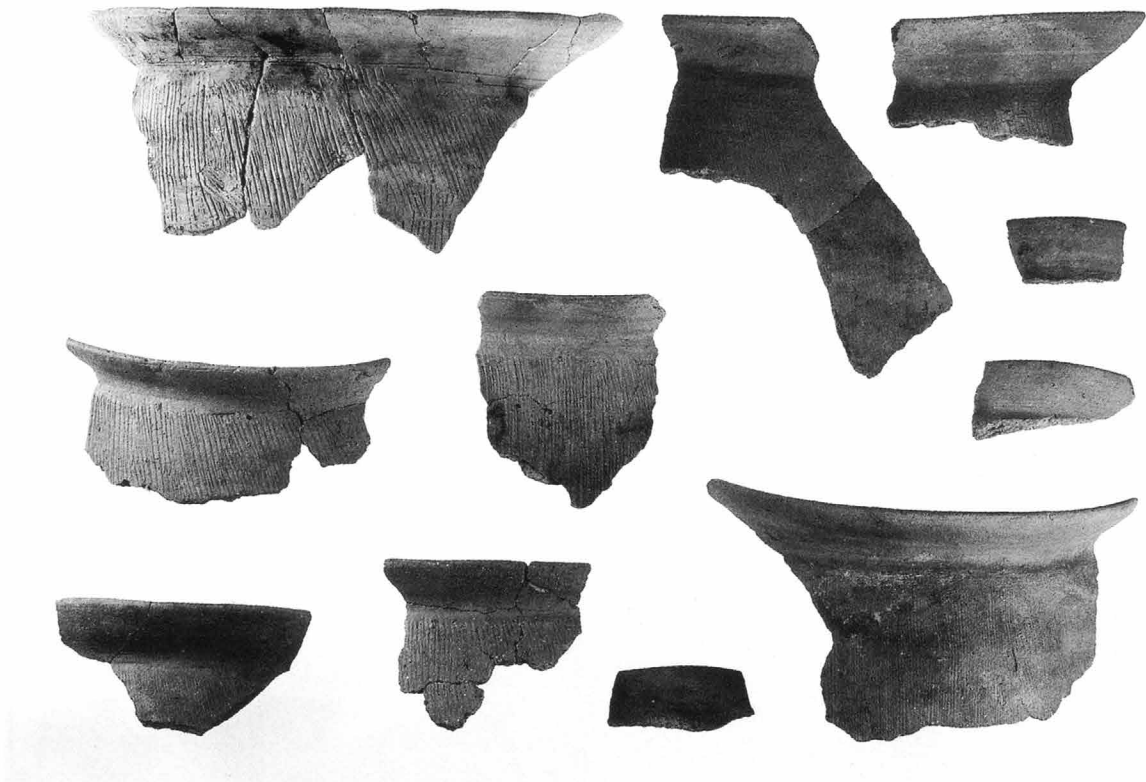
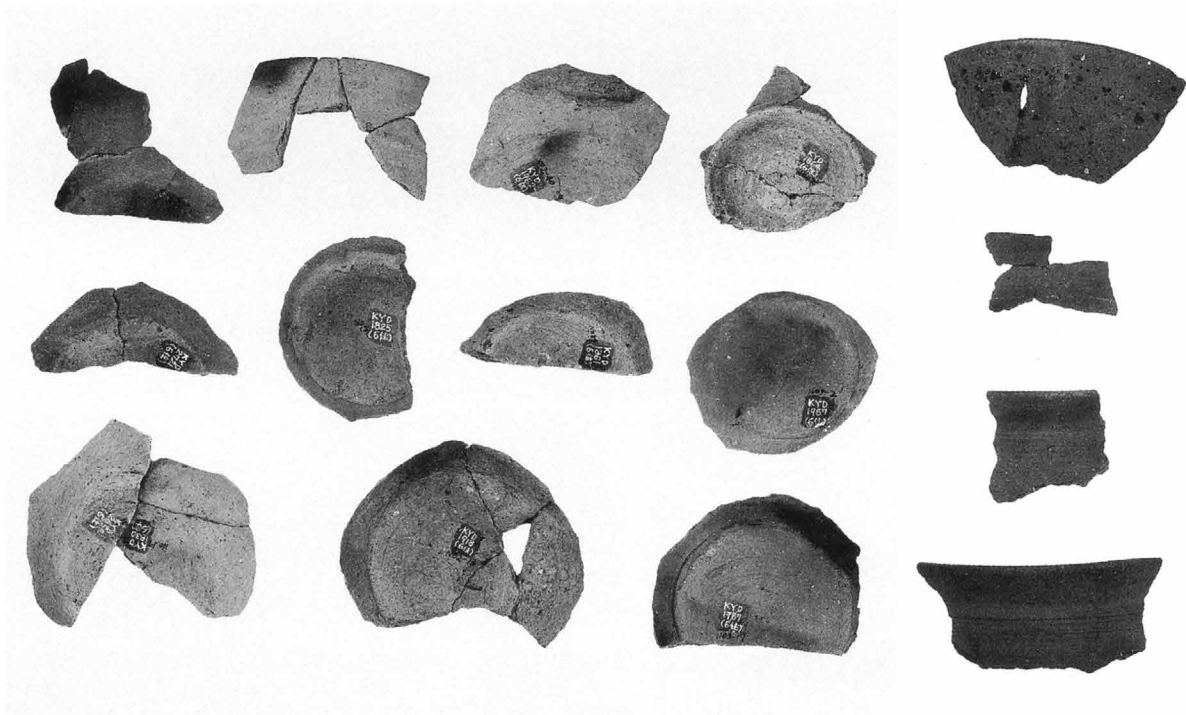
第 5 号住居址 (2)



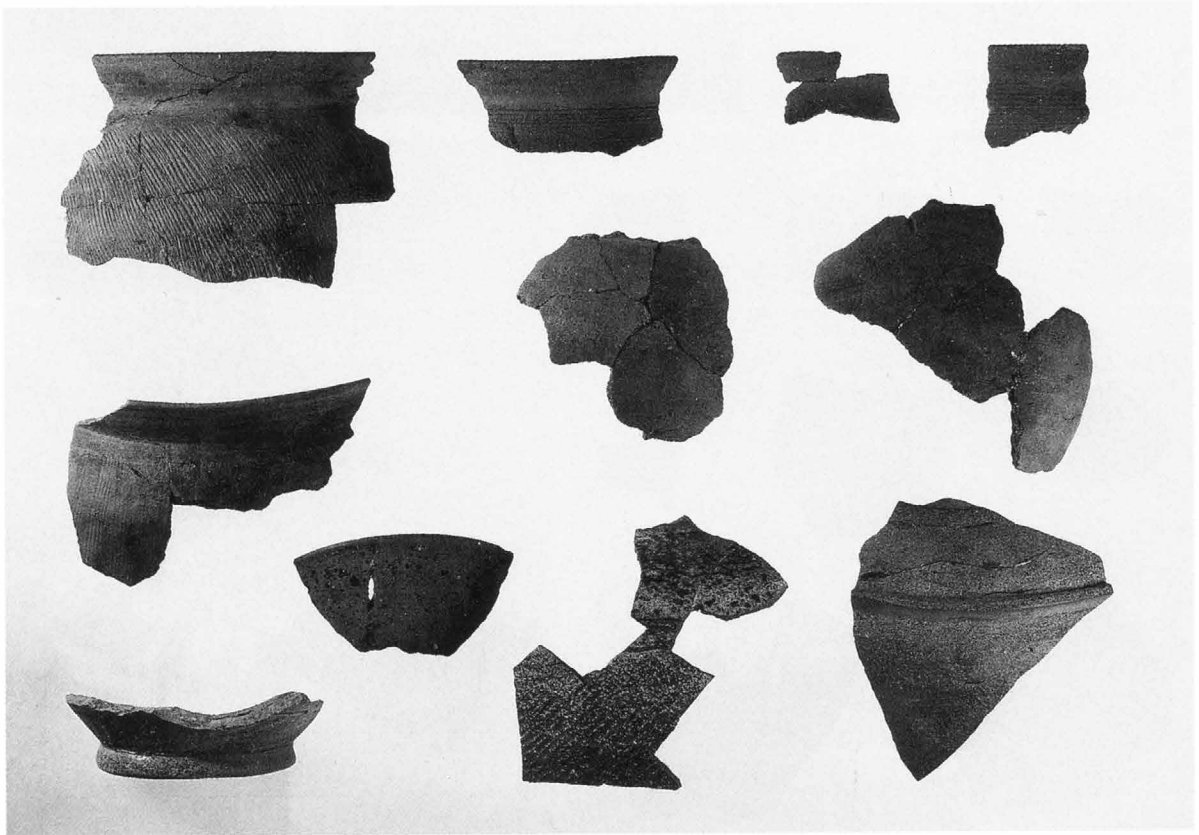
第 6 号住居址 (1)



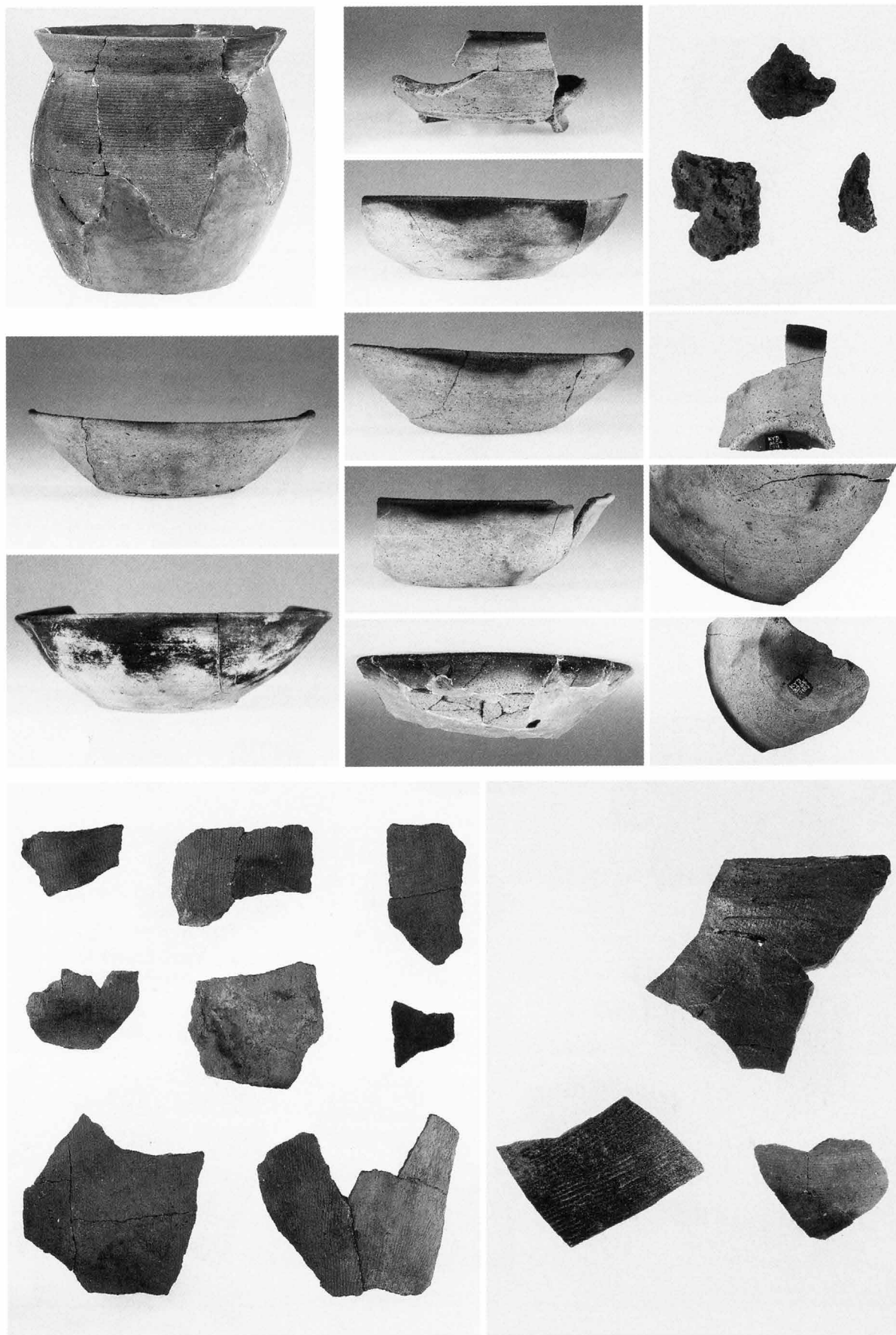
第 6 号住居址 (2)



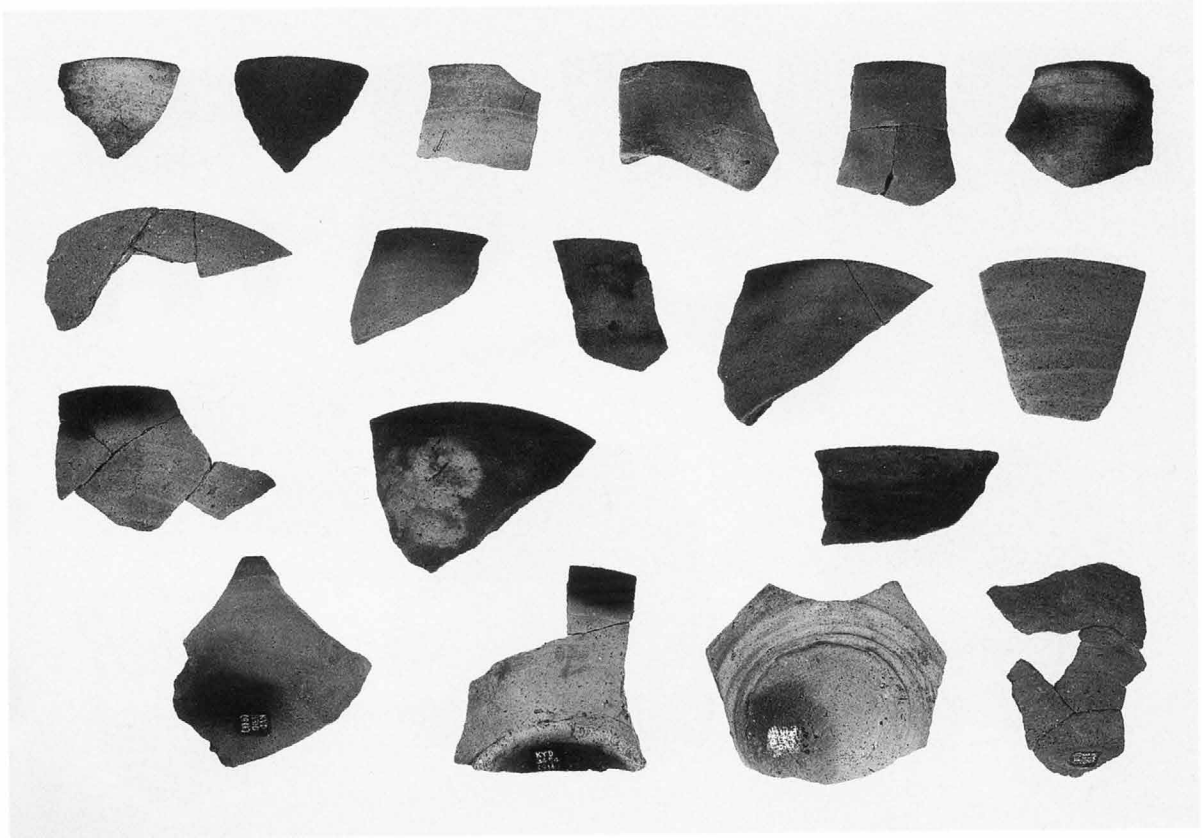
第 6 号住居址 (3)



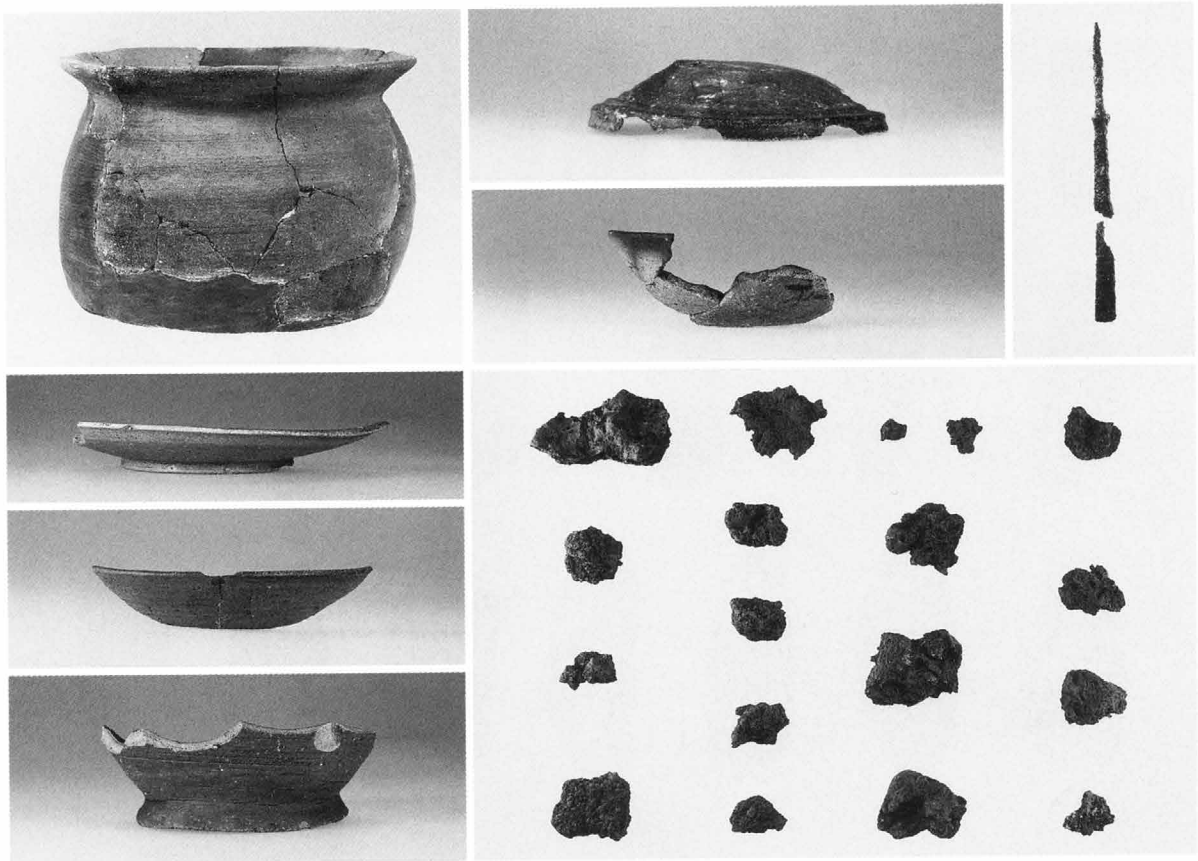
第 6 号住居址 (4)



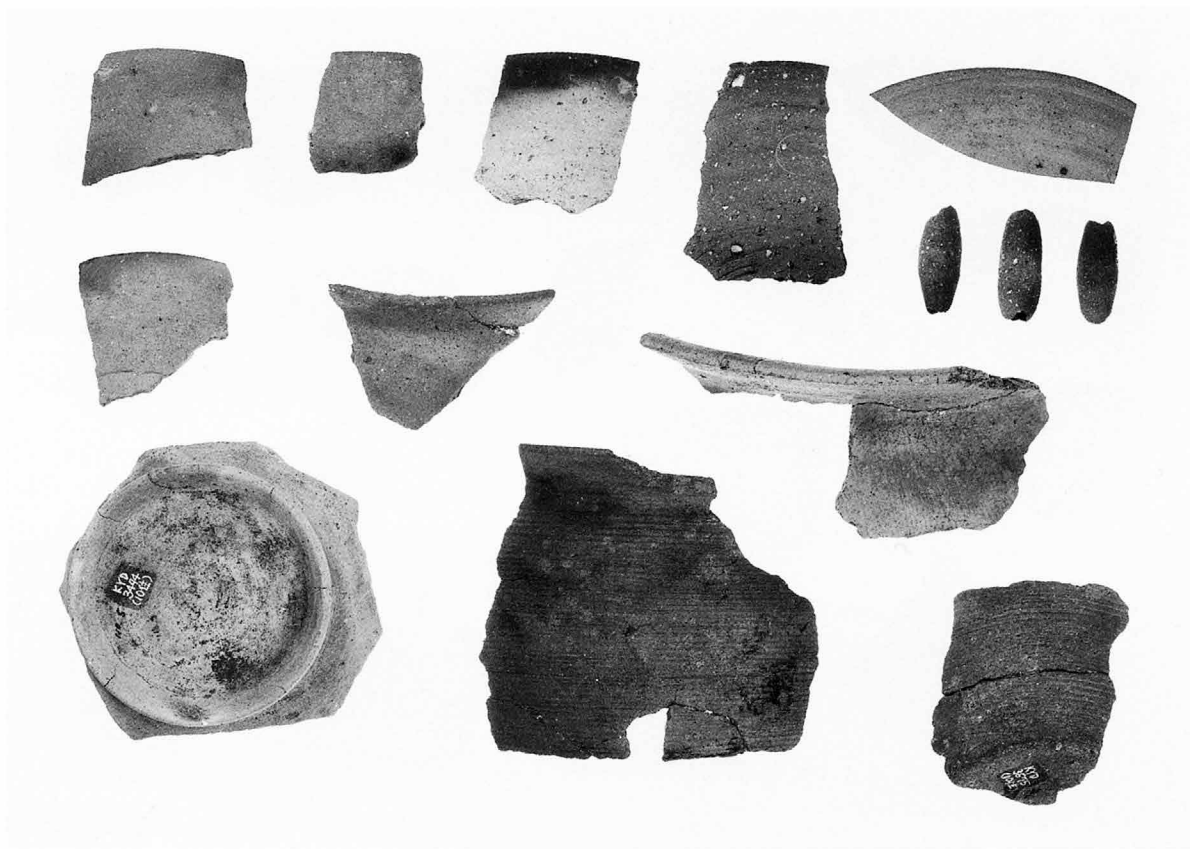
第 8、9 号住居址



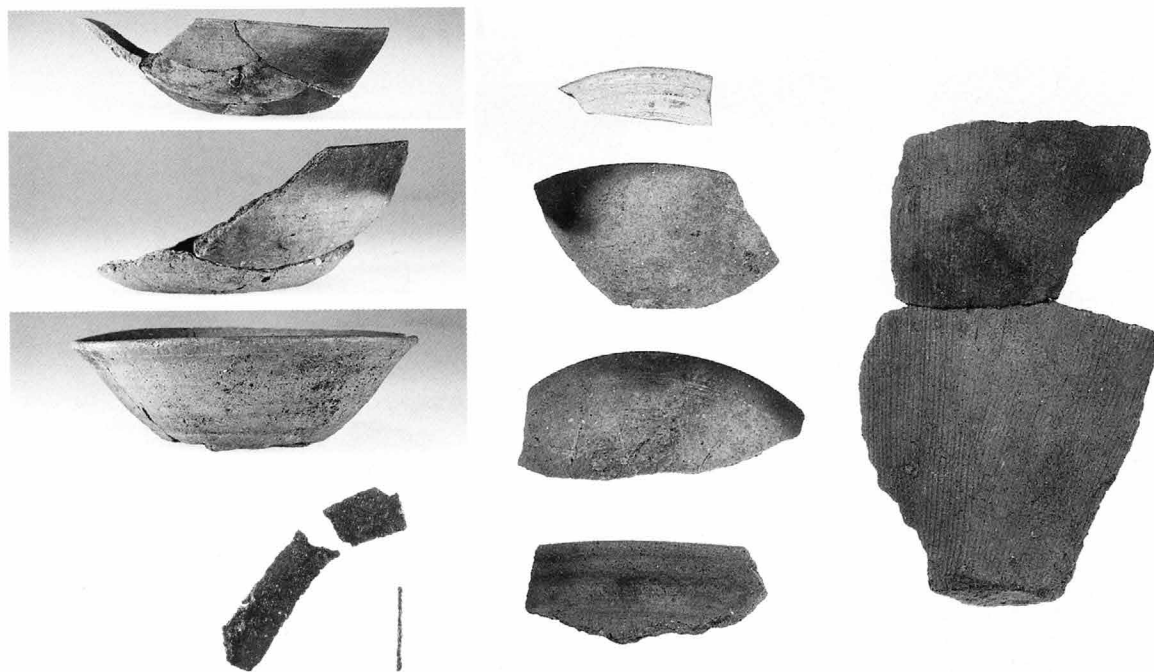
第9号住居址



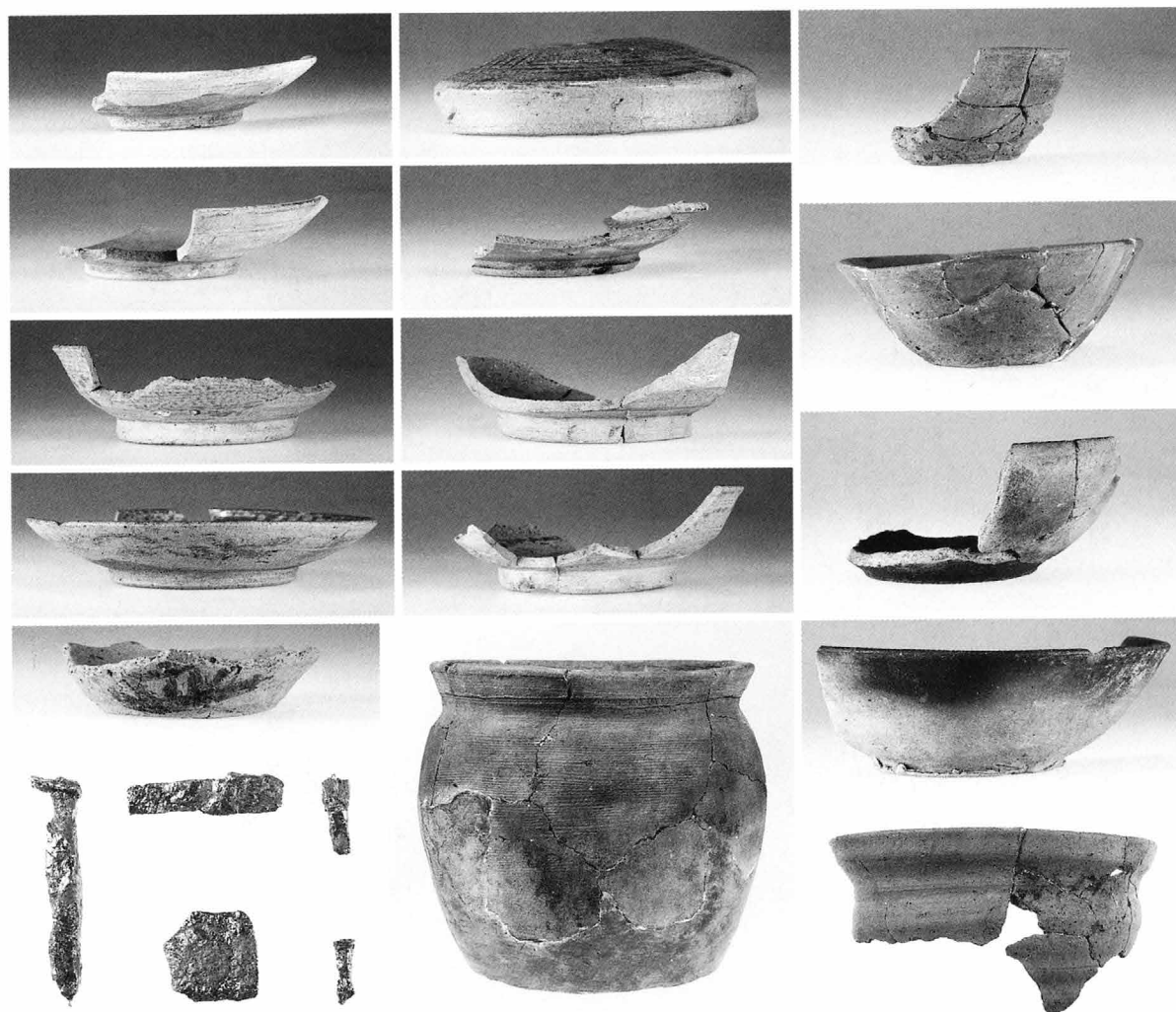
第10号住居址 (1)



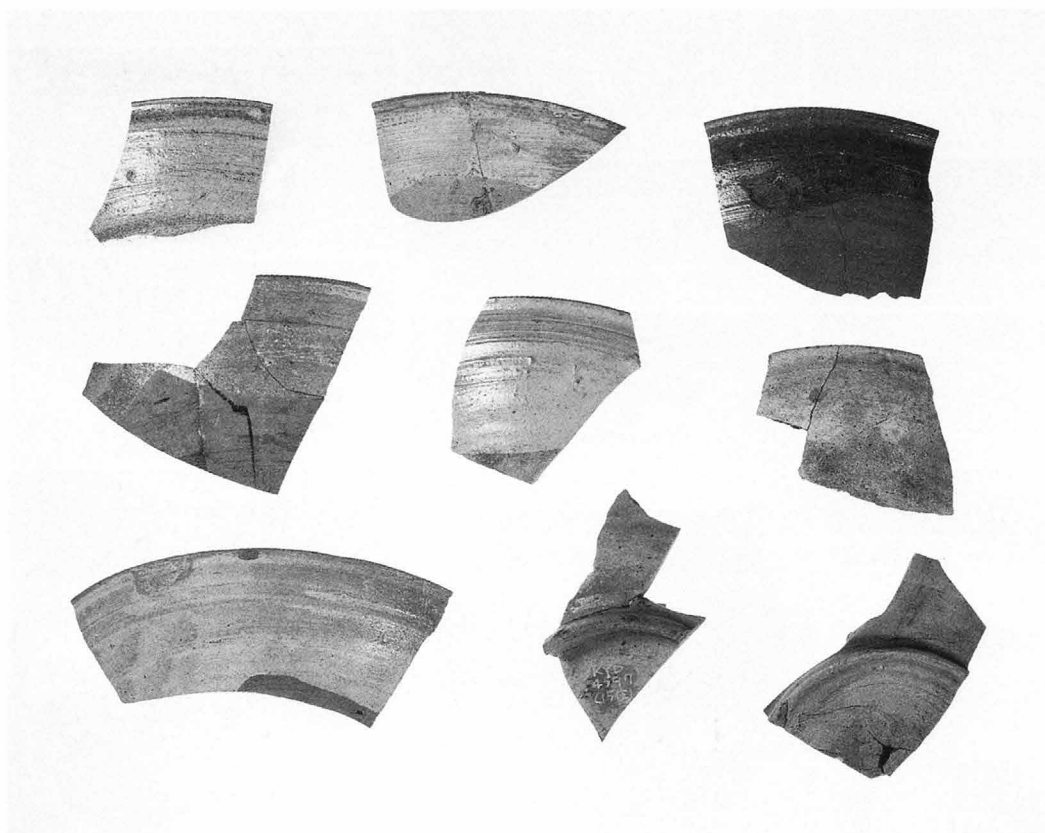
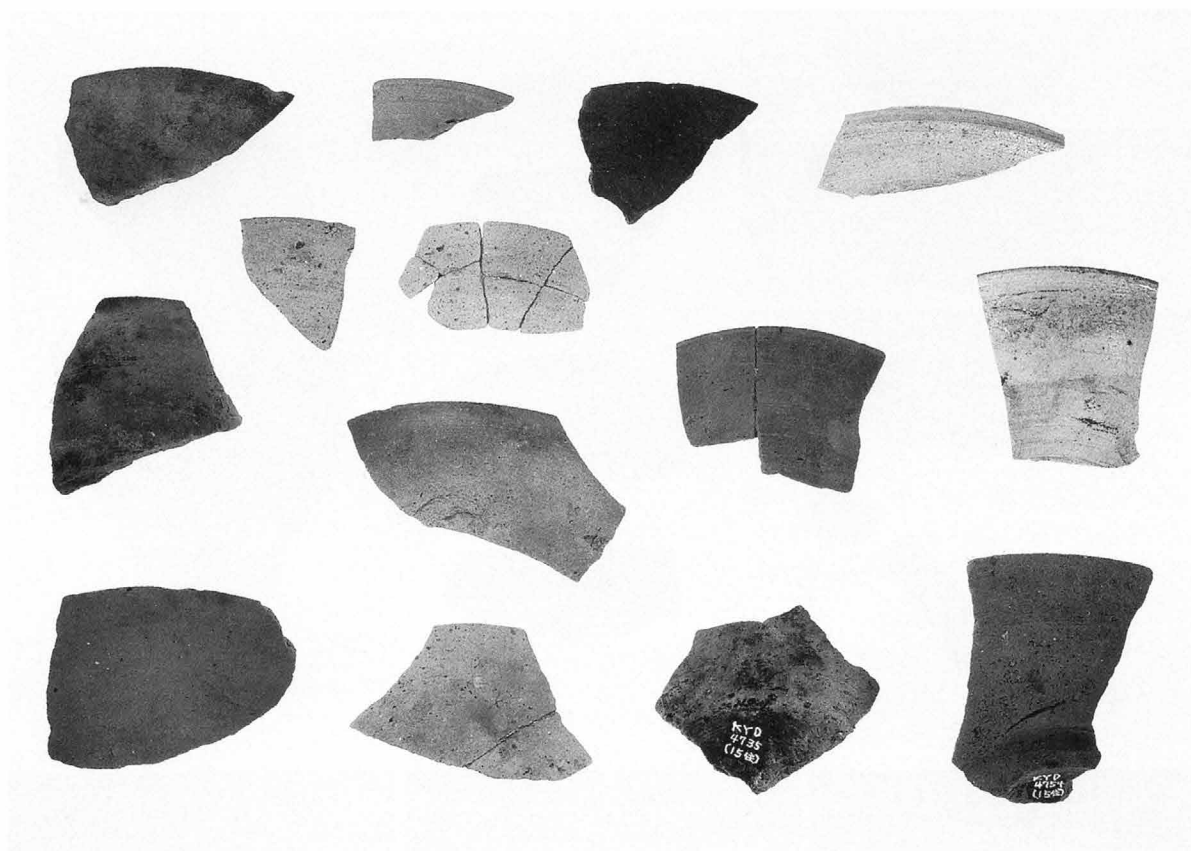
第10号住居址 (2)



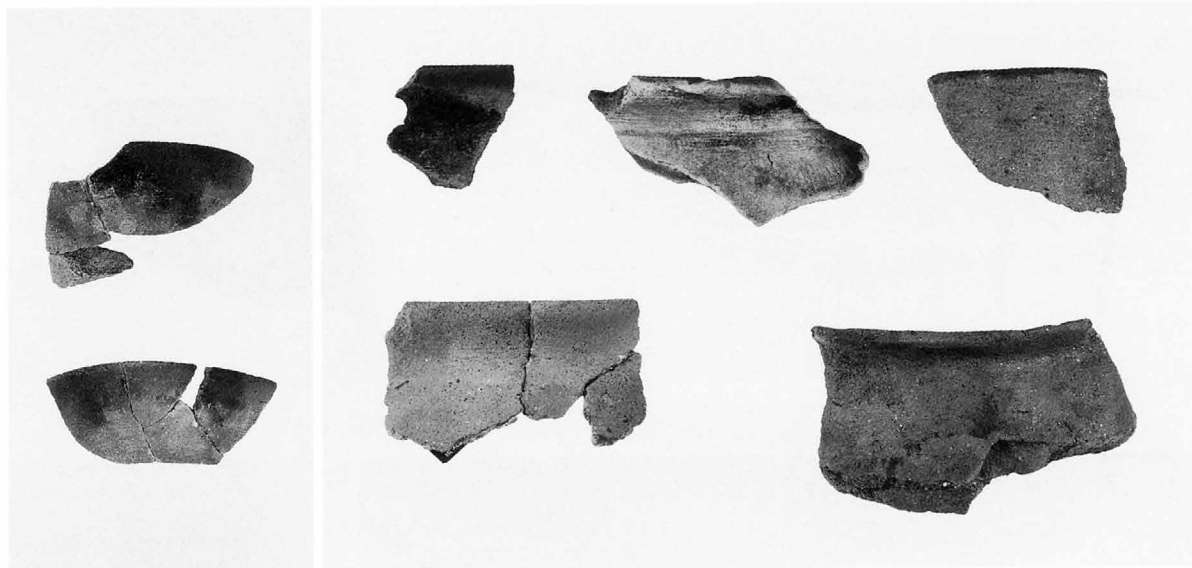
第14号住居址



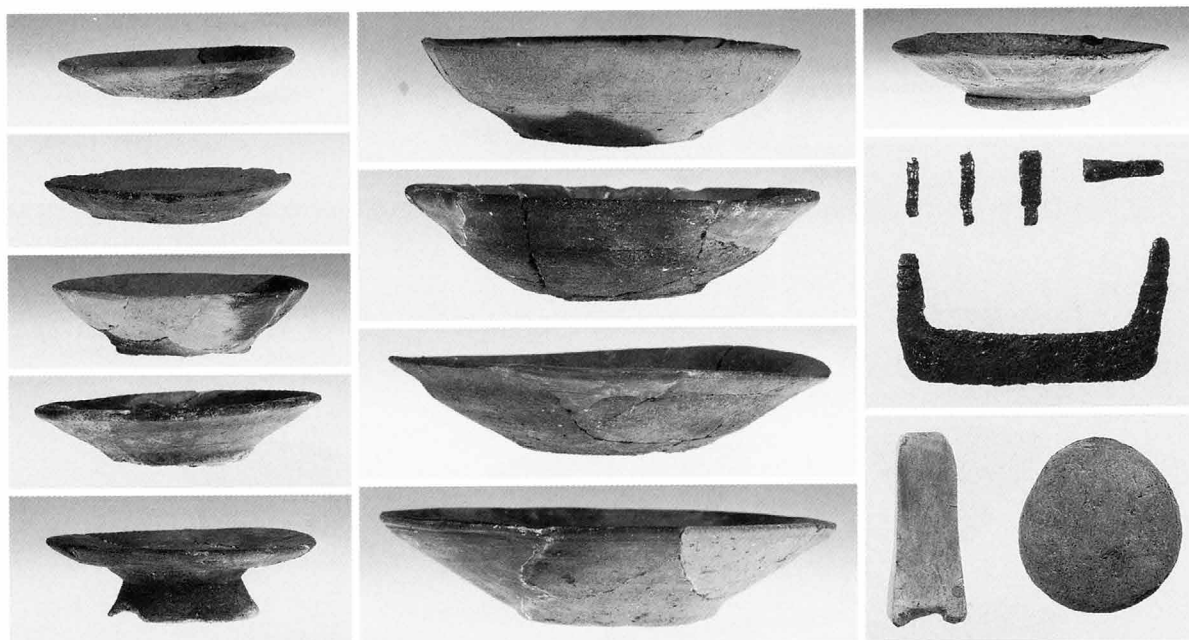
第15号住居址 (1)



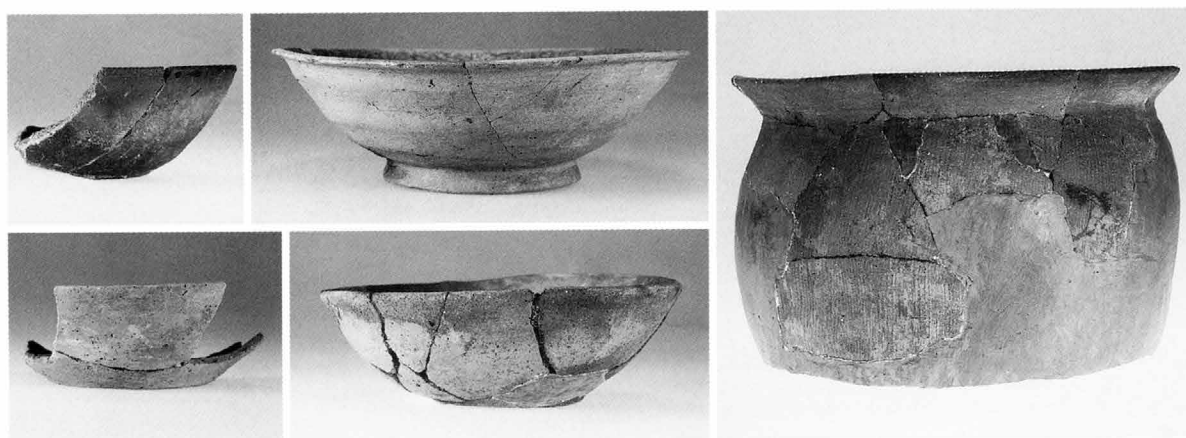
第15号住居址 (2)



第15号住居址 (3)



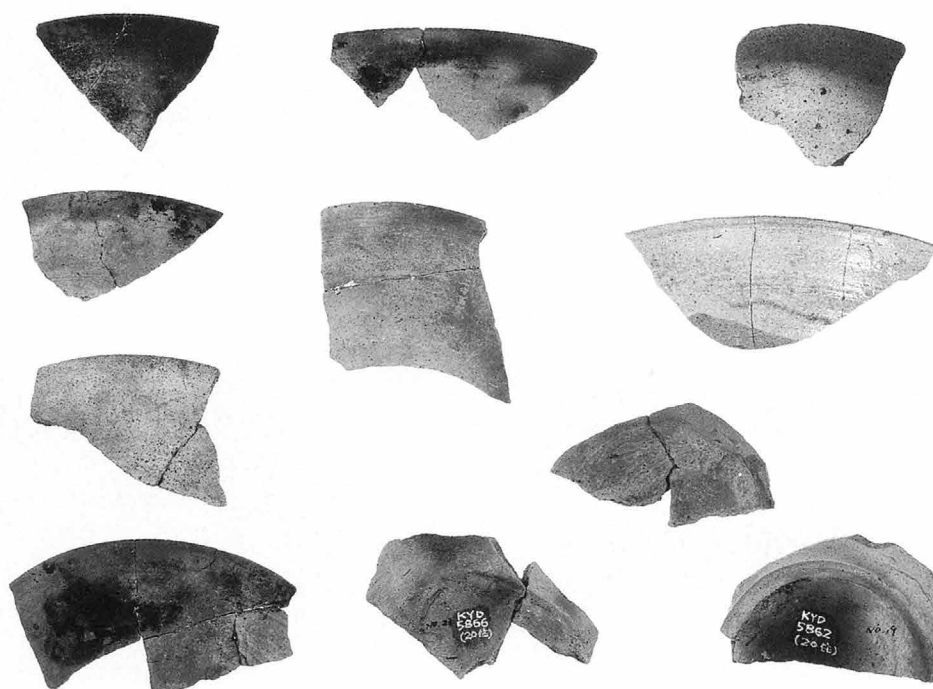
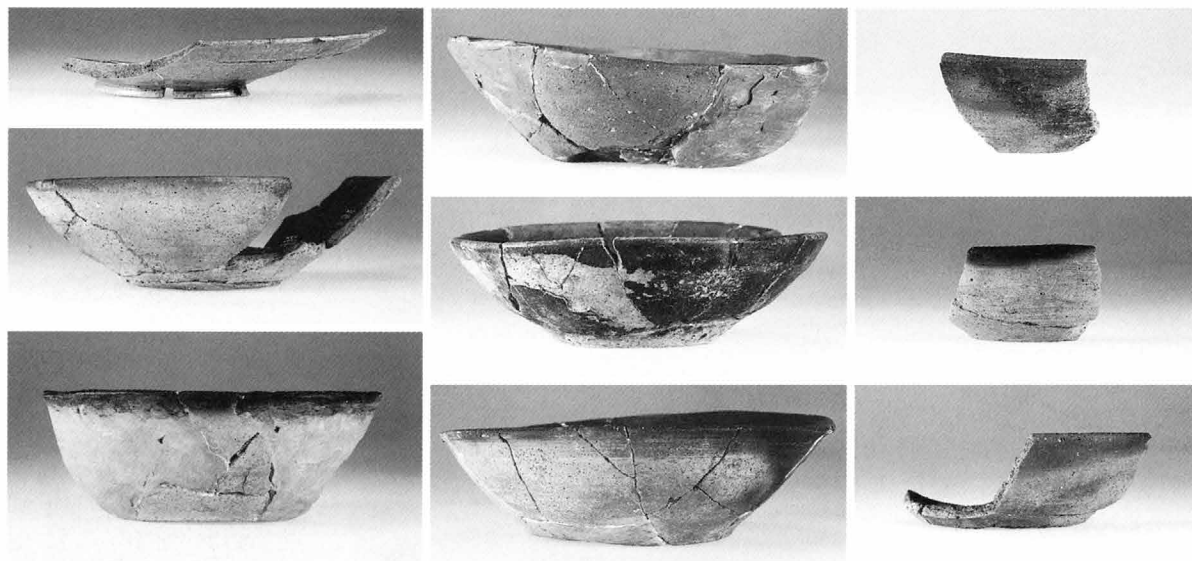
第17号住居址



第19号住居址 (1)



第19号住居址 (2)



第20号住居址



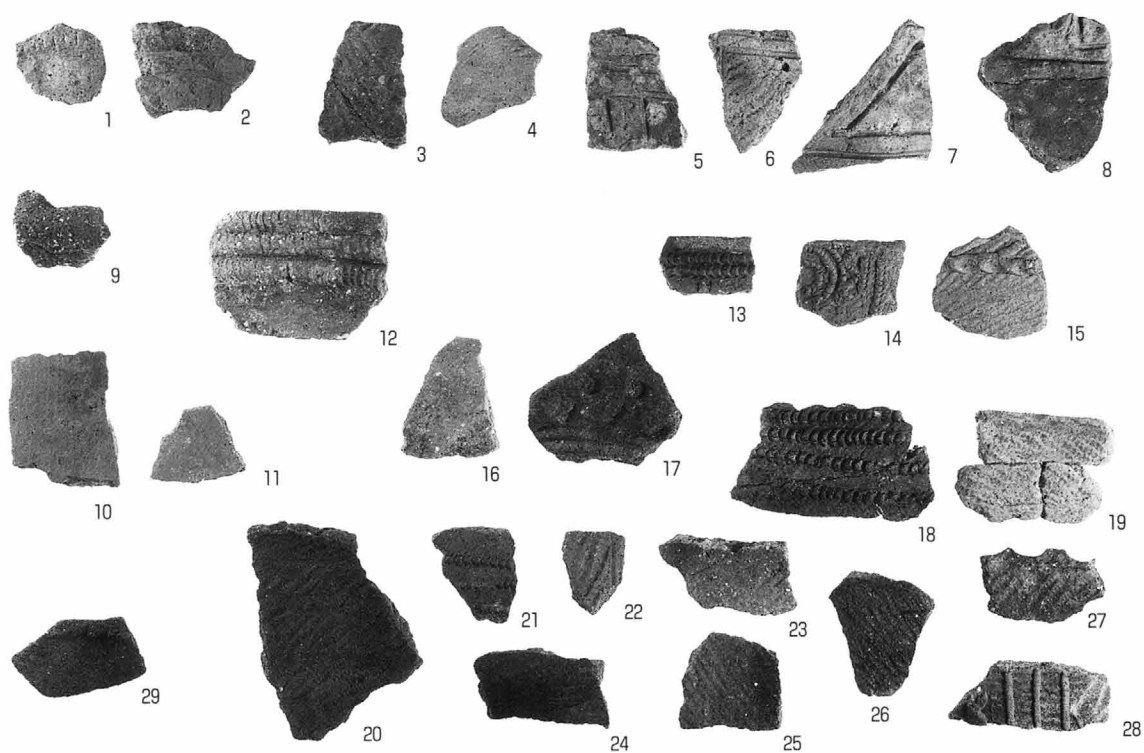
第20号住居址 (3)



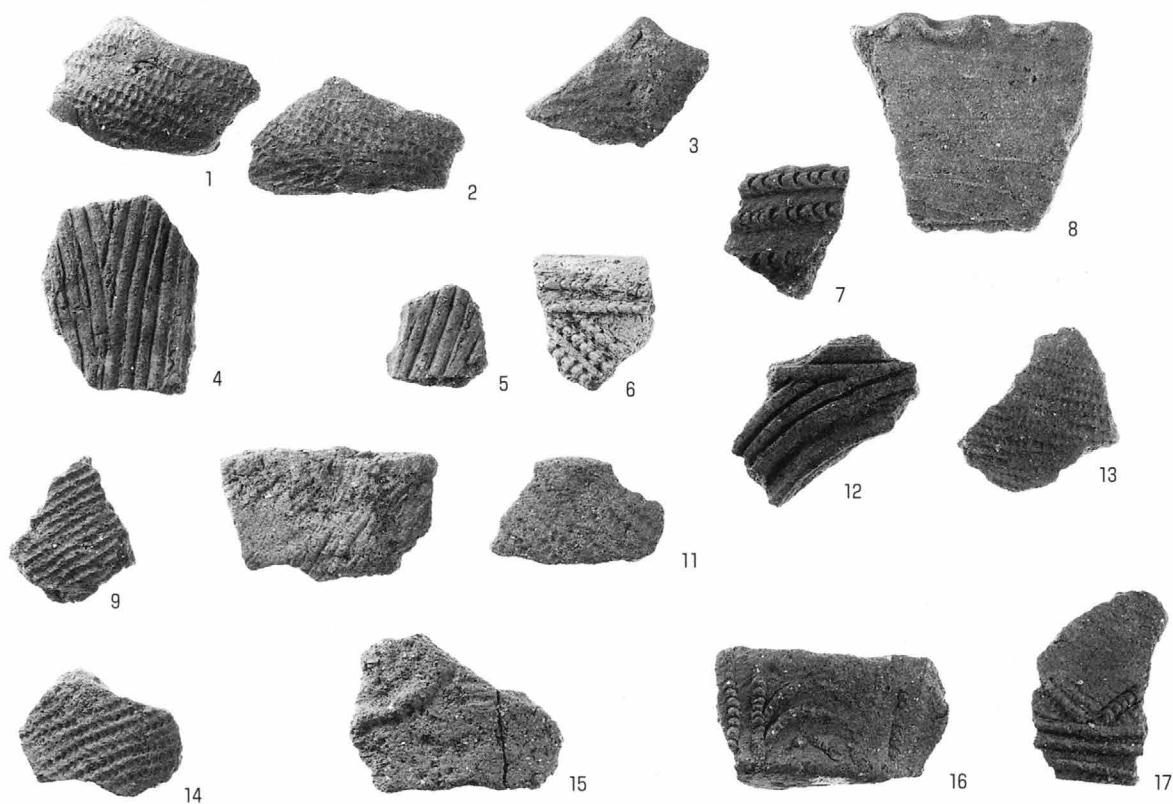
第21号住居址 (1)



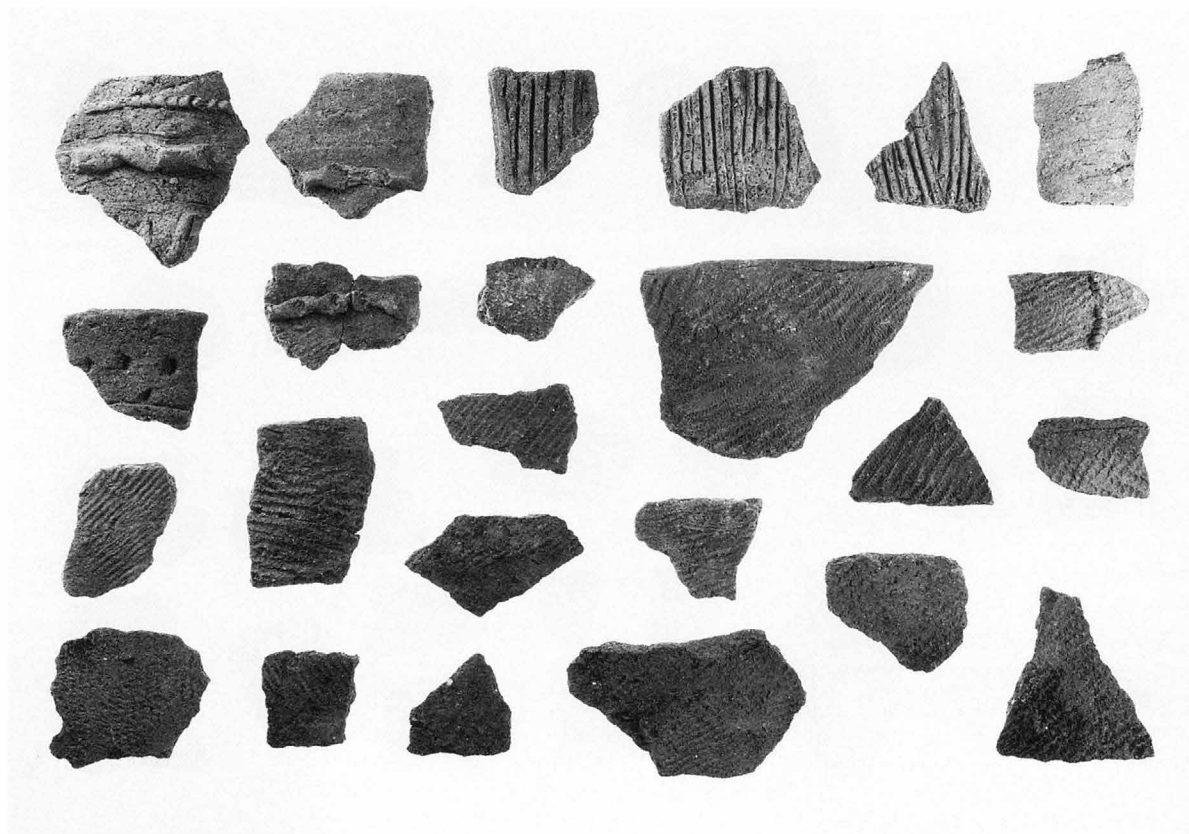
第21号住居址 (2)



土坑 (3) (1·2:2土、3~8:4土、9:3土、10·11:24土、12:37土、
13~15:49土、16·17:50土、18~28:56土、29:58土)



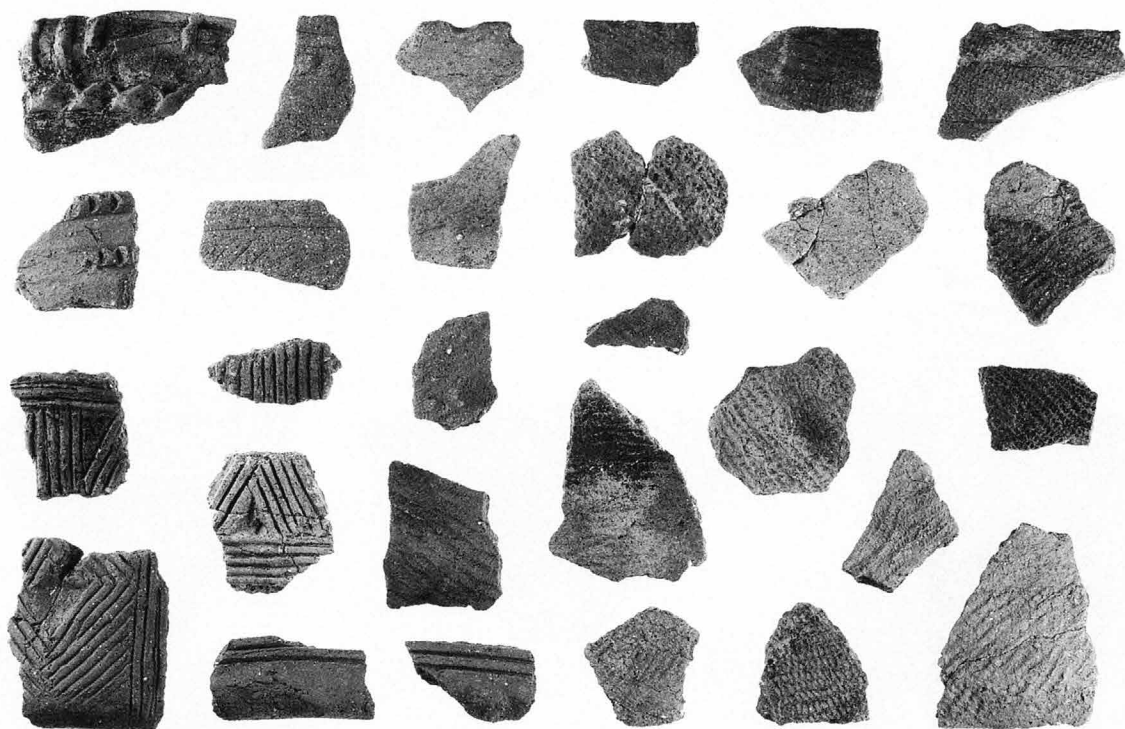
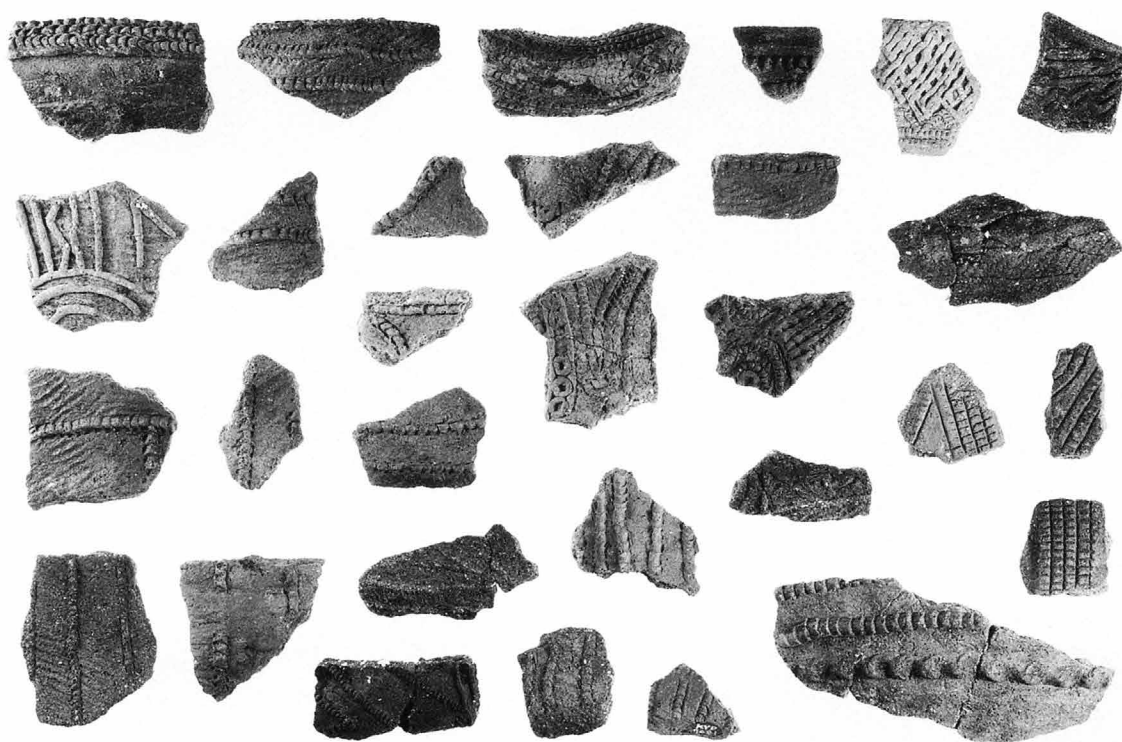
土坑 (4) (1~4:65土、5~15:67土、16·17:121土)



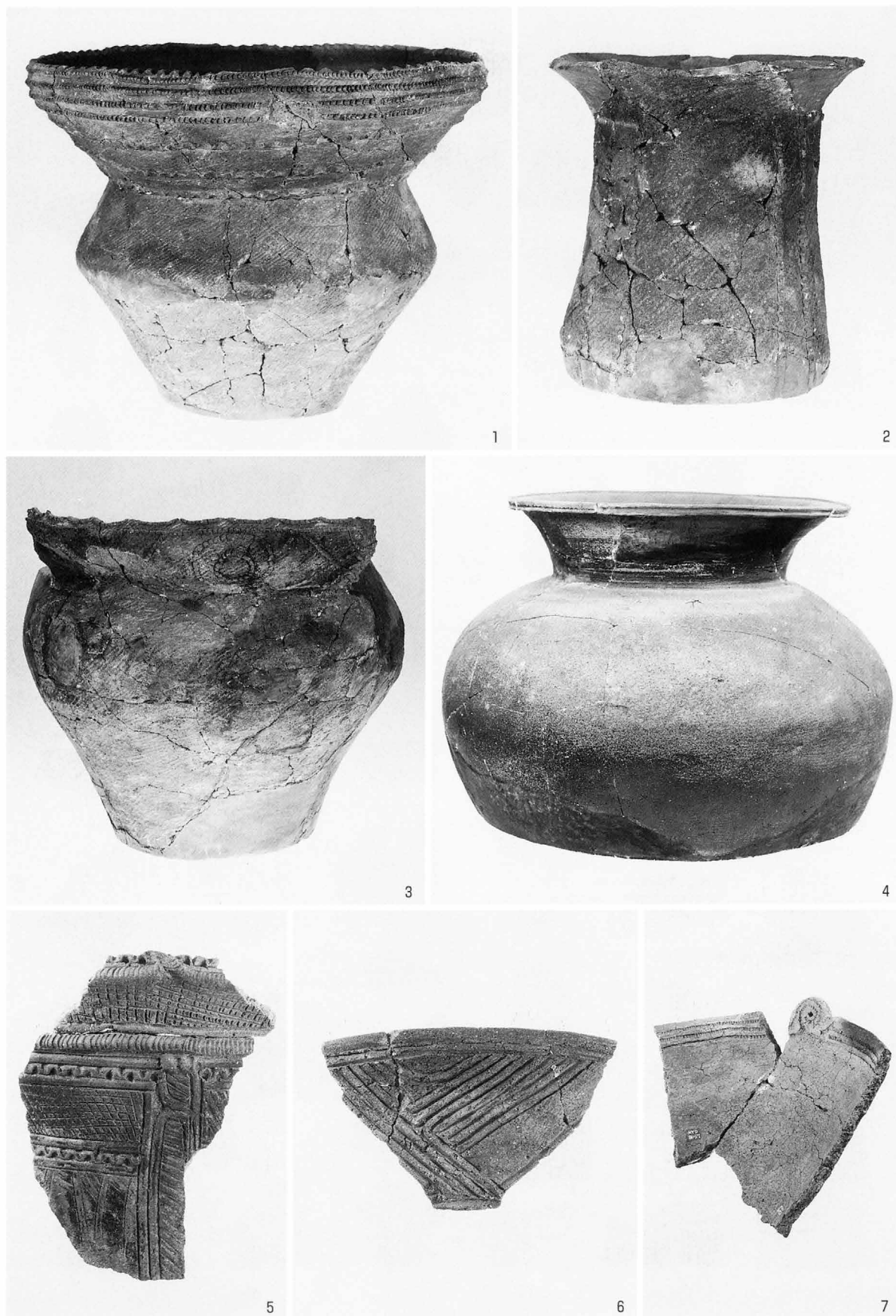
土坑 (5) (66±)



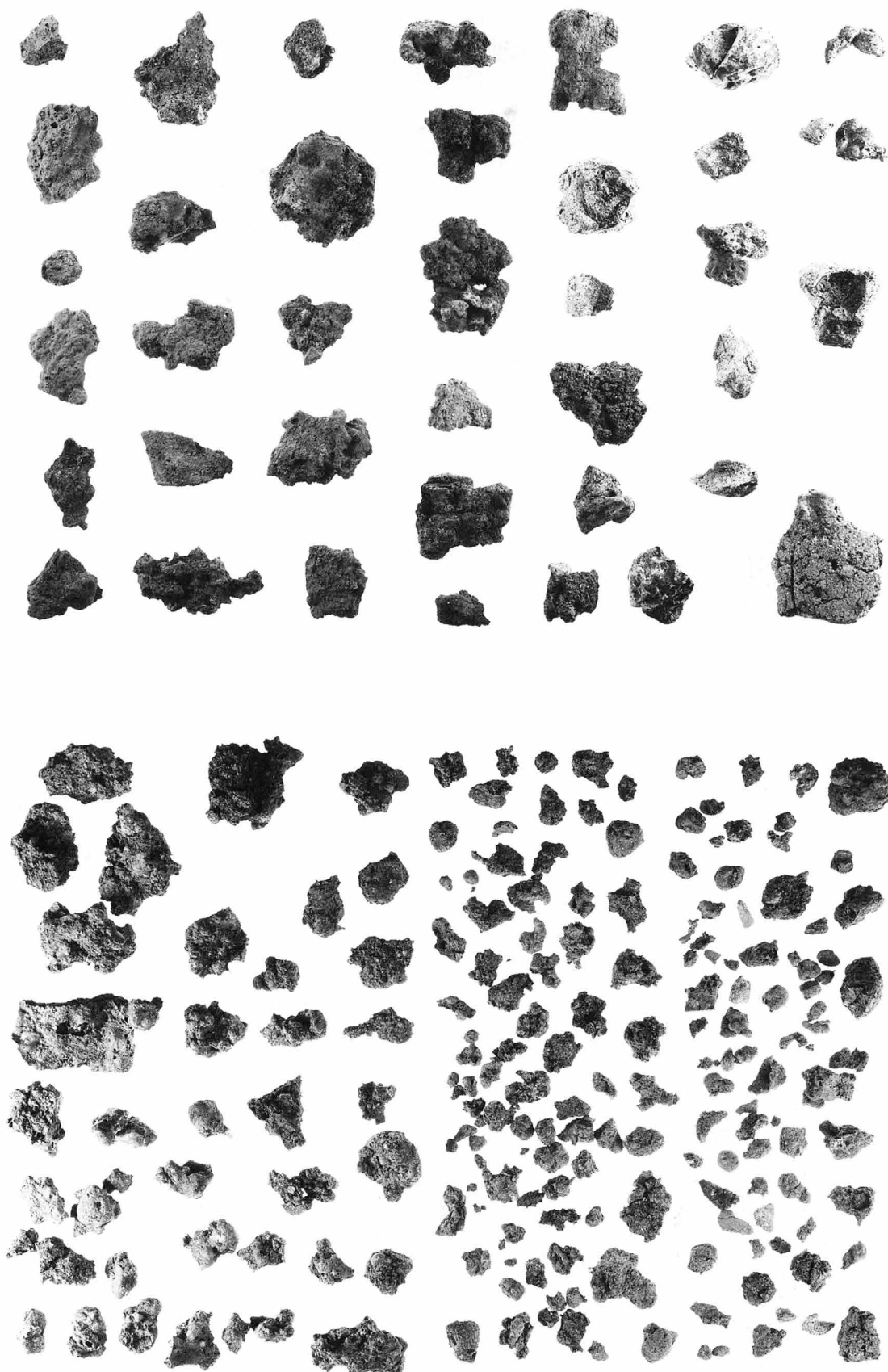
土坑出土石器 (1: 9±, 2: 37±, 3: 49±, 4~7: 66±, 8: 57±, 9·11: 8±, 10: 111±, 12: 41±)



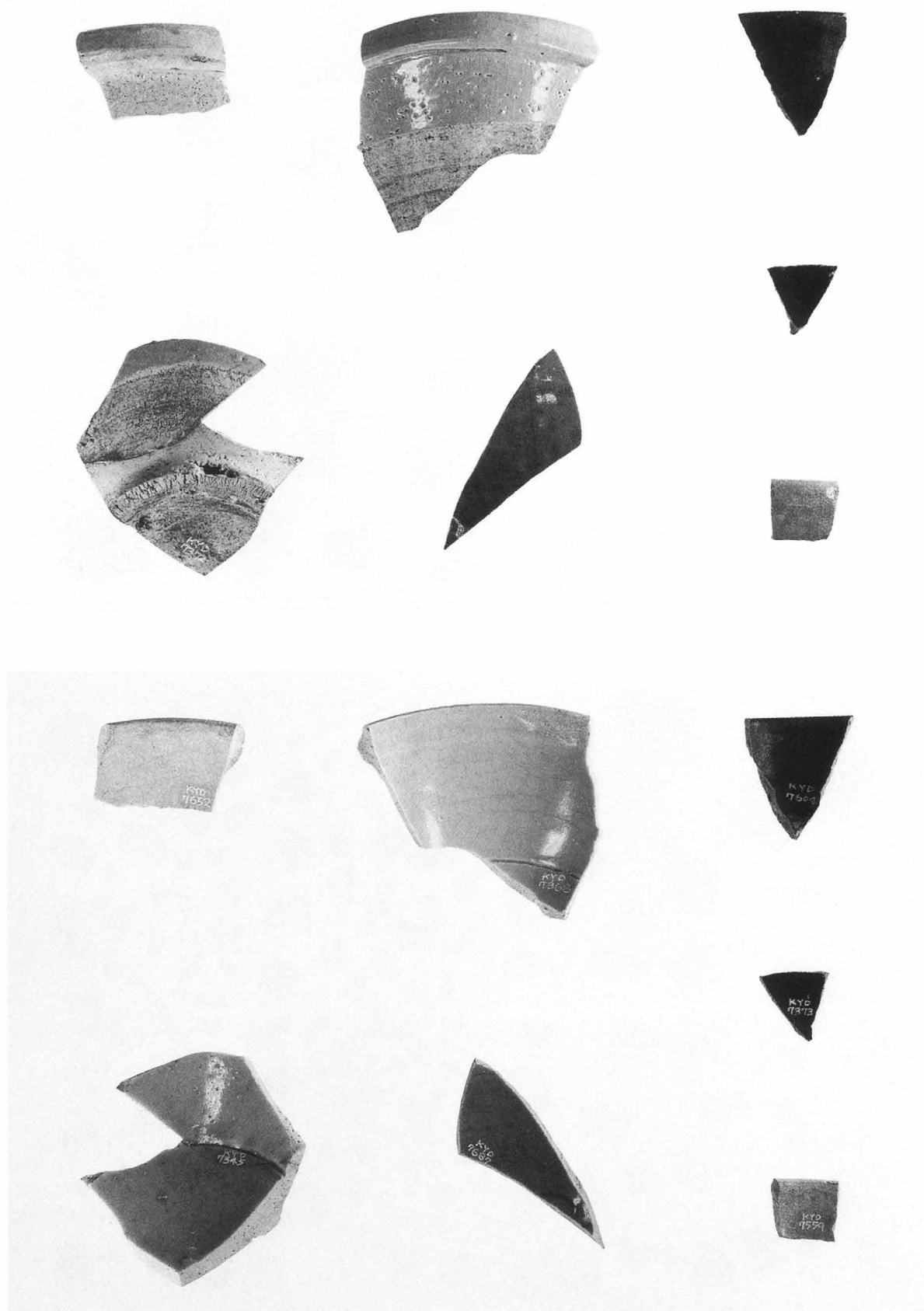
土坑 (6) (11±)



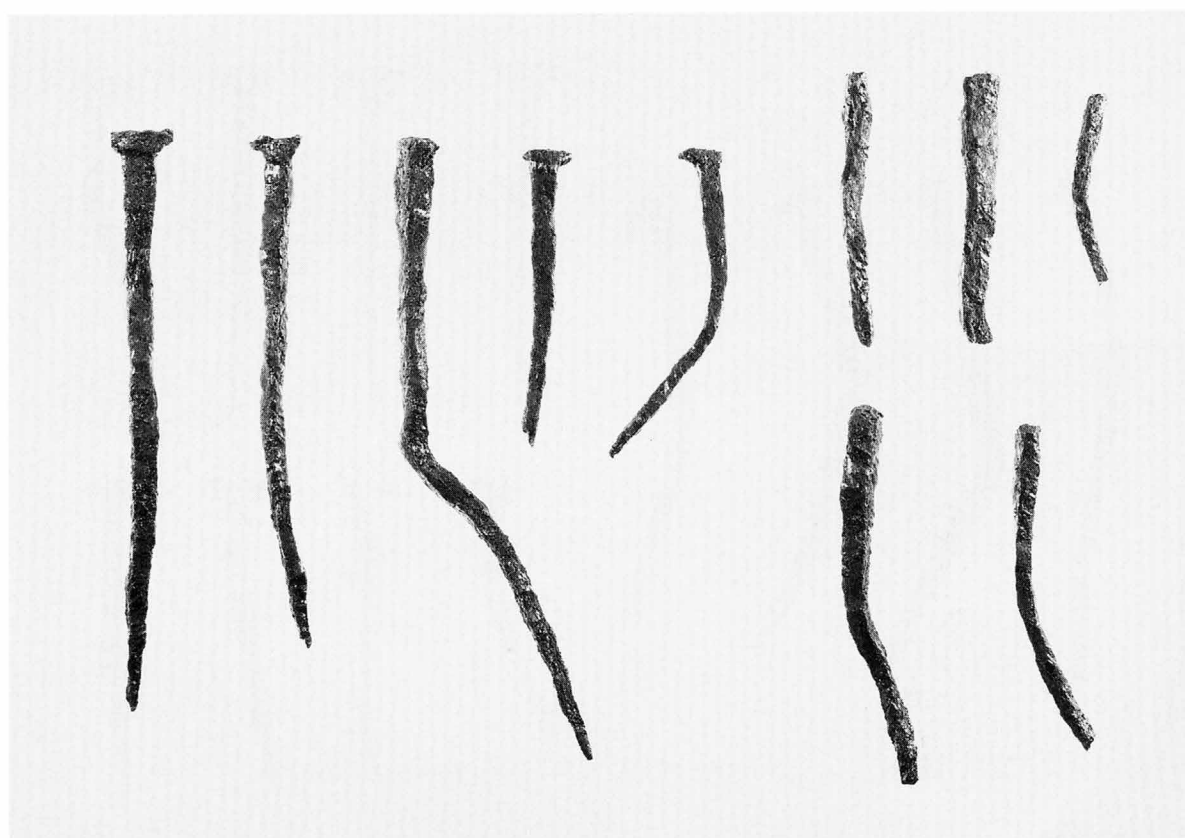
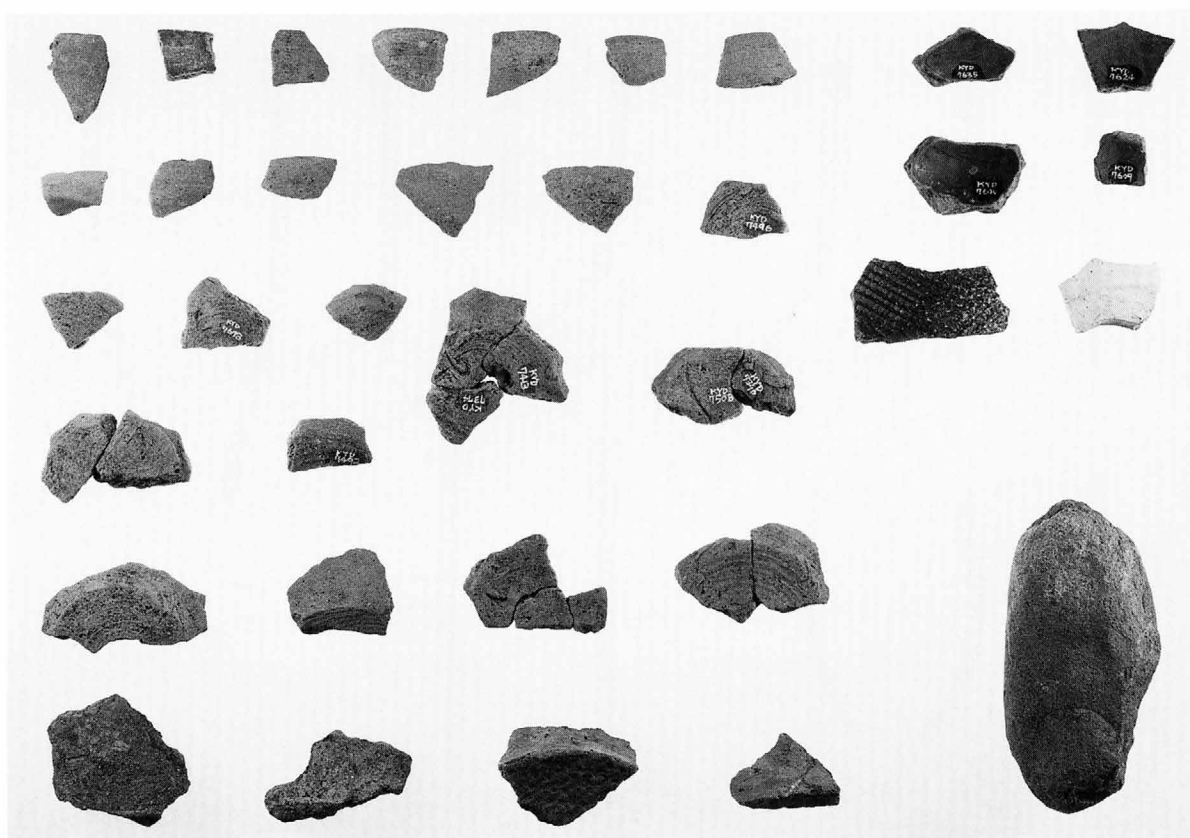
土坑 (7) (1~3: 67土, 4: 142土, 5: 41土, 6: 93土, 7: 24土)



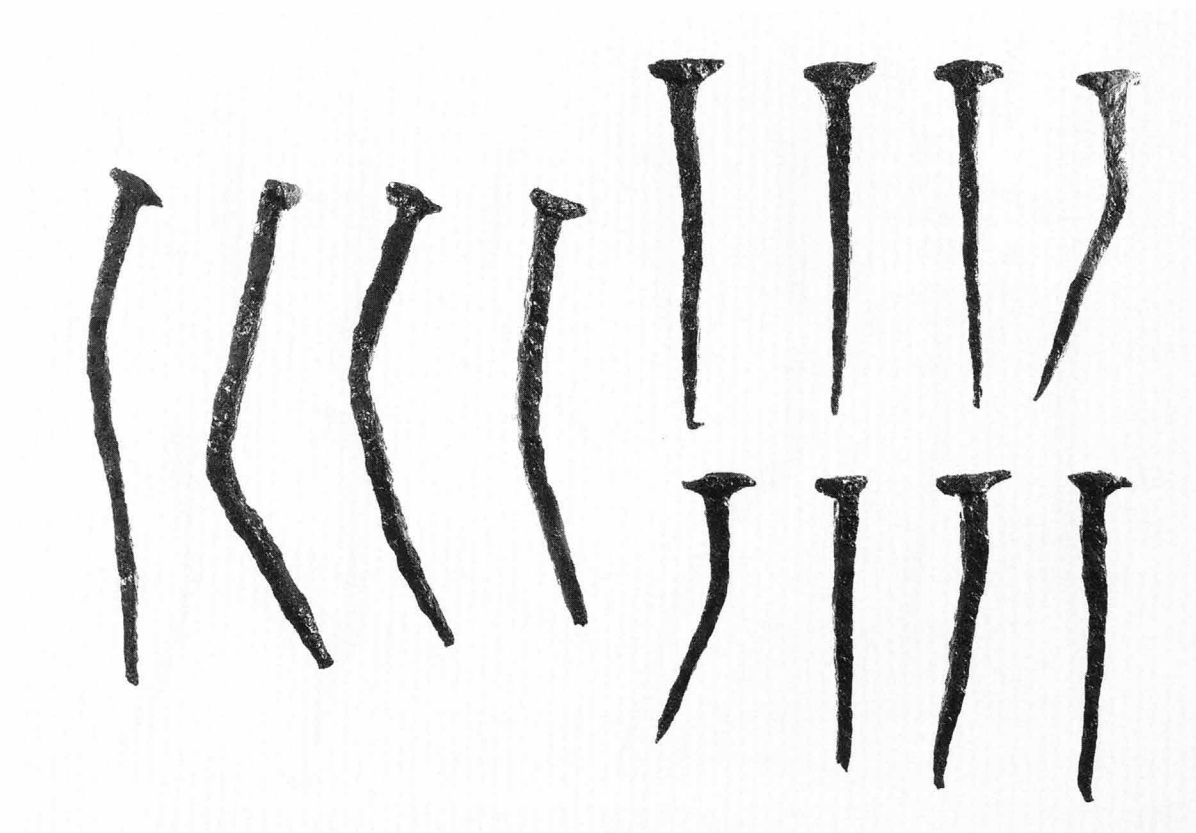
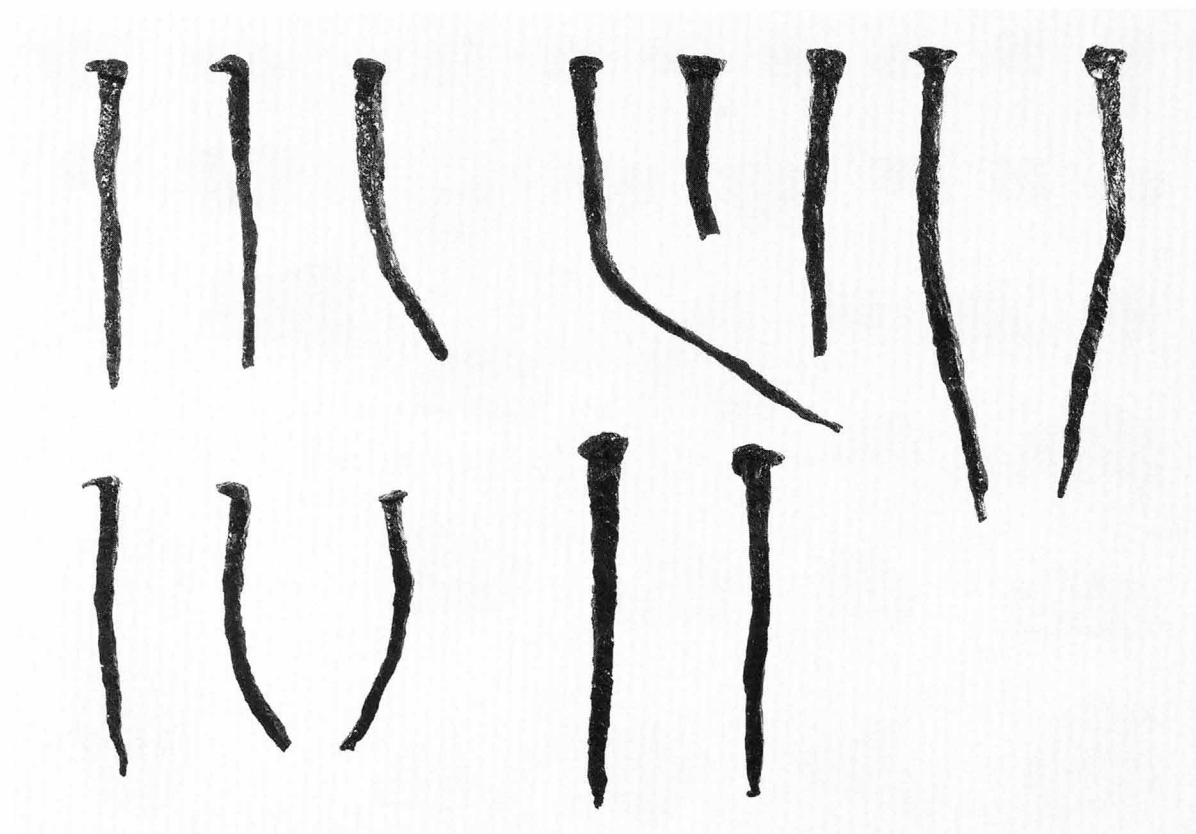
土坑 (8) (9上)



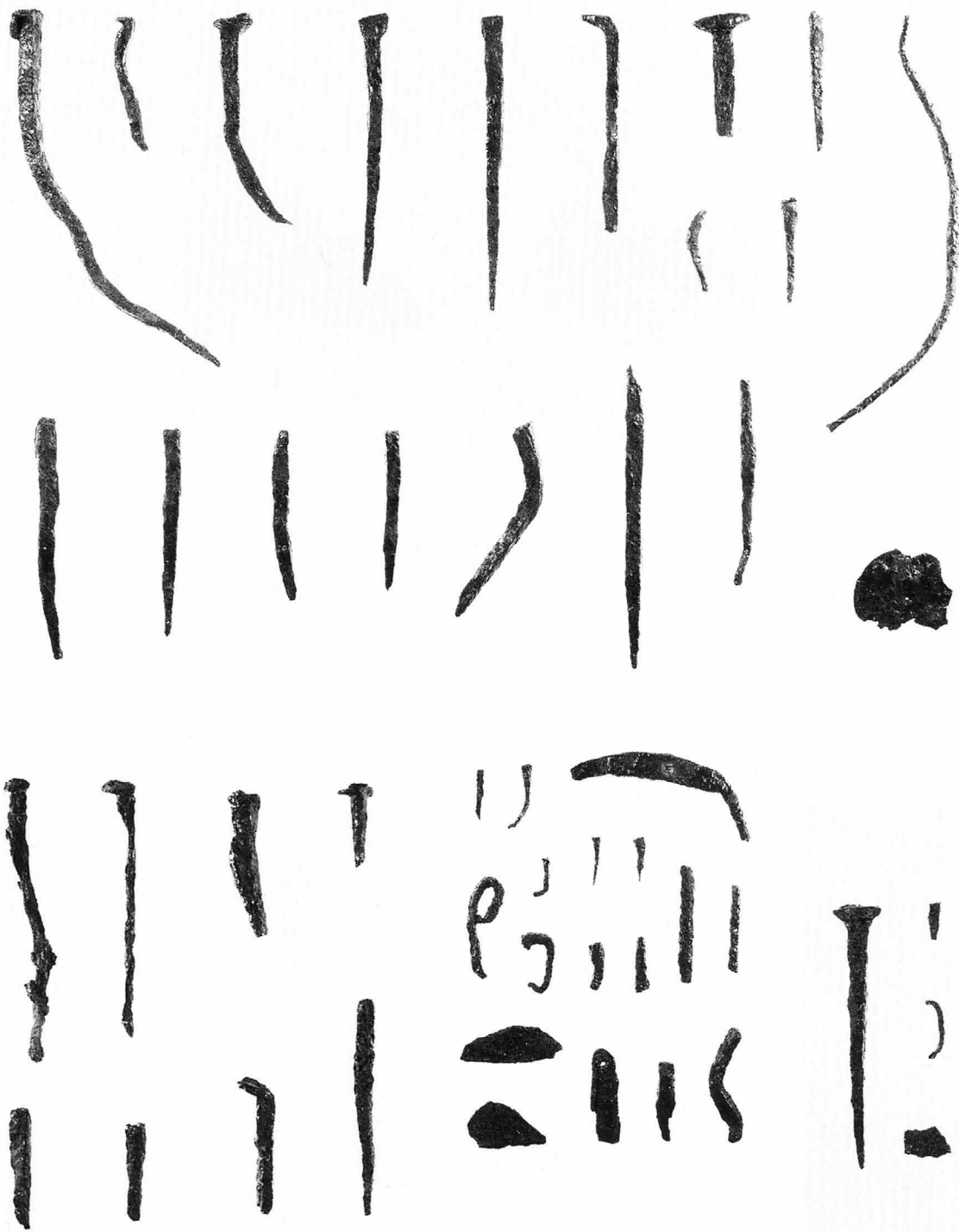
不明遺構 (1)



不明遺構 (2)



不明遺構 (3)



不明遺構 (4)

第 8 号集石



試堀調査時出土鉄鍋片



新町丸山遺跡出土鑄鉄製羽釜

報告書抄録

ふりがな	かみやどこいせき いち						
書名	神谷所遺跡 I						
副書名	後山工業団地造成事業に先立つ緊急発掘調査						
著者名	福島 永・赤沼英男						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 ☎ (0266) 41-1111						
発行年月日	2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
かみやどこいせき 神谷所遺跡	長野県上伊那郡辰野町大字伊那富字後山5908番地5外	20382	66	35° 57' 52"	137° 58' 37"	19920116 ? 19930310	15,800㎡
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
神谷所遺跡	集落 狩猟場	縄文時代	住居址	5	縄文時代前期末葉土器		
			小竪穴	7	平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器		
			集石	11	平安時代馬具鍔外鉄器		
			土坑（落とし穴状土坑含）	133	鉄滓等製鉄関連鍛冶滓		
	弥生時代 平安時代	住居址	1				
		住居址	16				
		掘立柱建物址	6				
		不明遺構（製鉄関連遺構）	1				
特記事項	<p>この遺跡はまず、縄文時代と推定される落とし穴状の遺構が出土しているほか、縄文時代前期末期の完形品を出土した土坑の存在など、町内においてもあまり類例のない調査結果であった。</p> <p>さらに、平安時代末期と推定される製鉄関連遺構の出土や、それに関連すると考えられる集落址の出土等、この地域の製鉄関連についての良好な資料を得る事ができた。</p> <p>その他、遺跡周辺より発見された鑄鉄製の羽釜の成分分析から、この羽釜が在地の鉄とは異なる成分の鉄で構成されていることが判明し、広範囲な鑄鉄製品の流通を考えるための資料を提供できた。</p>						

神谷所遺跡 I

後山工業団地造成事業に先立つ緊急発掘調査報告書

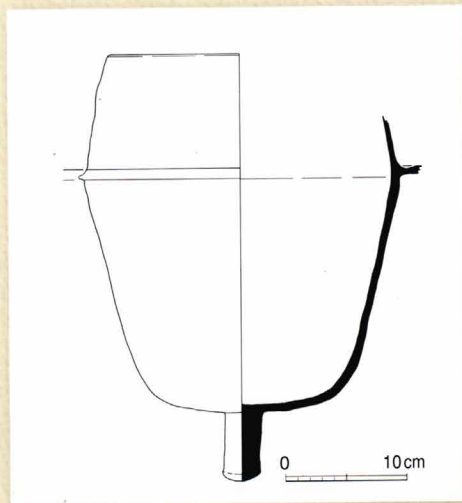
発行日 平成15年3月31日

編集
発行 辰野町教育委員会

〒 399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1
電話 0266 (41) 1111

印刷
製本 (有) グラフィックファクトリー

〒 399-0421 長野県上伊那郡辰野町大字辰野1640-4
電話 0266 (44) 1170



新町丸山遺跡出土鉄製羽釜